ヨブ

ロバート・A・ハインライン
斎藤伯好/訳



早川書房

-15-202058-X C0397 ¥1700E

TOKYO
HAYAKAWA
BOOKS

JOB: A Comedy of Justice

ヨブ

ロバート・A・ハインライン

斎藤伯好訳

海外SFノヴェルズ

早川書房

ヨ　　ブ
昭和61年1月15日　　初版発行

著　者　R・A・ハインライン
訳　者　斎　藤　伯　好
発行者　早　川　　清

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(252)3111(大代表)
振替　東京・6-47799

印刷所　株式会社亨有堂印刷所
製本所　大口製本印刷株式会社

定価　1700円
ISBN4-15-202058-X C0397

ヨブ

クリフォード・D・シマックに捧ぐ

神の懲したまう人は幸福なり
然ば汝 全能者の儆責を軽んずる勿れ

ヨブ記第五章一七節

聖書の引用は日本聖書協会発行『舊新約聖書』による。

1

なんじ火中(ひのなか)をゆくとき焚(や)かるることなく

イザヤ書第四三章二節

火の燃えている凹地は、およそ長さ二十五フィート、幅十フィートで、深さはおそらく二フィートほどあるだろう。もう何時間も燃えつづけている。敷きつめられた石炭はかっかと熱を放っており、見物客の第二列め、凹地の端から十五フィート離れたところに座っているわたしにとってさえ、耐えがたいほどだった。

わたしは船客仲間のご婦人がたに第一列めを喜んでゆずった。栄養の良い図体で熱をさえぎってくれるのがありがたかったからである。もっと離れたい気さえしていたのだが……どうしても火渡りは間近で見たい。奇跡を見物する機会など、そうめったにあるものではないのだ。

「いんちきさ」と、〃旅慣れた男〃が言った。「すぐにわかるよ」

「いや、いんちきというわけではないよ、ジェラルド」と、〃物知り博士〃が言った。「ただ、われわれが期待するほどのものではない、というだけのことだ。村人全員がやるわけではないだろう――たぶん、フラ・ダンサーたちは一人も参加しないだろうね。あの子供たちが参加しないのも確かだな。若い男が一人か二人……足の裏が牛革みたいに堅くなっているやつが、アヘンか何か地元のドラッグで興奮状態になって、火床を狂ったように駆け抜けるだけさ。村人たちは歓呼の声をあげ、あれなるカナカ族の通訳が、火の上を歩いた男の一人ひとりに、すでにハワイ料理と舞踊とこのショウに支払った金額よりもっと高いチップをはずむべきだ……と強くわれわれにすすめるという寸法だ」

「だが完全にいんちきというわけでもない」と、かれは話を続けた。「島めぐり観光パンフには、〃火渡り実演〃と記載してあるだけだ。村人全員が火渡りをするなんて思っちゃいけない。そんな契約はどこにもないんだから」

〃物知り〃は自己満足の態だ。

「集団催眠だな」と、〃暇つぶし屋〃が言った。

わたしは〃集団催眠〃とは何かと質問したくなった――だが、だれもわたしの言うことなんぞ聞こうとはしない。わたしは下っぱなのだ――いや年齢の話ではなく、観光旅

客船〈コンゲ・クヌート〉（"クヌート王"の意。コンゲはキングのデンマーク語）における序列のことである。船の中では、誰であろうと出航地から乗り込んでいた者が、あとから加わった者よりも上位者ということになっているのだ。メディア（現在のイラン北西部）人とペルシア人がそう決めて以来、少しも変わっていない。わたしは〈ツェッペリン伯〉号で飛んできて、パペーテから〈モフェット提督〉号で帰国する予定だった。だからわたしは永遠に下っぱなのであり、目上の者が勝手にしゃべっている間は、口をつぐんでいなければならない。

旅客船の食事は最高だったが、会話は最低だった。だがそれにもかかわらず、わたしは島巡りを楽しんでいた。"神秘主義者"や"アマチュア星占い師"や"しろうと精神分析家"や"数霊術師"さえ、別に気にならなかった。連中の話に耳を貸さなかったからである。

「かれらが四次元を通り抜けて歩くんだと」と、"神秘主義者"。「本当かね、グウェンドリン？」

「ええ、本当ですとも、あなた」と、"数霊術師"。「ほら、やってきますわよ！　人数は絶対に奇数ですよ」

「詳しいんだねえ、きみは」

「ふふん」と、"疑り屋"。

われわれの船の観光ツアーの案内人の助手をつとめる現地人が、腕を上げ、手のひらを拡げて、ざわめきを制した。

「すみません、ちょっと聞いてください！　マウルウル・ロア。どうもありがとうございます。これから、えらい神官様と女神官様が、火が村人たちに燃え移らぬよう、神々にお祈りをされます。どうか、これが古代より伝わる宗教儀式であることをお忘れになりませんように。教会の中にいるときと同じように行儀よくなさるよう、お願いいたします。と申しますのも――」

おそろしく歳をとったカナカ人が通訳をさえぎり、二人は何か言葉を交わし合った。わたしの知らない言葉だ――たぶん、ポリネシア語なのだろう。淀みなく流れるような感じだった。若いほうのカナカ人がわれわれに向きなおって言った。

「今日はまず、子供たちが火渡りをすると神官様はおっしゃっています。あそこの、母親の手に抱かれている赤ん坊も含めまして、です。子供たちの身の安全を保証するため、お祈りのあいだは決して口をきかないでほしいと、皆さまがたに頼んでおられます。ひと言つけ加えさせてもらいますが、わたしはカトリック教徒です。こういうとき、わたしはいつも聖母マリアに、子供たちをお守りくださいと祈っております。皆さまがたも、それぞれの流儀で子供たちのためにお祈りください。あるいはせめて、口を閉じ、かれらのために無事を念じてくださいますように。皆さんの

お行儀が悪いと、神官様が腹を立てて、子供たちの火渡りを中止することもあります――この儀式をすっかり取りやめることもございます」
「ほうらごらん、ジェラルド」と、〝物知り〟が聞こえよがしに呟いた。「おぜん立てさ。何か間違いがあったら、全部こっちのせいにする気だ」鼻を鳴らしている。
〝物知り〟――名前はチーヴァースという――には、この船に乗り込んで以来、ずっと悩まされつづけてきた。わたしは前に身を乗りだし、その男の耳に囁いた。
「もし、あの子供たちが火の中を歩いたら、あなたも同じことをする勇気がありますか？」
このくだりは、ぜひ、あなたの教訓にしていただきたい。今のひと言がわたしの不運の始まりだったのだから――いかなる場合でも、決してばかな気を起こして判断力を失うものではない。数秒後、わたしの挑戦はそっくり自分にはねかえってきたのだ。どういうわけか、そうなってしまったのである！〝物知り〟と〝疑り屋〟と〝旅慣れた男〟の三人は、それぞれ百ドルずつ、わたしには火床を歩く勇気などないというほうに賭けた――たとえあの子供たちが先に歩き渡ったとしても、だ。
通訳はシーッと言って、われわれを再び黙らせた。神官と女神官は火床へ降りてゆく。全員が静まり返った。われわれのうちの何人かは、本当に祈っていたのではないだろうか。わたしが祈ったことは確かだ。わたしはいつのまにか、心にふと浮かんだ文句を暗唱していた。
「わたしはこれから眠りにつきます。
主よ、どうか、わたしの魂を眠ったままにしておいてください――」
なんとなく、この場にはその文句がふさわしいような気がしたのだ。
神官と女神官は、ただ単に火の中を歩いただけではなく、もっと目を見はるような、そして（わたしが思うには）もっとはるかに危険なことを、静かに行なった。裸足で火床の上にたって、数分間祈りつづけたのだ。二人の唇が動くのが見え、老神官はしょっちゅう何かを火床の上にまき散らした。それが何であったのかは分からないが、石炭にぶつかるとパッと火花をあげて燃え尽きた。
わたしは二人が何の上に立っているのか見きわめようとした。石炭か、石か？　しかし分からなかった……それに、どっちの上に立つ方が辛いのかも、見当がつかない。だが、しゃぶりつくした骨のように痩せこけたこの老女は、落ち着いた表情で静かに立っている。腰布をまるでおむつのようにたくし上げたほかは、前もってなんの準備もしなかっ

た。明らかに老女は、着物が燃えては困るとは思うものの、自分の脚の火傷は心配していない様子だ。

棒を持った三人の男が、燃えている丸太をまっすぐにそろえ、火渡りのための足場をきちんと平らにならして、ぐらつかぬようにした。わたしはこの行為に深い関心を持った。なにしろ、自分もあと数分以内にあの中を歩くことになっているのだから――降参して、賭けを取り消さないかぎり……。どうやらあの男たちは、燃えている石炭の上ではなく、石の上を歩いて火の凹地を縦断できるようにしているらしい――少くとも、わたしはそう思った。絶対に、そうであってほしい！

だがそのとき、ふと、わたしの心に一つの思い出が浮かび、どっちでもたいした違いはないんじゃないか、という気がしてきた――子供のころカンザスで、陽に灼けた歩道を裸足で歩き、足に軽い火傷を負ったことがある。今、目の前で燃えさかる火は、少くとも七百度はありそうだ。火中の石はすでに何時間も炎にあぶられている。あの石と、火源の石炭をくらべてみたところで、しょせん、フライパンと、それをあぶる火と、どちらが熱いか……というようなものではないか。

一方では、理性の声がわたしの耳に囁きかけていた。この苦境から抜け出せるのなら、三百ドルあきらめるのはたいして高い代償ではないぞ……それとも、残りの一生を丸焼けになった脚で歩く気か？

アスピリンを飲んだら、多少は楽になるのだろうか？

三人の男は、燃えている丸太をいじくり回す作業を終え、われわれの左手の、凹地の端に移動した。残りの村人たちがその背後に集まる――あのいまいましい子供たちもだ！ こんな危いことをさせるなんて、いったい親たちは何を考えているのか？ あの子たちは学齢期なのに、なぜ学校にいっていないんだ？

三人の火の番が先頭に立ち、一列になって火の中心へ歩いていった。急ぐでもなく、ぐずぐずするでもない。そのあとに残りの村の男たちが続き、ゆっくりと着実に進んでゆく。そのつぎが女たちで、中には尻に赤ん坊をのせた若い母親もいる。

赤ん坊が熱風にあおられて泣きだした。母親は一定した歩調をくずさず、その子をひょいと持ち上げて乳をしゃぶらせ、赤子は泣きやんだ。

それから子供たちが続く。上は年頃の娘や初々しい若者から、下は幼稚園程度の幼児までだ。しんがりは小さな女の子（八歳か九歳か？）で、丸い目をした弟の手をひいている。弟のほうは四歳ぐらい、素っ裸で何も着ていない。

わたしはその子を見やり、悲しくも、自分はこれから生

焼にされるのだ……と確信した。もう後戻りはできない。小さな男の子は、一度つまずいたが、倒れる前に姉の少女がその身体を支えた。男の子はそれからちょこまかと、だがゆるぎなく歩きつづけた。向こうの端で、誰かが手を下に伸ばし、その子をかかえ上げた。

　いよいよ、わたしの番だ。

　通訳がわたしに言った。

「ポリネシア観光局はあなたの安全について責任を負えません。ご承知ですね？　あなたはあの火で火傷をするかもしれないし、死ぬ危険性もあります。あの人たちが無事に歩けるのは信仰を持っているからです」

　わたしは、信仰なら自分にもある、と答えた。われながら、よくも、こんな白々しい嘘がつけたものだ。そして、通訳の差し出す権利放棄書にサインした。

　次の瞬間、わたしはズボンのすそを膝までまくり上げて凹地の端に立っていた。わたしの靴と靴下と帽子と札入れが、向こうの端の腰掛けの上で待っている。あれがわたしのゴール、わたしの賞金だ――もしわたしが失敗したら、かれらはあの品々をめぐってくじ引きでもするのだろうか？　それとも、わたしの近親者のところまで船で運んでくれるのだろうか？

　通訳が言っている。

「まっすぐ真ん中を歩くんです。急いではいけないが、じっと立ち止まるのもいけません」最高神官が口を開いた。わたしの案内人は、しばしその言葉に耳を傾け、そして言った。「たとえ足が燃えても走ってはならぬ、と神官がおっしゃっておられます。転んで倒れる恐れがありますからね。一度ころべば、二度と起き上がれないかもしれません。神官は、あなたが命を落とすかもしれないとおっしゃっているのですが、わたしは、おそらくそうはなるまいと思います――炎を吸い込まなければ大丈夫です。しかし、ひどい火傷を負うことは確実です。ですから急がずに、倒れぬよう気をつけてください。さあ、下のあの平たい石が見えますね？　あそこが第一歩です。善き神があなたをお護りくださいますように。幸運を祈ります」

「ありがとう」

　わたしは〝物知り博士〟をちらりと見やった。もし人食い鬼が笑うとしたらこんな笑いかたをするのではないか、と思わせるような微笑を浮かべている。見せかけだけ颯爽とかれに手をふって、わたしは足を踏み降ろした。

　三歩進んで、まるきり何も感じないことに気づいた。そして次にまさしく感じたものは、恐怖だった。馬鹿馬鹿しいほどこわかった。ピオリア（米部イリノイ州中部の小都市）にいればよか

った、と思った。フィラデルフィアだっていい。こんな、煙のくすぶるだだっ広い焼跡に一人でいるよりは。凹地の向こうの端は一街区(ブロック)も先に見えた。いや、もっとありそうだ。わたしは、この麻痺感が、向こう側にたどり着く前にわたしを倒しませんように……と祈りながら、とぼとぼと歩きつづけた。

　息が苦しくなって、呼吸をずっと止めていたことに気づいた。そこでわたしは喘ぐように息を吸いこみ――そして、後悔した。これだけ広い火床の上では、焼けつくガスや煙や、二酸化炭素や一酸化炭素や、何やら悪魔(サタン)の口臭のごときものはあっても、酸素はこれっぽっちもなかったのだ。わたしはむせ返った。目に涙がにじみ、喉がひりひり痛む。なんとか、息を止めたまま向こう側にたどりつけるかどうか、見定めようとした。

　ああ、なんということだ。向こう側が見えない！　煙が立ちのぼり、目を開けているのがやっとで、焦点を合わせられない。わたしはそのまま進みつづけながら、臨終告解（死のまぎわに罪を懺悔し、赦しを乞うこと）を行なって専門的方法で天国にすべりこむ文句を思い出そうと努めた。

　そのような文句などないのかもしれない。足の感覚がおかしくなった。膝ががくがくしはじめた……

「気分よくなりましたか、グレアムさん？」

　わたしは草の上に寝ていた。見上げると、友好的な褐色の顔があった。

「そう悪くはないようだ」と、わたしは答えた。「何が起こったのかね？　わたしは歩きおえたのかね？」

「ええ、あなたはちゃんと歩きおえましたよ。立派にね。でも、ちょうど終点のところで気絶したんです。わたしたちはそばに立っていたので、あなたをつかまえて引っぱり上げました。何があったのかこっちが聞きたいですよ。胸の奥まで煙を吸い込んだんですか？」

「たぶんね。火傷したかな？」

「いいえ。あ、右脚に火ぶくれが一つできるかもしれませんが。しかしあなたは、信念どおり完璧におやりでした。気絶した以外はね。あれはきっと煙のせいでしょう」

「そうだろうな」わたしはかれの手を借りて上体を起こした。「わたしの靴と靴下を取ってくれないか。ところでみんなはどこにいるんだい？」

「バスはもう出発しました。あなたの脈をとり、呼吸を調べた最高神官が、あなたをゆり起こそうとするみんなを止めたのです。もし、魂が歩きまわっている間に本人を無理に起こすと、魂が身体に帰ってこない恐れがある……と神官は信じています。そして誰も、これに反論しません」

「わたしだって反論する気はないよ。気分は良い。よく休んだ。しかしどうやって船にもどるのかね？」
　いくら南海の楽園でも、五マイルもの行程ともなれば、初めの一マイルだけでうんざりするものだ。しかも徒歩で、それもいささか腫れた感じのする足でとなれば、なおさらだ。しかしこれはわたしの自業自得である。だれのせいでもない。
「バスがそのうち戻ってきます。村人たちを、自分の島へ帰るボートのところまで乗せてゆくんです。そのあと、あなたはそのバスで船へ帰れるでしょう。でも、もっといい方法がありますよ。ぼくのいとこが自動車を持っているんです。かれが乗せてくれますよ」
「いいね。料金はいくら取られるかな？」
　ポリネシアのタクシーはいつだって乱暴だが、運転手のお情けに頼る時は特にひどい。連中は情けなど持ってやしないのだ。だがそのとき、多少はぼられても仕方がないな……という思いが、ふと頭をかすめた。くだらない冗談がもとでひと儲けしたことは、いやでも知れているのだから。
わたしは帽子を取り上げた。
「わたしの札入れは？」
「あなたのさついれ？」
「札をはさむものだ。帽子の中に入れておいたんだ。どこにある？　おい、笑いごとじゃないぞ。金が入ってたんだ。カードもだ」
「あなたのお金？　オー！　あなたの財布（ヴォートゥル・ポルトフィーユ）。すみません、ぼくの英語は完璧ではないので。あなたの船の係の方……観光ツアー・ガイドの方があずかってゆかれました」
「そいつはご親切なことだ。しかし、どうやってきみのいとこに料金を払えばいいんだ？　手元には一フランもない」
　わたしはかれと話し合って、事情をはっきりさせた。船専属の観光ガイドが、わたしの財布を預ければ、わたしを一文無しでここに残すことになると思って、帰りの料金を前払いしてくれていたのだ。わがカナカの友は、わたしを自分のいとこのところへ連れていって紹介した――が、あまりうまくいったとは言えない。そのいとこの知っている英語は「オーケイ、だんな（チーフ）！」だけだったし、わたしは最後までかれの名を正確に知ることはできなかった。
　かれの自動車たるや、ワイヤーであちこち縛り上げてあり、まさに信仰のおかげで走っているような代物（しろもの）だった。車はスロットル全開で吼えるような音を立て、ヒヨコたちを驚かし、仔山羊たちをどんどん追い越しながら、船着場への帰路をたどった。だがわたしは、出発する直前の出来事のおかげで頭がぼうっとなり、車外の情景に目を向ける

余裕を失っていた。

実は、車に乗りこむ途中で、帰りのバスを待つ村人たちの間を通り抜けたのである。いや、通り抜けようとしたところで、キス攻めにあったのだ。村人たち全員が、一人残らずわたしにキスをした。わたしたちが握手だけですますところを、ポリネシアではキスをする習慣がある。その習慣を目撃したことはあったが、実際にそれをわが身に体験したのは初めてだった。

例の友人が説明してくれた。

「あの火の中を歩いて渡ったあなたは、名誉村民なのです。村人たちは、あなたのために豚を一匹殺したいと言っています。あなたの名誉を称えて宴会を開くのだそうです」

わたしは、できるだけ丁寧に挨拶を返すように努める一方、自分はこの大海原を越えて故郷へ帰らなければならない、しかし神の御心にそえば、またいつか戻ってくるだろう……と説明した。そうしてようやく出発することができた。

しかし、わたしが呆然とした第一の理由は、そのことではない。公平に見て、わたしがかなりの文明人であることは間違いないだろう。この広い世界には、アメリカのような高い道徳水準を持たず、はしたなく肌を露出しても気にしない地方があることは認識している。ポリネシアの女性が、文明が押し寄せてくるまでは上半身はだかで歩きまわっていたことも知っている――これでもわたしは〈ナショナル・ジェオグラフィック〉誌（実在する地理学雑誌名）を読んでいるのだ。

だが、それをこの目で見ようとは思っていなかった。わたしが火渡りをする前、村人たちは、予想どおりの格好をしていた。スカートは確かに草の葉だったが、女性の胸はちゃんと覆ってあった。

しかし、かれらがわたしに歓迎とお別れのキスをしたときは、そうでなかった。つまり、覆ってなかったのだ。〈ナショナル・ジェオグラフィック〉誌に載っていたとおりに。

わたしだって女らしい美人は大歓迎だ。上品に明りを落とした、適切な状況のもとでなら、この喜ばしい変化にはきっと心を奪われただろう。しかしそれも四十人あまり（いや、もっとかな）となると、こっちのほうが怖気(おじけ)づく。わたしは今までに見たことがないほど、一生かかっても見きれないほどたくさんの、人間の女性のバストを見てしまった。〈節制と道徳を守るメソジスト監督教会派〉の人だったら、ショックのあまり正気を失ったかもしれない。

こうなることが前もってある程度わかっていたら、わたしもきっと、この体験を楽しんだに違いない。しかしその

時は、あまりにも新奇で、刺激的で、変化が急激すぎた。あとで思い出してやっと、それを楽しむ余裕ができたのだ。
　われらが〝南海のロールス・ロイス〟は、ハンドブレーキとフットブレーキとファースト・ギアの圧力を総動員してガクッと停車した。それまでどっぷりと全身を浸していた多幸症状態から醒めたわたしは、顔を上げた。運転手が告げた。
「オーケイ、チーフ！」
　わたしは言った。「あれはわたしの船じゃない」
「オーケイ、チーフ？」
「きみは違う船着場にわたしを連れてきちまった。いや……船着場はちゃんと合っているんだが、船が違うんだ」
　それは確かだった。〈機船(MV)コンゲ・クヌート〉は、白い舷側と船楼を持ち、しゃれた作りものの煙突がついていた。この船は大部分が赤で、黒く高い組煙突が四本ある。蒸気船に間違いない――発動機船(モーターヴェッセル)ではない。それも何年も時代遅れのやつだ。
「違うんだ、違うんだよ！」
「オーケイ、チーフ。あなたの蒸気(ヴォートゥル・ヴァプール)！　あそこ(ヴォアラ)！」
「ノン！」
「オーケイ、チーフ」
　かれは車を降り、ぐるっと回って乗客席のドアを開け、わたしの腕を摑んで、わたしを車外へ引きずり出した。わたしも体力はかなりあるほうだが、かれの腕は、泳いだり、ヤシの木に登ったり、投網を投げたり、車から降りようとしない観光客を引きずり降ろしたりで鍛えられていた。わたしは車を降りた。
　かれは再び車に飛びのり、大声で、「オーケイ、チーフ！　どうもありがとう(メルシー・ビアン)！　さよなら(オーヴォアール)！」と呼ばわって、帰っていった。
　わたしは仕方なく、見知らぬ船のタラップを上った。できれば、〈コンゲ・クヌート〉がどうなったか知りたかった。乗船すると、タラップのところにいた二等航海士が敬礼して言った。
「おかえりなさい。ミスター・グレアム、ミスター・ニールセンから包みを預っております。ちょっとお待ちを――」かれは保管用デスクの蓋を開け、大きなマニラ封筒を取り出した。
「これでございます」
　包みの上にはこう書いてあった。〝A・L・グレアム、C一〇九号室〟。開けてみると、くたびれた財布がでてきた。
「何も間違いはございませんか、ミスター・グレアム？」
「ええ、ありがとう。ニールセン氏に、わたしがこれを受

け取ったことを知らせてもらえますか。そして、ありがとうと伝えてください」

「かしこまりました」

いまいる場所がDデッキだとわかったので、わたしはC一〇九号室を見つけるために、一階上に上がった。

間違いがないどころの話ではない。わたしの名は〃グレアム〃ではないのだ。

2

曩(さき)に有(あり)し者(もの)はまた後(のち)にあるべし
曩(さき)に成(なり)し事(こと)はまた後(のち)に成(なる)べし
日(ひ)の下(した)には新(あたら)しき者(もの)あらざるなり

伝道之書第一章九節

ありがたいことに、船内各室には連続番号がついている。C一〇九号船室は、ちゃんと、あるべき場所にあった。すなわち、Cデッキ、右舷前方、C一〇七とC一一一の間だ。わたしは誰とも口をきくことなしに、そこへ着いた。ドアを押してみると鍵がかかっている。グレアム氏はどうやら、ドアに鍵をかけておくように……停泊中は特に気をつけて……という事務長(パーサー)の警告を本気で守ったらしい。

鍵は——と、わたしは慎重に考えた——グレアム氏のズボンのポケットにある。しかし、グレアム氏はどこにいるのか？ わたしがかれのドアをこそこそ覗いているところ

を捕えようとしているのか？　それとも、わたしがかれのドアを開けようとしている間に、かれはわたしのドアを開けようとしているのか？
　持っている鍵が知らない錠に合う確率は小さいが、ゼロではない。わたしのポケットには、〈コンゲ・クヌート〉から持ってきたわたしの部屋のキーがある。それを試してみた。
　ま、そうするだけの価値はあった。鍵は合わず、わたしがそこに立ったまま、いったいどうしたものかと首をひねっていると、後ろから優しい声が話しかけてきたのだ。
「あら、グレアムさん！」
　若くて、なかなかかわいい女性だ。メイドの格好をして――訂正、客室係の制服を着ている。せかせかとこっちへやってくると、ベルトに鎖で付けた合鍵を出し、しゃべりながらC一〇九号室を開けた。
「マルガレーテに、見ててくれと頼まれたんですの。お客様が部屋の鍵を机の上にお忘れだから、って。マルガはそれをそのままにしておいて、お客様がお帰りになったら部屋に入れて差し上げるように、とわたしにたのんだんです」
「それはどうもご親切に、ミス、ええと――」
「わたしはアストリッドです。わたしの部屋はちょうど向かいの左舷側にあるので、マルガとわたしは、お互いに相手の見えないところが見えるんです。マルガはお昼すぎに上陸して、まだ戻ってません」彼女はわたしのためにドアを押さえた。「よろしゅうございますか、お客様？」
　ありがとう、とわたしは言った。彼女が行ってしまうと、ドアに掛け金をかけ、差し錠をし、椅子の中にぶっ倒れて、思いっきり身震いした。
　十分後、わたしは立ち上がり、浴室に入って顔と目に冷たい水をあびせた。問題は何ひとつ解決したわけではないし、気持ちがすっかり冷静になったわけでもなかったが、わたしの神経は、もう、風にはためく旗のように揺らいではいなかった。何かがとんでもなくおかしい、と疑いはじめてからずっと、わたしは取り乱さぬよう自分を抑えつづけてきた。おかしくなりはじめたのは――いつからだ？　火の凹地の上で、何もかもすっかり変な感じになったあの時か、そのあとか？　とにかく、はっきり悟ったのは、二万トンの船が別のものに代わっているのを見た時だった。
　父はよくわたしにこう言ったものだ。
「アレックス、怖がるのは別に悪いことじゃない……危険が過ぎさるまで何の手も打てないほど怯えないかぎり、な。ヒステリーを起こすのもかまわん――あとで一人きりのときに、そうするんだったらな。男だって泣いてもいいんだ

——鍵をかけた風呂場の中でならな。臆病者と勇者の違いは、要するにタイミングの問題だ」

わたしは父とは似つかぬ男だが、父の忠告には従うよう努めている。爆竹が鳴ったとき——あるいは何であれ、びっくりするようなことが起こったとき——に、飛び上がらずにいることを学べれば、緊急事態が起こっても平然としていられる率も高くなる。

この緊急事態はまだ終わってはいないが、震えたいだけ震えたおかげで、わたしの気分は落ち着いていた。これで状況を冷静に検討することができる。

仮説——

(a) わたしを取り巻く世界に途方もないことが起きてしまった……。あるいは、

(b) アレックス・ハーゲンシャイマーの精神に途方もないことが起きてしまった——当然、かれは監禁され、鎮静剤を打たれてしまう……。

第三の仮説は考えつかなかった。この二つだけですべてを言い尽くしていると思う。

第二の仮説に頭をひねるのは時間の無駄だ。もしわたしの頭がおかしくなりかけているのなら、そのうちに他の連中が必ずそれに気づき、拘束衣をもってあらわれ、わたしを柔らかい詰物をした部屋に閉じこめるだろう。

そこで、わたしが正気であると仮定しよう（あるいは、正気に近いとしよう。少しばかり狂っていると思ったほうが気は楽だ）。もしわたしがおかしくないのなら、世界のほうが狂っているのだ。さて、手持ちの品々を調べてみよう。

問題の財布だ。明らかに、わたしのものではない。財布なんてものは、どれでも似たりよったりで、とりわけ、これはわたしのによく似ている。しかし、財布も数年間使っているうちに持ち主になじんでくる。まぎれもなく本人だけのものになってくるのだ。これがわたしのものでないことは、一見したときから分かっていた。ただわたしは、わたしを〝ミスター・グレアム〟と〝認め〟つづけたこの船の二等航海士に、そう告げる気がしなかったのである。

わたしはグレアムの財布を手に取り、中を開けた。

数百フラン——正確には、あとで数えよう。

紙幣で八十ドル——〝北アメリカ合衆国〟発行の本物だ。

A・L・グレアム名義の運転免許証。

ほかにもまだあったが、タイプで打った一片のメモがわたしの目に留まった。わたしはその紙片を持って窓辺へ寄った。

この財布を見つけられたかたは、ご面倒ですが下記へお届けください。中のお金はお礼として差し上げます。

デンマーク＝アメリカ航路就航
〈汽船コンゲ・クヌート〉C一〇九号室
A・L・グレアムまで。あるいは、
同船の事務長、もしくはその代行者まで。
感謝をこめて　A・L・G

これで、〈コンゲ・クヌート〉がどうなったのか、やっと分かった。すっかり別の船に変貌してしまったのだ。

それとも、わたしが変わったのか？　本当に、世界が変化して、船も変化したのか？　それとも、世界が二つあって、どういうわけか火の中をくぐったら二つめの世界に出てしまったのか？　実際に二人の男がいて、お互いの運命が入れ替わったのか？　それとも、〈機船コンゲ・クヌート〉が〈汽船コンゲ・クヌート〉に変化する間に、アレックス・ハーゲンシャイマーがアレック・グレアムに変身したのか？　（そして、その間に〝北アメリカ連盟〟が〝北アメリカ合衆国〟に変わったのか？）

いい質問だ。よくぞ提起してくれた。さて生徒諸君、まだほかにも何か質問はあるかね――

わたしが中学生だったころ、世間には空想小説を載せた雑誌が大量に出回っていた。幽霊話だけでなく、あらゆる種類の怪奇な物語があった。エーテルをかきわけてよその星へ旅する魔法の船。奇妙な発明の数かず。地球の中心を目ざす旅。空飛ぶ機械。燃える原子の力。秘密の実験室で産み出された怪物たち。

わたしはよくそういう雑誌を買い、〈少年の友〉と〈少年十字軍〉の間にはさんで隠していた。両親が知ったら、機嫌を悪くして没収するだろうと、本能的に悟っていたからである。わたしはそういった雑誌が好きだったし、悪友のバートのやつもやはりそうだった。

それは長続きしなかった。まず、〈少年の友〉に、「魂の毒――撲滅せよ！」と題する論説が載り、次いでわれらが聖職者、ドレイパー修道士が、酒と煙草の悪影響になぞらえて、精神を堕落させる俗悪小説に反対するお説教をたれた。そしてわたしたちの州は、〝公序良俗を守る〟という方針のもとに、その種の出版を州条令で禁止してしまったのである。まだ国法も成立せず、それに対応する大統領命令も出ないうちに、だ。

そして、わたしがうちの屋根裏に〝完璧に〟隠しておいた宝ものは、姿を消した。もっと悪いことに、H・G・ウエルズやジュール・ヴェルヌなどの作品が、公共図書館か

ら姿を消してしまったのだ。
われわれの精神的指導者たちや選良たちの、青少年の精神を護ろうという動機は、称えねばなるまい。ドレイパー修道士が指摘したように、聖書の中には、世界中の少年少女を満足させるに足るほど、たくさんの胸ときめかせる冒険談がある。端的に言って、世俗文学の必要性はないのだ。ドレイパー修道士は成人向き図書の検閲は勧めていない。かれが問題にしたのは、影響を受けやすい青少年向けのものだけである。もし、成人がそのようなくだらない夢物語を読みたがっているのなら、勝手にそうさせればいい——ドレイパー自身は、無論、大人がそんなものを読みたがるはずはないと確信していたのだ。
わたしは確実に〝影響を受けやすい青少年〟の一人だったらしい——いまだに、ああいった作品が恋しくなるのだから。
特によく覚えているのは、『神々のような人びと』という、ウエルズの作品である。登場人物たちは、自動車でドライブ中に爆発にあい、気がついてみると別の世界にいた。もとの世界によく似ているが、ずっと進歩した世界に、だ。かれらはその世界の住民と出会い、平行宇宙(パラレル・ユニバース)やら四次元の世界やらについての説明をうける……。
それは連載の第一回だった。その直後に〝青少年保護〟条例が施行されてしまい、第二回以降の分は読めなかった。
検閲にひそかに反感を持つ国語の教授が、「空想小説の基本テーマはすべてウエルズの発明したものだ」と説き、多元宇宙概念の嚆矢(こうし)として前記作品を引用したのである。わたしとしては、その教授に、どこへ行ったらその本を入手できるか訊(き)きたかったのだが、その学期の終わりになれば〝成年〟に達するところだったので、それまで待つことにした——そして、待ちすぎた。〝道徳と信仰に関する大学理事会〟が、その教授の在職に反対決議をし、教授は学期を終える前に突然辞めさせられてしまった。
ウエルズが『神々のような人びと』で描写したようなことが、わたしの身に起こったのだろうか。ウエルズは神聖な預言能力の持ち主だったのか？　たとえば、人類はいつの日にか本当に月へゆくというのか？　そんなばかな！
しかし現に、このわたしの身には、この上なくばかげたことが起こっているではないか？
まあとにかく、わたしは今こうして〈コンゲ・クヌート〉の——よしんば本来の〈コンゲ・クヌート〉ではないにせよ、だ——船内にいる。タラップの掲示板には〝午後六時に出航の予定〟とあった。もう午後も遅い。そろそろ決断を下さねばならぬ時刻だ。
どうすべきか？　どうやらわたしは自分の乗船〈機船(MV)コ

ンゲ・クヌート〉をどこかに置き忘れてきてしまったらしい。しかしこの〈汽船コンゲ・クヌート〉の乗組員（の中の何人か）は、何の疑いもなくこのわたしを〝ミスター・グレアム〟なる乗客として受けいれているようだ。

　このまま、この船に留まり、知らん顔で押し通すか？　だがもしグレアムが戻ってきて（今すぐにも！）、〝おれの部屋で何をしている〟と詰問されたらどうする？

　それとも上陸して（そうすべきだろうな）当局に問題を持ち込むか？

　フランス植民地管理局は、さぞかしおまえをかわいがってくれることだろうぜ、アレックス。手荷物もなく、着ている服だけで、金は一スーもなく——旅券もない！　そうとも、連中はおまえをかわいがってくれて、一生養ってくれるさ……天井に鉄格子のはまった地下牢の中で、な。

　財布の中には金がある。

　それがどうした？　第八戒を知らないのか？　それはかれの金だぞ。

　しかし、当然、グレアムはおまえと同時に、こっち側で……この世界だか何だかで……火渡りをした、と考えるべきだろう。だからこそ、かれの財布がおまえを待っていたのだ。ということは、おまえの財布は今やかれの手に渡っているということだ。まさに論理的じゃないか。

　でもねえ、頭の鈍いご友人……われわれの陥ったこの窮地は、論理と何の関係があるというのかね？

　そりゃそうだけど……。

　言ってみろ！

　いや、必ずしもそうではないぞ。たとえば、こういうのはどうだ？　この部屋にじっと座って待つ。もしグレアムが出航前に姿を現わしたら、当然、大急ぎで船を降りる。今すぐ船を降りたって同じことだろ？　もしかれが姿を見せなかったら、そのときはかれの代わりにこの船に乗って、ともかくもパペーテまで行く。あそこは大きな町だ。あそこでなら、この状況にもっとうまく対処できるようになるかもしれない。領事やなんかもいるし。

　わかった。そうすることにしよう。

　旅客船は普通、乗客のために日刊紙を発行している——せいぜい一枚か二枚の新聞で、スリリングな記事が満載されている。たとえば、〝本日午前十時に救命ボートの訓練。乗客は全員参加のこと——〟とか、〝昨日の航行距離当てクイズの優勝者はアイオワ州ベタニーのエフライム・グルツ夫人〟とか……それに、たいていいつも、無線士が受信したニュースがいくつか付く。わたしは船内新聞と〈ご乗船のしおり〉を探して、周囲を見回した。後者は小冊子で

（ときには、もっと気のきいたタイトルをつけて）新たに乗船した客に、船内の小世界に関する知識を伝えるものである――高級船員たちの名前、食事時間、理髪室やランドリーや食堂やギフトショップ（雑貨や雑誌や歯ミガキなども売っている）の場所、モーニングコールの頼みかた、救命具のありか、救命ボートのある場所の見つけかた、どこにテーブルの席順が書いてあるか……。

〃席順〃だと！　しまった！　たった一日でも船に乗っていた客なら、食堂で自分の席を訊かなくても知っているはずだ。人間は些細なことでつまずくものだ。ま、いいさ。なんとかやってのけよう。

乗船案内のパンフレットはグレアムの机につっこんであった。わたしはそれに急いで目を通して、この部屋を出る前に、大事なことはすべて頭の中へ叩きこもうとした――出航後も船内に留まる場合に備えて、だ――それから、それをわきへ置き、次に船内新聞を見つけた。

新聞の名は〈宮廷詩人〉だ。ありがたいことに、グレアムは乗船したその日の分から、全部の号を保存していた……一番古い新聞の日付と発行地から察するに、乗船したのはオレゴン州ポートランドだ。ということは、グレアムは全行程の切符を買っていた……という事実を示している。これはわたしにとっては重要なことだ。わたしは、来た時と同様に飛行船で帰国する予定だった――だが、この世界だか次元だか何だかに、たとえ定期空中船〈モフェット提督〉号が存在しているとしても、わたしはもはやその切符を持ってはいないし、切符を買う金もない。フランス植民地管理局はお金を持たない観光客をどう扱うだろう。火あぶりにするのか？　引致して、留置するだけか？　いずれにせよ、そんな目には会いたくない。グレアムの周遊旅行券があれば（かれがそれを持っていれば）正体がばれずにすむだろう。

（もしかれが一時間以内に姿を現わさず、わたしを船から叩き出さなければの話だが）

ポリネシアに留まることは考えなかった。ボラボラやムーレアで一文無しの浮浪者になるのは、一世紀前だったら実際的な解決法かもしれない。だが今日、これらの島々で無料で手に入るのは、伝染病ぐらいなものだ。

アメリカに行っても、現在同様、金のない他所者であることにおそらく変わりはないだろうが、それでも母国――いや、グレアムの母国、かな――にいるほうがうまくやっていけそうな気がした。

無線ニュースの記事をいくつか読んだが、さっぱり意味が分からない。そこで、それらの記事のことはひとまず置いといて、あとで調べることにした。記事から得たごくわ

ずかばかりの知識も、わたしの居心地をよくするようなものではなかった。わたしはこれまで、これは取るに足らぬ馬鹿げた手違いにすぎず、ほどなく元に戻るんじゃないか（どんな過程を経てそうなるのかは分からないが）という非論理的な望みを心の奥底で愛（いつく）しみ育てていたのである。しかしいま読んだニュースが、その希望を無残に打ち砕いてしまったのだ。

　そもそも、「……ドイツの〝大統領〟がロンドンを訪問する……」とは、いったいどういう意味だ？　わたしの世界では、皇帝（カイザー）ヴィルヘルム四世がドイツ帝国を治めているはずである。ドイツに〝大統領〟がいるとなると、アメリカには〝国王〟がいるというのか。馬鹿げている。

　ひょっとしたら、ここは快適な世界なのかもしれない……
……だが絶対に、わたしの生まれた世界ではない。そう感じるのは、あながちいま読んだ奇怪なニュースだけのせいではない。

　グレアムの〈宮廷詩人〉のファイルをわきへやった際に、一番上に乗っていた紙に目がとまった。本日のディナー用服装は〝フォーマル〟とある。

　これには別に驚かなかった――この船の化身〈機船（MV）コンゲ・クヌート〉もきわめてフォーマルであり、航海中は準正装の黒い蝶ネクタイとタキシードの着用を求められたからだ。着用しないと、否応なしに、自分の部屋で食事をとるべきだった……と思い知らされるはめになる。

　わたしはタキシードを持っていない。われわれの教会が虚飾を嫌ったからだ。それでわたしは、航海中の船内でディナーに出席するときは、紺サージのスーツと、ワイシャツと、スナップ留め式の蝶ネクタイを着用することで妥協してきた。これで誰からも文句を言われたことはない。どっちみち、わたしはパペーテから乗り込んだ若輩で、いつも末席に坐らされていたから、服装などどうでもよかったのかもしれない。

　グレアム氏がダークスーツを持っているかどうか調べてみよう、とわたしは決意した。それに黒の蝶ネクタイも、だ。

　グレアム氏はわたしよりもはるかに衣裳持ちだった。ちょっとスポーツ・ジャケットをひっかけてみると、ぴったり合う。ズボンは？　長さはよさそうだが、ウエストのほうはどうかな――さすがに、ズボンをはいてみる勇気はなかった。片足つっこんだところでグレアム氏に見つかったら大変だ。何と言い訳する？　やあ、こんにちは！　お待ちしてました。暇つぶしにちょっとあなたのズボンでもはいてみようかと思いまして……。説得力ゼロだ。

　かれは一着だけでなく二着もタキシードを持っていた。

一着は月並みに黒で、もう一着は濃い赤である――こんなけばけばしい服は、見るのも初めてだ。
しかしスナップ留め式の蝶ネクタイは見つからなかった。黒の蝶ネクタイは何本かあった。だがわたしは、蝶ネクタイの結び方を全然知らない。
わたしは深く息を吸い込み、考えこんだ。
ドアをノックする音がした。わたしはもう少しで飛び上がりそうになった。
「どなた！」
（すみません、グレアムさん、わたしはただあなたを待っていただけなのです！）
「客室係(スチュワーデス)のものですが」
「ああ。どうぞ、おはいり」
鍵を差しこむ音がした。わたしは差し錠に飛びついた。
「ごめん。差し錠をしていたのを忘れていた。入ってくれ」
あらわれたマルガレーテは、アストリッドと同じくらいの歳で、はるかに若々しく、ずっとかわいらしかった。髪の毛は亜麻色で、鼻の上にそばかすがある。彼女の話す英語は、教科書のように正確で、加えてチャーミングで軽快な響きを持っていた。白のショート・ジャケットをコートハンガーに吊るしたまま捧げ持っている。
「会食用の上着です、お客様。もう一着のほうの仕上りは明日になるとカールが申しております」
「これはどうも。ありがとう、マルガレーテ！ すっかり忘れていたよ」
「お忘れかもしれないと思いましたの。それであたし、早目に船に戻ってきたんです――ランドリーがちょうど閉まりかけているところでした。間に合ってよかったですわ。黒をお召しになるには暑すぎますもの」
「わざわざ早く帰ってくることはなかったのに。そんなに気をつかってくれなくてもいいよ」
「あたしはお客様たちのお世話をするのが大好きなんです。ご存じでしょ」
彼女はジャケットを洋服だんすに掛け、出ていこうとした。「あとでネクタイを結びにまいりますわ。いつもどおり六時半でよろしいでしょうか？」
「六時半でいいが……いま何時だい？」（いまいましいことに、わたしの時計も〈機船(MV)コンゲ・クヌート〉と共にどこへともなく消えてしまっていた。上陸するときに身につけていなかったのだ）
「もうすぐ六時です」彼女はちょっとためらって、「行く前にお召し物をそろえておきますわ。あまりお時間があり

ませんから」
「ねえ、きみ！　そんなことまでしてくれなくてもいいんだよ」
「させてください」彼女は整理だんすの引出しを開け、正装用のシャツを取りだして〝わたし＝グレアム〟のベッドの上に置いた。「あたしがこうしたい気持ちはご存じのくせに」
いかにも、何もかもどこにあるかを知りつくしているといわんばかりに、彼女は能率よく、てきぱきと行動した。まず、わたしがまだ触れていない小型机の引出しを開け、革のケースを取り出し、その中から時計と指輪とカフスボタンを出してシャツの横に並べる。それからシャツにカフスボタンをつけ、新しい下着と黒い絹の靴下を枕の上に置く。夜会用の靴を椅子の横にそろえ、靴べらをその中につっこむ。先刻持ってきた上着を洋服だんすから出して掛け、正装用の黒いズボン（ズボン吊り付き）と濃い赤の飾帯を洋服だんすの前に置く。
彼女は並べたものをさっと見渡して、さらにウイングカラー（前のかどを下に折りまげてある直立カラー。正装・夜会用）と黒のネクタイと新しいハンカチを枕の上に積み重ね——もう一度眺め回して、部屋のキーと財布を、指輪と時計の横に置き——さらに見なおして、これでよしとうなずいた。

「走っていかなくちゃ、夕食に間に合わないわ。あとでネクタイを結びにきます」
そう言って彼女は行ってしまった。駆けだしはしなかったが、ひどく急ぎ足で。
マルガレーテの行動は、まさに当を得ていた。もし彼女がこうして何もかもそろえていってくれなかったら、わたしは自分の着つけをするのに悪戦苦闘していただろう。シャツだけで挫折していたかもしれない。それは〝頭からかぶって、背中でボタンを留める〟式のやつだった。こんなものは今まで一度も着たことがない。
ありがたいことに、グレアムはごく普通のメーカーの安全カミソリを使っていた。六時十五分までにわたしは、今朝剃ったひげを剃りなおし、シャワーを浴び（当然だ！）、髪の毛から例の煙を洗い落とした。
グレアムの靴は、まるでわたしが自分で履きならしたかのようにぴったりだった。ズボンはウエストがややきつめだ——デンマークの船は決して痩せるのに適した場所ではない。それにわたしは〈機船コンゲ・クヌート〉に二週間もいたのだ。問題の、けしからん逆さまのシャツを相手にじたばたしている最中に、マルガレーテが合鍵を使って部屋へ入ってきた。

彼女はまっすぐわたしに近づいてきて言った。
「じっとしててちょうだい」
そして手早く、わたしの手の届かぬボタンを留めた。それから、手におえないカラーを嵌めて、カラーボタンで留め、ネクタイを首のまわりに付けた。
「ぐるっと回ってみて」
蝶ネクタイを正しく結ぶのは魔法の仕業だ。彼女は呪文を知っていた。
彼女はわたしが飾帯を巻くのを手伝い、上着のすそを持ったまま、下から見上げて言った。
「これで大丈夫。それにあたしも鼻が高いわ——夕食のとき、女の子たちがあなたの話をしていたの。あたしも見たかったわ。あなた、とても勇気があるのね」
「勇気じゃない。馬鹿なんだよ。黙ってりゃいいのに、余計なことを言いだしちまって」
「勇気よ。あたし、もう行かなくっちゃ——クリスチーナにチェリー・タルトをとっておいてって頼んでおいたんだけど、早く行かないと、誰かにとられてしまうわ」
「早く行きたまえ。本当にどうもありがとう！　さ、急いで。タルトを食べておいで」
「あなた、あたしにお礼をしてくれないの？」
「ああ、そうだったね。どんなお礼がいい？」
「じらさないで！」
彼女は数インチ接近し、顔を上に向けた。わたしは女の子のことはあまり知らないが（誰か知ってるやつがいるかね？）こうはっきり示されれば、いやでも分かる。わたしは彼女の肩を抱き、両頬にキスをした。しばらくためらったのち、彼女がいやがってもいなければ驚いてもいない、と確信できたので、今度は真ん中にまともにキスをした。彼女の唇は申し分なく暖かかった。
「きみが考えていたお礼ってのは、これのことかね？」
「ええ、もちろん。でも、あなたはもっとキスがお上手なはずよ。ご自分でも、よくわかってるでしょ」
彼女は不服そうに下唇をつき出し、眼を伏せた。
「ようし。覚悟はいいかね」
そうとも、わたしは今のよりもっとうまいキスができる。いや、できるつもりだったと言うべきかもしれぬ——それからのキスが終わったとき、わたしはその自信を完全に失うはめになったのだから……。とにかく、マルガレーテにリードされるままに、彼女なりに、これこそ上手なキスだと思っているキスの仕方に心から協力したわたしは、その後の二分間で、これまでの人生を通じて学んだ概念をはるかに越えるキスの知識を得たのである。
耳がガンガン鳴った。

唇を離してしばらくたってから、彼女はわたしの腕の中からこのうえなく真面目な顔でわたしを見上げた。
「アレック」と、甘い声。「今までで最高のキスだったわ。素敵よ。でも、もう行かなくっちゃ。あなたがディナーに遅れてしまうわ」
彼女はするりとわたしの腕を抜け、持ち前のてきぱきとした身のこなしで、さっと部屋を出ていった。
わたしは鏡で自分自身を検分した。跡はついていない。あれほど強いキスなら、跡がつくはずなんだが。
このグレアムってやつは、いったいどういう男なんだ？　かれの服を着ることはできるだろうが……かれの恋人をうまく対処することはできるだろうか？　いや、彼女は本当にかれの恋人だったのだろうか？　本当はどうなのだ？――わたしにはわからない。かれは好色な、女たらしなのか？　それとも、このわたしが、いささか不謹慎ではあるが、この上なく素晴らしいロマンスに、首をつっこみかけているのか？
もう一度火床を歩いたら、どうなるのだろう？
いや、おまえに本気でそんなことをする気持ちがあるのか？
船尾の大階段へ向かい、二階下のデッキに降りて、再び船尾へ向かう……パンフレットに載っていた船内見取り図によると、そうなっていた。
問題はなかった。大食堂のドアのところに、わたしと同じようにめかしこんだ男が立っていたが、メニューを小脇にはさんでいるところを見ると、どうやらヘッド・ウェイターらしい。つまり、食堂の給仕長だ。男は満面に職業用の笑みをうかべて、その事実を裏づけた。
「いらっしゃいませ、グレアムさん」
わたしは立ち止まった。
「やあ、こんばんは。席順が変わっているようだが、どうしたんだい？　ぼくは今夜、どこへ座ればいいのかな」
（雄牛の角を摑めば、少くとも雄牛をまごつかせることはできる）
「これは永久的な変更ではないのです、お客様。明日はまた十四番テーブルにお戻りください。今宵は船長があなたのご臨席をたまわりたいと申しております。どうぞこちらへ」
給仕長はわたしを、中央のひときわ大きなテーブルに案内し、船長の右に座らせようとした――とたんに船長が立ち上がって拍手を始め、同じテーブルに着いていた他の連中も、それにならった。間髪をいれず、食堂中の全員（だと思う）が立ち上がり、拍手を続けた。中には歓声を上げ

る者もいる。
わたしは、このディナーで二つのことを学んだ。第一に、グレアムもわたしと同じ馬鹿げた離れ技をやったらしいこと(しかし、わたしとグレアムが同一人物であるのか、それともまったくの別人であるのかは、依然として疑問のまま残った——この疑問は、とりあえず棚上げにしておくことにした)。
第二の、しかし非常に重要なことは、氷で冷やしたオールボルグ・アクアヴィット(蒸留酒の一種。オールボルグはデンマークの港町の名)を空腹で飲まないこと。特に、今のわたしのように特別賓客になったときは、絶対にそうしてはいけない。

3

酒は人をして嘲らせ　濃酒は人をして騒がしむ
箴言第二〇章一節

わたしはハンセン船長を責めているわけではない。スカンジナビア人たちは、長く厳しい冬と闘うために、エチルアルコールを不凍液として血液の中に注ぎ込んでおり、そのため"この世には己とは異なり、強い酒に耐えられない人間がいる事実"を理解できないのだと聞いている。そのうえ、だれもわたしの腕をとり、わたしの鼻をつまみ、わたしの喉に無理やり酒を流し込んだりはしなかった。すべて、わたしが自分でやったことなのだ。
生身の人間は弱いものであるから、罪は人の常として理解しうるものであり、たやすく赦されるものである……とする教義を、わたしたちの教会はとっていない。罪は赦されうるものであるが、それはまず罪に悩んだあとで、かろ

うじてわずかに赦されるものである。罪とは本来、苦しむべきものなのだ。

わたしはその苦しみのいくらかを初めて知った。わたしが教わったところによると、これは宿酔(ふつかよい)と呼ばれるものだ。エド伯父はいつもこう言っていたものだ――節度を守ることができるのは、思いきり節度をはずしたことのある人間だけだ……そうでないやつは、誘惑に出くわしたときにどう対処していいのかわからなくなるもんだ、と。

どうやらわたしは、エド伯父の言い分の正しさを立証したようだ。伯父は我が家の周囲に悪影響をふりまいていると考えられていた。母の兄でなかったら、父はエド伯父が家の中に入るのを許さなかっただろう。実のところ、伯父は早く帰れとせきたてられはしなかったが、「もっといろ」と引き留められることも決してなかった。

わたしが席に腰を下ろすか下ろさないうちに、船長がアクアヴィットのグラスを差し出した。アクアヴィット用のグラスは大きくはなく、きわめて小さかった――だから危険だとは思えなかったのだ。

船長はグラスをいかにもそれらしく持ち、わたしの眼を見つめて言った。

「われらが英雄に、乾杯(スコール)！」

そして頭をぐいと後ろにそらし、グラスの中味を口の中へほうり込んだ。

テーブルの周囲いたるところから、口々に「乾杯(スコール)！」の声が起こった。参席者全員が、船長同様、一気に酒を飲み下したようだった。

そこでわたしもそうした。あえて言わせてもらうならば、賓客であるということはある程度の義務を伴うものである――郷に入っては何とやら、というじゃないか。しかし本当いうと、きっぱり断わるほどわたしは意志が強くなかったのだ。わたしは自分に言いきかせた。

「ちっぽけなグラス一杯ぐらい、別にたいした害にはならんさ」そして、ごくりと飲み下した。

問題はなかった。それはなめらかに流れ落ちていった。氷のように冷たく快い喉ごし、かすかに甘草(かんぞう)を思い出させる香りの良い後味。自分が何を飲んでいるのかは分からなかったが、アルコールではないような気がした。たぶん違うんだろうと、その時は思った。

わたしたちが着席すると、誰かがわたしの前に料理を置いた。船長の給仕がわたしのためにもう一杯強い酒をついだ。わたしが料理――デンマーク風オードブルと、スモーガスボード――に口をつけようとしたその時、誰かがわたしの肩に片手を置いた。

わたしは顔を上げた。〃旅慣れた男〃だ——一緒に〃物知り〃と〃疑り屋〃がいた。
名前は違っている。わたしの人生をもてあそんでいる誰か(何かか?)は、それほど極端なことをしたわけではなかったらしい。たとえば、〃ジェラルド・フォーテスキュー〃が今は〃ジェレミー・フォーサイス〃だ。しかしわずかな違いにもかかわらず、かれらをそれぞれ見分けるのは造作のないことだった。それにかれらの新しい名は、誰か——あるいは何か——がジョークを続けている事実を容易に察知できるほど、もとの名に近かった(それならなぜ、わたしの新しい名は〃ハーゲンシャイマー〃に似ていないんだ? 〃ハーゲンシャイマー〃はいかにも威風堂々たる立派な名でないか。〃グレアム〃ではあまりパッとしない)。
「アレック」と、ミスター・フォーサイスは言った。「われわれはきみを見くびっていたよ。ダンカンとわたしとピートは喜んでそのことを認める。さあ、これが、われわれからきみへの三千ドルだ。そして——」と、かれは背中にまわしていた右手を前に出し、大きなボトルを掲げた。
「われらの敬意のしるしとして、船内最高のシャンペンだ」
「給仕!」と、船長。
すぐにワイン係の給仕があらわれ、各人のグラスを満たした。だがその前に、気がついてみるとわたしは再び立ち上がって、三千ドル(北アメリカ合衆国ドル)をひっ掴んだまま、アクアヴィットで三回もつづけて「乾杯(スコール)!」をやってのけていた。三人の敗者のそれぞれに一回ずつ、だ。なぜ三百ドルが三千ドルに変わったのか、不思議に思っている時間はなかった——そのうえ、それは〈コンゲ・クヌート〉に出来(しゅったい)した変事ほど奇妙ではなかった。二隻の〈コンゲ・クヌート〉に、出来した変事だ。それに、どっちみち、わたしの〃驚き回路〃は、とうの昔にオーバーロードしてしまっている。
ハンセン船長はウェイトレスに、フォーサイスとその連れのために、このテーブルに椅子を運べと命じた。しかし当の三人は口をそろえて、女房とテーブル仲間が待ってるから……と言い張った。それに、三人分の椅子を置くスペースもない。
ハンセン船長にとって、そんなことは問題ではなかったはずだ。かれはバイキングの子孫で、一軒の家の一倍半はありそうな巨体の持ち主である。ハンマーを持たせたらトール(北欧神話の雷神)と見まがうほどだった——ほかの男なら筋肉のつく場所すらないようなところにまで、筋肉があった。こんな男と言い争うのは非常に難しい。

しかし船長は機嫌よく妥協した。三人とも自分たちのテーブルに戻って食事を終えてよろしい。だがその前に、絶対、われわれと一緒になって、われらの同船者アレックの守護天使たるシャデラク、メシャク及びアベデネゴ（旧約聖書のダニエル書より。この三者はネブカデネザル王の造った神像を拝まなかったため燃える炉の中へ投げ込まれたが、神の加護によりまったく無事だった）のために乾杯すること。要するに、同席の全員が参加しなければならない。「給仕！」

そこでわれわれは、さらに三回「乾杯（スコール）！」をし、デンマーク製不凍液を扁桃腺めがけて流し込んだ。

きみは数えているか？　これで七杯目だ……と思う。もう数えるのはやめたほうがいい、わたしはそこまでしか数えられなかったんだから。火渡りの途中で感じた麻痺感が戻ってきはじめた。

シャンペンをつぎおわったワイン係給仕は、船長に身ぶりで指示されて酒をまた追加した。それから、再びわたしのために乾杯し、わたしは三人の敗者に賛辞を返し、それから全員でハンセン船長のために乾杯し、それから善（よ）き船〈コンゲ・クヌート〉のために乾杯した。

ハンセン船長は合衆国のために乾杯し、食堂にいた全員が立ち上がって船長と共に杯を乾した。そこでわたしは、お返しにデンマーク女王のために乾杯する義理があると感じたので、もう一度乾杯した。船長はわたしにスピーチを強要した。

「燃える炉の中に入るのはどんな気分か、教えてください！」

わたしがことわろうとすると、まわりじゅうから「スピーチ！　スピーチ！」と声が上がった。

立ち上がるのはいささか困難だったが、それでもなんとか立って、この前の海外宣教資金募集夕食会で行なったスピーチを思い出そうと努めた。だがどうしても思い出せない。結局、わたしはこう言った。

「いやあ、その、何でもありませんよ。人の話をよく聞き、苦労をいとわず、目標に向かって努力すれば誰にだってできることです。ありがとう、ありがとう、みなさん、今度はぜひ、わたしの家に来てください」

皆が喝采し、理由は忘れたが再び乾杯した。船長の左にいた女性が立ち上がり、近づいてきてわたしにキスをした。すると船長のテーブルにいた女性が、一人残らずわたしのまわりに集まってきて、わたしにキスをした。それが室内にいたほかのご婦人がたを鼓舞したらしい。みんなぞろぞろと行列して、わたしにふざけ半分のキスを求め、それでいて船長には本気のキスをしている――いや、ひょっとしたら、その逆だったかもしれない。

このパレードのあいだに、誰かがわたしの前からステー

キを持ち去った。食べようと思っていたやつを、だ。しかしそれほど惜しくはなかった。というのも、わたしはこの果てしない接吻の狂宴に頭がぼうっとなり、うっとりと我を忘れていたからだ。ちょうど、火渡りの村の女性たちによってぼうっとなったときのように。

実は大食堂に足を一歩踏み入れたときから、わたしはなかば夢見心地となっていた。こう表現すればいいだろうか――同じ船の女性の乗客たちは、まさしく〈ナショナル・ジェオグラフィック〉誌に載っているような格好をしていた、と。

そうだ。そんなようなものだ。ま、正確な言いかたではないかもしれないが、とにかく女性客たちの服装は、あの友好的な村人たちよりもずっと裸体に近く見えた。わたしはそれらの〝フォーマル・イブニングドレス〟を描写するつもりはない。描写できるという自信がないからだ――そして、描写すべきでないという確信があるからだ。わたしが育った世界でなら、気まぐれな夜のお遊びのときでも女性が通常覆っている部分を、ここの女性たちときたら二十パーセントも覆っていないのだ。もちろんこれは、腰から上の話である。彼女たちのスカートは一様に長く、そのスカートを床にひきずっている者もいた。だが、それでもまったく目を見張るようなデザインのカットやスリットがはいっている。

なかには、ちゃんと上まであるものを着て、なにもかも覆っている女性もいた……が、その布地はガラスのように、あるいはほとんどガラスに近いほど、透き通っていた。

そして、最も年若い女性たち――まだ少女といったほうがいいくらいの――の中の何人かは、文字どおり〈ナショナル・ジェオグラフィック〉誌そのまま、あの村人たちそっくりだった。どういうわけか、こういった若い女性たちのほうが、年増のご婦人がたほど、はしたなく見えない。

わたしは、室内に入った瞬間からこの様子に気づいていたのだが、できるだけそれをまじまじと見つめないように努めていた。それに初めのうちは、船長やそのほかの連中の相手をするのに忙しくて、この信じられないような露出ぶりを盗み見する時間がなかった。しかしだ、いいですか……女性が近づいてきて、きみの身体に腕をまきつけ、否応なしにキスを強要してきたら……気にしないほうがむずかしいんです――その女性が今にも肺炎に（いや、別の胸部疾患でもかまわないが）なるんじゃないか、と心配になるくらい薄着している事実を。

だんだん目がくらくらしてきて、手足のしびれがひどくなってきた。だがそれでもわたしは、しっかりと自分の手綱を引き締めていた。

しかしむき出しの肌でさえ、むき出しの言葉ほどわたしをびっくりさせはしなかった——生まれてこのかた、公衆の前では一度も耳にしたことがない言葉、野郎どもしかいないところでもめったに聞かれない言葉だ。〝野郎ども〟と、あえてわたしは言った——紳士ならば、たとえ女性が一人もいないところでも、そんな言葉は使わないものだからだ。いや、これはあくまでも、わたしが育った世界での話だった。

わたしの生涯で最もショッキングな出来事は、少年時代に起こった一つの事件である。ある日、町の広場を通りかかると、裁判所のわきの贖罪場に人だかりがしていたので、わたしも首をつっこんでその人だかりの原因となった人物とその理由を見きわめようとし、そしてしかと見きわめた——なんと、わがボーイスカウトの隊長その人がさらし台にかけられているではないか。わたしは危うく気絶しかけた。

隊長の罪はみだらな言葉の使用だという。胸元にぶらさがった看板にそう書いてあった。訴えたのは本人の奥さんで、かれは反論せず、法の慈悲にわが身をゆだねたのだ——判事はブランビー助祭で、問題の言葉の意味も知らぬ人物だった。

隊長のカーク氏は、その二週間後に町を去った。その後二度とかれの姿を見たものはいない——さらしものにされるということは、人にそういう結果をもたらすものであるらしい。わたしはカーク氏がどんな悪い言葉を使ったのか知らないが、それほど悪い言葉であったはずはない。ブランビー助祭がかれをさらしたのは、たった一日、夜明けから日暮れまでだけだったのだから。

その夜、〈コンゲ・クヌート〉の船長のテーブルでわたしは、〝大好きなおばあさんタイプ〟の感じのいいご婦人が、神聖冒瀆を含む禁じられた言葉づかいと犯罪的であること間違いなしの好色なしぐさで、自分の夫に語りかけるのを聞いた。もしそのご婦人が、わたしの故郷の町で大っぴらにそんなしゃべり方をしたら、最大限のさらし刑をうけたあげく町から追放されることになっただろう（わたしたちの町では、タールを塗りつけて羽根をまぶすことはしなかった。そんなことは野蛮だと考えられていた）。

にもかかわらず、船内のこの親愛なるご婦人は、小言すら言われなかった。ご主人はただにっこり笑って、おまえは心配しすぎだよと言っただけだ。

ショッキングなおしゃべりと信じられないほどはしたない肌の露出と、ふんだんに提供される二種類の奇妙であやしげな毒の効果にもまれて、わたしはすっかり混乱してしまった。まさに、新奇でショッキングな習慣に打ち負かさ

れた〝異星の客〟（ハインライン自身の作品の題名でもある）だ。だがその間じゅうずっとわたしは、世慣れているように見せかけなければならない……あくまでも、くつろいでいるように、驚いていないように見せなければならない……と固く思いつづけていた。誰にも、わたしが実は正当な船客アレック・グレアムでなく、まったくの異邦人アレックス・ハーゲンシャイマーである事実を感づかせてはならない。さもないと何かひどくまずいことが起こりそうだ。

もちろん、この言いかたは正しくない。ひどくまずいことは、もうすでに起こっているのだ。わたしは、まるっきり奇妙で頭を混乱させる世界にいる、まったくの異邦人だった……しかし今になって思えば、たとえあのとき、わたしが自分の苦境をうっかり誰かにもらしたとしても、それでわたしを取り巻く状況が悪化したとは考えられない。

わたしの話は、おそらく誰にも信じてもらえなかっただろう。

絶対に信じてはもらえなかったはずだ。なにしろ、自分でも信じられないのだから。

心底まじめな男であるハンセン船長は、きっと、わたしの〝冗談〟を大声で笑いとばし、もう一杯乾杯しろと言い張っただろう。もしわたしが、それ以上わたしの〝幻覚〟にしつこくこだわったとしたら、船長は船医にわたしを診（み）させただろう。

とにかく今は、アレック・グレアムの役を演じることに精神を集中しなければならない……その間、誰にもわたしがカッコーの卵、妖精の取り替え子であると疑われてはならない……という点に注意力を引きしぼったからこそ、その驚くべき一夜をなんとか無事に切り抜けられたのである。

わたしの前に一片のプリンセス・ケーキ――もう一隻の〈コンゲ・クヌート〉にあったのと同じような、美しい多層の糖菓――と小さなコーヒー・カップが置かれたとたん、船長が立ち上がった。

「さあさあ、アレック！　もうラウンジへ行かなくては。そろそろショウが始まる時間ですぞ――しかし、わしが行くまでは始まりません。だから、ご一緒にどうぞ！　こういう甘いものはお望みではないでしょう。身体に良くありませんからな。コーヒーならラウンジで飲めます。しかしその前に、男の飲物はいかがですかな？　こんなふざけた飲物ではなくて。ロシアのウォッカはお好きですか？」

船長は自分の腕をわたしの腕にがっちりとからませた。いつのまにか、わたしはラウンジへ向かって歩かせられていた。自分の意志のはいる余地はなかった。

ラウンジのショウは、以前に〈機船（MV）コンゲ・クヌート〉で見たのと同じような寄せ集め細工だった――相も変わら

ず、信じられないような、しかしわたしのしたこと（いや、されたことと言うべきか？）にくらべたらはるかに信じやすいことをしてみせる手品師、黙っててくれたほうがありがたいような漫談家、歌を唄う可愛い子ちゃん、そして踊り子たち。主な違いは、わたしがすでに体験している二点だ。すなわち、むき出しの肌とむき出しの言葉である。しかしその時までには、最初のショックとアクアヴィットのおかげで、わたしの全身は痺れきっており、異世界の証明がさらに加わったところで、その影響はほとんどなかった。

歌を唄った娘はほとんど服らしいものを着けておらず、その歌詞は、ニュージャージー州ニューアーク市の暗黒街で唄っても、問題になりそうな代物だった。いや、そう感じただけだ。このわたしは、これまで一度たりと、あの悪名高き悪徳の巣窟に足を踏み入れたことはない。わたしは彼女の外観のほうに、もっと注意を払った。ここでは目をそらす必要がなかったからだ――出演者をじっと見つめて当然なのである。

仮りに「社会構造を破壊することなく服装習慣が大きく変わることは可能である」（わたし個人としては認めない可能性だが、あえて条件として記す）とすれば、その変化を体現する人間は、なるべく、若くて健康で器量よしのほうがいいと思う。

その歌手はまさに若くて健康で器量よしだった。彼女がスポットライトの輪の外へ姿を消したとき、かすかに心残りを感じた。

メイン・イベントはタヒチアン・ダンサーの一座だった。ダンサーたちは花と貝殻のビーズのほか、腰から上には何も着けていなかったが、わたしはもう全然驚かなかった――このころになると、そうでないほうが不自然に見えてきていたのだ。それでもやはり驚かされたのは（驚くべきではなかったのかもしれないが）一緒にいた乗客たちの、その後の行動である。

最初に一座の連中――女の子八人に、男二人――が、われわれのために踊った。今日のMV火渡りの前に行なわれたのと同じような、パペーテで〈機船コンゲ・クヌート〉に乗り込んできた一座と同じような踊りだった。ひょっとすると、あなたもご存じかもしれないが、タヒチのフラダンスは、ハワイ王国のゆったりとした優雅なフラダンスと違い、ずっとテンポが速く、もっとはるかにエネルギッシュだ。わたしはダンス芸術の専門家ではないが、少くとも両方のスタイルのフラを、どちらも本場の島で見ているのだ。

わたしはどちらかといえばハワイのフラのほうが好きだ。〈ツェッペリン伯〉号がパペーテに向かう途中、ヒロで一日だけ駐船した時に見たのである。タヒチのフラは、芸術

というよりはむしろ、一所懸命に運動しているような感じだ。しかしそれだけに一層エネルギーとスピード感にあふれており、かえって目を見張らせるものになっている。原住民の娘たちが服を着ていようといまいと無関係に、だ。

　ショウはさらに続いた。娘たちと二人の若者のそれぞれが組むペアの踊り――その中でかれらは納屋の前のニワトリですらびっくりするようなことをやった（わたしは、ハンセン船長がこんなことは早くやめさせればいいのに……と思いつづけていた）――を含む、長いダンス・シーンのあと、船の司会者だか旅行の幹事だかが前に進み出た。

「紳士、淑女のみなさま――」と、かれはアナウンスした。「ならびにその他、酒に酔っておられる素性の定かでないかたがた――」（なんというひどい言葉だろう）「ご婦人（セッター）がたはもちろん、男性（ポインター）のかたも何人かはもう、踊り子たちと共に過ごしたこの四日間を大いに活用なさって、タヒチアン・フラをレパートリーに加えられたことと思います。まもなくみなさまがたにも機会を差し上げますので、今までに学ばれたことを実演なさって、パペーテのパパイヤ同様に正真正銘のお免状をお持ち帰りください。しかしながら、われらが善き船〈クヌート〉の船内で、これを練習していた者たちがおりましたことは、ご存じないでしょう。さあ、指揮者（マエストロ）、音楽、スタート！」

ラウンジのステージの後ろから、さらに十余名のフラ・ダンサーが登場した。しかしこの娘たちはポリネシア人ではなく、コーカサス人種だった。彼女たちは本物どおりの格好をしていた。草の葉のスカートと首飾り、髪に挿した花、それだけだ。しかし彼女たちの肌は南国の褐色ではなく、白かった。ほとんどの者は金髪で、二人は赤毛だった。

　それが違和感をかもし出している。そのとき初めてわたしは、ポリネシア女性にとっては、生まれ故郷の島の衣裳を身につけることが、いかに正しく、品の良いものであるかを認めた――土地が違えば、服装も変わるのだ。母なるイヴも〈堕落〉以前は簡素なよそおいだったが、それはそれなりに品の良いものだった。

　しかし白人女性が南洋風の格好をするのは、場違いもはなはだしい。

　だからといって、わたしがダンスから目を離したわけではない。彼女たちがこんなに複雑で動きの速いダンスを、島の娘たちと同じくらい（わたしの慣れていない目には）上手に踊るとは……。わたしは舌を巻き、その感想を正直に船長に告げた。

「あの娘たちは、たった四日間であの踊りをあんなに正確に覚えたんですか？」

　船長は鼻を鳴らして言った。「航海のたびごとに練習し

てるんですよ、前からこの船に乗っているあの娘たちは。全員、少くともサンディエゴからずっと練習をつづけてきていますな」

その時わたしは、ダンサーの一人を見わけた――アストリッド、わたしを〃わたしの〃個室に入れてくれた感じのいい若い女性だ――そして、なぜ彼女たちが一緒に練習する時間とやる気を持ったか……を理解した。彼女たちはこの船の乗務員なのだ。わたしは興味をつのらせてアストリッドを見た――いや実をいうと、まじまじと見つめた。彼女はわたしの眼を見てにっこり笑った。まるで間抜けな田舎者のように、わたしは微笑を返すかわりに目をそらせ、顔を赤らめ、手に持っているのに気づいた飲物を大きくすすって自分のまごつきぶりを隠そうとした。

カナカ人のダンサーの一人が、白人女性たちの前にくるくると踊り出て、中の一人をペア・ダンスに誘った。ああ、なんてことだ、マルガレーテではないか！

わたしはむせ返り、息ができなくなった。彼女の姿は、わたしがそれまでの生涯で目にしたもののうちで、最高に目がくらむほど美しい眺めだった。

〃ああなんじ美わしきかな　わが佳耦よ　ああなんじうるわしきかな　なんじの目は面帕のうしろにありて鴿のごとし　なんじの髪はギレアデ山の腰に臥したる山羊の群に似たり〃

〃なんじの臍は美酒の欠くることあらざる円き杯盤のごとく　なんじの腹は積かさねたる麦のまわりを百合花もてかこめるが如し〃

〃なんじの両乳房は牝鹿の双子なる二の小鹿のごとし〃

〃わが佳耦よ　なんじはことごとくうるわしくしてすこしのきずもなし〃（旧約聖書「雅歌」より）

4

災禍は塵より起らず艱難は土より出ず
人の生れて艱難をうくるは
火の子の上に飛がごとし

ヨブ記第五章六節〜七節

わたしはゆっくりと目を覚まし、そして、目を覚まさなければよかったと思った。きわめつけの悪夢が追いかけてくる。わたしは眼をしっかり閉じて光を締め出し、もう一度眠ろうとした。

原住民の太鼓が頭の中で鳴っていた。わたしは耳を覆ってその音を閉め出そうとした。

だが音はますます大きくなる。

わたしはあきらめて眼を開け、頭を起こした。これがいけなかった――胃袋がとんぼ返りをうち、耳が震える。目玉は動こうとせず、例の地獄の太鼓は頭蓋骨をぶち割りそうだ。

そのうちにやっと目玉が動くようになったので、焦点はまだぼんやりしていたが、とにかく周囲を見回してみた。見知らぬ部屋の中で、ベッドに横たわっていることがわかった。服は半分しか着ていない。

それから記憶が戻りはじめた。船上パーティ。酒。浴びるほどの酒。騒音。裸体。草の葉のスカートをはいて、うきうきと踊っている船長。船長のステップに合わせているオーケストラ。草の葉のスカートをはいた婦人客たち。それよりもっと露出的な、何人かの女性たち。竹のカタカタ鳴る音、太鼓の低いとどろき。

太鼓――

頭の中で鳴っているのは太鼓ではなかった。人生最悪の頭痛で頭がガンガンしているのだ。わたしはいったい、なんで連中にあんなことをさせたんだろう――

〝連中〟のことは問題じゃない。自分でやったんだよ、おまえが。

そうだ、しかし――

〝そうだ、しかし〟。いつも〝そうだ、しかし〟。おまえの人生は〝そうだ、しかし〟ばっかりだ。いったいいつになったら、おまえは胸を張って、自分の人生と、自分の身に起こることのすべてに責任をとるようになるのか？

ああ、しかしこれはおれのせいじゃない。おれはA・L・グレアムじゃない。それはおれの名前じゃない。この船はおれの船じゃない。

そうかね？　本当に違うのか？

もちろん違うさ――

わたしは起き上がり、悪い夢を振り払った。起き上がったのは間違いだった。わたしの頭は転がり落ちこそしなかったが、頭の中のズキズキする痛みのうえに、首の付け根の刺すような痛みが加わってしまった。着ているものは黒の正装用ズボンだけで、あとは裸のようだ。わたしのいる見知らぬ部屋は、ゆっくりと横揺れしている。

グレアムのズボンに、グレアムの部屋だ。このゆっくりした周期の横揺れは、安定装置を付けていない船のローリングだ。

夢ではない。もしこれが夢なら、まだ醒めずにいるのだ。歯が浮いた感じで、足がシャンとしない。身体じゅうに乾いた汗がこびりついている。乾いていないところはベタベタだ。腋の下のことなんか、考えたくもない！

口の中を湿すには苛性ソーダが要りそうだ。

いまやすべてを思い出した。あるいは、ほとんどすべてを。火渡り。村人たち。あわてて逃げまどうニワトリたち。わたしの船でない――しかしわたしの船である――船。マルガレーテ……。

マルガレーテ！

〝なんじの両乳房は二の小鹿のごとし――わが佳耦よ　なんじはことごとくうるわし！〟

ダンサーたちの中にいたマルガレーテ、胸乳を足のようにあらわにして。一緒に踊っていたのは悪党づらのカナカ人、彼女を振り回して――

酔っ払ったのも無理はない！

何を言うか、こいつ！　おまえはその前から酔っ払っていたんだぞ。おまえがあの原住民の若者に腹を立てているのは、ただ、踊ったのがおまえでなくてあの若者だったからだ。おまえは彼女と踊りたかったんじゃないか。ただ、踊れなかっただけさ。

ダンスは悪魔の誘惑だ。

踊りかたを知っていればよかったのに、とは思わなかったか？

〝……二の小鹿のごとし〟。ああ、思ったとも！

ドアをとんとんと軽く叩く音が聞こえた。それから、鍵のカチャカチャと鳴る音がして、マルガレーテが首を部屋の中につっこんできた。

「起きてます？　よかった」

彼女は部屋の中へ入ってきた。トレイを運んでいる。ドアを閉め、わたしに近づいて言った。
「これを飲んでください」
「なんだね、これは?」
「ほとんどがトマト・ジュース。ごちゃごちゃ言わないで――飲んで!」
「飲めないよ」
「いいえ、飲めます。飲まなきゃいけないわ。飲んで」
わたしはくんくんと匂いをかいでから、ちょっぴり啜った。驚いたことに、吐気はおこらなかった。そこでもう少し飲んだ。ちょっとブルッとしただけで、その飲物はなめらかに喉を通ってゆき、おとなしく腹の中に落ち着いた。
マルガレーテは錠剤を二粒差し出した。
「これをどうぞ。トマト・ジュースの残りで流し込めばいいわ」
「ぼくは薬を飲まないことにしている」
彼女は溜息をもらし、何か言ったが、わたしには理解できなかった。よく分からないが英語ではないようだ。
「何て言ったの?」
「あたしの祖母が、祖父が言うことをきかなかった時によく口にした言葉ですわ。グレアムさん、この錠剤を飲んでくださいな。これはただのアスピリンで、今のあなたにはぴったりのお薬です。もし、あなたが協力的でないなら、あたし、もうあなたのお世話をするのはやめます。あたし――あたし、アストリッドと代わりますわ。本当にそうしますわよ」
「それはやめてくれ」
「あなたがさからいつづけるなら、そうします。アストリッドが喜んであたしと代わってくれることは、分かってるんです。あのひとはあなたが好きなんだから――ゆうべ、あのひとのダンスをじっと見ていらっしゃったんですってね」
わたしは錠剤を受け取り、それをトマト・ジュースの残りで流し込んだ――氷のように冷たく、心地よかった。
「確かにそうしたが、それはきみを見つけるまでのことだ。そのあとはずっときみを見ていた」
彼女は初めてにっこり笑った。
「そう? お気に召しましたかしら?」
「きみは美しかった」(そしてきみのダンスは猥褻だった。きみのはしたない衣裳と振舞いは、寿命が縮むほどショックだった。あれは気に入らなかった――でも、できることなら今すぐここで、もう一度あれを最初から見なおしてみたい!)「それに、とても優雅だった」
彼女の笑顔にえくぼができた。

「あなたのお気に召しますように、と祈っておりましたのよ」
「もちろん、お気に召したさ。だから、アストリッドを持ちだして脅迫するのはやめてくれ」
「わかりました。あなたさえいい子にしていらっしゃればね。じゃあ、起きてシャワーを浴びてください。最初はうーんと熱く、それからうんと冷たくして。サウナみたいに」
そして彼女は待ちつづけた。「起きてくださいって言ったんですよ。あたし、シャワーが出はじめて湯気が立ってくるまで、ここを動きませんわよ」
「シャワーは浴びるさ。きみが出ていったらね」
「生ぬるくして浴びるおつもりでしょう、わかってますわ。さあ起きて、そのズボンを脱いで、シャワー室に入ってくださいな。あなたがシャワーを浴びてらっしゃる間に、朝食のトレイを取ってきますわね。厨房が昼食の準備をするために閉まるまで、まだ充分間があります……だから時間を引きのばすのは、おあきらめなさいませ!」
「うわあ、朝食なんか食べられないよ! 今日はだめだ。だめだよ」食事——考えただけでも、ぞっとする。
「食べなくちゃいけませんわ。ゆうべはずいぶんお飲みになってましたもの。それはご自分でもお分かりでしょうけど。もし何も召し上がらないと、今日は一日中ご気分がなおりませんよ。ねえ、グレアムさん、あたし、ほかのお客様のお世話は全部済んでしまったから、今は非番なんです。あなたのトレイを取ってきたら、そのままこの部屋を出ずにあなたが召し上がるのを見届けます」彼女はわたしを見た。「あなたをベッドに寝かしたあとで、ズボンを脱がせておけばよかったわ。でもあなたはとても重かったんですもの」
「きみがぼくをベッドに寝かせたのかい?」
「オーリが手伝ってくれました。あたしと踊ったあの男の子が」
わたしはつい顔色を変えてしまったに違いない。というのも、彼女があわてて言いたしたからだ。
「あら、あたし、かれをあなたの部屋へ入れたりはしていませんわよ。あなたの服を脱がせたのは、あたしのこの手です。でも、あなたを階段の上に運び上げるのは、誰かに手伝ってもらわなくちゃ無理だったんです」
「ぼくは別に文句をつけてるわけじゃない」(きみはそのあと、パーティに戻ったのかい? あいつと一緒だった? またあいつと踊ったのか? 〃——嫉妬は墓場の如く残酷なり、さながら石炭の如く燃えさかり——〃でも、おれにはなんの権利もないんだ)「きみたち二人に感謝するよ。

ぼくはきっと、ひどく手を焼かしたんだろうね」
「そんな……勇敢な男の人が、危険が去ったあとでお酒を飲みすぎるのは当然のことですわ。でも、お身体によくありません」
「ああ、よくないさ」
わたしは起き上がってベッドを降り、浴室に向かいながら言った。
「目いっぱい熱くする。約束するよ」
そしてドアを閉めてロックし、服を脱ぎおえた（するとおれは、よっぽど酒くさいベロンベロンの酔っ払いだったんだな。なんせベッドに寝かせるのに島の若者の手を借りなきゃならなかったんだから。アレックス、おまえにはまったく愛想がつきるぜ！　それにおまえには、素敵な女の子のことでやきもちを焼く権利なんか全然ないんだ。彼女はおまえの持物じゃないし、彼女の振舞いはこの土地——この土地がいったいどんなところであろうとも——の基準に照らしていえば、別に間違ってはいない。彼女のやってくれたことは、母親代わりになって面倒を見てくれただけだ。そうしてくれたからといって、彼女は自分のものだと主張していい、ということにはならないぜ）。
わたしはシャワーの温度を最大に熱くした。それは哀れなアレックスを半殺しの目にあわせたが、それでもわたしは、神経末端が焼け切れそうになるまで熱くしておいた——それから、いきなり冷水に切り替え、悲鳴を上げた。冷たさを感じなくなるまで冷水を浴びつづけてから、シャワーを切り、身体を拭き、ドアを開けて湿気のこもった空気を外に出した。浴室から出て部屋に入ると……突然、気分爽快になっていることに気づいた。頭痛も消えている。ついさっきまで全身を包んでいた〝世界の終末が数時間後に迫っているような気分〟も消えた。胃のムカムカする感じもない。アレックス、もう二度と酔っ払ってはだめだぞ……だがもし今度酔っ払ったら、絶対にマルガレーテの言ったとおりにするんだ。彼女の肩の上には利口なおつむが乗っかってるんだよ、坊や——ありがたく活用しろ。
わたしは口笛を吹き吹き、グレアムの洋服ダンスを開けた。
そのときドアのところで鍵の音がした。わたしはあわててグレアムのバスローブをひっ摑み、彼女がドアを開ける前になんとか身にまとった。彼女はなかなか入ってこない。重いトレイを持っているので動きがとれないのだ、と悟ったわたしは、彼女のためにドアを押さえてやった。室内に入った彼女はトレイを置き、わたしの机の上に料理を並べた。
「きみの言ったサウナ式シャワーは正しかったよ」と、わ

たしはマルガレーテに言った。「まるでお医者さんの命令みたいだった。いや、看護婦さんの、と言うべきかな」
「ええ、あれはうちの祖母が祖父のためによくやったことなんです」
「かしこいおばあさんだ。やあ、こいつはいい匂いだね！」（スクランブルド・エッグ、ベーコン、デニッシュ・ペイストリーたくさん、ミルク、コーヒー——添え物としてチーズ、北欧風の薄いライ麦パン、薄切ハムの巻いたの、名前のわからない熱帯産フルーツいくつか）「きみのおばあさんは、おじいさんが文句を言うと、なんて言いかえしたの？」
「そうね、祖母もときどき我慢できなくなって……」
「きみとは大違いだな。で、なんて言ったの？」
「つまり……祖母はよく……〝神様は、女の魂を試すために男をお造りなさった〟って言ってましたわ」
「おばあさんのいうことにも一理ありそうだな。きみもやっぱりそう思うかね？」
彼女はえくぼを浮かべて、にっこり笑った。
「男の人には、まだほかにも使い道があると思いますわ」
マルガレーテはわたしの部屋を片づけ、わたしの浴室を洗い（わかった、わかった、グレアムの部屋、グレアムの浴室だ——これで気がすんだかね？）、その間にわたしは食事をした。彼女はわたしのために、靴下一足と、島の風景をプリントしたスポーツシャツと、サンダルを出して並べ、フルーツとコーヒーだけ残して、皿とトレイを運び去った。彼女が部屋を出るときにわたしはお礼を言ったが、〝支払い〟をすべきかどうか迷っていた。と同時に、彼女がほかの乗客にもこんなにゆきとどいた世話をしているのかどうかも、気になった。たぶんそんなことはないと思うが、口に出して訊くわけにもいかない。
マルガレーテが帰ると、わたしはドアに錠を差してグレアムの部屋の調査を開始した。
わたしはかれの服を着、かれのベッドで眠り、かれの名前を呼ばれると返事している——もう決断しなければならない。このままずっとごまかしつづけて〝A・L・グレアム〟になりきるか……それとも関係当局者（アメリカ領事か？ 領事でないとしたら、だれだ？）に人違いだと名乗り出て、助けを求めるべきか？
予定はぎっしり詰まっていた。今日の〈宮廷詩人〉によると、〈汽船コンゲ・クヌート〉は午後三時にパペーテに入港し、六時にメキシコのマサトランに向けて出帆することになっている。事務長は乗客全員に、入港したらパペーテ銀行の代表者が事務長のオフィスの向かいのロビーにや

ってくるから、出港十五分前までにフランをドルに両替してほしいと連絡した。事務長はまた、船内のバーや売店などのつけは、ドルかデンマーク・クラウンか、法的に正当な信用状でなければ支払いを受け付けない、と乗客に伝えた。

何もかも、もっともだ。そしてやっかいだ。わたしは、どう少く見積もってもパペーテに二十四時間は停泊するものと予想していた。たった三時間しか入港しないなんて無茶苦茶だ――これでは係留作業が終わらないうちに、それを解きはじめるようなものじゃないか！　ちょっとでも入港すれば、二十四時間ぶんの停泊料金を払わなければならないのに！

そのあとで、この船の運営がわたしの仕事ではないことを思い出した。もしかすると船長は、別の船が港を出てから次の船が着くまでの空き時間を利用して停泊料を安くしているのかもしれないし、さらにそのほかにいくつも理由があるのかもしれない。わたしが心配すべきことは、三時から六時までの間になにができるか……そして今から三時までの間になにをしなければならないか、だ。

四十分間かけて空内を捜査した結果、次のことが明らかになった。

衣服。あらゆる種類がそろっている――わたしのウェストが五ポンドほど太いことを除けば、何も問題はない。

お金――財布の中にフラン札（これは両替しなければならぬ）と八十五ドル。グレアムの時計や指輪やカフスボタンなどを入れた小さなケースの入っていた机の引出しの中に、バラで三千ドル。時計と宝石類がケースの中に戻してあったところを見ると、マルガレーテはわたし（あるいはグレアム）が、フォーサイスとジーヴスとヘンショウとの賭けに勝って得た金には手をつけなかったのだ。愚か者と酔いどれの面倒は神様が見てくださるという。もしそれが本当なら、わたしの場合、神はマルガレーテを通してそれを行なっておられるのだろう。

目下の問題にとっては何の意味も持たぬ雑多な物がたくさんある――書籍、数品のおみやげ、練り歯ミガキ……などだ。

旅券がない。

一回目の捜査でグレアムの旅券を見つけそこなったので、わたしはもう一度捜査をはじめた。今度は、洋服だんすに掛かっているすべての服のポケットを調べ、旅券ぐらいの大きさの小冊子を隠しそうなあらゆる場所を注意深く捜しなおした。隠しそうもない場所まで捜した。

旅券は出てこない。

旅行者の中には、船を離れるときは必ず旅券を身につけ

ていなければ落ち着かない小心者がいるものだ。わたしは、携帯せずにすませられるときは携帯しないほうが好きだ。旅券を失くしたりしたら、ひどく面倒なことになるからである。前日、わたしは自分の旅券を身につけていなかった……そこで今、わたしの旅券は〈機船（MV）コンゲ・クヌート〉へ……〈天国（フィドラーズ・グリーン）〉へ……〈どことも知れぬ場所（つたのからみいきしところ）〉の行ったところへ……行ってしまった。しからば、それはどこか？　今はそんなことを考えているひまはない。奇妙な新世界と対処するだけで精一杯だ。

もしグレアムがきのう自分の旅券を身につけていたなら、それもまた四次元の割れ目を通って〈天国〉へ行ってしまったわけだ。どうもそう思えはじめてきた。

わたしが頭に血をのぼらせていると、誰かがドアの下のすきまに封筒をスッと差し入れた。

わたしは封筒を取り上げて開封した。中に入っていたのは、〝わたしの〟（グレアムの）船内のつけに対する事務長（パーサー）の請求書だった。グレアムは最初からパペーテで船を降りる予定だったのか？　そんな！　もしそうだとしたら、わたしは永久にこの南海の諸島で置き去りにされてしまう。

いや、そうではなさそうだ。これはどうやら、毎月決まって月末に出す請求書らしい。

グレアムのバーの勘定の高さにわたしは愕然とした……そのうちにやっと一つひとつの項目に目が止まるようになると、今度は別の理由でもっとショックを受けた。コカコーラが二ドルもするということは、コーラが大きくなったことを意味するのではない。ドルの価値が小さくなっているのだ。

いまやわたしにも、向こう側での三百ドルの賭金が、こちら側で三千ドルになったわけがわかった。

もしわたしが、これから先この世界で暮らしてゆくなら、物価の概念をそっくり調節しなおさなければならない。ドルを外国通貨と考え、頭の中ですべての物の値段を換算するのだ——こちら側の値段に慣れるまで。これらの船内価格が典型的な例だとすると、たとえばブラウン・パレスやマーク・ホプキンズのようなホテルの大食堂や一流のレストランで、ステーキか極上のあばら肉といった一流のディナーをとれば——ゆうに十ドルはするだろう。やれやれ！　食前のカクテルと食事中のワインを加算すれば、勘定は十五ドルに達しかねない！　一週間ぶんの給料だ。わたしは酒を飲まないからいいようなものの……

おまえがなにを飲まないって？

おいおい——昨夜は特別中の特別だよ。

そうかい？　確かにそうだな。童貞を失うのは一度きりなんだから。一度失ってしまえば、それっきり失いっぱな

しさ。明りが消えるちょっと前に飲んでいたものは何だ？　デンマーク・ゾンビ（数種のラム酒に柑橘類のジュースやあんず酒を加えたカクテル）か？　ここであいつを一杯やりたくないかい？　おまえの精神の安定性をちょっぴり調整しなおすために。

二度とあんなものに手を出すものか！

じゃあ、またな、ご同輩。

旅券を発見できる見込みは、まだ残っている。たった一つだけだが、かなり可能性の高いものだ——わたしは望みをかけた。グレアムが宝石類などを入れるのに使っていた小さなケースの中に、一本の鍵があった。側面に82と番号が打ってあるほかは、何の特徴もない。もし運命がわたしにほほ笑みかけているのなら、これはきっと事務長(パーサー)のオフィスにあった貸金庫の鍵だ。

（そして、もし、運命が今日のわたしをあざ笑っているのなら、それは四十六州の中のどこかの銀行……しかもわたしには決して分からないところ……の貸金庫の鍵かもしれない。しかし取越し苦労はよそう。苦労ならすでに必要以上に背負いこんでいるのだから）

わたしは一デッキ下に降りて、船尾へ向かった。

「おはよう、事務長(パーサー)」

「やあ、グレアムさん！　ゆうべは素晴らしいパーティでしたな」

「まったくね。もう一度あんな真似をしたら、ぼくは死んでしまいますよ」

「おやおや、これは火の中を歩き渡ったかたのお言葉とも思えませんな。おたくも楽しんでおられたようにお見受けしますが——わたしは確かに楽しみましたよ。ところで、今日は何のご用でしょうか？」

わたしはさっき発見した鍵をとり出した。

「この鍵は合ってますか。それとも、これはぼくの銀行の鍵なのかな。すっかり忘れてしまって」

事務長(パーサー)は鍵を手に取った。「これはうちのです。ポール！　こいつを持っていって、グレアムさんのボックスを持ってこい。グレアムさん、こちらへお入りになって、席にお着きになりませんか」

「はい、どうも。ああ、そうだ、あれぐらいの箱の中味を入れられる袋かなにかありませんか。ちょっと書類の整理をしたいので、あれを自室へ持って帰りたいんですが」

「袋ですか——さてと……ギフトショップで買えますが——そのデスクワークにはどのくらい、お時間がかかりますか。正午までには、おすみになるのでしょうか？」

「ええ、そりゃあもう」

「それでしたら、ボックスごとお部屋に持っていかれて結

構です。規則には反しますが、その規則を作ったのはこのわたしですから、破ったってかまやしません。しかし正午までには必ず返すようにしてくださいよ。ここは正午から十三時まで閉鎖になります――組合の規則でね――もしも、うちの事務員がみんな昼食にいってしまって、わたし一人だけがここで待っていなきゃならなくなったら、その時は一杯おごっていただきますよ」
「そうでなくったっておごりますよ」
「ではそのように。さあ、これです。これを持って火の中を歩いたりしないでくださいよ」

一番てっぺんにグレアムの旅券があった。胸の中につかえていた固いしこりが、すっと融けた。旅券を持たずに〈連邦〉の外にいるほど、心細いものはない……こちらにあるのは本物の〈連邦〉ではないが、それでもだ。
わたしは旅券を開き、内側に型押ししてある写真を見た。わたしと似ているだろうか？　わたしは浴室に入り、鏡に映った顔と旅券の顔を見比べてみた。
かなりよく似ていると思う。やはり、旅券の写真でそれを見きわめるのは無理かもしれぬ。だが、写真を持ち上げて鏡に映したとたんに、突然、そっくりであることがわかった。きみの顔は左右の釣合いがとれてないな、ご同輩……そして、あんたの顔もそうだぜ、グレアムさん。
兄弟よ、わたしはこのまま永遠に、あんたのふりをしつづけなければならないかもしれない――ますます、それ以外に選択の余地はないような気がする。それにしても、これほどそっくりだと分かっていれば、ひと安心だ。指紋は？　いざとなったらなんとかうまくやれるだろう。北アメリカ合衆国は旅券に指紋を使ってはいないようである――少しは気が楽だ。職業は……会社役員。どこの役員だ？葬儀屋のか、それとも全世界に拡がるホテル・チェーンのか？　それをつきとめるのは……難しいなんてもんじゃない――早い話が不可能だ。
住所。ダラス市スミス・ビルディング、七〇〇〇号室〈オハラ、リグズビー、クラムパッカー&リグズビー法律事務所〉気付。やれやれ、立派なもんだ。これじゃ、単なる郵便物の宛先でしかない。勤務先も、現住所も、職業も不明か。やい、このインチキ野郎、その鼻づらに一発かませてやりたいよ！
（しかしかれが、それほど感じの悪い男であるはずはない。なにしろ、あのマルガレーテが憎からず思っている相手だ。だからといって――あのマルガレーテに手を出すとはけしからん。彼女を利用しようとしていやがる。けしからん。おや、だれが彼女を利用しようとしているって？　気をつ

けろよ、坊や、おまえの人格は分裂しかけているぞ〉
　旅券の下にあった封筒の中には、かれの切符の乗客保存用コピーがあった——ポートランド発ポートランド着、文字どおりの世界一周旅行だ。双子の相棒よ、もしあんたが六時までに姿をあらわさなかったら、わたしはこの船で帰国するぜ。たぶんあんたは、わたしの〈モフェット提督〉号の切符を使えるだろう。幸運を祈る。
　ほかにもこまごましたものがあったが、金属のボックスの中味は、ほとんど、ビジネスサイズの部厚い封筒ばかりだった。全部で十通あり、どれも封がしてある。そのうちの一つを開けてみた。
　中には千ドル札が入っていた。百枚も。
　わたしは急いでほかの九つの封筒を調べてみた。みんな同じだった。現金で百万ドルだ。

5

悪者(あしきもの)は逐(お)う者(もの)なけれども逃(に)げ
義者(ただしきもの)は獅子(しし)のごとくに勇(いさ)まし

箴言第二八章一節

　息も止まる思いで、わたしはグレアムの机の中から見つけたガムテープで封筒に封をし、旅券だけを出して、あとは全部ボックスに戻した。それから、机の小引出しにあった例の三千ドル——これは〃わたしのもの〃だと思っている——も一緒に中へ入れ、ボックスを慎重にかかえ、事務長(パーサー)のオフィスに戻った。
　フロントにいたのは別の男だったが、奥のオフィスに事務長(パーサー)の姿が見えた。わたしはかれの視線をとらえた。
　事務長(パーサー)は、「おや」と声をかけて前へ出てきた。「もうおすみですか？」
「ええ」と、わたしはうなずき返した。「いちおう、全部

計算が合いましたから」
「ぜひ、うちのオフィスで働いていただきたいものですな。ここでは計算が合ったためしがないんですよ。少くとも真夜中より前には、ね。それでは、何か飲物でも。ちょうど一杯やりたいところで」
「ぼくもですよ！　行きましょう」
　事務長が案内してくれたのは船尾のほうにある屋外バーだった。船内見取り図にはなかったものだ。上のデッキがおしまいになった先方に、われわれのいるDデッキが露天甲板となって続いている。床は歩き心地の良いぴかぴかのチーク板だ。Dデッキの端が張り出した形になっており、その下にこの屋外バーがテントを拡げていた。バーの右の角には立食式の昼食をたっぷり乗せたテーブルがあり、船客たちがそれに向かって列を作っている。さらに船尾のほうには船上プールがあり、水のはねる音や、ワーワー、キャアキャアという歓声が聞こえてくる。
　事務長はわたしを船尾寄りの小さなテーブルに案内した。テーブルにはすでに下級船員が二人座っている。わたしたちは立ち止まった。
「そこの二人、とっととどきな」
「はい、事務長」
　二人は立ち上がり、ビールのグラスを持ってさらに船尾のほうへ移動した。二人のうちの片方は、わたしにニヤリと笑いかけて、会釈をした。どうやら知り合いらしい。それで、わたしも軽くうなずき返し、「やあ」と答えておく。
　そのテーブルは半分だけが天幕の陰になっている。事務長が語りかけてきた。
「日なたに座って女の子をご覧になりますか、それとも日陰に座ってくつろぐほうがお好きですか？」
「どちらでも。お好きな方の席に座ってください。ぼくは残った方の席に座りますから」
「ふうむ。じゃ、このテーブルをちょっと動かして、二人とも陰に座れるようにしましょう。そうそう、これでいい」
　事務長が前方に向かって座ったので、必然的にわたしはプールに向かって座ることになった――そして、さっきちらりと見たような気がした一つの事実を確認した。このプールでは水着のようなものはいっさい必要ないのだ。
　もしわたしにその余裕があれば、これは論理によって推論できたはずだ――が、わたしにはそんな余裕はなかった。わたしが最後にこのような光景を――人間が水着をつけずに泳ぐ光景を――見たのは十二歳ぐらいの時だった。それは男性だけの、しかも十二歳ぐらい以下の年齢の少年たちだけに許される特権だった。

「〝何をお飲みになりますか、グレアムさん？〟とお訊きしたんですが」
「ああ！　すみません、聞いていなかったもので」
「いや、わかります。まったく、目の保養ですからな。ところで何になさいますか？」
「じゃあ……デンマーク・ゾンビを」
　事務長は目をぱちくりさせた。
「こんな真っ昼間から、あんな、頭をぶち割るような強い酒はいけません。ええと――」かれはわたしの後ろにいる誰かに、ちょいちょいと指を振った。「ねえ、きみ、ちょっと来て」
　呼ばれてやってきたウェイトレスを、わたしは下から見上げた。一度見て……もう一度見なおした。昨夜、アルコールのかすみを通して彼女を見ている。フラのその他多勢の中にいた二人の赤毛の娘の一人だ。
「ハンスにシルバー・フィズを二つ頼んでおくれ。いい娘だね、名前は？」
「ヘンダーソンおじさま、今度わたしの名前を知らないふりなさったら、おじさまのお酒をそのハゲ頭にぶっかけちゃうわよ」
「わかったよ。さあさ、急いで。その大根足をさっさと動かしておくれ」
　彼女はふんと鼻を鳴らし、ほっそりとした優雅な脚ですべるように去っていった。事務長はつけ加えた。
「どうです、いかす娘でしょう。あの娘の両親は、オデンセのわたしの家の真向かいに住んでましてね、わたしはあの娘を赤んぼのときから知ってるんです。頭もいいんですよ。ボデルはいま、獣医になるための勉強をしてるんですが、あと一年で卒業です」
「本当ですか？　どうやってこの仕事と学業と両立させているんです？」
「本船の女の子たちは、ほとんど全員が大学生ですよ。夏休み中のもいるし、一学年休学しているものもおります――海へ出て、自分も楽しみながら、次の学期の学費を稼ぐってわけですな。わたしも、人間を雇うときは、ちゃんとした将来の目標を持って大学に通ってる娘のほうを選ぶんです。そういう娘のほうがしっかりしていて頼りになるし――それに、いろんな国の言葉を知っていますからな。たとえば、おたくの客室係です――アストリッドでしたっけ？」
「いや、マルガレーテです」
「おう、そうでした。おたくは一〇九号室でしたな。アストリッドは同じデッキの左舷前方、マルガレーテはおたくの部屋側です。マルガレーテ・スヴェンスダッテル・グン

デルソン。英語と歴史の教師です。それだけでなくあと四つも外国語を知っていて――スカンジナビア諸語は数に入れずにですよ――そのうちの二つについては教員資格をとっています。H・C・アンデルセン中学校を一年間休職してきたんですが、戻る気はないようです。賭けてもいいですよ」

「へえ？　なぜ？」

「マルガレーテは金持ちのアメリカ人と結婚するつもりなんです。おたくは金持ちですか？」

「ぼくが？　これで金持ちに見えますか？」（ひょっとすると、事務長はあのボックスの中味を知っているのだろうか？　ああ神様、自分のものでもない百万ドルをどう扱えばいいのだろう。船外へ投げ棄てるわけにもいかないし。グレアムはなんであんな大金を現金で持ち歩いていたのだろう。理由はいくつか考えつくが、どれも悪いことばかりだ。そのうちのどれをとっても、わたしは今までに出会ったこともないような厄介なトラブルに巻きこまれてしまうだろう）

「金持ちのアメリカ人は、外見では絶対にわからないものです。連中は金持ちらしく見えないように練習を積んでいますからね。わたしが言ってるのは北アメリカ人のことです。南アメリカ人になると、まるっきり話が違う。やあ、ゲルトルード、ありがとう。きみはいい娘だねえ」

「おじさま、ハゲてるところにこれをひっかけてほしいの？」

「きみの方こそ、服を着たままプールに投げ込まれたいのかね？　お行儀よくしてないとおかあさんに言いつけるよ。そいつを下に置いて、伝票をこっちに寄こしなさい」

「伝票はありません。ハンスがグレアムさんに一杯おごりたいんですって。今日だけはおじさまにも、ね」

「そういうことをするからバーが儲からんのだ。この分は給料から差し引くとハンスに言っとけ」

そういったわけで、わたしはシルバー・フィズを――一杯でなく――二杯飲むはめになった。でも今回は、前夜と同じ破滅に向かって行進しはじめたところで、ヘンダーソン氏が、食事にすべきだと決断してくれた。わたしは三杯めのフィズが欲しかった。最初の二杯で、あのボックスにぎっしりと詰まっている途方もない金のことをくよくよしなくなり、同時に、プールサイドのフロア・ショウがますます気に入ってきた。人生の半分をかけて身につけたしつけが、わずか二十四時間で洗い流せるとは……まさに、新発見だ。

一糸だにまとわぬ女体の、何と愛らしきことか。これを

見つめるのは、決して罪深いことではない。花や仔猫を見るのと同じように、罪のない無邪気なことなのだ――もちろん、人間の女体の方が、はるかに楽しい。

だから、どうしても、もう一杯飲みたいのだ。

しかし、ヘンダーソン氏は飲ませてくれない。ボデルを呼びつけて、何やらデンマーク語で早口にしゃべっている。

立ち去った彼女は、数分後に山盛りのトレイを持って戻ってきた。スモーガスボード、熱々のミートボール、中にアイスクリームを詰めた甘いペイストリー・シェルズ（練り粉を貝の形にふっくらと焼き上げたもの）、濃いコーヒー。どれも、ボリュームたっぷりだ。

二十五分後、わたしは依然としてプールのティーンエイジャーたちを鑑賞していたが、もはや、新たなアルコールによる破局への行進はやめていた。酔いがさめ、物事の判断がはっきりとつくようになったのだ。酒では、この問題を解決できない。いや、それどころか、問題を解決するまでは、アルコールを遠ざけなければならない――わたしは強い酒の飲みかたを知らないのだから。エド伯父は正しかった。悪徳には訓練と長期実習が必要なのだ。それでなければ筋が通らぬ――よしんば、道徳の命令に縛られていなくとも、人間は美徳の支配を受けつづけるはずではないか。

わたしの道徳観がわたしを束縛しなくなったのは確かだ――さもなければ、こうして裸の女体を凝視しながら、悪魔の酒杯を手に平然と座っていられるはずがない。

わたしは、自分がまったく良心の痛みを感じていないことに気づいた。一つだけ残念なのは、悲しいかな自分は、飲みたいだけアルコールを飲めぬ体質だ……という事実を知っていることだ。

まさに、〝地獄に堕つるは容易い〟のである。

ヘンダーソン氏は立ち上がった。

「あと二時間足らずで港につきます。会社の代理人が乗船する前に数字をいささかごまかしておかなくてはならんのです。おかげで楽しく過ごさせていただきました」

「いいえ、こちらこそ！　トゥザーン・ターク（デンマーク語の〝どうもありがとう〟）！　たしかお国の言葉ではそう言うんでしたね？」

事務長はにっこりと笑い、立ち去った。わたしはそのままそこにしばらく座って考えた。入港するまで二時間、港の中で三時間――この機会をどう利用できるか？

アメリカ領事に会いにいくか。会ってなにを言う？　親愛なる領事閣下、わたしはみんなが思っているような人物ではありません。この百万ドルを発見したのはほんの偶然で――

話にならん！

誰にも内緒で、問題の百万ドルをひっ掴み、船を降りて次のパタゴニア行きの飛行船で高飛びするか？

そんなことはできない。確かにわたしの道徳観念はすでに崩れかけている――とにかく、非常に強いとは決していえないのは明らかだ――が、それでも依然として、盗みを犯すまいという気持ちは厳として存在している。盗みは悪いというだけでなく、品位を欠く行為だ。

わたしが現在こうして、かれの服を着ているというだけでもすでに充分悪いことなのだ。

〝正当に〟自分のものである三千ドルだけを持って上陸し、船の出航を見送り、その後、なんとか方法を考えて、アメリカへ帰るか？

馬鹿げた考えだ！　熱帯の監獄へぶち込まれるのがオチだろうさ。馬鹿な真似をするのはグレアムのためにもならない。今度も選択の余地はないってことだぜ、ボケ野郎。おまえは船に留まり、グレアムが姿を現わすのを待っていなければいかんのだ。本人が来なくても、無線電話かなにかで連絡があるかもしれない。船が帆を上げるまで爪でも噛んでりゃいいんだ。もしこのまま船が出たら、そのときは、神の国へ帰れることを神に感謝すればいい。グレアムのほうはグレアムで、〈モフェット提督〉号の帰りの切符を使って同じようにするだろう。ところでかれは、ハーゲンシャイマーと呼ばれて喜んでいるんだろうか？　わたしが〝グレアム〟と呼ばれるのよりは、ずっといいはずだ。自慢できる名前だよ、ハーゲンシャイマーってのは。

わたしは席を立ち、ぶらぶらと反対側の甲板を歩いて、二デッキ上の図書室に向かった。図書室の中には、クロスワードパズルを熱心にやっている女性が一人いただけで、あとは誰もいなかった。わたしもその女性も、ともに邪魔をされたくなかったので、わたしたちは良い同席者となった。司書はおらず、本棚のほとんどに鍵がかかっていたが、ひどくくたびれた百科辞典が一冊出しっぱなしになっていた――手はじめの調査資料としてはぴったりの代物だ。

二時間後、汽笛がボォーッと鳴ってわたしを驚かせた。船が埠頭へ向かう曳綱をつけたという合図だ。ついに、その時が来てしまった。わたしの頭は奇妙な歴史ともっと奇妙な考えとで一杯になり、何ひとつ理解できなかった。たとえば、この世界ではウィリアム・ジェニングズ・ブライアン（一八六〇年～一九二五年。有名なアメリカの政治家）は一度も大統領になっていない。かれに代わって一八九六年にマッキンリー（ウィリアム・マッキンリー。一八四三年～一九〇一年。アメリカの第二十五代大統領。在任一八九七年～一九〇一年）が選出され、二期つとめたあと、ルーズベルトとかいう男（シオドア・ルーズベルト。一八五八年～一九一九年。

アメリカの第二十六代大統領。在任一九〇一年〜一九〇九年）が引きついでいる。

　二十世紀の大統領の中で、わたしの知っている人物は一人もいなかった。

　われわれの国は伝統的に中立政策をとっており、一世紀以上も平和が続いているが、この〝合衆国〟は反対に何度も外国との戦争に巻きこまれている。一八九九年、一九一二〜一七年、一九三二年（日本とだ！）、一九五〇〜五二年、一九八〇〜八四年、そして今年に――もしくは、この百科辞典が発行された年に――至る。〈宮廷詩人〉には、現在戦争中だという記事はなかった。

　鍵のかかった本棚のガラス戸の後ろに、何冊か歴史の本があるのを見つけた。これから三時間後も船内に留まるとすると、アメリカへ帰る長い旅路のあいだに、船内図書室にある歴史の本をすべて読破する計画を立てなければならない。

　しかし大統領の名前や戦争の日付は早急に必要な知識ではない。それらは日常生活に関係のないことだ。わたしが大急ぎで知らなければならないのは――無知ゆえにおこる、小は無用の狼狽から大は決定的な破局にいたるさまざまなトラブルを避けるために――わたしの世界とこの世界との相違点、すなわち人びとの暮らしかた、しゃべりかた、振舞いかた、食べかた、飲みかた、遊びかた、祈りかた、愛しかたの違いだ。それを学んでいるあいだは、自分からはできるだけしゃべらず、できるかぎり多く他人の話を聴き取るよう注意しなければならない。

　わたしが以前知っていたある隣人は、歴史的な事件はたった二つしか知らなかった。一四九二年（コロンブスの新大陸発見）と、一七七六年（アメリカ独立宣言）だ。しかもその二つさえ、どっちの事件がどっちの年に起こったのか、ごちゃごちゃになる始末だった。他の分野に関しても同じくらい何も知らない男だったが、それにもかかわらず、かれは道路舗装請負業者として並々ならぬ高収入を得ていたのである。

　社会的かつ経済的生物として機能するのに、それほどたいした教養は必要あるまい……周囲の人に合わせて同じことをやっていればいいのだ（よしんばそれが〝へそに青泥を塗りこむ〟ような馬鹿げたことであっても、だ）。だが、うっかり地元の慣習をまちがえると、とんでもないことになる。

　グレアムのほうはいったいどうしているのだろう？　わたしとかれとが単に場所を入れ替わっただけだとすると（そう考える以外にないようだ）、かれのほうがわたしよりもはるかに危険な状況に置かれているのではないか……という考えが、ふと頭をかすめた。わたしはこの世界では変人に見えるかもしれない

――だが、かれの文化的背景は、グレアムをわたしの世界で深刻な問題に巻きこむ恐れがある。何気ない言葉の一つ、悪気のない行為の一つで、さらし台にかけられかねないのだ。あるいは、もっと悪いことになるかも。

しかし、かれがわたしの役割を完全にこなそうとすれば、かれにとって最悪の事態になるかもしれない――もしかれが本気でそうしようとすれば、だ。

ちょっと説明しよう。わたしは、アビゲイルと結婚して一年後の彼女の誕生日に、『じゃじゃ馬ならし』の豪華本を贈った。それがわたしの意志表明だということに、彼女はみじんも気づかなかった。彼女は自分が正しいと固く思いこんでいるので、わたしが心の中で彼女をケイト（『じゃじゃ馬ならし』に登場するおしゃべりでわがままな女）になぞらえている可能性など、考えもつかなかったのだ。もしグレアムが、彼女の夫としてのわたしの役割を演じようとすれば、かれらの関係は双方にとってもいやでも興味深いものとなるに違いない。

わたしは故意にアビゲイルを他人に押しつけるつもりはない。別にそのことで相談を受けたわけではないのだから、空々(そらぞら)しく同情の涙を流すこともあるまい。

（ところで、夫婦関係を必ずしも〝家族の義務〟とは考えていない女性とベッドを共にするのは、どんなものだろうね？）

わたしはいま、全二十巻の百科辞典を前にしている。何百万という言葉がこの世界の主要なすべての事実を伝えている――その事実こそ、わたしが切実に必要としているものだ。大急ぎでどれだけの知識がつかみ出せるだろうか？　まずどこから始める？　ギリシャ美術や、エジプト史や、地質学は必要ない――だが何が本当に必要なのか？

さて、この世界のことで一番最初に目についたものは何か？　この船そのものだ。〈機船(MV)コンゲ・クヌート〉のなめらかなラインに比べると、いかにも時代遅れなその外観だ。次に、乗船してみて、〝わたし＝グレアム〟の個室に電話のついていない事実である。乗客用エレベーターもない。そして、まるで祖父の時代に戻ったような重厚な雰囲気を漂わすさまざまな代物……。

そこで、〝船舶〟の項目を見ることにしよう――第十八巻だ。

あったぞ！　三ページにわたる写真……そのどれもが『モーヴの十年間』（アメリカの作家トーマス・ビアの著書のタイトルで、社会的・文化的に繁栄した一八九〇年代を示す）に登場するものばかりだ。〈汽船(SS)ブリタニア〉――世界最大にして最高速を誇る北大西洋航路定期船で、乗客定員は二千名だ。そして、速度はたったの十六ノット！　見るからにそんな外見をしている。

では〝運輸〟に関する一般的記述を調べてみよう――

おや、おや！　まったく驚くじゃないか。飛行船(エアシップ)のことはひと言も載っていない。だが索引を引いてみよう――飛行船、記述なし。操縦式気球、ゼロ。航空術――〝気球〟を見よ。

　ほほう、なるほど。自由気球（砂袋とガスの放出で高度を調節し、気流に乗って飛行するもの）のことは、ちゃんと載っている。モンゴルフィエ兄弟（フランスの発明家。一七八三年、熱気球を発明）やその他の大胆な創始者たち――サロモン・アンドレーの勇敢にして、かつ悲劇的な北極探検のことまでも出ている（一八九七年、スウェーデンの技師アンドレー他二名、気球による北極探検を試みたが、遭難して三名とも死亡）。しかし、ツェッペリン伯は生まれなかったか、それとも航空術に全然興味を惹かれなかったかのどちらかだ。

　おそらくツェッペリン伯は、南北戦争に参加したのち、ドイツに帰国したのだろう。そして、わたしの世界のオハイオと違って、ドイツには空中旅行のアイデアを受け入れるような雰囲気が全然なかったのだろう（ツェッペリンは観戦者として北軍に参加したのち帰国。一八九一年にドイツ陸軍を退役、以後飛行船の研究に打ち込み、一九〇〇年に硬式飛行船を発明）。そうだとすると、この世界には空中旅行がないことになる。アレックスよ、もしこの世界に住まなければならないのなら、飛行船を〝発明〟するというのはどうだ？　創始者にして大立て者となり、金(かね)と名声を手に入れるのは？

なぜ、そんなことができると思うのかね？

なぜって、このわたしが初めて飛行船に乗ったのは、わずか十二歳の時だぞ！　飛行船のことならなんだって知ってるんだ。今すぐにでもひとつ見取り図を描けるぐらい――

描けるのかね？　じゃあ、一馬力当り一ポンドを越えない軽量エンジンの設計図を描いてみろ。使用する合金を明示し、熱処理法を述べ、実際に作動させる際の作業図を示し、燃料をはっきりあげ、その入手先を明らかにし、潤滑剤の名を――

そういうことはなんとかなるさ！

そうだな。しかしおまえにそれができるのか？　たとえ、それが成功するはずだとわかっていても、だ。おまえはなぜ工業学校を中退し、聖職者になるのが神の思し召しだと決心したのか、その理由を忘れたのか？　比較宗教学、説教学（説教の目的・特質・構造・語り方などを扱う実践神学の一部門）、高等批評（聖書の各文書の資料・年代・著者・歴史的かつ思想的背景などを学問的に研究すること）、護教学（宗教の非合理性・非科学性を指摘して非難する人びとに対し、宗教は超理性ではあっても反理性ではないことを弁明するための神学）、ヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語、みんな詰め込み知識の要る学問だ……しかし、技術屋の問題には頭脳が要る。

　このわたしがそんなに馬鹿だというのか？

そもそもおまえに、雨をよける程度の頭脳があったら、

火渡りなんかやるはずがないじゃないか。

なぜ止めなかったんだ。

止める？　おまえがおれの言うことをきいたことがあるか？　言いのがれはよせよ――熱力学の最後の成績はどうだった？

わかったよ！　わたしには無理だとしてもだ――

決まってるさ。

黙っててくれないか？　成功の可能性がたしかにあるとわかっていれば、それだけで事の三分の二は成(な)ったも同じだ。わたしは研究所を開いて、本当に頭のいい若い技術者たちの努力を導くことができるだろう。かれらは頭脳を提供し、わたしは硬式飛行船の外観とその働きについての、わたしだけの記憶を提供する。これならいいだろう？

確かに、それは適切な分業だ。おまえが記憶を提供し、かれらが頭脳を提供する。そう、ひょっとしたら、うまくいくかもしれん。しかし時間がかかるし、かねもかかる。いったい、その資金はどうするつもりかね？

うむ、株でも売るか。

真空掃除機を売った夏のことを憶えているか？

待てよ……あの百万ドルがある。

いかん、いかん！

「ミスター・グレアム？」

壮大な計画の夢からさめて顔を上げると、事務長(パーサー)のオフィスからやってきた女性事務員がわたしを見つめていた。

「なにか……？」

彼女はわたしに封筒を手渡した。

「ヘンダーソン事務長(パーサー)からです、お客様。できましたらお返事を、と申しておりました」

「ありがとう」

手紙にはこう書いてあった。

親愛なるミスター・グレアム

　下のロビーに三人組の男がきて、貴方と会う約束があると主張しております。小生はかれらの身なりも喋りかたも気にいりません――この港には、あまり性質(たち)のよくない人間もいます。もしかれらにお会いになりたくないのでしたら、使いの者に、見つからなかったことにしてくれとおっしゃってください。そうすれば小生は、貴方はすでに上陸されたと、かれらに伝えます。

A・P・H

わたしは好奇心と警戒心のはざまで宙ぶらりんになり、

なかなか決心がつかず、落ち着かなかった。その三人組はわたしに会いたがっているのではなく、グレアムに会いたがっているのだ……そして、かれらがグレアムに望んでいるものがいったい何であるにせよ、わたしには、とてもその望みをかなえてやれそうもない。

なにが望みかは、ちゃんとわかってるくせに！

そう、たぶんね。しかし、たとえかれらが聖ペテロのサインした伝票を持ってきたとしても、あのばかげた百万ドルをかれらに引き渡すことはできない――どんな相手にだって、渡せない。それはきみにも分かっているはずだ。

無論、分かっているさ。おれはおまえにそれが分かってるってことを確認したかったんだ。よろしい、どうあってもグレアムのボックスの中味を、見ず知らずの三人組に渡すつもりがないのなら、なぜやつらに会うんだ？

なぜなら、わたしには知る必要があるからだ！　もう黙ってくれ。

わたしは女性事務員に言った。

「ヘンダーソン氏に、すぐそちらに行くと伝えてください。お手数かけてすみません」

「いえ、どういたしまして。あの、ミスター・グレアム……火渡りをなさるの、拝見いたしました。お見事でしたわ！」

「この馬鹿な頭がちょっと狂ってたんですよ。とにかく、ありがとう」

わたしは昇降階段の上で立ち止まり、わたしを待ち受けている三人の男の品定めをした。三人とも、脅迫はまさにはまり役といった感じだ。一人は六フィート八インチもあるばかでかいやつで、末端肥大症の手足と顎と耳をしている。もう一人はこの大男の四分の一ぐらいしかない、女みたいなタイプ。あとの一人は何の特徴もないが、狙った的(まと)ははずさないという目つきだ。腕力と、頭脳と、銃――そう考えるのは、わたしがびくびくしているせいだろうか？

利口な男なら、そっと退いて身を隠すだろう。

どうせ、わたしは利口ではない。

6

我儕(われら)くらい且(かつ)のむべし明日(あす)はしぬべければなり
　　　　イザヤ書第二二章一三節

わたしは階段を降り、三人のほうを見ないようにして、まっすぐ事務長(パーサー)のデスクに向かった。そこにいたヘンダーソン氏は、カウンターに近づいたわたしに小声で言った。
「あそこにいる、あの三人です。ご存じですか？」
「いや、知りません。かれらが何を望んでいるのか確かめてみるつもりです。すみませんが、わたしたちから目を離さずにいてもらえますか？」
「いいですとも！」
わたしは向きを変え、問題の愛すべき三人組の前を歩いて通り過ぎようとした。
小利口そうな若いのが、鋭く言った。
「グレアム！　止まれ！　どこへ行く？」
わたしは歩きつづけながら、ぴしゃりと言いかえした。
「黙れ、馬鹿！　ことをぶちこわしたいのか？」
筋肉男がわたしの行くてに立ちふさがり、まるで高いビルのように上から見おろした。わたしはいかにもプロの犯罪者らしく見せかけて、唇の端だけを動かして言った。
「騒ぎたてても無駄だ。このチンピラどもを船から降ろせ！　おまえとおれとで話をつけよう」
「もちろん、話はつけるさ。ここで(イシー)！　今、この場でな」
「底無しの阿呆だな、おまえは」と、わたしは小声で答え、神経質そうに視線を上げて左右に動かした。「ここでは駄目だ。人目につく。一緒に来い。だが〝マットとジェフ(でかちびコンビ)〟（バッド・フィッシャーのマンガの主人公）は波止場に待たせておけ」
「ノン！」
「おい、いいか！　おれの言うことを注意して聞けよ」と、わたしは囁いた。「あのけだもの野郎どもに、船を降りてタラップの下で待つように言うんだ。それから、おれたち二人は露天甲板へ移動する。あそこなら誰にも盗み聞きされずに話ができるからな。そうしなければ、なんにもしないぞ！——そしておれはナンバー・ワンに、取引きをぶちこわしたのはおまえだ、と報告してやる。わかったか？　さあ、さっさとしろ！　さもなくば、帰って取引きは中止だとやつらに言うがいい」

かれはしばらくためらったが、やがてフランス語で早口に喋りだした。わたしにはとてもついてゆけなかった。なんせわたしのフランス語は"わたしの叔母のペン"程度なのだから。ゴリラ男は迷っているようだったが、殺し屋タイプの男は肩をすくめてタラップの扉に向かって歩きだした。わたしはチビ野郎に言った。

「来い！ 時間を無駄にするな。この船はもうすぐ出航するんだぞ！」

そして船尾に向かい、後からついてくるかどうか見もせずに進んだ。かれがわたしを見失いたくなければ、ついてこざるをえないように、わたしはさっさと歩を進めた。かれとわたしとの身長差は、わたしとあのゴリラとの差と同じくらいある。かれはわたしに遅れまいと小走りでついてきた。

わたしはどんどん進みつづけ、船楼から露天甲板に出て、屋外バーとテーブルの横を通り過ぎ、プールに近づいた。

予想したように、そこには誰もいなかった。船が停泊中だからだ。いつもどおり〈停泊中は使用禁止〉の札が出ている。ほんの形ばかり、一本のロープが張り巡らされていたが、プールの水は一杯入ったままだ。わたしはロープをまたぎ越し、プールを背にして立った。かれもついてきた。わたしは手を上げた。

「そこで止まれ」

かれは止まった。

「ここなら話ができる」と、わたしは言った。「説明してもらおうか。ちゃんと話したほうがおまえの身のためだぜ！ いったいどういうつもりなんだ、あんなでかい野郎を連れてきてわざわざ人目を引くとは？ しかもデンマーク船だぞ！ ボスはさぞおまえのことで腹を立ててるだろうな。おまえは何という名だ」

「おれの名前なんかどうだっていい。包みはどこにある」

「なんの包みだ」

かれは早口でまくしたてはじめた。わたしはさえぎった。

「くだらんたわごとを聞く耳は持たん。この船はもうすぐ出航する。あと数分しかないから、何が望みかはっきり言え。おれが納得したら、渡してやる。大きな顔でいばり散らしていると、ボスのところへ帰って失敗しましたと報告するはめになるぞ。さあ、言ってみろ！ 何が望みだ？」

「包みをだせ！」

わたしは溜息をついた。

「さっきから同じことばっかり言っていやがる。それはもう聞いた。どんな種類の包みだ？ なにが入っている？」

かれはためらった。「金だ」

「おもしろい。いくらだ？」

今度は倍ほど長くためらっている。やがて開きかけた相手の口を再びさえぎって、わたしは言った。

「いくらか知らないのなら、おまえにビール代の数フランを渡して追い返すぞ。それでいいのか？　二フランでどうだ？」

この男みたいに痩せているやつは、こんなに血圧を上げるべきではない。やつはやっとのことで言った。

「アメリカのドルで百万だ」

わたしは面と向かって笑いとばしてやった。

「なんでおれがそんな大金を持っていると思うのかね？もし持っていたとしても、なんでおまえに渡さなきゃならんのだ？　おまえが正当な受取り人だと、どうしておれにわかる？」

「あんた、気でも狂ったのか。おれが誰だか知ってるだろう」

「証明してみろ。おまえの目つきはおかしいし、声も変だ。替え玉じゃないのか」

「替え玉？」

「変装した偽者だ。かたりだよ」

かれは怒って言い返した——フランス語だろう、たぶん。敬意のこもった言葉でないことは確かだ。わたしは記憶を掘り起こし、昨夜あるご婦人の使った言葉——ご主人をして〝おまえは心配のしすぎだよ〟と言わしめた言葉——を、注意深く感情をこめて繰り返した。それはその場にふさわしい表現ではなかったが、わたしは相手が怒ってくれさえすればよかったのだ。

どうやらうまくいった。やつは手を上げた。わたしはその手首を掴み、わざとよろめいて、相手の身体を自分に引きつけながら、背中からプールに落ちた。落ちながらわたしは叫んだ。

「助けてくれ！」

わたしたちの身体は水音高く水中に没した。わたしは相手をしっかりと掴み、自分だけ浮き上がりながら相手を再び下へ押しやった。

「助けてくれ！　わたしを溺れさせようとしているんだ！」

わたしたちは再び水中に沈んで、お互いに取っ組みあった。わたしは頭が水面に出るたびに助けを求めて叫んだ。ちょうど誰かが助けにきたとき、わたしは力尽きて手を放したところだった。

わたしはぐったりとなっていたが、口移しの人工呼吸を始められたとたんに、鼻を鳴らし、目を開いた。「ここはどこだ？」

誰かが言った。「気がついたぞ。もう大丈夫だ」
わたしは周囲を見回した。プールサイドで仰向けに寝かされている。どうやら、救助のプロがわたしの身体を力まかせに引き上げたらしい。左腕がはずれかけたような感じだ。しかしそれ以外は、なんともない。
「あいつはどこにいった？　わたしを突き落とした男は」
「逃げました」
わたしは声の主のほうに頭を向けた。わが友、ヘンダーソン事務長だ。
「逃げましたか」
事件はそれで終わった。わたしを呼び出したネズミ面の男は、わたしが水から引き上げられている間に這い上がり、一目散に船から走り去っていた。わたしが息を吹き返したころには、小悪党とその用心棒どもはとっくに消えてしまっていたのだ。
ヘンダーソン氏は、船医が来るまでわたしを寝かせたまま、身動きも禁じた。やがて医師がわたしに聴診器を当て、大丈夫だと宣言した。わたしはちょっとした嘘を二つばかりつき、真実に近いことをいくらか話し、適当に言いのがれた。すでにタラップは上げられていた。ほどなく、大きな汽笛が鳴った。船が埠頭を離れたのだ。
実は、わたしは学生時代に水球をやっていたのだ。でも今は、そんなことを他人に打ち明ける必要はあるまい。
その後は実に楽しい日々が続いた。活火山の中腹でブドウが熟れているような、あやうい楽しさではあったけれども。
同じテーブルの仲間たちとも、なんとか知り合いになった（知り合いになりなおした？）。それにどうやら誰もわたしが異邦人であることに気づいていないようだ。他人の名前を知る最善の方法は、ただ待つこと。そうすれば、そのうちに誰かが必ずほかの誰かの名を呼ぶものだ——それを覚えておいて、自分も使えばよい。みんな、わたしには愛想よくしてくれた。記録によるとわたしは最初からずっとこの船に乗っているので、〝下っぱ〟ではないわけだが、それだけではなく、火渡りをしたおかげで英雄とまではいかなくとも、有名人にはなっていたのである。
わたしはプールを使用しなかった。グレアムが泳げたかどうか分からなかったし、もしかれが泳げたとしても、〝救助〟されたばかりなのに〝救助された男〟らしからぬ泳ぎっぷりを人前で見せるのはまずいだろう……と思ったのだ。それに、わたしの以前の生活からは想像もつかなかったほどショッキングな、周囲の人びとの裸体の露出ぶりに、だんだん慣れてはきたものの（そして、それを鑑賞す

る余裕さえできてはきたものの)、自分も一緒に裸になって、平然としているほどの自信はない。

あの小悪党とその用心棒どもの件については、わたしにできることは何もないので、もう考えないことにした。

わたしが何者であり、なぜここにいるのかという全体的な謎についても、同じことが言える――どうせなにもできないのだから、くよくよ心配しないことだ。つくづく考えてみると、今のわたしが置かれた窮地は、この世に生を享けた人間のすべてに共通しているようにも思えてくる。われわれは自分が何者であるのか、どこから来たのか、なぜここにいるのか知らない。わたしのジレンマはただ単に、他の人間たちよりもちょっぴり新鮮なだけであって、たいした違いはないのだ。

わたしが神学校で教わった、ひとつの(ひょっとすると唯一の)教訓は、太古からある人生の謎には努めて平静に対面し、それが解決できないからといって心をわずらわせたりするな、ということだ。正直な司祭や牧師は、宗教の慰めを否定する。そのかわりにかれらは、哲学という厳しい報酬と共に生きなければならない。わたしは決して形而上学者ではないが、解決できない問題のことは心配するな……ということだけは、しっかりと学んでいるつもりだ。

わたしはほとんどの時間を図書室かデッキチェアで読書して過ごした。日々この世界のことを学ぶにつれて、ますますこの世界の住み心地が良くなった。幸福な黄金の日々が、少年時代の夢のように流れていった。

そして毎日、マルガレーテがいた。

わたしはまるで初恋にアタックしている少年のような気分だった。

それは奇妙なロマンスだった。わたしたちは恋の言葉を口に出せなかった。いや、わたしは言い出せず、彼女は言い出さなかったのだ。毎日、彼女はわたしの(他の乗客たちと共有の)召使いだった……そしてわたしの〝母親〟だった(共有の? そうではないと思うが……本当のところは分からない)。二人の仲は親しかったが、深い仲ではなかった。

毎日、蝶ネクタイを結んでもらった〝支払い〟をする短い間、彼女は素晴らしく素敵で最高に情熱的な恋人(ダーリン)だった。だが、そのときだけだ。

そのほかのときは、彼女にとってわたしは、あくまでも〝お客様〟と呼んだ――暖かく、友好的ではあったが、恋人どうしという感じではない。彼女はおしゃべりが好きで、ドアを開けて立ったまま、船内の噂話をよくわたしに教えてくれた。しかし彼女の態度はつねに完璧な召使いだった。いや、訂正

――〝船客の身のまわりの世話を任務とする完璧な乗務員〟である。毎日わたしは少しずつ彼女のことを知った。彼女には欠点が見あたらなかった。

　わたしの一日は、彼女と顔を合わせた時点から始まる――たいてい、朝食を食べにいく途中の廊下で出会うか、あるいは開いたドアから、客室の掃除をしている彼女の姿を見つける……「おはよう、マルガレーテ」……「おはようございます、グレアムさん」……ただそれだけだ。だがそれがすむまで、その日のわたしの太陽は昇らない。

　その後の一日中も、ちょくちょく彼女と顔をあわせるのだが、なんといっても最高の瞬間は、ネクタイを結んでもらったあとの黄金の儀式である。

　ディナーのあとにも、ちょっと彼女に会う。わたしは毎晩、ディナーがすむとすぐ自分の部屋に戻り、夜の行動――ラウンジ・ショウ、コンサート、ゲームなどを楽しむことで、ときには再び図書室に戻るだけのときもある――にそなえて、数分間休憩して元気回復をはかっていた。その時刻にマルガレーテは、Cデッキ通廊右舷前方のどこかで、ベッドをひろげたり、浴室を掃除したり――つまり、船客の個室の夜の仕度をしている。わたしはもう一度「やあ」と声をかけ、自分の部屋で（彼女がわたしの部屋の仕度を済ませていようといまいと）待った。すると彼女はすぐにやってくる。わたしのベッドをひろげるために、あるいはまた、ただこう質問するだけのために、だ――

「今夜はほかにお入用なものはございませんか、お客様」

　そしてわたしは、にっこり笑ってこう答える。

「なにもないよ、マルガレーテ。お疲れさま」

　そうすると彼女は、おやすみなさい、よく眠ってくださいね、と言い、それでわたしの一日が終わる。自室へ引っこむ前のわたしが何をしていたとしても、だ。

　もちろんわたしは、毎日（!）、こう答えたくてたまらなかったのだ――

「きまってるじゃないか……きみもよく知ってるくせに!」

　だがそう言うことはできなかった。第一に、わたしは既婚者だ。そう、わたしの妻が（あるいは、わたしのほうが）別の世界のどこかへ行ってしまったことは事実だ。しかし、この世にある限り、神聖な婚姻を解消するすべはない。

　まず、問題の1――あの娘の情事（これが情事だとすればの話だが）の相手はグレアムであり、わたしはかれのふりをしているだけである。〝おやすみ〟のキスは拒絶できない（わたしは天使のごとく完璧な男ではない！）が、愛する彼女に対してはフェアでありたいと思うと、キス以上

のことはできない。
ついで、問題の2――名誉を重んじる男なら、恋の相手に提供すべきものは結婚以外にはないはずだ……ところが今のわたしは、法的にも道徳的にも、それを提供できる立場にはいない。
そういうわけで、黄金の日々はほろ苦かった。毎日着実に一日ずつ、マルガレーテとの別れのときが近づいてくる。そのあと再び彼女に会えるとは、到底思えない。
彼女を失うことがわたしにとってどれほど心の痛手になるか、それを彼女に告げることさえできないのだ。
いや、わたしの彼女への愛は必ずしも、別れるときに彼女を悲しませたくないと思うほど無私の愛であったわけではない。未熟な若者のように自己中心的なさもしい料簡で、わたしは、自分が彼女を恋しがるように、彼女にもわたしを心の底から恋しがってほしかった。子供っぽい、青い恋だ――それにきまっている！　自分が、〃イエス・キリストを愛するあまり、生身の人間に対する愛着心をまったく持たぬ女の愛〃しか知らないのだ……という事実を、わたしは言いわけがましくあの娘に押しつけようとしている。
お祈りをしすぎる女と結婚なんかするもんじゃない。
パペーテを発って十日が過ぎ、メキシコがそろそろ空の彼方に姿をあらわそうかというころ、この成行きまかせの牧歌に終わりが来た。このところ数日間、なんとなくマルガレーテが日ごとに遠ざかってゆくように思えてならない。だがそのことで彼女に文句を言うことはできなかった。はっきりそうと指摘できるわけではないし、また明らかに、わたしからは文句のつけようがなかったからだ。しかしその夜、彼女がわたしのネクタイを結んだとき、事態は一気にクライマックスに達した。
いつものように、わたしはにっこり笑って彼女にお礼を述べ、キスをした。
そしてキスを止め、彼女を腕の中に抱いたまま言った。
「どうしたんだ？　きみはもっとキスが上手なくせに。ぼくの息が臭いのかい？」
彼女は冷静に言った。
「グレアムさん、こんなことはもうやめたほうがいいと思いますわ」
「いつまでも〃グレアムさん〃なんだね。マルガレーテ、ぼくが何をしたというんだ」
「あなたはなんにもなさってないわ！」
「それなら――おや、きみ、泣いているね！」
「ごめんなさい。泣いたりするつもりじゃなかったんだけど」

わたしはハンカチを取り出して彼女の涙を拭き、優しく言った。
「きみを傷つける気は全然なかったんだ。ぼくのどこがいけなかったのか教えておくれ。なおせることなら、なおすから」
「ご自分でお気づきになってらっしゃらないのなら、お客様、あたしにはどう説明していいのかわかりませんわ」
「説明してみてくれないか？　たのむよ！」（女というものは生まれつき周期的に感情が乱れるものだが、これもそういった乱れの一つなのだろうか？）
「あの……グレアムさん、航海が終わるまでしか続けられないってことは、あたしも承知していました――本当です、あたしだってそれ以上のことは期待していませんでした。あなたにとってはたいしたことじゃなかったのかもしれませんが、あたしにとっては、とっても大事なことなんです。何のことわりもなく、あっさりやめておしまいになるなんて、あたし、考えてもみませんでした。まだ日にちはあるのに」
「マルガレーテ……ぼくには何のことだか分からない」
「おわかりのくせに！」
「でも分からないんだ」
「絶対に分かってらっしゃるはずだわ。もう十一日たつのよ。毎晩、あたしはあなたにたずね、そして毎晩、ことわられました。グレアムさん、もう二度とあたしに〝またあとでおいで〟と言ってはくださらないの？」
「ああ、そういうことか！　実はね、マルガレーテ……」
「はい、お客様」
「ぼくは〝グレアムさん〟じゃない」
「ええ？」
「ぼくの名前は〝ハーゲンシャイマー〟だ。生まれて初めてきみを見てから、今日でちょうど十一日目になる。きみには悪いと思う。とっても悪いと思うけど、これが真実なんだ」

7

今ねがわくは我に向え
我は汝らの面の前に偽わらず

ヨブ記第六章二八節

マルガレーテは暖かな慰めであると同時に、教養ある大人でもあった。彼女は目を見張って息をのみもせず、かといって、わたしに説教しようともしなかったし、「まさか！」とも、「信じられないわ！」とも言わなかった。初めて打ち明けたわたしの言葉を、彼女はしごく冷静に受けとめ、しばらく考えた後で、静かに口を開いた。

「どういうことなのか、あたしには理解できないわ」

「ぼくにだって理解できないよ……ぼくが火渡りをした時に、何かが起こった。世界が変わってしまった。この船は――」と、わたしはそばの隔壁をトントンと叩いた。「――ぼくが乗っていた船じゃない。みんなぼくのことを〝グレアム〟と呼んでいる……ぼくには自分の名がアレクサンダー・ハーゲンシャイマーだとわかっているのに。だが変わったのは、ぼくとこの船だけじゃない。世界全体が変わった。歴史が違い、国々も違う。ここには飛行船がない」

「アレック、飛行船って？」

「ああ、空に浮かぶものだ。気球のように。確かに、気球の一種ではある。でも、すごいスピードで飛行する――百ノット以上だ」

彼女は真面目な顔で考えこんだ。「さぞかし怖いでしょうね――そんなものに乗ったら」

「ちっとも怖くない。旅行手段としては最高だよ。ぼくも飛行船でここまで飛んできたんだ。北アメリカ航空の〈ツェッペリン伯〉号でね。でもこの世界には飛行船がない。その点でぼくは最終的に確信したんだ。ここは本当に違う世界であって――決して誰かの複雑ないたずらではないってね。ぼくの知っていた世界では、航空運送が世界経済上、重要な役割を果たしている。もしそれがなくなったら、何もかも変わってしまう。わかるかい――きみ、ぼくを信じてくれる？」

マルガレーテは、ゆっくり、注意深く答えた。

「あなたが、あなたの目に映った真実を話していらっしゃることは信じます――あたしの目に映る真実とは全然違う

けど」
「わかっている、そこが問題なんだ。ぼくは――いや待てよ、急がないと、きみは夕食を食べそこなうんじゃないか？」
「そんなことはどうだっていいわ」
「いや、よくない。ぼくがくだらん誤ちをおかして、きみの心を傷つけたせいで、きみが食事を食べそこなうなんてことが、あってはならないんだ。それにもしぼくが姿を見せなければ、インガが誰かを使いにやって、ぼくが病気でもしたのか、眠っているのか、いったいどうしているのか探らせるだろう。前に、同席の連中に対してそうするのを見たことがあるんだ。マルガレーテ……ぼくの大事なきみ！……ぼくは前からきみに話したかった。話せる時をずっと待っていた。きみに聞いてもらう必要があった。今こそ、ぼくはどうしてもきみに話さなければならない。でもこれは五分間の立ち話で済むようなことじゃないんだ。今夜のベッドの準備を済ませたあとで、ぼくの話を聞く時間を作ってくれるかい？」
「アレック、あなたのためなら、あたし、いつだってどれだけでも時間を作るわ」
「よし、それじゃきみは食事に行きたまえ。ぼくも下に降りて、せめて顔だけでも出してくる――インガにつきまとわれないようにね――きみがベッドの仕度を済ませたあと、ここで会おう。それでいいね？」
彼女は考え込む表情を見せた。「ええ、いいわ。アレック――もう一度キスしてくださる？」
これで彼女がわたしを信じていること――あるいは、信じたがっていること――がわかった。わたしは心配を止めた。ディナーをちゃんと食べさえした。大急ぎではあったけれども。

部屋に戻ってみると、彼女はわたしを待ち受けていて、わたしが入ると同時に立ち上がった。わたしは彼女の両腕を取り、鼻の頭に軽くキスをし、肘を引っぱってわたしのベッドにかけさせた。わたしのほうは、部屋に一つしかない椅子にかけた。
「ねえ、きみ、ぼくの気が狂っていると思うかい？」
「アレック……あたし、どう考え（ティンク）ていいか分からないの」
（そう、彼女は〝ティンク〟と言った。ほんのときたま、感情のストレスが高まったときなど、マルガレーテはシータの発音ができなくなる。それを除けば、彼女の英語のアクセントは、錆びついたノコギリのように耳障りなわたしの田舎訛よりもはるかに美しい）
「そうだろうね」と、わたしは同意した。「ぼくにとって

も同じことだ。見方は二つしかない。ぼくが火渡りをした時に、世界全体を変えてしまうような、何か信じられないようなことが起こったのか、それともぼくの頭がすっかり狂ってしまったのか、そのどちらかだ。ぼくは何日もかけて、さまざまな事実を調べた……まちがいなく、世界が変わってしまっている。飛行船だけじゃない。ドイツ皇帝(カイザー)ヴィルヘルム四世は消え、代わりに〝シュミット〟という名のいんちきな大統領がいる。何もかもが、そんなふうに変わっちまっているんだ」

「ヘル・シュミットのことを〝いんちきな〟なんて言ってはいけないわ。れっきとした、しかも立派な、ドイツの大統領なんだから」

「そこが重要なんだよ、きみ(ディア)。ぼくから見れば、どんなドイツの大統領もいんちきなんだ。なぜならドイツは——ぼくの世界では——無制限の王権を握る皇帝を戴く、西洋諸国中で最後の君主国の一つだからだ。ロシア皇帝(ツァーリ)でさえ、これほどの権力を持っていない」

「その点はあたしも強調しなくちゃいけないようね、アレック。ドイツ皇帝(カイザー)もロシア皇帝(ツァーリ)も存在しないのよ。モスクワ大公は立憲君主で、今ではもうスラブ諸国に対して宗主権を主張してもいないわ」

「マルガレーテ、ぼくたちは二人とも同じことを言ってるんだ。ぼくの育った世界は消えてしまった。ぼくはこれから、違う世界について学ばなければならない。いや、必ずしも完全に違う世界ってわけでもないな。地理は変わっていないようだし、歴史も全部違うというわけじゃない。二十世紀初頭まで、この両世界は同じだったようだ。違いが生じたのは、たぶん一八九〇年代だろう。およそ百年ほど前、何か奇妙なことが起こって、世界が二つに分かれた……そして、およそ十二日前、何か同じくらい奇妙なことがぼくの身に起こって、ぼくはこの世界へはじき飛ばされた」と言って、わたしは彼女にほほえみかけた。「でもぼくは、残念だとは思っていない。なぜだかわかるかい? この世界にはきみがいるからさ」

「ありがとう。あなたがここにいることは、あたしにとっても大事なことだわ」

「それならぼくの言ったことを信じておくれ。ぼくだって無理やりそれを信じざるを得ない立場に追いこまれたんだ。自分でも、まったくひどい目に会ったと思っているよ——もうあれこれ心配するのはやめちゃったくらいだ。ただ一つだけ気にかかることがある。アレック・グレアムがどうなったんだろうってことさ。やはり、ぼくの世界で、ぼくの代わりをつとめているのだろうか。そうでないとすれば、いったいどうなっちまったのか」

彼女はすぐには答えず、やがて、どう考えても返答になっているとは思えぬ言葉を口にした。
「アレック、ズボンをおろしてくれない？」
「いま何て言ったのかね、マルガレーテ？」
「お願い。あたしは冗談を言っているのでもないし、あなたを誘惑しようとしてるわけでもないわ。どうしても見たいものがあるの。お願いだからズボンを下げて」
「いったいなんで——ああ、いいとも」
わたしは口を閉じ、言われたとおりにした——夜会服を着ているので、簡単なことではない。まず上着を脱がねばならず、次は飾帯……それを剝き取って初めて、ズボン吊りが肩からはずれる。
それから、不承不承、前のボタンをはずしはじめた（この遅れた世界にないものの一つがファスナーだ。なくなってみると初めて、ファスナーのありがたみがわかる）。
わたしは大きく息を吸って、ズボンを数インチ下げた。
「これでいいかい？」
「もうちょっと、お願い——それから、後ろを向いてくださいな」
わたしは彼女の言ったとおりにした。彼女の両手が優しく、遠慮勝ちに、わたしの右の尻にさわるのを感じる。同じ手が、わたしのシャツの端を持ち上げ、パンツの右側を引き降ろしている。
ややあって、彼女はシャツとパンツの両方を元に戻した。
「もういいわ。ありがとう」
わたしはシャツの裾をズボンの中へ突っこみ、前ボタンをはめ、ズボン吊りを再び肩にかけて、飾帯に手を伸ばした。
彼女が言った。「ちょっと待って、アレック」
「え？　もう済んだんじゃないのかい」
「ええ。でも、そんなフォーマルな格好に戻る必要はないでしょう。普段着のズボンを出してきてあげるわ。それにシャツも。それとも、またラウンジへお戻りになる？」
「いや。きみがここにいてくれるなら、行かないよ」
「あたしはここにいるわ。まだ、たくさん、話し合うことがあるでしょ」
彼女は手早く普段着のズボンとスポーツシャツを取り出し、ベッドの上に並べ、「ちょっと失礼します」と言って、バスルームへ姿を消した。
彼女が本当にバスルームを使う必要に迫られたのかどうかは定かでない。でもどうやら彼女は、わたしが狭苦しいバスルームの中よりも、居室の中のほうがずっと楽に着替えができると思い、気をきかせてくれたようだ。
着替えると気分が楽になった。飾帯と固く糊づけしたシ

ャツは、まさに拘束衣である。やがてバスルームから出てきたマルガレーテは、わたしの脱いだ衣服を手早くハンガーに掛けた。シャツとカラーだけを残し、カフスとカラーボタンをはずしてから、洗たく物袋に入れる。もしアビゲイルが、こんな甲斐甲斐しいマルガレーテの世話のしかたを見たら、いったいどう思うだろう？　アビゲイルはわたしを甘やかすのはよくないと信じていた――そして実際、甘やかさなかった。

「さっきのはどういうことなんだ、マルガレーテ？」

「あたしの目で確かめたいことがあったのよ、アレック、あなたはアレック・グレアムがどうなったのかと不思議がっていらしたけど、あたしにはその答えがわかったわ」

「へえ？」

「かれはここにいます。あなたがかれなのよ」

わたしはようやく口を開いた。

「そのようなことが……どうして、ぼくの尻の数インチ四方分を見ただけでわかるんだい？　いったい全体、きみは何を見つけたんだ、マルガレーテ？　行方不明の遺産相続人を識別する赤いあざでもあったのかね？」

「いいえ、アレック。あなたの〝南十字星〟よ」

「ぼくの何だって？」

「よく聞いてちょうだい、アレック。あたしは、あれがあなたの記憶を取り戻す手掛りになると思ったの。あたしがあれに気づいたのは、あたしたちが初めて――」と、彼女はちょっと口ごもり、改めて、まっすぐわたしの眼を見つめた。「――愛を交わした夜のことだったわ。あなたは明りを点け、いま何時か見ようとして腹ばいになったの。そのときあたし、あなたの右のお尻のほくろに気づいたんです。あたしがその並びかたを説明して、二人で冗談を言ったわ。あなたはこうおっしゃったの。〝これはぼくの南十字星だ。これでどっちのお尻が上か分かるんだよ〟って」

マルガレーテはかすかに顔を赤らめたが、わたしの目をしっかりと見つめつづけた。

「それで、あたしもあなたに、あたしの身体のほくろを見せたじゃないの、アレック。あなたがあのときのことを思い出せないのは残念だけど、絶対に本当の話よ――信じてちょうだい。あのころのあたしたち、もう、そんなことを言ってふざけ合えるほど、仲良くなっていたのよ。だから、あたしが特別に図々しくて無作法だったわけじゃないわ」

「マルガレーテ、きみが図々しかったとか無作法だったとか、ぼくはちっとも思っていやしないよ。でもきみは、偶然並んだほくろの形を、重要視しすぎているんじゃないかい。ほくろなんか、身体中にいくらでもあるさ。そのうち

のいくつかが、たまたま自分では見にくい場所にあって、十字形に並んでいたとしても別に驚くほどのことじゃない。同じようなほくろがグレアムにあったところで、ちっとも不思議じゃないさ」

「〝同じような〟じゃないわ。完全に同じものよ」

「そうだ――確かめるのなら、もっと良い方法があるぞ。あそこの机の中にぼくの財布がある。正しくは、グレアムの財布だ。運転免許証が入っている。かれのだ。かれの指紋がついている。まだ照合していない。なぜなら、かれはグレアムであり、ぼくはハーゲンシャイマーであって、二人が同一人物であるはずはない……と、ぼくは少しも疑わなかったからだ。でも照合することはできる。ねえ、きみ、あれを取っておいで。自分で照合してみればいいよ。ぼくがバスルームの鏡に指紋をつけるから、両方を比べてごらん。そうすればきみにも分かるだろう」

「アレック、あたしには分かっているわ。信じていないのはあなたのほうよ。あなたがなさったら」

「そりゃそうだけど……」マルガレーテの逆提案はもっともだった。結局、わたしが折れた。

わたしはグレアムの運転免許証を取り出し、親指の腹で鼻の頭をこすり、充分に鼻の頭の脂をつけた親指を、バスルームの鏡に押しつけた。しかし鏡面に付いた紋様が、どうもはっきり見えない。そこで、手のひらに少しばかりタルカム・パウダーを振り出し、鏡に吹きつけてみた。

かえって悪い。刑事たちの使う粉末は、ひげそりの後で使うタルカム・パウダーよりも、粒子が小さいに違いない。それとも、わたしが使いかたを知らないせいかもしれぬ。パウダーをつけずにもう一つ指紋をつけ、両方の指紋と、自分の右手の親指と、免許証に登録してある指紋とを見つめ、免許証が本当にわたしの右親指の指紋を示しているかどうか調べた。ぴったり同じだ。

「マルガレーテ！　ちょっと見にきてくれないか？」

彼女は、バスルームにいるわたしのそばへやってきた。

「これを見てくれ」と、わたしは言った。「この四つを――ぼくの親指と三つの指紋を比べてごらん。四つともパターンは基本的にアーチ型だ――しかし世界中の人間の半数がこの型の指紋を持っている。なんなら、きみの親指の指紋もアーチ型だってことに大金を賭けてもいいよ。正直な話、このカードの指紋が本当にこの親指の指紋かどうか、きみにわかるかい？　それとも左手の親指かもしれない。なにかの手違いだということもあるから」

「わからないわ、アレック。あたし、そんな技術なんか持ってないもん」

「そうか――しかし専門家だってこの明るさでは無理だろ

う。明日の朝まで延期するしかないな。甲板の上での明るい日光が必要だ。それに、表面のツルツルした白い紙と、スタンプ台と、拡大鏡が要る……ヘンダーソン氏のところに三つともあるはずだ。明日でいいね？」
「ええ、いいわ。このテストはあたしのためではなくってよ、アレック。あたしはとっくに確信してるんですもの。あなたの〝南十字星〟を見たんですもの。あなたの記憶がおかしくなっても、あなたがあなたであることに変わりはないわ……そのうちに、あなたの記憶も取り戻せるでしょう」
「そんな簡単なことじゃないんだ。ぼくは自分がグレアムでないことを知っていいるんだから。マルガレーテ、かれがどんな仕事をしていたのか、何か知らないか？　でなきゃ、かれがこの旅をしている理由とか？」
「あたしも〝かれ〟と言わなくちゃいけないの？　あたしはあなたのお仕事を尋ねたことはないわ、アレック。あなたも全然おっしゃらなかったし」
「そうだ、きみも〝かれ〟と言うべきだと思う。少くとも、指紋照合をすませるまではね。かれは結婚していたのか？」
「それも、かれは言わなかったし、あたしは訊きませんでした」
「しかしきみは、きみがこのぼくだと信じているその男と〝愛を交わした〟――つまり一緒に寝た――とほのめかしたぜ。いや、はっきりそう言ったじゃないか」
「アレック、あたしを非難しているの？」
「いや、ちがう、ちがう。ちがうよ！」
（しかしそうだった。彼女にもそれはわかっているはずだ）
「きみが誰と寝るかは、きみの問題だ。しかし、ぼくはきみに打ち明けなければならない。ぼくは結婚している」
彼女は表情をこわばらせた。「アレック、あたしは何も結婚を目的にあなたをたらしこもうとしたわけじゃないのよ」
「グレアムだろ、きみの言ってるのは。このぼくではない」
「それなら、グレアムでもいいわ。とにかく、あたしはアレック・グレアムをワナにかけたわけじゃないの。あたしたちが愛しあったのは、お互いにそうするのが幸せだったからよ。二人とも結婚のことは口に出さなかったわ」
「ごめんよ、こんなことを言いだして悪かった！　なんとなくそのことが謎を解く鍵になりそうな気がしたもんでね。ただそれだけのことさ。ねえマルガレーテ、ぼくはね、たとえほんの少しでもきみを傷つけるくらいなら、むしろ自

分の腕を引きちぎるか、目玉をくり抜いた方がましだと思っているんだよ——信じてくれるかい？」
「ありがとう、アレック。信じるわ」
「イエス・キリストの教えは、〝行け、二度と罪（シン）を重ねるな〟（キリストが姦通した女性に言った言葉。この場合の〝罪〟は違法行為ではなく、宗教的・道徳的に間違った行ないを指す）ということに尽きる。まさかきみ、ぼくがキリストよりも厳しく人を裁こうとしているなんて、思ってやしないだろうね？　ぼくはきみに裁きを下（くだ）そうとしたんじゃない、グレアムのことが知りたかっただけだ。特に、かれの職業を、だ。ええと、きみは、かれが何か違法なことに手を染めているんじゃないかと、疑ってみたことはないかい？」
　彼女はごく微（かす）かなほほえみを浮かべた。
「もしそういうことを疑ったとしても、かれに心を捧げているあたしが、そんな疑問を口にするわけないじゃないの。あなたがかれと同じ人間じゃないと主張なさっても、あたしの心は絶対に変わりません」
「一本とられた（トゥシェ）！」
　わたしは羊のように従順な微笑をうかべた。彼女にあのボックスのことを話したほうがいいだろうか？　そう、話すべきだ。彼女に率直に打ち明け、彼女がわたしと同じくらい率直になっても決して〝グレアム＝わたし〟を裏切ることにはならない、と彼女を説得しなければならない。
「マルガレーテ、ぼくは無意味に尋ねたのでもないし、また、いらぬ詮索をしているんでもない。実は、もっと大変な厄介事を抱えこんでいるんだよ。きみのアドバイスが欲しい」
　今度は彼女がびっくりする番だった。
「アレック……あたし、他の人にアドバイスしたことなんてないのよ。無理だわ」
「ぼくの厄介事を打ち明けてもかまわないね？　アドバイスしてくれなくてもいいんだ……ひょっとしたら、きみにはこの謎解きができるかもしれない」
　わたしは、例のまったくいまいましい百万ドルのことを、手短かに説明した。
「マルガレーテ、まっとうな人間が百万ドルを現金で持ち歩く合法的な理由が、なにか考えられるかい？　旅行者用（トラベラーズ）小切手（チェック）でも、銀行の信用状でも、為替手形でもいい、持参人払いで無記名の債券という手もある——それなのに現金（キャッシュ）とは？　しかも、こんな大金をだよ！　火渡りのときにぼくの身に起こったことが物理的に信じられないのと同じくらい、こいつは心理的に信じられないことだ。きみにはほかの見方ができるかい？　どんなまっとうな理由があれば、船旅にこんな大金を持って出るんだろう？」
「あたしには判断つかないわ」

「判断してくれと言ってるわけじゃないよ。きみの想像力を拡げて、百万ドルを現金で持ち運ぶような理由を列挙してほしいんだ。何か思いつかないかね？　どんなこじつけでもいいから、何か理由を……」

「理由なんかいくらでもあるでしょ」

「ひとつだけでもいい。言ってみてくれ」

わたしは待った。マルガレーテは黙りこくっている。わたしは溜息をついて言った。

「ぼくには一つも思いつかない。犯罪的な理由なら山ほど考えつくんだがね。だって、いわゆる〝やばい金〟は大抵いつだって現金で動くものだからね。このことが完全に常識化しているからこそ、どの国の警察当局も、多額の現金が銀行か政府以外の手で動かされれば、特別な証明のない限り、それを犯罪に関係したものと見なすんだよ。あるいは――もっといやな話だが――偽札だな。要するに今のぼくがきみに求めるアドバイスはね、マルガレーテ――この現金をどうすべきかってことさ。これはぼくの金じゃない。ゆえに、船の外へ持ち出すわけにはいかない。同じ理由で、置き捨てにするわけにもいかない。海へ投げ棄てるのも駄目だ。いったい、ぼくにできることは何だ？」

この質問の言葉は決して大げさではない。グレアムのやらかしたことのおかげで、わたしが刑務所にぶち込まれるのはごめんだ。わたしはどうしても、そうならないですむ解答を見つけなければならない。今までのところ、わたしの考えついた唯一の解答は、船内で最高の権威を持つ船長のところへ行ってわたしの問題を打ち明け、この始末におえない百万ドルを保管してくれと頼むことだった。

馬鹿馬鹿しい。そんなことをしてみても、ろくな結果にはなるまい。船長がわたしを信じるかどうか、また船長自身が正直な人間であるかないかで、結果は微妙に違ってくると思うが――それに、おそらくまだほかにも事を左右する要素があると思うが――いずれにしても、船長に打ち明ければ、刑務所か精神病院に閉じ込められるはめにおちいるのは必定だ。どう見ても、それ以外の結末は考えられない。

状況を打開する最も簡単な方法は、この厄介な代物を海の中へ投げ込むことだ！

だがそうすることには道徳的な抵抗感がある。わたしはすでに十戒の中のいくつかを破り、いくつかを曲げてはいるものの、金銭上のごまかしをしたためしは一度だってない。確かに最近、わたしの道徳心は、自分で思っていたほど強くはないようだ。それは認めるが、しかし、たとえ船外投棄するためであっても、百万ドルを盗む気にはなれなかった。

いや、実はもっと強い抵抗があったのだ。百万ドルを手にして、それをむざむざと破棄するような男が、いったいどこにいると思う？

あなたならできるかもしれない。わたしは駄目だ。せっぱつまれば、わたしはこの現金を船長に引き渡すかもしれない。だが棄てる気にはどうしてもなれないのだ。

どこかの岸にこっそり置いてくるか？　アレックスよ、あのボックスを船から持ち出したら、百万ドルのために自尊心を棄てることになるんだぞ。おまえは百万ドルのため、それだけで盗んだことになるのか？　一千万ドルのためなら？　五ドルでも？

「どう、マルガレーテ？」

「解決方法ははっきりしていると思うけど」

「ほう？」

「あなたは問題を間違った順序で解こうとなさってるのよ。まず、記憶を取り戻さなくては。そうしたら、そのお金を持ち運んでいる理由もわかるでしょう。きっと、何か罪のない、理にかなった目的あってのことだ……ということがわかるんじゃないかしら」彼女はにっこりと笑った。「あたしは、あなたご自身よりもあなたのことをよく知っています。あなたは良いひとよ、アレック。犯罪者なんかじゃないわ」

彼女に対する腹立ちと、彼女がわたしについて考えていることに対するプライドとが入り混じって、わたしは複雑な気分になった――が、腹立ちのほうがプライドよりも強い。

「もう頭にきたぞ。いいかい、ぼくは記憶を失くしたんじゃない。ぼくはアレック・グレアムなんかじゃない。アレクサンダー・ハーゲンシャイマーだ。生まれてからずっとこの名前だったし、記憶ははっきりしている。ぼくが小学二年生のときの先生の名前を教えてやろうか？　ミス・アンドリュースだ。それとも、十二歳のとき生まれて初めて飛行船に乗ることになった事情を話そうか？　ぼくは本当に別世界から来たんだ。その世界では、飛行船がすべての大洋を定期飛行している。いやそれどころか北極の上まで飛んでいるし、ドイツは君主国で、北アメリカ連邦は一世紀にわたって平和と繁栄を謳歌している。その世界の連中から見れば、いまぼくたちの乗っているこの船なんか、ひどく時代遅れで、設備が貧弱で、スピードも遅すぎる――誰もこんな船に乗ろうとはしないだろうな。ぼくがほしいのは助力であって、精神分析じゃない。もしきみが、ぼくの気が狂っていると思うのなら、はっきりとそう言ってくれ……そしたらもうこんな話はやめる」

「あなたを怒らせるつもりじゃなかったのよ」

「ああ、きみ！　きみがぼくを怒らせたわけじゃない。ぼくはただ、ぼくの心配と苛立ちの一部をきみの肩の上に降ろして、ひと休みしただけさ――でも、そんなことはすべきじゃなかったんだ。ぼくが悪かった。しかしぼくの問題は現実であって、ぼくの記憶が間違っていると言われたって解決するものじゃない。たとえぼくの記憶のせいだったとしても、それをことさら口に出して言ったところで、何の解決にもなりはしない。問題はやはりそのまま残るんだ。でもきみに怒鳴ったりして悪かった。マルガレーテ、きみだけが頼りなんだ……この奇妙な、時には恐ろしい世界の中でひとりぼっちのぼくは。悪かったと思っている」

　彼女はするりとわたしのベッドに腰を下ろした。

「あなたはなんにも悪くないわ、あたしの大事なアレック。だけど、今夜はもう、これ以上議論を続けてもなにもならないわ。明日――明日、明るい陽の光の下で、あの指紋を注意して調べましょう。そうすればあなたにもわかるわ。きっと、たちどころに、あなたの記憶に効果があらわれるはずよ」

「でなきゃ、きみの女性最高の頑固さに、たちどころに効果があらわれるだろうね」

　彼女は微笑した。「すぐにわかることよ。明日ね。あたしはもう寝なきゃ。あたしたちの話は堂々めぐりしているもの。そのあげくに腹を立てあっている。あたし、こんなこと嫌いなのよ、アレック。なんのためにもならないもの」

　彼女は向きを変え、ドアに向かった。おやすみのキスをしようともせずに。

「マルガレーテ！」

「なあに、アレック」

「ここに戻ってきてキスしておくれ」

「あたしが、アレック？　あなた、奥さんがいらっしゃるんでしょ」

「そんな――ねえ、いいじゃないか。たかがキスだよ。姦通の罪にはならん」

　彼女は悲しげに首を振った。

「ひと口にキスと言ってもいろいろあるのよ、アレック。あたしが、心から楽しくあなたとの仲を続けられないかぎり、今までのようなキスはできないわ。あたしにとってのそれは楽しく罪のないことだけれど……あなたにとっては、姦通になるのよ。キリストが、姦通罪でつかまった女に言った言葉を、引き合いに出したのはあなたじゃないの。あたしは罪(シン)を犯してはいないわ……そして、あなたに罪(シン)を犯させたくもないの」

　彼女はもう一度背を向け、出ていこうとした。

「マルガレーテ！」

「なんなの、アレック？」

「きみはぼくに言ったね。あとで来てくれと頼む気はもうないのかと。ぼくは今、きみに頼む。今夜だ。あとでもう一度来てくれないか？」

「罪よ、アレック。あなたにとって、それは罪になるのよ……そして、わたしにとっても罪になるわ。あなたがそれをどう思っているか知ってしまったから」

「〝罪〟か。ぼくには何が罪なのかよくわからなくなった。ぼくにわかっているのは、きみが必要だということだ……きみもぼくを必要としていると思う」

「おやすみなさい、アレック」彼女は足早に去っていった。

　それからだいぶ時間が経ったあとで、歯をみがいて顔を洗ったわたしは、もう一度シャワーを浴びるのもよかろうと思った。生ぬるくしたシャワーを浴びると、少しばかり神経が鎮まったような気がした。だがベッドに入っても眠れなかった。自分では考えごとをしていたつもりだが、おそらく、あれは考えごととは呼べぬだろう。

　生まれてから今までにおかした大きなあやまちの数かずが、次から次へと思い出されてきた。払いのけても払いのけても、頭の中にはっきりと浮かび上がってくるのだ。そして、今夜のわたしはなんて馬鹿な、無器用な、間の抜けた、無知な阿呆だったのだろう……まったく馬鹿なことをして、わたしの知っている女性の中で最高に素晴らしい女性をあんなに傷つけ、侮辱してしまうなんて……。

　そんなことを、くよくよと思い悩んでいたのだ。

　この自己嫌悪の発作は重く、わたしは、なすすべもなく、自分を鞭打ちつづけて眠れぬ夜を過ごしていた。この調子では、このまま数日間、天井を見つめてすごすことになりそうだ。

　かなりの時間が経ち、夜半をとうに過ぎたころ、ドアの鍵を開ける音がわたしをはっとさせた。手さぐりでベッドの明りを点けると、マルガレーテがローブをはらりと床に落として、わたしのベッドに入ろうとしている。わたしは明りを消した。

　マルガレーテは暖かく、滑らかで、身を震わせ、すすり泣いた。わたしはそんな彼女を優しく抱き、気分を落ち着かせようとした。彼女は何も言わず、わたしも何も言わなかった。さっきは言葉が多すぎた。それもほとんど全部が、わたしの言葉だ。今はただ、抱きしめて愛撫し、言葉のない会話をする時である。

　彼女の震えがようやくおさまり、息づかいが平常に戻った。やがて彼女は、溜息を漏らし、このうえなく小さな声

で言った。
「あたし、あなたから離れていられなかったの」
「マルガレーテ、愛しているよ」
「ああ！　あたしもよ、胸が痛くなるほど」

あの衝突の時は二人とも眠っていたのだと思う。わたしは眠るつもりはなかったのだが、なにしろ、火渡り以来初めてほっとし、緊張が緩んでいたので、ついうとうとしてしまったのだ。

いきなり、船が信じられないほど激しく揺れ、わたしとマルガレーテはベッドからほうり出されそうになった。次いで、鼓膜が破れそうなほど大きな、ギーギーときしる音、バリバリと砕ける音。枕元の明りをつけてみると——ベッドの下のところで、船体外鈑が内側に曲がっている。

船内警報が鳴り響き、そうでなくても耳を聾する轟音に追い討ちをかけた。鋼鉄の船腹がへし曲がり、引き裂かれ、何か冷たくて汚れた白いものが、どっと穴から突き出てきた。同時に明りが消えた。

わたしはマルガレーテを引きずりながら、なんとかベッドから転がり出た。船がぐぐーっと左へ傾き、わたしたちは床(ゆか)のすみのほうへ……中央隔壁のほうへ……ずるずると滑り落ちた。ガツンとぶつかったのは、ドアの取手だ。わたしは左腕にマルガレーテをかかえたまま、右手で取手をひっ掴み、ぶら下がった。船は右側に揺れ戻し、風と水がすさまじい勢いで穴から流れこんでくる——音が聞こえ、肌で感じたが、見えはしなかった。船体は元に戻ったが、やがて再び右に傾き——ドアの取手から手が離れた。

次に起こったことは、心の中で再現してみるしかない——漆黒の闇、そしてすさまじい音。わたしたちは落ちていった——わたしは絶対に彼女から手を放さなかった——そして次の瞬間、わたしたちは水の中にいた。

どうやら、船が右側へ揺れ戻したときに、わたしたちは穴から投げ出されたらしい。しかしそれは、あとで組み立てた推測にすぎない。わたしが実際に知っていることは、ただ、わたしたちが一緒に落ち、水にはまり、かなり深く沈んだということだけだ。

わたしたちは浮かび上がった。わたしは、正しい水難救助法のやりかたで、マルガレーテを左腕の下にかかえ、空気を大きく呑み込むと同時に、周囲を素早く見回し、再び海中に潜った。船はわたしたちの右横にあって動いている。風は冷たく、風音はごうごうとうるさい。なにか高く、黒々としたものが船のそばにあった。だが、わたしが怖かったのは船だ——というより、船の推進器、スクリューだ。C一〇九号室は船首の近くに位置していたが——しかし一

刻も早く船から充分に離れないと、マルガレーテもわたしもスクリューに巻き込まれて、ハンバーガーになってしまう。わたしは彼女をかかえたまま、船から離れようと懸命に手で水をかき、力をこめて足で水を蹴った――船の危険からやっと逃れたと思って喜んだそのとき……頭をバンと何かにひどくぶっつけ、わたしは意識を失った。

8

すなわちヨナを取りて海に投入たり
しかして海のあるることやみぬ

ヨナ書第一章一五節

わたしはいい気分だった。目を覚ましたくなかった。だが、頭の中が少しズキズキと痛むので、いやいやながら目を覚ました。頭をふって痛みを追い払おうとしたら、鼻の中一杯に水が入ってきた。わたしは鼻息で水を押し出した。

「アレック？」近くで彼女の声がした。

わたしは血のように生暖かい水の中に仰向けになっていた。味で海水だとわかった。あたりはどこもかしこも真っ暗である――まるで子宮に還ったようだ。死のこちら側（死後の世界に対して"この世"を指す）で、これほど子宮らしいところはないんじゃないかと思うほど。それとも、これは死なのか？

「マルガレーテ？」

「ああ！　よかった、アレック、ほっとしたわ。あなた、長いこと眠っていたのよ。ご気分はどう？」

わたしは周囲を見回し、あれこれ考え合わせ、身体をあちこち動かしてみて、自分がマルガレーテの四肢の上で仰向けに浮いていることを悟った。彼女も、わたしの頭を両手で持って、仰向けに浮いている。赤十字の標準的水難救助法の姿勢だ。彼女はゆっくりとカエル足を使っていた。進むためというよりは、むしろ、浮いているためにだ。

「大丈夫だと思うよ。きみのほうは？」

「文句なしよ、大事なあなた！　だってもう、あなたがこうして目を覚ましてくださったんですもの」

「何が起こったんだ？」

「あなたは山に頭をぶつけたの」

「山？」

「氷の山。氷山よ」

（氷山だって？　わたしは何が起こったのかを思い出そうとした）

「どの氷山？」

「船を難破させたあの氷山よ」

記憶がいくらか戻ってきたが、ばらばらで全体像がつかめない。船を木の葉のように揺すった大衝突……それから二人で海に落ち……必死で船から離れ……頭をぶつけた。

「マルガレーテ、ここは熱帯だよ。ハワイと同じくらい南だ。なんでこんなところに氷山があるんだ？」

「あたしにはわからないわ、アレック」

「しかし――」

〝そんなことはあり得ない〟と言いかけたが、なぜか馬鹿馬鹿しくなってやめた。

「ここの海水は氷山が浮かぶには暖かすぎるぜ。あのね、きみ、そんなに一所懸命に泳がなくてもいいよ。海の中ならぼくは、アイボリー石鹸みたいに、楽に浮かんでいられるんだから」

「わかったわ。でも、あたし、やっぱりあなたをしっかりつかんでいるわ。さっき、もう少しであなたを流してしまうところだったの。こんなに真っ暗なんだもの、またあんなことになったら大変だわ。あたしたちが落ちたとき、水がとっても冷たかったのよ。いまはぬるくなっているけど。つまり、あたしたちは、もう、氷山の近くにはいないということよ」

「ぼくにしっかり摑まってくれ、いいかい、ぼくだってきみを失いたくはないんだ」

そうだ、海中に落ちたとき、水は冷たかった。思い出したぞ。あるいは、ベッドの中の素敵な暖かい抱擁に較べれば、冷たかった。風も冷たかった。

「氷山はどうなった？」
「アレック、あたしにもわからないのよ。あたしたちは一緒に海に落ちたの。あなたがあたしをつかんで、船から離れてくれたおかげで、二人とも助かったのよ。それは間違いないわ。でもあたりは十二月の闇夜のように暗く、風がとても強くて、何も見えず、あなたは氷に頭をぶつけてしまったの。
そのときよ、あたしがあなたを見失いそうになったのは。あなたは気絶して、あたしから手を放したわ。あたしは沈んで、水をガブリと飲んだの。浮かび上がって水を吐いたとき、あなたの姿が見当らなかった。
アレック、あたし、生まれてから今まで、あんなに怖かったことはないわ。あなたはどこにもいなかった、全然見えなかったの。あたしがあらゆる方向に手を伸ばしたのに、あなたの身体がどこにもないの。あなたの名を呼んでも、あなたは返事をしてくれないし」
「ごめんよ」
「あたしが取り乱したのがいけなかったのよ。あなたが溺れたと思ったの。いえ、あなたが溺れかけているのに、あたしは救えずにいるのだって思ったのよ。だけど、手をばたばたさせていたら、偶然、あなたの身体にあたったの。あたしはあなたをギュッとつかんで、ああ、これで大丈夫だと思ったわ――でも、あなたは口をきいてくれない。それでまた、ぞっとしたんだけど、調べてみたら、あなたの心臓は力強く規則的に打っていたので、これなら何も心配することはないと思って、顔が水の上に出るようにあなたを仰向けにして浮かんでたわけ。ずいぶん時間がたってから、やっとあなたは目を覚ましてくれたのよ――これでもう、本当に何も心配はなくなったわ」
「きみは取り乱してなんかいなかったんだよ。もしきみが取り乱していれば、ぼくは今ごろ死んでいるはずだ。きみのやったようなことができる人間はあんまりいないだろうな」
「あら、そう珍しいことでもないわ。あたし、コペンハーゲンの北の海岸で、二夏（ふたなつ）のあいだ、救助隊員をやってたの――毎週金曜日には訓練指導もしてたわ。男の子も女の子も、大勢指導したのよ」
「緊急の時にも冷静さを失わず、真っ暗闇の中であんなことができるなんて、訓練だけで身につくことじゃないよ。立派なものだ。ところで船はどうなった？　そして氷山は？」
「アレック、もう一度言うけど、あたしにもわからないのよ。あたしがあなたを見つけ、無事だと確認して、引っぱって泳ぎだした時には――あたりを見回す余裕ができた時

には、もう、こんなふうだったわ。何にもない、ただの真っ暗闇」
「船は沈んだんだろうか？　あの衝突はすごかったぜ！　爆発しなかったのか？　何も聞こえなかった？」
「爆発する音は聞こえなかったわ。あなたもきっと聞いたと思うけど、ただ風の音と衝突する音がしただけよ。それと、あたしたちが海に落ちたあとで、いくつか叫び声が聞こえたわ。船が沈んだとしても、あたしは目撃しなかったわ。でも――アレック、じつは三十分ほど前から、あたしは頭を、枕だかクッションだかマットレスだかに、押しつけているの。これは船が沈んだということかしら？　難波船の漂流物なのかしら？」
「そうとは限らないだろうが、いささか心配だな。しかしなぜきみは、それに頭を押しつけているんだい？」
「あたしたちに必要なものかもしれないからよ。もしこれが、デッキのクッションか、プールサイドの日光浴用マットだったら、パンヤが詰めてあるから、救命具がわりに使えるわ」
「そこだよ、ぼくが言いたいのは。もしそれが水に浮くクッションだったら、なんできみはそれに頭をつけているんだ？　どうして、水から上がってその上に乗らないんだ？」
「どうしてって、あなたから手を放さないと、そうできないからよ」
「ああ、マルガレーテ、ぼくたちが無事に救助されたら、どうかぼくを一発蹴とばしておくれ。今やっと、ぼくもはっきりと目がさめたよ。さあ、きみの発見したものを一緒に調べよう。手さぐりでね」
「いいわ。でも手を放すのはいやよ。あなたが見えないんですもの」
「ねえきみ、これでもぼくだって、絶対にきみを見失うまいと一所懸命なんだぜ。ようし、こうしよう。きみは片手でぼくを摑み、あと片方の手を後ろにのばして、そのクッションだか何だかをしっかり握るんだ。ぼくは引っくり返って、その枕みたいなものを握っているきみの手の先まで、きみの身体を伝ってゆく。それから二人で正体を見――いや、さわって調べて、使いみちを決めよう」
それは、単なる枕ではなく、ベンチのクッションでもなかった――触った感じでは――大きな日光浴用マットらしい。幅は少くとも六フィート、長さはそれより心もち長い――充分、二人が乗れる大きさだ。仲良し同士なら、三人だって大丈夫だろう。まるで救命ボートを見つけたようなものだ！　いやそれ以上だ――この浮きマットにはマルガ

レーテがついている。わたしは、神学校で秘かに流行(はや)っていた、不敬な詩を思い出していた。

〃一瓶の葡萄酒(ワイン)、一塊のパン、そして貴女(きみ)が――〃

積み上げた石炭の中に入ったように真っ暗な夜中に、ミミズみたいにぐにゃぐにゃしたマットの上に乗るのは、単に難しいというだけではなく、不可能に近い難事である。わたしたちはその不可能を次のようなやりかたで克服した。まずわたしがそのマットを両手でしっかりと摑む。そうしている間に、マルガレーテがわたしのからだの上に乗り、ゆっくりとすべるようにしてマットに乗り移る。それからわたしが、彼女の手を借りながら、じわじわと這い上がる。

だがそこで、わたしは片方の肘に体重をかけすぎ、傾いたマットから滑り落ちてしまった。一度は方向が分からなくなったが、マルガレーテの声を頼りに泳ぎ進み、幸にマットにぶつかることができた。そこでもう一度、注意深くそろそろとマットに乗りなおす。

マットのスペースと浮力を最大限に使う最も実用的な方法は、二人並んで仰向けに寝て、われわれを支えているマットの上にできる限り広く手足を伸ばし、レオナルド・ダ・ヴィンチのスケッチのように、大の字になることだとわかった。

わたしは言った。「大丈夫かい、ハニー？」

「文句なしよ！」

「何か要(い)るものがある？」

「ううん、何も要(い)らない。リラックスして、いい気分よ――あなたのそばだもの」

「ぼくもだ、だけどさ、もし何でも欲しいものが手に入るとしたら、きみは今なにが欲しい？」

「そうね……ホット・ファッジ・サンデー（アイスクリームの上に、溶けた熱いキャンデーをかけたもの）」

わたしはそのことをよく考えてみた。

「いや、チョコレート・サンデーだ。マシュマロ・シロップをかけて、てっぺんにチェリーをのせたやつ。それからコーヒーを一杯」

「チョコレートを一杯よ。でもわたしのぶんはホット・ファッジにして。これ、アメリカで覚えた味なの。あたしたちデンマーク人も、アイスクリームにはいろんな工夫をするけど、氷のように冷たい食べ物の上に熱いソースをかけるなんて、考えつきもしなかったわ。いいこと？　ホット・ファッジ・サンデーよ。できたらダブルで、ね」

「わかった。ダブルをおごるよ、きみのお好みならね。ぼくはどうせ釣り上げられた魚さ――きみは命の恩人なんだ」

彼女は内側の手でわたしを軽く叩いた。

「アレック。あなたって面白いひとね――あたし、ほんとに幸せ。ねえ、あたしたち、生きて助かると思う？」
「わからないな。人生最高の皮肉は、誰も人生からは生きて逃れられないということだ。しかしこれだけは約束するよ。ぼくはきみにホット・ファッジ・サンデーを食べさせるためにベストを尽くそう」

　わたしたちは明るくなってから目を覚ました。そう、わたしは眠っていたのだ。マルガレーテも眠っていた。わたしは彼女よりも少し先に目を覚まし、彼女の軽いいびきに耳を傾けながら、彼女が目を開けるまで黙って待っていた。自分では眠れるとは思っていなかったのだが、しかし（今となっては）別に驚いてはいない――申し分のないベッドに申し分のない静けさ、温度も申し分ないうえに、わたしたちは二人ともすっかりくたびれきっていた……それに、心配しがいのあるような心配事は何ひとつなかった。なにしろ、夜が明けるまでは、何をしようにも、できることは何ひとつ、まるっきり何ひとつなかったのだから。
　わたしはこんなことを考えながら眠りに落ちたらしい。〝そうだ、マルガレーテの言ったとおりだ。選ぶのなら、ホット・ファッジ・サンデーのほうが、チョコレート・マシュマロ・サンデーよりいい……〟夢の中にそのとおりのサンデーが出てきたのを覚えている。その悪夢に似た夢の中で、わたしはサンデーにスプーンを突っこみ、山盛りにすくいとった……しかし、口許まで運んだスプーンの中は空っぽだった。それで目が覚めたのだと思う。
　彼女はわたしのほうへ顔を向けた。ほほえんだ彼女は十六才の少女のようで、神々しいほど美しかった（〝――牝(め)鹿(じか)の双子(ふたご)なる二(ふたつ)の小鹿(こじか)のごとし　わが佳耦(とも)よ　なんじはことごとくうるわしくしてすこしのきずもなし〟）。
「おはよう、美人さん」
　彼女はクスクスと笑った。「おはよう、魅惑の王子さま。よく眠れた？」
「実際の話、マルガレーテ、ここ一月(ひとつき)、こんなによく眠れたのは初めてだよ。おかしいね。いまほしいものは、ベッドでとる朝食だけさ」
「わかりました、お客様、今すぐお持ちしますわ！」
「やれやれ。食べ物の話なんかするんじゃなかったな。ぼくはキスで我慢するよ。海へ落っこちずにキスできると思う？」
「ええ。でも用心してね。顔だけこっちに向けて……寝返りは打たないでね」
　それは、いつものマルガレーテがしてくれる最高級スペシャル・キスではなく、むしろ、形だけのくちづけだった。

わたしたちは二人とも、この間に合わせの救命いかだの心もとない安定性を乱さぬよう、精一杯注意していた。だが海に投げ込まれる心配よりももっと重要なあることを、わたしたちは気にしていた——少くとも、わたしのほうはそうだった。

わたしは、一緒に心配できるうちにその話を切り出すことに決め、口を開いた。

「マルガレーテ、食堂のすぐ外に掛けてあった地図によると、マサトランあたりのメキシコ海岸が、ぼくたちのちょうど東側に来ているはずだ。船が沈んだのは何時だろう？あの船が沈没したとしての話だがね。衝突があったのは何時だったかな？」

「知らないわ」

「ぼくもだ。真夜中を過ぎていたことは確かだが。〈コンゲ・クヌート〉は八時に港へ着く予定だった。だから、海岸線はぼくたちの東、百マイル以上のところにあるはずだ。いや、ひょっとすると、ほんのすぐそばまで来ているかもしれない。この曇り空が晴れたら、向こうに山並みが見えるかもしれないよ。衝突が起きたのは昨夜だから、今日はたぶんそうなるはずだ。ねえマルガレーテ、きみは遠泳ができるかい？　もし山並みが見えたら、向こうまで泳いでみる気はある？」

彼女はなかなか答えなかった。

「アレック、もしあなたがそうしたいのなら、そうしましょう」

「ぼくは、そんなことを訊いたんじゃないぜ」

「確かにそうね。つまり、海の水が暖かければ、あたしはいくらでも必要なだけ泳げるってこと。ここより水温の低い、大ベルト海峡（デンマークのシェラン島とフューン島の間。幅十六キロ）を泳いで渡ったこともあるのよ。でも、アレック、大ベルト海峡には鮫がいないけど、ここにはいるわ。あたし見たのよ」

わたしは溜息を漏らした。

「きみからその話を持ち出してくれたんで、ほっとしたぜ。ぼくはわざとこの話を避けていたんだ。ハニー、ぼくたちはここでこのままじっとしているべきだと思う。やつらの注意を引きつけちゃいけない。ぼくは朝食を抜いてもかまわない——鮫の朝食になる気もないしね」

「人はそう早く飢え死にするものではないわ」

「飢え死にはしないかもね。もし、自分の好きなように選べるなら、きみはどれを選ぶ？　餓死か？　それとも陽に灼かれて死ぬか？　鮫か？　渇き死にか？　これが救命ボートの中で、しかもぼくが今までに読んだ『ロビンソン・クルーソー物語』の中なら、必ずなにか主人公の役に立つものがあるんだが、ぼくにはつまようじ一本ない。いや違

った、ぼくにはきみがいる。それで確率が変わるな。マルガレーテ、ぼくたちはどうすべきだと、きみは思う？」
「あたしたちは必ず救助されると思うわ」
わたしもそう思っていた。しかし、ある理由があって、そのことをマルガレーテと論じたくなかった。
「きみがそう言うのを聞くのは嬉しいけど、なんできみはそう思うのかい？」
「アレック、あなたはこれまでにマサトランへ行ったことはある？」
「ないよ」
「あそこは大きな漁港よ。漁業も趣味の釣りも盛んなの。夜が明けると小舟が何百隻も港を出るわ。なかでも一番大きくて速いものは、何キロも沖へ出るのよ。待っていればかれらがあたしたちを見つけてくれるわ」
「〝くれるかもしれない〟だろ？　外洋は広いよ。しかしきみの言うのはもっともだ。陸へ向かって泳ぐのは自殺行為だ。ここで、このままじっとしているのが最良の方策だな」
「かれらは、きっと、あたしたちを捜しているわよ、アレック」
「かれらが？　なぜ？」
「もし〈コンゲ・クヌート〉が沈没していなければ、船長には、あたしたちが、いつ、どのあたりで消えたか分かっているでしょうから、港に着いたら――ちょうど今ごろよ――昼間の捜索を依頼してくれるでしょう。もし船が沈没していれば、生存者を求めてこのあたり一帯が捜索されるはずよ」
「いちおう論理的だな」（わたしは別の考えを持っていた。全然論理的でないやつを）
「あたしたちにとって当面の問題は発見されるまで生きのびることだわ。鮫と喉の渇きと陽に灼かれるのをできるかぎり避けなくっちゃ――一番大事なことはじっとしていること、最後まで絶対に動かないことね。ただ、太陽が出たらときどきひっくり返ったほうがいいと思うわ。陽灼けを散らすためにね」
「そして空が曇るよう祈ろう。そうだな、そういうことだ。それにたぶん、口もきかないほうがいいだろうな。喉があんまり渇かないようにさ――どう？」
彼女は長い間黙っていた。いまの提案をさっそく実行に移したのかと思ったほどだった。やがて彼女は言った。
「愛しいあなた、ひょっとしたら、あたしたちは助からないかもしれないわ」
「うん、わかってる」
「もし死ぬのなら、あたしはあなたの声を聞きながら死に

たいわ。ほんの少しばかり長く生きのびるために無駄な努力をして、そのために、あたしがあなたに、〃愛しているわ〃ってことを言えなくなるなんて――そんなのはいやよ。だって本当に愛しているんですもの！」

「わかったよ、スイートハート。わかったよ」

そう決めたにもかかわらず、わたしたちはほとんどしゃべらなかった。わたしにとっては、彼女の手に触れているだけで充分だった。彼女のほうも、明らかにその様子である。

長い時間が経って――おそらく三時間ぐらいだと思う――マルガレーテの喘ぐ声が聞こえた。

「どうした？」

「アレック！　あれを見て！」

彼女は指さした。わたしは見た。

今度はわたしが喘ぐ番だったのだろうが、わたしはなんとかそれをおさえた。空高く、十字形をしたものが飛んでいる。滑空する鳥にどことなく似ているが、はるかに大きく、明らかに人工物だ。空を飛ぶ機械――？

わたしは飛行機械（フライング・マシン）は不可能だと知っていた。工業学校でサイモン・ニューカム教授（一八三五〜一九〇九。アメリカの天文学者）の有名な数学的証明を学んだのだ。それは、ラングリー教授（一八三四〜一九〇六。アメリカの天文・物理学者。航空工学の先駆者）とそのグループの〃人間を乗せて運ぶ重航空機（エアロダイン）（自重が、排除する空気の重量より大きい航空機の総称）を作ろうという努力は徒労である〃という証明だ。その根拠は、その種の装置で人間が乗れるほど大型のものは、離陸を可能にするに足る大きさの熱エネルギー機関を決して運べないことが、スケール理論により明らかだという事実にある――まして、乗客を乗せられるはずがない。

つまり科学が、それは愚行であると決めつけたわけで、それにより、公金をそんな雲をつかむような話につぎこむことがストップされた。研究開発費は、しかるべき対象である飛行船（エアシップ）につぎこまれ、多大なる成功をおさめたのである。

しかしながら、過去数日間でわたしは〃不可能〃という概念を別の角度から見るようになっていた。本物の飛行機械（フライング・マシン）がわたしたちの空に現われたのを見ても、わたしは仰天するほど驚きはしなかった。

それがわたしたちの頭上を通り過ぎ、水平線に向かって飛び去るまで、マルガレーテは息を詰めていたようだ。わたしは息をしはじめ、しいて平静に呼吸するように努めた――それは素晴らしく美しいものだった。銀色で滑らかで速度がはやい。大きさはわからなかったが、脇に並んだ黒い点々が窓だとすると、途方もなく大きなものだ。

推進力が何なのかは、見当がつかなかった。
「アレック……あれが飛行船なの？」
「いや。少くとも、ぼくが以前きみに話した飛行船ではない。これは〝飛行機械〟とでも呼べばいいのかな。ぼくに言えることはそれだけだ。こんなものは、ぼくも今まで見たことがない。でもいま、あることがはっきりと言える——とても重要なことが」
「何なの？」
「ぼくたちは死にはしない……それに、船がなぜ沈んだか、やっとわかった」
「それはなぜ、アレック？」
「ぼくに指紋照合をさせないためだ」

9

なんじら我が飢えしときに食わせ
渇きしときに飲ませ
旅人なりし時に宿らせたればなり
マタイ伝福音書第二五章三五節

「もう少し正確に言いなおすと、ぼくにグレアムの運転免許証にあった指紋と自分の指紋とを照合させないために、氷山が存在し、衝突が起こったのだ。船は沈没しなかったかもしれない。それは計画に必ずしも必要なことではなかっただろうから」
マルガレーテは何も言わなかった。
そこでわたしは優しく言いたした。「いいから、言ってごらん。考えてるとおりに言っても、ぼくは怒りゃしないから。ぼくは狂ってる。偏執狂だ」
「アレック、そんなこと言ってないわ。あたし、そんなこ

とちっとも考えてないし、そう考えたくもないわ」
「ああ、確かにきみはそんなことを言わなかった。しかし今回の異常は〝記憶の欠落〟で説明のつくことじゃないぜ。もし、ぼくときみとが同じものを見たのなら、そういうことになる。きみは何を見た？」
「空を飛ぶなにか不思議なものを見たわ。それに音も聞こえたわ。あなたの話では、あれは飛行機械(フライング・マシン)だったってことね」
「うん、ぼくは確かに、あれをそう呼ぶべきだと思っている――しかしぼくが何と言おうと、きみはあれを……そうだな、〝ガンパーサッグル〟とでも呼べばいいさ。なにやら目新しい、不思議なものだ。この〝ガンパーサッグル〟とは何か？　描写してみたまえ」
「なにか空の中を動くもの。向こうのほうから飛んできて、あたしたちのほとんど真上を通りすぎて、あっちに消えたの」（彼女はわたしが北だと確信している方向を指さした）「形は十文字というか、十字架みたいな形で、十字の横棒にあたる部分にはこぶのようなものがついていたわ。確か四つあったと思うけど。いちばん前の端(はし)にはクジラのような目があって、後ろの端もクジラのような平たいひれになっていたの。翼のあるクジラ――そんな感じだったわ、アレック。空飛ぶクジラよ！」
「生き物だと思った？」
「さあ、わからないわ。そうじゃないと思うけど。どう考えたらいいのか、見当もつかないわ」
「ぼくはあれが生き物だとは思わない。あれは機械だと思っている。空飛ぶ機械だ。翼をつけたボートだ。しかし、機械にしろクジラにしろ、どっちにしてもだ、きみはあんなものを今までに見たことがあるかい？」
「アレック、あんな奇妙なものは見たことないわ。自分の眼が信じられないくらいよ」
「その気持ちはわかる。しかし、きみが先にあれを見つけて、ぼくに指さして示した――だから、ぼくがきみをトリックにかけて、あれを見たと思いこませたわけじゃない」
「あなたはそんなことをする人じゃないわ」
「そうとも、しないさ。だが、あれを先に見たのがきみで良かったよ、ぼくの大事なきみ。それはつまり、あれが現実のものだということだからね――ぼくの熱にうかされた頭から生まれた夢の産物じゃない。あれはきみの慣れ親しんだ世界から来たものでもない……それに、あれがぼくの話した飛行船(エアシップ)の一種でないことは断言できる。あれはぼくの育った世界から来たものでもない。すなわち、われわれは現在、第三の世界にいるというわけだ」わたしは溜息をついた。「最初のときは、二千トン級の遠洋汽船を見てや

っと、自分が違う世界にいることがわかった。今回は、ただぼくの世界に存在しないものをちらりと見ただけで、やつらがまたやりやがったな……とわかる。やつらはぼくが気絶しているときに世界を転移させたのだ——とにかく、ぼくはそう思っている。断定はできないが、かれらがそうしたのはぼくに指紋照合をさせないためだと思う。偏執病か。世界全体が陰謀をしかけているという妄想か。だがこれは妄想じゃない」

　わたしは彼女の眼を見つめた。「どう思う？」

「アレック……もしかしたら、あれはあたしたち二人の想像の産物じゃないのかしら？　ひょっとして、幻覚じゃない？　あたしもあなたも、大変な体験をしたんですもの——あなたは頭を打ったし、あたしも氷山とぶつかった時に頭を打ってるかもしれないわ」

「マルガレーテ、二人一緒に同じ幻覚を見るはずはないよ。もし、きみが目を覚まして、ぼくが消えているのを発見したら、すべてきみの幻覚だったということになるかもしれない。でもぼくは消えていない。ぼくは、ちゃんと、ここに存在している。それにきみ、氷山のことも考えに入れなくちゃいけない。こんなに南洋なのに氷山があるなんて——偏執病ですめば話は簡単だがね。しかしこの陰謀はぼくに向けられたものだ。きみはただ、運悪く巻きぞえをくっただけさ。気の毒に思っている」（わたしは本当に気の毒だったわけではない。大洋の真ん中のいかだは一人でいると絶望的な場所だが、マルガレーテと一緒なら〈至福の園〉だ）

「それでもあたし、思うんだけど、二人が同時に同じ夢を見るなんて——アレック、またきたわ！」彼女は指さした。

　初めは何も見えなかったが、やがて見えてきた。小さな点が次第に大きくなって十字形となり、わたしが〝飛行機(フライング・マシン)〟と判定した形となった。わたしはその形がさらに大きくなってくるのを呆然と見つめつづけた。

「マルガレーテ、きっとさっきのやつが引き返してきたんだ。たぶん、あれはぼくたちを見つけたんだ。あれでなかったら、かれらだかかれだかが、われわれを見つけてくれたんだよ」

「ひょっとしたらね」

　そいつが接近してくると、わたしたちの頭上ではなくて右側を通り過ぎようとしているのがわかった。マルガレーテが突然言った。

「さっきのとは違うわ」

「それにあいつは、空飛ぶクジラじゃない——このあたりの空飛ぶクジラの脇腹に、幅の広い赤い筋がはいっていないかぎり、ね」

「クジラじゃないわ。いえ、つまり、〝生き物じゃない〟って意味よ。あなたの言ったとおりよ、アレック、あれは機械だわ。ねえあなた、本当にあの中に人が入っていると思う？　そう考えると怖くなるわ」
「あの中に人間が入っていないとしたら、そのほうがよっぽど怖いよ」（わたしはある幻想小説を思い出した。ドイツ語からの翻訳で、自動機械しかいない世界についての話である――あまり楽しいものではなかった）「まったくの話、これは良いニュースだぞ。これで、ぼくたちが最初のやつを見たのは、決して夢でも幻覚でもなかったことがはっきりしたわけなんだから、これで、ぼくたちが別の世界にいるという事実は明白になった。ということはつまり、もうすぐ救出されるということさ」
彼女はためらいがちに言った。
「あなたの話についていけないんだけど」
「すると、きみはいまだにぼくを偏執狂と呼ぶまいとしているんだね――そいつはありがたいが、ぼくが偏執狂であるとするのは最も単純な仮説にすぎない。もし、陰で糸を引いている黒幕が、ぼくを殺すつもりだったのなら、氷山にぶつかった時がいいチャンスだったはずだ。あるいはそれよりも前の火渡りの時にでもね。しかし、かれは出てきてぼくを殺そうとはしなかった。少くとも、今は殺そうとしていない。猫がネズミをいたぶるように、ぼくをもてあそんでいるのだ。だからぼくはそのうちに、きっと救出されるよ。きみも救出される――ぼくたちは一緒にいるのだから。氷山がぶつかったとき、きみはぼくのそばにいた――運が悪かったんだ。きみは今でもぼくのそばにいる。だから助かる――これは運がいい。さからわずに現実を認めるんだ。ぼくだって慣れるのには何日もかかったが、肩の力を抜けばすべてうまくいくとわかった。偏執病は陰謀に満ちた世界に対する理性的アプローチにすぎない」
「でも、アレック、現実の世界がそんなものであるはずはないわ」
「この世に〝はず〟というものはないのさ。哲学の真髄は、先入観で宇宙を一つの形に押し込めるのを避け、あるがままの宇宙を受け入れることなんだ」それから、こうつけ加えた。「うわっ！　寝返りを打つなよ。きみだって、せっかくこうして救出される見込みが立った段階で、鮫のおやつになりたくはないだろう！」
それから一時間ほどは、何事も起こらなかった――ただ、堂々としたバショウカジキを二匹見かけただけだ。一面に曇っていた空は焼け尽きたように晴れ、わたしは早く救助隊が来てくれないかと気を揉みはじめた。それくらいのこ

とはしてくれてもいいはずだ！　わたしに第三度の炎症を負わせないでくれ。マルガレーテのほうがわたしよりも日光に強いらしい。彼女は金髪色白だったが、全身くまなく暖かなトースト色に――素晴らしい！――こんがり焼けている。だがわたしのほうは、顔と手以外はカエルの腹みたいに生っちろいのだ――熱帯の日光をまる一日浴びつづけたら、病院行きになりかねない。あるいは、もっとひどいことになるかもしれない。

　東の水平線がいまや灰色となり、不規則に凸凹（でこぼこ）して見える。あれはおそらく山脈だ――わたしはそう自分に言いきかせた。といっても、波の上わずか七インチばかりの視点では、たいしたものは見えやしないが。もしあれが本当に山脈か丘陵なら、陸地はもう何マイルも離れてはいない。マサトランからの小舟が、今すぐにも目に入るはずだ……もしマサトランがこの世界にも同様に存在していればだが。もしも――

　やがて別の飛行機械（フライング・マシン）が姿を現わした。

　そいつは前の二機とはほんの少ししか似ていなかった。第一機は南から北へ、第二機は北から南へと、二機とも海岸に平行して飛んだが、今度の機は海岸の方向からやってきて、主に西の方をジグザグしながら飛んでいる。

　そいつはわたしたちの北側を通り過ぎ、やがて引き返してきて、わたしたちの周囲を旋回した。低空飛行にはいったので、実際に人間が乗っているのを見ることができた。二人いるらしい。

　その形状を説明するのは難しい。まず巨大な箱型の凧（たこ）を想像してほしい。長さおよそ四十フィート、幅およそ四フィートで、二つの表面のあいだがおよそ三フィートだ。

　この箱凧を、ボートのようなものに直角に取り付けたところを想像してほしい。そのボートのようなものは、どことなくエスキモーのカヤックに似ているが、それよりずっと大きい――だいたい、箱凧と同じくらいの大きさだ。

　全体の下に、さらに二つカヤック状のものがある。こっちはもっと小さく、本体に平行している。

　本体の一方の端はエンジンで（それはあとでわかった）、その前端には船の水中推進器に似た空中推進器が付いている――これも、あとでわかったのだ。初めてこの信じられない構造物を見たときには、空中スクリューはおそろしい速さで回転していたので、見えなかったのである。しかしその音ときたら！　この機械仕掛（からくり）の出す騒音は耳を聾せんばかりで、しかも一時も止むことがない。

　機械（マシン）はわれわれの方に向かって機首を下げ、まっすぐつっこんできた――まるで、魚をすくい取るために滑空降下するペリカンそっくりの姿勢である。

わたしたちが魚だ。怖かった。少くとも、わたしは怖かった。マルガレーテは悲鳴一つ漏らさなかったが、わたしの指をギュッときつく握りしめていた。わたしたちは魚ではない……あの機械には、わたしたちを食べることはできない……また、機械がそんな気を起こすはずはない……そうわかってはいたものの、だからといって、自分たちめがけての急降下が恐ろしくなくなるものでもなかった。

恐怖心にもかかわらず（あるいは、恐怖心ゆえに）わたしはこの機械が、上空高くに位置していたときに推測したよりも、少くとも二倍は大きいことを見てとった。あやっているのは二人の御者だ。前端の窓の後ろの席に、並んで腰かけている。駆動機関は二つあることがわかった。一つは御者席の右、もう一つは左、いずれも箱凧型の翼のはざまに取り付けてある。

まさに最後の一瞬、機械はハードルを跳び越す馬のように急上昇し、わたしたちはすれすれのところでぶつからずにすんだが、巻き起こった突風のため、あやうくいかだからころげ落ちそうになった。ゴーッという轟音で、わたしの耳はがんがんしている。

機械はもう少し上昇したあと、カーブを描いて引き返し、今度はわたしたちからややはずれたところに向かって滑空した。下部の一対のカヤック状のものが水面に触れ、はなばなしく彗星の尾のような水しぶきをあげ――機体はスピードを落として停まり、そのままそこに留まった。水の上に、沈みもせずに！

空中スクリューの動きが非常に遅くなり、その形状が初めてはっきりと見えた。そしてわたしは、これの設計に注ぎ込まれた技術の粋に舌を巻いた。われわれの硬式飛行船で用いられている、通風管つきの空中スクリューほど効率的ではないとわたしは推測したが、通風管をつけることが困難もしくは不可能である場合の問題解決法としては、まさに秀逸である。

しかしこの、地獄のように騒々しい駆動機関はどうだ！いったいどこの技師が、こんなものを設計したのだろう。わたしの教わった教授の言によれば（熱力学の難解さが、わたしに自分の天職は牧師だと悟らせる前の話だ）、騒音は常に非効率性の副産物である。正しく設計された機関は墓場のように静かなものだ。

機械は向きを変え、再びこちらへ近づいてきた。非常にゆっくり動いている。御者たちはそいつをうまくあやつり、いかだからほんの数フィートのところでほとんど停止させた。乗っていた二人のうちの一人が、窓の後ろの内部空間から這い出し、左手で、二枚の箱凧翼のあいだを支えている支柱の一つにぶらさがった。もう一方の手にはぐるぐる

巻いた綱を持っている。
飛行機械(フライング・マシン)がわたしたちのそばを通り過ぎるときに、かれはその綱をこっちに投げた。わたしはそれにぱっと手を出し、うまく摑んだ。わたしの身体が水の中に引きずりこまれなかったのは、マルガレーテが、すかさず、わたしを押さえたからだ。
わたしは綱をマルガレーテに渡した。
「あの男に引っぱり上げてもらいたまえ。わたしもきみのすぐ後から水にはいる」
「だめよ！」
「〃だめ〃とはどういう意味だ？　言い争っているひまはない。さあ、やるんだ！」
「アレック、静かにして！　あのひと、何か言おうとしているじゃないの」
わたしは少からず気を悪くしたが、口をつぐんだ。マルガレーテは耳を傾けた（わたしが耳を傾けたところで、何にもならない。わたしの知っているスペイン語は〃ありがとう(グラシアス)〃と〃どうぞ(ポル・ファボル)〃だけなのだから。そのかわりわたしは、機械(マシン)の側面に書いてある文字を読んだ。〈メキシコ王国沿岸警備隊(エル・グアルダコステス・レアル・デ・メヒコ)〉）。
「アレック、かれは、よく気をつけろって警告しているわ。鮫がいるんですって」
「まずいな」
「ええ。あたしたちはじっとしていろって。あのひとがこのロープをそっとたぐるそうよ。あたしたちを何とか海に落とさずに、あの機械にたぐり寄せるつもりなんだと思うわ」
「こちらの思いどおりの男だな！」
その努力は成功しなかった。そよ風が吹いただけで飛行機械(フライング・マシン)は動いてしまうのだ。わたしたちのほうがよっぽど風の影響を受けなかった――日先浴用マットは海水を吸って重くなっており、帆もまったくないので、ほとんど動かなかったのである。わたしたちを飛行機械(フライング・マシン)にたぐり寄せるどころか、綱の端にいる男は、わたしたちが引っぱられて海に落ちないようにするために、逆に綱をたぐり出さざるをえなかった。
男はなにか大声で言った。マルガレーテが答えた。二人は互いに叫びかわした。彼女はわたしに向かって言った。
「ロープを放せって言ってるわ。一回離れて、また戻ってくるって。今度は真上を通るけど、スピードをうんと落とすから、一番近づいたときにこのアエロプラーノ――この機械(マシン)――によじのぼってくれ、ですって」
「わかった」
機械(マシン)は水面をすべって離れ、Uターンして戻ってきた。

待っている間も退屈はしなかった。巨大な鮫の背びれがわたしたちを楽しませてくれたからだ。そいつは襲ってはこなかった。どうやら、わたしたちは食べられないものだと頭から(どんな頭だ?)思い込んでいるらしい。おそらく、そいつにはパンヤを詰めたマットの底だけしか見えていないのだろう。

わたしは言った。「ダーリン、あいつが至近距離まできたら、手近な支柱に跳びつくんだ。ぼくが下から押し上げてあげる。ぼくはきみのあとから上がるよ」

飛行機械(フライング・マシン)はこっちに向かって水上を直進してきた。まるで、水面をかすめて飛ぶ馬鹿でかいトンボのようだ。

「だめよ、アレック」

「〝だめ〟とはどういう意味だ?」

わたしは苛立った。マルガレーテはとてもいい道連れだったのに――急にひどく頑固になってしまった。しかもこんな時に!

「押し上げるなんて無理よ。押そうにも足場がないじゃない。立ち上がるどころか、上半身だけ起こすのだってできやしないのに。いい? あなたは右側にしがみついてちょうだい。あたしは左側にしがみつくわ。もしあたしたちのどちらかが失敗したら、そのときはまたマットの上に戻るのよ――急いで! アエロプラーノがまたやってくるわ」

「しかし――」

「あのひとがそうしろって言ってるのよ」

もう時間がない。機械(マシン)はほとんど頭の上だ。〝脚〟すなわち機械(マシン)本体の下に一対の物体をくっつけている支柱が、マットの上にかかった。片方はわたしすれすれのところ、もう一方はマルガレーテすれすれのところだ。

「今よ!」と彼女が叫んだ。わたしは自分の側の脚にとびついた。片手が一本の支柱にかかった。

右腕がぐいと根元から引っこ抜かれそうになったが、わたしは猿のような格好でよじのぼった――降着装置に両手をかけ、片足を水平のカヤック状のものの上にのせ、頭を巡らせた。

すると、一本の手がマルガレーテに伸びるのが見えた――支柱をよじのぼった彼女は、凧のような翼の上に持ち上げられ、そして消えた。わたしも自分の支柱をよじのぼろうと頭を返し――あわてて飛び上がって、翼の上に乗った。

わたしは普段は飛び上がったりしない男だが、今回は誘因があった。まともな魚にしては大きすぎる汚れた白いひれが、波を切ってまっすぐわたしのほうに向かってきたのだ。

わたしの横には、狭い、人の乗る部分があり、その中で御者たちがこの奇妙な乗物をあやつっていた。第二の男(救助のために外へ出た男でないほうの男)が、窓から首

をつき出し、わたしにニヤリと笑いかけ、手を後ろに伸ばして小さなドアを開けた。わたしは頭からその中へ這い込んだ。マルガレーテは先に入っていた。

　中には四つ座席があった。二つは前にあって、御者たちが座っている。二つは後ろで、そこにわたしたちがいるというわけだ。

　わたしの側にいた御者がわたしたちを見回して何か言い、マルガレーテをじっと見つづけた——わたしにだってわかったさ！——たしかに、彼女は裸だったが、それは彼女の責任ではない。それに紳士は人をじろじろ見たりしないものだ。

　マルガレーテが説明した。「ベルトをしめろって言ってるわ。きっとこれのことよ」

　彼女はベルトの端に付いているバックルを上げてみせた。ベルトのもう一端は、機体枠にしっかりと固定してある。

　わたしは同じようなバックルの上に座っていることに気づいた。陽に灼けて炎症をおこした背中にくいこんでいる。注意を払わなければならないことがあまりに多すぎたので、それまでそのことに気づかなかったのだ（あの野郎、自分の手だけ見てりゃいいんだ！　わたしはそう怒鳴りそうになった。その男が、多大の危険をおかして、たった今わたしと彼女の生命を救ってくれたばかりなのだ……ということは、その時は少しも頭になかった。わたしはただ、その男がかよわい女性の無力さにつけこんでいるように思えて、カッカと腹を立てていた）。

　わたしは厄介なベルトに注意を戻し、それを無視しようとした。男は隣りに座っているもう一人の男に何か言い、言われた男はいやに熱っぽく応(こた)えた。マルガレーテが二人の言い合いをさえぎった。

「こいつらは何て言ってるんだ？」と、わたしは詰問した。

「自分のシャツを脱いでわたしにくれるって言うのよ。悪いからって断わっているんだけど……あたし、とても断わりきれないわ。紳士的な好意で言ってくれてるんだし、あたしだって馬鹿じゃないから、知らない人たちの前では何か着ていたほうが落ち着いていられるの」彼女は耳を傾け、こうつけ加えた。「二人はどっちがその特権を自分のものにするかでもめているのよ」

　わたしは口をつぐみ、心の中で二人に詫びた。たとえローマ法皇でも、一生のうちに一度や二度は盗み見をすることがあるに違いない。

　どうやら右側の男が論争に勝ったらしい。座席の中で身体をもぞもぞ動かして——立ち上がることはできなかった——シャツを脱ぎ、後部座席のマルガレーテに手渡した。

「おじょうさん(セニョリータ)、どうぞ(ポル・ファボル)」まだほかにも何か言ったのだが、

それはわたしの知識を越えていた。
　マルガレーテは優雅にかつ威厳をもって答え、二人と会話をかわしながら、ごそごそと男のシャツを着た。それで彼女の身体がおおよそ覆われた。
　彼女はわたしに向きなおって、「あなた、こちらは機長のテニエンテ（中尉）・アニバル・サンス・グラシアさんと、助手のサルヘント（軍曹）・ロベルト・ドミンゲス・ホーネスさん。お二人ともメキシコ王国沿岸警備隊のかた。中尉も軍曹もあたしにシャツをプレゼントしたがったのだけれど、軍曹のほうが指推てゲームに勝って、あたしにこのシャツをくれたわけ」
「実に気前の良いひとだな。ところで、なにかぼくの着るものがここにないかどうか、尋ねてくれないか」
「訊いてみるわ」
　彼女は何か二言三言いった。その中にわたしの名があった。それから英語に戻して、「お二人につつしんで紹介いたします。夫のセニョール・アレクサンドロ・ハーゲンシャイマーです」そしてまたスペイン語に戻った。
　しばらくして、彼女は答えた。
「残念だけどあなたにあげられるものは何もない……って、中尉が言ってるわ。だけど、マサトランの沿岸警備隊本部につきしだい、あなたの着るものを見つけることを、自分の母親の名誉にかけて約束するそうよ。だから二人ともさっさとベルトをしっかり締めてくれって。これから飛ぶのよ。アレック、わたし怖いわ！」
「怖がらないで。ぼくが手を握っててあげる」
　ドミンゲス軍曹が、水筒をかざして振り返った。
「水？」
「まあ、ありがとう！」と、マルガレーテが受け取った。
「スィ、スィ、スィ！」
　水がこんなにおいしいと思ったことはない。
　わたしたちが水筒を返すと、中尉はくるりと振り返ってにっこり笑い、コロセウムと同じくらい古い親指を立てるしぐさ（帝政ローマ時代の剣闘士競技の際、観客たちが親指を下げれば〝とどめを刺せ〟、上げれば〝命だけは助けろ〟のサインだった）をしてみせた。それから何やらせわしなく操作を行ない、駆動機関の回転を上げた。それまでのろのろと動いていた機関の回転速度が上がると、恐ろしい騒音が機内を圧しはじめた。中尉は機体がまっすぐ風に乗るように機首を転回させた。先刻まで朝風がさわやかに吹き渡るだけで静かだった海面が、今は小さな波がしらを白く泡立てて騒いでいる。かれはますます機関の速度を上げた。信じられないほどの荒々しさに達すると、機体は海面をぼんぼんと跳びはねるように進み、あらゆるものがガタガタと揺れた。
　それから、十に一つの割合で大きな波が途方もない力で

ぶつかってきた。あれでよく遭難しなかったものだ。
突然、われわれは海面の二十フィート上にいた。波はぶつかってこなくなったが、震動と騒音は続いている。機体は急角度で上昇し——今度は急降下をはじめた。わたしは飲んだ水をあやうく吐きもどしそうになった。
海はわたしたちの目の前にあり、まるで固い壁のように見えた。中尉が顔だけ後ろへ向けて、何か叫んだ。
前方から目をそらすな、とわたしは言いたかった！——が、言えなかった。
「かれ、何と言ってる？」
「指さすところを見ろって言ってるわ。今からぴったり指さすから、って。エル・ティブロン・ブランコ・グランデ——グレート・ホワイト・シャーク（和名ホオジロザメ。凶暴な人食い鮫として知られる）よ。あたしたち、もう少しで食べられるところだったんですって」
（別に、かれに指さしてもらうまでもなかった）果たせるかな、この水の壁の真ん中に、ひれで水を切っている灰色の化物がいた。そいつの鼻先にバシャンと突っこむ、と思った瞬間、水壁はぐぐーっと傾いて遠ざかり、わたしの尻は座席に強く押しつけられ、両耳の中がガーンと鳴った。わたしはわれわれの接待主（ホスト）の背中に嘔吐しかけたが、鋼鉄の意志でそれを抑えた。
機体が水平になったとたん、急に乗り心地が良くなった。だがひどい騒音と震動は相変わらずだ。
これなら、飛行船（エアシップ）のほうがはるかに快適だ。
ひとたび空中に飛び上がると、わたしたちのいかだからはほとんど見えなかった海岸線の彼方のごつごつした丘陵が、はっきりと視界に入ってきた。同様に海岸もだ——連なる美しい浜辺、そしてわれわれの目指す町。軍曹はあたりを見回し、下の町を指さして何か言った。
「何だって？」
「ロベルト軍曹は、お昼に間に合うように家へ帰れるって言ってるわ。昼食（アルムエルソ）、と軍曹は言ったけれど、わたしたちにとっては朝食——デサユーノ——よね」
突然、わたしの胃袋はしばらくおとなしくしていることに決めたらしい。「かれがそれを何と呼ぼうとぼくはかまわないよ。馬を料理するにはおよばない、とかれに伝えてくれ。生（なま）のまま食べてしまうから」
マルガレーテが通訳すると、われらの接待主（ホスト）は二人とも声を立てて笑った。やがて、中尉は機械（マシン）を急降下させて着水したが、その間も肩越しに振り返ってマルガレーテとしゃべっていた——マルガレーテは微笑をくずさなかったものの、わたしの右の手のひらに爪をくいこませている。

着いた。誰も死ななかった。だが飛行船(エアシップ)のほうがずっと快適だ。
昼食だ！　なにもかもうまくいっている。

10

汝(なんじ)は面(かお)に汗(あせ)して食物(たべもの)を食(くら)い　終(つい)に土(つち)に帰(かえ)らん
創世記第三章一九節

飛行機械(フライング・マシン)がマサトラン港に着水して三十分後、マルガレーテとわたしは、ドミンゲス軍曹と共に沿岸警備隊の下士官・兵士用食堂の席についていた。昼食時間を過ぎていたのだが、食事は出してもらえた。それにわたしの着るものもなんとかしてもらった——青いデニムの、胸当て付きズボンだけだが、素っ裸でいるのとズボンだけでもはいているのとでは大違いだ。その差は、安物の作業ズボンと最高級白テンの毛皮の差よりも、はるかに大きい。あなただって体験してみればわかるはずだ。
　一隻の小型ボートがやってきて飛行機械(フライング・マシン)を係留したあと、わたしは上陸したドックを横切って歩かねばならず、司令部の建物の中へ入ったあとも、ズボンを見つけてくれるま

で待っていなければならなかった――その間、他人にじろじろ見られっぱなしで、しかもその中の何人かは女性だった。さらしものにされるのがどういう気分か、今でも忘れられない。ひどいものだ！　五歳のときに日曜学校で不運な事故に会って以来、あんなに困惑させられたことはない。

しかしもう済んだことだ。食べ物と飲物を前にして、わたしは――さしあたって、その場は――ものすごく幸福だった。料理は見慣れぬものばかりだ。〃空腹は最良のソースなり〃と言ったのは誰だったっけ？　誰であるにしろ、まったくそのとおりだ。昼食は美味しかった。トウモロコシの粉で焼いた薄いパンケーキを肉汁に浸したもの……揚げた豆……舌が火傷するほど熱いシチュー……ボウル一杯の小さな黄色いトマト……そして濃くて黒くて苦いコーヒー。これ以上何を望むところがあろう。どんな美食家も、そのときのわたしほどうまい料理を味わったことはあるまい。

（初めわたしは、下士官・兵士用食堂での食事に、少しばかりむかっ腹を立てた。サンス中尉と一緒に、どこか士官たちの食事するところへ行きたかったのだ。わたしが非常にありふれた民間人症候群にかかっていたことを自覚したのは、かなり経ってからである。すなわち、軍隊経験のない民間人は、無意識のうちに自分の社会的地位を将校の位と対等に見なしており、下士官以下だとは全然思っていないのだ。よく考えてみれば、この考え方は明らかに馬鹿げているのだが――しかし、ほとんど万国共通である。いや、万国共通ではないかもしれないが、アメリカではどこにいってもそうだ……すべての人間が〃誰と比べてもひけをとらず、人並み以上〃であるアメリカでは）

ドミンゲス軍曹のシャツは再び本人に戻っている。わたし用のズボンをさがしている間に、司令部にいた女の人――掃除のおばさんだと思う。メキシコ沿岸警備隊には女の水兵はいないようだ――が、なにかマルガレーテの着るものを取りにやらされた。その〃なにか〃は一枚のブラウスとロングスカートだった。どちらも木綿で、派手な色彩である。明らかに安物の衣服だったが、マルガレーテによく似合っている。

まだわたしにもマルガレーテにも靴がなかった。かまうものか――気候は温暖で乾燥している。靴はあとでいい。わたしたちは食事と衣服と安全を与えられた――その厚いもてなしにわたしは感激し、メキシコ人は世界一素晴らしい人びとだと思った。

二杯目のコーヒーを飲みおえてから、わたしは言った。

「スイートハート、無作法にならないようにここを失礼するにはどうすればいいかな？　できるだけ早くアメリカ領

事を見つけるべきだと思うんだが」
「あたしたちは司令部へ戻らなきゃいけないのよ」
「またお役所仕事か？」
「ええ、そういうことでしょうね。あたしたちが発見地点までどうやって来たのか、もっと詳しいことを訊きたいんだと思うわ。誰が聞いてもわたしたちの話はおかしいと思うわよ」
「そうだろうな」
　基地司令官との初会見は満足のいくものではなかった。もしわたし一人だけだったら、司令官はわたしを嘘つきだと決めつけただろうが……われながら男らしい男だとうぬぼれているような男なら、マルガレーテに向かってそんな口の利き方はしにくいはずだ。
　問題は善き船〈コンゲ・クヌート〉のことだった。〈コンゲ・クヌート〉は沈みもしなかったし、入港もしていない――そもそも存在していなかったのだ。
　わたしはちょっぴり驚いただけだった。もしあの船が全装帆船か五段漕ぎ船（古代のガレー船の一種）に変わっていたとしても、わたしは驚かなかっただろう。しかしわたしは、何らかの種類の同名の乗物があるものと予想していた――法則からいってそうなるはずだ、と思っていたのだ。しかし今や、わたしが法則を理解していなかったことが明瞭となった。もし法則なんてものがあればの話だが。
　マルガレーテの指摘したことが、わたしの心証をさらに強めた。このマサトランは彼女が前にきた町ではないというのだ。こっちのほうがずっと小さく、しかも観光地ではない――実際の話、〈コンゲ・クヌート〉をつなぐはずの長いドックが、この世界には存在していなかった。この事実は、わたしの〝偏執病〟が仮説にすぎなかったことを飛行機械（フライング・マシン）が証明したのと同じくらい、深く彼女を納得させたようだ。彼女が以前ここに来たときは、大きくがっしりしたドックがあった。それがなくなっている。彼女はそのことにショックを受けていた。
　司令官は何にも動じていなかった。かれはわたしたちよりもサンス中尉に質問するほうに時間をかけた。どうやらサンスの説明が気に入らぬらしい。
　その時点ではまだよくわからない事実が、もう一つあった。いや、今でもよく分からない。つまり、サンスの上官は〝キャプテン〟（あるいは〝カピタン〟）であり、司令官もやはり〝キャプテン〟だったが、この二者は同じ階級ではないのだ。
　沿岸警備隊では海軍式の階級呼称を使用しているのに、飛行機械（フライング・マシン）の操作にたずさわっている小部門は陸軍式の呼称を用いているのである（陸軍のキャプテンは大尉、海軍のキャプテンは大佐）。この瑣末な

違いには歴史的な根拠があるようだ。どうも両者のあいだに摩擦があるらしい。四本筋、すなわち海軍のキャプテンは、飛行機械（フライング・マシン）将校の報告を全然信じる気になれないようだった。

サンス中尉は、わけのわからぬことをしゃべる裸の生存者を二人連れて戻ってきたわけだ。わたしたちの話には確かに信じられないような面がいくつかあるが、それはすべてサンスの責任だ……と四本筋は主張したいらしい。

サンスは少しもひるまない。かれは、海上をカラスの巣よりも高く飛んだことの一度もない将校に対しては、本物の尊敬を抱いていないのだとわたしは見た（かれの危険きわまる代物に同乗した身として、わたしはかれが海面型の人間をうやまう気になれない理由がよくわかる。硬式飛行船の操縦士たちの間でさえ、人間を空を飛ぶものと飛ばないものとに二分したがる傾向のある事実を、わたしはすでに知っている）。

少しして、サンスをおどすこともマルガレーテをおどすこともできず、マルガレーテを介さないとわたしとは話が通じないことがわかった司令官は、肩をすくめていくつかの指示を出し、その結果わたしたちは全員昼食をとることができた。これで終わったとわたしは思っていたのだが、尋問はまだまだこれからだと言う。このあと、いったいなにがあるのだろう。

二度目の取調べはすぐに終わった。司令官はわたしたちに、本日午後四時に裁判所で入国審査を受けるよう命じた——ここでは、独立した出入国管理事務所がなく、裁判所がその権限を合わせ持っているのだ。

「ところで、これはきみたちが返済義務を持つもののリストだ——支払いついては裁判官と話し合って決めるように」

司令官から一枚の紙を受け取ったマルガレーテは、驚いて目を丸くした。わたしは司令官の言ったことを教えろと彼女に強く言った。

彼女は通訳した。わたしは請求書を見た。

なんと八千ペソ以上もある！

スペイン語をあまり知らなくても、その請求書を読むことはできた。ほとんどすべての言葉が英語と同系だったからだ。〝トレス・オーラス〟は三時間。〝アエロプラーノ〟——この言葉はマルガレーテから聞いたことがある。飛行機械（フライング・マシン）のことだ——の三時間ぶんの使用料金が請求されている。サンス中尉とドミンゲス軍曹の作業の時間料金も請求されている。まだほかにもたくさんの項目があった。何もかも、一人につきいくらと決めてあるに違いない。少くとも、それに近いことは確かだ。

アエロプラーノの燃料代ならびに燃料補給手数料がある。"ズボン"は"パンタローネス"――これはわたしがいまはいているやつの代金。"ファルダ"はスカートで"カミサ"はブラウス――マルガレーテの服はどうみても安くない。

びっくりした項目が一つ。いや、値段のことではない。その項目が含まれていること自体が驚きだったのだ。わたしたちはお客だと思っていたのに――昼食二人前。一人前十二ペソ。

司令官の時間手当てまで、ちゃんと一項目として請求されていた。

わたしは、八千ペソをドルになおすといくらになるのか訊こうとした――が、わたしたちの投げ込まれたこの新世界でのドルの購買力を、自分がまったく知らないことに気づき、口をつぐんだ。

マルガレーテは請求書のことでサンス中尉と議論した。サンス中尉は困ったような顔をして、両手を振りながらせっせと説得につとめた。話を聴きおわった彼女は、わたしに言った。

「アレック、これはアニバルの考えたことではないし、司令官が悪いのでもないそうよ。海難救助とか、アエロプラーノの使用とか、そのほかそういった活動に対する料金は、エル・ディストリト・レアルで決められるんですって。エル・ディストリト・レアル、つまり王室特別区(ロイヤル・ディストリクト)というのは、きっとメキシコ・シティーと同じところだと思うわ。サンス中尉の話では、政府上層部は経済性を重視していて、すべての公共活動を独立採算制にするよう、全員に強い圧力をかけているんですって。かれが言うには、もし司令官がわたしたちに救助料金を請求しなかったら、監査官に見つかったが最後、その分を給料から差し引かれるのだそうよ。そのうえ、王立審議会がどのような懲罰を下すかしれない、って。それからアニバルは、こんなことになってしまって、自分としてはまったく申し訳ない、この気持ちをあなたにわかってほしい、とも言ってるわ。もしアエロプラーノが自分のものなら喜んでお客になってもらうのに……これから先もずっと、あなたのことは兄のように、あたしのことは妹のように思っている……ですって」

「わたしもかれのことを同じように思っている、と伝えてくれ。かれに負けないくらいの美辞麗句で頼むよ」

「そうするわ。ロベルトも入れてもらいたがっているけどど」

「軍曹にも同様だ。しかし、どこでどうやったらアメリカ領事が見つかるか、聞きだしてくれないか。厄介なことになったものだ」

アニバル・サンス中尉は、わたしたちを午後四時に裁判所へ出頭させるよう命ぜられ、そこで一同解散となった。サンスは、わたしたちを領事のところまで連れていって戻る役目をロベルト軍曹に任せ、自分は職務の都合であなたがたに同行できないのが残念です、と言って——パチンと両の踵を合わせ、お辞儀をしてマルガレーテの手をとり、その上にキスをした。たったそれだけの動作だが、実に板についていた。マルガレーテが喜んでいるのはわたしにもわかった。しかしカンザスには、こんな作法はない。どうみても、損をするのはわたしだ。

マサトランは半島の上にある。沿岸警備隊の駐屯地は南岸の、灯台（世界一高い——印象的だ！）からあまり離れていないところにあり、アメリカ領事館は町を横切って一マイルばかり行ったところの北岸にある。ミゲル・アレマン大通り（ミゲル・アレマンはメキシコの有名な政治家）がまっすぐ通じている——途中まで美しい噴水池に飾られた、快適な散歩道だ。

だがマルガレーテとわたしは裸足だった。

ドミンゲス軍曹はタクシーをすすめなかった——わたしには乗る金がなかった。

初めのうちは、裸足でいることは別にたいしたことではないように思われた。その大通りには他にも裸足の連中がいた。それも、決して全員が子供であったわけではない（それにまた、上半身裸でいるのもわたしだけではなかった）。子供のころ、わたしは裸足を一種のぜいたく、一種の特権と見なしていた。夏のあいだずっと裸足ですごし、新学期が始まるといやいやながら靴をはいたものだ。

一街区歩いたあと、わたしは、なぜ子供のころは裸足になるのが楽しみだったんだろう……と不思議に思いだした。それからほどなくして、わたしはマルガレーテに、ロベルト軍曹に歩調をゆるめるように言ってくれ、と頼んだ。それに、できるだけ日陰を選んで歩くようにしてもらいたい……この熱い歩道を裸足で歩きつづけていたら足の裏が焦げてしまう！

（それまでにも、またその時にも、マルガレーテはひと言も不平を口にしない——そしてわたしは、そのことにいささか苛立っていた。マルガレーテの天使のような忍耐力のおかげで、わたしはいつも助かっているのは事実だが——それに負けぬよう生きてゆくのは、きわめて難しい）

そのあとのわたしは懸命に、自分のあわれにも虐げられた、やわなピンク色の足をいたわることに全神経を注いだ。自分がみじめになってくる。いったいなんで故国を離れたりしたんだろう。

〝わたしは靴を持たぬことを嘆いた。だがそれも足を持た

ぬ男に会うまでのことだった〃

最初にそう言ったのが誰だったのか、わたしは知らない。しかしこれはわれわれの文化遺産の一部であり、また、そうあるべきだ。

それがわたしの身に起こった。

道のりの半分までも行かぬころ、ミゲル・アレマン大通りが池のほとりでアキレス・セルダン通りと交わるところで、わたしたちは一人の乞食に出会った。乞食はわたしたちを見上げてニタニタ笑い、ひと握りの鉛筆をかざした——〃見上げた〃というのは、小さな箱車に乗っていたからである。その男には両足がなかった。

ロベルト軍曹はその男の名を呼び、一枚の硬貨を指先でぽんとはじいて与えた。乞食はそれを口でくわえて受けとめ、さっとポケットに落としこみ、「グラシアス！」と大声で言った——そして、注意をわたしに移した。

わたしは急いで言った。「マルガレーテ、かれに説明してくれないか。こっちは丸っきり一文無しだ、と」

「ええ、いいわ」彼女はしゃがみこみ、相手の眼を見つめながらしゃべった。それからまっすぐ身体を起こし、「ペペはこう言っているわ。〃それはかまわない。いつか、あんたが金持ちになったときに会おう〃」

「必ずまた来るとかれに言ってくれ。約束する、と」

彼女はそう言った。ペペはわたしに向かってニヤリと笑い、彼女に投げキスをし、軍曹とわたしに敬礼をした。わたしたちは先へ進んだ。

そしてわたしは、自分の足をいたわるために神経をすりへらすのを止めた。ペペに出会ったため、わたしはいやでも自分のおかれた状況を見なおさざるを得なくなったのだ。メキシコ政府がわたしたちの救助を特典と見なしておらず、費用の支払いを求めている事実を知って以来、わたしは自分が虐げられ、つけ込まれていると感じ、みじめな気分で自分自身にこう囁きつづけていた——わたしの同国人たちが〃メキシコ人はみんなアメリカ人観光客にたかって暮らしている蛭だ〃とこぼすのはまったくもっともだ！ 無論、ロベルトと中尉は別だが……他のやつらときたら、どいつもこいつも怠けものの寄生虫ばかりだ！ 米国人（ヤンキー）のドルばかり狙いやがる。

ペペのように。

だが、その日出会ったメキシコ人たちの記憶に残っている顔を一人ずつ思い浮かべたわたしは、自分の思い上がりを詫びた。メキシコ人たちも、暗闇から永遠の暗黒へと至る長い旅路を、共に歩む仲間なのだ。自分たちの荷をうまく担（にな）っている者たちもいるし、そうでない者たちもいる。そしてまた、ひどく重い荷を、雄々しくかつ潔（いさぎよ）く担って

いる人びともいるのだ。

ぺぺのように。

昨日まで、わたしは贅沢に暮らしてきた。今日は文無しで、借金をかかえている。しかしわたしは健康だ。ちゃんと頭もあるし、両手もある——それにマルガレーテもついている。わたしの荷は軽い。陽気にかついでゆこう。ありがとう、ぺぺ!

領事館の扉の上には小さな米国旗がかかっていた。扉には青銅の国璽がついている。わたしはそばの紐を引いて呼鈴をならした。

かなり待たされたあと、扉がほんの少し開き、女の声が、「帰ってくれ」と言った(通訳してもらうまでもなく、その意味ははっきりと分かった)。扉が閉まりかけた。ロベルト軍曹は強く口笛を吹き、大きな声をあげた。扉がもう少し広く開き、二人のやりとりが始まった。

マルガレーテが言った。「軍曹はこう言っているの。〃ドン・アンブローシオに、どうしても今すぐ会いたがっているアメリカ市民が二人、ここにきていると伝えてほしい。二人とも今日の午後四時に裁判所に出頭しなければならないので、すぐでなければ困る〃」

再びわれわれは待った。およそ二十分ほどたってから、メイドがわれわれを中に入れ、暗いオフィスに案内した。

領事が入室し、わたしの眼をはったと睨みすえて詰問した。「きみはいったいどういう了見で、わたしの昼寝の邪魔をするのかね?」

それから領事はマルガレーテに目をとめ、態度を和らげた。彼女に対してはこうだ。

「なにかわたくしにできることがありましょうか? それはそうと、拙宅にてワインでも一杯召しあがっていただけませんか? それともコーヒーはいかがでしょう?」

裸足で立ち、けばけばしい服をまとっていても、マルガレーテは貴婦人だった——わたしはどこかの馬の骨だ。なぜそうなのかは訊かないでほしい。とにかくそうなのだ。それをもっともらしく説明しようとしてみるといい——知らず知らずのうちに、〃高貴な〃とか〃貴族的な〃とか〃家柄のよい〃とか〃生まれながらにして良家の態度を身につけた〃とかいった言葉を使っている自分に気づくはずだ。

これらはすべて、アメリカ式民主主義の理想に反する概念を含む言葉である。この事実が、マルガレーテについて何かを証明するものなのか、それとも民主主義の理想について何かを証明するものなのか——そこのところは宿題ということにしておきましょう。

ドン・アンブローシオは、もったいぶってるだけで中味

のない男だったが、それでもかれに会うのはほっとする思いだった。というのも、かれは米語を話したからである——英語でなく、本物の米語だ。かれはテキサス州ブラウンズビルの生まれだった。これはわたしの感じだが、かれの両親はメキシコからの密入国者に違いないと思う。かれは自分の同胞であるメキシコ系米人のあいだで政治力をふるって成功し、気楽な名誉職を獲得し、モンテスマの国に来るアメリカ人旅行者に、どうしても必要なものがどうして手に入らないのかを説明して暮らしているというわけだ。

かれの話は結局それだけだった。

わたしは話をほとんどマルガレーテにまかせた。なぜなら、わたしよりも彼女が話したほうがうまくいくことが明らかだったからだ。マルガレーテはわたしたちのことを〝ミスター・グレアム及びその妻〟と称した——歩いてくるあいだ二人で話し合って、そう名乗ることに決めておいたのだ。救助されたとき、彼女は〝グレアム・ハーゲンシャイマー〟と名乗り、あとで、「こうしておけば、あなたがどっちでも好きな方を選べるでしょ」と説明した。だからわたしがその気になれば、〝ハーゲンシャイマー〟を選ぶこともできた。どうせ他人は、わたしの名前をそれほど正確には記憶しやしない。〝ハーゲンシャイマー・グレアム〟だっていいのだ。違う？　ま、それなら、わたしが言い間違えたのでしょう——すみません。

結局わたしは、はじめに名乗った〝グレアム・ハーゲンシャイマー〟から〝グレアム〟だけを採って使うことにした。物事を簡単にするためだ。マルガレーテに対して、わたしはずっと〝グレアム〟だったし、わたし自身も二週間近くそう自称してきたのだから。わたしたちの話をなんとか本当らしくしようとして、わたしは領事館を出るまでに十個以上の嘘をついたのだが、必要以上に話をややこしくしたくはなかった。〝グレアム夫妻〟が一番簡単だったのである。

（ちょっとばかり、神学的見解を述べよう。嘘をつくことは十戒で禁じてあると信じている人が多いようだが、とんでもない！　禁じられているのは、汝の隣人に対して偽りの証しを立てることである——嘘の中でも一部の、特別な、卑劣なたぐいの嘘だ。聖書には単なる不真実を禁じる掟はない。人間のつくった社会組織は、決して絶対的真実の重荷に耐え得ないと、多くの神学者たちが確信している。もしあなたが、かれらの懸念にはなんの根拠もないと思うなら、あなたが自分の子どものことをどう思っているか、いっさいの虚飾ぬきで友人のだれかに話してみるとよろしい——あなたに、あえてその危険を冒す勇気があればの話だが……）

果てしない問答（その中で〈コンゲ・クヌート〉は、いつの間にかひとりでに縮み、わたしたちの自家用クルーザーということになってしまった）のあと、ドン・アンブローシオはわたしに言った。
「お気の毒ですが、ミスター・グレアム、あなたがアメリカ市民であるという証拠を、あなたはまだ何ひとつ提出されておらない。これでは、失くされた旅券の代用となる仮証明書一枚、発行するわけにはいきませんな」
わたしは答えた。
「これは驚きましたね、ドン・アンブローシオ。確かにわたしの妻には少し訛がありますす。先刻申し上げたように、家内はデンマークの生まれなのです。しかし、トウモロコシ地帯の真ん中生まれでない者が、わたしのようなアクセントでしゃべることができると本気でお考えですか？」
かれはいかにもラテン系らしく、おどけた表情で肩をすくめた。
「あいにく、このわたしは中西部アクセントの専門家ではありませんのでね。わたしの耳には、あなたが英国生まれであるようにも聞こえる。あなたはもともと、あの耳障りな英国式アクセントを身につけていた人で、その後に舞台役者になったのかもしれない——有能な役者なら、どんな役のアクセントでも身につけることができるということは、周知の事実ですからな。それに近ごろ、イギリス人民共和国は、大当りをとった役者を合衆国に送りこもうとやっきになっておるところだ。あなたは、ネブラスカ州リンカーンの近在ではなく、イングランド州リンカーンから来たのかもしれない」
「本当にそう信じておられるのですか」
「わたしが何をどう信じておろうと、それは問題ではない。現実の話として、わたしは、あなたがアメリカ市民であることを証明する書類にはサインできないということです。あなたが実際にアメリカ人であるかどうか分からないのでね。気の毒だが。他になにかわたしにできることは？」
（まだなんにもしていないのに、〝他になにか〟もないもんだ）「たぶん、アドバイスぐらいはしてもらえるでしょうね」
「たぶん、ですな。わたしは弁護士ではない」
わたしは、わたしたちにつき出された請求書の写しをかれに差し出し、説明した。
「これは法にかなったものでしょうか。これらの料金は妥当でしょうか」
かれはざっと目を通した。「これらの料金は確かに合法的なものだね。かれらの法律からいっても、われわれの法

律からいっても。妥当かだって？　あなたたちはかれらに命を助けてもらったのではないかね？」
「それは確かにそうですが、別の可能性もありました。もし沿岸警備隊がわたしたちを発見しなかったら、漁船がわたしたちを救助してくれたかもしれません。しかし現実には、沿岸警備隊がわたしたちを発見して、救助してくれる結果になりました」
「あなたの生命は――あなたたち二人の生命は――八千ペソ以下の価値しかないのかね。確信をもっていうが、このわたしの生命はそんな金額では到底、購いきれないよ」
「そういう意味ではありませんよ、領事さん。わたしたちは一セントもお金を持っていないのです。全部、クルーザーと共に海に沈んでしまいました」
「では送金を頼みたまえ。領事館気付で送ってもらえばよろしい。そのくらいの面倒はみよう」
「どうもご親切に。しかしそれには時間がかかります。その間、どうやってかれらを撃退すればいいんです？　この裁判ですぐ現金を要求されると聞きましたが」
「いや、そんなことにはならない。確かに、かれらはわれわれのように破産を認めることはしないし、また、かなり時代遅れの債務者収監法があることも事実だ。だがかれらはその法律を実際に適用したりはしない――ただ脅しに使うだけだ。その代わり法廷は、あなたを仕事につかせて、負債を返済できるようにしてくれる。ドン・クレメンテは人情深い判事だ。かれがあなたがたの面倒をみてくれるだろう」
マルガレーテに向けられた歯の浮くようなお世辞を別にすれば、それで終わりだった。わたしたちは、メイドと料理人から秘かにもてなしを受けていたロベルト軍曹と合流し、裁判所へ向かった。
ドン・クレメンテ（イバニェス判事）はドン・アンブローシオの言ったとおり、感じのいい人物だった。わたしたちは、出廷するとすぐ書記に向かって、債務は認めるが払おうにも現金を持たないのだ……と告げたので、審理は行なわれなかった。わたしたちは閑散とした法廷の席に座らされ、判事がいまかかえこんでいる事件を処理する間待っていろと言われた。判事はいくつもの事件を手早くさばいていった。いくつかはちょっとした法律違反で、罰金が科せられた。いくつかは借金問題で、またいくつかは、後日の審理のための証言聴取だった。法廷で何が行なわれていたのか、詳しいことはよく分からない。こそこそ話していると睨まれるので、マルガレーテからよく話をきくことができなかったのだ。しかし、かれが被告をやたらと吊し首

にしたがる判事でないことは確かだった。
　手もとにあった事件がすべて落着すると、書記のひと声でわたしたちは罰金や借金を負っている〝悪党たち〟――ほとんどは貧農――と共に外に出され、低い壇上に並ばされて、一団の男たちと向かいあった。マルガレーテが、これは何なのかと尋ねると、返ってきた答えは――「ラ・スバスタ（競売）」
「なんのことだい？」とわたしは彼女に訊いた。
「さあ、よくわからないわ、アレック。あたしの知らない言葉よ」
　他の連中はさっさと話がついていった。どうやら、連中のほとんどは前にもここに来たことがあるらしい。やがて、壇の下にいた男たちの中で残っているのは一人きりになり、壇の上にはわたしたち二人だけとなった。残っている男は見るからに身なりがよく、裕福そうだ。男はにっこり笑ってわたしにしゃべりかけた。マルガレーテが答えた。
「この男は何て言ってるんだ？」と、わたし。
「あなたは皿洗いができるかって訊（たず）ねているのよ。あたし、このひとはスペイン語が話せませんって言ったの」
「皿洗いはもちろんできると言ってくれ。そんな仕事なんか全然やりたくないけどね」
　五分後、わたしたちの借金は現金で法廷書記官に支払われ、わたしたちは〝パトロン〟――セニョール・ハイメ・バレラ・グスマン――を得た。かれはマルガレーテに一日六十ペソ、わたしに三十ペソを払い、三食を給する。法廷費用が二千五百ペソ、それに非居住者労働許可料が二人分、それに戦時特別税の印紙代。書記がわたしたちの負債総額を算出し、それからわたしたちに代わって割算をしてくれた。ほんの百二十一日――四カ月――で、わたしたちの主人（パトロン）に対する義務は張消しになる。もちろん、その間にほかに金をつかわなければ、だ。
　書記はまた、わたしたちの主人（パトロン）の仕事の場、料理店（レスタウランテ）〈パンチョ亭〉へ行く道も教えてくれた。わたしたちの主人（パトロン）はすでに自家用車で帰ってしまっている。主人衆（パトローネス）は車に乗り、奉公人（ペオーネス）は歩くのだ（ペオンとは、特に借金返済のため、奴隷的に働く者のことをいう）。

11

ヤコブ七年の間ラケルのために勤たりしが
彼を愛するが為に之を数日の如く見做り
創世記第二九章二〇節

わたしは時どき、皿を洗いながら、主人ドン・ハイメのために働くようになってから今までに洗った皿を積み重ねると、どのくらいの高さになるだろうか……と考え、それを楽しんだ。料理店〈パンチョ亭〉で使っている普通の皿は二十枚で一フィートの高さになる。カップやグラス類はうまく積み重ならないので、カップと受け皿一組で皿一枚、グラスは二個で皿一枚などと、勝手に決めた。

巨大なマサトラン灯台の高さは五百十二フィート。ワシントン記念碑より四十フィート低いだけだ。わたしは初めて〝灯台一本分〟を洗いおえた日のことをおぼえている。その週の始め、わたしはマルガレーテに、「ゴールに近づいてきた。木曜日か金曜日の朝には達成すると思うよ」と言った。

実際にそうなったのは、木曜日の夕方だった——わたしは流し場を出て、厨房と食堂の境のドアのところに立ち、マルガレーテの眼を惹いて、プロボクサーのように、こぶしを握りしめて両手を高く掲げた。

家族連れから注文を取っていたマルガレーテは、その作業を中止して拍手した。いったい何事かとお客が不思議がったので、彼女は説明しなければならなくなった。おかげで彼女は十ペソのチップを貰う結果となり、数分後に流し場にやってきて、それをわたしにそっと手渡した。その一家の父親がご祝儀をくれたのだ。わたしはその男性にお礼を言ってほしいとマルガレーテに頼んだ。これからすぐ〝二本目の灯台洗い〟にとりかかるが、これはそのお客さんのご一家にささげます……と伝えてほしい、と。

そのへんでセニョーラ・バレラが騒ぎに感づき、マルガレーテが真面目に仕事をせずにはしゃぎまわって時間を無駄にしているわけを質そうと、夫のドン・ハイメをよこした……その結果、ドン・ハイメはわたしから食事客のチップの額を聞き出し、それに負けぬ金額を上積みすることになった。

セニョーラから文句を言われる筋合いはない。マルガレ

ーテは最高のウェイトレスであるばかりでなく、この店でたった一人だけの、英語とスペイン語の両方がわかるウェイトレスだった。わたしたちがバレラ夫妻のために働きはじめた日、看板屋が呼ばれて、人目につく看板を描かされた。

〝この店、えいごつうじます〟

それ以来、マルガレーテは英語をしゃべるあらゆる客の役に立っている。それだけでなく、英語のメニューを作成したのも彼女だ（英語で書かれたメニューの料金は、すべてスペイン語で書かれたメニューの料金よりもおよそ四十パーセント高くなっていた）。

ドン・ハイメは悪いボスではなかった。陽気な人物で、概して雇用者には親切である。わたしたちが来てから一カ月ほど経ったころ、かれはわたしにこう言った――もし判事が、この二人は夫婦者だから別べつに契約することは許さぬと言わなかったら、おまえの借金を競り落としはしなかっただろう、と（さもなければ、わたしは農場で働かされることになって、妻にはめったに会えぬ身になっていたかもしれない――ドン・アンブローシオの言ったとおり、ドン・クレメンテは人情に厚い判事だ）。

わたしは、マルガレーテとこみで雇われたのは嬉しいが、彼女を雇おうと思われたのはあなたのご判断が良かったことを示すものです……と、かれに答えた。

確かにその通りだ、とドン・ハイメはうなずいた。かれは水曜日の労働者オークションに数週間連続で顔を出していた。英語とスペイン語が同じように使えて、ウェイトレスに仕込めそうな女――年増でも娘でもいい――を捜していたのだ。そして、マルガレーテを獲得するために、わたしをも一緒に競り落としたというわけだ。

「でもおれは後悔してはいないぜ」と、ドン・ハイメは付け加えた。「だって流し場がこんなに清潔に、皿がこんなきれいに、銀器がこんなピカピカになったのは、初めてだものな」

わたしはかれに答えた。「料理店（レスタウランテ）〈パンチョ亭〉とその著名なる主人（パトロン）、エル・ドン・ハイメの名誉と威信を高めるお手伝いをさせていただき、実に光栄至極です」

実をいうと、わたしにとっては、流し場を改善しないでいるほうが難しかったのだ。わたしが引きついだとき、床は一見土間のようだった。そして実際そうだった――ジャガイモが植えられそうなほどだ！――だが汚い泥をどかしてみると、およそ二分の一インチほど下は固いコンクリートだった。わたしはきれいに掃除をし、きれいなままに保った――わたしは依然として裸足だったのだから。それからゴキブリ取り粉を要求した。

毎朝、わたしはゴキブリを殺し、床を掃除した。毎晩、その日の仕事を終える直前に、ゴキブリ取り粉をまき散らした。ゴキブリを退治するのは不可能だ（と思う）が、ゴキブリどもと戦って引分けにもちこみ、やつらに退却を余儀なくさせて、活動を控えさせることは可能である。

わたしの皿洗いの腕のよさについて言えば、上手にならないわけにはいかなかったのだ。わたしの母はひどい不潔恐怖症だった。わたしは、大家族の中での自分の立場ゆえに、母に監視されながら七歳から十三歳まで皿を洗ったり拭いたりしていた（十三歳で新聞配達をはじめたので、皿洗いをする時間がなくなり、やっと皿洗いを卒業したのである）。

しかし、皿洗いが上手だからといって、わたしがそれに熱中したと思わないでほしい。子供のわたしにとって、皿洗いはまさにうんざりする苦業だった。大人になった今も、やはりうんざりする仕事であることに変わりはない。

それなら、なぜわたしはその仕事をしたのか？　なぜ逃げ出さなかったのか？

理由はきわめて明白である。皿を洗っていればマルガレーテと一緒にいられるからだ。債務者には、夜逃げする道もひらけている。闇夜に姿を消した債務者の行方をわざわざ手間ひまかけて突きとめる債権者はいないだろう。だが、金髪であるだけで目立ってしまうこの国で、その金髪女性とスペイン語のまったく話せない男とのカップルが隠れ住むのは不可能だ。

わたしもマルガレーテもせっせと働いた――火曜日を除く毎日午前十一時から午後十一時までが勤務時間で、形式的には二時間の昼寝休み（シエスタ）がある。それと、昼食と夕食のための時間がそれぞれ三十分ずつ。つまり、残りの十二時間と、火曜日のまるまる一日がわたしたちだけの時間だ。

それはナイアガラの滝観光にまさるハネムーンであった。料理店の建物の裏手にあるちっぽけな屋根裏部屋がわたしたち二人の部屋だ。暑い部屋だったが、昼間の暑いさかりにはあまり使わなかったし、日中どれだけ暑かろうと夜の十一時には過ごしやすくなっている。マサトランでは、われわれの社会階級（文無し！）の人間の家にはほとんどガス・水道がないのだが、わたしたちは料理店に住み込みだったため、勤務時間中は他の従業員たちと一緒に水洗トイレが使えたし、残りの十二時間はわたしたちだけで使えた（外の裏手に汲み取り便所もあり、わたしは時どき勤務時間中に利用した――マルガレーテは絶対に使わなかったようだ）。

従業員用トイレと背中合わせになっている一階のシャワーも使えた。また、流し場でお湯を大量に使うので、その

建物には大きな湯沸かし器がついていた。セニョーラ・バレラは、わたしたちがお湯を使いすぎるとしょっちゅうガミガミ言ったが（「ガス代はただじゃないのよ！」）、わたしたちは黙って傾聴するだけで、好きなだけお湯を使いつづけた。

　わたしたちの主人（パトロン）が国とかわした契約によると、かれはわたしたちに食べ物と住むところを与えなければならなかった（それに、法の名において、衣服もだ。しかしわたしは、そんなことをまったく知らなかった。知った時にはもう、どうでもよくなっていた）。それでわたしたちは、そこで眠り、そしてもちろん、そこで食事をした――料理長（シェフ）の特製料理ではなかったが、なかなかいい食事だった。〝愛あるところにて野草を夕餉にするは、憎しみと共に肥たる雄牛を食うにまされり〟という。わたしたちはお互いに相手がいるだけで充分だった。

　マルガレーテは時どきチップを――特にアメリカ人から――もらうので、少しずつ現金を貯めていった。二人ともその金はできるだけつかわないことにした。彼女は自分たちのために靴を一足ずつ買い、あとは二人がペオンの身から自由になって北へ行ける日に備え、貯蓄した。わたしは、北方の国がわたしの生まれ故郷であるという幻想は抱いていない……しかし、この世界におけるあの国は、わたしの世界におけるわたしの祖国にあたるものだ。国内では英語が使われているはずだし、その文化も自分が慣れ親しんだものに近いに違いないと、わたしは確信していた。

　マルガレーテが貰ったチップのことで、わたしたちは第一週目にセニョーラ・バレラと衝突した。わたしたちの法律上の雇い主はドン・ハイメであるが、料理店のオーナーはセニョーラ・バレラなのだそうだ――少くとも、コックのアマンダの話では、そういうことだった。ハイメ・バレラはもともとヘッド・ウェイターで、オーナーの娘と結婚したのだ。したがってかれは死ぬまで〝給仕頭〟でしかないのである。義理の父親が亡くなり、表むきは主人になったものの、財布の紐を握って現金の出し入れをがっちり管理しているのは、夫人のほうなのだ。

（おそらく、次のこともつけ加えておいたほうがいいだろう……かれがわたしたちにとって〝ドン・ハイメ〟であるのは、かれがわたしたちの主人（パトロン）であるからである。かれは世間一般に対しては〝ドン〟ではない。尊称の〝ドン〟にあたる言葉は英語にはない。料理店の所有者であってもドンにはなれない――しかし、たとえば、判事ならドンになる）

　マルガレーテがチップをもらったところを初めて見たセニョーラ・バレラは、そのチップを自分に渡せと命じた――

――その代わり、毎週の週末に歩合を支給すると言う。

マルガレーテは流し場のわたしのところへそっと寄ってきて言った。

「アレック、どうしたらいいかしら？ 〈コンゲ・クヌート〉にいたときは、チップがあたしの主な収入源だったし、誰もあたしにチップの分け前をよこせなんて言わなかったわ。あの女にこんなことを主張する権利があるのかしら」

わたしは彼女にこう言ってやった。「そのチップはセニョーラに渡さなくていい。そして、こう言っておくんだ――この件については、今日の仕事が終わってから、改めてよく話し合いましょうってね」

ペオンでいることには一つ利点がある。ボスにさからっても首にはならないのだ。解雇することは確かに可能だが……そんなことをすれば、バレラ夫妻はわたしたちにつぎこんだ数千ペソを無駄にしてしまうことになる。

その日の仕事が終わるまでに、わたしは何をどう言うか、はっきりと心に決めた――いや、マルガレーテがどう言うべきかを、だ。わたしがどうにか必要最少限の会話ができるほどスペイン語を覚えたのは、それから一カ月も後のことである。

「旦那様、奥様、わたしのいただくものについてのこの取決めは理解できません。わたしたちは、判事に会って、契約書に何と定めてあるか確かめてみたいと思います」

案の定、バレラ夫妻は判事と会いたがらなかった。夫妻には合法的にマルガレーテの労力を要求する資格はあったが、第三者から彼女に与えられた金を要求する権利はなかったのだ。

しかし話は決してこれでおしまいにはならなかった。セニョーラ・バレラは、たかがウェイトレス風情にたてつかれた……と、ひどく腹を立て、〝ノー・プロピナス――チップ無用〟の看板を出すと同時に、メニューにもそう書きこんだのである。

ペオンではストライキはできない。しかし店にはあと五人ウェイトレスがいて、そのうちの二人はアマンダの娘たちだった。セニョーラ・バレラは、チップをもらうなと命じたその日、ウェイトレスは一人（マルガレーテ）だけしかおらず、厨房には誰もいない現実に直面するはめとなった。セニョーラは降参した。しかし、わたしたちを絶対に許しはしないだろう。

ドン・ハイメはわたしたちを従業員として扱い、かれの妻はわたしたちを奴隷として扱った。〝賃金の奴隷〟という昔ながらの表現は、わたしたちには当てはまらない。わたしとマルガレーテは、借金を返済するまでは忠実な従業員たるべく努めるつもりだが、奴隷になることはきっぱり

と拒絶している。こうしてセニョーラ・バレラと悶着をおこすのも当然の帰結なのだ。

チップのことで揉めてほどなく、マルガレーテはセニョーラがわたしたちの寝室をこそこそ覗いていると確信するようになった。本当にそうだとしても、それを阻止する方法はなかった。ドアには鍵がなかったし、わたしたちが働いている間、夫人は誰にも憚る（はばか）ことなしにわたしたちの部屋にはいれるのだ。

わたしは何か罠でも仕掛けようかと思ったのだが、マルガレーテがその考えに反対したのでやめにした。彼女はただ、それ以後お金を肌身離さぬようにするだけにとどめた。しかし、マルガレーテが金を盗まれぬよう予防策をこうじる必要があると考えたということは、わたしたちが〝女主人（ペトローネス）〟のことをそういう人間だと見なしたということだ。

わたしたちはセニョーラ・バレラに自分たちの幸福の邪魔はさせなかった。また、わたしたちはまだ〝結婚している〟と言えるかどうか疑わしい状態ではあったが、だからと言って、このいささか変則的なハネムーンを台なしにしようともしなかった。いや、わたしの方は〝とかく物事を分析し、くよくよと思い患う〟習癖のゆえに、危うくそうしかけたのであるが、わたしよりもはるかに現実主義的なマルガレーテが、そのような分析の必要を認めなかったのである。わたしは、一夫多妻が禁じられているのは単に現代の法と慣習に基づくのみであって、聖書によって禁じられているわけではない……と、自分たちの関係を正当化しようとした——すると彼女は、ソロモン王に正妻や側妾が何人いようと自分の知ったことではない（ソロモン王には妻七百人、妾三百人がいた、と旧約聖書の列王紀略上は伝えている）……ソロモンだろうと、また他のどんな旧約聖書の登場人物だろうと自分の行動の規範とする気はない……と、わたしの屁理屈に拒絶反応を示した。要するに、あたしたち二人が一緒に暮らしたいから、そうするだけの話じゃないの。それとも、あなた、このあたしが嫌いになったの？　そうなら、そうと、はっきり言ってちょうだい！

わたしは口をつぐんだ。あれこれ言葉を重ねずに、そっとしておくのが一番いい問題もあるのだ。現代人はなんでも〝口に出して〟言わなければならないという強迫観念を持っている。だが、口に出したことが正しい解決策であるか否かの割合は半々なのだ。

しかし、一人の男が二人の妻を持つことの合法性に関する聖書の権威を、彼女が頭から馬鹿にしているので、わたしはあとで彼女に訊（き）いてみた——一夫多妻についてではない。その扱いにくい話題には立ち入らず、一般的にいって聖書の権威をどう思っているかと尋ねたのだ。わたしは自

分の属する教派が厳密な解釈――穴(ホール)だらけの聖書ではなく、完全(ホール)な聖書の、だ――を重視している事実を説いた。聖書は文字どおり神の言葉だ……しかし世の中には、綴られた文面よりも精神の方を重んじる教派もある……自由主義的(リベラル)で、聖書など気にもとめぬ人びともいる……それでいて、この人たちも、みなキリスト教徒と名乗っているのだ……。

「愛しいマルガレーテ、ぼくは〈良識教会連合(CUD)〉の事務局次長として、全国のプロテスタント諸派のメンバーと毎日接触していた。また、多くのカトリックの聖職者とも連絡を取り合って、共同戦線を張る話を進めていた。ぼくの学んだことは決して、ぼくの教派だけが独占している美徳じゃないんだよ。人間はね、たとえ、その宗教的基盤がさまざまなものであったとしても、善良な市民にして敬虔なキリスト教徒になれるんだ」

くっくっと思い出し笑いをしながら、わたしは話を続けた。「あるいは逆の表現をすれば、ぼくに対するカトリックのマハフェイ神父の言葉になるな――「きみだってなんとか天国に潜りこめるさ。無限の英知をお持ちのわれらの主は、プロテスタントの無知と頑迷固陋さをお許しになるだろうからね」ってやつだ」

この会話を交わしたのは火曜日のことだった。その日は週に一度の料理店の閉店日で、わたしたちの休日だった。わたしたちはエル・セロ・デ・ラ・ネベリア――〈アイスボックス丘〉だが、スペイン語のほうが聞こえが良い――の頂上に登り、ちょうど弁当を食べおわったところだった。この丘は商業地区にあり、〈パンチョ亭〉にも近く、牧歌的なオアシスだった。市民たちは、スペインの習慣に従って丘を公園化し、建物を建てなかったのである。しあわせな場所だ――

「ねえ、きみ、ぼくはきみをぼくの教派に改宗させようとしているわけじゃない。ただ、きみのことをできるだけたくさん知りたいだけさ。改めて考えてみると、ぼくだってデンマークの教派のことはあまり知らないんだ。大部分がルター派なんだろ？　でも、デンマークにだって、ほかのヨーロッパ諸国と同じように、デンマーク独自の国教会があるはずだ。どっちにしても、きみの教派は何だい。厳密に解釈するほうか、それともリベラルか――もう一度言うが、どっちにしても、きみ自身は自分の教派についてどう感じている？　おっと、マハフェイ神父の言葉も忘れないでおくれよ――じつは、ぼくも神父と同意見なんだから。ぼくの教派だけが天国へ通じる扉だとは思ってやしないさ」

わたしは手足を伸ばして寝そべり、マルガレーテは座って膝小僧を抱き、西の方を向いて遠くの海をじっと見つめ

ていた。わたしから顔をそらすような姿勢である。わたしの問いかけにも応答しない。わたしはもう一度、優しく声をかけた。
「ねえ、きみ、ぼくの声が聞こえないのかい?」
「聞こえたわ」
さらに待ったのち、わたしはこう言いたした。「もしぼくが、いらぬ詮索をしたのなら、悪かった。質問はひっこめる」
「いいえ。いつかは答えなきゃいけない日がくることは、わかっていたわ。アレック、あたし、キリスト教徒じゃないの」彼女は手を放して膝を伸ばし、くるりと振り返ってわたしの眼を見つめた。「あなた、あたしと別れてもいいのよ。結婚したのと同じぐらい簡単よ。ただそう言ってくれればいいの。あたしは黙って身をひくわ。でもね、アレック、あなたはあたしを愛していると言ったときも……そのあと、神前であたしたちは夫婦だと言ってくれたときも……あたしの宗教を尋ねなかったわ」
「マルガレーテ」
「なあに、アレック?」
「まず、その口を洗いなおして、それからぼくにあやまってほしいね」
「口を洗いなおすくらいのワインはまだビンの中に残っているでしょうよ。でもあたし、このことを黙っていたからといって、あなたにあやまるいわれはないわ。あたしはいつだって正直に答えるつもりだったのよ。あなたが訊かなかっただけよ」
「口を洗いなおせと言ったのは、別れ話を口にしたからだ。あやまってほしいと言ったのは、ぼくがきみと別れるだろうなんて考えが、けしからんからだ。どういう状況だろうと、きみと別れるものか。もしきみにいやなところがあればひっぱたくかもしれないが、それでも決してきみを放しはしない。富めるときも、貧しきときも、病めるときも健やかなるときも、とこしえに変わらず。女よ、我は汝を愛す! このことをきみの頭に叩きこんでくれ」
マルガレーテはいきなりわたしの腕の中に飛び込んで、啜り泣きはじめた。彼女が泣くのはまだ二度目である。わたしは自分にできる唯一のことを——つまり、キスを——した。
背後で囃したてる声がした。わたしは首をそちらに向けた。週日でたいていの人びとは仕事中なので、丘の頂上にいるのはわたしたち二人だけだったのだが、見ると二人の浮浪児がわたしたちを見物していた。幼なすぎて男の子だか女の子だかよくわからない。わたしに見つかると、二人のうちの一人がまたわっと囃し、キス音を大きくたてた。

「あっちへ行け！」わたしは大声で言った。「邪魔だ！　バイヤ・コン・ディオス（スペイン語の別れの挨拶。"さようなら、お元気で"の意）！　これでよかったっけ、マルガ？」
彼女はなんとか言い、二人はますます甲高い声でキャッキャッと笑って、逃げていった。
この中断はありがたかった。愚かではあるが勇気ある告白をした彼女の気持ちを、ただちに落ち着かせる必要があった。だからこそ、わたしは言わなければならないことを言ったのだ。だがそれにもかかわらず、わたしは心の底から動揺していた。
わたしは口を開きかけて、思いなおした。今日はしゃべりすぎだ。しかしマルガレーテも口をきかなかった。沈黙がしだいに苦痛になってきた。事態をこんなあぶなっかしい状態のままにしておくのはよくない、とわたしは思った。
「ぼくの大事なきみ、きみの信仰はなに？　ユダヤ教かい？　デンマークにもユダヤ人がいたことを今やっと思い出したよ。デンマーク人がみんなルター派だとはかぎらないだろうし」
「ええ、ユダヤ教徒もいるわ。でもせいぜい千人に一人よ。ちがうの、アレック。その……もっと古い神々がいるの」
「エホバよりも古い？　まさか」
マルガレーテは何も言わなかった――彼女はいつもそうだ。意見の合わないときはいつも黙ってしまう。どうやら、論争に勝つことには興味がないらしい。その点で彼女は人類の九十九パーセントと絶対的に違っている……多くの者が、論争に負けるよりはむしろ、いかなる災難でも甘受する道を選ぶものだ。
そこでわたしは、論争が栄養不良で死なないよう、両方の意見を一人で述べなければならなくなった。
「いま言ったことは取り消す。"まさか"なんて言うべきじゃなかった。ぼくは、アッシャー僧正によって計算され、一般に認められている年代学に基づいてしゃべっていたんだ。アッシャー僧正の年代算定を認めるとすると、次の十月に、世界が創造されてから五千九百九十八年目になる。もちろん、〈神の書〉には年代そのものの記述はない。ヘイルズは別の数字を出している。たしか、七千四百五年だったと思う――数字を書きとめておけばよかったな。ほかにもいろんな学者たちが少しずつ違った数字を出している。
しかし、紀元前四千年ないし五千年のころに、たった一度だけの出来事である〈天地創造〉が行なわれたという点では、全員が一致している。エホバが世界を創造したもうた時、世界とともに時間も創造された。〈時〉はそれ自体だけでは存在しえない。したがって必然的に、いかなる物体も、いかなる人間も、いかなる神も、エホバより古いこ

とはありえない。なぜならエホバが〈時〉を創りたもうたのだから。わかるね？」
「言わなきゃよかったわ」
「きみ！　ぼくはただ、知的な討論をしようとしているだけだ。きみを傷つける気持ちなど、今までにもなかったし、今も、これから先も、決してない。ぼくが言ったのは、オーソドックスな年代算定法によるとそういうことになる、ということだ。明らかに、きみは別の方法を使っているんだね。それを説明してくれないか？　そして、あわれなアレックスが口を開くたびに突っかかってくるのはやめてくれないか？　ぼくは、教会の牧師として、説教の強調法を教えこまれている。ぼくにとって討論は、魚にとっての泳ぎ同様に自然な動作なのだ。でも今度はきみが説教する番だ。ぼくはちゃんと聴く。そのもっと古い神々のことを教えてくれ」
「あなたも知っているはずよ。最も古く、最も偉大な神を、あたしたちは明日お祝いするの。一週間の真ん中の日が、神の日よ」
「今日は火曜、明日は――水曜日（ウェンズデイ）！　ウォータンか！　かれがきみの神なのか？」
「オーディンよ。〝ウォータン〟は古ノルド語（中世スカンジナビアで使われたゲルマン語）のドイツ語訛よ。〈父なるオーディン〉とかれの二人の兄弟が世界を創ったの。劫初には〈虚無〉があり――残りはほとんど創世記と変わらないわ。アダムとイヴの話に至るまで――でもアダムとイヴでなくて、アスカーとエムブラというのよ」
「おそらく、それこそ創世記なんじゃないか、マルガレーテ」
「どういう意味なの、アレック？」
「聖書は神の御言葉（みことば）だ。ジェイムズ王の欽定訳聖書として知られる英語版は、とりわけそうだ。欽定訳聖書の言葉は、ひと言残らず、世界最高の学者たちの最善の努力と祈りに支えられているのだからね――意見がくい違うと、学者たちは直接、主に祈って答えを求めたのだ。だからジェイムズ王聖書は神の御言葉だ。
　しかし、それが唯一の神の御言葉であるとは、どこにも書いてない。別の時代に別の言葉で書かれた別の民族の神聖な書物もまた、神の霊感をうけた史書でありうる……もしそれが聖書と合致するものであれば、だ。きみがいま言ったのはそういうことだろう？」
「いいえ、〈天地創造〉とアダムとイヴだけよ、アレック。年代がまるで合わないわ。あなた、この世界が六千年前に創られたっておっしゃったでしょう？」
「およそね。ヘイルズはもっと昔だと言っている。聖書に

は日付がない。日付をつけるのは近代の発明なんだ」
「古いほうをとっても——ヘイルズとか言ったわね——まだまだ短かすぎるわ。十万年と言ったほうがいいわ」
きみは間違っている……危うく、そう言いかけた。話の桁が違いすぎる。とうてい、受け入れることはできない。しかし、マルガレーテに口をつぐませるようなことは何も言うまい、と自戒したのを思い出した。
「話を続けたまえ。きみの教典には、その永い年月のあいだに起こったことが書いてあるのかい？」
「過去のほとんどは、文字が発明される以前のことなのよ。いくつかの事件は、吟遊詩人の歌った叙事詩に残されているけど、それだって人間が部族社会の生活をするようになり、オーディンがかれらに歌を教えてからのことだわ。〝霜の巨人たち〟がこの世を支配していた時代がいちばん長かったの。人間が、面白半分に狩られる野性の獣以上のものになったのは、そのあとのことだわ。でもアレック、年代学のほんとうの相違はこうなの。聖書の記述は〈天地創造〉に始まって〈審判の日〉に至り、それから〈千年期〉（再臨したキリストがこの世を統治する千年間）——地上における神の王国——そして〈天界の戦い〉と世界の終末（千年期のあと、サタンの軍勢が勢いを盛りかえすが、天の火に焼き滅ぼされる）……そのあと〈聖なる都〉と〈永遠〉（古い天地が消滅し、新しい天地が生まれ、聖なる都〝新しきエルサレム〟が天より降って神と聖徒たちの都となる）——そして、時が止まる、という順序ね。そうでしょう？」
「うん、まあそうだ。終末論の専門家は簡略化のしすぎだというかもしれないが、大筋はきみの言ったとおりだ。詳しいことは黙示録に記されている——正確に言えば『神の使徒なる聖ヨハネの黙示録』だ。終末を目撃した預言者は多いが、完全にそれを見とどけたのはヨハネだけだ……なぜなら、キリストご自身が、神の民が偽預言者に惑わされるのを止めさせるために、ヨハネに黙示をお与えになったからだ。天地創造……神の恩寵からの堕落（アダムとイヴが知恵の木の実を食べたこと）……何世紀にもわたる苦闘と試練の日々……最後の戦い……そのあとに審判と神の国がくる。きみの教えはなんと言っているのかい、マルガレーテ？」
「最後の戦いはハルマゲドンでなくて、ラグナロクというの——」
「どういう用語を使うかは問題じゃないと思うが」
「お願い、黙ってて。用語は問題じゃないけど、何が起こるかは問題だわ。あなたの〈審判の日〉には、山羊が羊と分かたれる。救われたものは永遠の祝福をうけ、地獄に堕とされたものは永遠の罰をうける。そうね？」
「そうだな、科学的正確さを期するために言っておくが、その道の権威者の中にはこんなことを言っている人もある——『祝福は永遠だが、神はこの世界を深く愛しておられ

るので、地獄に堕ちた者もいずれは救われる。絶対に罪を許されぬ魂はない」とね。これを異端とみなしている神学者もいるが――ぼくはこの考えに心をひかれている。永遠の断罪という考え方は、どうも好きになれないんだ。ぼくは感傷主義者(センチメンタリスト)なのでね」

「わかっているわ、アレック。あなたのそういうところが好きなの。あなたもきっと、古い宗教が気にいるわ……永遠の断罪がないんですもの」

「ないんだって?」

「そうよ。ラグナロクでは、あたしたちの知っている世界は滅びるけれど、それで終わりじゃないの。永い時間が過ぎたあと、治癒の時がきて、新しい宇宙が創造されるのよ。この世界のもろもろの悪を知らぬ、もっと清浄で、もっと良い世界が。その世界もまた、数えきれぬほど永いあいだ続いて……やがて再び、悪と寒冷の力が善と光の力と戦って……再び休息の時がきて、そのあとに新たな創造が行なわれ、人類にもう一度チャンスが与えられるの。何も終わらないし、何も完成しない。でも人類には常に前回よりも良くなる可能性が与えられる。それが何度も何度も繰り返され、決して終わることはないの」

「きみはそう信じているのかい、マルガレーテ?」

「キリスト教の教えにある、救われた者の独善と呪われた者の絶望的な苦境よりも、こっちのほうが信じやすいわ。エホバにはすべての力があると言われているわね。もしそれが真実なら、あわれな魂が地獄へ堕ちるのも、そうなるようにエホバがこまごまとした計画を立てたからじゃない? どうなの?」

わたしは口ごもった。神の全知全能性と無辺の慈悲を論理的に調和させるのは、イエズス会士さえ歯を折りそうなくらい厄介な神学上の問題である。

「マルガレーテ、全能者の神秘のいくつかは、簡単に説明できることではない。われわれ、死すべき人間は、神の御(み)業(わざ)をいつも理解できるとは限らないが、それでも〈われらの父〉の慈悲深い意図を受け入れなければならない」

「岩に頭をぶつけられた赤ん坊も、神の慈悲深い意図を理解しなければいけないの? そして神の無辺の知恵と善をたたえながら、まっすぐ地獄におちるの?」

「マルガレーテ! いったい全体、なんの話だ?」

「旧約聖書のなかに、エホバが赤ん坊を殺せと直接命じているところがある、という話よ。神は時どき、赤ん坊を岩にぶつけて殺せと命令しているのよ。〝われらバビロンの河(かわ)のほとりに――〟で始まる詩をごらんなさい。* ホセア書の中の主エホバの言葉をごらんなさい。〝その嬰児(おさなご)は投げくだかれその孕(はら)みたる婦(おんな)は剖(さか)れん〟** それにエリシャと熊の

事件もあるわ。***アレック、あなたは本当に、年寄りのはげあたまをからかったというだけの理由で、神が熊に小さな子供たちを引き裂かせたと信じているの？」

＊詩篇第一三七篇〝……なんじの嬰児をとりて岩のうえになげうつものは福いなるべし〟

＊＊ホセア書第一三章一六節。ホセアは預言者の一人で、神に対する背信行為を厳しく非難した。

＊＊＊列王紀略下第二章二三節〜二四節〝……彼にむかいて禿首よのぼれ禿首よのぼれといいければ　かれ回転りてかれらをみエホバの名をもてかれらを呪詛いければ林の中より二頭の牝熊出てその児童等の中四十二人をさきたり〟

そう言って彼女は、口をつぐんで待った。

そしてわたしも待った。やがて、彼女は言った。

「牝熊と四十二人の子供たちの話は、神の御言葉ではないってわけ？」

「もちろん神の御言葉さ！　しかしぼくだって、神の御言葉を完全に理解しているわけじゃない。マルガレーテ、もしきみが主のなさったことを残らず詳しく説明してもらいたいと思うなら、神に祈って教えを乞うんだね。ぼくに文句を言われても困る」

「あなたに文句を言うつもりじゃなかったのよ、アレック。ごめんなさい」

「あやまる必要はない。ぼくだってこの熊の一件は理解できないが、だからといってぼくの信仰はゆるがない。ひょっとすれば譬え話なのかもしれない。しかし、きみの〈父なるオーディン〉にだって、ずいぶん血なまぐさい話があるじゃないか」

「スケールが違うわ。エホバは都市を次々と滅ぼしているのよ。男も女も、子供も、小さな赤ん坊まで一人残らずよ。オーディンが殺すのは自分と同じ大きさの敵と戦うときだけだわ。でも、なによりもいちばん大きな違いは、〈父なるオーディン〉は全能ではないし、全知であると主張してもいない点よ」

〈神学は、とかく厄介な論争点を回避してしまう――しかし主が全能でないならば、どうして主を〝神〟と呼べよう〉

彼女は話を続けた。

「あたしが愛しているのはあなただけよ、アレック。あたしはあなたの信仰を攻撃したくない。そんなことはいやだし、今までも全然そんなつもりはなかったし、これから先も、二度とこんなことが起こらなければいいと思っているわ。でもあなたが、〈神の書〉――聖書のことね――の権威を認めるかどうかと明からさまに問いかけてくれれば、あ

たしだって同じように明からさまに答えるしかなくなるわ。そんなのいや。旧約聖書のエホバとかヤハウェ（キリスト教の〝神〟の名を表わす〝神聖四文字YHWH〟）なんて、あたしには、ただのサディスティックな、血に飢えた殺人鬼としか思えないの。どうしてかれが、新約聖書の優しいキリストと同じ神でありうるのか、あたしには理解できないわ。たとえ、神秘的な三位一体説を介してでも」

　わたしは言い返そうとしたが、彼女は急いで先を続けた。

「ねえ、あたしの大事なあなた、この話題をきりあげるまえに、あなたに言わなくちゃいけないことがあるわ。あたし、ずっとあることを考えていたの。あたしたちの身に――あたしに一度、あなたに二度起こった、この奇怪な出来事……世界の変換……これはあなたの宗教で説明がつく？」

（それこそ、このわたしがずっと悩みつづけている疑問だ！）

「いや。正直いってわからない。聖書がここにあれば説明が捜せるんだがね。記憶をたどって捜してはいるんだが、今のところ、ぼくがこんな目にあう理由は全然発見できない」と、わたしは溜息をつき、「実に情ない気分だ。でも――」と、マルガレーテにほほえみかけた。「神の摂理はきみをぼくと共に置いた。どんな国でも、そこにマルガレーテさえいれば、ぼくには異邦ではない」

「ねえ、アレック、あたしがこの問題を持ち出したのは、古い宗教だと説明がつくからよ」

「なんだって！」

「愉快なものではないけれど。この周期（サイクル）の始まりにはロキが打ち負かされるの――ロキをご存じ？」

「いくらかね。わるさをするやつだ」

「〝わるさ〟なんてなまやさしいもんじゃないわ。ロキは邪悪そのものよ。数千年のあいだかれは捕えられ、巨大な岩に鎖でつながれているの。アレック、人間の歴史における周期（サイクル）の終末は、いつも同じように始まるのよ。ロキがなんとかして鎖から逃げる……そして混乱が起こる」

　彼女はこの上なく悲しげな顔でわたしを見た。

「アレック、こんなことを言うのは悪いけど……でも、あたし、ロキが野放しになったと確信しているの。いろんな証拠がそう示しているわ。いまや、どんなことでも起こり得るのよ。あたしたちは〈神々のたそがれ期〉に入ったんだわ。ラグナロクの到来よ。世界の終わり」

12

このとき大なる地震ありて都の十分の一は倒れ
地震のために死にしもの七千人にして
遺れる者は懼をいだき
天の神に栄光を帰したり
ヨハネの黙示録第一一章一三節

わたしは、アイスボックス丘での美しい昼下りにマルガレーテが語ったことをあれこれと考えながら、灯台二本目の皿を洗った。あれ以後は二度と、あの話題をマルガレーテの前で口にしていない。彼女のほうも決して、あの話はしなかった。マルガレーテは、理性が沈黙を命ずるときは、絶対にそれを守る女性なのだ。
　このわたしが、ロキとラグナロクに関する彼女の説を信じたのかとのお訊ねですか？　とんでもない！　いや、ハルマゲドンをラグナロクと呼ぶのはいっこうにかまわない。ジーザスでもジョシュアでもイエスでも、メアリでもミリアムでもマリアムでもマリアでも、エホバでもヤハウェでも――話し手と聞き手が同じ意味で使っているかぎり、言語シンボルは何でもかまわない。しかしロキとはね！　無知な蛮族の神話に出てくる半神が、全宇宙に変化をもたらしただと？　そんなばかな！
　わたしは現代人だ。心は広い――だが、その心は風が吹き抜けるほど空っぽではない。わたしたちの身に起こったゴタゴタについての理性的な説明は必ず〈神の書〉のどこかに載っているはずだ。なにも、遠い昔に滅びた異教の怪談をもちだす必要はない。
　あいにく、手もとには聖書がない。いや、三街区さきの聖堂にカトリックの聖書があることは確実だが……どうせラテン語かスペイン語だろう。わたしが欲しいのはジェイムズ王聖書だ。この町のどこかに何冊かあることもまた、確実だが――それがどこなのかがわからない。わたしは生まれて初めて宣教師ポール（ポール・バハニアス師）の完璧な記憶力がうらやましくなった。師は十九世紀の中ごろ、中央諸州を行脚し、聖書を持たずに神の言葉を説いた人である。ブラザー・ポールは、何書の第何章何節といわれればどの節でも暗誦することができ、また逆に、どの節を読み上げられても、何書の第何章何節かをピタリと言いあて

ることができるというので、大評判だった。

わたしは生まれた時代が遅かったので、宣教師ポールには会えなかった。だからこの話も、決してこの目で確かめたわけではない——しかし、完璧な記憶力は神がめったに与えたまわぬ特殊才能だが、わたしには、ブラザー・ポールにその才能があったことを疑うべき理由は何もない。ポールの死は突然で、いささか謎めいていた。おそらく罪深い死に方だったのだろう——〃人妻と二人きりでお祈りをするときは、慎重のうえにも慎重でなければならない〃とは、わたしの伝道研究の教授の言である。

わたしにはポールのような才能はない。創世記の冒頭の数章と、詩篇の中のいくつかの詩、ルカ伝のキリスト生誕の物語、それにあといくつかの節は、わたしにも暗誦できる。しかし現在の問題のためには、すべての預言をこまかく研究することが必要だ。とりわけ大事なのは〈ヨハネの黙示録〉として知られる預言である。

ハルマゲドンが近づきつつあるのか？　〈次の世〉が間近なのか？　このわたしは、生身のままで〈大いなる喇叭(ラッパ)〉の音を聞くことになるのだろうか？

ぞっとする考えだが、性急に棄ててしまえない考えでもある。その偉大なる日を生きたままで迎える者は何百万人もいるだろう。全能の主がその中にアレックス・ハーゲンシャイマーをお含めになることもあり得る。わたしは神の御声を聞き、死者が立ち上がるのを見、わたし自身が〃空におはす主に会うために、かれらと共に雲に乗せられ〃それから約束されていたとおり、永遠に主と共にすごすのだろうか？　聖書の中で最もスリリングな部分だ！

たとえわたしがその偉大な日を生きたまま迎えるとしても、わたし自身が救われる者の中にはいると確信しているわけではない。福音を伝える牧師の按手を受けているからといって、必ずしも救われるチャンスが高くなるわけではないのだ。聖職者はこの冷たい真実に気づいている（もし自分自身に対して正直なら、だ）が、一般の信徒は時どき、聖服を着ている人間のほうが有利だと考えるものである。大ちがいだ！　聖職者は言い逃れができない。〃あの銃に弾丸がこめてあるとは知らなかった〃と主張することは決してできないし、若くて未熟だからどうかお慈悲を、と言うこともできないし、法を知らなかったと主張することもできない。一般信徒なら、道徳的には完璧以下でも、なんとか救済してもらえそうな言い訳をいくらでもすることができるが、聖職者にはそのようなことができないのだ。

そのことがわかっている以上、わたし自身の最近の行ないをみると、わたしは救われる者の中にはいれそうもないと認めざるを得ない。確かに、わたしは新生(ボーン・アゲイン)した。こ

れは学位みたいに永久的な状態だと考えている人たちもいるようだ。ブラザー、そんなものをあてにするなよ！　近ごろのわたしが山ほどの罪（シン）をしょいこんでいることぐらい、いやというほどわかっているのだ。罪深いうぬぼれ。過度の飲酒。貪欲。好色。姦通。不信。その他いろいろ。

さらに悪いことに、わたしはこの中の最悪の罪に対してさえ、悔悟の念を抱いていない。

もしマルガレーテの行為記録が悪くて、天国にはいれる者のリストに上がっていないのなら、わたしも天国にいくことには興味がない。神よ助けたまえ、これが真実です。

それにしてもマルガレーテの不滅の魂のことが気にかかる。

彼女は、キリスト以前の時代のすべての魂に与えられる第二のチャンスを要求することができない。彼女はルター派の家に生まれたのだ。ルター派はわたしの派ではないが、わたしの派の、いやすべてのプロテスタントの始祖であり、〈ボルムス国会（ダイエット・オブ・ウォームス）〉（一五二一年にルターを異端者と決議した中世ドイツ国家ボルムスの議会）の最初の成果である（日曜学校の生徒だったわたしは、〈みみず（ダイエット）・料理（オブ・ウォームス）〉と聞いて、はなはだ神学的ならざるものを連想してしまった）。

マルガレーテが救われ得る唯一の道は、異端信仰の放棄宣言をし、新生を求めることだろう。しかしこれは彼女が自分でやらなければならない。わたしが代わってやれることではないのだ。わたしにやれそうな最善のことは、彼女に救済を求めるようすすめることだろう。だが、この上なく気をつけてやらなければならない。手に軽くとまった蝶を説得しようと思ったら、剣を振りまわしては駄目なのだ。マルガレーテは、ただ単に導いてやればいいだけの、キリストを知らぬ未開の異教徒ではない――いうなれば、キリスト教徒として生まれながら、自分の意志で棄教した人間なのだ。彼女はわたし同様いつでも聖書を引用できる――並の一般信徒の及ばぬほど、念を入れて聖書を勉強した時期があったのだろう。いつ、どうしてかは訊（き）かなかったが、それはきっと、彼女がキリスト教の信仰を捨てようと思いはじめた時に違いない。マルガレーテはとても真面目で善良なので、長い間熱心に勉強せずにそのような思いきったことをするはずがない……とわたしは確信している。

マルガレーテの問題は、どのくらい差し迫っているのだろうか。彼女の心を学び、最善の説得方法を案じ出すための時間が、まだ三十年ぐらいあるのか？　それともハルマゲドンが目前に迫っていて、たった一日遅れても彼女を永遠に破滅させてしまうのか？

異教のラグナロクとキリスト教のハルマゲドンの双方に

共通していることがある。最終戦争の前にはさまざまな兆候があらわれるのだ。われわれは、すでに、そのような凶兆(オーメン)を体験しているのだろうか？　マルガレーテは、凶兆が現われたと考えている。わたし自身についていえば、この〈次元転換〉がハルマゲドンの前兆であるという考え方は、もう一つの発想――すなわち、わたしが偏執病に冒されているという考え方――よりも、ずっと気に入っている。ただわたしに指紋照合をさせないだけのために、船が難破し、世界が変わるだろうか？　あの時は確かにそう思ったのだが――いやいや、アレックス、おまえはそれほど重要人物じゃないよ。

（それとも、重要人物なのかな？）

わたしは決して千年期(ミレニアム)信者ではない。聖書の中、とりわけ預言の中に一千という数字がちょくちょく出てくることは、わたしもよく知っている――だが、たかが神秘数学者を喜ばせるだけのために、全能者が余儀なくあるパターン――一千だろうと、他の数字だろうと――に合わせて御業(みわざ)をなされたとは、とても信じられない。

一方、何千もの良識的で敬虔な人びとが、やがて来る第二〝千年期(ミレニアム)〟の終わりを非常に重要視していることも知っている。〈審判の日〉とハルマゲドンと、それに続くもろもろのことがその時に起こると予期しているのだ。その人たちは聖書の中に自分たちなりの証拠を見出しており、また自論が、大ピラミッドの中の碑文や各種の聖書外典の記述によっても裏づけられている、と主張する。

しかし千年期(ミレニアム)の終末については、その人たちの間でも意見が分かれている。西暦二〇〇〇年か？　二〇〇一年か？　それとも正確には、二〇三〇年四月七日、エルサレム地方時の三時か？　もし学者たちが、キリストの磔刑――および、死の瞬間の地震――のあった日時を本当に知っておれば、世間で通用している日付を正しく直せるだろうに。それとも、太陰暦で計算した二〇三〇年の聖金曜日（復活祭の前の金曜日で、イエスの死を追悼する日）になるのだろうか？　年月日を定めるとなると、これは決して些細なことではない。

しかしながら、千年期(ミレニアム)を数えはじめる起点として、キリストの磔刑の日でなくて生誕の日をとるならば、子供っぽい西暦二〇〇〇年という年も、それよりちょっぴり子供っぽくない二〇〇一年という年も、どちらも第二〝千年期〟の終わりではない事実がただちに明らかとなる。なぜなら、イエスは紀元前五年のクリスマスの日にベツレヘムで生まれたのだから。

教育を受けた人間なら誰でもこの事実を知っているが、誰もこれについては深く考えようとしないようだ。

いったいどうして、すべての歴史の中で最も偉大なる出来事である、われらの主の化身の誕生日が五年も間違ったのか？　信じられぬことだ！

それが実は、簡単なことなのである。六世紀のある僧が計算を間違ったのだ。われわれが現在使っている西暦（AD＝〝主の年(アンノ・ドミニ)〟以後）が使われだしたのは、キリスト生誕後何世紀も経ってからのことである。礎石にローマ数字で刻まれた日付を解読しようとした経験のある者なら誰だって、ブラザー・ディオニシウス・エクシグウスの誤りに同情するだろう。六世紀には、そもそも字の読める人間がほとんどいなかったので、誰もこの誤りに気づかぬまま何年も経ってしまい――わかったときには、すでに手遅れで、もはや全記録を書きかえるのは無理だった。そこで、キリストが生まれる五年前にキリストが生まれたという滑稽なことになってしまったのである――この矛盾は〝一方の節は事実を述べているが、もう一方の節は事実に反する暦に基づいている〟という事実に気づいて初めて解くことができる。

二千年の間、善良な僧のこの間違いはたいして重要視されず、ほとんど無視されつづけてきた。しかし今や、これが最高に重要な意味を持つこととなった。もし千年期(ミレニアム)信者の説が正しければ、世界の終末は今年のクリスマスの日に訪れてしまうのである。

わたしが〝十二月二十五日〟と言わなかったことに、どうか気づいてほしい。キリスト生誕の月日は知られていないのだ。マタイは、当時の王がヘロデだったと伝えている。ルカは、アウグストゥスがローマ皇帝で、キレニウスがシリア総督だったと述べている。そして誰でも知っていることだが、ヨセフとマリアはわざわざナザレからベツレヘムまで旅してきて、住民登録を受け、税金を払わされているのだ。

聖書にもローマの民政記録にも、それ以上のデータはない。

これでおわかりだろう。千年期(ミレニアム)信者の説によれば、最後の審判が行なわれるのは今からおよそ三十五年後かもしれないし、あるいは、ひょっとしたら今日の夕方かもしれないのだ！

マルガレーテがいなかったら、わたしは、この不確かさのゆえに幾晩も眠れぬ夜を過ごすこともなかったであろう。しかし、愛する女性に、地獄の底なし穴に投げ込まれて永遠に苦しみつづける危険が迫っていると知っては、どうして眠っていられよう。

あなたなら、どうなさいますか？

わたしが油ぎった床に裸足で立ち、負債を支払いおえるために皿を洗いながら、あれこれと物思いにふけっているところを想像してほしい。お笑い草だ！　しかし皿洗いはあんまり頭を使う仕事ではない。固いパンを嚙みつづけるように、考えごとをしつづけているほうが頭のために良いのだ。

　時どきわたしは、ついこのあいだまでの自分と、今のみじめな状態とを比べ、いつの日にか、この迷路を抜けて、自分で築きあげた地位に戻れるだろうか……と考えた。

　本当に戻りたいのか？　向こうにはアビゲイルがいる――そして、一夫多妻は旧約聖書では認められているものの、四十六の州では認められていない。それはすでに結着のついたことだ。連邦陸軍の大砲はソルトレーク・シティの反キリスト寺院を破壊し、陸軍は躍起になって不道徳な〝家族〟を分解し、離散させた。それっきりである。

　アビゲイルのためにマルガレーテをあきらめるのは、あまりにも高すぎる代価だ。それを支払ってまで、元の地位や権力を取り戻したいとは思わない。とはいえ、ついこの間まで、わたしは自分の仕事を楽しんでいたし、自分のあげた業績に深い満足を覚えていた。われわれの組織は、創設以来最良の年を迎えていたのだ――わたしが言っているのは、非営利団体〈良識教会連合(CUD)〉のことである。〝非営利〟というのは決して、この種の団体が妥当な給料を出せないという意味ではない。給料だけでなくボーナスだって出る。前年度は創設以来最高額の活動資金が集まったので、わたしは当然の報酬として休暇をとった――この成果が主として、わたしの手柄だったからだ。事務局次長たるわたしの第一の職務は金庫を常に一杯にしておくことだったのである。

　しかしわたしは、内心、専門分野での働きのほうに、より多くの満足感を覚えている。もしわれわれが人びとの魂を幸福にすることを目ざさなかったら、いくら金を集めても意味がないではないか。

　前年度中に獲得した成果は次のとおりだ――

(a)　妊娠中絶を死刑相当罪とする連邦法の制定。

(b)　すべての避妊薬もしくは避妊器具の製造・販売・所有・輸出入および／もしくは使用を、一年と一日以上二十年以下の懲役刑相当罪とし、〝疾病予防のためのみ〟なる偽善的口実はいっさい認めないとする連邦法の制定。

(c)　賭博を必ずしも廃止するものではないが、連邦当局がこれを管理し、認可するという連邦法の制定。これは一歩前進だ――この基本法が成立したからには、ネバダとニュージャージーの二大関門を攻撃し、少しずつ突きくずすことができる。まず、敵を分断し、そして征服するのだ！

(d) われわれが法廷助言者として立ち会った公判における〝州内平均値もしくは中位値の人口を持つ地域社会の宗教集会基準を、各州の全市町村に適用すべし〟とする最高裁判決の獲得（〝ドムキンス〟対〝新聞販売業者同盟〟訴訟）。

(e) 煙草を〝燃焼させ、かつ吸入する物質〟と定義することにより嗅ぎ煙草と嚙み煙草を問題の対象から除外する戦術を通して、煙草を処方薬剤に指定する運動を大きく前進させたこと。

(f) 毎年恒例の全国祈禱大会において、わたしの関心あるいくつかのテーマで進歩がみられたこと。一つは、キリスト教のどの派とも無関係な私立学校の税金免除を取り消す方策の件。この件に関する政策はまだ完全ではない——というのも、カトリック校という扱いにくい問題があるからだ。われわれの傘をかれらの上にも差しのべるべきか？それとも、今は攻撃すべき時なのか？　カトリック教徒たちは味方なのか敵なのかということは、われわれ第一線にいる者たちにとって常に重大問題である。

それに劣らず難しいのがユダヤ人問題だ——人道的な解決は可能か？　もし不可能とするならば、どうすればいいのか？　われわれは火中の栗を拾うべきか？　この件は非公開でしか討議されていない。

もう一つ、わたしが特に気に入っている計画がある。天文学者たちをくじくことだ。天文学者たちがどれほど有害な存在になっているか。これを理解する一般信徒はほとんどいない。わたしが初めてそれに気づいたのは、まだ工業学校にいたころ、記述天文学のコースをとったときのことである。教養課程の必修科目だったのだ。天文学者に大型望遠鏡を与え、監督せず野放しにしておくと、連中が最初にやらかすことは、疫病のように有害で現実離れした当て推量に溺れて堕落し、創世記という古代からの真実を否定しはじめることだ。

この種のナンセンスに対処する方法は一つしかない。敵の懐中へ飛びこむのだ！　〝教育施設〟なる言葉を定義しなおして、あの白い巨象——天文台——を締め出すのだ。税金免除の対象は海軍観測所だけに絞り、職員の定数を減らし、かれらの活動を、明白に航海術に関するものだけに限定することだ（最高度に冒瀆的かつ有害な理論の発生源が在職中の公務員である場合も少くない。この連中は充分な仕事がなく、暇をもてあましているのだ）。

自称〝科学者〟たちは、いつだってろくなことをしないものだが、なかでも天文学者は最悪である。

毎年、祈禱会のたびに必ず提起され、わたしとしてはあまり金や時間をかけたくない議題に、〝婦人参政権〟の問

題がある。〝婦人参政権論者〟と称するヒステリックな女どもは、まったく無意味な存在で、勝ち目はない。あの連中はただ単に自分を目立たせたいがために、あのようなことをやっているのだ。あいつらを監獄に入れたり、さらし台にかけたりしてはいけない——絶対に殉教者にするな！　無視することだ。

議題として採択しなかったが、興味深く、かつ、やり甲斐のある目標は、他にもいくつかあった。自分が議長役をつとめた例会で、それらを議題として採り上げなかったわたしは〝翌年の議題〟リストを作っておいた——

男女別学。

魔術と悪魔崇拝に対する死刑の復活。

黒人問題解決のためのアラスカ移住案。

連邦による売春規制。

同性愛——解決策は？　刑罰か？　外科手術か？　その他に解決策は？

自分を公衆道徳の守護者に仕立て上げるもっともらしい口実は、いくらでもある——問題なのは、何を、どう選べば、神の偉大な栄光に近づけるかであろう。

しかし今のわたしには、どれもこれも魅惑的だったこれらの問題を追究する機会が、二度と訪れないかもしれない。

こうして必死にこの土地の言語を（文法などは絶対に無視して！）学習中の流し場係には、政治力など無縁のものだ。そこでわたしは、そういった事柄には気をもまずに、現実の問題に神経を集中させた。まず第一に、マルガレーテの信仰問題。第二に、重要性は低いが緊急度は高い〝いかにしてペオンなる身分を脱し、北へ旅する自由を獲得するか〟という問題だ。

百日間以上働きつづけたあとで、わたしはドン・ハイメに、われわれの債務支弁契約の満了日はいつになるか、正確な日付を計算してほしい……と、願い出た——ていねいな言いかたでだ。親愛なる旦那様、その日が来たら、わたしたちはおびえたウサギのようにここを去ります。その心づもりでいてください。

全拘束日数は百二十一日だとわたしは計算していた……ドン・ハイメが百五十八日という数字を出してきたので、わたしは驚きのあまりスペイン語がほとんど出てこなくなってしまった。

わたしは来週自由になれると計算していたのに、まだあと六週間もあるのだ！

わたしは抗議し、こう指摘した——法廷によってリストアップされたわたしたちの全債務を、わたしたちの労働に対して付けられた競売値（一日当り、マルガレーテが六十

ペソ、わたしがその半額）で割ると、百二十一日になる…
…そのうち百十五日すでに働いている、と。

百十五日ではない、九十九日だ——ドン・ハイメはわたしにカレンダーを手渡し、数えてみろと言った。そのとき初めてわたしは、二人の素晴らしき火曜日が拘束時間の中に入っていないことを知った。とにかく、われらの主人はそう言った。

「そのうえにだ、アレクサンドロ」と、ドン・ハイメは付け加えた。「おまえの計算には、未払い残高に対する利息が入っとらん。それに、インフレ率も掛けとらんじゃないか。税金も、健康保険料も差し引いておらん。いいかね、おまえたちが病気になったとき、その面倒を見るのはこのわしなんだぞ。そうだろうが？」

（ま、そうだな。わたしは考えもしなかったが、確かに主人は自分のペオンに対してそうする義務があると思う）

「ドン・ハイメ、あなたがわたしたちの負債を競り落としたとき、裁判所の書記がわたしに代わって契約の計算をしてくれました。かれは、わたしたちの拘束期間は百二十一日だと言いました。確かにそう言ったんですよ！」

「それなら、その書記のところへ行って相談するんだな」

そう言ってドン・ハイメは、くるりとわたしに背を向けた。

わたしはぞっとした。マルガレーテのチップの件のとき、ドン・ハイメは裁判所と争いたがらなかったのだが、今はそれと同じくらい当局の審判にまかせたがっているように見うけられる。ということはつまり、かれはこの種の負債契約の扱いに慣れており、効力のほどをすっかり心得ているので、判事や書記に反対される恐れを、毛頭抱いていないということだ。

夜になり、マルガレーテと二人きりになって、やっとその話をすることができた。

「マルガ、いったいどうしてこんな間違いが起こったんだろう。ぼくたちが債務譲渡証書にサインする前に、書記が、ちゃんと計算してくれてたと思ったのに。たしかに百二十一日だったよね。そうだろう？」

彼女はすぐには答えなかった。わたしは、さらに追求した。

「きみはそう言ったんじゃなかったのか？」

「アレック、わたしはふつう英語で——最近はスペイン語で——考えているんだけど、数の計算になると、デンマーク語でないと駄目なの。デンマーク語で六十は〝トレス〟というけど、これはスペイン語で〝三〟という意味でもあるわけ。わたしの頭がどれだけ簡単に混乱してしまうか、わかってくれる？　あなたに〝シエント・イ・ベインティ

ウーノ（百二十二）〃と言ったのか、〃シエント・イ・セセンティウーノ（百六十一）〃と言ったのか、今となってはわからないわ——だってわたし、英語でもスペイン語でもなく、デンマーク語で覚えているんですもの。割算はあなたが自分でやったと思っていたわ」

「そうだ、ぼくがやったんだ。たしかに書記は〃百二十一〃とは言わなかった。ぼくの憶えているところでは、かれはひと言も英語をしゃべらなかった。そして、当時のぼくはスペイン語を全然知らなかった。セニョール・ムニョスはきみに説明したんだ。そしてきみがぼくに通訳した。それからぼくがもう一度計算してみると、かれの話に間違いはないようだった。いや、あれは、きみの話だったかな？　ええい、くそ、なんだかわからん！」

「ねえ、もうこの話は忘れましょうよ。あとでセニョール・ムニョスに訊けばいいんだから」

「マルガ、ぼくらはこのゴミためで、あと五週間も余分に奴隷になってなきゃならないんだぞ。それでもきみは平気なのか？」

「そうね、それほど平気でもないけど。アレック、あたしはいつだって働かなくちゃならなかったのよ。船の仕事は学校で教えるよりも大変だったけど、旅行ができて、知らない土地を見て回れるので楽しかった。ここでウェイトレスをするのは、〈コンゲ・クヌート〉で船室の掃除をするよりは辛い仕事だけど——でも、あなたと一緒にいられるのなら、少しぐらいのつらさは何ともないわ。あたしもあなたの故郷についていきたいけど……結局、それはあたしの故郷じゃない。だからあたしは、あなたほど熱烈に、ここを去りたいと思っているわけじゃないの。今のあたしにとっては、あなたのいるところが故郷なのよ」

「ダーリン、きみには理性と分別と教養がありすぎるんだ。ぼくは時どき手も足も出なくなる」

「そんなことないわよ、アレック。あたしは、セニョール・ムニョスに会うまで、くよくよするのはやめましょうと言ってるだけ。それはそうと、今はあなたの背中を揉んであげたいわ。肩のこりをほぐしてあげる」

「はいはい、よくわかりました、奥様！　しかし、背中を揉んでいただく前に、その疲れたおみ足を揉ませていただけませんかね」

二人でそうした。〃おお、荒野も楽園に劣らず！〃（ペルシアの詩人、オマル・ハイヤームの詩の一節）

乞食には、えり好みはできない。わたしは翌朝早く起きて、書記の走り使いに会った。すると、裁判所の一日の仕事が終わるまで書記には会えないということだった。そこでわたしは、火曜日の閉廷時刻に会おうと半約束をした。

〝半〟というのは、わたしたちは必ず姿を見せると言ったが、セニョール・ムニョスのほうは何とも言っていない、というわけだからだ（だが、たぶん会えるだろう。神の思し召しのままに）。

火曜日になると、わたしとマルガはいつものようにピクニックにでかけた。午後四時まではセニョール・ムニョスに会えなかったからだ。しかし、わたしたちは、ピクニックの服装というよりも、日曜に教会へ行くときのような格好をしていた——具体的に言うと、二人とも靴をはき、朝風呂に入ったのだ。わたしはヒゲを剃り、流し場ではいているくたびれた沿岸警備隊の作業ズボンでなく、いちばんいい服を身につけた。ドン・ハイメのお下がりだが、清潔でまだ新しい。マルガレーテは、マサトランに着いた最初の日にもらった、色どり豊かな服を着ていた。

そして二人とも、あまり汗をかいたり埃をかぶったりしないように努めた。そうすることが肝腎だと、どうしてわたしたちが考えたのか、わたしにはわからない。しかしどういうわけか、わたしもマルガレーテも、裁判所を訪れるときは一番いい格好をするのが礼儀だと思ったのだ。

いつものように二人で噴水のところまで歩いてゆき、引き返して例の丘に登る前に、友人のペペに会った。ペペは友人らしい親しみをこめて挨拶し、わたしたちは優雅な儀礼を交わしあった。こういう挨拶は英語ではどうもさまにならないが、スペイン語でやると実にしっくりいく。毎週ペペを訪ねるのは、わたしたちの社交の重要な一部分になっていた。近ごろ、かれのことが前よりよく分かってきたので——これは本人の口から聞いたのではなく、アマンダの話だが——わたしはますますかれを尊敬するようになっていた。

ペペは生まれつき両足がなかったわけではない（わたしは初めそう思っていた）。かれはもともと大型トラックの運転手で、山脈を越えてドゥランゴ（メキシコ中西部、シエラ・マドレ山脈中の町）の先までいくのが仕事だったのだが、あるとき事故にあい、助けが来るまで二日間も車の下じきになっていた。かれは救出された時すでに死んでいると思われて、聖母マリア教会へ運びこまれた。

だがペペは予想以上に頑強だった。四カ月後、かれは退院した。だれかがカンパをつのって、小さな箱車を買ってくれた。ペペは物乞い許可証を取り、噴水のそばを自分のショバと定め——道行く人たちや〝ドン〟たちの友となり、運命がかれに与えた最悪の事態にもめげず、陽気に笑って生きているのだ。

健康や景気についてたずねあい、お互いに親交を深めあってのち、いささか間を置いてから、わたしはやおら、こ

の友人に一ペソの心づけを渡した。
　ペペはそれをわたしの手に戻した。
「二十五センターボでいいんだよ、兄弟。細かいのないかね？　それとも、くずしてほしいのかい？」
「ぼくらは友達じゃないか、ペペ。ささやかだけど、これをきみに贈りたいんだ。どうかとっておいてくれないか」
「だめ、だめ、だめ。相手が観光客なら、おれはいくらでも絞りとってやるがね。あんたは兄弟だ。二十五センターボでいい」
　わたしは逆らわなかった。メキシコの男は、威厳を持たずには生きられないのだ。

　高さ百メートルのエル・セロ・デ・ラ・ネベリアを、わたしたちはゆっくり、ゆっくり、登っていった。マルガレーテに余計な負担をかけていないことを確信したかったわたしの足どりは、どうしてもためらいがちになってしまう。いくつかの徴候からみて、彼女がうちとけた気分でいることはほぼ確実だった。だが、例の件をわたしと議論する気分ではないようだ。無論わたしとしても、彼女にその気がないならば、自分からあの話題を持ち出すことはできない。
　わたしたちはお気に入りの場所を見つけていた。一本の小さな木の陰で、陰ではあっても、あたりの景色を三百六十度、完全に見渡せるところだ——北西はカリフォルニア湾に至り、西は太平洋。水平線上では雲が二百マイル彼方の下カリフォルニア半島の端にかかっている。わたしたちの今いるところから、岬にそって南西の方を見ると、美しいプラヤ・デ・ラ・オーラス・アルタス（オーラス・アルタス海岸）をはさんでセロ・ビギア（見晴し丘）に至り、その先は巨大な灯台の建っているセロ・クレストンだ。〝灯台（ファロ）〟そのものは、この岬の先端にそびえ立っている。南は町をつっきって沿岸警備隊の上陸場に至る。東と北は、百五十マイル彼方のドゥランゴを覆い隠している山脈……しかし今日は空気がとても澄んでいるので、手をのばせば峰々に届きそうだ。
　眼下にひろがるマサトランは、まるでおもちゃの村のようだ。聖堂（バシリカ）でさえ、堂々たる教会というよりも、むしろ建築家の縮尺模型のように見える。これまでに何度となく浮かんだ疑問がまたしても浮かんできた——カトリックの会衆は（たいてい）貧困に打ちひしがれているのに、どうしてあのように素晴らしい教会を建てることができるのだろう。対するプロテスタントのほうは、もっと質素な建物でも抵当にいれていたりするのに。
「見てよ、アレック！……アニバルとロベルトの新しいアエロプラーノよ！」マルガレーテはそう言って指さした。

確かに、沿岸警備隊の係留所のアエロプラーノが、今では二機になっている。一機はわたしたちを救助したグロテスクな巨大トンボだが、新たな一機はまるで違う。わたしは初め、沈んだ状態でつながれているのかと思った。古い機についていた着水用の浮き（フロート）が、この機にはついていなかった。

そしてわたしは理解した。この新しい乗物は文字どおり空飛ぶボートなのだ。アエロプラーノの胴体そのものが、浮き（フロート）というかボートというか、防水構造になっているのだ。駆動機関は翼の上についている。

わたしはこれらの根本的な変更をあまり信頼する気にはなれなかった。わたしたちの乗った機の、素朴な確かさのほうが、ずっとわたしの趣味にあう。

「アレック、次の火曜日には、あの二人に会いにいきましょうよ」

「いいね」

「アニバルはわたしたちをあの新しいアエロプラーノに乗せてくれるかしら?」

「司令官にばれなければね」

わたしは、あの最新鋭機はどうも安全性に欠けるような気がする、とは言わなかった。マルガレーテはいつだって怖いもの知らずなのだ。

「でも、こんどあの二人をたずねたら、頼んで見せてもらおう。アニバル中尉はきっと喜ぶよ。ロベルトもね。さあ、食事にしよう」

「おなかペコペコよ」

そう答えた彼女は、ナフキン（セリビリエタ）を広げ、わたしの持ってきたバスケットから食べ物を出して、その上に並べはじめた。

火曜日はマルガレーテが、アマンダの素晴らしいメキシコ料理に、彼女自身のデンマーク料理や国際的な料理で変化をつける機会を与えられていた。今日、彼女が選んだのは、デンマーク人なら誰でも大好きな、デンマーク式のオープン・サンドイッチだった。デンマーク人ならずとも、一度食べれば誰でも好きになるやつだ。アマンダはマルガレーテが厨房で好きなものを作ることを許していた。セニョール・バレラは干渉しなかった——女主人は決して厨房に顔を出さなかった。どうやら、わたしたちが使用人になる前に、一種の武装停戦状態に達していたらしい。あのアマンダは本来、どちらかというと、厳しい性格の持ち主なのだ。

今日のサンドイッチには、有名なマサトラン産の柔らかくて味の良い小エビが、たっぷりのせてあった。しかも、この小エビはほんの皮切りだった。そのあと覚えているのはハム、七面鳥、カリカリに炒めたベーコンのみじん切り、

マヨネーズ、三種類のチーズ、数種類のピクルス、リトル・ペッパー、何だかわからない魚、牛肉の薄切り、新鮮なトマト、トマト・ペースト、三種類のレタス、よく揚げたナスビらしきもの等々……。幸いなことに、食べ物が理解できなくとも、食事を楽しむのには差しつかえない――マルガレーテがわたしの前に食べ物を差し出してくれる。わたしは、自分の食べているものが何だか分かろうと分かるまいと、幸福にそいつをたいらげる。

一時間たつとげっぷが出てきたが、わたしはなんとかごまかした。

「マルガレーテ、ぼくは今日、きみに〝愛しているよ〟って言ったかな?」

「ええ。でも、もう、あれから大分時間が経っちゃったけど」

「じゃあ言おう。きみはみめうるわしく、スタイルも素晴らしい。そればかりか、料理の腕も抜群だよ」

「ありがとうございますわ、お客様」

「ついでに、その優秀な知性も賞讃してほしいかい?」

「いいえ、結構よ」

「じゃあ、やめとこう。しかし、気が変わったら教えてくれ。食べ残しをいじくるのはよしたまえ。ぼくがあとで片づけるから。それより、ぼくのそばで横になって、きみがぼくと一緒に暮らしているわけを説明してくれないか。ぼくに料理を作ってくれるため、というはずはないな。ぼくがメキシコ西海岸一の、皿洗い名人だからかい?」

「そうよ」

彼女はこまごましたものを片づけつづけ、あたりがきちんと元通りになるまでやめなかった。アマンダに返すものだけが、バスケットの中に収まっている。

それから彼女はわたしの横にねそべり、腕をわたしの首の下へすべりこませたが――ふと、頭をもたげた。「あれは何かしら?」

「何って――?」

そして、わたしも聞いた。遠くから次第に地鳴りの音が近づいてくる。貨物列車がカーブを曲がってくるときのような音だ。だが、一番近い鉄道――北のチワワから南のグアダラハラへ向かうもの――でさえ、マサトラン半島の向こう側にある。

地鳴りは大きくなり、地面が揺れはじめた。マルガレーテは上体を起こした。

「アレック、あたし、こわい」

「こわがらなくていい。ぼくがついている」

わたしは手を伸ばして彼女を引き戻し、きつく抱きしめた。からだの下で固い地面がぽんぽんと上下し、吼えるよ

うな地鳴りの音が信じられぬほど大きく轟く。
あなたが地震にあった体験をお持ちなら、たとえそれが小さな地震であっても、そのときのわたしたちの感じを、わたしが言葉で表現するよりもよく理解してくださるだろう。あなたに地震の体験がおありでなければ、とうてい、わたしの言うことは信じていただけまい——わたしが正確に描写すればするほど、ますます信じていただけなくなるはずだ。
地震のときに一番困るのは、しがみつけるような、しっかりしたものが全然ないということだ……しかし、もっとも人を驚かせるのは騒音である。ありとあらゆるものが、すさまじい轟音をたてはじめるのである——身体の下の岩盤がこすれあって割れる音、建物に亀裂が走り、倒壊し、砕け散る音、怯えた人びとの悲鳴、怪我人や迷子の泣き声、理解を越える大災厄に捕えられた動物たちの泣き叫ぶような咆哮。
どの音一つ止まらない。
その状態が果てしなく続き——やがて、ぐらりと本震がきて、町全体が崩壊するのだ。
わたしはその音を聞くことができた。これ以上大きくなれっこないと思った音が、突然、さらに倍になった。わたしはどうにか片ひじをついて、見た。聖堂(バシリカ)のドームが石鹸の泡のように空中を飛んでゆく。
「おい、マルガ、見ろよ！　いや、見てはだめだ——これはひどい」
彼女は半分身体を起こしたが、ひと言もいわず、ただ呆然としていた。わたしは腕を彼女に回し、半島沿いに視線を走らせ、セロ・ビギアの向こうの灯台を見た。
傾いている。
見つめているわたしの目の前で、灯台は下から中ほどまで割れ、ゆっくりと重々しく地面に倒れた。
町の向こうに目をやると、係留してあった沿岸警備隊のアエロプラーノが、狂ったように踊っているのが見えた。新型機は片翼が沈んでいる。水が中に入ったのだ——やがて、町から雲が立ちのぼり、何も見えなくなった。何千トンもの砕けた石造物の、粉塵の雲だ。
わたしは目で料理店を捜しあてた。〈料理店パンチョ亭(エル・レスタウランテ・パンチョ・ピラ)〉。見る見るうちに、店名をペンキで描いてある壁が崩れ、街路に倒れた。粉塵が立ちのぼり、店の立っていた場所をおおい隠した。
「マルガレーテ！　なくなったぞ、店が。〈パンチョ亭〉が……」と、わたしは指さした。
「なにも見えないわ」

「なくなったんだよ。こわれたんだ。ああ、神様、アマンダと娘さんたちが、今日あそこにいなくてよかった！」
「そうね。アレック、これ止まらないのかしら？」
突然、それは止まった――始まった時以上に唐突に。奇跡のように塵雲が晴れ、ガタガタ揺れる音も、怪我人や死にかけている人の悲鳴も、動物の吼え声も、すっかりなくなった。
灯台はあるべき場所に元通り立っている。
わたしは左へ視線を移し、アエロプラーノを調べた――何もない。アエロプラーノをつなぐために、打ち込んである杭(くい)さえない。町に目を戻すと――何もかも平穏無事だ。聖堂(バシリカ)は無傷で、美しい。わたしは〈パンチョ亭〉の看板を捜した。
見つからない。あるべき角(かど)に建物が一つあるが、形がすっかり同じではないし、窓も違う。
「マルガ……店はどこだろう？」
「知らないわ。アレック、何が起こっているのかしら？」
「また、やつらの仕業だ」わたしは苦々(にがにが)しい思いで言った。「やつらが世界を入れかえたんだ。地震は終わったが、ここはぼくたちがいた町ではない。似てはいるけれど、同じ町じゃないんだ」
わたしの言葉は半分だけ正しかった。わたしたちが丘を下りようと決心する前に、地鳴りが再び始まった。そして揺れが――ついで、ものすごい音が。大地が激しく動き、今度はこの町が倒壊した。わたしは再び、そびえたつ灯台が割れて倒れるのを見た。再び、教会が倒れ、再び、塵雲が立ちのぼり、それとともに悲鳴と咆哮がおこった。
わたしは握りしめたこぶしを突き上げ、空にむかって振った。
「畜生！　やめろ！　二回もやることはないじゃないか」
だが、神はわたしを吹き飛ばさなかった。

13

我日の下に作ところの諸の行為を見たり
嗚呼皆空にして風を捕うるがごとし

伝道之書第一章一四節

それに続く三日間のことは飛ばそうと思う。何もいいことがなかったからだ。

まさに〃ありしものは塵埃と、街路に流るる血〃だったのである。

生存者の中でも無傷で、悲嘆に打ちひしがれておらず、何も手につかないほどヒステリックでも呆然としてもいない、わたしたちのような者たち——早くいえば、ごく少数の者——は、レンガや石やしっくいの下で生きているものを発見しようと、瓦礫の上をあちこち捜し回った。しかし、何千トンもの石の山を相手に、素手でいったい何ができるというのか。

そして、掘り当てたあとで手遅れだと分かったとき……いや、実は掘りはじめる前から手遅れだったのだと分かったとき、いったい何ができよう。わたしたちは、仔猫がミャーミャーと鳴いているような声を聞きつけ、用心深く掘った。下にいる何者かによけいな圧力を加えぬように……動かした石か何かを押しやって、下にいるものによけいな苦しみを与えることのないように、と注意しながら——そして、声の主を見つけた。死んだばかりの乳児だった。骨盤が砕け、頭の片側がつぶれている。

〃なんじの嬰児をとりて岩のうえになげうつものは福いなるべし〃

わたしは目をそむけ、嘔吐した。もう二度と詩篇第一三七篇など読むものか。

その夜をわたしたちはアイスボックス丘のふもとですごした。陽が沈むと救助活動をやめざるをえなかったのである。暗闇で動きがとれないばかりでなく、略奪が始まるからだ。略奪者は例外なく、潜在的な強姦魔であり、殺人鬼である。わたしとしては、必要とあらば、マルガレーテを守るために死ぬ覚悟はできている——が、できることなら、そのような対決で雄々しくはあるが無益な死は迎えたくない。

翌日の午後早く、メキシコ陸軍が到着した。その間、わたしたちはたいしたこともできず、ただ、おろおろしていた——せいぜい、瓦礫をいくつか片づけただけである。何を見つけたかは問題ではない。軍人たちは、それさえやめさせた。民間人全員を半島の上へ寄せ集め、廃墟の町から追い出して、川にかかる鉄橋を渡らせ、近くの駅で待機させたのである。

　未亡人になったばかりの女たち……妻に死なれたばかりの男たち……迷子の子供たち……急ごしらえの担架に乗せられた重傷者……歩ける軽傷者……身体に怪我はないが、空ろな眼をして口をきかぬ人びと……。わたしとマルガレーテは幸運なほうだった——ただ単に薄汚れ、腹をすかせ、喉が渇いているだけなのだから。二人とも身体じゅう打ち身だらけだったが、これは地震のあいだ地面の上に寝ていたからだ。いや、正確に言えば、二つの地震のあいだ、そうしていたからだ。

　ほかに誰か、二つの地震を体験したものがいるのだろうか？

　わたしは質問をためらった。どうやら、この次元転換を体験したのは、わたしだけらしい。唯一の例外はマルガレーテだ。これは二回の地震の瞬間に、わたしが彼女をしっかと抱きしめていたからのようである。

　ほかにも犠牲者がいるのだろうか？　わたし以外にも、あの〈コンゲ・クヌート〉に乗船していて、わたしと同じ次元転換を体験し、わたしと同じように用心深く口をつぐんでいる人間がいるのだろうか？　どうやって訊ね当てたらいいのだろう？　〝失礼ですが、友よ、これは昨日と同じ町なんでしょうか〟とでも訊いたらいいのか？

　駅でおよそ二時間ほど待っていると、軍の給水運搬車がやってきた。避難民一人につき、ブリキのコップ一杯ずつの水が配給される。一人の兵士が銃剣でみんなをおどして、なんとか列を守らせた。

　日没直前に、運搬車が、水の追加とパンの山を積んで戻ってきた。マルガレーテとわたしに配給された食糧は、二人分でパンの塊が四分の一だった。およそそのころ、汽車が駅に戻ってきた。すると軍隊の連中は、まだ積荷を降ろしている最中に、かまわず人間を車両に詰め込みはじめた。マルガとわたしは運が良かった。わたしたちが押し込まれたのは客車だったからだ——大半の者は貨車の中に入れられた。

　汽車は北に向かって走りだした。われわれに北へ行く気があるかどうか、問い質しもしない。汽車賃を持っているかとも訊かれなかった。マサトランの全住民が立ち退かされているのだ。上下水道が復旧するまで、マサトランの町

はネズミと死者のものとなる。

この旅について話したところで何もなるまい。汽車は走り、わたしたちは耐えた。線路はグアイマスで沿岸部を離れて、まっすぐ北上し、ソノラを横切ってアリゾナに向かった——美しい地方だが、こっちは、それを鑑賞するどころのさわぎではない。わたしたちはできる限り眠り、残りの時間は眠ったふりをして過ごした。汽車が停まるたびに、何人かが降りた——警官に押し戻されないかぎり、その連中はそのまま去っていった。ソノラ州ノガレスに着くころまでには、汽車の中の人数は半分以下になっていた。この連中は皆、アリゾナ州ノガレスに向かうつもりらしい。わたしとマルガは、もちろん、そのつもりだった。

地震から三日後の午後早く、われわれは国境のゲートに到着した。

みんな、国境を越えたばかりのところにある収容所の中に入れられた。制服を着た男がスペイン語で演説をした。

「ようこそ、友(アミーゴス)よ！　合衆国は、試練を受けた隣人を助けることを喜びとするものであります。出入国管理事務所は、みなさんがたに迅速に対処できるよう、手続きを合理化いたしました。まず初めに、全員にシラミ駆除を受けていただかねばなりません。次に、臨時のグリーンカードを発行します。これがあれば、合衆国のどこででも、好きな仕事につくことができます。この収容所を出たところに職業紹介所がありますので、そこでご相談なさってください。無料スープ配給所もありますよ！　ご空腹でしたら、ここに立ち寄り、米国人(アンクル・サム)の客人として最初の食事をとってください。ようこそ、合衆国(ロス・エスタドス・ウニドス)へ！」

何人かは残って質問していたが、マルガレーテとわたしはシラミ駆除施設の入口のドアに向かった。わたしはこのお定まりの衛生作業につけられた名が気にいらなかった——シラミ駆除をする必要があるということは、とりもなおさず、シラミにたかられているということだ。わたしたちは確かに汚くてくしゃくしゃだったし、わたしは三日間ひげを剃っていなかった。しかしシラミだって？

ま、そうかもしれない。一日じゅう廃墟をうろついたあと、身体を洗っていない連中と一緒に二日間も汽車の中でぎゅうぎゅう詰めになっていたのだから——それも、乗り込んだ当初からあまり清潔とはいえぬ汽車だった——正直な話、害虫に無縁だったとは言いきれない。

シラミ駆除はそれほどひどいものではない——監督つきのシャワーを浴び、「毛のはえているところを薬用軟石鹸で徹底的にこすれ」と、スペイン語でしつこく注意されるだけのことだ。その間に着衣は何らかの殺菌装置か燻蒸装置——高圧蒸気滅菌器だと思う——に放りこまれ、それが

れているうちに、だんだん腹が立ってきた。

だが、返された服を着おえると、立腹もおさまった。誰も故意にわたしを邪険に扱っているわけではないのだ。緊急避難した大勢の人間を、手っとり早く扱おうと思えば、どうしても人間の尊厳をある程度傷つけてしまうことになる（メキシコ人の避難民たちも、この処置に腹を立てていたようで、しきりにブツブツ不満を言っていた）。

わたしは、そのあとで、さらに待たなければならなかった。マルガレーテがまだだったのだ。

やがて彼女が女性用の出口から姿を現わし、わたしの眼を捕えてにっこりと笑った。とたんに、問題は何もなくなった。しかしシラミ駆除室から出てきたというのに、彼女はどうして、洋服箱から出てきたようにパリッとしているのだろう。

マルガレーテはわたしに近づいてきて言った。

「待たせたかしら？　ごめんなさいね。あの部屋にアイロン台があったので、なんとか服の形を整えてきたの。洗濯機から出てきた時は本当に、ひどい有様だったんですもの」

「待つのぐらい、何でもないさ」と、わたしは軽く嘘をついた。「きみは美しいよ」（これは嘘ではない！）「晩飯にしようか。残念ながら、配給の無料スープだけど」

「なにか書類手続きをしなくちゃいけないんじゃないの？」

「いや、スープ配給のほうをさきに済ませられると思うよ。ぼくたちにはグリーンカードは要らない。あれはメキシコ国籍者のためのものだ。そのかわり、失くした旅券について説明しなくちゃならない」

わたしはすでにある考えをひねり出し、汽車の中でマルガレーテに説明していた。わたしたちの身に起こったことはこうだと言おう——わたしたちは観光客で、海のそばのオテル・デ・ラス・オーラス・アルタスに泊まっていた……地震に襲われたのは、ちょうど浜辺に出ていた時で、ホテルが壊れるのと同時に、服も金も旅券も何もかも失くしてしまった……命が助かっただけでも幸運で……いま着ている服はメキシコ赤十字からもらったものだ……と。

この話には有利な点が二つある。オテル・デ・ラス・オーラス・アルタスは実際に倒壊しているし、残りの話については真疑をたしかめるすべがない。

スープ配給所へいくには、グリーンカード手続きの列を通らなければいけないことがわかった。結局、わたしたちもその机にたどりついた。そこにいた男は、わたしの前にファイル・カードを突き出しながらスペイン語で言った。

「さ、あなたの名前を活字体で書いて——苗字（ラストネーム）を先にしてね。それから住所を記入する。自分の家が地震で壊れちゃった場合は、その旨を記（しる）し、どこか代わりの住所を記入する——親戚——でも、父親でも、坊さんでも、誰でもいいから、家が壊れていない人の住所をね」
　わたしは口上を始めた。役人は顔を上げた。
「あんた（アミーゴ）、列がつかえるよ。早くして」
「しかしですね」と、わたし。「ぼくにはグリーンカードが必要ないし、欲しくもありません。ぼくは海外から帰国したアメリカ市民でね、いま、旅券を失くした理由を説明しようとしてるんです。家内も同じです」
　役人は机を叩いて言った。
「いいですか……そのアクセントを聞けば、あなたがアメリカ生まれであることはよく分かります。でも、失くされた旅券のことは、わたしにはどうもできないんですよ。こっちは現に手続きしなきゃならない避難民をあと三百五十人もかかえているうえに、このあと汽車一杯分が到着するところなんだ。これじゃ、午前二時までは眠れそうもない。どうです、ここはひとつ、互いの便宜のために、おとなしくグリーンカードを受け取ってくれませんか？　別にあなたの害にはならないし、これがあれば、あなたは国内へ入れる。旅券の件は、明日にでも国務省とかけあえばいいでしょうが——そんなことを、このわたしに言われても困るんだ。わかりますか？」
　わたしは馬鹿だが、頑固ではない。
「わかりました」
　メキシコ側の連絡先として、わたしはドン・ハイメの住所を記入した。あれだけ働いたのだから、住所ぐらい勝手に使ってもいいだろう。どうせ別の宇宙にあるのだ。

　スープ配給所はいかにも慈善事業といった体裁の代物だった。だが、これは数カ月ぶりで口にするアメリカ料理だ——それに、わたしたちは腹ぺこだった。デザートに出た〈スターク社のデリシャス・アップル〉は文字どおり美味（デリシャス）だった。
　ノガレスの町に出た時は、まだ日が沈んだばかりだった——今のわたしたちは自由の身であり、入浴も食事も済ませ、いちおう合法的にアメリカ国内にいる。十七週間前に、太平洋から裸で救出された二人の生存者に比べれば、少くとも一千パーセントはマシな状態だ。
　とはいえ、わたしたちは依然として悲運の孤児（みなしご）でもあった。金は一銭もなく、休む場所もなく、着たきり雀で、ひげは三日間伸びっぱなし。しかも高圧滅菌装置か何かにかけられたわたしの服の有様ときたら、まるでドヤ街の浮浪

者である。
一文無しの状況には、特に腹が立った。なぜなら、わたしたちは実際に金を持っていたからだ。マルガレーテがこっそり貯めていたチップである。しかし紙幣には〝王国(レイノ)〟と印刷されていた。ここでは〝共和国(レパブリカ)〟が正しいのだ。硬貨は両面とも模様が違う。硬貨の中には銀を含んでいるものがあるかもしれない――地金(じがね)にすれば若干の価値があるようなやつが、だ。しかし、たとえそうであったとしても、そいつを今すぐ現金に換える手だてはない。そして、もしこの金を少しでも使おうものなら、大変なトラブルに巻き込まれることは必定だ。

わたしたちは、どれくらいのものを失ったのだろう？ 次元間交換レートなんてものはない。等量購買力を考えれば見当がつくかもしれない――何ダースもの卵とか、何キロもの砂糖とか。しかし、そんなことを気にしても始まるまい。それがいくらに相当しようと、しょせん、失ったものは失ったものなのだ。

これは、わたしがマサトランにいた時に行なった無駄な努力と同じようなものだ。流し場の王者である間に、わたしは次の二カ所に手紙を書いた――

(a) アレクサンダー・ハーゲンシャイマーの上司である〈良識教会連合(CUD)〉本部長神学博士 ダンディ・ダニー・ドーヴァー師

(b) ダラス在住の、アレック・グレアムの弁護士

どちらの手紙にも返事が来なかった。出した手紙が返送されもしなかった。これはわたしの予想したとおりの結果である。つまり、アレックもアレクサンダーも、飛行機械アエロプラーノのない世界からやってきたのだから。

もう一度、やってみてもいいが――希望はほとんどない。わたしはもう知っているのだ――この世界が、グレアムにとってもハーゲンシャイマーにとっても、異邦である事実を。どうして知ったのかって？ ノガレスに着くまでは、別にわたしの目をひくようなものはなかった。しかしここの収容所のホールには（驚くなかれ）テレビジョンがあったのだ――立派な大きい箱で、片面が窓になっており、その窓に人びとの動いている姿が映る……そして、その人びとのしゃべっている声が同時に聞こえてくる……。

すでにこの発明品を知っており、それに慣れきっているあなたは、別に不思議だとは思わないのかもしれない。あるいは、もしあなたがこれのない世界に住んでいるとすれば――あなたはわたしの言葉を信じないかもしれない。その場合は、どうか、わたしの言葉から学びとってほしい――ちょうど、このわたしが信じがたい事柄を否応なしに信じさせられてきたように、だ。いいですか、本当に、その

ような発明品が存在するのですよ。これが自転車のようにありふれたものである世界が実在するのです。その名をテレビジョンといい――場合によってはＴＶとかテリーとかビデオとか、ひどい時には〝白痴箱〟とか呼ばれる代物です。
この偉大なる驚異の発明品の使われかたを知れば、あなたも、この最後の呼び名を当然のものだと納得なさるはずです。

こうして、見知らぬ町で一文無しになり、頼るべき相手もなく、警察のやっかいになって犯罪者扱いをされるのもごめんだという場合、急場しのぎに一つだけいい手がある。訪れる先は普通、スラム街のそばの、市内でいちばん悪徳の栄えている地域に存在する。
救世軍だ。
電話帳をちょっと調べただけで、救世軍の伝道所のありかはすぐに見つかった（とはいうものの、電話を見てそれが電話だと分かるまでには、いささか時間がかかった。異次元旅行をする人にひと言、警告しておこう――小さな変化は往々にして、大きな変化よりもずっと混乱を招きやすいものなのですよ）。
二十分後、途中で一度角を曲がり間違えたものの、わたしとマルガレーテは伝道所にたどりついた。外の歩道の上に、救世軍のメンバーが四人――一人はフレンチホルン、もう一人が大太鼓、そしてタンバリンが二人――いて、まわりに人だかりができていた。かれらが演奏していたのは〝年経た岩〟で、なかなか上手だったが、バリトンが欠けている。わたしは参加して歌いたくなった。
だが、伝道所より二つ手前の店の前で、マルガレーテが立ち止まり、わたしの袖を引っぱった。
「アレック……こうするしかないの？」
「え？　何が問題なんだい？　ぼくたちはお互いに同意したはずじゃないか」
「ちがうわ。あなたがあたしにそう言っただけよ」
「ううむ……そうかもしれない。きみは救世軍のところに行きたくないのか？」
「アレック……あたし、教会にはいったことないの――ルター教会を去ってから一度も。ここで教会に入るのが――なんとなく、うしろめたいのよ」
（親愛なる主よ、わたしはこの子をどうすればよいのでしょう。彼女が御教えにそむくのは、異教徒であるためではなく、彼女の掟があなたのものよりさらに厳格であるからです。どうかお導きを――それも、大急ぎで！）
「スイートハート、もしきみがうしろめたいと感じるのな

ら、これはやめてもいい。しかし、それならどうすればいいのか、教えてくれないか。ぼくのアイデアはもう種切れなんだよ」
「あのね、アレック、困っている人が駆け込めるような、なにか他の組織はないの？」
「ああ、そりゃあるだろう。このくらいの大きさの町なら、カトリックの保護施設が、必ず一つはあるはずだ。プロテスタントのもあるだろう。おそらく、ユダヤ教のも。それに——」
「あたしが言ったのは、〝教会と関係のないところ〟という意味よ」
「なんだ、そうか。いいかね、マルガレーテ、きみも知ってのとおり、ここはぼくの故郷じゃない。この国のしくみがどんなものか、ぼくだってきみと同じ程度にしか知らないんだよ。全然教会と関係のない、宿なしを保護する施設があるかもしれないが、あると断言はできない。とかく教会はこの分野を独占したがる傾向があるからね——ほかには手を出したがるやつがいないかもしれん。もし、今が早朝で、こんな夕暮れじゃなかったら、慈善協会とか共同募金とか、何かそれにあたるものを捜すこともできるだろう。捜せば何か見つかるかもしれない。でも今は——こんな時刻じゃあ、ぼくに考えつく別の案といったら、警官を見つけて助けを乞うことぐらいだ……そして、このあたりのお巡りに寝るところがないといったら何と答えるか、聞かなくてもとっくにわかっている。お巡りはきっと、まさにこの伝道所に行けと教えるだろう。おなじみの救世軍へ、だ」
「コペンハーゲンでは——ストックホルムやオスローでも——まっすぐ警察本署へ行けばいいのよ。ただ泊めてくれと頼めば、泊めてくれるわ」
「言っちゃあなんだが、ここはデンマークでもスウェーデンでもノルウェーでもない。ここだって、泊めてくれる所がないわけじゃないさ——ぼくにはトラ箱、そして、きみには売春婦の留置所だ。でも、一夜明けたら、二人とも浮浪罪で告発されるんだろうな——ぼくにはよく分からんがね」
「アメリカって、そんなにひどい国なの？」
「ぼくにはなんとも言えないんだよ、きみ——これはぼくのアメリカじゃないんだから。でも、できることなら、余計な気苦労はしたくない。どうだろう、スイートハート、施しを受ける代償として、ぼくが仕事をしたら、一夜を救世軍で過ごしても、きみは、うしろめたさを感じないんじゃないかね？」
彼女はしかつめらしく考え込んだ——マルガレーテの最

大の欠点は、ユーモアのセンスが全然ないことだ。善良さなら、たっぷりある。遊ぶときは子供みたいに喜んでくれる。しかしユーモアのセンスとなると……。

「人生は生々(なまなま)しく、そして厳しいものなんだ」

「アレック、もしそんなことができるのなら、あそこへ入っていっても、あたし、気が軽くなるわ。あたしも働く」

「きみは働かなくてもいいんだよ。必要となるのは、ぼくの技量なんだから。かれらが浮浪者たちに夕食を与えたあとは、汚れた皿の山ができるはずだ――そしてきみ、このぼくは、メキシコと合衆国(ロス・エスタドス・ウニドス)一のヘビー級皿洗いチャンピオンなんだぜ」

かくして、わたしは皿を洗った。また、讃美歌の本をひろげて、夕べの礼拝の仕度も手伝った。副隊長のブラザー・エディ・マッカウから安全剃刀と替刃を借り、わたしたちがここに来るはめとなった事情を説明した――休暇でメキシコのリビエラに行き、浜辺で日光浴をしている最中に大地震に襲われた、と。出入国管理局のために用意し、結局使えなかった一連の嘘話だ。

「全部失(な)くしたんです。現金も、旅行者用小切手(トラベラーズ・チェック)も、旅券も、帰りの切符も、仕事も。しかしやはり、ぼくたちは幸運でした。こうして生きているのですから」

「主と主の御手(みて)があなたを守ってくださいます。ところで、あなたは聖徒ですか？」

「何年も前から」

「あなたとお近づきになるのは、われわれの迷える羊たちにとっても、ありがたいことです。証言の時間に、みんなの前で地震の話をしてくれませんか。あなたが初めての目撃者なのです。ここでも地震は感じましたが、お皿がちょっとガチャガチャいっただけでした」

「喜んで」

「ありがとう。その剃刀は進呈します」

そこでわたしは証言に立ち、ぞっとするような地震の様子を嘘いつわりなく物語った。しかし本当の怖さはとても言葉で伝えられるものではない――もうネズミも死んだ赤ん坊も二度と見たくないのだ。そして、マルガレーテと自分が怪我ひとつしなかったことを、聴衆の前で主に感謝したわたしは、これほど心からの祈りをここ数年来したことがない事実に気づいていた。

エディ師は部屋いっぱいの臭い浮浪者たちに向かって言った。「さあみなさん、われらの同胞グレアム夫妻が助かったことを感謝し、一緒に祈りましょう」

かれの祈りは実に心を揺さぶるもので、ヨナの話から百四目の羊の話*に至る、ありとあらゆるものを網羅していた。

それに応えて部屋じゅうから「アーメン！」の叫びが起こった。一人の酔いどれ老人が前に進み出、自分はやっと神の恩寵と神の慈悲を見た、今や命をキリストに捧げる覚悟ができた……と言った。

＊〝百匹の羊のうち一匹が行方不明になったら、人はそれを捜しにゆき、見つかったら喜ぶだろう。神もそれと同じように、九十九人の正しき者よりも一人の罪人が悔い改めることを喜ばれる〟——ルカ伝より要約。

ブラザー・エディはその老人のために祈り、他の連中も誘ったところ、さらに二人が進み出た——かれは生まれついての伝道者で、わたしたちの話の中から今夜の説教のテーマを見つけ出し、即座にそれを利用したのだ。ルカ伝第一五章五節（前述の百匹の羊の話）とマタイ伝第六章一九節＊を引き合いにだしながら。

＊〝なんじら己がために財宝を地に積むな　ここは虫と錆とが損い　盗人うがちて盗むなり〟

かれがあらかじめ、この二節を選んで今夜の説教の下準備をしていたのかどうかは知らない——おそらく、そうではないと思う。給料に恥じない説教師なら誰でも、どの一節からでも果てしなく説教を続けることができるものだ。

まあ、いずれにせよ、ブラザー・エディは即座の判断で、いきなり飛び込んだわたしたちを十二分に活用したというわけだ。

かれはわたしたちが来たことを喜んでいた。だからこそ、礼拝のあとの夕食が済んで寝る前の掃除をしていたとき、こう言ってくれたのだとわたしは確信している——「もちろんここには、夫婦用の個室はありません。ここにはめったに夫婦者は来ませんからね。しかしながら、今夜シスターの寮に寝るのは、シスター・グレアムお一人ですので、あなたも男子寮に行かずに、そちらでお休みになったらいかがですか？　残念ながらダブルベッドはなく、寝棚だけですが——それでも、一つ部屋にいられるだけ、ましではありませんか」

わたしは礼を言い、わたしたちは幸福な気分で床につい た。本気で二人一緒に寝たければ、どんなに狭いベッドでも一緒に寝られるものだ。

翌朝、マルガレーテは浮浪者たちの朝食をつくった。自分から台所へ行き、何もかも一人でやったのである。朝食をつくるのは常雇いのコックの仕事ではなかった。誰であろうと、その義務を持った者がやることになっていたのだ。修業をつんだ料理人でなくとも、朝食はつくれる——オー

トミール粥、パン、マーガリン、小さなバレンシアオレンジ（きずものか？）、それにコーヒーだ。わたしは皿洗いをマルガレーテにまかせ、わたしが帰ってくるまで待っていてもらうことにした。

わたしは外に出て職をさがした。

前夜、皿を洗いながら無線放送（ここでは〝ラジオ〟と呼ばれている）に耳を傾けていたので、いま合衆国内で失業者が、政治的・社会的問題になるほど増えていることは、すでに知っていた。

南西部には、農業労働者の口ならいつでもある。だがその種の仕事は昨日避けたばかりだ。そんな仕事はプライドが許さないというわけではない。長柄の熊手（ピッチフォーク）を使える年齢に達して以来わたしは、何度も収穫を手伝ったことがある。しかしマルガレーテには、とても野良仕事なんかさせられない。

わたしは聖職者としての職を見つけられるとは期待しなかった。ブラザー・エディにも、わたしが牧師の資格を持っていることは言っていない。説教師に失業問題はつきものだ。もちろん、いつだって空席の説教壇はある。だが、それでは教会のネズミさえ飢えるような収入しか得られない。

しかしわたしには第二の天職があった。

皿洗いだ。

失業者がどれだけ多かろうと、皿洗いは常に求人難だ。昨日、国境のゲートから救世軍の伝道所まで歩いてくる途中で気づいたのだが、ウィンドウに「皿洗い求む」の広告を出しているレストランが三軒もあった――マサトランからの長い汽車旅行の間、ずっと考えていたのだが、わたしにはほかに売れる技術がないと認めざるを得ない。だからこそ、これらの広告が目についたのだ。

売れる技術がない。わたしはこの世界では牧師の資格がない。セミナリーか神学校の卒業証書を見せることができなくては、改めて牧師としての按手を受けるのは無理だ――学歴を気にせず、聖霊による霊感に頼っている原始的な宗派の支援すら受けられまい。

わたしは明らかに技師ではない。

教師になるのも無理だ。一番得意な科目であっても教職にはつけない――今のわたしには公式資格証を何ひとつ見せられないからだ。中学を卒業した証拠すらないのだ！

どう見ても、わたしはセールスマン向きではない。そう、確かにこのわたしは、募金を集めるという面倒な仕事にかけて、思いがけぬ能力を示したことがある――しかしこの世界では、その記録はなく、評判もない。いつかもう一度同じことがやれるかもしれないが……現金は今すぐ必要な

のだ。
あと何が残るだろう？　わたしは、誰かが伝道所に置いていったノガレス・タイムズ紙の、求人欄を見た。
わたしは税理士ではない。どんな種類の整備工でもない。ソフトウェア・デザイナーというのは何のことか分からないが、わたしがそうでないことは確かだ。また、〝コンピューター何とか〟でもない。看護夫でもないし、いかなる類(たぐい)の健康管理専門家でもない。
わたしがそうでないもの、ひと晩で学べないものをいちいち列挙していたらキリがない。そんなことをしても何のたしにもならない。わたしにできること……マルガレーテとわたしがこの世界の大要をつかみ、そのさまざまな側面を学ぶあいだ、二人の口を養うこと……それは、わたしがペオンとして強制されていた仕事をすることだ。
有能かつ信頼できる皿洗いは決して飢え死にはしない。
(退屈のあまり死ぬことのほうが、よっぽどありそうなことだ)
最初の職場は臭いが悪く、厨房の見ためも汚なかった。わたしは早々に退散した。二つめは大手のチェーン・ホテルで、流し場では何人も働いていた。責任者はわたしをじろじろ見て言った。
「こいつはメキシコ野郎の仕事だ。あんたにゃ向かないな」
わたしは言い返そうとしたが、追い出されてしまった。
しかし三つめはうまくいった。〈パンチョ亭〉よりほんのちょっと大きいレストランで、厨房は清潔、支配人の偏見も世間一般なみで、それよりひどくはなかった。
支配人はわたしに警告した。
「この仕事の賃金は最低で、昇給はない。一日に一食はうちで出す。つまようじ一本でも盗んだら、すぐさまひっ捕えて叩き出してやる――初めてでも大目に見たりはしないぞ。就業時間はわしが決める。こっちの都合で変更することもある。今のところは、正午から四時までと、六時から十時まで、週に五日だ。週に六日働いてもいいが、時間外手当てはつかないぞ。時間外になるのは、一日に八時間以上、あるいは週に四十八時間以上働かせた場合だけだ」
「わかりました」
「ようし、それじゃあんたの社会保障カードを見せてもらおうか」
わたしはグリーンカードを渡した。
支配人はそれをわたしの手に戻した。
「あんたはこのわしが、グリーンカードに基づいて一時間当り十二ドル半払うと思っているのかね？　あんたはチカ

ノ（メキシコ系米国人）じゃない。わしに政府とゴタゴタを起こさせたいのか。どこでこんなカードを手に入れたんだ？」
そこでわたしは、出入国管理局のために用意した作り話を披露した。
「何もかも失くしちまったんですよ。誰かに電話して、送金を頼むことさえできないんです。まず家に帰らないことには、資産を処分することもできやしない」
「公的な援助が得られるだろうに」
「大将、そいつはプライドが許さなくてね」
（実は、わたしはその方法を知らないし、わたしがわたしであることを証明できないのだ。わたしを悩ませずに、さっさと皿を洗わせてくれ）
「そう聞いてうれしいよ、〝プライドが許さない〟とはね……この国はもっと役に立つぞ。社会保険事務所へ行って、再発行を頼むんだ。前のやつのナンバーを思い出せなくとも、再発行してくれるさ。それからここへ戻ってきて、仕事にかかってくれ。ようし――あんたをさっそく正規採用にしよう。だが必ず戻ってくるんだぞ。今日の分も丸一日働いてくれ」
「願ってもないことで。社会保険事務所はどこです？」
というわけで、わたしは連邦政府ビルへ行き、もう一度嘘を並べたてた。必要に応じて尾ひれをつけながら、だ。

カード発行係は真面目な若い女性で、社会保険とそのしくみについて、わたしに講義をしたがっていた。どうやら全部暗記しているらしい。誓ってもいいが、わたしほど注意深く耳を傾けた〝依頼客（クライアント）〟（カード係の女性はわたしをそう呼んだ）はいなかっただろう。わたしには何もかも耳新しいことばかりだった。
わたしは〝アレック・L・グレアム〟と名乗った。無意識にそうしてしまったのだ。わたしは何週間もこの名を使いつづけ、呼ばれたら反射的に返事するようになっていた――いまさら、「すみません、お嬢さん、わたしの本名はハーゲンシャイマーです」なんて言えるもんじゃない。
わたしは仕事を始め、四時から六時までの休み時間に伝道所へ戻った――そして、マルガレーテも職を見つけたことを知った。
臨時の仕事で、三週間だけだ――しかし三週間というのはちょうどいい期間だ。一年以上休暇をとっていなかった伝道所のコックが、フラグスタッフ（アリゾナ州北部の小都市）にいる娘のところへ行きたがったのだ。なんでも、赤ん坊が生まれたばかりだそうだ。そこでマルガレーテはさしあたっての仕事を得た――そして寝るところも。これもさしあたってだが。
というわけで、ブラザー・グレアムならびにシスター・

グレアムは、すこぶる上々の状態にある——さしあたり、今のところは。

14

我また身をめぐらして日の下を観るに
迅速者走ることに勝にあらず
強者戦争に勝にあらず
智恵者食物を獲にあらず
明哲人財宝を得にあらず
知識人恩顧を得にあらず
凡て人に臨むところの事は
時ある者偶然なる者なり

伝道之書第九章一一節

いったいどうして、この世に〝皿洗い哲学学校〟がないのだろう？　不可解な難問に挑戦する喜びにふけりたかったら、皿洗いは、まさに理想的じゃないか。なんせこれは身体を使うだけで、ほとんど頭を使わない仕事である。問題の解答をさがす時間が、毎日八時間ずつあるのだ。

なんの問題かって？　あらゆることだ。五ヵ月前、わたしは裕福で、尊敬される職業の中でも最高の尊敬をうける職業についており、すっかり知りつくした世界に住んでいた――とにかく、自分ではそう思っていた。それが今では、まったくの無名で、無一文だ。

いいや、そうじゃない――わたしにはマルガレーテがいる。どんな男にとっても充分な富だ。たとえカタイ（中国の古称）の全財宝をつまれても、彼女を手放すものか。

しかしそのマルガレーテの存在さえ、わたしがおごそかな契約をまだ果たしていないことを示しているのだ。わたしは神の御前(みまえ)において妻をめとったのだが……妻を養ってはいない。

そう、確かに職にはありついた――だが実のところ、マルガレーテは自分で自分を養っているのだ。

カウガール氏に雇われた時は、〝最低賃金で昇給なし〟と聞いても別にがっかりはしなかった。わたしにとって、一時間当り十二ドル五十セントという賃金は目のくらむような金額だったのだ――なんたってウィチタでは（別の世界にあるわたしのウィチタでの話だ）一週十二ドル五十セントで家族を養っている世帯主も少くないのだから。

ところがなんと、この世界では、十二ドル五十セントでは同じレストランでツナ・サンドイッチ一つ買えやしない――それも決してしゃれたレストランではなく、正直な話、安食堂なのに、だ。

もしも、この分かったようで分からない異世界の通貨単位が、まったく耳慣れないものだったならば、むしろこの経済になじみやすかっただろう――シリングでも、シェケルでも、ソルでも、とにかく何でもいいからドルでさえなければいいのだ。子供時代からずっとドルを富の基準として使ってきたわたしには、一日百ドルが貧困レベルの最低賃金だという考え方を把握するのは、きわめて難事である。

一時間当り十二ドル五十セント、一日当り百ドル、一週間で五百ドル、年収にして二万六千ドル――これが貧困レベルの最低賃金だって？　耳を澄ましてよおく聞いてほしい。わたしの育った世界では、これは、どんな欲張り者でさえ期待しないほどの高額所得なのだ。

しかし、〝ドルならぬドル〟による価格と賃金レベルに慣れることは、たいした問題じゃない。異世界の経済ではよく味わう体験である。もっと大事なのは、いかにうまくやっていくか……いかに借金せずにすませるか……わたしと妻（それに子供も、だ。わたしの推測があたっていれば、まもなくできるはずだ）の生活を、どうやって立てていくか……だ。この世界では、わたしは何の免状も持たず、訓

練も受けていない。友人も保証人もなく、業績記録のたぐいもいっさいない。アレックス、いったい全体、おまえになにができる？……皿洗いのほかに！

一人でこの問題に頭を悩ましているうちに、軽く灯台一本分の皿を洗いおえてしまった。解答がどうしても必要だ。今は陽気に皿を洗っていても……すぐに、もっとマシなことをしなければならなくなる。最低賃金では足りないんだ。

さて、ついにいちばん肝腎な問題に達した。主なる神エホバよ、あなたの僕（しもべ）たるこのわたしに付けられたこれらのしるしは、いったい何を意味するのですか？

信仰の厚い者でも、ひざまずいてばかりはいられない。今や立ち上がり、単刀直入に神と交渉すべき時だ。神よ、何を信じたらいいのか教えてください！　これらの御（み）しるしは偽りであり、あなたの警告なさった異変であって、聖徒を惑わすために反キリスト勢力が送りこんだものなのですか？

それとも、これらは真の終末のしるしなのでしょうか？　いよいよ、わたしたちはあなたの〈大いなる声〉を聞くことになるのでしょうか？

それとも、わたしはネブカドネザルのように発狂していて、これらの外見は狂った頭の中の幻影にすぎないのでしょうか？

このうちのどれか一つが正しければ、残り二つは間違いだということになります。わたしにどうやって決めろというんですか？　万軍の主たる神よ、わたしはどこであなたの気分をそこねたのですか？

ある晩、伝道所へ歩いて帰る途中、まるでわたしの祈りに直接答えているようなプラカードを見つけた。

〝いま生きている何百万もの人びとは、決して死ぬことはない〟

一人の男がそのプラカードを持ち、その横で、まだ幼い子供がリーフレットを手渡していた。

わたしはうまくかわした。このプラカードを見たことは何度もあるが、昔から〈エホバの証人〉には近づきたくなかった。かれらはあまりにも頑固で、融通がきかなすぎる。あんな連中とはとても一緒にやってゆけない。それに対して〈良識教会連合〉（CUD）は、キリスト教徒の大同団結に欠かせぬ存在だ。資金集めと政治的行動においては、些細な教義の違いについて議論することは避けなければならない（同時に、異端を排除しなければならぬことは言うまでもない）。重箱のすみをほじくるような神学者がいると、能率の良い組織もすっかりだめになってしまう。自分たちだけ

が真実を……すべての真実を……真実のみを……知っており、反対する者はすべて異端者で、地獄の業火に焼かれる宿命（さだめ）だ……と主張するような宗派を、神の御もとでの実務的な仕事に、どうして含められよう。

不可能だ。だからわれわれは、かれらを〈良[C]識教会連[U]合[D]〉から閉め出した。

とはいえ……ひょっとすると、今回はかれらが正しいのかもしれない。

さてそうなると、あらゆる問題のうちで最も急を要するのは、〈喇叭（ラッパ）〉と〈大いなる声〉の前に、どうやってマルガレーテを主の教えに帰依させるか、だ。

しかしその方法は、それが〝いつ〟なのかにかかっている。前千年期説をとなえる神学者たちの間でも、〈最後の喇叭（ラッパ）〉の日がいつ来るかという点に関しては、大きく意見が分かれている。

わたしは科学的方法に頼ろう。どんな論争点にも、必ず確実な解答がある。聖書を調べれば見つかるはずだ。

そこでわたしはそうした。ちょうど、救世軍の伝道所で暮らしていたので、聖書を一冊借りることができたのだ。何度も何度も聖書を読み返した結果……前千年期論者たちが日付の点でひどい勘違いをしている理由がわかった。

聖書は文字どおり神の御言葉だ。そのことは間違いない。だが、それが簡単に読み解けるとは、主はどこにも約束してはおられない。

〈われらの主〉と、その子たる顕現＝ナザレのイエスこと〈救世主（メシア）〉は、何度も繰り返して使徒たちに、かれらの世代（すなわち紀元一世紀）に再び帰ってくると約束しておられる。また別のところでは、これまた何度も、一千年後に再臨すると約束しておられる……あるいは二千年後に……あるいはまた別の時期に、あらゆる国のすべての民に福音が説かれた後に……？

どれが正しいのか？

みんな正しいのだ、読みかたが間違っていなければ。イエスは実際に、十二使徒の世代に戻ってこられた。初めての復活祭（イースター）、イエスの復活（よみがえり）である。これが第一回目の再臨であり、どうしても必要なことであった。イエスが本当に、神の子であると同時に神自身であることを、万民に証明するための復活だったのだ。

神は再び一千年後に再臨し、無限の慈悲をもって、罪人（つみびと）をただちに地獄の業火に突きおとすのでなく、むしろ信者たちに新たなる恩寵を与え、さらなる試練の時を与えるよう定められた。神の慈悲には限りがない。

これらの日付は解読しがたい。その理由はよく分かる。

応報の日がずっと先だと分かれば、罪人は安心して罪を犯しつづけるだろう。神はそれを望まれなかったのだ。絶対に間違いなく確かなことは……何度も何度も繰り返し述べられていることは……神は、信者たちが一人残らず、いつ死んでもかまわぬよう一刻一刻を大事に生きることを望んでおられる、という事実だ。

この時代の終わりはいつか？　〈大いなる声〉と〈喇叭〉はいつか？　〈審判の日〉はいつか？　今だ！

警告のたぐいはいっさい与えられない。死に臨んで悔い改めているひまもない。人は神の恩にそむかずに生きなければならない――さもなければ、その瞬間が来たとき、火の池に投げ込まれ、永遠に焼かれて苦しみつづけることになる。

神の御言葉は、そう言っている。

わたしにとっては、破滅の声だ。マルガレーテを信仰の道に引き戻す余裕がない……今日にも〈大いなる声〉が聞こえるかもしれないのだから。

どうすればいい？　どうすればいいんだ？

命に限りある人の子としては、厄介すぎる難問にぶつかった時にやるべきことは一つしかない。神に祈ることだ。

そこで、わたしは祈った。何度も、何度も、何度も……祈りは必ず答えられるものだ。しかしながら、必ずしもその応答に気がつくとは限らない……そして、期待どおりの内容の答えではないかもしれない。

一方、カエサルのものはカエサルに返さなければならない。わたしは当然、週五日労働より週六日のほうを選んだ。（一年で三万一千二百ドルだ！）――稼げるだけ稼がなくてはならない。マルガレーテにはあらゆるものが必要なのだ――そして、わたしにも。

とりわけ、靴が必要だった。マサトランで災害にあった時、わたしたちが履いていた靴はなかなか上等だった――マサトランの貧民にしては、だが。だが、地震のあと二日間、瓦礫を掘りまくり、そのあともずっと履きへらしつづけてきたので、そろそろゴミ箱行きになりかけている。だからどうしても靴が欲しかった。少くとも二足ずつは必要だ。一足は仕事用に、もう一足はよそゆきに。

ほかにも多くのものが要る。女性一人にどれだけのものが要るのか知らないが、男よりはいろいろと大変だろう。わたしは金をマルガレーテの手に渡して、欲しいものを買いたまえと言ってやり、自分は靴と作業ズボンだけで（一張羅のほうは取っておいて）なんとかしのいだ――ただ、安全剃刀を買う金と、散髪代だけは使わせてもらった。

伝道所のそばに理髪学校があり、新米の実習生のけいこ

台になれば散髪が二ドルで済むというので、わたしは喜んでけいこ台になった。マルガレーテはわたしの頭を見て、やさしく言った。
「これくらいなら、わたしにだってできそうだわ。そうすれば二ドル助かるでしょう」
それから彼女はハサミを持って、腕の悪い実習生のやったあとをきちんと刈りなおした……その後は二度と床屋代を払わずにすんだというわけだ。
しかし実は、二ドルの節約ぐらいでは、どうにもおっつかぬダメージがあったのだ。
カウガール氏に雇われたときわたしは、一日分の仕事に対し百ドルずつ支払われるものと、本気で思いこんでいた。ところが先方は、その金額を支払ってくれなかった。いや、だましたわけではない。説明しよう。
初日の仕事を終えたわたしは、疲れてはいたが、幸せな気分だった。地震に遇った時からその日までの気分に比べれば幸せだったという意味だ——幸せとは相対的なものなのである。
わたしはレジ台の前で立ち止まった。ちょうど〈ロンのグリル〉を閉店にして、売上げの勘定をしていたカウガール氏が、顔を上げた。
「調子はどうだね、アレック」
「上々です」
「ルークの話じゃ、きみはなかなかよくやってるそうだな」
ルークというのは、身体の大きな黒人で、わたしの名目上のボスだった。実際は仕事を監督するわけでもなく、ただ物の在り場所を教え、わたしが仕事をのみこんだことを確認しただけだった。
「そういってもらえると嬉しいです。ルークはいいコックですね」
最低賃金のボーナスである一日一度の食事を、わたしは四時にとった（それはその日初めての食事だった）のだが、閉店時には再び腹をすかせていた。
ルークの説明によると、手伝いの者は、ステーキかチョップ以外なら何でも好きなものをメニューから選んでいい……今日のところは、シチューかミートローフなら好きなだけお代わりしていい……ということだった。
わたしはミートローフを選んだ。厨房から、いい匂いがしていたし、それに見たところ清潔そうだったから。コックの腕前は、ステーキを焼かせてみるよりも、ミートローフを食べてみたほうがはるかによく分かるものだ。わたしはミートローフをお代わりした——ケチャップなしで。
ルークは気前よく、チェリー・パイを大きく切ってくれ

た。それからバニラ・アイスクリームをひとすくい……これは期待していなかった。パイかアイスクリームか、どちらか片方だけ、両方は駄目だということだったのに。
「ルークはめったに白人のことはほめないんだがね」と、わたしの雇用主は続けた。「それにメキシコ者のことは、ほめたためしがない。きみはよっぽどよくやってるんだな」
「そうだといいのですが」
わたしはじりじりしてきた。人はみな神の子であるとはいえ、黒人の意見に左右されるようなはめになったのは生まれて初めてだ。早いとこ金をもらって、飛んで帰りたい。マルガレーテの待つ我が家へ――いやつまり、救世軍伝道所へ、だ。
カウガール氏は手を組んで親指をいじくり回した。
「きみは賃金を払ってほしいんだろうね？」
わたしは苛立ちを抑えた。「はい、そうです」
「アレック、皿洗いの給料は、できれば週給にしたいんだが」
わたしはとたんにがっくりした。それが顔に出たことは間違いない。
「誤解しないでくれよ」と、カウガール氏はつけ加えた。「きみは時給で雇ったのだから、毎日仕事の終わりに払ってもいい。もしそのほうがよければ」
「そのほうがいい。金がいるんです」
「最後まで聞きたまえ。皿洗い係に、毎日でなく一週間まとめて払いたいのには、理由がある。よくあることなんだが、誰かを雇って一日分の金を渡すと、そいつはまっすぐ出ていってマスカッテル（マスカットブドウから作った甘いブドウ酒）を一びん買い、そのあと二日間ばかり出てこない。そして戻ってくると、また仕事をよこせと言う。わしにくってかかる。労働局に苦情を言おうとする。おかしな話だが、そいつに仕事を返してやることが可能な場合もあるんだ――一日分だけだけどね――というのも、そいつの代わりに雇った宿なしが同じことをやらかすことがあるからさ。
メキシコ者のときは、そういうことはあまりない。連中は、メキシコに送金するために金を貯めたがっているからな。しかし、ルークの気にいるように、流し場をきちんとしておけるメキシコ者をさがすとなると……この店には、特定の皿洗い係よりルークのほうがずっと大切だってことは分かるだろ。
黒人（ネグラス）といってもね――黒人（スペード）を雇うときには、わしはいつもルークの意見を聞いて、そいつが役に立ちそうかどうか判断するし、出来のいい黒人は白人よりもましだぜ。でも、出来のいいやつは決まって向上心が旺盛でね……配膳係か

コック助手か何かに昇進させてやらないと、すぐにこの店をやめて、昇進できそうな他の店へ行っちまう。わしも頭が痛いんだ。
　だからわしは、一人の皿洗い係を一週間働かせることができれば、自分の勝ちだと思っている。二週間つづいてくれたら、飛び上がって喜ぶね。一度だけ一ヵ月続いたことがあるが、こんなのは最初で最後だろうな」
「わたしは三週間働きますよ……だから、今日の分を払ってくれませんか」
「まあ、そうせかすな。もしきみが、給料を一週間に一度もらうほうを選ぶなら、時給にあと一ドル上のせしてやる。一週間分で四十ドルのもうけだ。どうだね？」
（いや、一週につき四十八ドルの増収だ……と、わたしは自分に言いきかせた。たかが皿を洗うだけで、年収三万四千ドルか！　こいつは、すごい！）
「一週あたり四十八ドルです、四十ドルじゃなくて。つまり、わたしは週六日働きたいんです。切実に金がいるので」
「オーケイ。そうすると、支払いは週に一度ってことだな」
「ちょっと待ってください。それは明日からにしてもらえませんか？　どうしても今日中に現金が要るんです。わたしも家内も、まるっきり何も持っていないんです。服だって、いま着ているものしかないんです。家内も同じです。わたしはこれだけでも、あと数日はなんとかなりますがね、女にはどうしても必要なものがあるんです」
　相手は肩をすくめた。「きみの都合の良いようにしてやるよ。しかし、今日の分には一時間一ドルのボーナスはつかないぞ。それに、もし明日一分でも遅刻したら、寝すごしたものと見なして、また窓に求人広告を出すからな」
「カウガールさん、わたしは大酒飲みじゃありませんから」
「明日になればわかるさ」
　かれは帳簿づけ機械に向かい、キーボードになにかをした。なにをしたのかは分からない。なにしろ、わたしにはまるで理解できない機械なのだ。
　そいつは一種の計算機械だが、〈バベッジ計算器〉とは似ても似つかない代物だ。本体にキーがついていて、ちょっとタイプライターに似ているが、上部に窓があり、そこに数字と文字が現われる。まるで魔法だ。
　機械はブーッと唸り、チリンと音を立てた。カウガール氏はその中へ手を入れ、一枚のカードを取り出してわたしに渡した。
「さあ、きみの分だ」

わたしはそれを受け取り、しげしげと調べ、またしてもがっくりきた。

それはおよそ幅三インチ、長さ七インチほどの厚紙で、小さな穴がたくさんあけてあった。表面に印刷してあった文字によると、これはノガレス商業信託銀行の為替手形で、アレック・L・グレアムに対して支払うよう、〈ロンのグリル〉が銀行に指示しているものだった——だが、百ドルではない。

五十一ドル二十七セントだ。

「どうかしたかね?」と、カウガール氏。

「あの、時給十二ドル五十セントだと思っていたんですが」

「ちゃんとそれだけ払ってるさ。最低賃金で八時間だ。差し引かれてる分は自分でチェックしてくれ。これはわしの計算じゃない。IBMのソフトウェア〈ペイマスター・プラス〉の指示だ……IBM社は、この型のIBM1990と、IBMとこの種のソフトウェアの、給料計算ミスを発見した雇用主には、いつでも一万ドル払う用意があると豪語してるぜ。

いいかね、これが給料総額の百ドルだ。差し引かれた分の項目はリストアップしてあるから、合計して引き算すればいい。自分の答えをIBMの答えと照らし合わせてみろ。しかしこっちに文句を言わんでくれよな。わしが法律を決めたわけじゃない——わしにしても、こういう法律は好かんのだ、きみ以上にな。

この店に皿洗いにくるのは、密入国者もいればまともな市民もいる。だがどっちにしても、ほとんど全員が現金で給料をもらいたがる。源泉課税なんか無視すりゃいいのに、と思っとるんだ。しかしほんの一度でもそんなことをしてみろ、捕まったらどれだけ罰金をくらうことか。二度もやったらいったいどんな目にあうやら。おい、わしにいやな顔をせんでくれよ——文句は政府に言ってくれ」

「わたしはただ、わけが分からないだけです。何もかも初めてなので。このいろんな項目はどういう意味か、教えていただけませんか? たとえば、この〝行手〟ってのは?」

「それは〝行政手数料〟の略だ。しかし、なぜ払わなきゃいかんのかと尋ねられても困る。わしの仕事は帳簿をつけることで、それで給料をもらってるんだから」

わたしは他の項目をチェックしようと努めた。文字は鮮明だが、意味は分かりにくい。

〝社保〟とは〝社会保険〟のことだ。今朝、あの若い女性が説明してくれた……しかしその時、わたしはこう言ったのだ——たしかに素晴らしいアイデアだとは思うけれど、

その費用を負担するのはもう少し先のことにしたい、今のところそんな余裕がないので……と。

〃薬保〃〃医保〃〃歯保〃はすぐ分かったが、今その余裕がないことは同じだ。

しかし〃PL217〃とは何だ？　鮮明な文字はただ日付と〃公規〃のページを示しているだけだ。

〃教庁〃と〃ユネスコ〃って何だ？

いったい全体、〃所得税〃とは何のことだ？

「やっぱり分かりません。こんなのは見たことがない」

「アレック、理解できないのはなにもきみに限ったことじゃない。しかし〃見たことがない〃とはどういう意味だね？　きみが生まれた時から、ずうっとあった制度だぞ……それどころか、きみのお父さんやおじいさんの代からあったんだぞ」

「すみません。〃所得税〃って何ですか」

かれは目をぱちくりさせた。

「精神科の病院に行ったほうがいいんじゃないか」

「〃精神科〃とは？」

カウガール氏は溜息をついた。

「こっちが行きたくなったよ。いいから、アレック、こいつを受け取ってくれ。源泉課税のことは政府と話し合うんだな、わしとではなく。きみは本気で言っているようだ。たぶん、マサトラン地震のときに頭でも打ったんだろう。わしはもう、早く帰って精神安定剤を服みたい気分だ。だからこいつを受け取ってくれ、頼むから」

「よく分かりませんが、そうしましょう。でも、誰がこれを現金に換えてくれるんですか」

「そいつは簡単だ。裏書して戻してくれれば、現金を渡すよ。しかし半券は失くさんようにな。IRSが、税金の払いすぎ分を払い戻す前に、半券を全部見せろと言うはずだ」

これも何のことだか分からなかったが、とにかく半券は取っておいた。

給料の半分近くが、さわりもせぬうちに消えてしまうことを知ったのはショックだったが、それにもかかわらず、わたしたちの暮らしは日毎に良くなっていった。マルガレーテとわたしの収入を合わせると、週四百ドル以上になり、ただ生きてゆくだけでなく衣類その他の必需品を買えるようになったからだ。

理論上は、彼女は交替したコックと同じ賃金をもらうことになっていた。一時間につき二十二ドルで週二十二時間、すなわち一週間五百二十八ドルだ。

実際には、わたしと同様にいろいろ差し引かれて、手取

り総額は週二百九十ドル足らずとなった。これもまた、理論どおりなのだ。

しかし宿泊費として週五十四ドルかかる——今では下宿代の相場がわかったので、これは妥当な金額だと断言できる。実のところ、妥当以上だと言っていい。

さらに食費が週百五ドル。ブラザー・マッカウの最初の請求額は週百四十ドルだった。かれは帳簿を引っぱり出して、常雇いのコックであるミセス・オウエンズが、食事代一日十ドルを給料天引きで支払っていることを示したのだ……だから二人分は当然百四十ドルになる、と。

妥当な額だと、わたしは同意した（〈ロンのグリル〉のメニューの値段を見ていたので）——理論上は、だ。だがわたしは、今後は一日でいちばん量の多い食事を職場で食べるつもりだった。結局、マルガの分が一日十ドル、わたしの分はその半額ということで妥協が成立した。

そこでマルガの最終手取り額は、総額五百二十八ドルのうちの百三十一ドルとなる。

ちゃんと払ってもらえれば、だ。教会とか救世軍なんて団体は、その日暮らしのものが多い……時にはそれさえままならぬこともある。

それでも、暮らし向きは毎週毎週良くなっていき、第一週めの終わりにはマルガレーテに新しい靴を買った。品質もデザインも実に良い。J・C・ペニーの店の大売り出しで、定価三百五十ドルをたったの二百七十九ドル九十セントに値下げしてあった。

もちろん彼女は、自分だけ先に新しい靴を買うなんて、とうるさく反対した。わたしは次のように言った。

「まだあと百ドル残っているから、これをぼくの靴代にあてよう——来週だ——でも、ぼくが持っていると遣ってしまいそうだ。きみが持っていてくれないか」

彼女は生まじめな顔で同意した。

そういうわけで、次の週の月曜日にわたしの靴を買った。思ったより安かった——陸軍の余剰物資だ。上等で、頑丈で、履き心地がよく、普通の靴屋で売っているどんな靴よりも長保ちする。

（よそゆきの靴のことは、他の問題が片づいてから考えることにした。一度裸足の文無しになってしまうと、世間体なんかまったくどうでもよくなってしまう）

それから二人でグッドウィル商店へ行き、マルガレーテのためにドレスとサマー・スーツを、わたし用に作業ズボンを買った。

マルガレーテはわたしの服をもっと買いたがった——あと六十ドル近く残っていたのだ。わたしは反対した。

「どうしてよ、アレック。あなただって、あたしと同じく

らい、着るものが要るじゃないの……それなのに、あなたの貯めたお金をほとんど全部はたいて、買ったのはあたしのものばかり。これじゃ不公平だわ」

わたしは答えた。

「必要なことに遣ったださ。来週になってオウエンズの小母さんが戻ってくれれば、きみは仕事を失い、ぼくたちはあそこを出なければならなくなる。次の場所へ行くべきだと思うんだ。だからバス賃を貯めとかなきゃ」

「どこへ行く気なの、あなた?」

「カンザスだ。この世界は、ぼくにとってもきみにとっても未知の世界だが、それでもどこか親しみがある――言葉も同じ、地理も同じ、歴史もいくらか同じだ。この町では、ぼくはただの皿洗いで、きみを養うほどの金も稼げない。でもカンザスは――この世界のカンザスだが――きっと、ぼくの生まれ故郷によく似ていると思う。そこなら、ぼくももっとうまくやれそうな気がするんだ」

「お好きなところへ、わが背の君」

伝道所は〈ロンのグリル〉から一マイル近く離れていた。四時から六時までの休憩時間に〃帰宅〃するかわりに、わたしは食後の自由時間をダウンタウンにある図書館の分館ですごし、自己啓発につとめた。この図書館通いと、店に来た客が時どき置いていく新聞とが、わたしの再教育の主な手段となった。

この世界では、ウィリアム・ジェニングズ・ブライアン氏が本当に大統領になっていた。同氏の温和な影響力のおかげで、アメリカは大ヨーロッパ戦争に巻き込まれずにすんでいる。その後ブライアンは和平交渉の調停役をかって出た。フィラデルフィア条約の成立で、ヨーロッパは多かれ少なかれ一九一三年以前の状態に戻った。

ブライアン以後の大統領には、一人も知った顔がない。わたしの世界にも、マルガレーテの世界にもいなかった者ばかりだ。

そのうちに現在の大統領の名前に行きあたり、まったく呆然自失してしまった――最高キリスト者猊下、合衆国並びにカナダ世襲大統領、ハイアニスポート（マサチューセッツ南東部の町）公爵、ケベック伯爵、信仰の防御者、貧者の保護者、平和軍大元帥ジョン・エドワード二世。

わたしの見た写真は、大統領がアルバータ（カナダ西部の州）で定礎式を行なっているところだった。長身で肩幅が広く、人あたりのよさそうなハンサムで、しゃれた軍服の胸に、肺炎も寄せつけぬほどたくさんの勲章をつけている。わたしはその顔をしげしげと見ながら自問した。

「この男から中古車を買う気になるかな?」

しかしよく考えているうちに、だんだん、これは論理的なことなのだと思いはじめた。アメリカが独立して二世紀半になるが、その間ずっとアメリカ人は、振り捨ててきた王族たちを恋しがってきたのだ。機会さえあれば、ヨーロッパの王族たちにヨダレをたらし、大金持ちたちは娘を手当りしだい王族と結婚させた。ジョージアのプリンスとでも、だ――ジョージアで〝プリンス〟というのは、近在で一番大きな堆肥の山を持っている農夫のことなのだが。

この気取り屋の王族が、どこから雇われてきたのかは知らない。エストリル（ポルトガル西部）まで呼びにいったのかもしれないし、ひょっとするとバルカン諸国から船で呼び寄せたのかもしれない。わたしの歴史の教授の一人が指摘したように、失業中で職さがしをしている王族は、いつの世にも必ずいるものだ。

わたしも身にしみてわかったことだが、失業中の男は、あまりうるさいことを言わない。定礎式を行なうのは、おそらく、皿洗いほどうんざりする仕事ではなかろう。だが時間はもっと長く感じるだろうな。

わたしは王になったことはない。もし王にしてやると言われても、王としての仕事がうまくやれるかどうか、はなはだ心もとない。王であることには、いろいろ不都合な点があることは明らかだ。長時間我慢しなければならぬだけでなく。

しかしながら――

絶対に提供されるはずがないと分かっている王位を拒絶するのは、一種の負けおしみに違いない。自分の心をさぐってみた結果、わたしはおそらく、これは我が同胞のために払うべき犠牲だと自分を説き伏せるだろう……という結論に達した。たぶん何度も祈ったあげくに、神はわたしがこの重荷をになうことを望んでおられるのだと納得するだろう。

なにも冷笑的になっているわけではないが、人の心がいかにかよわいかはよく知っている。本当は自分がやりたいことなのに、神が自分にこうすることを望んでおられるのだ……というふうに、自分自身を納得させてしまう――そしてわたしも、この点にかけては、同胞たちと大同小異だ。

しかし驚いたのは、カナダがわが国と合併したという事実である。たいていのアメリカ人は、カナダ人がなぜアメリカ人を嫌うのか理解できない（わたしもだ）が、とにかくそれが現実なのだ。そのカナダ人が、わが国との合併に賛成投票したと考えただけでも、頭が混乱してくる。

わたしは図書館のデスクにゆき、合衆国の現代社会史を求めた。が、さあ勉強を始めようというとき、壁の時計がそろそろ四時に近づいていることに気づいた……では、こ

の本を返却し、遅刻せぬよう流し場へ急いで帰らなくてはならない。図書館の本の館外借出しを受けるには、非居住者は保証金を払わなくてはならない。だが、わたしにはそんな金を払うゆとりはなかった。

政治上の変化よりも重要なのは、技術・文化上の変化だ。この世界では、わたしの世界よりも物理学とテクノロジーが発達していることは、ほとんどひと目でわかった。実際、〝テレビジョン〟ディスプレイ装置を見たとたん、即座に、それを悟ったのだ。

テレビ放送がどうやって行なわれているのか、わたしにはさっぱり分からない。公共図書館でそれを調べようとしたとたん〝電子工学〟と呼ばれる分野にぶつかった（〝電気学〟ではない、〝電子工学〟だ）。そこで電子工学について調べようとすると、まったく驚くほどチンプンカンプンの数学に出くわした。熱力学ができなくて、聖職者になる道を選んで以来、これほどゴチャゴチャとややこしい方程式を見たことはない。こんなわけのわからぬ数学は、ローラ工業学校ではとても扱えないだろう――少くとも、わたしの卒業したローラ工業学校では無理だ。

しかし、この世界の優れたテクノロジーはテレビに留まらず、もっと多くの事物に明らかである。ひとつ〝交通信号〟について考えてみよう。

あなたもきっと、交通巡査がいなければ大通りをおちおち横切れないような交通の激しい都市を見たことがおありだろう。また時には、交通整理をしている巡査に、市議会か何かから来たお偉方（VIP）を先に通すために、自分の行こうとする方向の流れを止められて、頭に来たこともあるに違いない。

あなたは想像できますか――交通巡査のたぐいは一人もいないのに、膨大な交通量がうまくコントロールされている状態を……無人の着色灯だけで交通が整然と流れてゆく姿を！

信じてください。ノガレスでは本当にそうなのです。

そのしくみを説明しよう。

交通の激しい交差点ごとに、最少限十二個の信号灯がある。三つひと組で四組だ。主な方向に向かってそれぞれひと組ずつついており、その方向からだけしか見えないように囲ってある。どの組も、赤色灯・青色灯・黄色灯それぞれ一個ずつから成っている。電気力で点いており、一マイル前後離れたところからでも見えるほど明るく輝いている。真っ昼間でも、だ。

これらはアーク灯ではなく、非常に強力なエジソン電球である――これは重要なことだ。なぜならこれらの信号灯は、しょっちゅう点いたり消えたりしながら、何時間も、

いや何日も、二十四時間ぶっ続けで故障せずに機能しなければならないのだから。

信号灯は電信柱にとりつけるか、交差点の上に吊すかして、高く掲げてある。自転車や車やトラックに乗っている人たちが、遠くからでも見えるようにだ。今ここで、南北の青い信号灯が点いたとすると、東と西では赤い信号灯が点く——交通は南北方向に流れ、東西方向はその間、停止していることを要求される。まるで交通巡査が、警笛を鳴らし、両手を上げ、南北方向の車に動けと合図し、東西方向の車を停めているかのように。

これで、はっきりご理解いただけましたか？　要するに、信号灯が交通巡査の手ぶりの代わりをしているのです。

黄色灯が警笛の代わりだ。もうすぐ状況が変わるぞ、という注意信号である。

しかしこの利点は何か？——どうせ誰かが……たぶん巡査が……必要に応じてスイッチを入れたり切ったりしなければならないのではないか。

ところがさにあらず——もっと簡単なのだ。スイッチの切替えは、遠く（何マイルも！）離れた中央スイッチボードで、自動的に行なわれる。

このシステムにはほかにも多くの驚異がある。たとえば、交通を最もスムーズにさばくには、どの信号灯をどれだけ点けていればよいかを決める電気仕掛けの計算機械……左折や歩行者優先をつかさどる特殊な信号灯……。しかし、この上なく驚くべき点は、人びとがこれに従うという現実だ。

考えてみてほしい。巡査はどこにもいやしないのに、人びとはこれらのまったく無感覚な機械のかたまりに従うのだ。あたかもそれが巡査であるかのように。

この世界の人びとは、まるで羊みたいにおとなしく平和的なので、かくも簡単に管理されてしまうのか？　いや、違う。わたしも不思議に思って図書館で調べたところ、いくつかの統計データを発見した。この世界での、暴力犯罪の発生率は、わたしの世界よりも高い。この奇妙な信号灯のせいだろうか？　そうは思えない。この世界の人びとは、お互いどうし暴力をふるいあう傾向がありながら、交通信号に従うのは論理的なこととして受け入れているらしい。

どうにも奇妙な話だ。

テクノロジーにおけるもう一つの顕著な違いは航空機である。わたしの生まれた世界の、上品で、清潔で、安全で、静かな硬式飛行船ではない——まるっきり違う！　どちらかというと、マサトランを壊滅させた大地震の前にマルガレーテとわたしが契約書のゆえにせっせと働いていたメキシコの世界にあった、アエロプラーノのほうに似ている。

だが、わたしたちの知っていたアエロプラーノよりもはるかに大きく、速く、音がうるさく、ずっと上空を飛ぶ。まるで別種の乗物のようだ——いや、本当に別種なのかもしれない。これらの乗物が〝ジェット機〟と呼ばれているところを見ると。

あなたは八マイルもの上空を飛ぶ乗物を想像できますか？ 音よりも速く進む巨大な車を想像できますか？ 歯が痛くなるほど大きな、かん高い音を想像できますか？

人びとはこれを〝進歩〟と呼んでいる。わたしはＬＴＡ〈ツェッペリン伯〉号の快適さと優雅さが恋しい。なぜなら今のわたしは、この巨獣たちから逃れるすべがないからだ。一日に数回、これらの乗物の中の一機が、かん高い音をたてながら伝道所の上を飛ぶ。かなりの低空飛行だ。町の北にある飛行場の滑走路に着陸するためである。わたしは騒音でイライラし、マルガレーテはすっかり神経を高ぶらせてしまった。

とはいえ、テクノロジーの発達の大半は、本当の進歩である。よりよい配管設備、屋内外のよりよい照明、よりよい道路、よりよいビル、つらい肉体労働を軽減し生産力を高めるさまざまな機械類。

わたしは断じて、機械工学をばかにする熱狂的〝自然に帰れ〟主義者ではない。わたしが機械工学を尊敬するのは、世間一般の連中よりも道理をわきまえているからだ。テクノロジーをあざ笑う者は多いが、もし機械工学的な基盤がなくなったら、そういう連中は真っ先に飢え死にしてしまうだろう。

ノガレスにほんの三週間いただけで、わたしはある計画を実行できるようになった。五カ月近くの間、夢に見ていたことを……ノガレスに着いたその日から、積極的にプランを練っていた（が、ふところに余裕ができるまで延期せざるをえなかった）ことを、だ。

実行日には月曜を選んだ。その日が非番だったからだ。マルガレーテには、おごってやるから新しい服を着て、精一杯いい格好をしてくれよ、と頼み、わたしもめかしこんだ——一張羅の服に新しい靴、清潔なシャツ……ひげも剃ったし、風呂にも入ったし、爪も清潔にしてきちんと切った。

天気は良く、しかも暑すぎない素晴らしい日和だった。わたしもマルガレーテもうきうきした気分になっていた。その第一の理由は、オウエンズ小母さんがブラザー・マッカウ宛の手紙で、できればもう一週間滞在を延ばしたいと言ってきたからである。そして第二の理由は、わたしたちがやっと、どうにかこうにかカンザス州ウィチタにたどり

つけるだけのバス賃を貯めたからだ。しかも、オウエンズ小母さんがそう言ってきたということは、さらに四百ドル貯められるということを意味する。そうとなると、旅行中の食費が豊かになる上、到着した後も、ふところにいくらか現金を持っていられる。

わたしは、皿洗いの仕事をさがしていたときに目をつけておいた店へ、マルガレーテを連れていった——スラム街の外の、小ぢんまりした店で、まさに昔風のアイスクリーム・パーラーだ。

わたしたちは店の外で立ち止まった。

「ねえ、きみ、なんでここへ来たかわかるかな。広い太平洋を日光浴用マットに乗って漂っていたとき、ぼくらがかわした言葉を覚えているかい？　あのときは、とても生きのびられるとは思えなかった——少くとも、ぼくには思えなかった」

「あなた、あたしがあれを忘れるとでも思ってるの？」

「あのとき、ぼくはきみに訊いたね——もし、この世にあるもので何でも好きなものが手に入るなら、何が欲しいかって。きみ、なんて答えたか覚えてる？」

「もちろん覚えてるわ！　ホット・ファッジ・サンデーよ」

「そのとおり！　今日はきみの誕生日ではないが、これからホット・ファッジ・サンデーをおごろう」

「まあ、あなたったら！」

「おい、泣くなよ。女の涙には弱いんだ。いやならチョコレート・モルトでも、ソウダスト・サンデーでも、なんでもきみの好きなものをとればいい。でもぼくは、きみをここに連れてくるまえに、いつでもホット・ファッジ・サンデーがあるかどうか、ちゃんと確認しておいたんだぜ」

「無駄づかいできないわ。旅費を貯めなきゃ」

「いいんだよ。ホット・ファッジ・サンデーは五ドルだ。二人前で十ドル。それから、死んだ気になってウェイトレスに一ドルチップをやろう。人はパンのみにて生きるにあらず、さ。女だってそうだ。女よ、来よ！」

わたしたちは、美人の（しかしわたしの花嫁ほど美人ではない）ウェイトレスのいるテーブルに近よった。通りに背を向けるほうをマルガレーテの席にして、椅子を引いてやり、そのあとで反対側に座った。

「タミーと申します」ウェイトレスがメニューを差し出しながら言った。「今日は本当に素敵な日ですこと。お客様がたのご注文は？」

「メニューはいらないよ」と、わたし。「ホット・ファッジ・サンデーを二つ」

タミーは考えこむ表情を見せた。「かしこまりました。

でも、少々お待ちいただけますか。ホット・ソースを作るのに時間がかかるかもしれませんので」
「今日まで長いこと待ちつづけてきたんだ。あと少し待つぐらい何でもないよ」
ウェイトレスはにっこりと笑い、歩み去った。
わたしはマルガを見やった。「それにしても長かったな。え、そうだろう?」
「アレック、あなたっておセンチなところがあるのね。そこが好きなんだけど」
「どうせぼくはおセンチ野郎さ。今はホット・ファッジ・サンデーのことを考えただけでヨダレが出そうだ。しかしぼくがきみをここに連れてきたのには、もう一つ理由があるんだよ。マルガ、こういう店を経営するってのはどうだろう? つまり、ぼくときみと、二人でだよ。ボスはきみだ。ぼくは皿洗い、掃除夫、雑役、用心棒……なんでもやろう、必要なことなら」
彼女は真顔で考えこんだ。「あなた、それ、本気なの?」
「まったくもって本気さ。もちろん、今すぐ始めるってわけにはいかない。その前にまず金を貯めなきゃ。だけど、それほどたくさん貯めなくてもいいんだ、ぼくの計画ではね。小さくていいから、できるだけ明るくて陽気な店にする——そうだ、ぼくがペンキを塗りなおせばいいんだな。ソーダ・ファウンテンにして、メニューはごく限られたものにする。ホットドッグ、ハンバーガー、デンマーク風オープン・サンドイッチ……まあそれくらいだな。スープも出そうか。缶詰のスープなら手がかからないし、頭もあまり使わずにすむ」
マルガレーテはショックを受けた表情になった。
「缶詰のスープなんてダメよ。わたし、本物のスープをお客様に出せるわ……どんな缶詰製品よりも安くておいしいスープを」
「きみのプロとしての判断に従うよ、奥様。カンザスには小さな学園都市が五つ六つある。そのどこででも、こういった店は喜ばれるんだ。既存の店を引き継げるかもしれないな、老夫婦二人でやってるような店を——一年ばかりその店で働いてから、買い取るんだ。店名を〈ホット・ファッジ・サンデー〉にしよう。それとも〈マルガのサンドイッチ〉にしようか」
「〈ホット・ファッジ・サンデー〉よ。ねえ、あなた、本当にそんなことできると思う?」
わたしは身を乗り出し、彼女の手を取った。
「絶対に自信があるんだ、ダーリン。死ぬほど働かなくても、できると思う」と、わたしは頭を動かした。「信号の

光が、まともに眼にはいる」
「わかるわ。信号が変わるたびに、あなたの眼に反射するのが見えるの。席を代わりましょうか？　あたしはかまわないわ」
「ぼくだってかまわないよ。ただ、なんだか催眠術をかけられてるみたいで」と、わたしは視線をテーブルに落とし、再び信号に戻した。
「や、消えたぞ」
マルガレーテは首をひねって、そちらを向いた。
「見えないわ。どこ？」
「ああ……あの厄介なものが、消え失せてしまった——みたいだ」
すぐ横で、男性の声がした。
「お二人さん、なんにいたしましょう？　ビールかワインしかありませんが。当店には強い酒はおいてないんです。許可が降りてないもんで」
首をめぐらすと、ウェイターがいた。
「タミーは？」
「タミーと申しますと？」
わたしは深呼吸をし、心臓の動悸を抑えて言った。
「どうも失礼。この店に入ったのは間違いだった。いま気がついたんだが、財布を家に忘れてた」と言って立ち上がったわたしは、マルガをうながした。「さあ、出よう」
マルガレーテは眼をまん丸くしたまま、黙ってわたしについてきた。店の外へ出て、あたりを見回す。確かに変わっている。いかにも普通のビアホールらしい、品の良い店だ。だがわたしたちの入った、陽気なアイスクリーム・パーラーではない。
また別の世界だ。

15

なんじ明日のことを誇るなかれ
そは一日の生ずるところの如何なるを
知ざればなり

箴言第二七章一節

無意識のうちに、救世軍伝道所に向かって足を進めていた。マルガレーテは押し黙ったまま、わたしの腕をぎゅっと握りしめている。怖がるのも当然の状況だったが、わたし自身も頭にきており、マルガを慰めるどころではなかった。

わたしは口の中で呟きつづけていた。「くそったれ！　地獄に墜ちろ！」

「誰に言ってるのよ、あなた」

「それが分からんから困るんだ。誰だか知らんが、これをやってるやつに、だ。きみの友だちのロキだろ、たぶん」

「ロキはわたしの友だちなんかじゃないわ。サタンだってあなたの友だちじゃないでしょ。ロキがわたしたちの世界に何をしたのか考えると、怖くてたまらないわ」

「おれは怖がってなんかいないね、腹を立ててるんだ。ロキだろうとサタンだろうと誰だろうと、今のはあまりにもひどすぎる。良識ってものがない。なんだってあと三十分待てなかったんだ。もうちょっとでホット・ファッジ・サンデーが出てくるところだったんだぞ——それなのに、やつらはそれをかっぱらいやがった！

マルガ、こいつは不当だ。やり方が汚ない！　これこそ、正真正銘、掛け値なしの残酷非道ってもんだ。ハエから羽根を引きむしるようなものだぜ。見下げはてたやつらだ。誰であろうと」

マルガレーテは無意味な会話を避けた。どうせ、自分たちの力ではどうにもならないことなのだ。

「ねえ、あなた、どこへ行くの？」

「え？」と、わたしは急停止した。「どこって、伝道所へ向かってるつもりだけど」

「この道でいいの？」

「そりゃ、もち——」言葉を呑みこみ、周囲を見回す。

「いや、どうかな」

いままで足が勝手に動いていたのだ。頭の中が怒りでい

っぱいだったため、あたりを注意して見る余裕がなかった。気がついてみると、ほとんど見なれた目じるしがない。
「道に迷ったらしい」
「確実に迷ってるわよ」

状況を把握するのに三十分ほどかかってしまった。元いた町に漠然と似てはいるが、まったく同じところは一つもない。〈ロンのグリル〉があるはずの街区（ブロック）を見つけたが、〈ロンのグリル〉は見つからなかった。結局、警官に伝道所まで案内してもらったのだが……それは違うビルの中にあった。
驚いたことに、ブラザー・マッカウはそこにいた。だが向こうはこっちのことを知らなかったし、名前も今はマックナブとなっていた。わたしたちはできるだけ潔く（いさぎよ）引き下がった。言葉を変えていえば、あんまり潔くは引き下がれなかった、ということだ。
二人でとぼとぼと来た道を引き返した……どこに行くあてもない。
「これで三週間前に逆戻りだな、マルガ。靴が良くなっただけだ。ポケットいっぱいの現金を持っているのに——一銭も使えない。ここでは偽札にしか見えないだろう……こいつを少しでも使おうものなら、鉄格子の向こう側でたっぷり休息をとらされることは確実だ」
「そうでしょうね、たぶん」
「あの角（かど）のところに銀行がある。この現金が使えるかどうか試してみるかわりに、あそこへ入って、これに価値があるかどうか訊（き）いてみよう」
「それだけなら何も害はないと思うわ。それともあるかしら？」
「あるはずがない。しかし、われらの友人ロキが、新手のいたずらを企んでいるかもしれないな。だがどうしても知る必要がある。さあ——きみ、身の廻り品を全部持っててくれ。でもお金は一枚も持ってちゃいけない。もしぼくが逮捕されたら、他人のふりをするんだ」
「いやよ！」
「〃いやよ〃なんて言ってる場合か？　二人とも逮捕されたんじゃ何にもならん」
彼女は頑固な顔になって口をつぐんだ。口をきかない女とは口論のしようがない。
わたしは溜息をついた。「やれやれ、マルガ……ぼくがいま考えつくことは一つしかない。皿洗いの職をもう一度捜すことだ。今夜は、たぶん、ブラザー・マックナブが伝道所に泊めてくれるだろう」
「わたしも仕事を捜すわ。皿洗いでも、料理でも、何でも

かまわない」
「そのうちに、ね。一緒においで、マルガ、仲良く刑務所に入ろうか。とはいっても、刑務所にぶち込まれずにすむような、うまい計画を考えてるんだぜ」
わたしは大事な紙幣を一枚ぬきとり、くしゃくしゃにして、角を一カ所ちぎった。それから、たった今ひろったようにむき出しで握ったまま、二人で銀行の中に入った。出納係の窓口には行かず、事務員たちのデスクが並んでいるあたりの手すり囲いに歩み寄った。
手すりの上に身を乗り出し、いちばん近くにいた男に声をかけた。デスクのしるしによると副支配人らしい。
「すみません、ちょっとお尋ねしたいことがあるんですが」
副支配人は不機嫌な顔をしたが、言葉には出さなかった。
「よろしいですよ。何のご用ですか?」
「これは本物のお金ですか。それとも芝居の小道具か何かでしょうか」
かれはちらりと見、それからしげしげと見た。
「おもしろい。どこでこんなものを?」
「家内が道端で見つけたんです。これはお金ですか?」
「無論、お金ではありません。第一、二十ドル札なんて、話にも聞いたことがない。芝居の小道具かもしれませんな。それとも、なにかの宣伝か」
「すると、何の値うちもないんですね?」
「単なる印刷した紙です。これでは偽札とも呼べませんな。なにせ本物に似せようという努力が全然ない。とはいえ、財務省の検査官は調べたがるでしょうね」
「わかりました。それではこれを引き取ってもらえますか」
「はい。でも当局はきっとあなたから話を聞きたがると思います。お名前とおところをどうぞ。ああ、それから奥さんのお名前も。第一発見者ですから」
「オーケイ。受取証をお願いします」
わたしは〝アレクサンダー・ハーゲンシャイマー夫妻〟と名乗り、〈ロンのグリル〉の住所を使った。もちろん店名は使わなかった。そして真面目な顔で受取証を受け取った。
歩道に出ると、わたしは言った。
「ま、考えていたほど悪い結果にはならなかったな。さて今度は、汚れた皿を捜すとするか」
「ねえ、あなた——」
「うん、なんだい?」
「あたしたち、カンザスへ行こうとしていたのよ」
「確かにそうだったさ。でもバス賃にとっておいた金は、

額面どおりの値うちがない。もっと稼がなくちゃいけない。ぼくは稼げる。一度できたことだ、二度目もできるさ」

「アレック、このままカンザスへ行きましょう」

三十分後、わたしたちはトゥーソンをめざして国道を北へ歩いていた。そして車が通りかかるたびに、乗せてくれと合図を送った。

三台の車を乗りついで、やっとトゥーソンに到着した。トゥーソンから先は、テキサス州エルパソに向かう東の道を行くのも、このまま国道89号線を進むのも、どっちも同じことだと思われた。89号線は西へ曲がったあと北上してフェニックスへ向かうルートである。

結局、北へ行くことになった。わたしたちの頼みをきいて乗せてくれた最初の車が、北へ貨物を運んでいるトラックだったからだ。

乗せてもらうことに成功した場所は、89号線と80号線の交差点にあるトラック専用ドライブ・インである。だがここで一つ白状しなければならない。運転手がこっちの頼みに耳を貸したのは、マルガレーテが美人だったからだ——わたし一人だけだったら、今でもあそこに突っ立っていることだろう。

この旅行の成否はわたしの意志の強さにかかっている。わたしは、まっとうな仕事なら、たとえどれだけ卑しかろうと、汚かろうと、困難であろうと、どんなことでも喜んでやるつもりだった。だが、旅の成否は同時に、マルガレーテの美しさと女性的魅力にもかかっていた。

この事実に直面するのは、実に不愉快なことだった。ポテパルの妻[*]や、スザンナと二人の長老の話[**]を思い出し、暗い気持ちになってしまう。

* 創世記第三九章一節〜二〇節。ヨセフを誘惑しようとしたが失敗し、腹いせにヨセフを暴行未遂で訴えた。

** 聖書外典・ダニエル書への付加。スザンナは二人のユダヤ人長老に言い寄られたが拒絶した。怒った長老たちはスザンナが姦通したと偽証したが、二人の証言がくい違ったため、でっち上げであることがばれた。

マルガレーテのことで苛立っているのが、自分でもわかった。いつも優雅で、暖かく、友好的な性格をしていることが、彼女の唯一の罪だ。つい、他人には笑顔を振りまくな、きみはこのわたしだけを見てればいいんだ……と言いたい気分になってしまう。

その気分がいちばん強くなったのは、最初の日の夕ぐれのことだった。くだんのトラック運転手が、レストランとガソリンスタンドを中心とした道路わきのオアシスに車を停めて言った。

「さてこれからビールを二、三杯ひっかけて、サーロイン・ステーキといこう。マギー・ベイビー、あんたはどうする？　レア・ステーキなんかどうだい？　この店は調理場の中まで生きた牛を連れてくるんだぜ」
マルガレーテは運転手に婉然と微笑みかけた。
「ありがとう、スティーヴ。でも、あたし、おなかが空いてないの」
わたしの愛する妻は嘘をついている。彼女には分かっていたし、わたしにも分かっていた――スティーヴにも分かっていたことは間違いない。前の世界の伝道所で朝食を食べてから、すでに十一時間になる。トゥーソン郊外のドライブ・インで、食事代のかわりに皿を洗わせてくれと頼んだのだが、すげなく断わられてしまった。だから二人とも、昼の間中、なにも口にしていなかったのだ。ただ公衆水飲み場で水を飲んだだけである。
「下手な冗談はよしなよ、マギー。四時間も走ってきたんだぜ。腹が減ってるはずだ」
わたしは急いで口をはさんだ。マルガレーテにこれ以上嘘を――それも、わたしのための嘘だと確信しているが――つかせないために、だ。
「スティーヴ、家内が言ったのはつまり、ほかの人の招待は受けられないという意味だ。夕食はこのわたしから食べさせてもらいたいと思っているんだよ……でも、家内にかわってお礼を言うよ。それに、わたしたちを乗せてくれてどうもありがとう。実に快適なドライブだった」
われわれはまだトラックの座席に座っていた。マルガレーテが真ん中だ。運転手は身体を前に乗り出し、彼女をながめ回して言った。
「なあアレック、あんたはおれがマギーのパンティの中に手を突っこもうとしてると思っているな。え、そうだろう？」
そんなことは毛頭考えていない、とわたしは頑なに答えたが、じつは図星だった。この男はそれを狙っているに違いないと思っていたのだ……そして腹が立った。スティーヴの言い方は騎士道精神に反するだけでなく、言葉づかいが下品だ。
しかし、わたしはすでに、いやというほど学んでいる。わたしの育った世界には、礼儀正しくしゃべるべしというルールがあるが、そのルールは、別の世界でも通用するとは限らない……ということを。
「ふん、そう思ってるくせに。おれだって昨日生まれたばかりのがきじゃねえんだ。長いこと街道を走ってきたんだからな、そうそうお人好しじゃねえぜ。あんたは、寄ってくる若い男がみんな彼女を口説こうとするもんだから、こ

のおれも女を寝取ろうとしてると思ってるんだ。あんたに言っておくが、おれは男のいない女には遠慮なく手を出す男でね。男がいるかいないか、必ずひと目でわかるんだ。マギーにはこれっぽっちも助平心は持ってねえよ。何時間も前からわかってたぜ。おめでとうと言わせてもらおうか。亭主に誠実な女を見つけるってのはいいもんだ。そうじゃねえか？」

「確かにそうだ」わたしはしぶしぶ同意した。

「だからそうカリカリしなさんなって。ドライブのお礼を言ってくれたのは嬉しいが、ついでに食事にも誘ってくれねえか——そうすりゃ、おれも一人さみしく食事せずにすむ」

どうか、狼狽が顔に出ないように……一瞬のためらいを悟られぬように……

「いいとも、スティーヴ。受けた親切には、お返しをしなくちゃな。ちょっと段取りをつけてくるから、待っててくれないか」

わたしが車から降りようとすると、

「アレック、あんたはマギーに劣らず、へたな嘘つきだな」

「なんのことだ？」

「おれの目が節穴だとでも思ってるのか？　あんた、金がないんだろ。すっかり空っけつではないにしても、サーロイン・ステーキをおごるほどの金はないよな。スペシャル・ランチだって無理だ」

「そのとおりだ」と、わたしは威厳をもって——だといいのだが——答えた。

「段取りをつけなくてはいけないのは、レストランの支配人とだ。三人分の夕食の代わりに皿洗いをさせてもらおうと思っている」

「どうせ、そんなことだろうと思った。しかし金のないやつは普通、グレイハウンド（有名な長距離バス）に乗るもんだ。それに何か荷物ぐらいは持ってる。文無しでも腹ぺこでなければ、食事代を節約してヒッチハイクをするかもしれんが、それでも一人にかばん一つぐらいは持ってるはずだ。そうでなくても、せめて着替えの包みとか。それなのにあんたたちときたらまるっきりの手ぶらだ……しかも二人ともスーツを着てる——こともあろうに、砂漠の真ん中で、だ！　てことはつまり、なにか突然の災難に襲われたってことだな」

わたしは沈黙を守った。

「なあ、いいかい」スティーヴは話を続ける。「この食堂の主人は、あんたに皿を洗わせてくれるかもしれん。だがこの瞬間にも、三人の密入国者をこき使ってるかもしれん

し、今日すでに、少くとも三人は断わったかもしれん。そっちのほうがずっとありそうなことだ。ここは国境のフェンスの穴をくぐり抜けてくる観光客(トゥリスタス)が北上するメイン・ルートなんだから。

ま、どっちにしても、あんたが皿を洗ってるあいだ、待っちゃいられない。今夜これから、あと何マイルも車をころがさなきゃならねえんだ。だから取引きをしようじゃねえか。あんたはおれに晩飯をおごる。そのかわり、その金はおれが貸す」

「返せるあてがない」

「いやいや、大ありさ。〝人物を見込んで貸す〟ってやつだ。金の貸し甲斐(がい)のある相手だよ、あんたは。いつか――今年じゅうにでも、二十年先でもかまわないが、将来あんたが文無しで腹ぺこの若いカップルに出くわしたら、そのときは今のおれと同じ条件で二人に晩飯をおごってやってくれ。そうすりゃ、おれに借りを返したことになる。そして、その二人がまたいつか同じことをすれば、あんたに借りを返したことになる。いいね？」

「七倍にして返すよ！」

「一度だけでいいんだ。そのあとは、自分の楽しみでやってくれ。さあさあ、食いにいこうぜ」

〈リムロック休憩所(レストップ)〉レストランは、しゃれた店ではなく、むしろ粗野な食堂だった――前の世界にあった〈ロンのグリル〉とどっこいどっこいだ。カウンターとテーブルの両方がある。スティーヴがわたしたちをテーブル席へ案内すると、ほどなく、かなり若くて、なかなか美人のウェイトレスがやってきた。

「こんにちは、スティーヴ。お久しぶりね」

「やあ、かわいい子ちゃん！　ウサギのテストの結果は？」

「ウサギは死んじゃったわ。あんたの血液検査はどうだったの？」

そう言ってウェイトレスは、わたしとマルガレーテに向かってにっこり笑いかけた。

「いらっしゃい！　ご注文は？」

メニューにさっと目を通す。もちろん、まず右側を、だ――値段を見て驚いた。わたしが一番よく知っている世界の水準に戻っていたからだ。ハンバーガー十セント、コーヒー五セント、定食七十五セントないし九十セント……この値段なら理解できる。

わたしはメニューを見て言った。

「チーズ・スーパーバーガー、できますか。ミディアム・ウェルで」

「できますとも。そちらのお客さんは？」

マルガレーテも同じものを注文した。ただし、ミディアム・レアで。
「スティーヴは？」と、ウェイトレス。
「今の注文はやりなおしだ。まず、ビールを三杯――クアーズ（ビールの銘柄）がいいな。それからサーロイン・ステーキを三人前。レアとミディアム・レアとミディアムで。いつもの付け合わせも一緒にな――ベイクド・ポテトでもフライド・プロミセスでも、何でもいい。いつものぐちゃぐちゃサラダに、ホットロール。ぜんぶ、いつもどおりだ。そのあとにデザートとコーヒー」
「はい、了解！」
「友達を紹介するよ。マギー、これはヘイゼルだ。こっちはご亭主のアレック」
「世にも幸運な男性(ひと)ね！　こんにちは、マギー、はじめまして。でもこんな下品な男と一緒では、お気の毒ね。スティーヴになにか売りつけられなかった？」
「いいえ」
「よかった。何も買っちゃだめ。サインもしちゃだめよ。もちろん、賭け事もね。あなたたちがしっかり結婚してるのはいいことだわ。この人ったら三人も奥さんがいるのよ、別べつの州に」
「四人だ」と、スティーヴ。
「四人になったの？　それはおめでとう。女性用のお手洗いは調理場を抜けたところよ、マギー。男性用はその後ろ」
　ヘイゼルは衣(きぬ)ずれの音を立てて足早に去っていった。
「あいつぁ、いい女だ」と、スティーヴ。「ウェイトレスってやあ、どんなもんか知ってるだろ。特にこんなトラック野郎相手の店の女(すけ)はさ。この街道の給仕女で、金で転ばないのはヘイゼルぐらいのもんだぜ。来な、アレック」
　スティーヴは立ち上がり、店の外へ出て、男性用トイレのところまでわたしを導いた。
　後ろからついていったわたしが、スティーヴの言ったことをやっと理解できた時はすでに遅く、レディの前で何たる口のききようだ……と腹を立てるわけにはいかなくなっていた。それに、マルガレーテがその言葉に腹を立てなかったことは、認めざるをえない。彼女はそれを、単なる情報として――事実上、ヘイゼルへの讃辞として――受け取ったのである。
　この厄介な次元転換における最大の問題はここにある。経済や社会的行動やテクノロジーの変化を受け入れることはさして困難ではない。だが言葉づかいや、それにともなう習俗やタブーといった単純なことに慣れることは、非常に難しい。

席に戻ると、ビールとマルガレーテが待っていた。いかにも涼しげな、爽やかな顔で。
スティーヴがジョッキを持ち上げた。
「乾杯！」
わたしたちも唱和した。「乾杯！」
ひと口すすってみて、それからごくごくと飲む――一日じゅう砂漠の中を走ってきたあとだから、全身が水分を求めている。
〈汽船（SS）コンゲ・クヌート〉での道徳的堕落の結果、わたしは再びビールを飲むようになっていた。工業学校の学生時代を除き、絶対に口をつけなかったビールを、だ。いや学生時代だってほとんど飲まなかった――当時は金がなかったからだ。
こいつは素晴らしいビールだ。だが、船で出されたデンマーク産のトゥボルグほど上等じゃないようだ。あなたは、聖書がひと言もビールを禁じていない事実をご存じですか？　実は聖書の中にも〝BEER〟という言葉があることはあるんですが、それは〝泉〟とか〝井戸〟を意味する言葉として使われてるんです。
ステーキはうまかった。
上等の料理とビールのせいで、わたしはすっかりいい気分になり、いつのまにかスティーヴにぺらぺらとしゃべっていた。わたしたちがどうしてこんな不幸な目にあい、他人様（ひとさま）のお情けを受けるようになったかを……だが本当のことは何も言わずに、だ。そのうちにマルガレーテがわたしに言った。
「アレック、このひとに話して」
「話したほうがいいと思う？」
「スティーヴには知る資格があると思うわ。あたし、このひとを信用します」
「ようし、それじゃあ、スティーヴ、実はね……ぼくたちは別の世界からきた旅人なんだ」
スティーヴは、げらげら笑いも、にやにや笑いもしなかった。ただ単に興味をひかれた表情を見せ、しばらく間を置いてから問い返した。「空飛ぶ円盤かね？」
「違う。別の次元から来たんだ――別の惑星ではない。同じ地球上にいることに変わりはないらしいんだ。つまりこういうことさ――マルガレーテとぼくは、今朝（けさ）まで、アリゾナという州のノガレスという町にいた。すると世界が変わった。ノガレスは小さくなり、前と同じものは一つもなくなった。アリゾナは、どうやら前と同じように見えるけど、ぼく自身が、この州のことはあまりよく知らないんでね」
「準州だぜ」

「なんだって?」
「アリゾナは準州だ。州じゃない。州になるのは、住民投票で反対されたんだ」
「そうか。ぼくの世界でもそうだった。なにやら税金の問題でね。しかし、ぼくたちはぼくの世界から来たんじゃない。マルガの世界からでもない。ぼくたちは——」
わたしは言葉に詰まった。
「どうもうまく言えないな」と、わたしはマルガを見やった。「きみ、説明できるかい」
「説明なんかできないわよ。だって、あたしにも、よく分かんないんですもの。でもスティーヴ、今の話は本当なのよ。あたしはある世界から来たの。アレックは別の世界からよ。あたしたちはしばらく、もう一つ別の世界に住んでいたんだけど、それが今朝また別の世界に変わったの。そして今ここにいるというわけ。だから、あたしたち、お金を持っていないのよ。いいえ、お金はあるんだけど、この世界のお金じゃないの」
スティーヴは言った。
「その、別の世界の話だが、一つずつやってくれねえかな? 頭がクラクラしてきた」
わたしは言った。「マルガは今までに二つの世界をあとにしてきた」
「違うわよ、あなた——三つよ。氷山の世界を忘れてるんじゃない」
「いや、数えたよ。ぼくは——失礼、スティーヴ、一つずつ話そうとしてるんだが、なかなか難しいんだ。今朝——ぼくはマルガレーテにホット・ファッジ・サンデーを食べさせたくて、二人でノガレスのアイスクリーム・パーラーに入った。テーブルにつき、ちょうど今みたいに差し向かいで座った。それでひと組の信号灯と向かいあう形になって——」
「ひと組の……何だって?」
「ひと組の信号灯だ。赤と青と黄色のライトさ。それで世界がまた変わったってことがわかった。この世界には信号灯がない。いや、少くとも今までは見かけなかった。交通巡査はいたが。しかし、ぼくたちが今朝までいた世界では、信号灯が交通巡査の代わりをしていた」
「交通整理の合図を鏡の反射でやるみたいなもんかな。それが、マギーにホット・ファッジ・サンデーをおごるって話と、どう結びつくんだい?」
「それはだね、ぼくらが難破して太平洋を漂流していたとき、マルガレーテがホット・ファッジ・サンデーがほしいと言ったからだ。今朝はじめて、そのチャンスがきた。そのとき信号灯が消えたので、また別の世界に来たことがわ

かった――それで金は用をなさなくなった。だからホット・ファッジ・サンデーは買えなかった。マルガの夕食代も払えなかったのは、そういうわけだ。金がないんだ。使いものになる金はない、ということさ。わかるかね?」
「どうもあんたの話についていけないんだがね。金はどうなっちまったんだ?」
「ああ」わたしはポケットに手をつっこみ、バス賃にと一所懸命ためた金を引っぱりだし、二十ドル札を一枚抜きとってスティーヴに渡した。
「なんともなってない。これを見てくれ」
スティーヴは注意深く見つめて、
「〝政府発行紙幣、あらゆる公私の支払いに通用〟か――こいつはまともだな。しかしここにのってる妙なやつぁ、いったい誰だ？　それにいつから二十ドル札なんてもんができたんだ？」
「きみの世界では、作られたことがないらしいな。その顔はウィリアム・ジェニングズ・ブライアン――一九一三年から一九二一年まで合衆国大統領だった男だ」
「アクロンのホーリス・マン・スクールでは、そんなことは教えなかったぜ。名前を聞いたこともないや」
「ぼくが学校で教わったところでは、かれは一八九六年に大統領になっている。その十六年後じゃなくて、ね。そしてマルガレーテの世界では、ミスター・ブライアンは大統領になったことがない。待てよ！　マルガレーテ！　ここはきみの世界かもしれないぞ！」
「どうしてそう思うの、あなた？」
「確信はない。だが、ノガレスから北上してくる間、一度も飛行場を見かけなかったし、飛行場に関係のある看板もなかった。それにたったいま気がついたんだが、今日は一日ジェット機の音も姿もない。いかなる種類の飛行機械(フライング・マシン)も見なかった。きみは？」
「ええ、そうね、見なかったわ。でもそんなこと考えてみもしなかったわ」と、マルガ。「少くとも、この近くに一機もいないってことは、確信を持っていえるわね」
「じゃあ、きみの世界に着いたんだ！　それとも、ひょっとしたらぼくの世界なのかな。スティーヴ、この世界の航空機の現況は？」
「その〝コーなんとか〟てのは、いったい何だい？」
「空を飛ぶ機械だ。ジェット機とか、いろんな種類の飛行機とか、飛行船(エアシップ)とか――この世界に飛行船はあるかい？」
「おれにはチンプンカンプンだ。空を飛ぶって、本当に飛ぶのかい。鳥みたいに空中を？」
「そう、そうだ！」
「そんなものあるもんか。いや、気球のことかな？　気球

なら見たことがある」
「気球じゃない。おっと、飛行船は一種の気球だが、丸くなくて細長いんだ——葉巻みたいな形だ。プロペラが付いていて、きみのトラックにあるようなエンジンで動く。時速は百マイル以上でる——そして、通常かなり高いところを飛ぶ。高度一千ないし二千フィートだ。山だって飛び越してしまう」
初めてスティーヴは関心よりも驚きを見せた。
「そいつぁすげえ！ あんた、本当にそんなものを見たことあるのか」
「乗ったこともあるさ。何度もね。初めて乗ったのは、確か十二歳の時だった。きみはアクロンで教育を受けたと言ったね。ぼくの世界のアクロンは、世界一大きくて速い、最高の硬式飛行船を建造した町として、世界的に有名だった」
スティーヴは首を振った。
「おれはいつも、肝腎なものを見のがしてしまう男でね。マギー、あんたも飛行船を見たことあるのかい。乗ったことも？」
「いいえ。飛行船はわたしの世界にはないの。でも空飛ぶ機械には乗ったわ。〝アエロプラーノ〟っていうの。一度だけね。とってもエキサイティングだったわ。こわかったけど。でも、もう一度乗ってみたいわ」
「きっと乗れるさ。おれも、肝っ玉がぶっつぶれると思うけど、いっぺん乗ってみてえな。死んでもいいからさ。お二人さん、おれは、あんたらを信じたくなってきたぜ。あんたら、正直に打ち明けてくれたもんな。それにこの札だ。もしこれが本当に札ならば、な」
「本当に札だ」と、わたしは主張した。「別の世界のね。よく見てくれ、スティーヴ。ひと目で分かるように、これはきみの世界のお札じゃない。しかしおもちゃでも、芝居の小道具でもない。たかが芝居の小道具のためにスチール製版するバカがどこにいる？ この原版をつくった製版技師は、これが当然紙幣として通用するものと思っていた……にもかかわらず、これは正しい金種ですらない——きみが初めに気づいたようにね。ちょっと待ってくれ」
わたしは別のポケットをさぐった。
「ああ！ まだあった」
取り出したのは十ペソ札である——メキシコ王国のものだ。地震の前に貯めておいた金——〈パンチョ亭〉でのマルガレーテのチップ——は、役に立たなくなったので、ほとんど燃してしまったのだが、少しばかり記念にとっておいたのだ。
「こっちも見てほしいんだ。スペイン語はわかるかね？」

「あんまり。おれのはテキサス風メキシコ語だ。〃居酒屋スペイン語〃ってやつさ」
　スティーヴはメキシコの紙幣を見た。
「こいつはまともな札のようだな」
「もっとよく見て」と、マルガレーテは促した。「〃王国〃って書いてあるでしょ。この世界では〃共和国〃じゃない？　それとも、この世界のメキシコも王国なの？」
「共和国だ……そうなるのにゃ、このおれもいくらか力を貸したんだぜ。海兵隊にいたころ、メキシコで選挙立会人に選ばれたのさ。すげえじゃねえか、ばっちり武装した海兵隊員がよ、選挙が公正に行なわれるように見張るなんて、そうざらにあることじゃねえ。
　ようし、あんたらの話は全部信じよう。メキシコは王国じゃない。晩飯代も持っていないヒッチハイカーが、メキシコ王国と印刷してある金を持ってるのはおかしい。おれの頭が狂ってるのかもしれないが、あんたを信じるほうに賭けたい。もっとくわしく説明してくれないか？」
「スティーヴ」と、わたしは真顔で言った。「それはこっちが聞きたいよ。いちばん簡単な説明は、ぼくの頭が狂っていて、何もかも妄想の産物だとすることだ。きみも、ぼくも、マルガも、このレストランも、この世界も——すべて、熱にうかされたぼくの脳が生み出したものだ、と」
「あんたが妄想だと思いたければ妄想でもいいがね、おれとマギーはそいつから外しといてくれ。ほかに説明はないのか？」
「それは……場合による。きみは聖書を読むかい、スティーヴ」
「そうだな、時によりけりだ。長距離輸送をやってると、ベッドに入ってもなかなか寝つけなくてな、手元にはギデオン協会の聖書しかないってことが、よくあるんだ。そういう時には、読むこともある」
「マタイ伝福音書第二四章二四節を憶えているかい」
「おれが？　憶えてるわけないだろ」
　わたしはスティーヴのために、それを引用した。
「〃偽キリスト・偽預言者おこりて大なる徴と不思議とを現わし　為し得べくば選民をも惑わさんと為るなり〃（マタイ伝福音書第二四章二四節）
　スティーヴ、これも一つの可能性だ。この次元転換は、われわれを惑わすために悪魔が自ら送りこんだ徴なのかもしれない。あるいは逆に、世界が終末を迎え、キリストが再臨して神の国が始まる前兆なのかもしれない。聖書によれば、こうだな——
　〃これらの日の患難のち直ちに日は暗く　月は光を発たず　星は空より隕ち　天の万象　ふるい動かん

そのとき人の子の兆　天に現われん　そのとき地上の諸族みな嘆き　かつ人の子の能力と大なる栄光とをもて天の雲に乗り来るを見ん
また彼は使たちを大なるラッパの声とともに遣さん　使たちは天の此の極より彼の極まで四方より選民を集めん〃
（マタイ伝福音書第二四章二九節〜三一節）

今までのことをすべて考えあわせるとこうなる。これらの出来事は、世界の終末に先立つ試練の徴なのかもしれない。あるいはまた、〃パルーシア〃すなわちキリスト降誕の予兆なのかもしれない。いずれにせよ、いつの日か、われわれは世界の終末を迎えることになるんだ。きみは聖徒かね？」

「ううーん、ちょっと簡単には答えられないな。洗礼は受けたが、ずっと前のことだし、当時は若すぎたから、信仰については何とも言えない。ふだんは教会にも行かない。行くのは友達の結婚式か葬式のあるときぐらいだな。もしおれが一度浄められているとしても、今じゃ、かなり薄汚れちまっていると思うよ。天国にいく資格があるとは、とうてい思えねえな」

「そうだな、ぼくもそう思う。スティーヴ、世界の終末は迫っている。キリストの再臨も間近い。今、きみが何よりも先にやらねばならぬことは——いや誰でもだ！——悩みをイエスに打ち明け、神の血によって浄められ、真の信仰によって新たな生を得ることだ。なぜならば、審判は前もって警告されることがないからだ。いきなりラッパが響き、イエスの腕に抱かれて永遠の安全と幸福を得るか、火と硫黄の中に投げ落とされて未来永劫苦しみつづけるか、二つに一つなのだ。心の準備をしておかなければならない」

「へええっ！　アレック、あんた、説教師になろうと思ったことでもあるのかい」

「考えてみたことはあるね」

「ただ考えるだけじゃなくて、本当になってたらよかったのに。あんたは、まるで自分の言うことをひと言残らず信じてるみたいなしゃべり方をするんだな」

「信じているからだ」

「そうじゃないかと思った。ま、ここは一つあんたに敬意を表して、おれもじっくり考えてみよう。それはそうとして、とにかく今夜のところは〈神の国〉がまだ来てほしくないもんだ。こっちは引き渡さなきゃならない貨物を運んでる途中なんだから。ヘイゼル！　伝票をよこしてくれ。これからひとっ走りせにゃならん」

　ステーキ三人前で三ドル九十セント、ビールが六杯で六十セント、しめて四ドル五十セントだった。スティーヴは五ドル金貨で払った。コインのコレクション以外で見るの

は初めてだ——もっとよく見たいと思ったが、うまい口実がなかった。
ヘイゼルはそれをつまみ上げて眺め、
「まあ珍しい、金貨なんて……このへんじゃ、銀貨がふつうよ。それにお札ね。ボスは紙のお金はきらいなんだけど。ほんとにこの金貨もらってもいいの、スティーヴ？」
「おれが〝さまよえるオランダ人〟を見つけた記念だ」
「あんたが好きにするのはあんたの勝手だけど、あたしは五人目の奥さんになる気はありませんからね」
「ちょっと、ゆきずりの火遊びなんてのは、どうかと思ったんだが」
「それもだめ——五ドル金貨ぐらいじゃ絶対にだめよ」
ヘイゼルはエプロンのポケットに手をつっこみ、五十セント銀貨をとり出した。
「はい、おつり」
スティーヴはそれを押し戻した。
「五十セントなら、なにをしてくれる？」
ヘイゼルは銀貨を取り上げ、ポケットに収めた。
「あんたの目をなめてあげるわ。じゃあね、おやすみなさい、皆さん。毎度ありがとうございました」
フラグスタッフに着くまでの三十五マイルの間、スティーヴはわたしたちの訪れた世界のことをいろいろと尋ねたが、自分からは何もコメントしなかった。ただ、わたしたちの話が途切れない程度に口をはさんでいただけだ。
わたしが飛行船やジェット機やアエロプラーノのことを詳しく話すと、スティーヴはとりわけ強い興味を示した。だが技術面には何の関心もなさそうだった。
テレビは空飛ぶ機械よりもっと信じがたかったようだ——無理もない、わたしだってそうだったのだから。しかしマルガレーテが、自分も確かにテレビを見たと受けあってくれた。マルガレーテの話は、信じないほうが難しい。わたしなら、詐欺師だと誤解されるかもしれないが、マルガレーテは違う。彼女の声と態度には説得力があるのだ。
フラグスタッフに着くと、66号線のすぐ手前で、スティーヴは車を道のわきに寄せて停めた。エンジンはふかしたままである。
「ここまでだ」と、スティーヴは言った。「あんたらが、どうしても東へ行く気なら、な。もし北へ行くんだったら、このまま乗せてってやるよ」
わたしは答えた。
「どうしてもカンザスへ行かなくてはならないんだ、スティーヴ」
「ああ、わかってる。どっちに行っても結局は着けるんだ

が、66号線を行くのが一番いい……しかし、なんだってカンザスみたいなところに行きたがる人間がいるのか、おれにはさっぱりわからんけどな。
　ほら、あそこに交差点があるだろ。あれを右へ曲がってそのまま真っすぐ行けばいい。間違えっこないさ。サンタフェへの道を見落とさんようにな。ところで、今夜はどこで寝るつもりだい?」
「別にあてはない。誰かの車に乗せてもらえるまで歩こうと思っている。もし、ひと晩中どの車にも乗せてもらえなかったら、そしてひどく眠かったら、道端ででも眠るさ――今夜は暖かいし」
「なあアレック、余計な世話かもしれんが、まあ聞いてくれ――絶対に砂漠で寝ちゃいかんぞ。今は暖かいが、夜明け前には凍りつくほど寒くなるんだ。あんたは気づかなかったかもしれんが、フェニックスからこっち、ずっと登り道だったんだ。もしヒーラ・モンスター(毒トカゲの一種)にやられずにすんでも、砂ノミに喰われてしまう。必ず、どこかで宿をとるんだぞ」
「それは無理だよ、スティーヴ」
「主は与えたもう。あんたはそう信じてるんじゃなかったのか?」
「そうだ」わたしは態度を硬化させた。「そう信じている」
(しかしまた、〝天は自ら助くる者を助く〟でもあるのだ)
「だから、主に与えさせればいいじゃないか。マギー、この世界が終わるという話な、きみもアレックの言うとおりだと思うか?」
「ええ、確かに反対はしていないわ!」
「ふうむ。おれもこれから、とっくりと考えてみよう。まず手始めに今夜、ギデオン聖書を読んでみるとするか。今度は肝腎なところを見逃したりしないようにしよう。
　あんたたちは66号線を下って、〝宿泊所〟と看板を出しているところをさがすんだ。〝モーテル〟とか〝ロードサイド・イン〟はいかん。〝シモンズのマットレス〟とか、〝浴室付き〟とか書いてあるところも駄目だ――ただの〝宿泊所〟だぞ。二ドル以上とられるところはやめにして、先へ行け。値切りつづけてゆけば、そのうち適当なのが見つかるだろう」
　わたしはあまり熱心には聞いていなかった。だんだん腹が立ってきたからだ。値切るもなにも、そもそも一セントも持ち合わせがない。そのことはスティーヴも知っているくせに――やはり、わたしの話を信じなかったのか?
「それじゃ、ここらでお別れだ」と、スティーヴは続けた。

「アレック、そっちのドアから出られるかい？　おれは降りるのが面倒なんでね」
「出られるよ」
ドアを開け、ステップを降りたところで、礼儀を思い出した。
「スティーヴ、長い間乗せてくれてありがとう。それに食事とビールまでご馳走してもらって、本当に、すまなかった。主のご加護がありますように」
「なんの、礼には及ばない。さてと」
スティーヴはポケットに手を入れ、一枚のカードを引っぱり出した。
「おれの名刺だ。実は娘の住所だがね。カンザスに着いたら、葉書でも書いて、道中の首尾を知らせてくれ」
「そうするよ」
名刺を受け取り、マルガレーテに手を貸して車から降ろそうとすると、スティーヴがそれをとめた。
「マギー！　スティーヴおじさんにお別れのキスをしてくれないかい」
「ええ、よろこんで！」
彼女は向きなおり、シートに座っているスティーヴと斜めに向きあった。
「こりゃあいい。アレック、あんたは向こうをむいてたほうがいいぞ」
わたしは後ろを向かなかった。二人のキスを無視しようと努めながら、やっぱり横目でそれを見ていた。
もしあと〇・五秒長く続いたなら、わたしはマルガレーテの身体をひっかかえて、車から引きずり降ろしていただろう。とはいえ、マルガレーテが無理強いされていたのでないことは認めざるを得ない。彼女は自分から進んでやっていた。人妻たるものが、よその男とあんなふうにキスをすべきではない。
わたしは耐えた。
ようやく、それは終わった。車から降りるマルガレーテに手を貸し、ドアを閉める。
スティーヴが大声で言った。「あばよ、お二人さん！」
かれはトラックを出し、スピードをあげながら警笛を二度鳴らして、行ってしまった。
マルガレーテが言った。
「あなた、あたしのこと怒ってるんでしょ」
「いや。だが驚いている。ショックだった、と言ってもいい。失望したよ。悲しいね」
「あたしを軽蔑するのはやめてよ！」
「え？」
「スティーヴは二百五十マイルも車に乗せてくれたのよ。

それに食事もおごってくれたし、あたしたちがわけのわからない話をしても、笑いもしなかったわ。あたしは、あの人があたしとあなたにしてくれたことのお礼をしたかったから、たっぷりキスをしてあげたの。それなのに、なによあなたは、自分ばっかり偉そうに聖人ぶって！　こんなの我慢できないわ。あなた、聞いてるの？」

「ぼくはそんなつもりでは――」

「やめて！　言い訳なんか聞きたくないわ。あなたが悪いんですもの！　あたし、怒ってるのよ。あなたが本当に悪かったと悟るまで、ずーっと怒ってるわよ。だからよく考えなさい！」

彼女はくるりと背を向け、66号線と89号線の交差点に向かって足早に歩きだした。

わたしは急いで追いついた。「マルガレーテ！」

彼女は答えず、歩調をさらに速めた。

「マルガレーテ！」

彼女の目は相変わらず、まっすぐ前方を見つめたままだ――

「愛しいマルガレーテ！　ぼくが間違っていた。悪かった、あやまるよ」

彼女は唐突に立ち止まり、くるりと向きなおってわたしの首に両腕をまわし、泣きだした。

「ああ、アレック、あたしはこんなに愛しているのに、あなたったらまるでダダっ子ね！」

わたしの口はほかのことでふさがっていたので、すぐには返事ができなかった。ようやく言えるようになった。

「ぼくもきみを愛してるよ。ダダっ子って何だ？」

「あなたのことよ」

「そうか――それなら、ぼくはきみのダダッ子だ。きみはぼくにくっついていてくれ。二度とぼくから離れないでおくれ」

「離れないわ。絶対に」

わたしたちはやりかけていたことを再開した。

しばらくして、わたしはどうにか囁けるほど顔を離した。

「ぼくたちには今夜のベッドがないが、ぼくはもう欲しがらないよ」

「アレック、ポケットを調べてみて」

「なに？」

「スティーヴはあたしにキスをしながら、こう囁いたの。「ご亭主にポケットを調べろと言ってくれ。それから〝主は与えたまう〟と言ってやんな」って」

コートの左側のポケットにそれがあった。十ドル金貨（ゴールド・イーグル）だ。手にするのは生まれて初めてである――温かく、ずっしりと重たい。

16

人いかで神より正義からんや
人いかでその造主より潔からんや
　　　　ヨブ記第四章一七節

我を教えよ　然らば我黙せん
請ふ我の過てる所を知せよ
　　　　ヨブ記第六章二四節

フラグスタッフの繁華街にあるドラッグストアで、わたしはそのイーグル金貨を、大型の一ドル銀貨九枚と九十五セントの小銭、それにアイボリー石鹸一個と取り替えた。石鹸を買うというのはマルガレーテの思いつきだった。

「ねえアレック、ドラッグストアのひとは銀行を経営しているわけじゃないんだから、ものを買わずに、両替だけするといやがるかもしれないわ。あたしたち、石鹸がいるのよ。あなたとあたしの下着を洗いたいし、二人ともお風呂にはいらなくちゃ……それにスティーヴご推せんの安宿じゃ、石鹸は宿泊料に入っていないんじゃないかしら」

　どっちの点でも彼女はあたっていた。ドラッグストアの主人は金貨を見て眉を吊り上げたが、しかし何も言わなかった。かれは金貨を受け取り、ガラス張りのカウンターの上にそれをチャリンと落としてみてから、キャッシュレジスターのうしろに手を伸ばして、小さな壜を取りだし、金貨に硝酸テストを施した。

　わたしは文句は言わなかった。主人はもくもくと、一ドル銀貨九枚、五十セント玉一つ、二十五セント玉一つ、そして十セント玉二つを数えて差し出した。わたしはコインをすぐポケットに入れずに、そのままじっと動かずに立ちつづけ、コインを一つひとつ店のカウンターの上に落として、主人がやったと同じテストを行なった。そうしてから、そのうちの銀貨一枚を主人の方へ押し返してやった。

　またしても主人は何も言わなかった――わたし同様、この見せかけの銀貨がたてた鈍い音を聞いたのだ。かれは売上げなしのキーをガチャンと押してから、別の銀貨（これは鐘のように澄んだ音をたてた）をくれ、インチキ銀貨は現金入れの陰にしまい、くるりとうしろを向いてしまった。

　街外れの、ウィノーナに通ずる道の途中で、わたしたちは望み通りの――つまり、かなりみすぼらしい――宿をみ

つけた。マルガレーテがスペイン語を操って宿賃をまけさせた。主人は五ドル要求した。マルガは聖母マリアと、さらに三人もの聖人を動員して、自分がいかにひどい目にあわされているかを訴え、五ペソではどうかともちかけた。

わたしには彼女の作戦が理解できなかった。マルガが一ペソも持っていないことを知っていたからだ。よもやわたしが今も持っている〝別の世界からついてきた忠実な〟通用不能ペソを使うつもりではあるまい。

理解できずにいるうちに、主人は三ドルという対案を示し、「シニョーラ、神かけて、これ以上はまけられません」と、付け加えた。

結局、両者は一ドル五十セントで折り合った。それからマルガがもう五十セント足して清潔なシーツと毛布を借り、ひっくるめて二枚の銀貨を支払い、仕上げに枕二つと枕カバー二枚をサービスしろと要求した。その要求をのんだ主人が今度は、ちょっと色をつけてほしい……と言い返した。かくてマルガは十セントを上のせし、主人は深々と一礼して、われわれに一夜の宿を提供してくれた。

翌朝七時、わたしたちは再び出発した――よく眠り、清潔になり、しあわせな気分で、そして空腹をかかえて、だ。三十分後にウィノーナに到着。空腹はますますひどくなっている。トレーラーに引かれた小さな食堂車で、そっちの始末をつけることにした。パンケーキがひとかさね十セント、コーヒーが一杯五セント――二杯目は無料（ただ）、バターとシロップは使い放題。

マルガレーテは自分の分が食べきれず――すごいヴォリュームだった――皿を取りかえっこしたわたしは、彼女の残りを平らげた。

壁に掲示板がかかっている――〝代金は料理とひきかえに現金でお支払いください。チップはご無用に願います。〈審判の日〉を迎える準備はできていますか〟

コック兼ウェイター（そしてオーナーだと思う）は〈物見の塔〉の絵を調理台の横に立てかけていた。

「ねえ、きみ、〈審判の日〉がいつ来るか、何か新しい情報はないかね」と、わたしはたずねた。

「冗談はやめてください。地獄で過ごす〈永劫〉てのは、そりゃ長いものなんですぜ」

「冗談は言っていないよ。しるしや前兆から察するに、われわれは今、黙示録の第一一章二節と三節に予言されている七年期の中にいるんだと思う。だがその中のどのあたりまで来ているのかがわからないんだ」

「わたしたちはすでにその後半に入っていますよ」と、かれは答えた。「二人の証人が予言していますし、反キリスト主義が国じゅうにはびこっていますからね。あなたは神

の御恵みに浴していますか。もしまだなら、急いだほうがいいですよ」
わたしは答えていった。「〃汝らも備えおれ　人の子は思わぬ時に来ればなり〃（ルカ伝福音書第一二章四〇節）」
「信じた方がいいのに！」
「信じているさ。おいしい朝食をありがとう」
「どういたしまして。あなたにも、主のご加護を」
「ありがとう。きみにも主のご祝福とご加護をね」
マルガとわたしは出発し、再び、東の方へ向かって進んだ。
「気分はどうだい」
「おなか一杯でしあわせ」
「ぼくもだよ。それに昨夜のきみがすばらしかったから、特別にしあわせな気分さ」
「あたしも。だけど、あなたはいつもすてきよ、あなた。いつも、いつも、いつも、すてき」
「え、ああ、そのことね。それはきみだって同じさ。いつも、すてきだ。でも今ぼくが言っているのはね、きみが口にした言葉さ。〈審判の日〉に対するぼくの考えに同調するかってスティーヴにきかれたきみは、そのとおりだと答えてくれた。ねえ、マルガ、きみがまだイエスの腕の中に戻ってきていないってことを、ぼくがどれだけ心配しつづけているか……とても口では言えないくらいなんだよ。〈審判の日〉がどんどん近づいてくるというのに、現実にその日がいつなのか知りようもない――ま、とにかく、ぼくは心配でしようがないんだ。本当に心配なんだよ。でも、どうやらきみはきみなりに、神の御手に戻る道をみつけかけているらしい――ぼくには何も話してくれないけど……」
マルガレーテは黙りこくり、わたしたちはそのまま二十歩ほど歩きつづけた。
やがて彼女が静かに言った。「ねえ、あなた。あたし、できることなら、あなたを安心させてあげたいと思っているのよ。でもあたしにはできないわ」
「そう？　ぼくには、よくわからない。説明してくれないか？」
「あたしはスティーヴに、あなたと同じ考えだとは言わなかったわ。反対はしないと言ったのよ」
「でも、それなら同じことじゃないか！」
「いいえ、ちがうのよ、あなた。スティーヴには言わなかったけど、本当は、何事でも人前では夫に逆らうつもりはないって言いたかったのよ。あなたと意見が違うときは、後で二人だけで話すわ。スティーヴの前では言わない。誰の前でも、言わないわ」

わたしはしばしこの言葉を反芻し、幾度か口にしかけた言葉をのみこみ――最後の言葉だけを外に出した。
「ありがとう、マルガレーテ」
「ねえあなた、これは何もあなたのためだけじゃないの、あたし自身の体面を保つためでもあるのよ。あたし、いつもいやだなあって思いつづけてきたの――夫婦の意見がくい違って、人前で言い合ったり、けんかしたりするのを見るのが……。たとえ、あなたが〝いま、太陽の上で緑色の仔犬が寝ている〟とおっしゃっても、あたし、人前では反論しないわ」
「ほう！　でもあれは本当の話なんだぜ！」
「何ですって？」彼女はびっくりして立ち止まった。
「ぼくのマルガ……きみは本当にいい人なんだね。どんな問題が起きてもいつも心優しい答えをみつけてくれる。ことんど太陽の面に緑色の仔犬が見えたら、それを話すのは二人だけの時にして、人前できみを困らせたりしないようにするよ。愛しているよ、マルガ。心配のあまり、つい、スティーヴに対するきみの言葉にこだわりすぎてしまったらしい」
マルガレーテはわたしの手を握りしめた。そのまま無言でわたしたちはしばらく歩きつづけた。
「アレック？」
「うん、なんだい？」
「あたし、何も好きであなたを心配させてるんじゃないのよ。もしあたしの考えが間違いで、あなたがキリスト教の天国にいらっしゃるのだとしたら、あたしもあなたと一緒に行きたいわ。もしそれがイエスへの信仰に帰依することを意味するのだとしても――どうやらそうらしいけど――それでもあたし、よろこんでそうするわ。とにかく、やってみる。お約束はできないけど……だって、ただそうしたいって思うだけでは信仰にはならないもの。でもやってみるわ」
わたしは立ち止まって彼女にくちづけし、たまたま通りかかった車に乗っていた男たちの、目を楽しませてしまった。
「それで充分だよ、マルガ。じゃあ、一緒にお祈りをしてみるかい？」
「今はだめ、アレック。お祈りはあたし一人でさせてちょうだい――そのうちにきっと！　一緒に祈れる時が来たら、あたしの方からそう言うわ」
ほどなく、わたしたちは牧場主の夫婦にひろわれ、ウインズローまで連れていってもらった。わたしたちをおろした牧場主夫婦は、何も訊かず、また何も教えてくれなかった。まさにギネスブックものだ。

ウインズローはウィノーナよりもかなり大きく――砂漠の集落にしては立派な街だ――推定人口七千。ここで、あることを実行に移す絶好の機会が訪れた。昨夜スティーヴがそれとなくほのめかし、われわれも後で検討しあった〝あること〟である。

スティーヴの言ったとおりだった――われわれの着衣は砂漠向きではない。当り前だ、われわれは否応なしに突如として異世界に連れこまれてしまったのだから。しかし砂漠の中でビジネススーツを着ている人間はわたしだけだ。白人女性で婦人用スーツを着ているのもマルガだけだ。インディアンやメキシコ人の女性はスカートをはいているが、白人女性はショート・パンツかズボンをはく――スラックス、ジーンズ、半分にちょん切ったズボン、乗馬ズボン……等々。たまにスカートを見かけることはあるが、スーツは皆無だ。

それればかりか、われわれのスーツはシティウェアとしてさえ、まともではなかった。一八九〇年代から脱け出してきたような場違いなスタイルだ。「何がどんな風に」とは訊かないでもらいたい。わたしは決してスタイルの――とくに婦人もののスタイルの――エキスパートではないのだから。わたしの着衣も、別の世界のマサトランで、わたしの雇い主であるドン・ハイメが着ていたときには、これでもスマートで値の張るスーツだった……だが、この世界のアリゾナ砂漠で着ていると、まるで貧民街の住民にしか見えない。

ウインズローで、わたしたちはおあつらえ向きの店をみつけた。〈中古品専門店〉だ。全品お買得……現金売りにかぎる……品質の保証はなし……返品お断り……ただし古着は完全消毒済み……。同じ文句が上にスペイン語で書いてある。

一時間後、その店の在庫品を徹底的に引っかきまわし、マルガレーテが値切りに値切った揚句に、わたしたちはこの砂漠にふさわしい身仕度を整えた。わたしのいでたちはカーキ色のズボン、それに合うシャツ、そして、西部劇スタイルのストローハット。マルガレーテの方はかなり軽装だ――短くてタイトなショート・パンツ（ちょっぴり気になるほど短くて、タイトだ）、上半身には、チョッキよりも小さく、ブラジャーよりはやゃましなもの……〝ホールター〟とかいう代物だ。

このマルガのいでたちを見るなり、わたしは彼女にそっと囁きかけた。

「そんな恥知らずな服装で人前に出ることは絶対に許さないよ」

すると、マルガは答えた。

「あなた、昼間から変なこと言わないで。暑くてたまらないのよ」
「ぼくは冗談を言ってるんじゃないよ。きみがそれを買うことを禁止する」
「アレック。あたしは、あなたの許可を求めるつもりなんかないのよ」
「ぼくの言うことをきかないつもりなのか?」
彼女は溜息をついた。「そうかもしれないわ。そうしたくはないけど。あなた、剃刀買ったの?」
「さっき見てたくせに!」
「あなたのパンツとソックスはあるわ。ほかに何か必要なものがあるの?」
「ない。マルガレーテ! 話をそらすのはやめてくれ!」
「ねえあなた、人前でけんかはしないと言ったでしょう。これには巻きスカートがついているの——いずれそれをはくつもりだったのよ。だから、あたしの思いどおりにさせてちょうだい。早くお金を払いましょうよ。そうすればここを出て、二人だけで話できるわ」
腹を立てながらも、わたしはその提案に従った。しかも彼女の行き届いた采配のおかげで、店に入った時よりも金持ちになって店を出た……という事実を認めざるを得ない。どうしてかって? 雇い主だったドン・ハイメのスーツは、わたしが着ているときにはあんなに似合わなかったのに、古着屋の主人にはよく似合ったからだ。——まったくの話、この男はドン・ハイメにそっくりだった。かれは喜んで、わたしに必要なもの——カーキ色のシャツ、ズボン、ストローハット——の物々交換に応じてもいいと申し出たのである。
だがマルガレーテは承知しなかった。五ドルを払えと要求し、結局、二ドルを獲得したのである。
やがて彼女が勘定を清算したときにわかったことだが、彼女は同じ手をつかって、不要になった自分のテイラード・スーツを処分してしまっていたのである。わたしたちは七ドル五十五セント持ってこの店に入り、八ドル八十セントと……めいめい砂漠用の衣服、一本の櫛(二人の共用)、一本の歯ブラシ(二人の共用)、ナップザック一つ、安全剃刀一本、必要最低限の下着とソックス——全部古物だが消毒済みのはず……とを持って店を出た。
わたしはかけひきは得意じゃない。特に女性が相手の場合は、だ。外に出たわたしたちは、ハイウェイの上を歩きつづけた。やがて二人だけで話し合うことのできそうな場所についたとき、マルガレーテが口を開いた——しかし、そのときわたしはまだ、この勝負はすでに自分の敗けであることに気づいてはいなかった。

彼女は立ち止まりもせずにこう言ったのである。
「さ、あなた、何かおっしゃりたいことがあったんでしょう?」
「うむ、ま、そのスカートをはいていれば、そのなりは許せる。かろうじてね。だがあのショート・パンツ姿を人前に晒しては駄目だよ。わかってるね?」
「あたし、ショート・パンツだけで歩くつもりだったのよ。暑いときにはね。今みたいに」
「でもマルガレーテ。ぼくはそうするなって言ったじゃ……」
マルガレーテはホックをはずし、すでにスカートを脱ぎはじめていた。
「ぼくの言うことを聞かないのか!」
彼女はスカートをきちんと畳んだ。「すみませんけど、これをナップザックの中にいれてくださらない?」
「きみは本気でぼくに反抗するつもりなんだな!」
「でもアレック、あたしは何もあなたに従う必要はないわ。あなただって、あたしに従う必要はないのよ」
「しかし……ねえ、きみ、わかってくれよ。普段のぼくは、きみに命令なんかしないじゃないか。でも女房は夫に従うものなんだ。きみはぼくの女房だろう?」
「そうだと言ったのはあなたよ。あなたが違うと言うまでは、あたしはあなたの妻でしょうね」
「それなら、ぼくに従うのがきみの勤めだ」
「いいえ、ちがうわ、アレック」
「でも、そうするのが女房の第一の勤めじゃないか!」
「あたしは、そうは思わないわ」
「でも――そんなばかな! きみはぼくと別れるつもりなのか?」
「いいえ、あなたがあたしと離婚なさるなら別だけど」
「離婚なんてするつもりはない。離婚は罪悪だ。聖書に反する」
彼女は押し黙った。
「マルガレーテ……たのむから、スカートをはいておくれ」
「そうしてあげてもいいけれど」と、彼女はやんわりと言った。「ねえあなた、なぜそうさせたいの?」
「何だって? あのショート・パンツだけでは、淫らだからだ」
「たかが着るものだけで、なぜ淫らなのか、あたしにはわからないわ。人間次第じゃないの。あなた、このあたしが淫らだとおっしゃるの?」
「いや、その……きみはぼくの言葉をねじ曲げているんだ。きみが人前で――スカートもはかずに――あのショート・

パンツだけの姿をさらしてみろ。それこそ淫らに見えるじゃないか。今だって、こんなハイウェイを歩きながら、きみの両脚は丸見えじゃないか……ほら、たったいま通り過ぎた車に乗っていた人たちだって見てるぜ。みんな、きみを見ているんだ。やつらがじろじろ見るのがわからないか！」
「よかった。あの人たち、喜んでくれればいいわね」
「何だと？」
「あなたは、このあたしがきれいだと言ってくださるけど、ひょっとしたら、それはあなたの思いちがいかもしれない。あたしはね、ほかの人たちにも、あたしがきれいに見えるのかどうか確かめたいのよ」
「たのむから、まじめになってくれよ、マルガレーテ。ぼくたちは今、きみの裸の手足について話し合っているんだよ。いいか、裸のだぞ」
「あなたは、あたしの脚が〝むきだし〟だとおっしゃる。確かに、そのとおりよ。あたし、暑い時は、むきだしでいるのが好きなの。あなた、何をしかめっ面(つら)しているの？ あたしの脚ってそんなにみっともないかしら？」（〝なんじはことごとくうるわしくしてすこしのきずもなし！〟）
「きみの脚はきれいさ――前にも、何度もそう言ったじゃないか。でも、ぼくはきみの美しい脚を、ひとに見せたくないんだよ」
「ひとに見せたって、美しさは減らないわ。それより、さっきの話に戻りましょうよ、アレック。あたしの脚がどういう具合に淫らなのかって説明が、まだすんでいないわ。説明できればの話ですけどね。あたしは、説明できないと思うわ」
「しかしね、マルガレーテ、裸体は、本来、淫らなものなんだ。劣情を刺激する」
「本当かしら？ あなた、あたしの脚を見るたびに興奮なさるの？」
「マルガレーテ、なんてことを！」
「アレック、気取るのはやめてちょうだい！ あたしはただ単純に質問しているだけなのよ」
「不穏当な質問だ」
　彼女は溜息をついた。
「夫婦の間で、なぜこの質問が不穏当なの？ それに、あたしの脚が淫らだなんて……絶対に承服できないわ。裸が淫らだということもね。あたし、これまで何百人もの人たちの前で裸になって――」
「マルガレーテ！」
　彼女はけげんな顔をした。
「あなただって、知ってらしたでしょう？」

「知らなかったし、そんな話は寝耳に水だ」
「本当なの、あなた？　でもあたしが、泳ぎが上手だってことはご存じのはずよ」
「それとこれと、いったい何の関係があるんだ？　ぼくだって泳ぐさ。でも、ぼくは素っ裸じゃ泳がんぞ……ちゃんと水着をつける」
（と言ったとたん、わたしの脳裏に〈コンゲ・クヌート〉のプールの情景が、くっきりと浮かび上がってきた――そういえば、マルガはヌード・スウィミングの常連だった。わたしは、手も足も出なくなったのに気づいた）
「そうそう。あたし、マサトランで、そんな水着を見たことがあるわ。スペインでもよ。でも、あなた、また話がわき道にそれているわよ。この問題はね、あたしのむきだしの脚が淫らかどうかとか、あたしがスティーヴにお別れのキスをすべきではなかったかとか、あたしがあなたに従うべきかどうかなんてことより、もっと大きいのよ。あなたは、このあたしとは別の人間を求めているんだわ。あたしは何年でも、いえ、一生あなたの妻でいたいと思っているし――あなたの行き先が天国だというのなら、あたしもその天国までお伴(とも)したいと思っているのよ。でも、あなた、あたしは子供じゃないし、奴隷でもないわ。確かに、あなたを愛しているから、あなたを喜ばせてあげたいと思っている。でも、あなたの妻だからという理由で、あなたの命令に服従するつもりはないわ」
わたしの鮮やかな反論は彼女を圧倒したと言えるかもしれない。そう、確かにそう言えるだろう。だが、それでは嘘になってしまう。わたしが何とかうまい返事を考えだそうとしているうちに、たまたまわたしたちを追い越していった車が速度を落とした。口笛が聞こえた。いかにも〝女たらし〟といった野郎だ。車はわたしたちの背後で止まり、バックしてきた。「乗るかい？」と呼びかけている。「はーい！」と、マルガレーテは答え、駆けだした。やむを得ず、わたしも駆けだした。
ステーションワゴンだ。女性が運転し、助手席に男がいる。二人とも年格好はほぼわたしと同じぐらい、いや、ちょっと年上かもしれない。男が手を伸ばして後部座席のドアを開けた。「乗りな！」
わたしはマルガレーテの手をとって車に乗せ、あとから自分も乗りこんでドアを閉めた。
「狭くないかい？」と、男は言った。「狭かったら、そのガラクタを床に放り出してくれ。おれたちは、あまり後ろに座らないんでね、自然とそこに物がたまっちゃうんだ。おれの名はクライド、こいつはベシー、苗字は二人ともバルキーだ」

「バルキー（巨体）はこの人。あたしはちょっと太めなだけ」

と、運転している女房が付け加えた。

「まさに、名は体を表わすだ。よく人に笑われるんだけど」

確かに、男は大柄で、骨組みのがっしりした、肉付きのよい体格の持ち主だった。学生時代にスポーツをやり、そのあとで太ったというタイプだ。男の女房の言葉も当っている。この女性も決してデブではないが、ちょっぴり贅肉がつきすぎている。

「はじめまして、奥さん、それにバルキーさん。ぼくたちはアレック・グレアムとマルガレーテ・グレアムです。乗せていただいて感謝します」

「固苦しい挨拶はぬきにしてよ、アレック」と、男の女房が答えた。「どこまでいくの？」

「ベシー、たのむから、片目だけはちゃんと前を見ててくれよ」

「クライド、わたしがこのポンコツ車を運転するのが気にいらないんなら、あなたに運転を代わってもらってもいいのよ」

「あ、いや、とんでもない。おまえの運転は実に立派なもんだ」

「じゃあ、おとなしくして、さもないとK規則を発動するわよ。それで、アレック？」

「ぼくたちはカンザスへ行くんですが」

「あらまあ！　あたしたち、そんなに遠くまでは行かないのよ——チェンバースから北へ向かうの。この道をちょっと行ったところね。九十マイルぐらい先かしら。でも、そこまでなら喜んで乗せてあげるわ。カンザスで何をするつもり？」

（カンザスで何をするかだって？　アイスクリーム・パーラーを開き……愛妻マルガをキリスト教に帰依させ……〈審判の日〉に備える——）

「皿洗いをするつもりです」

「主人は物事を控え目に言うたちなんです」と、マルガレーテが平然と言った。「あたしたち、学生街にカウンターつきの小さなレストランを開くつもりなんです。その望みがかなうまで、皿洗いをすることになるかもしれません。どんな仕事でもやるつもりです」

そこで、わたしは、われわれの身の上を話した。当然信じてもらえそうもないところは、適当に変えたり、省（はぶ）いたりした。

「そのレストランは跡かたもなくなり、メキシコ人のパートナーたちは死に、わたしたちは全財産を失いました。〝皿洗い〟をするのは、この仕事なら、いつでも見つかる

からなんです。しかし、どんな仕事でも厭いません」
「アレック、その心がけなら、すぐに立ちなおれるさ」と、クライドは言った。
「若干の金をなくした、というだけのことです。まだ、やりなおしできないほどの歳ではありませんしね」（主よ、わたしがそれをやりとげるまで〈審判の日〉を遠ざけておいてくださいますか？　御意に従います、アーメン）
マルガレーテが、つと手を伸ばして、ぎゅっとわたしの手を握りしめた。それを見たクライドは、わたしたちとかれの妻の両方が見えるように、くるりとからだの向きを変えた。
「きっと望みどおりになるさ」と、かれは言った。「その奥さんがついているかぎり、絶対に望みはかなうよ」
「ぼくもそう思いますよ、でも、どうもありがとう」なぜかれがこちらへ向きなおったか、そのわけは分かっている……マルガレーテを眺めるためだ。「こっちを見るな」と言いたいのだが、この場合、そうもいかない。その上、相手の二人が、マルガレーテの着ているものを別段変だと思っていないことは明らかだ。ベシーも同じような態をしている。もっと多分にというべきか、あるいは、もっと少なめにというべきか――つまり、マルガよりも身につけているものは少く、肌はもっと多く露出しているのだ。それに、マルガレーテほど神々しい美女ではなかったが、なかなかの、器量よしでもある。
五色砂漠（アリゾナ州中北部のコロラド川東岸の地帯。岩石の表面が多彩に色どられている）でわたしたちは車を止め、車外に出て、このまったく信じがたいほどの自然美を見物した。わたしは前に一度見たことがあったが、マルガレーテは初めてだ。息を呑んでいる。自分たちはもう何百回も見ているのだが、ここへ来るたびに必ず車をとめる、とクライドは言った。
訂正――わたしがこれを見たのは……〈別の世界〉だ。
この五色砂漠は、わたしが前から抱いていた強い疑惑の正しさを、証明してくれたようだ。つまり、この目茶苦茶な次元転換は、母なる大地まで変えてはいないという事実である。変わるのは人間と人間の造ったものだけであり――それとても、ごく一部分にしかすぎないのだ。しかしこの事実を納得しようとすれば、偏執病になってしまうだろう。そうだとすれば、わたしは絶対に気を確かに持たねばならぬ、わたしはマルガレーテを守らなければならないからだ。
クライドがホットドッグと冷たい飲物を買ってくれた。わたしは代金を払おうと申し出たのだが、軽くいなされてしまった。再び車に戻ると、今度はクライドがハンドルを握った。マルガレーテに、自分の隣りに座れと誘う。わた

しは不愉快だったが、それを顔に出すひまも与えず、素早くベシーが言った。
「お気の毒ね、アレック！　こんなおばあちゃんと一緒で。さ、ふくれ面(つら)しないでちょうだい。チェンバースへ行く分岐点まで、たったの二十三マイルなんだから……クライドの運転なら二十三分以内に着くわ」
　この時のクライドは三十分かけた。しかし、かれはそのまま車を停めて待ち、わたしたちがギャラップへ向かう車に乗せてもらうのを見届けてくれた。
　ギャラップに着いた時、日暮れにはまだ間があった。わたしの懐中には、まだ八ドル八十セントが残っているが、そろそろ汚れた皿を探したほうがよさそうである。ギャラップには、居住するインディアンも多いが、モーテルや離れ家式(キャビンコート)モーテルも多い。これらの宿泊施設のほぼ半数がレストランを経営している。わたしは十三軒もの店をきいてまわり、やっと皿洗いの仕事を見つけた。
　十四日後に、わたしたちはオクラホマシティにたどり着いた。ゆっくりだなと言われるなら否定はしない――なにしろ一日あたり五十マイル以下のペースだ。しかしその間に、実にたくさんの出来事があり、わたしは自分がまちがいなく偏執病なのだと感じるようになってしまった――次から次へと次元転換が起こり、しかもそれが常にわたしを最大限のトラブルに巻きこむタイミングで起こってくるのだ。
　あなたは、ネズミをいたぶる猫を見たことがおありだろうか？　ネズミは絶体絶命なのだ。主がネズミに与え給うた脳味噌をもってしても、その事実はちゃんと分かるはずである。それでもネズミは決してあきらめず……逃げようとしては引き戻されるのをくりかえす。
　わたしは、まさにそのネズミなのだ。
　いや、二匹のネズミだ。マルガレーテが一緒にいるのだから。そして、彼女がいたからこそ、わたしは挫けずにやってこられたのだ。彼女はひと言も不満を言わず、あきらめもしなかった。だからわたしも、あきらめることができなかったのだ。
　たとえば――次元転換が起こると、紙幣はただの紙きれになるが、金貨や銀貨などの硬貨なら、たとえ貨幣としては通用しなくても、地金としていくばくかの価値があると悟ったわたしは、近ごろでは硬貨を手に入れると、なるべく使わずに手もとに残し、できうるかぎり紙幣をもらわないようにしている。
　頭のいいやつだな、アレック。おまえはまったく賢い。
　さて、ギャラップでの三日目のこと、マルガとわたしは昼寝をしていた。この部屋の料金は皿洗い（わたし）とル

ーム掃除（マルガ）で支払っている。わたしたちはベッドカバーの上に寝ころんでいたのである。

ひと息ついたころ、ふと、わたしは何か堅いものが背骨にあたるのを感じた。身体を浮かせてみると、さっき寝返りを打ったときに、貯めこんだ銀貨が、サイドポケットから転がり出たのだとわかった。マルガの頭の下からそっと腕を抜いたわたしは、転がり出た一ドル貨を回収して数え、ほかの小銭といっしょに、自分の頭から一フィートほど離れたサイドテーブルの上に並べた。身体をまっすぐ伸ばしてマルガの頭の下に腕を差し入れたわたしは、すぐに、再び眠りこんでしまった。

目を開けたとき、あたりは真っ暗だった。

眠けがいっきに吹きとんだ。マルガレーテはわたしの腕を枕に、まだかすかな寝息を立てている。わたしは彼女を軽く揺すった。

「ねえきみ、起きなさい」

「うーん？」

「だいぶ時間がたってるぜ。夕食を食べそこなったかもしれんぞ」

彼女はぱっと目を覚ました。

「そのベッドライトをつけてくださる？」

ベッドサイドテーブルを手探りしたわたしは、危うくベッドから転げ落ちかけた。「ベッドライトのやつめ、どうしても見つからない。なにしろ、まるで石炭の山の中へ入ったみたいに真っ暗だからな。ちょっと待ってくれ、天井の明りをつけよう」

わたしは用心してベッドから下り、ドアの方へ歩きかけ、椅子につまずいた。ドアは見つからない――手探りしてドアを探し、ようやくドアを見つけ、さらに手探りして、ドアのわきにあるスイッチを見つけた。天井の明りがついた。

二人とも沈黙したまま、長い気詰りな時間が過ぎた。やがてわたしは、言う必要もない愚かな言葉を口にした。

「またやりやがった」

ここは、どこにでもある安モーテルの何の変哲もない部屋である。それにもかかわらず、先刻わたしたちが眠りこんだ部屋とは、どこか違っていた。

しかも、虎の子の銀貨が消え失せていた。

何もかも……身につけているもの以外のものはすべてなくなってしまった――ナップザックも、清潔なソックスも、替え下着も、櫛も、安全剃刀も、何もかも、だ。わたしは念入りに調べ、その事実を確認した。

「さあて、マルガ、これからどうしよう？」

「あなたのおっしゃるとおりにいたしますよ、だんな様」

「うむ……これで調理場には、もうぼくの知り合いはいな

くなっちまったと思うけど、ひょっとしたら、ここでも皿を洗わせてもらえるかもしれない」
「あるいはウェイトレスを求めているかもしれないわね」
ドアにはバネ式の錠がついており、鍵を持っていないわたしは、ドアを一インチほど開けたままにしておいた。ドアは直接戸外に面しており、駐車場のむこうに事務室があった――いちばん角の部屋で、〃事務室〃と書いた文字が明りに照らされている。なにもかも、ごくありふれた光景だ。ただ、これまでわたしたちが働いていたモーテルとは違うだけのことである。前のモーテルでは、真ん中の建物の正面の端にマネージャーのオフィスがあり、その建物の残りの部分はコーヒーショップになっていた。
そうだ。まだ夕食を食べていない。
それに、朝食もだ。このモーテルにはコーヒーショップがない。
「どうする、マルガ?」
「カンザスはどっちかしら?」
「あっちだ……と思う。でも今のぼくたちは二者択一を迫られているんだぜ――部屋に戻ってベッドで朝まで眠るか……それとも、このままハイウェイへ出ていってヒッチハイクをするか……真っ暗闇の中でね」
「あたしの目には一つの道しか見えないわ、アレック。もし部屋に戻ってベッドで眠ったら、朝になって目を覚ましたときに今よりもっとお腹がすいているし、お金はないし……一文無しで部屋を使って、眠っているところを見つかったりしたら、ただじゃすまないわよ」
「ぼくは、あんなにたくさん、皿を洗ったのに」
「ここでは、洗わなかったのよ。ここの人たちは、きっと警察を呼ぶでしょうね」
わたしたちは歩きはじめた。
この災難は、なんとかカンザスにたどり着こうとするわたしたちに加えられた迫害の、典型的な一例であった。そう、まさに〃迫害〃だ。「世間全体が自分に対して陰謀を企てている」という被害妄想を持つことが偏執病の症状だとするならば今のわたしはまさに偏執病患者である。それでもこれはあくまでも〃正気〃の偏執病(アイルランド流儀の頑固さを許していただきたい)か、あるいは、今のわたしが拘禁治療を受けねばならぬほど途方もない幻覚に悩まされているかのどちらかだ、とわたしはあえて主張したい。
ひょっとしたら、これは本当に幻覚なのかもしれない。だが幻覚だとすると、マルガレーテもわたしの幻覚の一部ということになる――そんなことは絶対に認めたくない。

第一、〃二人組の気ちがい〃なんかあり得るはずがない。マルガレーテは、どんな世界にいたって、気ちがいなんかであるものか。

わたしたちがようやく食べ物を口にすることができたのは、昼近くになってからである。その頃になると、普通の人の目にはただの塵旋風(ダストデヴィル)でしかないものが、わたしには幽霊に見えるようになっていた。わたしの帽子はいつの間にか〈スイカズラのつるのからまりし所〉へ飛び去り、かといって頭上に照りつけるニューメキシコの太陽はわたしの苦境を救う手だてとはならない。

建設現場からきた車の男たちがわたしたちを拾い上げ、グランツまで乗せてくれ、別れぎわに昼食をおごってくれた。わたしは保証つきの気ちがいかもしれないが、決して馬鹿ではない——わたしたちが車に乗せてもらえたのも、昼食を招ばれたのも、すべて、ピチピチのショート・パンツをはいたマルガレーテの姿が、男たちの注意をひきつけたからだという事実は理解できた。かれらが買ってくれた昼食を堪能する間（いや本当においしかった!）、わたしはつくづく、その事実を思いしらされた。しかしその思いを、わたしはしっかと自分の胸のうちにしまっておいた。

かれらが行ってしまってから、わたしは言った。

「東へ行くかね?」

「はい、だんな様。でもその前に、公立図書館で調べてみたいの。ここに図書館があればの話だけど」

「うん、そうだな。確かに、そうだ」

以前、われらが友スティーヴの世界に空の交通機関が何もなかったことから、かれの世界は、ひょっとするとマルガレーテの世界（ということは、アレック・グレアムの）ではないか、と思ったことがあった。やがて見つけたギャラップの公立図書館で、わたしたちはこの点を確かめてみた——百科辞典を借り出し、わたしはアメリカ史を、そしてマルガレーテはデンマーク史を調べたのだ。五分後、わたしも、マルガも、〃スティーヴの世界はマルガの生まれた世界ではない〃ことを確信した。この世界では、一八九六年にブライアンがアメリカ大統領に選出されたが、在職中に死去し、副大統領のアーサー・シーウォールが大統領に就任している。これだけわかれば、充分だ。あとは聞いたこともない名前の大統領と戦争がつづいているだけである。

調査を終えたマルガレーテは、小鼻をふくらませて憤慨した。小声で話さねばならぬ場所を出てから、わたしは彼女が何を怒っているのか、確かめた。

「これはきみの世界じゃない。それは確かだ」

「もちろん、ちがうわ!」

「しかし、それにしても、よくこうも違う世界ばかりつづくもんだな。〝航空〟って概念のない世界は、いったい、いくつあるんだろう」
「こんなところ、あたしの世界じゃなくてよかったわ！　いい、アレック？　この世界では、デンマークはスウェーデンの領土なのよ。ひどいじゃないの！」
　実をいうと、わたしには彼女の動転する理由が理解できなかった。デンマークもスウェーデンも北欧の国で、似たもの同士だ――少くともわたしには、そう思えた。
「ごめんよ、マルガ。ぼくはきみの国のことをよく知らないんだ」（わたしも一度だけストックホルムを訪れたことがある。いいところだと思った。でも今はどうやら、その話はしない方がよさそうだ）
「それに、あのばかげた本ときたら、首都はストックホルムで、国王はカール十六世だなんて書いてあるのよ。いい、アレック、その男は王族ですらないのよ！　それなのに、そんな男が、あたしの国の王様だなんて！」
「でもね、マルガ、その男はきみの国の王様じゃないんだぜ。ここはきみの世界じゃないんだから」
「そんなことは、わかってるわよ。ねえアレック、もしあたしたちが、この世界に落ちつかなきゃならないとしたら――もし次元転換が二度と起こらないとしたら――あたし、帰化することができるんでしょ？」
「もちろん、できると思うよ」
　彼女は溜息をついた。
「あたし、絶対にスウェーデン人にはなりたくないわ」
　わたしは沈黙を守った。ときには、わたしの力ではどうにもならぬこともあるのだ。

　だから、グランツでも、このところ続いて起こった次元転換で、世の中がどう変わったか見てみようと、わたしたちは公立図書館へ出かけていった。空には飛行機も、空中船（ディリジブル）も見あたらないから、わたしたちはまた、マルガレーテの世界にいるのかもしれない。ここの図書館でわたしは真先に、〝航空機〟の項目をみた――空中船（ディリジブル）は出ていないが、飛行機械は見つかった……この世紀のはじめに、ブラジルのアルベルト・サントス・デュモン博士によって発明されたという。わたしは呆然とした――わたしの世界におけるアルベルト・サントス・デュモンは、ツェッペリン伯に次ぐ、空中船（ディリジブル）の先駆者である。同博士の重航空機は、ジェット機はもちろん、ふつうの飛行機に比べてもかなり初歩的であり、商業化された空の乗物というより、単なる変わった発明品のように思われていたのだ。わたしはその本を放棄し、アメリカ史に目を移した。また、ウィリアム・ジェ

ニングズ・ブライアンを調べてみる。
まったく記載がない。ま、いいさ、これがわたしの世界じゃないことは、もうとっくにわかっているのだから。
だがマルガは喜色満面だった。一刻も早く話をしたくて、〃お喋り禁止区域〃を出るのが待ちきれぬ様子である。
「この世界では、北欧全体が大きな一つの国で、コペンハーゲンがその首都なのよ！」
「ほう、そりゃよかった！」
「マルガレーテ女王のご子息のフレデリック王子が、エリック・グスタフ王として即位したの――きっとほかの地域の人たちも喜んでいると思うわ。このかたは生っ粋のデンマーク王家の人で、正真正銘のデンマーク人なんですもの。これが当然の姿だわ！」
わたしも努めて彼女に嬉しげな表情を見せた。まったくの一文無しで、今晩泊るあてもないというのに。マルガはまるでクリスマスを迎えた子供のように、はしゃいでいる。それも、わたしにとっては、まったくどうでもいいことのせいで……。
ごく短い距離ずつ二回、車に乗せてもらい、やっとアルバカーキーに着いた。大きな街である。しばらく、ここに滞在するのが得策のようだ――たとえ救世軍の庇護を求めることになろうとも。さっそく、わたしはホリデイ・インのコーヒー・ショップで皿洗いの職をみつけ、マルガレーテも同じ店でウェイトレスとして働きはじめた。
働きはじめて二時間もしないうちに、突然マルガが洗い場に入ってきて、流しに屈みこんでいるわたしの腰のポケットに、何かを滑りこませた。
「プレゼントよ、あなた！」
わたしは振りむいた。
「やあ、ありがと」
ポケットを探ってみると、旅行用の安全剃刀が入っている――柄がねじ込み式で、本体と柄と替刀が防水仕様のケースにピッタリと納まっており、ポケット版の聖書よりも小さい。
「盗んだのか？」
「とんでもない。チップをもらったから、ロビーの売店で買ったのよ。次の休憩時間には、まずそのお髭を剃ってちょうだいね」
「でもねえ、きみ。確かにきみは美人であるがゆえに雇われたんだろうが、このぼくは、頑丈な背中と、柔弱な心と、従順な性質のゆえに雇われたんだぜ。ぼくがどんな顔をしていようと、だれも気にしやしないさ」
「でも、このわたしは気にするわ」
「きみはぼくの命令を受けたくはないんだろう。さあ、こ

こから出ていっておくれ。仕事の邪魔だ」
その夜マルガレーテは、わたしにまず剃刀を買ってくれた理由をこう説明してくれた。
「ねえあなた、もちろんあたしは、あなたの顔がすべすべしていて、髪が短くなっているほうが好きよ――でもこれは、そのせいだけではないの。今のところ、このロキのいたずらがいつ終わるかわからないの、その度にあたしたちは食べるための仕事をみつけなければならないのよ。皿洗いをするのに顔なんかどうでもいいってあなたはおっしゃるけど……でも、清潔できちんとしていたほうが、どんな仕事を見つけるにせよ、雇ってもらいやすいし、それに、清潔にしたからって別に害にはならないと思うわ。
それに、もう一つ理由があるの。この次元転換のおかげで、これまでにあなたは頬ひげを――ええと一回、二回、……五回かな――生やしたままでいたわね。三日間も伸ばしつづけていたこともあったわ。ひげを剃りたてのあなたってね、あたしにはとても頼もしくて幸せそうに見えるの。そうすると、このあたしも幸せな気分になれるのよ」
さらにマルガレーテは、わたしにマネーベルト――要するにポケットのついた布の帯――を作ってくれた。これを、ベッドで眠っているときもつけていてほしいと言う。
「次元転換が起きたときに身につけていない物は、全部失くなってしまうでしょ。だから、寝る前に服を脱ぐときは、必ず硬貨と剃刀をこのポケットの中に入れておいてちょうだい」
「そんな簡単な手でサタンを騙せるとは思えないけどね」
「そうかもしれないわ。でも、やってみたって悪くはないでしょう。これまで次元転換の起こったときには、そのときに身につけていたものと、ポケットに入っていた物だけは必ず残っていたんですもの。それが、サタンのルールなんじゃないかしら」
「混沌にルールなんかあるものか」
「でもこれは、決して混沌じゃないと思うわ。もしあなたがいやだったら、あたしが、これを身につけて眠ってもいいわ」
「ぼくがつけるよ。でも、もしサタンがこれをぼくたちから取り上げる気になったら、打つ手はないぜ。それに、ぼくはあまりそんなことを気にしていないんだ。あいつは一度、ぼくたちを太平洋の真ん中に丸裸のまま放り込んだ……でも、結局ぼくたちは救われた。きみも覚えているだろ？　ぼくがもっと気にしていることはね、マルガ、今まで次元転換の起こったときには、たまたまぼくたちが身体を寄せ合っているか、手をつないでいたってことなんだ。きみは気づかなかったかい？」

「確かに、そうね」
「次元転換は一瞬のうちに起こる。その瞬間に、もしぼくたちが身体を寄せ合っていなかったとしたら、どうなると思う？　身体のどの部分も、まったく触れあっていなかったとしたら？」
彼女は沈黙した。答えるすべがないらしい。
「ね、きみもそう思うだろ」と、わたしは言った。「ぼくの考えも同じさ。でも、ぼくたちはシャム双生児じゃない。ぼくたちは年から年中くっつき合っているわけにはいかないんだ。ぼくたちは働かなきゃならない。ねえ、ぼくの大事な、大事なマルガ……サタンだかロキだか知らんが、ぼくたちに悪さをしているやつは、ぼくたちが手を離している隙を狙いさえすれば、いつだってぼくたちを永久に離れ離れにすることができるんだよ」
「アレック」
「なんだい」
「ロキは、これまでだって、ずっとそうしようと思えばできたはずよ。でも、そんなことはまだ一度も起こっていないわ」
「だから、今にも起こるかもしれない」
「そうね。でも永久に起こらないかもしれないわよ」

その後も、わたしたちは旅を続け、さらに何回も次元転換を経験した。マルガレーテの防衛策は効果があるように思われたが——一度などは効果がありすぎたようだった……というのも偽造銀貨の不法所持によって、わたしは危うく禁固刑を言い渡されそうになったからだ。しかし、あっという間に、次の次元転換（わたしたちが経験した中で、もっとも間隔の短い）が起こり、罪状も、証拠も、告発の証人も消えてしまった。わたしたちはいつの間にか、見知らぬ法廷に立ちつくしており、入廷チケットを持っていないという理由でただちに退去を命じられた。
しかし、剃刀は手もとに残った。警官も、保安官も、裁判官も、それを没収しようとはしなかった。
わたしたちは常套手段（わたしの親指とマルガレーテのきれいな脚だ。こうするよりほかにしようのない以上、わたしもせいぜいその恩恵に浴そう……と、わたしはもう大分前から心を決めていたのだ）を使って旅を続けていた。トラックの運転手が、確かテキサスの美しい土地にわたしたちをおろし、ルート66をそれて、わき道を北へ走り去ったところだ。
わたしたちは砂漠をあとにして、なだらかな緑の萌える丘に出た。うららかな日和（ひより）であったが、わたしたちは疲れはて、空腹で、汗まみれになって、汚れていた。わたした

ちの迫害者――サタンだか、誰だか知らないが――も、これではいくらなんでもやりすぎだ。なにしろ、ここのところ三十六時間のうちに三回も次元転換が起こっているのだ。

一日のうちにわたしは同じ街の同じ場所で、二回皿洗いをし……一度も賃金をもらえなかった。〈ロンサム・カウボーイ・ステーキハウス〉が、あっという間に〈ヴィヴィアン・グリル〉に変わってしまったのでは、どうにも支払いを請求しようがない。その三時間後に〈ヴィヴィアン・グリル〉は中古車置場に姿を変えた。またしても一文にもならぬ。こんな打撃の連続の中で唯一の救いは、大幸運のおかげで（それとも大陰謀のせいか？）マルガレーテが、いつもわたしと一緒だったということだ――一度は、たまたま彼女がわたしを迎えにきて、わたしの雇い主がわたしの時間給を計算しているときに次元転換が起こったし、一度はわたしと一緒に働いているときに次元転換が起こった。

その次の次元転換でわたしたちは、マルガレーテの労働報酬で一泊分を支払った宿賃をふいにしてしまった。

そんなわけで、トラックの運転手に車をおろされたわたしたちは、疲れはて、空腹で、汚れきっており、わたしの偏執病はこの上なく嵩じていたのだ。

数百ヤードほど歩くと、きれいな小川が見えてきた。ここテキサスでは、何ものにも変えがたい眺めである。

わたしたちは、小川にかかる橋げたの下で立ち止まった。

「ねえマルガレーテ、ちょっとあの水に足を浸してみようか？」

「足を浸しただけじゃ我慢できないわ。いっそのこと、泳ぎましょうよ」

「なるほどね。ま、いいだろう、あの柵をくぐりぬけて五十……いや、七十五ヤードも川の真ん中へ出れば、道路からは見えないだろうし」

「ねえあなた、見たい人には、ずらりと並んで声援を送ってもらいましょうよ。とにかく、あたしは身体を洗います。それに――あの水、ほんとにきれいに見えるわね。飲んでも大丈夫かしら？」

「上流の方かい？　もちろん、大丈夫さ。これまでぼくたちは、あの氷山のときからずっと毎日、もっと大きな危険を冒してきたんだぜ。欲を言えば、何か食べるものがあればね――たとえば、きみの好きなホット・ファッジ・サンデーとか……それともスクランブルド・エッグの方がいいかな？」

わたしは柵の下の方の部分の針金を持ち上げ、マルガはその下をくぐり抜けた。

「〝オー・ヘンリー〟キャンディ・バーにしてくださらない？」

「ぼくの好みを言わせてもらえるなら」と、わたしは応じた。「〝ミルキー・ウェイ〟だな」
「無理でしょうね、あなた。〝オー・ヘンリー〟キャンディ・バーしかないんですもの」
そうやりかえしながら、マルガはわたしのために針金を持ち上げてくれた。
「ありもしない食べ物の話はやめた方がよさそうだな」と、わたしは針金をくぐり——立ち上がって、言葉をつづけた。
「今のぼくは、生きたスカンクだって食べちゃうぞ」
「食べ物はありますよ、あなた。〝オー・ヘンリー〟キャンディ・バーがあたしの物入れに入っています」
わたしは動きを止めた。
「女よ、もし汝が余をからかうのであれば、余は汝を仕置きせねばならぬ」
「からかってなんかいません」
「テキサスでは法律により、夫の親指の太さ以下の棒でなら、妻を懲らしめてもいいんだ」と、わたしは親指を立てて見せた。「このくらいの太さの棒はあるかい？」
「探してきます」
「キャンディ・バーをどこで手に入れた？」
「ファセリさんが——途中のお店であたしたちにコーヒーとドーナッツをおごってくれたときに」
ファセリ氏は真夜中にわたしたちを乗せてくれた人だ。さっき下りたトラックの前の車である。この二十四時間にわたしたちが取ったカロリーは、それぞれ二個ずつの小さいドーナッツと、コーヒーに入れたクリームと砂糖だけだった。
「仕置きは後廻しにするぞ。女よ、もしそれが汝の盗みしものなれば、後日、改めて告白するがよい。さあきみ、本当に〝オー・ヘンリー〟キャンディ・バーを持っているのかい？　それとも、熱にうなされたぼくの聞きまちがえだったのかな？」
「アレック。あなた、本気であたしがキャンディ・バーを盗んだと思ってるの？　あの食事のあとで、あなたたちがトイレに行っている間に、ちゃんと自動販売機で買ったのよ」
「どうやって？　ぼくたちは無一文なんだぜ。少くとも、この世界ではね」
「たしかに、この世界のお金はないわ。でも二回前の世界の十セント玉が二つ、あたしの物入れに入っていたのよ。厳密に言えば、正式に通用するコインではないわ。でも機械がちゃんと受けつけてくれたんですもの、それでいいんじゃない？　あなたたち二人が戻ってくる前に内緒でやったの……だって十セント玉は二つしかないでしょ。ファセ

りさんにご馳走する分まで買えなかったんですもの」と言ってから彼女は、ふと心配そうに付け加えた。「あの十セント玉を使うのは法律違反だったかしら？」
「あいにく、ぼくはそのような専門的な問題には興味がないんだ……その犯罪の成果の分け前にあずかれる限りはね。それに、そうなりゃ、ぼくも同罪だよ。さてと……食べるのを先にしようか、泳ぐのを先にしようか、どっちがいい？」
わたしたちは、食べるのを先にした。ピクニック気分ですばらしいご馳走をかじり、それを冷たい小川の水で呑み下した。そのあとで、思う存分に水を跳ばし、笑いころげて水浴びを楽しんだ——まさに、わたしの生涯で最高に幸せな時として心に残った。マルガレーテは物入れの中から石鹸を取り出し、わたしはタオルを——わたしのシャツを——提供した。まず、わたしがマルガレーテを拭いてやり、それからマルガレーテがわたしを拭き、その後は乾いた温かい空気で仕上げをした。
その直後のできごとは、当然の帰結であった。戸外で、しかも真っ昼間に、愛の営みをするなんて——わたしには初めての体験であった。わたしは本来、心理的にもそのようなことはできぬたちであり、この上なく禁欲的に育てられ、淫らなことには目をそむける人間なのである。
まったく驚いたことに、そして嬉しいことに、周囲を気にしながらも、このときのわたしは平然としてその行為に没頭できた……おそらく、マルガレーテの沸きたつ情熱に感染したせいだったのだろう。
裸のまま草の上で眠るのも、生まれて初めての体験だった。こうして、わたしたちは一時間も眠っただろうか。
やがて、わたしたちは一緒に目を覚ました。マルガレーテはどうしても、わたしのひげを剃ってやるといってきかない。鏡がないので、わたしにはうまく剃れないが、マルガレーテならできるし、いつも手ぎわよくやってくれるのだ。二人は膝まで水に漬り、わたしは手で石鹸の泡を立てて顔に塗りつけた。マルガがわたしの顔を剃り、わたしは泡を補給した。
「さあ、終わったわ」と、彼女は言い、作業完了のキスをしてくれた。
「あとはご自分でやってちょうだい。石鹸をおとして、耳もよく洗うのよ。あたし、タオルをとってくる——あなたのシャツをね」
わたしがさらに低くかがみこみ、顔に水をかけている間に、彼女は土手を登っていった。
「アレック……」
「よく聞こえないよ——川の音で」

「おねがい、あなた！」
わたしは身を起こし、目から水を拭い、あたりを見廻した。
わたしたちの持物のすべてが消え失せていた。剃刀のほかは何もかも……。

17

しかるに我東に往くも彼いまさず
西に往くも亦見たてまつらず
北に工作きたまえども遇まつらず
南に隠れ居たまえば望むべからず
ヨブ記第二三章八節〜九節

「あなた、あの石鹸をどうしちゃったの？」
わたしは、一つ深呼吸した。
「妙な言いかたをするね。このぼくがあの石鹸をどうしたというのかね？」
「どんな訊きかたをしてほしいの？」
「ううむ……ま、そう訊かれても答えようがないよ。そんなことはどうでもいいだろう。またしても奇跡が起こったというのに……きみは石鹸の方が気になるのか？」
「アレック。奇跡も、一度や二度ならともかく、こうも度

重なるともう奇跡とはいえないわ……ただの〝厄介ごと〟よ。もううんざり……もうたくさんよ。今のあたし、本当は大声で悲鳴をあげるか、泣きだしたい気分なの。だから、あなたに石鹸のことを訊いたのよ」

この、頭から冷水を浴びせるようなマルガレーテの言葉をきいて、わたしは危うくヒステリーを起こしかけた。マルガレーテが？　氷山も地震も平然と受けとめ、どんな目にあっても泣きごと一つ言わなかったマルガレーテが……泣きわめきたいというのか？

「ごめんよ、マルガ、ぼくが悪かった。きみがぼくのひげを剃っていたとき、確かにぼくはずうっとあの石鹸を手に持っていた。でも顔を洗うときには、持っていなかった。きっと、土手に置いたんだと思う。どうしても思い出せないんだ。まずかったかな？」

「いいえ、いいのよ。でも、まだ一回しか使っていないあのキャメイは、もし見つかれば、わたしたちの全財産の半分ということになるわ。もう半分はこの剃刀。そう、確かにあなたは石鹸を土手に置いたんでしょうけど……でも今はどこにも見当らないわ」

「じゃ、失くなったんだ。でもね、マルガ、石鹸をさがすよりも先に解決しなくちゃならない問題があるんだぜ。食べるものと着るものと寝る場所だ」と言いながら、わたしは土手をよじ登った。「それに靴もだ。ぼくたちには靴もないんだよ。さあ、どうしよう。もうお手上げだな。ここに〝歎きの壁〟があったら、ぼくは泣くぜ」

「落ち着くのよ、あなた。落ち着いてちょうだい」

「ちょっぴり泣かせてもらってもいいかな？」

マルガレーテはわたしに身を寄せ、わたしの首に抱きついて、くちづけした。

「どうぞ、泣きたいだけ泣いてちょうだい、わたしの分もね。それがすんだあとで、これからどうするかを決めましょ」

マルガレーテに抱きつかれてしまうと、わたしも泣きごとを言っていられない。

「何かいい考えがあるかい？　ぼくには、またハイウェイに戻り、親指を上げてヒッチハイクすることしか考えつかないんだけど……でも、この格好じゃねえ。いちじくの葉っぱもないんだから。どこかに、いちじくの木はなかったかな？」

「テキサスに、いちじくの木なんてあるの？」

「テキサスにはなんでもあるさ。さて、どうする？」

「ハイウェイに戻って、また歩きはじめましょ」

「裸足でかい？　ここで立ったまま、親指を振ってちゃだめかな？　裸足じゃ、いくらも歩けないぜ。ぼくの足の裏

は柔らかいんだから」

「じきに硬くなるわよ、アレック。あたしたち、前進しつづけなきゃだめ。勇気を出すのよ。もし、ここで諦めたら、あたしたち死んでしまうわ。あたしには、それがわかるの」

十分後、わたしたちはハイウェイをゆっくりと東へ向かって歩いていた。しかし、このハイウェイはさっきのハイウェイとは違う。二車線だったのが、四車線になっており、しかも舗装された広い路肩もついている。さきほどの三本の有刺鉄線だった走行車線を示す柵は、今では鋼鉄の鎖に変わり、その高さはわたしの背丈ほどもある。例の小川がなかったら、ハイウェイに戻るのにさぞ苦労したことだろう。

わたしたちは息を止めて小川に潜り、やっとの思いで柵の下をくぐり抜けたのである。おかげでまたびしょ濡れになった（今度はタオル代わりのシャツなしにだ）が、暑い大気がまたたく間に濡れた身体を乾かしてくれた。

さっきのハイウェイに比べると、道は貨物車やら乗用車やらの交通量がはるかに多い。それに走る車の速いことといったら！　時速何マイルかは分からないが、これまでにわたしが見た一番速い地上車の倍ぐらいの、ひょっとしたら大洋横断用の空中船（ディリジブル）ぐらいの速さかもしれない。

どうやら貨物車らしいのだが、トラックというよりは鉄道の貨車のような感じの車もある。しかも鉄道の貨車よりも長い。でもよく見ると、少くとも三両以上の車両を連結しているらしいことがわかった。これは、車輪の数を確かめてみてわかったことだ。一両につき車輪が十六もあり、一番前の機関車ふうの車にも車輪が六つもついている。合計五十四の車輪で走っているのだ。こんなことってあるのか？

これらの巨獣（ビヒモス）はまったくエンジン音は出さず、ただ、びゅんびゅんと風を切り、路面をこするタイヤのシューシューという音を残して走ってゆく。こんなものの存在はわたしに力学を教えてくれた教授にしか想像できないだろう。

すぐ近くの車線に小さめの車が走っていた。車内は見えないが、乗用車らしい。窓とおぼしきところには、鏡か、ぴかぴか光る鋼板のようなものがついているのだ。どの車も、すらりと細長く、低い車体で、飛行船（エアシップ）のようになめらかな形をしている。

それに、これは一本のハイウェイではなく、二本のハイウェイだった。こちら側の舗装道路上の車は東へ向かい、百ヤードほど離れたもう一本の道路上の車は西へ向かって流れている。そのさらに向こうに、わたしが生まれて初めて見るような広い追い越し車線の北側の柵が、車の流れの

間からちらりと見えた。
わたしたちは、路肩の端を、とぼとぼと歩いた。これでは、誰にも拾ってもらえそうもない。そう思うと気がめいってくる。たとえ車内の人間が、わたしたちを目にとめたとしても（それさえあやしいが）、こんなスピードで走っている車をどうして止められるのだ？ それでもわたしは車が来るたびに、ヒッチハイクの合図を出しつづけた。
不安が次第につのってくる。だが、わたしはそれを口には出さなかった。しばらく、みじめな行進を続けているうちに、たまたま、わたしたちを追い越した一台の車が、走行車線から路肩に入りこみ、はるか前方で停車し、つづいて凄いスピードでバックしてきた。わたしには、前進するにもこんな高速ではできない。わたしたちは、慌てて、路肩の外へ避難した。
その車は、わたしたちの横に来て止まった。一ヤード四方ほどの鏡が、暴風避難所のドアのように上へもち上がり、わたしは自然に車内を覗きこむかたちになった。運転していた男が、中からわたしたちを見返し、にやっと笑った。
「こりゃ、おどろいた！」
わたしも、なんとか、にやりと笑い返した。
「ぼくもおどろいているんですよ。しかし、ごらんのとおりです。乗せてもらえますか？」
「いいだろう」
かれはマルガレーテを見上げ、そして見下ろした。
「こりゃあ凄い美人だ！ いったい、どうしたんだい？」
「あたしたち、道に迷ったんです」と、マルガレーテ。
「そうらしいな。しかしどうして着るものまでなくしちまったのかね？ 誘拐されたのか？ それとも……何だろう？ まあ、いい。詮索は後廻しにしよう。おれはジェリー・ファーンズワースだ」
「ぼくたちは、アレック・グレアムとマルガレーテ・グレアムです」
「よろしく。ところで、あんたたち、まさか武器は持っていないだろうな――ミズ・グレアム、あんたの手に持っているものは何かね？」
「剃刀です」と言って、彼女はそれを突き出した。
それを手にとった男は、しげしげと検めてから、返してよこした。
「確かに剃刀だ。おれがまだ子供で、ひげなんか剃ることもなかった時代に見たことがある。ま、とにかく、それでこのおれをハイジャックすることはできまい。さ、乗ってくれ。アレック、あんたは後ろの席だ。妹さんはおれの隣りの助手席」
今度は反対側のドアがパッとはね上がった。

「ありがとう」と、わたし。〝乞食と金持ちの立場の差〟をつくづく思い知らされた。「マルガはぼくの妹じゃありません。女房です」
「いやあ、実に運のいい男だね、あんたは！　大事な奥さんを前に乗せちゃ悪かったかな？」
「いいえ、かまいませんよ」
「今のあんたの返事を嘘発見器にかけると、ぴーんと針がはね上がることだろうな。さあ奥さん、あんたは後ろの旦那さんの隣りに座ったほうがいい」
「あたしを前の席に誘ってくださったのはあなたよ。それに主人も、それでいいと言ってるんです」と、マルガレーテは前の座席に滑りこんだ。わたしは口をぱくぱくさせたが、何も言えない。
だが、こうして後部座席に落ちついてみると、車内は意外に広く——座席もゆったりとして座り心地がよい。二つのドアが下りてきて閉まり、〝鏡〟の部分から車外が見える。
「これから、この車を本線に乗り入れるが」と、わたしたちの恩人は言った。「安全は保証するよ。こいつは時どきインドのブラーマ牛みたいに馬六頭分、いやそれ以上の馬力でとび出すことがあるんだがね。いや、ちょっと待てよ……あんたらはいったいどこへ行くのかね？」
またしてもマルガレーテを見ている。
「あたしたち、カンザスへ行くつもりなんです、ファーンズワースさん」
「ジェリーって呼んでくれ。で、あんたたち、真っ裸のまま、カンザスへ行くつもりなのかね？」
「あたしたち、着るものがないんです。なくなっちゃったんです」
そこで、わたしが口を挟んだ。「ファーンズワースさん……いや、ジェリー……実は、本当に困りはてているんです。持物を全部なくしてしまったもので。そう、確かにカンザスへ行くつもりなんですが、しかしその前に、どこかで着るものを手に入れないと——このへんに赤十字はないでしょうか？　それに、なにか仕事を見つけて、少し金を作らなければなりません。カンザスへ行くのは、そのあとでいいんです」
「なるほど。事情は大体わかった。ところで、どういうルートでカンザスへ行くつもりかね？」
「この道をまっすぐオクラホマ・シティまで行き、そこから北へ向かうつもりでいます。幹線のハイウェイに添ってゆかないと……ぼくたちヒッチハイクをしているもんですから」
「アレック、あんたは頼りない男だな。いいか、あの柵だ

がね、歩行者があの柵の中へ入ると罰金なんだぜ」
「知りませんでした」
「知らぬが仏もいいところだ。むしろ、裏道をたどった方がいいんじゃないかね？　あっちならヒッチハイクも許されている――いや、少くとも黙認されているよ。オークシティまででよければ、連れてってあげよう。あ、ちょっとごめん」
　かれは、目の前にある制御装置（コントロール）を操作した。ハンドルには手を触れていない――そもそもハンドルがないのである。その代わりに、握り（ハンドグリップ）が二つあった。
　かすかに震動をはじめた車体は、いきなり斜め前方へジャンプした。まるで身体が柔らかな詰めものの中に埋った感じで、皮膚が静電気に触れたようにピリピリする。車体は大波にもまれるボートのように揺れたが、わたしは〝柔らかい詰めもの〟のおかげで転げまわらずにすんだ。やがて車体の動揺はおさまったが、かすかな震動は続いている。外の景色が矢のように流れ去ってゆく。
「さあ、話を聞こうか」と、ファーンズワース。
「マルガレーテ、どうする？」
「もちろん、あなた、何もかもお話ししなければ」
「ジェリー……実はぼくたち、別の世界から来たんです」
「よせやい」と、ジェリーが呻くように言った。「また、空飛ぶ円盤の話かい！　今週はもう、これで四回目だぞ。あんたの話もそのたぐいかね？」
「いや、とんでもない。ぼくは空飛ぶ円盤なんか一つも見たことありませんよ。ぼくたちはこの地球上から来たんです……ただし、異次元の地球上からです。それで、この高速66号線をヒッチハイクしていたんです――カンザスへ行こうとして……」
「ちょっと待て。いま〝66号線〟と言ったかね」
「はい、確かに」
「昔はそう呼んでいたんだ――改修工事をする前まではね。でも今は国道40号線と呼ばれている。そう呼ばれだしてからもう四十年、いや五十年になるかな。おい、おい――あんたたちは、まさにタイム・トラベラーじゃないか！　え、そうだろ？」
「今は西暦で何年なんですか？」
「一九九四年だ」
「じゃ、ぼくたちの年と同じだ。今日は五月十八日の水曜日。その午前中でした――あの次元転換が起こったのは……」
「今だって午前中だよ。でも――ま、話は順序だててやろうや。いつのことか知らんが、とにかく発端から話を始めて、どうして柵の中へ真っ裸で入りこんだのかを聞かせて

くれ」
そこで、わたしは、ありのままを話した。
一部始終を聞きおわって、ジェリーは言った。「その火床のことだが……火傷はしなかったのかい？」
「小さい火ぶくれが一つだけできました」
「小さい火ぶくれが一つだけだって？　どうやら、きみは地獄に落ちても大丈夫らしいな」
「いいですか、ジェリー、その連中はまともに真っ赤な石炭の上を歩くんですよ」
「知ってるよ。おれも見たことがあるんだ、ニューギニアで。おれはとても自分でやってみる気にはならなかったがね。その氷山のことだが——これも、どうも気になるな。いったいどうして氷山が船の横っ腹に飛びこんできたりするのかね？　氷山てやつは普通、ただ、ぷかぷかと海の上に浮かんでいるだけだろ。確かに、たまには船が氷山に衝突することはあるかもしれん。でも、その場合は舳先に穴が開くはずじゃないか、そうだろ？」
「マルガレーテ、どう思う？」
「あたしにも、よくわからないわ、アレック。確かにジェリーの言うとおりだと思うけど……でも、あれは現に起こったことだし」
「ジェリー、ぼくにもわからないんです。ぼくたちは前部の特等室にいたから、きっと船首全体が潰れてしまったのかもしれない。しかしマルガにも分からないんだったら、ぼくに分かるはずはありません。ぼくは頭を打って気絶してたんですからね。マルガが、ぼくを支えて海上に浮かんでたんです——そう話したでしょうが」
ファーンズワースは何やら考えこむ表情でわたしを見た。わたしが話をしている間に、かれはいつの間にか、わたしとマルガの双方に向き合うよう、ぐるりと座席の向きを変えている。マルガにも座席のロックをはずし、座席を回転させる方法を教えていた。それで三人は膝をくっつけるようにして輪を作る形になった——つまり、ジェリーは車の進行方向に背を向けているのだ。
「アレック、そのハーゲンシャイマーという男はどうなったのかね」
「確かにぼくの説明は曖昧だったかもしれません——実は、ぼく自身にもよく分からないんです。つまり、行方不明なのはグレアム——でぼくがハーゲンシャイマーなんです。すでに話したとおり、あの火床を渡りおえ、異次元で目を覚ましたとき、ぼくはいつの間にかグレアムになっていたんです。みんながぼくをグレアムと呼び、本心からグレアムだと思いこんでいるらしいんです——でも本当はグレア

ムが行方不明になってしまっているんです。いい加減なやつだと思われるかもしれませんが……でも、ぼくとしては、どうしようもなかった。なにしろ、いきなり故郷から何千マイルも離れたところで、無一文で、切符も持たずに放り出されちまったんですから。しかも、ハーゲンシャイマーなんて人間を知っている者は一人もいないし……」と、わたしは肩をすくめ、絶望的に両手を拡げてみせた。
「確かに、ぼくは罪を犯しました。かれの服を着、かれのテーブルで食事をし、かれの名を騙ったのです」
「まだ、どうも納得がいかんな。そりゃ、あんたはグレアムそっくりだったかもしれん、他人にはほとんど見わけがつかないほど……しかし、奥さんまでだませやしないはずだ。どうかな、マルギー？」
マルガレーテは、悲しみと愛情のこもった目でわたしの目をのぞきこみ、それから、落ち着いて断言した。
「ジェリー、主人は頭が混乱しているんです……妙な記憶喪失にかかってしまって。この人は間違いなくアレック・グレアムです。アレクサンダー・ハーゲンシャイマーなんて人はいません。はじめからいなかったんです」
わたしは口もきけなかった。確かに、ここ数週間、マルガレーテとわたしはこの問題を話し合ってはいない。確かに、わたしがアレック・グレアムではないという事実を、マルガレーテは絶対に認めていない。またしても今、マルガレーテと議論しても勝てないことを（これまでに何回もあったことだが）思い知らされたのだ。わたしが彼女と議論して勝ったと思っても、いずれ、彼女がただ単に黙りこんだだけだったという事実を悟らされるはめになるのだ。
ファーンズワースはわたしに向かって語りかけた。「ひょっとしたら、そのときに頭を打ったせいじゃないのか、アレック？」
「いや、あれは何でもなかったんです——数分間、意識を失っただけで、それ以上のものではありません。それに記憶喪失もありませんし。いずれにせよ、それは火渡りの二週間後の出来事でした。ジェリイ、ぼくの女房は確かに素晴らしい女性です……でも、この点だけは譲れません。彼女がこのぼくをアレック・グレアムだと信じたがるのは、ぼくに会う前からアレック・グレアムが好きだったからです。信じる必要があるから、そう信じているんですよ。でも、もちろん、ぼくは自分が誰であるかを知っています……ハーゲンシャイマーです。記憶喪失が時にはいろいろおかしなことを引き起こすことは、ぼくも認めます……しかし、ぼくがでたらめを言っているはずがないという証拠が一つあるんです——ぼくがあくまでも、ハーゲンシャイマーであって、断じてアレック・グレアムではないと強力に

主張する証拠が」

わたしは、ぴしゃりと腹をたたいた。以前はかなり突き出ていた腹だ。

「これがその証拠です。さっき、ぼくがグレアムの服を借用したと言いましたね。でも、かれの服はぼくにぴったりじゃなかった。火渡りをしたとき、ぼくは肥りぎみで、体重がありすぎ、ここにたっぷり贅肉がついていたんです」と、わたしはもう一度腹をたたいた。「グレアムの服は胴廻りがきつすぎました。息を止めて腹を引っ込めないと、ズボンがはけませんでした。火床の上を渡るほんの一瞬の間に、ぼくの体型が変わるものではないし、現実もそのとおりの過程を踏みました。つまり、周遊船内で二週間もご馳走を食べつづけているうちに、ぼくの腹が出てきたってわけです……この事実こそ、ぼくがアレック・グレアムではないという証明ではありませんか」

マルガレーテは沈黙を守っているばかりか、まったく無表情だ。しかしファーンズワースは追求の手をゆるめない。

「あんたはどう思うのかね、マルギー？」

「アレック、あなたは火渡りの前にも、同じ問題をかかえていたはずよ。理由もまったく同じ――栄養の取りすぎで」と、彼女はやさしく笑いかけた。「さからって、ごめんなさいね、あなた……でも、あなたが間違いなくあなただとわかって、あたし、とても嬉しいの」

ジェリーが言った。「男はみんななんとか、女にもてようと一度ぐらいはそんなふうに火渡りをしたがるもんだよ、アレック。カンザスに着いたら、一度、精神科医に会った方がいいな。その記憶喪失の謎を解明してもらわなくちゃいかん。亭主を見間違う女なんていやしないぜ。一緒に暮らし、一緒に眠り、身のまわりの世話をしたり、冗談をきいてやったりしていれば、替え玉がどんなに亭主に似ていようと、いずれ化けの皮がはがれる。たとえ、亭主とは一卵性双生児の兄弟が相手であってもね。人間には、他人には分からなくても女房にはちゃんと分かる細かいくせがいっぱいあるものなんだ」

「きみはどう思う、マルガ？」と、わたしは訊ねた。

すると、マルガレーテは答えた。

「ジェリー、主人の言い分はこうなんです。――このあたしにはその資格がないはずだ。事実、あのころのあたしは妻としてアレックを、知ってたわけじゃないんです。あの人はあたしの夫ではなく恋人だったんですもの……それも、ほんの数日間だけの」と言って、マルガレーテは微笑した。

「でも、どっちにしても同じことですわ……あたしには、この人がこの人だってことが、ちゃんと分かってるんですもの」

ファーンズワースは顔をしかめた。「また、話がこんがらがってきたぞ。おれたちは、そいつが一人の男なのか、それとも、二人の男なのかってことを話し合っているんだぜ。なあアレック、そのアレクサンダー・ハーゲンシャイマーって人間のことを、もう少しくわしく話して聞かせてくれないか」

「ぼくはプロテスタントの牧師なんです、ジェリー。一般には〝黙示兄弟教会派〟と呼ばれている〈唯真黙示キリスト兄弟教会〉で按手を受けました。生まれたのはウィチタ郊外の祖父の農場で、五月二十二日――」

「おい、きみの誕生日は今週だぞ！」と、ジェリーが口をはさんだ。マルガもびっくりしている。

「そうでしたね。ここのところあまりにも忙しすぎたので、すっかり忘れていました。――生まれた年は一九六〇年です。父母も、祖父母ももう亡くなっています……農場は今でも長兄があとを継いでいて――」

「それでカンザスへ帰ろうとしてるのかね？　兄さんに会いに？」

「いや。あの農場は、別の世界にあるんです――ぼくの生まれた世界です」

「それじゃ、なぜ、カンザスへ行くのかね？」

すぐには答えが出てこなかった。

「論理的な理由はないんです。おそらく、帰巣本能でしょう。あるいは馬が燃えさかる厩に駆け戻るようなものかもしれません。ぼくにも分からないんですよ、ジェリー。しかし、とにかく故郷へ帰って、自分のルーツを確かめなければならんのです」

「その気持ちは、よく分かるよ。それからどうした？」

わたしは学校のことを話した。エンジニアになろうとしたが失敗し――神学校に志望を変えた事実を包み隠さずに、だ。卒業の時に聖職を選ぶ決意をし、〈良識教会連合〉に入ったこと。だがアビゲイルのことには触れなかった。教区牧師としてうまくいかなかったことも話さなかった。あれはやはり（わたしの個人的見解としては）アビゲイルが教区の人たちを毛嫌いし、先方も彼女を快く思わなかったからだ。短い身の上ばなしの中で、細かいことをいちいち説明してはいられない――というのは口実で、本当はアビゲイルの話が出ると、マルガレーテの法律上の身分がおかしくなってしまうからだ。それだけは、わたしにはできない。

「こんなところです。もし、これがぼくの生まれた世界なら、カンザス州のカンザス市にある〈良識教会連合〉の米国本部に電話でぼくのことを問い合わせてもらえるんですが。昨年はわれわれの仕事が非常にうまくいき、おかげで

ぼくは休暇をもらいました。カンザス市空港から、北アメリカ航空の空中船〈ツェッペリン伯〉号に乗船し、サンフランシスコとヒロを経てタヒチへ飛び、そこで〈機船コンゲ・クヌート〉の乗客となったというのが、話の発端です。そのあとのことは、すでにお話ししました」
「とても作り話とは思えん。なかなか興味深い話だ――あんたは生まれ変わったというわけかね？」
「まさに、そのとおりです！　今のぼくはあまり優雅な状態ではありませんがね……でも、何とかしようと一所懸命に努力しているんです。ぼくたちはもう〈最後の審判の日〉を迎えているんですよ、ジェリー、もう一刻の猶予もないんです。あなたはいかがです？」
「その話は別の機会にしよう。熱力学の第二法則を言えるかね？」
わたしは、思わず顔をしかめた。「〃エントロピーは常に増加する〃――こいつのおかげで、ぼくはしくじったんです」
「それじゃ、今度はアレック・グレアムの話を聞かせてくれ」
「あまりよく知らないんですよ。パスポートによれば、生まれはテキサスで、住所はダラスの法律事務所になっています。それ以外は、マルガにお訊きになったほうがいいでしょう。彼女はかれに会っているが、ぼくはかれに会ったことがない」（あの厄介な百万ドルには触れなかった。説明のしようがないので省いたのだ……それにマルガも、この件についてはわたしの口から聞いただけで、彼女自身はあの金を見てはいないのだから）
「マルギー、アレック・グレアムのことで、ほかに何か知っていることはあるかね？」
彼女は、ゆっくりと答えた。
「主人がお話ししたこと以外、何もつけ足すことはないと思うわ」
「そいつはがっかりだな。あんたのだんなはジキル博士のことを、くわしく話してくれたんだぜ。それなのにあんたはハイド氏のことをまったく話せないというのかね？　郵便の宛先がダラスだということ以外、その男についてはまったく何も分からない」
「ファーンズワースさん、あなたには船の客室係の経験がないでしょう――」
「ああ、ないよ。だが、若い頃、貨客船の船室係を二航海ほど勤めたことはあるぜ」
「それなら分かっていただけるでしょ。確かに客室係は、お客様のことをたくさん知っています。一日に何回お風呂に入るか、何回着替えをするか、どんな匂いがするか。体

臭って一人ひとり違うんですよね――いい匂いもあるし、いやな臭いもある。それから、どんな本を読むかとか――あるいは、本は読まないかとか。そして、もっと肝心なことは、お客様が育ちのいい人なのか、正直なのか、気前がいいか、思慮深いか、優しいか、優しくないか……。そのかたのお人柄を判断するのに必要なことは、全部分かってるんです。でも、そのかたのご友人ならよくご存じの、そのかたの職業や、出身地や、学校のことなどとなると、まったく分からないものなんです。

火渡りの前日までの四週間、あたし、アレック・グレアムの客室係(スチュワーデス)を勤めてましたけど、後半の二週間はかれの恋人として過ごし、その恋にうっとりとしていました。あの火渡りの後、この人は記憶を失ってしまい、あたしとのことを思い出すのに何日もかかりました――でも、ようやく元通りになり、あたしはまた幸せになったんです。四カ月前にあたしはかれの妻になり――この四カ月間は、苦しいことばっかりだったけど、これまでの生涯で最高の気分を味わいました。その幸せは今でも続いてますし、これからも変わらないと思います。あたしが夫のアレック・グレアムについて知っていることは、これだけです」

そう言いおわってマルガレーテはわたしに微笑みかけた。その目に涙が溢れている。ふと気づくと、わたし自身の目も同じだった。

ジェリイは溜息をつき、首を振った。

「これじゃソロモンでも呼んで、ご裁定をあおがなきゃならんな。おれでは、どうにも判定がつかん。どっちの話も信じたい――でも、どっちかが間違っていることも事実だ。まあ、いいさ。ところで、女房とおれは〝イスラム教のもてなし〟を実行している――この前の戦争中に覚えたものでね。どうだ……一晩か二晩、うちでゆっくりしていかないか？　そうした方がいいと思うよ」

マルガレーテの目くばせを受けたわたしは、答えた。

「ええ、喜んで！」

「ようし、それじゃ、ボスがうちにいるかどうか確かめるとしよう」

くるりと座席を前向きにしたジェリーは、何かに手を触れた。やがて、ライトがつき、何かが一度だけビーッと音を立てた。ジェリーはぱっと顔を輝かせて話しかけた。

「やあ、きみの大事なご亭主様だ」

「まあ、ロニー、久しぶりじゃないの」

「ちがう、ちがう。やりおなし」

「アルバートね？　それともトニー？　ジョージ？　アンディ？　ジム？」

「もう少しだ……今度は間違えるなよ、実はお客さんが一

緒なんだ」
「はい、ジェリー。それで？」
「晩飯を食べてもらう。それから今夜は泊ってもらう。ひょっとしたらもう幾日か泊ってもらうかもしれん」
「はい、あなた。お客様は何人？　ご性別は？　こちらへは、いつごろ着くの？」
「ヒューバートに訊いてみよう」とジェリーは、再び何かに手を触れた。
「ヒューバートは二十七分後だと言っている。お客様は二人だ。おれの隣りに座っているお方はお歳のころ二十三ぐらい――当ってるかどうかは分からんが、はずれてもたいした差はないだろう。金髪で、ウェーブのかかった長い髪、目の色は濃いブルー、身長約五フィート七インチ。体重は百二十ポンドぐらい、ほかの寸法は訊いてみないと分からんが、ま、うちの娘と同じぐらいだろう。性別は女性。これは確実だ。ストリッパーみたいに素っ裸なんだから」
「はい、あなた。その女の目をくり抜いてあげるわ。もちろんご馳走したあとでね」
「いいとも。でも、ご心配は無用だよ。その女性の旦那さんがすぐそばにつきっきりで見張っているんだ。このご仁も素っ裸だってことはもう言ったっけかな？」
「いいえ、まだよ。なんだか、おもしろそうね」
「この人のサイズも聞きたいかね？　〝気をつけ〟してるときと、〝休め〟をしてるときのと、どっちがいい？」
「また、あなた。歳をとった男って本当にいやらしいのね――でも、このあたしは、それでも幸せなの。でも、もうこれ以上お客様を困らせるのはやめなさいよ」
「おれは、ちょっぴり頭がおかしいんだよ、奥方様。この人たちが素っ裸でいるのは、着るものを失くしちまったからなんだ。ご当人たちは、そのことをものすごく気にしておいでのようだ。だからあんたは、この人たちの着るものを持って門まで出迎えておくれ。ご婦人の方のサイズはすでに話したな。いや、ちょっと待てよ――ねえマルガ――ちょっと足を見せておくれ」マルガは、無言で即座に片足をぱっとさし上げ、ジェリーはその足をまさぐった。
「ご婦人にはあんたのサンダルでいいと思うよ。だんなには木靴でいい。おれのな」
「その人のほかのサイズは？　冗談は抜きにして」
「身長と肩幅はおれと同じくらいだ。ただし体重はおれの方が少くとも二十ポンドは多いね。だから、おれの着るものの中から何かきつめのものを見つくろっておくれ。もしシビルの仲間の若い野蛮人たちが家の中にたむろしていたら、今日だけは厳しく言って、門の外へ追い出しといてくれないか。今日のお客は上品な人たちなんだ。服を着ても

らってから、皆に引き合わせよう」
「了解、仰せのようにいたします、軍曹どの。でも、このあたしには、そろそろ、そのお二人を紹介してくださってもいいころじゃないの？」
「これは失礼。こちらがマルガレーテ・グレアム……アレック・グレアムの奥方様だ」
「こんにちは、マルガレーテ。わが家へようこそ」
「ありがとうございます、奥様」
「〝キャサリン〟と呼んでちょうだい。〝ケイト〟でもいいわ」
「キャサリン……こんなに優しくしていただいて……あたしたち、今までとてもひどい目にあいつづけてきたんです」
そう言うなり、マルガレーテは声を上げて泣きだした。だが、すぐに泣きやんで言った。「こちらが主人のアレック・グレアムです」
「はじめまして。それに、ありがとうございます。奥さん」
「アレック、奥さんをはやくここへ連れていらっしゃい。歓迎するわ。あなたもよ」
ジェリーが割り込んだ。「奥方様や、ヒューバートは二十二分かかると言ってるよ」
「じゃ、またあとでね。切るわよ、急がなくちゃ」
「終わり」と、ジェリーは、ふたたびこちらへ向きを変えた。「マルギー……ケイトがきっといい服をみつけてくれるよ。もっとも、あんたの場合は何でもいいってわけにはいかんだろうが……。おや、寒いかい？ 話に夢中になりすぎて、ついうっかりしちまった。この車は今のおれに丁度いい涼しさに調節してあるんだ。でもヒューバートがすぐに調節しなおしてくれるよ」
「ジェリー、あたしはヴァイキングの子孫よ。風邪なんか引いたことないわ。どんなところへ行っても、暑いとは思っても、寒いと思ったことはないわ」
「アレック、あんたはどうかね」
「ぼくも寒くはありません」と、わたしはちょっぴり虚勢をはった。
「こうした方がいいかな――」と、ジェリーが言いかけた

――

その瞬間、頭上にぱっと天が開いた。この上なく明るい光が射しこんでくる。白昼の明るさをしのぐような、まぶしさだ。そして唐突な悲しみがわたしを襲ってきた――ああ、自分はついに、最愛の妻を神の御恵みのもとに導きそこなってしまった……。

18

サタン　エホバに応えて言けるは
ヨブあにもとむることなくして神を畏れんや
　　　　　　ヨブ記第一章九節
なんじ神の深事を窮むるを得んや
全能者を全く窮むることを得んや
　　　　　　ヨブ記第一一章七節

わたしは、〈大いなる声〉を待ちうけた。

さまざまな感情が入り乱れている。自分は携挙（天国へ運び去られること）を望んでいるのだろうか？　おまえには、主イエスの慈愛深き御胸の中へ今すぐにでも携挙される心の用意ができているのか？　はい、わが愛する主よ。できております！　マルガレーテが一緒でなくてもよいのか？　いえ、それは困ります！　するとおまえは地獄に落ちる方がいいというのだな？　はい……いいえ、でも……。道を選ぶのはおまえ自身なのだぞ！

ジェリーは空を見上げた。「ほら、あいつが飛んでいくのが見えるぜ！」

わたしも車の天井越しに空を見上げた。まっすぐ頭上に、第二の太陽が輝いている。見つめていると、みるみるうちに小さくなり、輝きを失っていく。

ジェリーは言葉を続けた。「時間どおりだ！　昨日は手間取っちまって、発射時間帯を逃してしまい、発射のやりなおしをやらなきゃならなかった。発射台にのせてH型支柱をどかしちまってから、軌道をひとまわり分待つだけで儲けが吹っとんじまうんだ。それに昨日の延期は、それほど欠陥があったせいではなくて、航空宇宙局のお偉方がまったくくだらない再点検を命じたためだった。計算のやりなおしだとさ」

ジェリーの話は、何のことを言っているのか、さっぱり理解できない。

マルガレーテは、間髪を入れず訊きかえした。「ファーンズワースさん……いいえ、ジェリー……あれはいったい何だったんですか？」

「あれ？　あんたらは一度も打上げを見たことがないのかね？」

「打上げって何ですか？」

「ううむ……そうか。いやね、マルギー。あんたとアレックが別の世界から――いや、いくつもの世界をまわり歩いて――来たってことが、どうもまだおれの頭の中に浸みこんでないんだよ。すると、なにかい……あんたらの世界には宇宙旅行ってものがないんだね？」
「何のことか、よくわからないけど、そんなものはなかったと思うわ」
　わたしには、ジェリーの言わんとすることが分かった。それで二人の間へ割って入った。
「ジェリー、つまり、あなたが話しているのは、月旅行のことですね。そうでしょう？　ジュール・ヴェルヌみたいな」
「そうだ。きわめて、あれに近い」
「今のはエーテル船（ゴーリィ・モーゼス）だったんですか？　月へ行ったんですか？　なんてこった！」
　つい、不謹慎な言葉が口からすべり出てしまった。
「まあ、落ちつけ。あれはエーテル船じゃない、無人の貨物ロケットだ。行き先は月（ルナ）じゃなくて〈レオ〉だ――地球をまわる低層軌道さ。そしてまた戻ってくる。ガルヴェスト（テキサス州南東部の港町）の沖合に着水し、北テキサス港へ運ばれ、来週中にまた打ち上げられるんだ。でも、あれの運んでった積荷の一部は、さらにルナ・シティやティコ・アンダー（ティコは月面第三象限のクレーター）へ行くし――中には小惑星（アステロイド）まで運ばれるものもある。分かるかね？」
「ええと……あまりよく分かりません」
「つまりだ、ケネディ大統領二期目のとき――」
「誰のですって」
「ジョン・F・ケネディ……一九六一年から一九六九年まで在職した大統領だよ」
「すみません。もう一度、歴史の勉強をやりなおします。異次元の世界をあっちこっち巡り歩かされて一番困るのは、テレビとかジェット機といった新しいテクノロジーの問題ではなく――いや、宇宙船のことでもありません。そのたびに変わる歴史ですよ」
「なるほど――じゃ家に着いたら、アメリカ史とそれから宇宙旅行史の本をさがしてあげよう。わが家には、そのたぐいのものが大分あるんだ……おれは、こう見えても、宇宙ものが好きでね――そもそもの始まりは、子どものころに凝ったロケットの模型作りだ。今じゃ〈ダイアナ貨物輸送〉のほかに、〈ヤコブの梯子〉や、〈ジャックの豆の木〉なんかも持っているんだ――年甲斐もないって言われるかもしれんが……」と言いかけたジェリーは、ふと、わたしの表情に気づいたらしい。「失礼。とにかく、おれが選んだ本を読んでくれ。話はそれからにしよう」

ジェリーは再び制御装置に向きなおり、何やらキーを叩いた。それから、目をぱちくりさせ、もう一度キーを叩き、やがて言った。
「あと三分二十一秒すると例の音波が襲ってくる……と、ヒューバートが言ってる」
やがて現実にその音波が伝わってきたが、わたしはむしろがっかりした。あのすさまじい閃光にふさわしい巨大な雷鳴を期待していたのである。だが実際には、しばらくごろごろという音が低くひびいただけで、その音も次第に小さくなって消えてしまった。
数分後、車はハイウェイからおり、右へ大きな円を描いて進み、ハイウェイの下のトンネルをくぐって、別の小さめのハイウェイに入った。このハイウェイ（85号線と表示してあった）を五分ほど走ったころ、ビーッ、ビーッという音が聞こえはじめ、ライトが点滅しだした。
「わかった、わかった」と、ジェリーは言った。
「ま、そうあわてるな」
そう言ってジェリーは、ぐるりと座席をまわして前方をみつめ、両手で二つの取手を握った。
続く数分間は見ものだった。賢人ハンニバル（カルタゴの将軍）の言葉らしきものが心に浮んだ……〝この名誉なかりせば、徒歩を選びしものを〟。われらがファーンズワース氏は、どうやら、すれすれのところで衝突を避けるのが趣味らしい。この〝柔らかい詰めもの〟がなかったら、骨折とまではいかなくても打ち身だらけになっていただろう……と思う瞬間が何度も訪れたからだ。一度は例の信号が、ビーッ、ビーッ、ビーッ、ビーッと続けざまに鳴りつづけたこともあった。すると、かれは、「だまれ！　お節介はするな……おれは今、忙しいんだぞ」と、どなり返し、わたしたちもろとも次のニア・ミスに突っこんでいったものだ。
やがて、細い道へ入った。私道らしい。入口にアーチがあって〝ファーンズワース寓〟と書いてあったからだ。車は坂を登ってゆく。坂を登りきると、立ち並ぶ木々の間に背の高い門があり、われわれの車が近づくとひとりでにばくっと開いた。
そこでわたしたちは、ケティ・ファーンズワースと初めて顔を合わせたのである。

この回顧録をここまで読んでくださったあなたは、わたしがいかに深く妻を愛しているかをご理解くださっているはずだ。この事実は、光の速度や、父なる神の愛と同じような不変の大原則である。ところが驚いたことに、わたしはさらに別の人間を、つまりもう一人の女性に、恋心を感じることもあり得る事実を自覚したのだ。そうはいっても、

マルガレーテに対する愛情はすこしも変わらないし、相手の女性を正当な結婚相手から奪う気はないし、その女性を欲望の対象として求めているわけでもない。いや、少しはあったかもしれぬが、それほど強い欲求ではない。
　彼女に会ったとたんに、わたしは、五フィート二インチこそ女性に最もふさわしい身長であり、四十歳こそ最もふさわしい年齢であり、百二十ポンドこそ最もふさわしい体重であるという事実を悟ったのだ。そして声は、コントラルトが理想的だ。最愛のマルガレーテが、これらの数値のどれにもあてはまらない事実は、この際どうでもよい――このケティ・ファーンズワースは、現在あるがままの自分に満足しきっているからこそ、自らその姿を理想的な存在に仕立て上げているのだから。
　しかし、何よりもまずわたしの心を奪ったのは、この上なく優雅に暖かみ溢れる歓迎の意を表わした彼女の態度だった。
　夫から、わたしたちが丸裸であることを、そしてわたしたちがその事実に困惑しきっている事実を聞かされていた彼女は、わたしたちに着せるものを持って待っていてくれた。
　そして、彼女自身も丸裸だった。
　いや正確に言うと、そうではない――このわたしは確かに丸裸だったが、彼女は何も着ていなかったのだ。いや、この表現も正確ではない。裸体（ヌード）？　むき出し（ベア）？　脱ぎ捨て（ストリップト）た？　着忘れた（アンドレスト）？　いや、ちがう、彼女は〝生まれついた美しさ〟という名の着衣を身にまとっている――ちょうど〈堕落〉の前の母なるイヴのごとくに。その姿はこの上なく自然であり、わたしは、〝裸はいやらしいもの〟とする従来の妄想に疑問を感じた。
　例の貝の蓋のようなドアが上へ持ちあがって開き、まずわたしが外に出て、マルガレーテに手をかした。ファーンズワース夫人は手に持っていたものを投げ出して、マルガレーテを抱きよせ、くちづけした。
「マルガレーテ！　ほんとによく来てくれたわね」
　彼女を抱きしめかえしたマルガレーテは、またしても涙ぐんだ。
　それから夫人はわたしに向かって手を差し出した。
「あなたも、ほんとによく来てくださったわね、グレアムさん……アレック」
　わたしは彼女の手を握りかえしたが、その手をあえて振り動かさず、貴重な陶器を扱うかのように推し戴いて、その手の上に深々と頭を下げた。相手の手にくちづけをすべきだとは思うのだが、その作法が分からない。
　ケイトが、マルガレーテのために選んでくれたサマー・

ドレスは、マルガレーテの目の色と同じ濃いブルーだった。ギリシャ神話のアルカディアを彷彿させるようなデザインで、森の妖精にでも似合いそうなドレスである。右肩はむきだしで、左肩から下がる布が足もとまでをゆったりと覆っている。このシンプルな衣裳の両端は長い帯を兼ねたリボンになっており、その一方を下から穴に通し、両方でマルガの胴をぐるりと一巻きしてから、身体の右側に寄せてリボンを結ぶ。

いわゆるフリーサイズのドレスだな、とわたしは思った。これなら、帯の結び方一つでやせた人にも太った人にも、ゆるめにもきつめにも、着られる。

さらにケイトは、マルガのために、ドレスとマッチするブルーのサンダルを用意していた。わたし用には、裂いた皮を粗く編んだメキシコのサンダル〝ザパトス〟を持ってきてくれた。マルガのドレスと同じようなフリーサイズで、紐の締めかたでどんな足にも合うようになっている。さらに、一見、ウィンズローの例の〈中古品専門店〉で買った上下服そっくりのシャツとズボンも用意しておいてくれた。中古品で買ったものは木綿の大量生産品だったが、これは夏物ウールを使った誂えものである。わたしの足にぴったりのソックスと、綿ジャージーのパンツも渡された。

わたしとマルガの身仕度は間もなく終わったが、かたわらの地面の上には、まだ一人分の着衣が残っていた――ケイト自身のものだ。彼女は服を着たまま門のところに出、そこで着衣を脱ぎすてて、わたしたちとマルガを出迎えてくれたのだ。わたしたちと同じ〝着衣〟になって、だ。

これ以上の儀礼があるだろうか。

服を着て、全員が車に乗りこんだ。ファーンズワース氏は車道に車を向けたまま、ちょっと発車をためらった。

「ケティ……お客人たちはキリスト教徒だよ」

ファーンズワース夫人は、喜びの表情を見せた。「あら、ほんと？　それは面白いわね！」

「おれもそう思った。なあ、アレック、〝これ以上、言う（ヴァーブ）必要なし（サップ）〟だろ？　このあたりには、キリスト教徒はあまりいないんだ。おれとケティの前でなら、何でも自由に口にしていい……でも、誰か他の人間がそばにいるときは、自分の信仰のことはあまり話題にしない方がいい。わかるね？」

「いや……どうも納得できませんが」と、わたし。頭の中が渦巻き、耳の中ががんがんしている。

「つまりだな……ここでは、キリスト教徒であることが何も法律に反するってわけではない。テキサスには信仰の自由がある。でもね、キリスト教はあまり人気がないんだ。それでキリスト教の信仰は、なるべく人目を避けて行なわ

れている。ま、あんたがどうしてもお仲間たちと接触したいというんなら、カタコンブの場所は探し出せると思うがね。そうだろう、ケイト？」
「ええ、もちろん。きっと誰か知ってる人が見つかるわよ。人に頼んで探してもらうことだってできるし」
「もしアレックがその気になればの話だよ。でもね、アレック、だからといって、石をぶっつけられるような危険はないよ……ここは無学なならず者の住むような土地じゃないんだ。ま、それほどの危険はない。しかし、おれとしては、あんたが差別されていると感じたり、気持ちを傷つけられたりするのは防ぎたい」
「問題はシビルよ」と、ケティ・ファーンズワース。
「ああ、確かにそうだ！　ねえアレック、うちの娘は決して悪い子ではない。十代の娘にしては物事をわきまえているほうだ。だが、つい最近、〝古い宗教〟に改宗して、魔女修業を始めちまった――改宗したばかりだし、若いんで、大変な熱の入れようだ。シビルはお客に対して無礼なことをするような子じゃない――ケティが、ちゃんと躾けてるからね。それにおれのお仕置きのきびしいことも本人は承知している。だが、できたらあの子をあまり刺激しないでほしいんだ。わかってもらえると思うが、十代の子供ってやつは、いつ爆発するかもしれない時限爆弾なんでね」
マルガレーテがわたしに代わって答えた。「できるだけ気をつけます。ところで、その〝古い宗教〟って――オーディン崇拝のことですか？」
わたしはぞっとした……今までの話題だけでも、とっくにわたしの守備範囲を越えているというのに。
「いや、そうじゃない……と思うよ」と、ジェリーは答えた。「なんなら、シビルに直接訊いてみるといい。いやというほど話してくれるよ――ひょっとすると、あんたらを改宗させようとするかもしれんな。ものすごく熱にうかされとる」
ケティが付け加えた。「シビルがオーディンのことを口にするのを聞いたことはないわ。話すのは、〈女神たち〉のことばっかり。ドルイド教はオーディンを崇拝するのかしら？　本当のことを言うと、あたしたちは全然わからないのよ。シビルはあたしたちのことを、救いようのない時代遅れの人間だと思っているから、あたしたちとは宗教のことを議論しないわ」
「それじゃ、われわれも、この話はこれでやめにしよう」
そう言って、ジェリーは車を発進させた。
ファーンズワース邸は、長々と続く平屋で四方八方に広がり、のどかな中にも豊かな雰囲気を漂わせている。ジェリーは〝車寄せ(ポルトコウシェール)〟の奥にまで車を乗り入れ、そこで全員

が下車した。ジェリーが馬の首でも叩くように車の屋根を平手で叩くと、車はひとりでに動きだす。邸内に入りかけながら、わたしがふと振りかえると車は家屋の角を曲がって姿を消すところだった。

この邸の説明を長々とするつもりはない。確かに壮麗な、いかにもテキサスらしい贅沢な家だ。しかし、いざ説明しようとすると、どうしても話が中途半端になってしまう――それもそのはず、ジェリーの言によれば、今わたしたちが見ているもののほとんど大部分は幻像(ホログラム)なのだそうだ。何と表現すれば、一番適切だろう? 凍りついた夢? 立体写真? そう、こんな風に説明したほうがいいかもしれない――椅子はちゃんと実体を持つ固体である。テーブルの表面も同じ。だが、その他のものに手を触れる時には気をつけたほうがいい。こちらの目には鮮やかに見えていても、実体のない……ちょうど空にかかる虹のようなものかもしれないからだ。

これらの幻像(ホログラム)をどうやって出現させるのか、それはわたしにはわからない。物理学の法則が、この世界と、わたしの育った世界のカンザスとでは違うのかもしれない。

ケティの案内で、わたしたちは、ジェリーが〈家族室〉と呼ぶ部屋へ入った。その部屋へ入ったとたん、突然、ジェリーが棒立ちになって叫んだ。

「また、いまいましいヒンズーの売春宿だ!」

この家は平屋で、屋根の低い〝牧場主の家(ランチ・ハウス)〟風の建物だったはずだ。ところが今や、部屋の天井がはるかに高くなり、室内も広々としている。室内の壁も、天井も、アーチも、壁の窪みも、梁も、びっしりと浮彫りの人体で覆われていた。しかもその彫像のポーズときたら! わたしは思わず顔を赤らめた。明らかに南インドの寺院の洞窟内からコピーしたものだ――その方面では特に悪名高い代物である……ありとあらゆる性の快楽を、細部にわたって、きわめて刺激的に、けばけばしく表現したあの彫像群だ。

「あなた、ごめんなさい。若い連中が、ここでダンスしてたのよ」と言ってケティは、左手の彫像群の方に走りこんで姿を消した。

「ジェリー、何にしようかしら?」

「うむ……レミントン二号にしよう」

「かしこまりました」

一瞬の後、淫靡(いんび)な彫像群はぱっと消え失せた。天井が急に低くなり、白い漆喰壁と太い梁を持つ剛健な造りの部屋に変わっている。一方に見晴らしのよい窓があり、ユタの山々(どうしたわけかテキサスの山々ではなく)が見えた。反対側の壁には大きな石造りの暖炉があり、ぱちぱちと心地よげな火がはじけている。ミッション様式の家具が点在

し、石を敷いた床には、アメリカ・インディアンの敷物が置かれている。
「これならいい。ありがとうよ、キャサリン。あんたがたも座ってくれ――どこでも好きなところで、お楽にどうぞ」
わたしは腰を下ろした――しかし、がっしりした皮張りの一見して〈パパの椅子〉とわかる椅子は遠慮した。ケティとマルガは並んで同じ長椅子に座る。ジェリーが座ったのは……やはり〈パパの椅子〉だった。
「ケティ、きみは何を飲むかね？」
「カンパリ・ソーダがいいわ」
「お上品なこった。マルガ、あんたは？」
「あたしもカンパリ・ソーダをください」
「〝お上品〟を二人前か。アレック、あんたは？」
「ぼくも、ご婦人がたのお相伴をしますよ」
「ちょっと待て。ご婦人がたのお望みとあらば、我慢しよう。でも、大の男がカンパリ・ソーダとは何事だ――さあ、何にする？」
「ええと――スコッチのソーダ割りを」
「馬の鞭でひっぱたくぞ――馬がいればの話だがね。申しわけないが、よく聞こえなかったよ――さあ、もう一回だけチャンスをやろう」
「ええと……バーボンと水、かな？」
「セーフ。さあ、ジャック・ダニエルズ（バーボンウイスキーの銘柄）と水だ。こんな話があるのを知ってるか――一人の男がダラスの町でアイリッシュ・ウイスキーを注文した……地元の連中は物も言わずにそいつを汽車に乗せて町から追い出してしまったそうだ。あとで詫びをいれたって話だがね。その男は北部（ヤンキー）の人間で、まったく物を知らん男だったらしい」
そんな話をしながらジェリーは、傍の小さなテーブルを指先でとんとんとたたきつづけている。耳障りな音が止まったとたん、わたしの椅子の近くのテーブル上に、琥珀色の液体の入ったウイスキー・グラスと水入りのタンブラー・グラスとが忽然と現われた。見ると、他の三人ともすでに飲物を手にしている。
ジェリーがグラスを上げた。
「南部連合の財産に神のご加護を祈って……乾杯！」
わたしたちは飲み、ジェリーは言葉をつづけた。
「キャサリン、うちのお転婆娘はどこに隠れてる？」
「みんなと一緒にプールにいると思うわ」
「そうか」
またしてもジェリーは、例の耳障りな音を立てはじめた。間もなく、だしぬけに、ジェリーの前の空中に若い娘が姿を現わした。どこからともなく突き出た飛び込み板の上に

腰掛けている。わたしたちのいる室内はひんやりとしてうす暗いのに、その娘だけは明るい陽光を浴び、水を滴らせている。ジェリーに向き合っているので、こちらからは娘の背中しか見えない。
「ほい来たか。このいたずら娘」
「お帰りなさい、パパ。キスしてちょうだい、早く、早く」
「ブタの目にでもキスしな。この前、おれにお尻を叩かれたのはいつだったか、ちゃんと覚えているか？」
「あたしが九歳になった誕生日よ。ミニーおばさん家に火をつけたときでしょ。今のあたし、何かした？」
「神の巨大なる黄金の脂ぎった性器にかけて訊くがね、〈家族室〉に、あのいやらしくて淫らで猥褻なプログラムをかけっぱなしにしたのは、いったい何のつもりだ？」
「あたしにそんなお説教する資格なんてないでしょ、パパ。あたしだって、パパの本を見ちゃったんだから」
「パパの本棚に何を置こうとパパの勝手だ。さあ、おれの質問に答えろ」
「スイッチ切るのを忘れちゃったのよパパ、ごめんなさい」
「また、いつもの言い訳か。そんな言い訳が通ると思ってるのか。いいか、おまえはいつでも好きなようにあの装置を使ってもよろしい……でも、使いおわったら、ホログラムは必ず元どおりのものに戻しておかなきゃならん。戻しかたが分からない場合は、装置のコントロールをゼロにして、変なホログラムは消しとかなきゃいかんのだ」
「はい、わかってるわ、パパ。あたし、うっかり忘れちゃっただけなの」
「少しはじっとしていられないのか？　叱言はまだ終わっとらんぞ。聖なる大真鍮球にかけて訊くが、あのプログラムはいったいどこから持ってきたんだ？」
「大学にあったの。あれはタントラのヨガ・クラスの学習テープなのよ」
「〃タントラのヨガ〃だと？　腰をこねくりまわすやつだな？　そんなコースは取る必要ない。ママは知ってるのか？」
ケティが穏やかに割って入った。「あたしがすすめたのよ、あなた。シビルには素質があるわ――あなたもご存じでしょ。でも素質があるだけじゃ何にもならないわ。指導を受ける必要があるのよ」
「そうかい？　ま、ママがいいって言うんなら、ヨガ・クラスは認めよう。でも、あのテープはいかん。どうやって手に入れた？　版権に関する法律のことは、おまえもよく知ってるだろう。〃ジェファーソン・スターシップ〃のテ

ープのときの騒ぎを忘れたのか?」
「パパったら、象より物覚えがいいんだから。つまらないことは、いいかげんに忘れたらどうなの?」
「絶対に忘れんぞ。もっと忘れんようにしてやる。いいか、よくおぼえておけ——これからは、おまえの発言をすべて記録に残しておき、この先、いつでもどこでもおまえの不行跡を糾弾する証拠として使うことにする」
「弁護士を呼んでちょうだい!」
「ほう、さては不正にコピーしたな」
「どうしても、あたしがそうしたと言いたいのね! そうすればご満足なんでしょ。お生憎さまね、パパ。あたしはちゃんとカタログにある値段を全額、現金で払って、大学のライブラリーでコピーしてもらったのよ。これなら、文句はないでしょ、パパの威張りやさん」
「おまえこそ、威張りやだ。金を無駄づかいしやがって」
「そんなことないわ。あたし、あれが気にいったもの」
「パパもだ。でも、おまえは小遣いを浪費した。パパに払ってくれと頼まねばならん」
「ふん!」
「わかったな! はじめは、てっきり、おまえがパパの書斎のロッカーの鍵をあけたか、呪文を使ったのかと思ったよ。おまえの金使いが荒いだけだと分かってほっとした。いくらだった?」
「ええと……四十九ドル五十セント。学割でね」
「ずいぶん安かったんだな。パパは六十五ドル払ったぞ。よろしい。だが、もし今学期の学費の請求書にその分が入っていたら、おまえの小遣いから差し引くぞ。もう一つ言っておきたいことがある——パパはお客さんを二人お連れした。上品な淑女と紳士だ。われわれは何も知らずに客間に入ってしまった。その客間に、いったい何があったと思う? この客人たちは、部屋一面のカーマ・スートラとご対面しちまった——あえいだり、うごめいたりしてるような極彩色のやつと、だ。おまえは悪いことをしたとは思わんのか?」
「わざとやったんじゃないのよ」
「うむ……それなら許してやろう。でも、よその人を、とくに大切なお客を、びっくりさせるのはよくないことだ。これからは気をつけるんだぞ。夕食はうちで食べるかね?」
「はい、パパ。でも早く失礼させてくれない? 大急ぎで出かけなくちゃならないの。デイトなのよ、パパ」
「いつ帰ってくるんだ?」
「帰らないわ。夜通しの集会があるの。夏至祭りのリハーサル。十三人の魔女の集い」

ジェリーは溜息をついた。「やれやれ、おまえがピルを常用していてよかったよ。三人の鬼婆に感謝しなくちゃ」
「ピルなんて関係ないわよ。石頭ねえ、パパ。魔女集会では妊娠しないことになってるの——こんなことは、誰でも知ってるわ」
「おれは知らんぞ。ま、おまえが夕飯を一緒に食べてくれるだけでも、感謝しなくちゃいかんらしいな」
次の瞬間、娘は金切り声を上げ、飛び込み板からずり落ちた。幻像（ホログラム）がみるみる下方へと移動してゆく。
やがて水をはね上げて水面に浮かび上がってきたシビルは、ぴゅーっと水を吹き出した。
「パパ！　よくも、あたしを突き落としたわね！」
「おまえに文句を言う資格があるのか？」と、ジェリー。すまして答えている。そして幻像（ホログラム）は突如として消えた。
ケティが楽しげな口調で言った。
「ジェリーはね、いつまでたっても娘離れができないのよ。永久に自分の手もとに置いとくことなんて、不可能なのにね。一度あの子とベッドを共にして、欲求不満を解消したらいいのに。でも二人とも、こだわりすぎるから、そんなこと無理でしょうね」
「こら、なぐられたいのか、おまえは」
「ええ、そうよ、あなた。あの子はいやがらないと思うわ——あなたの気持ちを素直に説明すれば、あの子は喜んで応じてくれるわよ。そうすれば、あなたとあの子は生涯で最高の喜びを経験できるのよ。ねえ、マルガ、そうは思わない？」
あまりの衝撃に、呆然自失しているわたしの耳に、マルガの言葉がとどめの一撃を加えた。「あたしも、そう思うわ」

晩餐の料理は最高、会話は波瀾に満ちていた。場所は格式ばった食堂（ダイニングホール）、つまり、幻像（ホログラム）で飾りつけた、いつもの〈家族室〉だ。天井は再び高くなり、手入れの行き届いた庭を見おろす細長い窓が並び、両側に床まで届くカーテンが下がっている。
車輪をくるくると廻しながら一台のワゴンがひとりでに室内に入ってきた。これはまさか幻像（ホログラム）ではあるまい？　どうやら宴会用テーブル（とでも呼んでおこう）で、同時に貯蔵庫、冷蔵庫、コンロなど、あらゆる調理用設備の役割を果たすものらしい。これはわたしが注意深く観察した末に達した結論である。誓って、一人の使用人も姿をみせず、主婦は指一本動かさなかった。だが主人は妻の料理をほめそやし——当然のことながら——わたしたちもそれにならった。

ジェリーは大活躍だった。まず、ロースト（極上の大きなあばら肉である——腹ぺこのボーイスカウトの一団がやってきても充分まかなえるヴォリュームである）を切り、人数分の皿に盛り分ける。ご本人は自席に座ったままだ。それぞれ肉をたっぷりとのせた皿の方がひとりでにするするとテーブルを廻り動き、一人ひとりの前にやってくるのだ。玩具の汽車がレールの上を走るのに似ているが——レールはない。その装置は幻像で隠してあるのだろう。きっとそうに違いない。だからといって、わたしには何ひとつ納得できたわけではない。

（あとでわかったことだが、この世界のテキサスの上流社会では、使用人の姿をわざと客に見せびらかすのが流行りだった。だが、ジェリーとケティは、万事に控え目な生きかたが好みのようだ）

食事を共にしたのは六人だった。ジェリーとケティがテーブルの両端に向かい合って座り、ジェリーの右にマルガレーテ、左にシビル。わたしがケティの右に、そしてシビルのボーイフレンドの青年が、ケティの左に座った。したがって、この若い男がわたしの正面に、シビルがわたしの右に座る形になっている。

若い男は、ロデリック・ライマン・カルヴァーソン三世と名乗ったが、最後まで、わたしの名を覚えることができなかった。わたしはかねがね、こんなことを考えている——人間の雄は、生まれたらすぐ樽に放りこみ、その樽に小さな穴をあけ、その穴から餌だけを与えて育てるべきではないか。十八歳になった時点で、その雄を厳重に審査し、樽から出して自由にしてやるか、それとも樽に入れたまま永久に栓をしてしまうかを決定すればよい。

カルヴァーソン青年に出会い、わたしのこの信念はますます固くなった——こんな不作法な野郎は、一生樽づめにしておいた方がいい。

シビルの説明では、二人は同じ大学に通っているそうだが、シビルの両親も、わたしたち同様、こいつとは初対面のようであった。

「ロデリック、あなたも魔術師の修業をしているの？」と、ケティ。

とたんに、若者はひどい悪臭を嗅いだような表情をうかべ、シビルがあわてて母の不手際な質問に答えた。

「おかあさまったら！　ロッドはもう何年も前に〈アサマ〉を受けたのよ」

「あら、ごめんなさい。うっかりして」と、ケティはあわてた風もなく言った。

「それ、修業が終わった時にもらえる資格のこと？」

「聖なる短剣のことよ、ママ。儀式に使うの、そのほかに

も——」

「シビル！　ここには異教徒がいるんだぞ」と、カルヴァーソンはまずシビルにこわい顔を向け、それから、じろりとわたしを睨んだ。この野郎！　わたしは思わずこいつに一発くらわせたい衝動にかられた。それでも、それを必死に抑え、うわべの表情はまったく変えないよう努めた。

「ロッド、するときみは悪魔使い(ワーロック)の修得者なんだね？」と、ジェリー。

　シビルが、また口を出した。「パパ！　正式な言い方はね——」

「いい子だから、おまえは黙っておいで。返事はかれから直接聞こう。ロッド、どうなんだ？」

「それは無知の者だけが使う言葉で——」

「ちょっと待て！　このおれにだって知らないこともあるさ。だから、必要な情報を求める。ちょうど今、それをやっているようにな。だが、あんたの方は、こうしておれの家へ夕食に招(よ)ばれ、それでいて、このおれを無知な人間と呼ぶことはできんぞ。さあ、余計なお題目はぬきにして、おれの質問に答えてもらおうじゃないか？」

　カルヴァーソンは小鼻をふくらませたが、なんとか自制した。

「魔術師(ウイッチ)とは一般に、魔術に熟達した男女のことを意味します。妖術師(ウイザード)でもかまわないが、専門的には正しくない。これだと、悪霊使い(ソーサラー)も魔法使い(マジシャン)も入ってしまう。魔法使い(マジシャン)の全員が必ずしも魔術師(ウイッチ)ではなく、魔術師(ウイッチ)も必ずしも全員がまじないをするわけではない。一方悪魔使い(ワーロック)という呼び名は侮辱的で、しかも間違っています。なぜなら、この言葉は悪魔崇拝を連想させ——そして、もちろん、魔術(クラフト)は悪魔崇拝ではない——語源から見ても悪魔使い(ワーロック)は〝誓約破り〟を意味するが、——魔術師(ウイッチ)は誓約破りなどしません。いや……魔術の誓約破りをする魔術師(ウイッチ)は制裁を受ける。重要な誓約を破った場合は追放されることもある。だから、ぼくは悪魔使い(ワーロック)の修得者ではないんです。ぼくの現在の身分の正式名称は魔術修得者(クラフツマン)すなわち魔術師(ウイッチ)です」

「よくわかった！　ありがとう。なるほど、あんたのことや、あんたのやっていることを悪魔使い(ワーロック)と言ったのは、おれが悪かった。許してくれ——」と、ジェリー。相手の反応をうかがっている。

　しばらくしてやっとそれに気づいたカルヴァーソンは、あわてて答えた。

「あ、いえ、どういたしまして。そんなこと、何でもありません。ぼくは気にしていませんよ」

「ありがとう。ところで語源といえば、魔術師(ウイッチ)の語源は〝ウイッカ〟つまり〝知恵〟と〝ウイッセ〟つまり〝女〟

だ……だから魔術師（ウイッチ）には女性が多いんだな。それにこの話はわれわれの祖先が特別な知恵を授けられていたという事実を裏づけてもいる。いずれにせよ、〈知恵の魔術〉を称して魔術（クラフト）と呼ぶんだな。え、そうだろ？」

「え？　知恵ですって――ええ、そのとおりです。それこそ、古代宗教そのものです」

「よろしい。今度はおれの言うことをよく聞いてくれよ、坊や。つまらんことに腹をたてぬことも知恵のうちだ。律法は枝葉末節にこだわらない――賢者もそうするもんだぜ。たとえ若い娘が異教徒の前で〈アサマ〉の秘密を漏（も）らそうが――どうせそれほどたいした秘密じゃないんだし――老いぼれが見当違いの言葉を使おうが、取るに足らんことさ。どうだい、わかったかね？」

　またしてもジェリーは相手の返事を待ち、やがてそっと繰り返した。

「〝わかったかね？〟と、訊（き）いてるんだよ」

　カルヴァーソンは深々と溜息をついた。

「わかりました。賢人は些事にこだわらない」

「そうだ――もうひと切れローストをどうかね」

　そのあとカルヴァーソンはしばらく沈黙した。わたしも沈黙し、シビルも沈黙した。ケティとジェリーとマルガレーテだけは、たった今、客が満座の中でこっぴどくやっつけられたことなどまるで忘れたかのように、機嫌よく世間話に興じている。やがてシビルが言った。

「パパもママも、あたしは金曜日の拝火式に出席すべきだと思う？」

「〝すべきだ〟とは言わないよ。おまえは自分で別の教会を選んだ。おれとしては、〝そうするほうがいい〟と言うべきだろうな」と、ジェリー。

「シビル。今夜のあなたは、魔女集会のことしか頭にないけど、そのうちその気持ちが変わるかもしれないわよ……それに確か、古代宗教は、信者がほかの宗教の礼拝に出席するのを禁止してはいないでしょう」と、ケティ。

　カルヴァーソンが口を挟んだ。

「おばさん、それこそ、何世紀――いや何千年も昔からの迫害の名残りですよ。今も戒律が残っていますが、魔女集会の仲間は、表向きは別の、社会的に公認されている教会に属さねばならないのです。最近は、強制しなくなりましたが」

「なるほど」と、ケティはうなずいた。「ロデリック、ありがとう。ねえ、シビル、今の教会が奨励しているのなら、うちの教会にまじめに出席したらどうなの？　あなたの受けもよくなるわ。そのほうがいいんでしょう？」

「そのとおり」と、父親も加勢した。「〝世間の評価〟だ。パパは気前よく小切手を切るんで、うちの教会の大黒柱と呼ばれているが、おかげでパパのキャデラックの売上げはテキサスのディーラーの中でトップを切っている。おまえは、この相関関係を考えたことはないのかね？」

「パパって、まったく抜け目のない人ね」

「まさに、そのとおり。そうすればキャデラックの売上げも伸びるんだ。それに、あれを拝火式なんて呼ぶべきではないぞ。そのことはおまえにもよくわかっているはずだ。わたしたちが崇拝するのは、火そのものではなく、火が象徴するものなんだからな」

シビルはナプキンをひねくりまわしている。身体つきは大人びているが、一瞬、途方にくれた十三歳の少女に戻ったような表情を見せた。

「パパ、まさに、そのことなのよ。あたしにとって生まれたときから、火は、あたしたちを癒すものであり、浄めるものであり、永遠の命の象徴だったわ——でも、魔術を学び、その歴史を知ってからは、それがすっかり変わってしまったの。ねえパパ、魔法使いたちにとってはね……火はあたしたちを殺すためのものなのよ！」

わたしは息の止まるようなショックを受けた。その時まで、この若い二人の男女が魔術師だとは思ってもいなかったのである。この二人、小憎らしいが平凡な若造と、可愛らしくて明るい若い娘は正真正銘の魔術師なのだ。しかも女の子の方は、わたしたちにとって、かけがえのない友人であり、よきサマリア人であるケティとジェリーの一人娘なのである。

そう、確かに、わたしは諳んじている——〝魔術をつかう女を生しおくべからず〟。出エジプト記第二二章一八節だ。イスラエルの子孫の面前において、エホバがモーゼに直接与えたもうた十戒に劣らぬ厳しい掟である。

そのわたしがこうして魔術師たちとパンを分け合うとは何事だ？

腰抜けと言われても仕方があるまい。わたしは即座に立ち上がって、かれらを糾弾すべきだった。だが……現実には、そのまま椅子に座りこんでいる。

ケティが言った。「ちょっと、ちょっと、シビル！　そんなことは、ずっと昔の中世の話じゃないの！　今日の、今の、ここの話じゃないわ」

「おばさん、迫害が決して昔物語じゃないってことは、魔術師なら誰だって知ってますよ。ある年の収穫が悪かったというだけでも、迫害を受けたことがあるんです。セーレム（マサチューセッツ州北東部の港町）の魔女裁判は時間的にも距離的にも決して遠い出来事じゃない」と、カルヴァーソンは言った。

「ここらへんには、未だにキリスト教徒がうろうろしている。すきがあったら今にも火をつけようと機会を狙っているんです。セーレムの出来事を再現しようとしているんだ」

この時こそ、わたしは口をつぐんでいるべきだった。だが、気がついたときにはすでに喋りだしていた。

「セーレムで魔女を火炙りにしたという話はうそだ」

カルヴァーソンはじろりとわたしを見た。

「どうしてあなたに分かるんですか？」

「火炙りはヨーロッパの出来事だ。アメリカではやらなかった。セーレムの魔女は絞首刑に処せられたんだ――例外は圧死させられた者が一人いただけだよ」

（火は使うべきではなかったのだ。主はわれわれに、魔女たちの生きる苦しみを止めてやれと命ぜられた――拷問して殺せと仰せられたのではない）

「それで？　あなたは、絞首刑ならいいと、おっしゃっているようですね？」

「そんなことは言っていない！」

（ああ神よ、わたしを許したまえ！）

ジェリーが割って入った。

「そんな話はもうやめてもらおう！　おれの家の食卓では、今後も絶対にそんな議論はせんでくれ。なあシビル、その集会がおまえの気持ちを動揺させたり、恐ろしげな話を思い出させたりするんなら、そんな集会には出てほしくない。ところで、縛り首の話で思い出したんだがね、〈ダラス・カウボーイズ〉（アメリカンフットボールのチーム名）の後衛は、なんとかせにゃいかんぜ」

二時間後、ジェリーとわたしは、またしても例の部屋に入った。今度はレミントン三号だった。窓の外には吹雪が舞い、時おり、冷たい隙間風が床を吹き抜けてゆく。狼の遠吠えが聞こえたと、思った――だが実は、それはごうごうと燃えさかる火の音だった。室内はすこぶる居心地がいい。ジェリーはコーヒーと、ブランデーを注いでくれた。まるで金魚鉢のように巨大なブランデーグラスである。

「ブランデーには、貴族の名前をつけたものが多いね」と、ジェリーが言った。「ナポレオンだとか、カルロス一世だとか。だが、こいつはその中でも、まさに王者のブランデーだよ――血筋が濃いので血友病まで受け継いでいやがる」

わたしはがぶりとひと口飲んだ。冗談を聞いている余裕はなかった。魔術師たちのことが頭を去らず、死んでゆく魔女たちの姿が目先にちらつき、胸がむかつくのだ。炎に焼かれて跳ねまわり、踊るように悶え苦しむ魔女の顔に、

シビルの愛らしい顔が重なって見える。

聖書のどこかに魔術師（ウイッチ）の定義はなかったか？　現代社会に生きる魔術（クラフト）の使い手たちは、エホバの呼ぶ魔術師（ウイッチ）とは別なのか？

話をそらすな、アレックス！　出エジプト記に記された魔女（ウィッチ）が、現在の、ここテキサスに住む魔術師（ウイッチ）と同一であるとしよう。裁判官のおまえに向かって、当人が自分は魔女だと告白した。さあ、どうする、アレックス？　ケティの愛娘に絞首刑を宣告できるかね？　絞首台の踏み板をはずせるかね？　さあ、今度は逃げるわけにはいかんぞ……これまで、おまえはいつも責任のがればかりしてきたが。

ポンティアス・ピラトはイエスの裁判に自分は関係ないと言って手を洗った。

わたしは魔女に死刑の判決を下すつもりはありません！　主よ、どうか御力をおかし下さい。わたしにはできないのです。

ジェリーはグラスを掲げた。

「あんたとマルギーの冒険旅行の成功を祈って乾杯！　少しずつ飲むんだ。そうすれば酔っ払うことはない。これをやると、神経が静まり、頭が冴えてくるんだ。ところでアレック、〝この世の終わりが近い〟とあんたが信じているのはなぜなのか、話してくれないか」

それから一時間、わたしは熱心に語りつづけた。いま現実に顕（あら）われているしるしを預言するものは決して一書だけではなく、多数の書――ヨハネの黙示録、ダニエル書、エゼキエル書、イザヤ書、パウロのテサロニケ人への書、コリント人への書、イエスご自身によるマタイ伝・マルコ伝・ルカ伝・ヨハネ伝の四福音書など――が同じ預言を繰り返し行なっていること……。

意外にも、ジェリーは聖書を持っていた。わたしは素人にもわかりやすい平易な部分を選び、後日かれが自分でじっくり研究できるようにと、その章と節の番号を書き出してあげた。テサロニケ人への書の第四章一五節から一七節にいたる部分はもちろん、マタイ伝福音書の第二四章五一節全部、同じ内容のルカ伝福音書の第二一章の中の誤解の多い〝今（いま）の代（よ）〟の解釈にヒントを与えている三二節などだ。そして、キリストの真意を説明した――これらのしるしや前兆を目撃した今（いま）の代（よ）の人びとは、生き長らえて、キリストのご再臨を迎え、〈大いなる声〉を聞き、〈審判の日〉を体験するであろう……じっくり読みさえすれば、神意は自ら明白なのに――あれやこれやと、いいかげんに拾い読みして、肝腎の部分を読まないから誤解が生じるのだ。〝無花果（いちじく）の樹〟のたとえ話*もそのことを説いているのである。

＊ルカ伝福音書第二一章二九節、マタイ伝福音書第二四章三二節――「無花果が芽を出せば人間はおのずから夏が近いことを知るように、〈審判の日〉についても同様な前兆を見るだろう」という話。

わたしはまた、新約聖書の預言と一致する旧約聖書のイザヤ書や、ダニエル書などに記されている預言をも抜き書きした。

この預言の一覧表をかれに渡し、まず、これらの部分を注意深く読み、それだけでは納得のいかぬ場合は、さらに他の節や章を読み、神を受けいれるよう奨めて、この言葉を添えた――〝求めよ　さらば与えられん　尋ねよ　さらば見出さん〟（ルカ伝福音書第一一章九節）

「アレック、おれは少くとも一つだけはあんたに同感するよ。この数カ月間の出来事は確かにハルマゲドンと思って間違いなさそうだってことさ。そう、このままでは、明日の午後あたりに、世の終わりと〈審判の日〉が来たって不思議じゃないものな。今度の審判で救われない人間は、そうなるより他に仕方のないやつらばかりなんだから」そして、さらに悲しげな表情で言葉をつづけた。「昔のおれは、シビルが大人になるころ、この世の中はいったいどうなっちまうんだろうと心配したもんだが、今じゃシビルそのものが、無事に成人できるかどうかを心配している」

「ジェリー、どうか頑張ってください。まず、あなた自身が神の御恵みを受ける方法をみつけることです。そのあとで、奥さんと娘さんを導けばいい。ぼくの手助けなど必要ありません。誰の助けも不要です。ただ主キリストにおすがりすればいい。主は、こうおっしゃいました――〝視よ　われ戸の外に立ちて叩く　人もし我が声を聞きて戸を開かば　我その内に入らん〟……ヨハネの黙示録第三章二〇節です」

「あんたはそれを信じているんだね」

「もちろん信じてますとも」

「なあアレック、おれだって、できることならあんたに同調したいよ。そうすれば、世界が今のままであったとしても居心地よさそうだからね。だが、あいにく、このおれは、遠い昔に死んじまった預言者たちの夢みたいな言葉を信じることはできんのだ……あんたがその預言とやらをどう解釈しようと、かまわん。でも、神学なんてものは絶対に役には立たんよ――真夜中の真っ暗闇の地下室で、いもしない黒猫を探すようなものさ。神学者どもは屁理屈をこねまわして、何とでも好きなような思いこみをしやがる。うむ、確かにおれの教会だって同じようなものだよ――でも、少くとも真っ正直に〝汎神論〟（神は超越した実在であり、物質的宇宙や人間は神の顕示にほかならない

とする教義）を支持している。〈父と子と精霊〉の三位一体を崇拝し、自分の宗教は一神教だと主張できるような者は何だって信仰できるものさ――そいつには、その理由をこじつける時間を与えさえすればいいんだ。ちょっとずけずけ言いすぎたらごめんよ」

「ジェリー、信仰には、その率直さが必要なのです。〝われ知る我を贖う者は活く　後の日に彼かならず地の上に立ん〟――ヨブ記の第一九章です。ジェリー、主はあなたを〝贖う者〟でもあるのです――ぼくは、あなたが主に出会えるように祈りますよ」

「むずかしいと思うがね」と言って、ジェリーは立ち上がった。

「今までは、そのチャンスがなかっただけですよ。諦めないでください。ぼくは、あなたのために祈りつづけますから」

「ま、ありがとうよ、そうしてくれる気持ちには感謝するぜ。ところで、靴のはき心地はどうだい？」

「満点のはき心地ですよ」

「明日、どうしても発つって言うんなら、カンザスに着くまで、足に豆のできない靴をはいてなくちゃいかん。ほんとに大丈夫なのかね？」

「大丈夫です。それにやはり、どうしても出発しなければなりません。一日でも出発を延ばせば、永久に出発できなくなってしまいます――ここは居心地がよすぎるんですよ」

（急いで出発せねばならぬ本当の理由は、魔術と拝火教の脅威が強大すぎることなのだが、まさか、そうは言えない。自分の信仰の弱さを、ジェリーのせいにはしたくないのだ）

「寝室に案内してあげよう。うちのかみさんと夜ふかしでもしていないかぎり、マルギーはもう眠っているだろうから、なるべく静かに行こう」

寝室の扉の前で、ジェリーは手を差し出した。

「仮りにあんたの言うことが正しく、おれの方が間違っているとして、それでもあんたは自分が神の救いから落ちこぼれることもありうると言うのかね？」

「そのとおりです。今のわたしは、まだ神の御恵みにあずかっていません。わたしもなんとかしなくてはならんのです」

「なるほど。ま、幸運を祈ろう。だがもしあんたも神の救いを受けられなかった場合は、地獄でおれを探してくれ、いいな？」

どう見ても、ジェリーの表情は真剣そのものだ。「地獄で人を探すなんてことが許されるのかどうか……」と、わ

たし。
「やってみるんだよ。おれも探すから。約束するよ――」と、ジェリーはにやりと笑った。「地獄流の歓待をな。本当の心がこもっているぞ！」
　わたしも笑い返した。「では、そう約束しましょう」

　またしてもマルガは、服を着たまま眠りこんでいた。わたしは声を忍ばせて笑い、彼女の横に滑りこむと、自分の肩に彼女の頭をもたせかけた。このかわいそうな女の子を、あとでゆっくり目を覚まさせ、服を脱がせてベッドに運んであげよう。今のわたしは、とても眠るどころではない。何千もの――いや、一ダースほどの――考えごとがあるのだ。
　やがて、外が明るくなってきた。そのときになって、わたしはベッドの手ざわりが妙にちくちくして、でこぼこしているのに気づいた。あたりはますます明るくなり、わたしは自分たちが納屋の干し草の束の上に寝ている事実を悟った。

19

アハブ　エリヤに言けるは
我敵よ汝　我に遇や
彼言う我遇う
汝エホバの目の前に悪を為す事に身を委しに縁り
列王記略上第二一章二〇節

われわれは――またしても無一文になり、食べるものも、寝るところもない……という事実を無視して――66号線をクリントンからオクラホマ・シティへ向かう最後の九十マイルをやみくもに進んでいった。
　われわれはすでに空中船（ディリジブル）を見ていた。
　当然、これによってすべてが変わった。ここ数カ月の間わたしは、住所不定で無一文の身元不明人であり、仕事といえば皿洗いしかない文字通りの浮浪者だった。しかしこうして自分の世界に戻った今は――みいりのいい職業を持

ち、社会的にも尊敬される地位におり、銀行預金をたっぷり持つ人間なのだ。こうして果てしもなくいくつもの世界を巡り歩く実に地獄のような旅も、ついに終わったのである。

われわれは朝十時ごろ、町へ作物を運ぶ農夫の荷馬車に便乗して、クリントンへ乗りこんだ。マルガレーテがハッと息をのむ気配を耳にしたわたしは、彼女の視線を追った――すると、そこに飛行船（エアシップ）が浮かんでいたのだ！　銀白色で、すらりとした美しい船体。船名は分からなかったが、船腹のロゴは〈イースターン・エアラインズ〉と読めた。

「ダラスからデンバーへ行く急行便だよ」

荷馬車の主はそう言って、作業衣から時計を引っぱり出した。

「六分遅れてるな。めずらしい」

わたしは懸命に興奮を隠そうと努めた。

「クリントンには飛行場があるんですか？」

「いや、ないね。一番近いのはオクラホマ・シティだ。ヒッチハイク商売をやめて、飛行士になるつもりかい？」

「悪くないですね」

「そりゃそうさ。農夫より、よっぽどましだよ」

わたしはそんな愚にもつかぬ会話を、数分後に町の市場の外でおろされるまでつづけた。

マルガレーテと二人っきりになったとたんに、もうじっとしていられなくなって、彼女にキスしかけ……次の瞬間、はっとして思いとどまった。オクラホマ州はカンザス州と同じように、こまごました点まで道徳にきびしい所なのである。ここでは、どんな場所であれ、公衆の面前でいちゃついてはいけないのだ。

やれやれ、こうして何週間も、元の世界とは打って変わって道徳的規範の低い世界をいくつも回り歩いたあとで、再び昔のペースを取り戻すのも楽ではない。キスやら何やら、一見無邪気そうに見えるが、道徳的な社会では決して他人に見せることのない異性との行為を、平然と人前でやることに慣れた（お恥ずかしい！）今となっては、うっかりするとトラブルのもとになりかねない。悪くすると、大事な恋人までも、そのトラブルに巻きこんでしまうのではないか？　わたし自身はここで生まれた人間であり、さりげなく元の生きかたに戻ることもできよう……でも、まるでコリーの仔犬のように愛情表現が豊かな人間であるマルガは、それを表に出すことをこれっぽっちも恥ずかしいとは思っていないのだ。

「ごめんよ、マルガ」と、わたしは言った。「実は今、危うくきみにキスしかけたんだけど、ここではそんなことをしてはいけないんだ」

「なぜいけないの？」
「ううむ、つまりね、人前でキスなんかしてはいけないんだよ——この世界ではね。二人だけのときだけだ。ほら、つまり……例の〝郷に入れば郷に従え〟ってやつさ。でも、そのことはもうあんまり気にしなくていい。ねえ、マルガ、ぼくたちはわが家に着いたんだよ！　ぼくの故郷だ……そして今や、きみの世界でもある。ほら、きみだって、あの空中船（ディリジブル）を見ただろうが」
「あれは本当に飛行船（エアシップ）だったのかしら？」
「まさに本物、まさに本当……そして、ここ数カ月間に目にしたいちばん嬉しい代物だ。ただし、まだ——あわてて大きな期待を持たない方がいいかもしれない。次々と移り変わる多元世界（パラレル・ワールド）の中には、互いによく似かよったものもあったからね。ここは確かに空中船（ディリジブル）のある世界だが……ぼくの次元ではないって可能性もあるんだ。もちろん、そう思いたくなんかないさ——でも、あまり興奮しすぎないほうがいい」
（そのときのわたしは、マルガレーテが少しも興奮していないということに、気づいていなかったのだ）
「どうやってこれがあなたの世界だと見きわめるおつもり？」
「前にもやったように、図書館で調べればいいさ。でも今は、もっと速く、もっとうまく見きわめられる方法があるぞ。まず、ベル電話会社を見つけたいな——あそこの食料品店で訊（き）いてみよう」
　わたしは、公衆電話よりむしろ電話局に用があった。電話をかける前に、電話帳を調べたかったからだ——果たして、これは元の世界なのだろうか？
　確かにそうだ！　電話局には、オクラホマ全州の電話帳も、他州の主な都市の電話帳も——あのなつかしいカンザス州カンザス・シティの電話帳もあった。「ほらね、マルガレーテ」と、わたしは〈良識教会連合（CUD）〉本部の名を指さした。
「なるほど」
「うれしくないのかい？　もっと踊ったり、歌ったりして喜べばいいのに」
「あたし、あなたのためにはとても喜んでいるわ、アレック」
（まるで「当然じゃない、こんなにたくさんのかわいいお花があるんですもの」とでもいわんばかりの口調である）
　ちょうど二人きりで、電話帳の置いてある小部屋の中にいたので、わたしは、急いでマルガに囁きかけた。
「きみ、どうかしたのかい？　今は喜ぶべきときなんだよ。わからないの？　ここへ電話をすれば、お金が手に入るん

だぞ。これからは、みじめったらしい仕事も、食べものや寝るところの心配もしなくていいんだ。まっすぐ家に帰ろう。特別列車（プルマン）で――いや、空中船（ディリジブル）で、だ！　きみだって嬉しいはずだ、絶対に！　贅沢の限りをつくすんだ。ぼくたちのハネムーンだよ、きみ。最高のハネムーンだぞ」

「あなたはあたしをカンザス・シティに連れていけないはずよ」

「どういう意味だ？」

「アレック……あそこには、あなたの奥さんがいるのよ」

信じてほしい。わたしはそれまで長い間、アビゲイルのことをすっかり忘れていたのだ。いつの間にか、アビゲイルに会うことは二度とあるまいと確信していたのだ（というのも、元の世界へ帰れるとはまったく思っていなかったからだ）。それに、今のわたしには愛する妻が……男なら誰でも求めずにはいられないであろう理想的な妻、マルガレーテがいる。

まるで、屍になった自分の身体の上に、最初の土がかけられたようなショックを、わたしは感じた。

わたしは無理やり、そのショックから自分を引き戻した。でもまだ完全にではない。

「ねえマルガ、こうしようじゃないか。そう、確かに問題はある。でも、なんとか解決できる。もちろん、きみはぼくといっしょにカンザス・シティへ行くんだ！　行かなきゃだめだ。でも向こうへ着いたら、きみのために静かな居場所をみつけなくちゃならんな。きちんと話をつけるまでの居場所をね」（きちんと話をつけるだと？　アビゲイルが残忍な殺人鬼みたいにわめきたてるにきまってるのに）

「まずぼくは自分の金を手に入れなければならん。そのあと、弁護士に相談する」（離婚か？　離婚が認められる法的根拠はたった一つ、不祥事が起こった場合だけに限られている州で？　マルガレーテを不祥事の当事者にするつもりか？　絶対に、そんなことはできない。マルガレーテを、さらし台に乗せるつもりか？　アビゲイルが要求すれば、町の住民全体から村八分にされるんだぞ？　このおれの身にはどんなことが起こってもかまわない……アビゲイルに身ぐるみはがれたって平気だ――だがマルガレーテを絶対にこの世界の緋文字の法律にさらしてはならん。絶対に、だめだ！）

「それなら、いっしょにデンマークへ行こうか」（いや、それでは離婚できない）

「本当に？」

「本当だとも。ねえきみ、きみはぼくの妻なんだよ。今でもそうだし、永遠にそうだ。きみをここに残して、カンザス・シティへ行けると思うかい？　また次元転換が起こっ

て、きみを失ってしまうかもしれない。でも、ぼくが自分の金を手にしないかぎり、ぼくたちはデンマークへ行けないんだ。これで、わかってくれたかい？」（もしアビゲイルがわたしの銀行預金を使い果たしてしまっていたら、どうする？）

「わかったわ、アレック。いっしょにカンザス・シティへ行きましょう」

（これで問題の一部は解決した。しかし、アビゲイルとの問題が解決したわけではない。ま、いいさ、いざとなったら、背水の陣を敷くまでだ）

その三十秒後に、新たな問題が発生することになる。確かに女性の係員は、コレクト・コールの長距離電話をつなごうとしてくれた。カンザス・シティですか？　カンザス州のカンザス・シティでも、ミズーリ州のカンザス・シティでも、コレクト・コールをかける場合には、先方の意志を確認するための料金が二十五セント必要です。わたしが声をかけましたら、料金箱に入れてください。では、二番の電話ボックスへどうぞ。

わたしは電話ボックスの所まで行き、ポケットのコインをつまみ出して、並べた。

二十セント貨一枚、

三ペニー銅貨二枚、

カナダの二十五セント銀貨三枚。女王の顔がついている（女王だと？）。

五十セント銀貨一枚、

五セント貨三枚。ニッケルではなく、本来のものより小さい。

そして、どれ一つとして、あのおなじみの〝神はわれわれの要塞である〟という北米合衆国の標語を載せているものはなかった。

わたしは、このごたまぜのコレクションをじっと見つめ、この最後の変化がいつ起こったのか考えてみた。その前の次元転換をいつ体験したか明らかである以上、この変化は昨日の正午より遅く、しかも今日の朝食後のヒッチハイクより早いうちに起こったはずだ。昨日われわれが眠っている間だろうか？　だが、われわれは衣服を失っていないし、金を失ってもいない。腕ポケットをふくらませている剃刀さえそのままだ。

気にするな――こういう変化の細かいことまで全部理解しようとすれば、気が狂うだけだ。次元転換は間違いなく起こったのだ。わたしが元の世界にいることは確かだ……しかも、一文なしの状態で。持っているのは贋金（にせがね）ばかり。

やむをえない。このカナダの二十五セント銀貨は、まったく本物のように見える。大企業には八番目の戒律（汝、盗むなかか

れ）もあてはまるまい。この金をいつか必ず返すと心の中で誓えばいいのだ。銀貨をつまみあげたわたしは、平然と受話器をフックから外した。

「番号をどうぞ」

「コレクト・コールを、カンザス州カンザス・シティの〈良識教会連合〉につないでください。番号は、市外回線の一一二四Jです。誰でもいい――電話に出た人と話します」

「二十五セントを入れてください」

わたしは、例のカナダの二十五セント銀貨を入れ、かたずをのんだ――チャリン……チャリン……と音がした。やがて中央局の交換手の声――

「ありがとうございました。そのままお待ちください」

わたしは待った。そして待った。ずっと待った。

「カンザス・シティへの通話お申し込みですけど――〈良識教会連合〉はコレクト・コールを受けないと言っています」

「待ってくれ！　どうか先方に伝えてください――アレキサンダー・ハーゲンシャイマー牧師だと……」

「ありがとうございます。二十五セントお入れください」

「おい！　さっきの二十五セント分の用件がまだすんでいないんだぞ。きみの電話を切るのが早すぎたんだ」

「わたしどもが切ったのではありません。カンザス・シティの先方のかたがお切りになったのです」

「なるほど、じゃあ先方をもう一度呼び出してください。今度は切らないように伝えてね」

「はい、承知しました。二十五セントお入れください」

「ねえ交換手さん、ぼくは今、小銭がないから、こうしてコレクト・コールをかけているんだよ。先方が電話に出たらすぐに言ってやってください――こちらは事務局次長のアレキサンダー・ハーゲンシャイマー牧師だ、とね」

「少々お待ちください」

それで、わたしはまた待った。待ちつづけた。

「牧師さん？　カンザス・シティのかたは、あなたからのコレクト・コールは受けられないとおっしゃっています。たとえあなたが――先方のお言葉どおりに申し上げますと――イエス・キリストご自身であっても、とのことです」

「なんてことを……電話で口にすべき言葉じゃないぞ。いや、電話じゃなくとも、だ」

「まったく同感ですわ。それだけじゃありません。その人はあなたのことは聞いたことがないと言え、ともおっしゃっています」

「なんだって――」と言いかけたわたしは、言葉に窮した。今の自分が聖職服を着ていないことに気づいたからだ。

「ええ、お気持ちはよくわかります。わたしも先方のかたのお名前を訊こうとしたのですけど、先方がガチャンと電話を切ってしまったんです」
「若い男かね？　それとも年寄り？　先方の声はバス？　テノール？　バリトン？」
「ボーイ・ソプラノです。どうやら、昼休みの間だけ電話番をしているオフィス・ボーイといった感じでした」
「そうですか。ま、お骨折りには感謝します。本当にお世話さまでした」
「どういたしまして、牧師さん」

わたしは、そこを出た。後悔していた。いきさつをマルガレーテに説明したのは、その建物から充分に離れてからである。
「自業自得さ、マルガ。あの〝コレクト・コールは受けるべからず〟という命令はぼくが書いたんだ。電話の使用簿を分析したら、うちの事務所にかかってくるコレクト・コールはまったく〈連合〉のためにならないという事実が分かったものでね。十本のうち九本までが物乞いの電話なんだ……そして〈良識教会連合〉は慈善団体じゃない。金を集める団体なんだ。金を人に与える団体じゃないんだよ。そして十本目の電話はトラブルメーカーか、変人かからのものだ。それでぼくはこの厳然たるルールを設定し、実施した……その効果はたちまちにして現われた。電話代だけで年間数百ドルもの節約になったんだ」と、わたしは無理に笑ってみせた。「よもや、こうして自分のしかけた罠にはまるとは夢にも思わなかったよ」
「これからどうするつもりなの、アレック？」
「これから？　高速66号線に出て、親指を振るさ。五時までにはオクラホマ・シティに着きたいんだ。わけないはずだ。そんなに遠くないんだから」
「はい、わかりました、ご主人さま。でもなぜ五時までに着かなくちゃいけないのか、おうかがいしてもよろしいでしょうか？」
「きみはいつでも、何でも訊いてくれていいさ——わかってるくせに。ねえきみ、その忍耐の女グリゼルダ（中世文学に登場する温順で忍耐強い女性）のお芝居はやめてくれよ、きみはあの空中船を見てからちょっと変だぜ。お訊ねの理由はね、オクラホマ・シティには〈良識教会連合〉の支部があり、ぼくはそこが閉まるまでに行きたいからだ。まあ見ててくれ——きっと丁重なおもてなしを受けるからさ、ハニー！　オーク・シティに着けば、ぼくたちの災難もおしまいだ」
その日の午後の出来事は、モロコシ畑の中を苦労して歩きぬけるような感じだった。一月のモロコシ畑だ。車に乗

せてもらうにはなんの問題もなかったのだが――いずれも、短距離のものばかりだったのだ。ハイウェイの制限速度は六十マイルなのに、われわれの平均時速は二十マイルであった。しかも、その間に五十五分を空費した。これには、それなりの理由があった――無料の食事にありつくためだ。十何番目かに乗せてくれたトラックの運転手が、自分の食事のときに、われわれにも食べ物を恵んでくれたのだ……というのも、何も食べずに生きていられる人間はいないからであり、そして自分が食事をするときにマルガレーテがそばにいたら、彼女を食事に誘わないでいられる男はいないからである（そのときに、わたしも食べ物にありついた――ただ単にわたしが彼女の所有物だったという理由によるものである。わたしとしては、それでなんの不満もない）。

　われわれは二十分で食事を終え、そのあと運転手はピンボール・マシンに三十分と無数の二十五セント貨を費した……わたしがいらいらして立っているのに、マルガレーテは平然と運転手のわきに立ち、かれがいいスコアを出すたびに手をたたいてキャアキャアはしゃいだ。だが彼女の社交的本能は正しく、その男はそのあと、オクラホマ・シティまでの残りの全行程われわれを乗せて走ってくれた。ほかにバイパスがあったのに、かれは市内をまっすぐ通りぬけ、四時二十分に〈良識教会連合（CUD）〉の支部から二ブロックしか離れていない、三十六番街とリンカーン通りのかどでわれわれを降ろしてくれた。

　その二ブロックを、わたしは口笛を吹きながら歩いた。そして、こう言ったものだ。

「さあさあ、笑顔を見せておくれ、ハニー！　今から一カ月後には――いや、もっとすぐに――ぼくたちは〝チボリ〟（コペンハーゲンの遊園地）で食事をするよ」

「本当？」

「本当だとも。このぼくがせっかちだってことは、きみがあんなに言ってたじゃないか。ほら、この建物だ」

　うちの支部の続き部屋は、二階にある。ガラスのドアの文字が、わたしの心を浮きたたせてくれた。〈良識教会連合（CUD）――入口〉

「さあ、お先にどうぞ、お嬢さん！」

　そう言って、わたしは、彼女のためにドアを開けるべく、ノブをつかんだ。

　ドアには鍵がかかっていた。

　わたしはドアを激しくたたき、それから呼び鈴に気づいて、それを鳴らした。そのあとはノックと呼び鈴をかわるがわるくりかえした。何度も何度も……。

　モップとバケツを持った黒人が廊下を歩いてきて、われわれ

われのそばを通りすぎようとした。わたしは呼びとめた。
「ちょっと、そこの人！　この続き部屋の鍵を持っていないかい」
「もちろん、持っていませんよ、だんな。その部屋にゃだれもいませんぜ。いつも四時までには戸締りして帰っちまうんだから」
「わかった。ありがとう」
「どういたしまして、だんな」
再び通りに出て、わたしはマルガレーテにニヤリと笑いかけた。どうもきまりが悪い。
「実にご丁重なもてなしだよ。四時に閉まるとはね。鬼のいぬ間の洗濯ってわけか。厳罰だ、絶対に。こんな状態にぴったりの文句があったはずだぞ……あ、そうそう、乞食に選り好みは禁物ってやつだよ。さあ、奥様、今夜は公園でお寝みになりますか？　暖かな夜で、雨の心配もございません。ダニと蚊のサービスは無料でございます」
われわれはリンカーン・パークのゴルフコースで眠った。生きたビロードのようなグリーンの上でだ――ダニも生き生きしている。
ダニがいたにもかかわらず、その夜はぐっすり眠れた。われわれは起きて、最初の早起きゴルファーが姿を現わしたので、ゴルフコースを出た。気分は上々、ただちょっぴり薄汚れているだけだ。男性用と女性用に分かれて公園の公衆洗面所を利用し、わたしはきれいにひげを剃った。やがて、さっぱりして再会した二人は、無料の水を腹いっぱい飲んで朝食にした。まあ、概して陽気な気分である。
まだ、あのプレイボーイを自認する連中が〈良識教会連合〉に出勤してくるには早すぎる時刻だ。それで、たまたま出会った警官に公立図書館の場所を訊いたわたしは、ついでにもう一つ質問した。
「ところで、飛行場はどこです？」
「何だって？」
「空中船が発着する場所ですよ」
警官はマルガレーテの方へ向きなおった。
「お嬢さん、この人は具合でも悪いのかね？」
三十分後、前日に訪れた建物の案内板を見たわたしは、本当に具合が悪くなった……〈良識教会連合〉の名がない！　具合は悪くなったが、驚きはしなかった。一応、確かめようと二階へ上がる。例の続き部屋は、今や保険会社が使っていた。
「さあて、マルガ、公立図書館へ行くとするか。ぼくらが現在どんな世界にいるのか調べてみよう」
「そうね、アレック」と、彼女は元気よく答えた。「ねえ

あなた、あなたががっかりなさっていらっしゃるのは、お気の毒だと思うわ……でも、あたし、ほんとにホッとしているの。あたし……あたし、あなたの奥様に会うと考えただけで、恐ろしくて気が狂いそうだったんですもの」

「会わせはしないさ。絶対に、だ。約束するよ。やれやれ、ぼくもホッとした気分だ。それに腹ぺこだ」

　われわれはさらに少し歩きつづけた。

「アレック、怒らないでね」

「お仕置き以上のことはしやしないよ。何だい？」

「あたし、二十五セント貨を五枚、持っているの。本物よ」

「今のぼくとしては、こう言うべきなんだろうな……〝ねえ、娘や、フィラデルフィアで何か悪いことをしたんじゃないのかい？〟さ、話しておくれ。誰を殺したのかね？血はたくさん出たかい？」

「昨日。あのピンボール・ゲームでよ。ハリーはフリーゲーム（高得点を出したときに、もう一度無料でゲームできる特典）を勝ちとるたびに、二十五セント貨を一枚ずつくれたの。〝幸運に感謝して〟ですってさ」

　わたしは彼女をぶたないことにした。もちろんこれは〝善良な二十五セント貨〟ではなかったが、やがて充分に正当な硬貨であることが分かった。つまり、ちゃんと自動販売機に入る硬貨だったのだ。いつの間にか、われわれはゲームセンターの中を歩きまわっていた。こういう場所には、往々にして食べものの自動販売機があるからだ。確かに、ここにもあった。ただし値段は、おそろしく高い——ひからびた貧弱なサンドイッチが五十セント、そして、かろうじて一口分のチョコレートが二十五セントもする。しかしそれでも、これまでにわれわれが路上で口にしてきた朝食の中には、もっと哀れなものもあった。それに、われわれが盗みを働いていないことも確かだ——この二十五セント硬貨は、わたしの世界から持ってきた本物の銀貨なのだから。

　そのあとで、われわれは公立図書館へ行き、対処しなければならない世界がどんなものなのかを調べた。

　すぐにわかった。

　マルガの世界だ。

20

悪者(あしきもの)は逐(お)う者(もの)なけれども逃(に)げ
義者(ただしきもの)は獅子(しし)のごとくに勇(いさ)まし

箴言第二八章一節

マルガレーテは、前日のわたしと同じくらい、意気揚々としていた。はしゃぎ、微笑み、まるで十六歳の少女のようである。わたしは、監督官の目を気にしないで彼女にキスできるような、人目につかない場所――本棚の後ろかどこか――を求めて、あたりを見回した。それからすぐに、ここは誰もそんなことを気にしないマルガレーテの世界なのだと気づいた……そして、立っている彼女を不意にひきよせ、それなりの音をたててキスした。

そして、図書館員に叱られた。

いや、わたしがやった行為そのものを叱られたのではなく、われわれがちょっぴり音を立てすぎたからだ。人前でのキスは、図書館での礼節を乱すことにはならないのだ。だいたいは大目に見てもらえる。静かにすると約束し、違反をわびているうちにわたしは、ふと、図書館員の事務机のそばにある陳列棚に気づいた。

新刊教育用ポルノグラフィー
――六歳から十二歳用

十五分後、わたしは、77号線の路上でまたしても親指を振っていた――ダラスへ行くためだ。

なぜダラスなのか？　法律事務所があるからである――〈オハラ、リグズビー、クラムパッカー&リグズビー法律事務所〉だ。

図書館を出るやいなやマルガは、今の自分がどうやってわれわれの災難に終止符を打つことができるかを興奮して話しだした。コペンハーゲンに銀行預金があるのだ、と言う。

「ちょっと待てよ、マルガ」と、わたしは言った。「きみの小切手帳はどこにある？　きみの身分証明書は？」

結局マルガレーテは、きわめて楽観的に見ると数日後に、もっと確実に見つもれば数週間後に、デンマークの銀行預金を引き出すことができるということがわかった……そし

て海外電報で片をつけようと思えばほんの少額の金を引き出すにもさらに長い期間を要することもわかった。大西洋の向こうまで電話したら？　そのようなものが存在するという概念すら、マルガにはなかった（それに、たとえそれが存在していたとしても、海外電報の方が安いし確実だろうと、わたしも思う）。

すべての準備が整っても、実際に送金を受けるとなればヨーロッパからの郵便配達の問題もからんでくるかもしれない——なにしろ、この世界には航空郵便がないのだから。

かくして、われわれはダラスへ向かった。最悪の場合でも、アレック・グレアムの弁護士は、かれが（ということは、われわれが）生活してゆくくらいの金を貸してくれるだろうし、運が良ければもっと大きな財産を手にすることができるかもしれない。

あるいは、ひょっとしたらこのわたしをアレック・グレアムとは認めず、指紋かサインか何かを手がかりにして、かれとは別の人間であることを証明するのかもしれない。

そうなると、マルガレーテの優しい、しかし錯乱した心の中で〝アレック・グレアム〟は死ぬことになる。だが、このことはマルガレーテには言わなかった。

オクラホマ・シティからダラスまでは二百マイルある。66号線と77号線との交差点で車に乗せてもらい、テキサスの州都ダラスに着いたのは午後二時であった。77号線と80号線のトリニティー川交差点で降ろされたわれわれは、徒歩でスミス・ビルへ向かった。三十分かかった。

スミス・ビル内の続き部屋第七〇〇号室の受付嬢は、まるで日ごろ〈良識教会連合（CUD）〉が多くの時間と金をかけて弾圧しつづけているある種の舞台ステージから抜け出たスターのような女性だった。着衣は身体を充分におおい隠しておらず、マルガレーテの言葉を借りれば、いかにも〝ハイカラ〟な化粧をしている。年ごろで、かわいらしい。わたしは、新たに身につけた寛容の精神に基づき罪深い眼で、この女性の肢体を単純に楽しんでいた。彼女は微笑んで言った。

「いらっしゃいませ」

「ゴルフをするには実に格好の日和だけど、今日はどの先生がいらっしゃるのかな？」

「クラムパッカー先生だけだと思いますけど」

「うむ、かれでもいいな。お会いできるかね」

「どちらさまでしょうか」

（最初の障害だ——ミスったかな。いや、ミスったのは、この女の子のほうかな？）

「このぼくを知らないの？」

「申しわけございません。わたしが存じあげているかたで

したでしょうか？」
「きみはここで働きはじめて、どのくらいになるの？」
「三カ月ちょっとですが」
「だからわからないんだな。クラムパッカーにアレック・グレアムが来たと伝えてくれ」
彼女が電話でクラムパッカーに何と言ったのかは聞こえなかった。わたしは、じっと彼女の眼を注目した。まちがいなく、彼女は眼をぱっと見開いたようだ。しかし彼女はただ、「クラムパッカー先生はお会いになるそうです」とだけ言い、マルガレーテの方へ向きなおった。「お待ちになっている間、雑誌でもお読みになりますか？　マリファナはいかがです？」
わたしは言った。「いや、この人はぼくと一緒に来るんだ」
「でも——」
「さ、おいで、マルガ」わたしは急いで事務所の中へ入ってしまった。
クラムパッカーの部屋はすぐわかった。そこから耳障りな怒鳴り声が聞こえてきたからである。わたしがドアを開け、マルガレーテを中に入れたとたんに、その声はやんだ。わたしが彼女に続いて中に入ったとき、その男はこう言っていた。「お嬢さん、外で待っていなければだめじゃないか！」
「いや」と言って、わたしは後ろ手にドアを閉めた。「女房にはここにいてもらう」
相手はひどく驚いた様子である。「奥さんだって？」
「驚いただろ？　結婚してからきみに会うのは今日が初めてだものな。マルガ、こちらはサム・クラムパッカー。ぼくの弁護士の一人だ」
（この男のファースト・ネームはドアに書いてあったのだ）
「初めまして、クラムパッカーさん」
「ああ、お会いできて嬉しいですな、グレアム夫人。おめでとうございます。おめでとう、アレック、きみはいつでも最高のものを選ぶね」
「ありがとう」と、わたしは言った。「さ、座りなさい、マルガ」
「ちょっと待てよ、きみたち！　奥さんにここにいてもらっては困るよ——どうしてもだめだ！　きみだってわかっているくせに」
「いいや、わからんね。今は立会人が必要なんだ」
いや、なにもわたしはこの男が悪いやつだときめつけていたわけではない。しかし大分前に国会議員たちを相手にしたとき、立会人の存在を嫌う人間にろくなやつはいない

という事実を学んでいたのである。だから〈良識教会連合〉でも常に立会人を置き、法律には違反しないようにしていた。その方が結局、安上がりなのだ。
　マルガは席に着き、わたしも彼女のとなりに座った。クラムパッカーはわれわれが入ってきた瞬間からびくついており、まだ立ったままである。やがて、不安げな口調で言った。
「連邦検事を呼ばなきゃならんようだな」
「ああ、いいとも」と、わたしは同意してやった。「早くそこの受話器を取って電話をしろ。われわれ両方がそろって検事に会おうじゃないか。すべてを話そう。立会人つきでね。報道関係者も呼んだらどうだ。飼いならした連中だけではなしに、あらゆる報道関係者を全部ね」
〈わたしには事情がわかっているのかって？　とんでもない。何もわかっちゃいないのだ。だが、どうせ、はったりをかける必要があるのなら、できるだけ大きく虚勢を張った方がいい。わたしだって、こわい。まかりまちがえば、この大ネズミが追いつめられたハツカネズミのように逆襲してくるかもしれないのだ——しかも、死にもの狂いで〉
「そうすべきなんだろうな」
「ああ、そうしてくれ。そうしろよ！　ちゃんと名前をあげて、誰が何をやって誰がどんな目に会ったのか話そうじゃないか。おれはすべてをぶちまけたいんだ……誰かさんがおれのスープにこっそり毒を入れる前にね」
「そんな話し方はやめろよ」
「そんなことを言う権利があるのか？　このおれを船から突き落としたのはいったい誰だ？　え、だれだってんだよ？」
「そんな目でわたしを見るのはよせ！」
「いやね、サミー、おれは何もきみがやったなんて思っちゃいないさ。きみはあそこにはいなかったんだからな。しかしきみの息のかかったやつがやったのかもしれん。え、どうだ？」そう言ってわたしは、最大級の親しみをこめて笑いかけた。「冗談だよ、サム。昔なじみの友達が、このおれを殺そうとするはずはないだろうからな。でもきみがいくつかのことを話してくれれば、おれは助かるんだ。なあサム、おれだって自分の意志に反して、あの世に放り出されたくはなかったんだよ——だから、きみはおれに借りがあるのさ」〈いや、まだわたしにはさっぱり事情がわからないのだ……ただわかっていることは、ここにすねに傷を持つ男が一人いるという事実だけだ——だからこそ、こいつはこんなにおびえているのだ〉
「なあアレック、ゆっくり話し合おうじゃないか」
「おれは別に急いでなんかいないぜ。でもどうしても、わ

けを話してもらいたいだけだ。それに、金も欲しいしな」
「アレック、わたしの名誉にかけて言うが、わたしがきみに起こったことについて知っているのは、ポートランドに入ってきたあのスカンジナビア船にきみが乗っていなかったということだけだ。それでわたしはやつらがきみの金庫をこわすのに立ち会うために、はるばるオレゴン州まで行かねばならなかった。すると、あの金庫の中には、たったの十万ドルしか入っていない。残りは消えていた。誰が盗(と)ったのだ、アレック？　きみは誰に頼まれたのかね？」
　相手はじっとわたしの目をみつめた。わたしは、自分の表情が動揺しないことを祈った。それにしても、こいつの目は鋭い。こいつの話は本当なのだろうか？　うそだとすれば、実に見事な役者ぶりだ。やはり、あの事務長(パーサー)が、あるいはあの事務長(パーサー)と船長がぐるになって、金庫の中身を抜いたのだろうか？
　仮説としては、なるべく簡単に説明のつくものの方がいい。〝あの事務長(パーサー)が盗みをはたらいた〟という仮説よりは、〝この男がうそをついている〟という仮説の方が可能性は高い。それに事務長(パーサー)が行方不明になった船客の金庫をこじ開けるとなれば、船長がそれに立ち会う可能性も——確信はできないが——ありそうである。さらに、仮りに責任ある二名の高級船員がその地位と信望を捨てて盗みを共謀したとすれば、なぜ十万ドルだけを残したのか？　どうして、全部を盗み取り、わたしの金庫の中身のことは知らぬ存ぜぬで通さなかったのか——絶対にそうすべきだったはずだ。どうもくさい。
「いったい何がなくなったとおっしゃるの？」
「え？」と相手は、ちらりとマルガレーテに視線を向けた。「ううむ——つまり、えい、ちくしょう、あと九十万ドルあるはずだったんだよ。きみがタヒチで渡さなかった分がね」
「このおれが渡さなかったと言ったのは誰かね？」
「なんだと？　いいかアレック、悪あがきはやめた方がいいぞ。そう言ったのはミスター・Z(ゼッド)だ、きみはあの人の代理人を溺れさせようとしたそうじゃないか」
　わたしは相手を見やり、声をたてて笑ってやった。「あの熱帯のギャングどものことかね？　あいつらは、自分の身元を明らかにせず、受け取りも寄こさずに、あの大金を受けとろうとしたんだ。当然、おれは断固として引き渡しを拒んだ——すると、頭のいいあいつは力ずくでおれをプールにほおりこみやがった。ふうむ——サム、やっとおれにも読めたよ。パペーテから〈コンゲ・クヌート〉に乗りこんできたやつが誰なのかを調べるんだな」
「なぜ？」

「あれはあんたの手先だったからだよ。そいつは、あの大金を奪っただけじゃなく、このおれを船から突き落としやがったんだぞ。やつが誰かを知ってるなら、引き渡してくれなくてもいいから、そいつの名前だけを教えろよ。あとは、おれが自分で始末をつけてやる。おれなりのやりかたでね」

「ちくしょう……われわれはあの百万ドルを手に入れたいだけなのに」

「あんたは自分があれを手に入れられるとでも思っているのか？　あれは、とどのつまりミスター・Z（ゼッド）のものじゃないか……でもあんたは、その受け取りももらえやせん。受け取りをもらおうとしただけで、おれはあんなひどい目にあったんだぜ。ばかなまねはよそうや、サム。九十万ドルはどこかへ行っちまったんだ。でもおれのところにはないぜ。だから、せめて、あの十万ドルはおれに寄こせ。今すぐにだ」

「何だって？　あれはポートランドの連邦検事が持っていっちゃったよ。証拠として押収されたんだ」

「なあサム……いいかね、サム坊や、羊の盗みかたなら、こっちの方が一枚うわてなんだぜ。それはいったい何のための証拠かね？　被告は誰だ？　誰が告発（と）したんだ？　何の罪で？　おれがおれの金庫から何かを盗ったからといって犯罪になるのか？　何の罪だ？」

「何の罪って……つまり、あの九十万ドルを誰かが盗んだ……それで充分じゃないか！」

「本当かね？　原告は誰だ？　あの金庫に九十万ドルが入っていた事実を誰が主張するんだ？　このおれは絶対に誰にもそのことは話していないぞ——すると、いったい誰がそんなことを言うのかね？　さあ、その受話器をとれよ、サム。もし本当にその連邦検事のいかさま野郎がおれの金を持っているんだとしたら、おれがそいつからもぎ取ってやる」

「今日のきみは妙にやたらと検事に話したがっているぞ？いつものきみらしくないな」

「たぶん正直者のおれの良心がうずくんだろうよ。いいかね、サム、あんたがポートランドに電話をかけたがらないってことは、すべてを物語っているんだぞ。あんたはおれの弁護士として、おれの代わりにあそこへ呼び出されたんだろう。外国籍の船からアメリカ人の乗客が行方不明になった……当然、役人どもは当人の財産目録を作成しようと、当人の弁護士を呼ぶさ。そのあと役人どもは、その財産目録をそっくり弁護士に渡し、弁護士は受領書を書く。なあサム、おれの衣類をどうした？」

「え？　ああ、あれは赤十字に寄付したよ。当然だろう

が」

「あんたがかね、え？」

「つまり、検事から返却を受けてからってことだがね、もちろん」

「面白い。連邦弁護士は現に大金を保管しており、それなのに誰も金をなくしたと訴え出る者はいない……しかし、その弁護士は殺人犯罪の被害者かもしれぬ人間の衣服を寄付してしまった」

「何だって？」

「つまり、このおれのことだよ。このおれを突き落としたのは誰か……そして、その犯人を雇った者は誰か？　サム、おれたちは二人とも、金のありかを知っているんだぜ」と言って、わたしは立ちあがり、指さした。

「あの金庫の中だ。論理的に言って、絶対にあそこのはずだ。銀行預金にはしないはずだよ――記録に残るからな。家にも隠さんだろう――奥さんに見つかるかもしれないからな。それに、仲間にも分けていないことも確かだ。さあサム、金庫を開けてみろ。おれはこの目で確かめたいんだよ――あの中に十万ドルが入ってるかどうかな……いや、百万ドルかな」

「きみは狂っている！」

「連邦検事を呼べよ。立会人になってもらおうじゃないか」

あまりにも怒らせすぎたせいか、相手は口がきけなくなり、ただ両手をぶるぶると震わせている。小男を怒らせすぎるのは危険だ――わたしはこいつよりも六インチは背が高く、体重も体格もそれなりに優っている。暴力はふるうまい――こいつは弁護士なのだ――だが、わたしとしては、戸口を出るときなどは気をつけたほうがいい。

そろそろ、こいつの頭を冷やしてやるときだ――「サム……おいサムよ、そんなこわい顔をするなよ。あんたがかさにかかってきたから、おれもちょっと、やり返しただけじゃないか。検事どもだって何をするか分からんぜ――今ごろは、あの金はこそ泥に盗まれたってことになっているかもしれん……どうせ、このおれは死んだことになっているんだから、文句をつけるやつはいないはずだと思ってな。だから、おれはポートランドへ行って、やつにおどしをかけてやろうと思う――猛烈にな」

「あそこには、きみに対する告訴状が出ているんだぞ」

「本当かね？　何の罪でだ？」

「婚約不履行だ、相手はあの船の女性乗組員だよ」そう言いながら、マルガレーテにすまなそうな顔をして見せるだけの上品さを、こいつは持ち合わせていた。

「すみませんな、奥さん。ご主人が訊くものだから、つい

……」
「いいえ、かまいませんのよ」と、マルガ。きびきびとした口調だ。
「おれは忙しい男だからな。え、そうだろう？　その相手はどんな娘だ？　美人かね？　その娘の名前は？」
「わたしはまだその女性には会っていない。本人はあそこに姿を見せなかったものでね。その女性の名前か？　何やらスウェーデン人みたいな名前だったな。ちょっと待ってくれよ。確か……ガンダーソンだったかな。そうそう、マーガレット・S・ガンダーソンだよ」
　マルガレーテ、頼むから、文句を言わないでくれ——たとえスウェーデン人呼ばわりされても……。
　わたしは驚いた表情を見せて言った。
「今のおれは、この女性を誘惑した罪で告訴されていると言うのか？　南の海のどこかを航海中の外国籍船の中で？　では、オレゴン州ポートランドでは、わたしに令状が出ているわけだ。サム、あんたはいったいなんて弁護士なんだ？　依頼人がこんな告訴状を突きつけられているというのに、何の手も打てんのか？」
「わたしは弁護士としては頭のいい方でね。きみの言うとおり、連邦弁護士がどう動くかは予想ができない。やつらはちゃんとした依頼を受けてから、その脳みそを使うのさ。言うまでもないことだが、きみは死んでいる——あるいは、みんなからそう思われている。わたしは、利害に気をくばり、きみが危いことに首を突っこみそうになったら、その前に教えてやってるだけだ。もう少し時間をくれれば、告訴を取りさげさせてみせるよ——きみは、その後でポートランドへ行けばいいんだ」
「確かに、もっともらしい理屈だな。ここには、このおれに対するつけはないのかね？」
「ない。いや、必ずしもそうとは言いきれんな。きみだってよく承知しているはずじゃないか。われわれが、きみはもうここへは戻ってはこないと保証したからこそ、あの連中はきみを黙っていかせたんだ。ところが今や、きみはこうしてここへ戻ってきてしまった。アレック、きみはここで姿を見られてはまずい。テキサスのどこででもだ。まったくの話、この州のどこにもきみの居場所はない。うわさできみの所在を知った連中が、きみの昔の悪業をあばきたてるぞ」
「おれは何も悪業なんかしていない！」
　相手は、肩をすくめた。
「アレック、わたしの依頼人はみな無実を主張する人間ばかりだ。いいかね、今のわたしはきみの利益を守るために、父親代わりに話をしているんだよ。とにかく、ダラスから

出ていくんだ。パラグアイのような遠い所へ行けば、もっとよろしい」
「どうやって？　おれは一文なしなんだぜ。いいかサム、おれにはどうしても現金が必要なんだよ」
「わたしが、これまで一度だってきみを見捨てたことがあるかね？」
そう言って、相手は札入れを取り出し、百ドル紙幣を五枚数えてわたしの前に置いた。
わたしは金に目をやった。
「これは何だ？　チップかい？」そう言いながら、紙幣をつまみあげて、ポケットに入れた。「これっぽっちの金じゃ、ブラウンズビルまでも行けやしないよ。さあ、もう少し出してもらおうか」
「明日会おう」
「子供のお遊びじゃないんだぞ、サム。さ、金庫を開けて、本物の金を出すんだ。さもないと、おれは明日ここへ来るかわりに、その連邦検事のところへ行って、小鳥のようにさえずってやるぞ。そいつとけりをつけたら――そいつとのけりは絶対につくはずさ……連邦政府側は証人を欲しがっている……裁判に勝つためには、そうしなきゃならんのだ――その後で、おれはのんびりオレゴンへ行って、十万ドルを手に入れるよ」
「アレック、きみはわたしを脅すつもりか？」
「あんたがふざけるから、おれもふざけるんだよ。サム、車が欲しいんだ。がたのきたフォードじゃだめだぞ。キャデラックだ。新しくなくてもいいが、清潔で見た目のいい中古車で、エンジンの調子もよくなけりゃだめだ。キャデラックと二、三万ドルがあれば真夜中までにラレード（テキサス州南部の、リオグランデ川に臨む都市）に行けるし、朝までにはモンテレー（カリフォルニア州西部の、モンテレー湾南端の都市）に着ける。メキシコ・シティから電話をかけて、居場所を教えてやるよ。本当に、このおれがパラグアイに行ってほしいのなら、そうするための金を連邦区（中南米諸国における連邦政府の所在地である特別行政区）に送ってくれ」
必ずしもこちらの要求どおりにはならなかったが、結局、わたしは六千ドルの現金を受け取り、ポンティアックに乗って出発することで手を打った。指定された中古車販売店へ行き、店の言い値で車を買えばいい……という指示も受け入れた――サムが全部、おぜん立てをするそうだ。さらにかれはハイヤット・ホテルに電話して、新婚さん用のスウィート・ルームを予約しておいとくから、今晩はそこに泊り、翌日朝十時にまたこの事務所へ来いという。
わたしは早起きに拒絶反応を示した。
「十一時にしてくれ。おれたちは、まだハネムーン中なんだぞ」

サムはくすくす笑いながら、わたしの背中をたたき、それに同意した。

　廊下に出たわれわれは、エレベーターの方へ向かったが、三メートルほど歩いたところで、非常階段に通じるドアを開けた。何も言わずにわたしについてきたマルガレーテは、ひとけのない非常階段に出るなり、わたしに囁きかけた。
「アレック……あの人はあなたのお友達じゃないわ」
「ああ、友達じゃないな」
「あたし、あなたのことが心配だわ」
「ぼくも、ぼくのことが心配だよ」
「あたし、とても心配なのよ。あなたの命が危ないんじゃないかって」
「ねえ、きみ、ぼくだって命が惜しいさ。きみの命もだ。きみはぼくと一緒にいる限り、危険にさらされているんだからね」
「あたし、絶対にあなたのそばを離れないわ！」
「わかっているさ。どんなときでも、ぼくたちは一緒だ」
「そうよ。ねえ、これからどうするおつもり？」
「すぐにカンザスへ行く」
「あら、まあ！　それじゃメキシコへのドライブ旅行はしないのね？」
「実はね、マルガ、ぼくは車の運転のしかたさえ知らないんだよ」
　われわれは地階の車庫に出て、傾斜路をたどって裏通りに出た。スミス・ビルから数ブロックほど歩いたところで、流しのタクシーをひろいテキサス・パシフィック鉄道の駅まで乗った。並んで客待ちしているタクシーに乗りかえ、二十五マイル西方のフォート・ワース（テキサス州北部の都市）へ行った。その間マルガレーテは、じっと押し黙っている。彼女が何を考えているのか、わたしは訊かなかった――わかっていたからだ。自分の恋人が、ギャング相手のゆすりをやる姿をまのあたりにして楽しい気分でいられるはずがない。このことについては決して彼女の前では口にすまいと、わたしは心の中で誓った。

　フォート・ワースの町中に入ると、わたしは運転手に、その町でいちばんしゃれた商店街を選ばせ、そこで降ろしてもらった。
「ねえマルガ、きみに、ずっしり重い金の首飾りを買ってあげようと思うんだがね」
「まあ、なんてことをおっしゃるの、あなた！　あたし、金の首飾りなんてほしくないわ」
「ぼくたちには必要なんだ。マルガ、初めてこの世界へ来

たときに――ほら、〈コンゲ・クヌート〉の中できみに出会ったときだ――ぼくは、この世界のドルが不換紙幣で、金に替えることができないものである事実に気づいた。いま目の前にしている物価も、そのせいなんだ。だから、もしまた次元転換が起こったら――しかも、それはいつ何時、起こるかわからない――この世界の硬貨は十五セント貨も五十セントも十セントも、まったく値うちがなくなってしまうんだ。どれも本物の銀ではないのだからね。つまり、このクラムパッカーにもらった紙幣は……紙くずと同じってことなんだよ！

ただし、何か他のものに替えておけば話は別だ。それで、まず手始めにあの黄金の首飾りを買う。これからは、きみは眠るときも、入浴するときも、それを身につけていなくちゃいけない――どうしてもきみが身につけていられないときは、ぼくの首にかけといてくれ」

「なるほど。わかったわ」

「ぼくたち二人がそれぞれ重厚な金の装飾品を買うんだ。そのあとで、貨幣商を探そう――なるべく大型の銀貨を買いこむ。うまくすれば金貨も何枚か買えるかもしれない。要するにこれから一時間以内に、この紙幣を全部使いきることだ――ここから三百五十マイル北にある、カンザス州ウィチタまでのバス代二人分だけを残してね。今夜もひと晩中バスに乗るんだよ。がまんしてくれるかい？　一刻も早く二人で一緒にテキサスを出たいんだ」

「もちろんよ！　あたしだって一刻も早くテキサスを出たいわ！　本当にあたし、こわくてたまらないんだもの」

「絶対にぼくはきみを独りぼっちにはしないさ」

「でも――」

「でも、何だい、マルガ？　そんなに悲しそうな顔をしないでくれよ」

「アレック……あたし、もう四日間もお風呂に入っていないのよ」

われわれは宝石店を見つけ、貨幣商(コイン・ショップ)の店も見つけた。わたしは不換紙幣のほぼ半分を使い、残りはバスの料金と、この世界における他の用途――たとえば、閉店しかけたレストランで食べた夕食代などだ――のために取っておいた。ゲインズビルでハンバーガーを一個食べたのが、時間的にも空間的にも遠い出来事のように感じられた。食事のあと、その晩の十時に北行き――つまりオクラホマ・シティ、ウィチタ、サリナ方面行き――のバスに乗る決心をした。切符を買いお一人様一ドルの座席予約料金を支払う。そのあとは、泥酔した船乗りのように金を使いすてた――二時間以内にチェック・アウトだと承知の上で、バス停の真向か

いにあるホテルの部屋をとったのである。
それだけの価値はあった。熱い風呂だ。われわれ二人は交替で、一人が入浴中はもう一人が完全に服を着て、入浴中の人間の衣服と装身具と持ち金全部をしっかりと手に持って待機するようにした。それと、ロキの悪ふざけの裏をかくお守りとなったわたしの安全剃刀も、だ。
入浴後は二人とも、不換紙幣を貴金属に替える合間に買いこんだ新しい、清潔な下着を身につけた。
実は、愛を確かめるための時間もあるものとひそかに期待していたのだが……だめだった。入浴を終えたわたしの身体が乾くか乾かないうちに、バスに乗る時刻が来てしまい、わたしは急いで服を着てチェック・アウトしなければならなかったからだ。ま、いいさ。その機会は、まだいくらでもあるのだから。
かくしてわれわれはバスに乗りこみ、座席の背に身体をもたせかけた。マルガは頭をわたしの肩に乗せている。やがて、バスは北へ向かって出発進行……われわれは間もなく眠りこんでしまった。
どのくらい時間がたったことだろう？　わたしは、ふと目をさました。ひどく道が悪いらしい。だいぶバスが揺れている。われわれの座席は、運転手のすぐ後ろであった。わたしは身をのりだして訊ねた。
「道を迂回したのかね？」
わたしたちは十二時間ほど前に同じ道路を南に向かって走ってきている。あの途中に、こんなひどい道路があったという記憶はない。
「いや」と、運転手は答えた。「ふつうにオクラホマを通りぬけただけですよ。オクラホマにはあまり舗装道路がないんでね。いまはオーク・シティとガスリーの中間を走っています。いや、ちょっぴりオーク・シティに近いかな」
この会話がマルガレーテを目ざめさせたらしい。彼女は身体を起こして言った。
「どういうこと、あなた？」
「何でもない。また、ロキがぼくたちとふざけているだけさ。さ、もう一度おやすみ」

21

この白き衣を著たるは
如何なる者にして何処より来りしか
我言う　わが主よ　なんじ知れり
かれ言う　かれらは大なる患難より出できたり
羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり
この故に神の御座の前にありて
昼も夜もその聖所にて神に事う

ヨハネの黙示録第七章一三節〜一五節

わたしは一頭立ての軽四輪馬車を御していた。ちっとも楽しい気分ではない。暑い日だ。馬のひづめが砂ぼこりを舞い上げ、それが汗ばんだ肌にくっつく。ハエがしきりに群がり、風はまったくない。ここは、ミズーリ州かカンザス州かオクラホマ州のどこかのはずだが、はっきりとどこかはわからない。すでに何日間も地図を見ておらず、道路には、自動車運転者用の案内標識もない——ここには、自動車なんかないのだ。

　この二週間（ぐらいだと思う——もう日付すら忘れてしまっている）は、終わりのないシシフォスの拷問のような、ばかげたいらだちのくり返しだった。一ドル銀貨を別の世界のコイン・ショップで売って、その世界の紙幣を手に入れる——確かに問題はなかった。実際、何回かやった。しかしそれが必ずしも役に立つとは限らなかった。銀を売って、その世界の紙幣を手に入れ、やれやれとディナーを注文する——そのとたんにポンと次元転換……結局、われわれは空腹に苦しむ。そうかと思うと、腹立たしいほど安い買い値をつけられ、わたしが抗議すると、相手はこう言う——「なあご同輩、こんな金を持っていると大変なことになるぜ。そんなことは、おまえさんにもよくわかっているだろうが。なにもただで巻きあげようってんじゃないんだ。これも、おれがおまえさんを気にいったからだよ。それとも、なにかね、このおれに市民として当然の義務を果たせってのかね」

　わたしはしぶしぶ代金を受け取る。五オンスの銀貨を手放して得た紙幣では〈ママのディナー〉とかいう田舎の食堂へ行っても二人分の食事は買えないのだ。

　このあたりは（村はずれの看板によると）なかなか魅力

的な村落である。こんな看板だ——

本村落の清潔を保つため
黒人、ユダヤ人、カトリック教徒は
立ちどまることを禁ず！

十 戒

われわれは立ちどまらずに歩きつづけた。この二週間は、まるまる、オクラホマ・シティからミズーリ州ジョプリンにいたる二百マイルを旅するために費やされた。すでにカンザス・シティを避けることを断念せざるをえなくなっている。できることなら、カンザス・シティに、あるいはその近くにいたくない。もし突然に次元転換が起こり、アビゲイルのひざの上に着陸させられたりしたら、それこそ目も当てられない。しかし、オクラホマ・シティで、ウィチタへ行く一番速くて確実で、唯一の実際的なルートは、カンザス・シティを通る長い迂回路であると教えられた。われわれは、馬と馬車の時代に逆もどりしていたのだが。

地球の年齢は、紀元前四〇〇四年の天地創造から、現在の一九九四年にいたる五九九八歳である——ま、六千歳としよう。六千年の中の八十年や九十年はあまりたいした期間ではない。つまり、わたしの世界における馬と馬車の時代がいかに短いものだったかということだ。わたしの父はこの時代（一九〇九年）に生まれ、父方の祖父は一度も自動車を所有しなかったばかりか、それに乗ることさえ拒否した。祖父は、自動車は悪魔の申し子であると主張し、それを証明するために、よくエゼキエル書の一節を引用した。ひょっとしたら祖父の言い分は正しかったのかもしれない。

しかし、この馬と馬車の時代には、いくつか不便な点があることも事実だ。たとえば、家に水道もガスもなく、エアコンもなく、近代的な薬もない。だがさしあたり今のわたしたちにとって困ることは、なにもそれほど大げさなことではない——自動車やトラックが一台も見あたらず、いつものヒッチハイクができないことである。そう、時には農家の荷馬車に乗せてもらうことはできる——でも、人間の歩く速さと馬の歩く速さは、それほど違うものではない。もちろん、できるだけ荷馬車に乗せてもらうようにしてはいるが、どっちにしても、一日に進むペースは五十マイルがやっとだ。かといって、進むことばかり考えていると、食べ物や寝るところを得るために働く時間がなくなってしまう。

古いパラドックスである〝アキレスとカメ〟の話だ。一歩進むごとに、ゴールまでの距離は半分になります。さて、ゴールに着くには、どのくらい時間がかかるでしょう？

答え——絶対にゴールへは到着できません。

オクラホマ・シティからジョプリンへ向かうわたしたちの〝前進ぶり〟は、まさに、これである。

もう一つ、わたしをいらいらさせることがあった——自分たちが世紀末にいるのだという気持ちが日ましにつのってくるのである。いつなんどき、イエスのご再臨や〈最後の審判〉が起こるかもしれぬ——それなのに、わたしの大事なマルガはまだイエスの御手に帰依していないのだ。マルガが自分の意志でそうすることを、わたしは全意志力を傾注して願いながらも、このことでとやかく言うのは差し控えていた。このごろのわたしは、彼女のことを心配するあまり、夜も眠れなくなりかけているのだ。

それにわたしは気が狂いかけてもいた(この次元転換が自分だけを狙って起こっているという偏執病的信念に加えて、だ)——〝大事なマルガの不滅の魂の安全をはかるためには、この旅を完結させることが絶対に必要である〟という信念にとりつかれた狂人だ。この信念には、まったく根拠はないのに、どうしてもそれに逆らうことができない。ああ、わが愛する主よ、どうかわたしたちをカンザスまで行かせてください……わたしは彼女を改宗させ、彼女に人間としての良識を与えるまで、絶え間なく祈ります……ああ、イスラエルの支配者たる神よ、どうか、わたしのこの願いをお聞きとどけください!

新しい世界のかねに換えるための銀や金はまだ持っていたが、それでもわたしは皿洗いでも何でも仕事を捜しつづけた。だが今や、モーテルはまったく見あたらなくなり、ホテルもたまにしか見つからず、レストランは数が減り、規模が小さくなってきている。このほうが、このあたりの住民のふところ具合にふさわしいのだろう。この辺の人たちは旅行することもめったになく、外食することもほとんどないのだから。

そのかわり、貸し馬屋で馬小屋の掃除をする仕事なら、すぐに見つかるようになった。しかしわたしは、どちらかというと馬糞の掃除よりも皿洗いのほうが好きだ——とくに、靴が一足しかない今は。それでもわたしは、まともな仕事なら何でもやりぬく気持ちは変えず、ただひたすらに先へ進みつづけた!

ヒッチハイクをやるなら、貨物列車に忍び込んで無銭乗車をきめこんだ方がよかったのに……と思う人がいるかもしれない。われわれがそうしなかった第一の理由は、一度もそれをためしたことがなく、やりかたを知らなかったことだ。だが、それ以上に重要な理由は、貨車に忍び込んだ場合、マルガの身の安全が保障できないことだ。走っている貨車に飛び乗ることも危険だが、それ以上にたちの悪い

のは、人間による危険だ。鉄道公安官のやつらや、ならずものたち――渡り労働者や浮浪者、麻薬中毒者や、酔っぱらいたち――による危険だ。このぞっとする危険についてマルガと話し合う必要はなかった――あらかじめ彼女を線路や渡り労働者たちのたまり場に近づけないようにしていたからだ。

わたしは心配でたまらなかった。マルガの頼みを忠実に守り、決して彼女には強制しないようにしながらも、わたしは毎晩彼女の目の前でひざまずき、声を出してお祈りをしてみせた。やがてついに、わたしを歓喜させることが起こった――マルガがひざまずいて、お祈りに加わるようになったのである。しかし彼女はお祈りを声に出すことはなかった。それで、わたしも祈りを声に出すのをやめた。声に出すのは、最後の「イエスの御名において、アーメン」だけである。

このことについても、われわれは一度も話し合わなかった。

かくして、わたしはこの馬車を御するはめになったのである（それにしても、いやはや、なんて暑い日だ！――父方の祖父が〝竜巻き日和〟と呼んだ代物だ）。これも、貸し馬屋の小屋掃除という仕事を選んだ結果である。その仕事も例によって、わたしは一日で辞めた。辞める理由もいつものとおり――妻の母親が病気になり、どうしてもジョプリンへ行かなければならない……と言うやつだ。

貸し馬屋の主人は、北側の隣町まで返しにいかねばならぬ馬車がある、と言う。――「とにかく、おれんところには、自分のやら他人のやらの馬車や駄馬がたくさんありすぎてね……通りすがりの地方まわりのセールスマンに馬車と馬を貸しては、元の所へ送り返してもらうことにしてるんだ」

わたしは馬糞掃除と馬の手入れをやって得たひどく安い一日分の報酬をそのままそっくり吐き出して、隣町まで馬車を返しにいきたいと申し出た。

「おまえとかみさんがどうしてもジョプリンへ行かなきゃならんというから、おれは特別に好意を示してやってるんだぞ」と、相手は恩に着せてくる。

敵なりに相応の論理と説得力がある。わたしは同意した。それでも相手のかみさんは、納屋で眠ったわたしたちに朝食をご馳走してくれ、昼の弁当も用意してくれた。

だから、わたしはこの馬車をあやつることを、それほど不満に思っていたわけではない。この暑さと、いらだちとにもかかわらず、だ。われわれは毎日二、三マイルずつ確実にジョプリンに近づいている――しかも今やマルガもお祈りをしてくれているのだ。どうみても「やったぞ！」と

思える雰囲気が始まりかけていた。

われわれは、その町のはずれに着いた（ローウェルだったか？　レイシンだったか？　どうも思い出せない）。そこで、われわれはわたしの子供時代から抜け出てきたような光景にまともに出くわした。昔の、信仰復興（リバイバル）運動のテントでの伝道集会である。道路の左側は共同墓地だった。よく管理されてはいるが、草がひからびていた。そして右側が牧草地で、そこに〈リバイバル集会〉のテントが張られていた。墓地と聖書集会が並んでいるとはね。偶然なのか、それとも計画されたものなのか。あのダニー牧師なら、計画的にこの種のことをやりかねない――たいていの人びとは、墓石を見ると自然に、遠い〝あの世〟を頭に思いうかべるからだ。

テントの近くには、いずれも満員の一頭立て馬車や農家の荷馬車が何台もずらりと並び、その背後に柵がこいの臨時の馬つなぎ場ができていた。テントをはさんでその反対側に厚板や木びき台で作ったピクニック用のテーブルが並び、昼食の食べ残しが放置してある。どうやら、これは厳粛な礼拝集会らしい――朝から始まり、昼食にひと休みして、午後もつづく……夕食のときにはもうひと休みするがそのあとも〈リバイバル〉の運動者が集会者全員の魂が救われたと判断するまで、えんえんと続くのだろう。

（わたしは、こういったたぐいの五分間の神の御言葉を売り物にする近ごろの都会の宣教師を軽べつしている。〝ビリー・サンディはコップ一杯の水を飲むだけで、七時間ぶっつづけに説教することができた〟というのがやつらのよくロにする話だ――〝そのあとサンディは同じ日の夜も、次の日も同じことを繰り返した……〟とか。これじゃ、異教徒の数が新緑の月桂樹のようにぐんぐん伸びてくるのも当然だ！）

二頭立ての大型幌馬車がテントのそばに止まっていた。横っ腹にペンキでこう書いてある――〈ブラザー・〝バイブル〟・バーナビー〉

その前方に、綱と支柱で張ったカンバスの看板が立っている。

あの伝統の信仰を！
ブラザー・〝バイブル〟・バーナビー
集会は毎日三回
午前十時――午後二時――午後七時
六月五日（日曜日）より
！！！〈最後の審判の日〉まで！！！

わたしは、老いぼれ馬に声をかけて手綱を引き、止まれと命じた。
「マルガ、あれを見てごらん！」
マルガレーテは無言で看板の文字を読んだ。
「かれの勇気には感心するよ」と、わたしは言った。
「ブラザー・バーナビーは今年の小麦の収穫期より前に〈最後の審判の日〉が来るということに、自分の信望を賭けているんだ……この暑さじゃ、今年の小麦の刈り入れは例年よりも早くなるぜ」
「でも、あなただって〈最後の審判の日〉は間近いと思っていらっしゃるんでしょう？」
「うん、だけどぼくは別に、それに自分の職業上の威信を賭けようとは思わないよ……ただひたすらに自分の魂の不滅と、天国への願望を祈るだけだ。ねえマルガ、聖書は、読む人によって預言の解釈が少しずつ違うんだ。ものすごく違って解釈することもある。〝前千年期説〟信奉者たちによる現時点での結論では、西暦二千年までは〈その日〉は来ないってことになっている。ブラザー・バーナビーがこのような考えを持った理由を訊いてみたいな。ひょっとしたら、何かをつかんだのかもしれない。ここで一時間ほど休んでもいいかい？」
「何時間でもあなたのお好きな時間だけ休んでちょうだい。でも――アレック、あたしも一緒にあの中へ入るの？どうしてもそうしなきゃだめ？」
「ううむ――」（もちろんだよ、マルガ……ぼくは確かにきみも一緒にあの中へ入ってもらいたいと思っている）
「きみは当然、馬車の中で待っていたいんだろうね？」
彼女は沈黙した。それだけで充分に答えになっている。
「わかったよ。マルガ、無理に連れていくつもりはない。ただ――ぼくたちは今まで、どうしてもそうせざるを得なかった数週間の他は、別々になったことはなかっただろう。わけは、知ってのとおり――いつ次元転換が起こるかわからないからだ。きみがここで座って待ち、ぼくがテントの中に入っている間に、もし次元転換が起こったら……ぼくときみは離ればなれになってしまう。ううむ、そうか……ぼくたちが二人ともテントの外にいることができるぞ。テントのはじを、巻き上げればいいんだ」
彼女は肩をぐいとそびやかせた。「あたし、おばかさんだったわ。いいわ、一緒に中へ入りましょう。アレック、あなたの手を握らせてね。あなたのおっしゃるとおりだわ。次元転換は必ず起こるんですもの。だからと言って、あなたがご自分の宗教の集会に参加するのをやめさせる権利は、このあたしにはないわ」
「ありがとう、マルガ」

「それにアレック――あたし、やってみる気になったわ！」

「ありがとう。主よ、感謝いたします！　アーメン！」

「あたしに感謝する必要はないわ。あなたがご自分の天国に行くときは、あたしも一緒にそこへ行きたいだけ！」

「じゃ、中へ入ろうか、マルガ」

　わたしは、一つの長い列の最後尾に自分の馬車を停め、馬を馬車から外して柵の中に入れた。マルガも一緒についてきた。テントに近づくにつれて、中の歌声が聞こえてくる。

　――いざ、汝の片すみを照らさむ！
　汝の座する場を照らさむ！
　港を見失いし者を求め、説き伏せて港に連れ戻さむ！
　かくすればこそ――

　わたしはそれに唱和した。「――汝の座に光みちなむ！」

　わたしはいい気分だった。

　伴奏には、足ぶみ式オルガンとトロンボーンが使われている。まさかトロンボーンとはね――でも、楽しいじゃないか。トロンボーンほど〈聖都エルサレム〉にぴったりの楽器はないし、〈御子は戦い往かむ〉には不可欠の代物だ。

　天使のような長衣をまとった聖歌隊が集会を支援している。――どう見ても、にわか造りの聖歌隊だ。身にまとう白衣は粗末なシーツである。当然、プロ並みの歌唱力には欠けているが、それをひたむきな熱っぽさで埋め合わせていた。教会音楽なんてものは、なにもそれほど上手でなくたっていいのだ――歌いかたがひたむきで、音量さえあればいい。

　会場の中央を六フィート幅にオガクズを敷いた道がまっすぐに伸び、その両側にベンチが並んでいる。オガクズの道の行きどまりに、枠で囲った狭い祭壇があり、その中に聖職者と聖歌隊がいた。前の方に座りたいというわたしの希望に応えて、一人の案内係がその道を案内してくれた。前の方は混み合っていたが、案内係は人びとに詰めるように頼んでくれ、結局、われわれは前から二列目の、オガクズの道に接した席に座ることになった。わたしが道側である。そう、まだ後ろに空席がたくさんあるのだが、宣教師は決まって、前に空席があるのに後ろの席に座る人びとを、〝不まじめな聴衆〟と呼んで、ひどく嫌うのである。

　音楽が止むと、ブラザー・バーナビーは立ち上がって説

教壇に歩み寄り、聖書の上に手をおいた。
「聖書の中にすべてがある」
ささやくような静かな声で、ブラザーは言った。会衆は死んだように静まり返った。
ブラザーは前に進み出て、まわりを見回した。
「誰があなたを愛するか？」
「わたしを愛してくださるのはイエスだ！」
「その声を主に聞いていただこう」
「わたしを愛してくださるのはイエスだ！」
「どうしてそれがわかるのか？」
「聖書に書いてある！」
わたしは、久しぶりに一つの臭いを嗅いだ。かつて、わたしの説教学の教授は研究会で、「宗教的熱狂に満ちた会衆には独特の強い臭気がある」と、指摘した（「悪臭」という言葉を教授は使った）――汗と、男性女性双方のホルモンの混ざった臭いだ、と言う。「いいか、諸君」と、教授は言ったものだ。「集めた会衆の臭いが良すぎるときは、諸君の説教はまだその人たちに感動を与えていない。会衆に汗をかかせることができず、また会衆が、さかりのついた猫のような麝香臭を発する分泌物を出してくれないようだったら、諸君は説教をやめて、通りの向こうのカトリック教会へでも行った方がましだよ。宗教的恍惚は、人間の持つ最も強い感情なんだ。臭いがあれば、必ず嗅ぐことができる！」
今のブラザー・バーナビーは、まさにその感動を会衆に与えている。
（そして、白状しなければならぬ――わたしがやると、こうはいかなかった。それゆえに、わたしは組織作りと金集めを担当するはめになったのである）
「そうです、それは聖書に書いてありますね。聖書の御言葉です。ところどころではなく、全部が神の御言葉なのです。決して寓話なんかじゃない。文字どおりの真実なのです。あなたがたは真実を知るべきです。そうすれば、その真実があなたがたを解放してくれます。では、その聖書を読みます――〝それ主は号令と御使の長の声と神のラッパと共に　みずから天より降り給わん　その時キリストにある死人まず甦えり〟（テサロニケ人への前の書第四章一六節）
この最後の一節は重大なニュースですよ、兄弟姉妹のみなさん。――〝その時キリストにある死人まず甦えり〟です。これはいったいどういう意味か？　つまり、単に〝死人まず甦えり〟とは言っていない――〝キリストにある死人まず甦えり〟と言っているのです。キリストの血で洗い浄められて、イエスへの信仰の中で生まれかわり、ご再臨の前に、神の恩寵を受け入れて死を迎えた人びとのことで

す。このような人びとだけが、神から忘れられることなく、まず甦るのです。その人たちの墓は開き、その人たちは奇跡的に生命と健康と完全な肉体とを取り戻し、行進の先頭に立って天に昇り、白衣の座天使の御そばで未来永劫に幸せな暮らしをすることになるはずです！」

だれかが叫んだ。「ハレルヤ！」

「あなたに祝福を、姉妹。あ、そうだ、よい知らせがあります——キリストを信仰して死せる人すべてに、です！ 天への行進の先頭に立つのは、残酷な癌によって家族から引き離されたがイエスの名を口にしながら亡くなったシスター・エレンです。子を産んで亡くなったが神の恩寵を受けていたアーサーの最愛の奥さんも、その行進の中にいるはずです！ あなたがたの親しい人たちで、キリストを信仰して亡くなった人びとは、みな一つに集められており、天であなたがたと再会することになるのです。罪深い生活を送ったけれども、敵兵の銃弾に射抜かれて殺される寸前のたこつぼの中で神の存在を認めたブラザー・ベンも、天にいるでしょう。このベンの例は特別に良い知らせです。神はどこにでもおられる、という証明なのですから。イエスは教会の中だけにおられるのではありません。まったくの話、主の御名をごくまれにしか口にせぬ気どった教会があることは事実ですが——」

「もう一度言ってください！」

「何度だって言います。神はどこにでもおられるのです。あなたの話すことをすべて、神はお聞きとりになれるのです。神はあなたが彩色と香料とでどぎつく飾りたてられた大聖堂の中にいるときよりも畑を耕しているときや、ベッドのそばでひざまずいているときの方が、あなたの話すことを容易にお聞きになれるのです。神は今もここにおられ、こう約束してくださっているのです——〝われ、なんじを見捨てず、見放すことなし。われ、なんじの家の外に立ちて、扉をたたかむ。いかなる者も、われの声を聞きて扉を開けば、われはその中に入りてその声と食を共にし、その者もまたわれと共に食せむ〟。これは神のお約束です。神がこの上ないご愛着をもってお用いになるご率直な御言葉です。あいまいなところはまったくなく、大げさな解釈もいらず、いわゆる寓意的な意味もありません。ただあなたがそうしたいと言えば、キリストご自身があなたを待っていてくださるのです。

しからば、あなたが本心からそれを求め、イエスへの信仰の中で生まれ変わり、主があなたの罪を洗い流してくださり、あなたが本当に神の恩寵を受ける状態になったら……どうなるのか？ さきほど読んだのは、信ずる者に対する神の御約束の前半です。やがてあなたがたは〈大いなる

声〉を聞き、神の御降臨を知らせる〈大いなる喇叭〉の響きを耳にすることになるのです。そして、神の御約束どおり、キリストを信じて死んだ者は甦るでしょう。ひからびた白骨は再び立ち上がり、生き生きとした健康な肉体に覆われるのです。
しからば、その後はどうなるのか？
主の御言葉をお聞きください——〝後に生きて存れる我らは〟——いいですか、これは、あなたがたとわたし……つまり、兄弟姉妹の皆さん、あなたのことですよ。神はわたしたちのことについて語っておられるのです——〝後に生きて存れる我らは彼らと共に雲のうちに取り去られ　空中にて主を迎え　斯ていつまでも主と偕に居るべし〟（テサロニケ人への前の書第四章一七節）
だから、われわれは永久にそうなるのです！　だからわれわれは永久に、主と共に天で暮らすのです！」
「ハレルヤ！」
「主の御名に祝福あれ！」
「アーメン！　アーメン！」
（わたしは、自分がいつの間にか他の人たちと一緒に「アーメン！」と唱えていることに気づいた）
「しかし、それには代価がいります。天へ行くのに無料切符はありません。もしあなたがイエスに救いを求めなかったら、どうなるか？　あなたの罪を洗い流し、仔羊の血の中で生まれかわらせてくださるという主のお申し出を断わったら、どうなるか？　いったい、どうなると思います？　さあ、どうです？　答えてください！」
会衆は沈黙した。重い息づかいだけが聞こえる。やがて、後ろの方で声がした。さほど大きくはない。「地獄の業火だ」
「そう、地獄の業火と永遠の断罪です！　短い期間だけではなく、永久に受けつづけるのです！　決して神がかりで抽象的な火があなたの心の平安を焦がすのではありません。七月四日の独立記念日の花火なんてもんじゃない。ほんものの火です。怒り狂う炎です。これと同じようにほんものだ」と、ブラザー・バーナビーは説教台を叩いた。台は、テントの外まで聞こえるほど大きな音をたてた。「〝底だき自給ストーブ〟（石炭が燃えるとひとりでに新しい石炭が上から補給されるストーブ）を赤熱させ、次に白熱させるような熱い火ですよ。そして、あなたは罪人としてその業火の中にいれられ、ものすごい苦痛を絶え間なく味わうことになります。この苦痛に終わりはありません。絶対に！　あなたはもはや、ひとかけらの希望もない。やりなおしはきかないのです。あなたにはすでに、やりなおしの機会が与えられていたからです……百万回も、いや、もっと多くの機会が、です。二千年もの間、お優し

いイエスはあなたに懇願しつづけてこられた――あなたに与えるべく、ご自分が十字架にかけられる苦痛を味わってまで手にいれようとなさったものを、あなたに受けいれてほしいと。ですから、たとえあなたが恐ろしい地獄の中で火に焼かれ、硫黄の――そう、硫黄です。燃えて悪臭を放ち、あなたの肺を焼き焦がし、あなたの罪深い皮膚に火ぶくれをつくるごく普通の硫黄です！――その硫黄の煙に咳きこみ、悶え苦しんだとしても、苦しみがこれほどひどいとは知らなかった……自分がこんなめに会うとは思わなかった……などと泣きごとは言わんでください。そのようなことをイエスは何もかもご存じなのです。主は十字架にかかって亡くなられたのですから。主はあなたのために亡くなられたのですから。しかし、あなたは主の御言葉に耳をかそうとはしなかった――それなのに今こうして地獄の底に落とされると泣きごとを言っている。

そしてあなたは、火あぶりの苦痛を受けながら永久にそこにいつづけるのです！　地獄の底にいるあなたの泣きごとは、もはやイエスの御耳には届きません。他の何十億人もの罪人たちの悲鳴にかき消されてしまうからです！」

ブラザー・バーナビーは、二人だけで会話するかのように声を落とした。「あなたは、地獄で火に焼かれたいのですか？」

「いやよ！」……「とんでもない！」……「イエスがわれわれを救ってくださる！」

「イエスは必ずあなたをお救いになります――あなたがそうしてほしいと求めればね。クリスチャンとして死んだ者は救われるのです。聖書にそう書いてあります。神の恩寵を受けて生まれ変わり、イエスご再臨のときに、その状態を保って生きている者は救われます。主は、ご再臨になるとお約束くださいました。主がこの地球上を平和と正義によって統治なさった一千年の間、サタンを鎖につないでおく……とも、お約束くださった。これが〈千年期〉なのです、みなさん――今、こうしてわれわれが暮らしているすばらしい日々のことです。この〈千年期〉が過ぎると、サタンは少しの間だけ解き放たれ、最後の戦いが行なわれることになります。天で戦争がおこなわれるのです。神の戦士、天使長ミカエルが味方の司令官になり、神の天使たちを率いて戦うのです。戦いの相手はドラゴン――またしてもサタン――と、その相棒である堕天使たちです。そして、サタンは負けた――いや、負けることになるのです。――今から千年後に、です。そのあとサタンは二度と天には姿を現わしません。

しかし、いいですか皆さん、これは千年後の話です。そのとき、あなたがたはまだ生きていて、それを見ることに

なるのです――イエスを受けいれ、ご再臨を告げるラッパが鳴りひびく前に生まれかわっていれば、です。さて、その時はいつか？　もうじき、もうじきなのです！　聖書には何と書いてありますか？　聖書の中で、神は、ご再臨について何回も何回も語っておられますが、イザヤ書にも、ダニエル書にも、エゼキエル書にも、四つの福音書のうちのどれにも、ご再臨の正確な時は書かれていません。なぜでしょう？　もしその時がわかれば、あなたがたはそれを他の人たちに触れまわらずにはいられないでしょう、理由はそれです！　もし神があなたがたに、西暦二〇〇〇年の元旦に再臨なさるとおっしゃったとしたら、今から後の五年半を、みだらな女たちとつき合ったり、奇妙な神を崇拝したり、十戒のあれこれを破って過ごす人たちが必ず出てくるからです……そのあとで、やがて一九九九年のクリスマス・ウイークがくると、その連中は教会で後悔して泣き叫び、なんとか取引きしようとする。

そうは問屋がおろしませんよ、皆さん！　安く取引きしようと思ってもだめ。みんなに対して同じ値段なのです。〈大いなる声〉と〈喇叭〉の音が聞こえてくるのは、数カ月後かもしれないし……あるいは、ひょっとすると、わたしがこの文句を言いおわらないうちかもしれない。その時が来たときにあなたの心の準備ができているかどうかはあなた次第なのです。

でも、わたしたちはその時が、いずれにせよ間もなくやってくるということを知っています。どうやって知ったのか？　またしても聖書です――聖書に書いてあるのです。徴候と前兆が書いてある。まず第一に――実はこれがないと残りのことはいえないんだが――イスラエルの子ら（ユダヤ人）が〈約束の地〉へ帰ったことです――エゼキエル書を見なさい。マタイ伝を見なさい。そして今日の新聞を見てごらんなさい。かれらは教会堂を再建した……これは確かな事実です。その記事が〈カンザス・シティ・スター〉紙に載っている。他にもさまざまな徴候が、前兆が、驚異がある――しかし、もっとも重要なのは苦難です。ヨブが受けたような人間の魂を試すための試練です。この二十世紀を〝苦難〟と呼ばずして、なんと呼びますか？

数々の戦争……テロ……暗殺……火災……疫病。そして、さらに数多くの戦争……。有史以来、人類がこれほどきびしい試練を受けたことはありません。でも、耐えねばなりません――ヨブが耐えたように。そうすれば最後には、幸福と永遠の平安が得られるのです――わたしたちの理解を超える〝神の平安〟です。神はあなたに手を差しのべ、あなたを愛し、あなたを救ってくださいます」

ブラザー・バーナビーは言葉を切り、すでに汗でびしょ

ぬれになった大きなハンカチで額をぬぐった。聖歌隊が（おそらく、かれの合図を受けたのだろう）静かに歌いはじめた。

われら、河辺に集(つど)わむ。
かの美しき、美しき河辺に。
神のおそばを流れ行く河――

そしてすぐ、つぎに続いた。

まさにわれ、ひとつとて歓(よろこ)びもなく――

ブラザー・バナビーはひざまずき、会衆の方へ両手を突き出した。
「お願いします！　神に答えてください。さあ、イエスを受け入れて、御腕に抱かれて――」
聖歌隊が静かに歌いつづける。

されど、主の御血すでにわがために流され、
われをして主の御もとに差し招く、
おお、わが主イエスよ、
われは行かむ、われは行かむ、主の御もとへ！

そして、聖霊がご降臨になった。
わたしは体内に神の力が入りこみ、心がイエスの歓びで満たされるのを感じた。わたしは立ち上がり、オガクズの小道に出た。そのときになって初めて、マルガレーテの存在を忘れていたことに気づいた。振り返ると、彼女はじっとわたしを見つめ返していた。真剣な顔にうっとりと甘美の表情を浮かべている。
「おいで、マルガ」と、わたしは囁きかけて彼女を小道へ連れだし、われわれは一緒にオガクズの小道を歩いて、神に近づいていった。
すでに、わたしたちより先に内陣(チャンセル)の防柵に押し寄せてきている者も大勢いた。わたしは自分の居場所を見つけ、何本かの支柱と一本の桁構(トラス)をわきに押しのけて、ひざまずき、右手をかけた柵に額を押しつけた。左手はしっかりとマルガの手を握っている。そして、イエスに祈った――なにとぞ、わたしたちの罪を洗いきよめ、主の御腕の中へ、わたしたちを受けいれてください……。
ブラザー・バーナビーの助手の一人が、わたしの耳に囁いた。「ご気分はいかがですか、ブラザー？」
「わたしは大丈夫です」と、わたし。幸せいっぱいの気分である。「妻も大丈夫です。ほかの人を助けてあげてくだ

さい」
「あなたに神の御祝福を、ブラザー」
そう言って、助手は先へ進んでいった。向こうで一人のシスターがぶつぶつ言いながら、身悶えしている。助手は彼女を落ち着かせようと立ち止まった。
再び頭を垂れたわたしは、おびえた馬のいななきと悲鳴を耳にした。頭上では屋根のシートが大きくはためき、ゆさゆさと揺れている。見上げたわたしの目に、屋根のカンバス地に亀裂が入り、その亀裂がみるみる広がっていくのが見えた。やがてシートは完全に吹き飛ばされてしまった。大地は揺れ動き、空は真っ暗である。
ラッパが全身の骨を震わせ、〈大いなる声〉はこれまでわたしが耳にしたことがないような大音響となって轟いている。歓喜と勝利の声だ。わたしはマルガを立たせて微笑(ほほえ)みかけた。
「さあ、いよいよだよ。マルガ!」
われわれは上空へ吹きあげられた。
つづいて、空中でまっさかさまに転がり、漏斗状の雲の中でもみくちゃにされた。カンザス特有の竜巻きだ。マルガともぎ離され、何とか身体の向きを元に戻そうとしたが、できなかった。竜巻きの中で泳ごうとしたって、とても無理な話なのだ。ただただ、身をまかせるしかない。しかし、なぜか、マルガが無事であることをわたしは知っていた。
暴風はわたしの身体をうつ伏せにした。そのままの状態がしばらく続く——高度二百フィートの空中で、だ。眼下では、馬たちが思い思いに囲いの外へ逃げ出しており、空へ舞い上がらなかった何人かの人びとが右往左往している。竜巻きは再びわたしの身体の向きを変え、眼下に共同墓地が見えた。わたしは思わず目を見はった。
いくつもの墓が、いっせいに開きはじめているのだ。

22

かの時には晨星あいともに歌い
神の子等みな歓びて呼わりぬ

ヨブ記第三八章七節

強い風に身体の向きをぐるりと変えられたので、それ以上墓を見ていることはできなかった。まもなく、再び下向きになった時には、もう地面は見えなかった——見えるものはただ、ふくれあがって渦巻く雲だけだ。その中で巨大な光が琥珀色や濃い黄色や淡い青灰色や緑がかった金色に輝いている。わたしはマルガレーテを捜しつづけたが、まわりに漂っている者はほとんどなく、その中にも彼女はいなかった。心配はない、主が彼女をお守りくださるだろう。彼女がちょっとの間いなくなったって、気を落とすものか。二人一緒に、唯一の重要な障害を越えたのだから。

わたしは、その障害について考えた。きわどいところだった！　もしあの老いぼれ馬が蹄鉄を一つ落としてしまって、そのためにあの場所へ着くのがあと一時間遅れていたら、どうなっただろう？　答え——わたしたちは決してあそこへは着けなかったはずだ。〈最後の喇叭〉は二人とも路上にいて、まだ神の恩寵を受けていないうちに鳴ってしまっただろう。そして天に運び上げられるかわりに、罪をあがなわぬまま審判をうけ、地獄につき落とされたことだろう。

このわたしが運命予定説を信じているかとのお訊ねですか？

いい質問ですな。解答可能な方の質問から片づけましょう。わたしは雲の上に浮かんでいた。どのくらいの間そうしていたのかわからない。時どき、他の人びとを見かけたが、話ができるほど近くに来た人はいなかった。わたしは、主イエスに会えるのはいつだろうかと考えはじめた——イエスは〝空の上〟でわれわれにお会いになると明白に約束してくださっている。

わたしは、「ママ、今すぐしてほしいんだよ」と駄々をこねて、「がまんしなさい、坊や。まだだめよ」と母親に言われた小さな子供のようにふるまっているのだと自覚せざるをえなかった。神の時間とわたしの時間とは違うのだ。そう聖書には書いてある。〈最後の審判の日〉はさぞや忙

しいことだろうし、イエスがどんな義務を遂行なさらねばならないのか、わたしにはまったく見当もつかない。いや、そうだ、そのうちの一つだけは知っている。墓が開いていたので思い出した。キリストの選民として亡くなった人びと（数百万人だろうか？　数十億人だろうか？　それとも、もっと多いのか？）はまず第一に、〈天にましますわれらの父〉にお会いすることになっている。当然、主キリストもその名誉ある会見に同席なさるはずだ。そう約束なさったのだから。

この遅延の理由を理解すると、気が楽になった。イエスにお会いできる番がくるまで、喜んで待とう……そしてお会いした時には、マルガレーテと一緒に連れていってくれるように頼もう。

もはや、心配も焦りもない。まったく快適だ。暑くもなく、寒くもなく、腹もすいていないし、のども渇いていない。雲のようにぷかぷかと浮かびながら、わたしは約束されていたとおりの至福感にひたりはじめ、そのうちに眠ってしまった。

どのぐらいの間眠っていたのだろうか。長い間だ——なにしろ疲れきっていた。最後の三週間で、参ってしまったのだ。片手で顔を撫でてみて、二日以上眠っていたことがわかった。無精ひげが伸びていたからだ。つまり、少くとも二日以上ひげを剃っていないということだ。わたしは胸ポケットに触った——そう、マルガからの贈り物であるあの頼りになるジレットは、いまでもボタンをかけたポケットの中にちゃんとある。だが、石鹸も、水も、鏡もない。

このことで、わたしはいらいらしていた。合図のラッパ（例の〈大いなる喇叭〉ではない——たぶん勤務中の天使が吹いているやつの一つだ）に起こされてからずっとだ。その合図が「ほら、起きなさい！　あなたの番ですよ」という意味であることは、教えられなくてもわかった。

これだけは確実だ——つまり、〝彼方にて点呼を取られる〟時に、二日間ひげを伸ばしっぱなしのまま出席することになるのだ。こいつは弱った！

天使たちは、交通整理の巡査みたいにわれわれを扱い、意図する隊形にわれわれを整列させた。天使だということがわかったのは、翼をつけて白い長衣を着ていたからである。それに体軀も人間ばなれした大きさだった。——わたしの近くに飛んできた一人の背丈は、九フィートか十フィートもあった。天使たちは翼をはばたかせない（後で知ったのだが、翼をつけるのは儀式のときだけなのだ。言いかえれば職権を表わす一種の記章なのである）、わたしは交通整理のおまわりの言うとおりに動けることがわかった。これまでは自分で動作をコントロールすることができなか

ったのだが、今では自分の意志だけで、どの方向へも自由に動ける。
かれらは初めわれわれを縦一列に並ばせ、その列は何マイルにも及んだ(何百マイルだろうか？　いや、何千マイルか？)。その後、かれらは縦一列を、十二列の縦隊に変え――そして、それを十二段に積み重ねた。数えまちがいでなければ、わたしは、横から四列目の上から三段目にいた。列の前から数えれば二百番目くらいだ――これは隊形がつくられている間にざっと数えたのだ――だが、この列がどのくらいの長さなのかは、ちょっと推測できなかった。
そして、われわれは、御座の前を飛んだ。
しかし、その前に一人の天使が、われわれの左側五十ヤードほどの宙で停止し、よく通る声で言った。
「さあ、よく聞いてください！　あなたたちは、この隊形のままで検閲を受けます。ずっと、その位置を保っているように。自分の左側と、下と、前にいる被創造者を基準にしなさい。上下と前後はそれぞれ十キュービット、左右の間隔は五キュービットあけること。詰めすぎず、列から外れず、御座の前を通るときもぐずぐずしないように。飛行隊形の統制を乱す者は列の一番後ろにまわしますよ……そして、注意しておきますが、御子はそれ以前に席をお立ちになっていて、パレードを迎えるのはペテロかパウロか、だれかほかの聖人しかいないかもしれません。なにか質問は？」
「一キュービットって、どのくらいの長さですか」
「二キュービットが一ヤードです。この隊の中で一ヤードの長さがわからない者は？」
誰も口を開かなかった。その天使はこう付け加えた。
「他に質問はありませんか？」
わたしの左上の女性が叫んだ。「ありますわ！　うちの娘ったら、咳の薬を持っていかなかったんですの。ですからわたしが取ってきました。これを娘に渡していただけないかしら？」
「被創造者よ、あなたの娘が天に来てもまだ咳がでるとしたら、それは単なる心身症です。わたしが保証します」
「でも、娘の主治医が――」
「お黙りなさい、パレードを進めていきましょう。天に着いてからでないと特別な願いは受け付けられませんよ」
さらに質問がつづいた。たいていはばかげたもので、わたしは長いあいだ心に思っていたことをあらためて確認した――つまり、信心深さは必ずしも常識を伴わないという事実だ。
再びラッパが鳴った。われわれ飛行隊の指導者が叫んだ。「前へ！」数秒後、合図のラッパが一度だけ鳴り、かれは

大声で命じた。「飛べ！」一同はいっせいに前進を開始する。

（原注／わたしはこの天使を〝かれ〟と呼んだが、それはその天使がわたしの目には男性に見えたからである。女性であると思われる天使は〝彼女〟と呼ぼう。わたしは一度も天使の性別を確かめたことがない。たとえ性別があったとしても、だ。天使たちは両性具有ではないかと思うのだが、確認する機会が――あるいはその勇気が――とうとうなかった。

他にも気になっていることがもう一つある。イエスに兄弟姉妹がいないのか……という疑問だ。処女マリアは、今でも処女なのだろうか？　この事実を確かめる勇気もやはりなかった）

神の御座は何マイルも前方に見えた。それは天にまします父なる神の〈大なる白き御座〉ではなく、イエスがこの特別な儀式に使う仕事場にすぎなかった。とはいえ、この上なく荘厳である。単一のダイヤモンドから切り出されているのだ。イエスの内なる光が、その百万もの切子面にうつり、炎と氷のシャワーとなってあらゆる方向にふりそそぐ。だがわたしに見えるのは、そこまでだった。イエスのお顔はまばゆいばかりの光で輝いているので、サングラスなしではとてもお顔立ちを見ることはできない。

かまやしない。おまえはあのかたが誰だか知っているじゃないか。知らないわけにはいかないのだ。われわれがまだ少くとも二十五マイル手前にいるうちに、不意にわたしは圧倒的な畏敬の念にとらわれた。すでに神学の教授から教わってはいたのだが、わたしは生まれて初めてあの唯一無二の感情を理解（というか、感じたというか）した。聖書の中で、二語を一つにして記述されている感情――〝愛と恐れ〟だ。わたしは御座の上の存在を愛しかつ恐れた。そして今、なぜペテロとヤコブが漁網を捨てて〈あのお方〉についていったかを理解した。

もちろん、わたしは〈あのお方〉に一番近いところを（百ヤードほどのところを）通り過ぎたときも、特別に何かを願ったりはしなかった。この世に生まれてから、わたしはイエスに、名ざしで何千回も話しかけて（祈って）きたのである。現身のお姿を見たときも、われわれを集合させた天使が、天国へ行けば個人的な要請を正式に提出するチャンスを与えると約束してくれたことを思い出しただけだった。どうせ、もうすぐだ。一方、マルガレーテがこのパレードのどこかにいて御座にいます主イエスを見ているだろうと思うと、心がはずんだ……もしわたしの仲介がなければ彼女には決して主イエスを見る機会は訪れなかっただろう。そう考えると、ほんわかとしたいい気分になり、

主イエスの発する目のくらむような光をじっと見つめているうちに、恍惚とした畏敬感のきわみに達した。
御座から数マイル離れると、縦列は上向きに進路を変え、そのまままっすぐつき進んで、地球を、さらに太陽系を後にした。われわれは一直線に天を目指し、スピードを上げた。
天上から見る地球が三日月型をしている事実をあなたはご存じだろうか。地球平坦説を唱えた人びとは、うまく携挙にあずかっただろうか？　どうもそうではないような気がする。しかし、あのような無教養な迷信が、キリストを信じることと必ずしも矛盾するわけではない。確かに、いくつかの迷信はかたく禁じられている——たとえば占星術やダーウィンの進化論などだ。しかし、あのばかげた地球平坦説はわたしの知っているかぎりではまったく禁じられてはいないようだ。もしわれわれ一行の中に地球平坦説の支持者がいたとしたら、後ろを振り返って地球がテニスボールのように球型である事実を知り、いったい、どんな気持ちでいるのだろう。
（あるいは慈悲深い主はかれらには特別に、地球は平盤な姿であるかのようにお見せになったのだろうか？　しょせん、人間には神のお立場など理解できやしないのだ）
天国の近くに着くまで二時間ほどかかったように思う。〝思う〟と言うのは、わたしには、いったいどれだけの時間がかかったのか、さっぱり見当もつかなかったからだ。それをはかれるような、人間の計器はない。この携挙も二日間くらいかかったように感じられた。しかし後になって、七年間だったかもしれぬと思いなおした——少くともある計算によれば。いずれにせよ宇宙時計とそれに類する物差しがないと、時間と空間の測定はあいまいにならざるをえない。
聖都に近づくと、先導者は一行のスピードを落とさせ、内部へ通じる門の一つをくぐる前に、聖都の周囲をざっとひと巡り見物させた。
それはちょっとした観物なんてものではなかった。新エルサレム（天国であり、聖都であり、エホバの首都だ）は、ちょうどコロンビア特別区のような正方形だ。ただしその規模はこちらの方がはるかに大きい。一辺千三百二十マイル。四辺の合計五千二百八十マイル、面積百七十四万二千四百平方マイルだ。
ロサンゼルスやニューヨークなど比べものにならぬほど壮大な都市である。
まったくの話、聖都の広さはテキサス州全体の六倍以上なのだ！　それでいて、都内は混雑しきっている。しかし、

どうやら、都内の先住者たちは、われわれ一行が最後の集団転入者だと思いこんでいるらしい。
　聖都は当然のことながら石垣で囲まれており、その石垣の高さは二百十六フィート。その厚みも同じである。石垣の上には十二車線の道路があった――だが、ガードレールはまったくない。恐ろしい話だ。石垣にはそれぞれ三つずつ、合計十二の門がついている――有名な〝真珠の門〟（ヨハネの黙示録第二一章二一節）で、すべて本ものの真珠でできていた。普段は開いたままになっており、〈最後の戦い〉のときまでは絶対に閉まることはない……と、ガイドは説明した（ヨハネの黙示録第二一章二五節）。
　その石垣自体は虹色の碧玉でできているが、水平に層をなしている十二の基（ヨハネの黙示録第二一章一四節）は、その石垣よりもはるかに華麗に煌めいて見える。瑠璃、玉髄、緑玉、紅縞瑪瑙、貴橄欖石、緑柱石、黄玉石、紫水晶（ヨハネの黙示録第二一章一九節～二〇節）――その他にも、いくつか見落としたものがあったかもしれない。どこもかしこも、あまりにもまばゆく煌めくこの新エルサレムを人間の眼で把握することはむずかしい――全体像を一度に視覚におさめることが不可能なのだ。
　聖都のまわりをひとめぐりしおえると、飛行隊長はわれわれ一行を、オーヘア国際空港（米国シカゴにある空港）の上空で着陸の順番を待つ空中船のように並べ、しばらく待機させた。やがて、門の一つが空いたという合図が出た。聖ペテロの姿をひと目みたい、とわたしは期待したのだが、だめだった――聖ペテロの執務所がユダ門と称する中央部の門の近くにあるのに、われわれ一行はそれとは反対側のアセル門を通って都内に入ったからである。そこでわれわれは住民登録を受けた。登録事務を担当するのは、聖ペテロの職務代行を命じられた天使たちである。
　十二の門をすべて使用し、それぞれに何十人ものペテロの職務代行者たる天使たちを配置し、検査も手抜きした（われわれ全員が携挙にあずかった者ばかりだからだ――救われることは保証されている）にもかかわらず、われわれは門を入ったところで氏名を登録されるだけのために、かなり長い間、列を作って待たなければならなかった。仮りの身元確認を受け、仮りの宿所割当てをもらい、仮りの食事割当てを――
（〝食事〟だって？）
　そう、わたしも疑問に思ったので、わたしの分の登録をしている天使にたずねた。性別不明の天使はわたしを見下ろして答えた。
「軽食は自由にできますが、飲食をなさらなくても、あな

たのご健康に害はありません。しかし被創造者たちのほとんど全員と、天使たちの一部は、群れつどって飲食を楽しむようです。どうぞ、あなたもお好きなようになさってください」

「ありがとうございます。実は、宿所の割当てのことでお願いがあります。一人部屋となっていますが、二人部屋にしていただけませんでしょうか？　わたしと妻のために、です。わたしは妻と——」

「あなたのかつてのご配偶者のことでしょう。天国では結婚することも、結婚によって束縛されることもありません」

「何ですって？　一緒に住めないということですか？」

「そのような意味ではないのです。しかし、あなたがた二人が共に〈宿所割当て規則〉の基準に適合しなければなりません。〈交換・再調整事務所〉で相談なさってください。必ず二人が一緒に行って、共用宿所の証票をもらってくるのです」

「でも、それには問題があります！　わたしは今、妻とはぐれてしまっているのです。どうすれば妻が見つかるのでしょうか」

「それは、この臨時特務係(MOS)の担当ではありません。情報センターでお訊(たず)ねになってください。とにかく、あなたは〈ギデオンの兵舎〉（ギデオンは神命を受け、兵を率いてイスラエルの敵ミデアン人を討った——士師記第六章〜第八章）の一人部屋を使うこと」

「しかし——」

かれ（彼女だろうか？）は溜息をついた。「あなたは、このわたしがすでに何千時間ここに座っているかご存じですか？　一度に何百万人もの被創造者たち……まだ死んでいない生者たちや、再び肉体を与えられた者たち……を養うのがどれほど厄介なことか、ご想像がつきますか？　肉体のある被創造者たちの使う配管工事をするなんて、今回が初めてです——それがどんなに大変なことか、あなたはお分かりですか？　わたしが言いたいのは、配管工事をするということは、配管を必要としている被創造者の言うとおりにしなければならないということです。しかも、そういう連中がここらにうじゃうじゃいる！　ところが、あの連中はわたしの言うことなんて聞きやしない。ふん！　さあ早く、この書類を持って、あのドアを通り、長衣(ローブ)と光輪を受けとってください——ハープは持つのも持たないのもあなたの自由です。その緑のラインをたどっていけば自然に〈ギデオンの兵舎〉へ行けます」

「いやです！」

わたしはかれ（もしくは、彼女）の唇が動くのを見た。ひょっとしたら、この彼女（もしくは、かれ）はお祈りを

したのかもしれない。「そんな格好で天国をうろつくのが礼儀にかなっていると思うのですか？　ずいぶんだらしない格好ですね。わたしたちは生身の被創造者には馴れていないのです。ええと……この前来たのは、たしか預言者エリヤだったと思うが、あなたはかれと同じくらいみすぼらしい姿をしていますね。その汚ならしい着衣を脱ぎすてて、作法にかなった白の長衣を着なさい。それに、ふけだらけの頭髪も何とかしてください」
「いいですか」と、わたしは強い口調で言った。「あなたがたには、このわたしの苦しみが、まったくわかってない。あなたの頭の中にあるのはイエス様のことだけじゃないか。あなたがこの黄金の道路を敷いた汚れ一つない都市で、その清潔な白い長衣を身にまとい、頭の上に光輪をのせてのうのうと暮らしている間、わたしはサタンそのものと、じかに取っ組み合っていたんですよ。そりゃ、今の自分がきちんとした身なりをしていないことはよくわかっています。でも、この格好でここへ来るより他に仕方がなかったんです。それはそうと――剃刀の替刃はどこへ行けば手に入りますか？」
「何ですって？」
「剃刀の替刃ですよ。ジレットの二枚刃か、そのたぐいの……これに合う替刃です」
そう言って、わたしは剃刀を取り出し、それを天使に見せた。「できれば、ステンレスのものが欲しいんですがね」
「天国の物はすべて〝汚れのないもの〟です。しかし、いったい全体それは何なのですか？」
「安全剃刀です。この無精ひげを剃る道具です」
「そんなものがあったのですか？　英知にあふれるわが主は、もしご自分の造りたもう男性被創造者の顔にひげが生えない方が良いとお考えになれば、ひげのない男性を創造なさるはずです。さあ、そのようなものは捨ててしまいましょう」
そう言って天使は、わたしの剃刀に手を伸ばした。
わたしは急いで剃刀を引っこめた。「とんでもない。そんなことをされてたまるもんですか！　さあ、その情報センターとやらがどこにあるかを教えて下さい」
「あなたから見て左の方角へ六百六十マイルほど行ったところです」と天使は答え、ふんと鼻を鳴らした。
完全に頭にきたわたしは、憤然として向きを変えた。小役人め！　天国に来てまで小役人根性に出会うとはね。これでは何を訊いてもむだだろう。相手の言葉の持つ隠された意味に気づいたからである。六百六十マイルという数字は、すでに、あの観光ツアーの始まった時に聞かされてい

た。中央部の諸門（たとえば、今わたしがいるアセル門）から天国の中心部までの正確な距離である。すなわち、父なる神、主神エホバの〈大なる白き御座〉の在るところだ。かれ（もしくは、彼女）は、決して親切心からではなく、わたしに自分の受けている待遇に不満があれば、〈わが主〉に文句を言ったらどうかと示唆しているのである。つまり、「とっとと失せやがれ！」ということだ。

わたしは自分の書類を手に取ってそこを離れ、他に権限のありそうな者はいないかな、とあたりを見廻した。

この大行事を計画したのが大天使ガブリエルなのか天使長ミカエルなのかは知らないが、ご当人はちゃんと、このように天国の諸制度にとまどう被創造者どもが大勢出てくるだろうと予想していたのだ。だからこそ、こうして群集の中に智天使たちを配置しておいたのに違いない。智天使といっても、ミケランジェロやルカ・デラ・ロッビア（陶器像で有名なイタリアの彫刻家）の彫刻を思い浮かべてはいけない。現実の天使は断じて、膝えくぼのある〝あどけない〟幼児なんかではないのだ。どいつもこいつも、新来者であるわれわれよりも一フィート半ほど背が高い――例の〝エンゼル〟に似た姿をし、智天使特有の小さな羽を持ってはいるが、いずれも〈職員〉と記したバッチをつけている。

いや、ひょっとしたら、この連中はただの天使なのかもしれない。わたしには未だに、智天使か熾天使か天使かの区別がはっきりつかないのだ。聖書の世界では、このような事柄をあくまでも自明の事実として扱い、誰でも知っているのが当然だと言わんばかりの方針が貫かれている。また、カトリック教徒どもは天使の階級を九つも並べたてている（熾天使を最高位として、智天使・座天使・主天使・力天使・能天使・権天使・大天使・天使の順である）！　誰が決めたんだ？　そんなことは聖書にも書いてないぞ！

天国に行ったわたしが区別できる階級は二つだけ――天使と人間である。天使たちは自分たちの方が人間より優れていると公言してはばからない。そして実際、かれらは地位と権力と特典の点で、われわれよりもはるかに優位にいる。救済された魂は二級市民なのだ。

プロテスタント（おそらくカトリックでも同じだろうが）のあらゆる宗派のキリスト教徒には共通の思想がある――〝救われた魂は皆、神の御膝の上に安住する〟という確信だ。確かに、人間の魂は救済されて天国へ行く――だが、そのあとで自分が改めて品定めされる新入りの住人にすぎず、天国では最下級の地位にいるという現実を思い知らされるのである。

救済された魂の地位は、まさにアーカンソーに住む黒人並みである。しかも、ほかならぬ天使たちが、その事実を否応なしに人間どもの肌身にこすりこんでくれるのだ。

わたしの出会った天使の中で、好きになれそうなやつは一人もいなかった。

すべて、天使たちのわれわれ人間に対する感情のせいだ。天使の視点に立って、このことを考えてみよう。ダニエル書によれば〝天国には十億人の天使がいる〟と記してある。キリストの復活と携挙の前は、天国もこれほど満員ではなく、住みごこちがよかっただろうし、さぞかし、いい仕事もあったに違いない――たとえば御使(みつかい)の業務や、聖歌隊の仕事や、時どき行なわれる儀式のお手つだいなどだ。当時の天使たちは喜々としてそんな生活を楽しんでいたことであろう。

そこへ、ものすごく大勢の、何百万人(いや、何十億人かな?)もの移住者が次々に押しかけてきた。その中には、家の中で暮らす習慣のない者もいる。しかも、介抱や看護を必要としている者ばかりだ。無限かと思われた長年の楽しい日々の後で、突如として天使たちは超過勤務を強(し)いられ、無数の孤児たちを収容する施設の経営をさせられることになってしまった。かれらがわれわれに好感を抱かぬのも無理のない話だ。

それでも……やはり、わたしはあの天使たちが好きになれぬ。まったくどうしようもない俗物どもだ！

ほどなく、職員バッヂをつけた智天使(ケルビム)(天使(エンゼル)かな？)を見つけたわたしは、もよりの情報センターの在(あ)りかを訊(たず)ねた。相手は親指で肩越しに後ろを指差した。

「この通りを真っすぐ六千ファーロング行くのよ。御座(みくら)から流れ出る河のそばにあるわ」

大通りの向こうへ視線をこらすと、はるか彼方に御座(みくら)にまします父なる神が見えた。まるで朝日のように光り輝いている。

わたしは言った。「六千ファーロングといえば、六百マイル以上もの距離です。この近くにはないのですか」

「被創造者さん、このようにしたのには、ちゃんと、それなりの理由があるのよ。情報センターを町かどごとに設置してみなさい、たちまち被創造者どもがそこに群がってきて、馬鹿げた質問を次々に浴びせかけてくるにきまってるわ。このように遠く離れたところに情報センターを置いておけば、よっぽど重要な質問がないかぎり、わざわざあんなところまで出かけていくひとはいなくなるでしょ」

まさに論理的だ。そして、くそいまいましい。おや、またしてもわたしは天国にふさわしからぬ感情に駆られている。これまでのわたしは常に、天国こそ無上の幸福を保証する場所と心に思い描いていた――これほど現世そっくりのいまいましい所だとは夢にも思っていなかったのである。

わたしは気を静めるために、英語で十まで数え、そのあとラテン語でくり返した。
「あの……飛行時間はどれくらいかかりますか？　速度制限はあるのですか？」
「まさか、あそこへ飛んでいけるとでも思っているんじゃないでしょうね？」
「なぜ飛んでいけないのです？　ついさっき、わたしはここへ飛んできたし、そのあとで、この聖都を飛んで一周しましたよ」
「それはあなたの錯覚よ。現実には、あなたがたの隊長が行なった飛行なの。いい、被創造者さん、あなたがこれ以上、面倒なことを起こさないようあえて忠告しておきますけどね、あなたに翼が生えたあかつきにも――いい、あくまでも仮りにあなたにも、うまく翼が生えたとしての話よ――聖都の上空を飛ぼうなんて気をおこしちゃだめ。たちまち墜落して歯を折るし、せっかく生えた翼まで取り上げられてしまうわ」
「なぜです？」
「あなたがその地位にふさわしくないからよ。そもそも、あなたたちは新参者のくせに、この土地を自分たちのものだと思いこんでいる。うっかり、あなたたちを御座(みくら)に近づけたりしたら、御座(みくら)に自分の名前のイニシャルを彫りこむような悪さをしかねないわ。そうだ、ちょっぴりあなたを賢くしてさしあげましょうか。この天国の住人を律する基本原則は唯一つ――〈ＲＨＩＰ〉だけ。この意味は知ってる？」
「いいえ」と、わたし。実はうすうす分かってはいるのだが。
「教えてあげるからよく聞いてちょうだい。ここでは十戒なんて忘れたっていいの。どうせ実際に使われるのは、あれのうちの二つか三つだけなんだし、ごく普通に生活しているかぎり、それらは破ろうとしたって破れるような戒律じゃないんだから。天国のどこにいても適用される黄金律はね〝位階に相応の特典あり〟（Rank Hath Its Priviledge）――つまり、〈ＲＨＩＰ〉よ。あなたたちは今後、永久に〈神の軍隊〉における新兵なんだわ。一番下っ端の階級よ。最小限の特権しか与えられていないの。ま、唯一の特権は、ここでの存在を認められている――要するに、追い出されない――ということかしら。〈無限の英知を持つわが主〉が、あなたたちはここに入る資格を持つとお定めになった。それだけのことよ。ま、せいぜい、お行儀よくすることね。そうすれば、少くとも、ここから追い出されることはないわ。
さて、次はあなたの質問した交通規則のことですけどね、聖都の上空を飛びまわるのは天使だけってことになってる

の。それも勤務時間中か、儀式の間だけよ。つまり、あなたは許されてないってこと。たとえあなたに翼が生えても、だめ——仮りに、あなたにも翼が生えるものとしての話ですけどね。わたしがあえてこのことを強調する理由はね、天国へ行けばひとりでに人間が天使に変わるんだという誤った考えを抱いてここへやってくる被創造者があまりにも多いからよ。これは間違いなの。そんなことはありえないのよ。被創造者は絶対に天使にはなれない。聖人にはなれることもあるわ——ごく稀れにですけどね。でも、天使には絶対になれない」

わたしは十から逆に数をかぞえた。ヘブライ語で、だ。

「逆らうようで申しわけありませんが、わたしはやはり情報センターに行きたいのです。飛ぶことが許されないとなると、いったいどうやってそこへ行きつけばいいのです？」

「どうして初めから、そう訊かなかったの？　あのバスに乗るのよ」

それから何時間か経ったころ、わたしは〈聖都定期運送〉の乗合バスの座席に座っていた。乗物はゴロゴロと音をたてて遠く離れた御座めざして進んでいる。船の形をしたこの乗物には屋根がなく、後部に出入口が一つある。動力源は何なのかはっきりせず、運転手も車掌もいない。停留所という表示のあるところで停まる。わたしが乗りこんだ所もそのような停留所の一つだった。しかし停める方法はいまだにわからない。

どうやら、聖都の人びとはみんな（個人の乗物を使える地位にあるＶＩＰは別として）、乗合バスを利用しているらしい。天使たちまでが、だ。乗客の大半は人間で、規格通りの白衣を着用し、規定通りの光輪を頭にのせている。だが、中に二、三人、さまざまな時代の服装をしたまま、大きめで上等の光輪をつけている人間がいた。これらの上等な光輪をつけた被創造者たちに対しては、天使たちもかなり丁重な態度をとっている事実に、わたしは気づいた。とはいえ、天使たちはかれらとも一緒には座らず、前方の席にいる。特権階級の人間たちが中ほどの席に座り、一般市民は（わたしを含めて）後部の席に集まっていた。

わたしは、隣りに座っていた一人に、御座まで行くには、どのくらい時間がかかるかを訊ねた。

「存じません」と、相手は答えた。「あたくし、あんなに遠くまで行ったことございませんもの」

どうやら、この魂は女性らしい。中年で、しかも友好的だ。それでわたしはまず、世間話をしかけてみた。

「あなたにはカンザス訛がありますね。そうでしょう？」

その女性は微笑した。「いいえ、そんなことはないと思いますよ。あたくし、フランダースの生まれですもの」
「本当ですか？　すごく英語がお上手ですね」
相手は、静かに首を振った。「あたくし、英語は一度も学んだことなどございませんわ」
「でも――」
「あなたがお驚きになるのはよくわかりますわ。あなた、ここへ着いたばかりのかたでしょう？　天国は、バベルの呪いに冒されてはおらず、ここでは〈言葉の混乱〉が起こりません……あたくし、語学が弱いから、この方が助かりますわ――生前はそれが苦労の種でしたのよ。ここでは、そんなことございません」そう言って相手は、ふと興味を持ったようにわたしを見た。「お訊きしてもよろしいかしら――あなた、どこでお亡くなりになったの……それに、いつ？」
「ぼくは死んではいません」と、わたしは告げた。「生きたまま、携挙にあずかったんです」
相手は目を丸くした。「まあ、すごい！　きっと、よっぽど徳が高くていらっしゃるんだわ」
「そうは思いませんが……どうしてそんなことをおっしゃるんですか？」
「携挙は予告なしに来る――もう来たのかしら？――のでございましょう。少くともあたくしはそう教わりました」
「そのとおりです」
「そうすると、何の予告もなく、罪の告白を行なう暇もなく、助けてくださる司祭様もいらっしゃらないのに……あなたには心の用意ができていたということでございましょう！　聖母マリアと同じくらい罪汚れのないおかたですのね。真っすぐ天に来られたんですもの、高徳のかたに間違いないわ」と、相手は、「そのお召し物を見た時から、あたくし、そう思ってましたの。だって聖人のかたがたは――なかでも、殉教者のおかたは――よく、現世と同じものをお召しになっていらっしゃいますでしょう。お見うけしたところ、聖人の光輪はおつけになっていらっしゃいませんのね。でも、あれはあなた様に与えられた特典でございますのよ」と付け加え、そこで突然恥ずかしそうに申し出た。「あたくしにあなた様のご祝福をいただけませんか？こんなことお願いして、図々しうございますか？」
「シスター、ぼくは聖人じゃないんですよ」
「このあたくしには、ご祝福をいただけないのでしょうか？」
（わが敬愛する主イエスよ、いったい、どうしてこんなことが起こるのですか？）「いま申し上げたとおりです。どう考えても、ぼくが聖人だとは思えません。それでも祝福

をお望みなのですか？」
「あなた様さえよろしければ……聖なる教父様」
「わかりました。頭だけをちょっとこちらへ向けて、心持ち低くしてください――」
ところが相手は完全にわたしの方へ向きなおり、しかもひざまずいた。わたしは相手の頭に片手を置いた。「御子イエス・キリストの真の教会の按手を受けた牧師たるわたしの権限と、聖霊のお力により、信者であるこの女性を祝福いたします。よって願わくば、この者に神のご祝福の下されんことを」
「アーメン！」の合唱がまわりから湧きおこった。かなりの見物人がいたのだ。わたしは当惑した。自分に、こうして天に来てまで祝福を与える権限があるという自信は、これまで一度も持ったことがなかったし、今でもない。だが、この愛すべき女性は、あえてそれをわたしに求め、わたしとしても、どうにも断わりようがなかったのだ。
相手は目に涙を浮かべて、わたしを見上げた。「ああ、あたくしにはわかっておりました！」
「何がです？」
「あなたが聖人様だということが、です。今のあなた様には、それがついていらっしゃいますもの」
わたしが「何がついているのですって？」と言いかけたとき、小さな奇跡が起こった――突然、自分の姿を外側から眺めていたのだ。しわくちゃの汚れたカーキ色のズボンをはき、わきの下に汗のしみをつけた陸軍放出物資のシャツを着こみ、左胸のポケットを剃刀でふくらませている。すでに三日間も剃っていない無精ひげは伸び放題、髪も伸びすぎだ……そして、頭の上にはぽっかりと、洗濯桶ほどの大きさの、光り輝く光輪が浮かんでいる！
「さあ、もう立ってください」と、わたしは自らの驚きを隠して言った。「目立つとまずい」
「はい、教父様」と、相手の女性は答え、さらに付け加えた。「あなた様はこのような後ろの席にいらっしゃるべきではございません」
「それは自分で決めます、娘よ。さあ、今度はあなたの身の上話を聞かせてください」
彼女が再び席についたとき、わたしはまわりを見まわして、前の方に独りきりで座っていた天使とたまたま目を合わせてしまった。かれ（彼女）は、わたしに、前の方へ来るよう手まねきした。
すでに天使に対して十二分に無礼をはたらいているわたしは、最初、その合図を無視した。だが他の者はみなその合図に気づいており、なんとか気づかないふりをしようとしている。そして、畏怖の念に打たれたお隣りさんが、し

つこくささやきかけてきた。
「至徳のご聖人様、あの天使さんがあなた様にお会いしたいご様子です」
　わたしは折れた——その方が丸くおさまりそうだったし、その天使に訊きたいこともあったからである。わたしは立ちあがり、バスの前部へ歩いていった。
「わたしに何かご用ですか？」
「いかにも。あなたも規則はよくご存じのはずです。天使は前方の座席、被創造者は後方座席、そして聖人は真ん中の座席です。あなたが被創造者たちと一緒に後部に座っていると、被創造者たちに対するしめしがつかない。慣習を破ったりしたら、聖人たるあなたの特権も保てなくなりますよ。こんなことは二度となさらぬように」
　わたしは頭の中で、やり返す方法をいくつか考えたのだが、どれもこれも天国にふさわしいものではなかった。それで、そのかわりに質問した。「一つお訊ねしてもよろしいですか？」
「どうぞ」
「御座から流れ出ている河に着くまで、あとどのくらいの時間がかかりますか？」
「なぜそんなことを訊くのですか？　あなたの前には無限の時間があるのに」
「つまり、あなたはそれをご存じないということですか？　それとも教えたくないということですか？」
「さあ早く、しかるべき席に座りなさい。今すぐに！」
　わたしは再びバスの後方へ行き、空席をみつけようとした。だが仲間の人間たちがいつの間にか後部座席をすべて占有しており、わたしの座るスペースはなくなっていた。みな口をつぐみ、わたしの方を見ないようにしているが、こうして天使の権力に大胆な反抗をこころみているわたしを、助けてくれそうな者が一人もいないことは明らかだ。わたしは溜息をつき、中央部の座席に腰をおろした——一人淋しく後光に包まれて、だ。今このバスに乗車中の聖人はわたしだけだったからである。仮りに、このわたしが聖人であるとしての話だが。
　御座に着くまでの時間は、わからずじまいだ。天国では明るさがいつも同じだし、天候の変化もない。それにわたしは時計を持っていなかった。しかし、うんざりするほど長い時間だ。うんざり？　そう——確かに、宝石づくりの壮麗な宮殿は素晴らしい眺めだ。宝石でつくった何十もの、それぞれに趣きの違う宮殿はそれなりに素敵な眺めであるといえよう。だが、そんな宮殿が百マイルにもわたって立ちならんでいれば、眠くなるだけだ。六百マイルも続くと

なると、もはや死ぬほど退屈である。わたしは、中古車がたまらなく恋しくなった。それにダンプカーや、（何といっても）あの広々とした緑の田舎……。

新エルサレムは、完全美の都市だ。そのことは誓って証言してもいい。だが、こんなに長い間バスに乗りつづけていると、醜さとは何かを、いやでも考えさせられてしまう。

誰が聖都を設計したのか、わたしには分からない。神は、このデザインと建設が自明のものだ、と明言しておられる。だが、聖書には設計者（たち）の名も、建築家（たち）の名も出ていない。フリーメーソンたちは、エホバを〈偉大な設計者〉と呼ぶ――しかし、聖書にそう書いてあるわけではない。一度だけわたしは天使に訊ねた。「誰が聖都を設計したのですか？」

相手は、わたしの無知をあざわらわなかったし、たしなめもしなかった――よもや、こんな質問を受けるとは思わなかったらしい。しかし、わたしにとっては疑問がそのまま残った。神は、小さな宝石一つひとつにいたるまでご自身で選んで聖都を創造（設計でも建築でもいい）なさったのだろうか？　それとも、部下の誰かにその仕事を一任されたのだろうか？

誰が設計したにせよ、わたしに言わせれば、聖都には大きな欠点が一つある――このわたしが神の設計を批判するなど、この上なくおこがましい冒瀆行為だと言われたっていい。とにかく天国には何か重要なものが欠けていることは事実なのだ。

公共図書館がないのだ。

あんな威張りくさった天使たちよりも、今の天国には一人の司書の方がよっぽど役に立つ。たとえば、わたしの知っている女司書だ。彼女は図書館で四十年間にわたり、くだらぬ事項も難解な事項も含む、ありとあらゆる問い合わせに親身な応対をしつつ生涯を終えた。この天国にも、あの人のように、聖人のごとき優しさとヨブのごとき忍耐心を持った女性が数多くいるに違いない。しかし、そのような女性が仕事をするためには、本やファイルなどの小道具が必要だ。その用意を整えてあげさえすれば、その女性はきっと、必要なファイルや書物の目録をつくってくれるだろう――しかし、そのための書物はどこで手に入れたらいいのだ？　天国に出版社があるとは思えない。

天国には産業がない。経済がないのだ。エデンの園からアダムとイヴを追放したエホバは、われわれアダムの子孫どもに〝額に汗して日々の糧(かて)を得べし〟と、命じ、それによって経済が創造され、それが約六千年もの間ずっと機能しつづけている。

しかし、この天国では違う。

天国では、われわれの額の汗などなくてもいい神が日々の糧を与えてくださる。実は、誰も日々の糧を必要としていないのだ。飢えることができず、それほど空腹を感じないようになっている——ただ、たくさんのレストランや食事室や軽食堂のどれかに寄って気晴らしをしたいと思うときだけ、その食事を楽しめる程度に空腹になるだけである。たとえば、わたしは聖都の河岸の広場のわきにある小さな軽食堂で、これまでの人生で味わったこともないほどうまいハンバーガーを食べた。しかし——おや、またしても話が横道へそれた。

他にも欠けているものがある——わたしの好みから言えばたいしたことではないが、やはり重要なことだ——それは庭園の不足である。御座のそばを流れる河のほとりに〈生命の木〉の森があり、ほかに少数の、ごく少数の私有庭園があるだけなのだ。なぜこうなっているのか——わたしには、その理由がわかるような気がする。仮りにわたしの考えが正しいとすれば、この状態はそのうち自動的に修正されるはずである。そもそも、われわれ（携挙された人間たちや、甦った聖徒たち）が天に昇ってくる前まで、聖都の住民は、ほとんどすべて天使ばかりだったのである。百万人ほど例外的な住民がおり、それは、殉教者か、キリストの教えを受ける必要もないほど敬虔な生涯を送ったヘブライ人（すなわち、紀元前三〇年以前の人びと）か、あるいは未教化地に生きた、キリストの教えを受けるまでもなく高潔な霊魂だけであった。要するに、聖都の市民の九十九パーセントは天使だったのである。

天使たちは園芸に興味がないようだ。それはわかるような気がする——天使がひざまずいて植物のまわりの土壌に根おおいをほどこしている姿など、想像もつかないからだ。かれらは自分の手を汚さない。バラ作りで賞をもらうために土いじりをするようなタイプではないのだ。

その天使たちが数の上では少くとも十対一の割合で人間に圧倒されている以上、いずれ庭園も増えるだろう、とわたしは思っている——庭園や園芸クラブや土壌調合法の講演など、庭いじりの好きな連中が献身したがる際限のない儀式のすべてが復活するだろう。ここの住人たちには今やそのための時間がたっぷりあるのだ。

天国にいる大部分の人びとが、必要に迫られなくても、やりたいことをやっている。わたしに祝福を頼んだ素敵な女性（スザンヌ）は、生前、フランダースのレース編みを仕事としていた。彼女は今、興味を持つ人びとを対象にレース編み教室を開いている。その話を聞いて、わたしはつくづく思った——大多数の人間にとって本当に問題なのは、この永遠の楽園で時間を潰す方法なのだ（疑問——他の宗

教では一般化している〝輪廻の思想〟が、キリスト教ではタブーになっているのはなぜだろう？ 救済された魂も、結局は否応なしにこの問題に巻きこまれて、その報いを受けることになるのではないだろうか？ その報いを地上で受けるのではないとしたら、いったいどこで受けることになるのだ？ わたしは何が何でも聖書を手に入れて、それを調べなければならない。ところがまったく驚いたことに、ここ天国では、その聖書が恐ろしく手に入りにくいらしい)。

情報センターは、予想どおりの場所にあった。御座(みくら)から流れてくる〈生命(いのち)の水の河〉のほとりだ。風が〈生命(いのち)の木〉の森を吹き抜けてくる。御座(みくら)は、森の中央にそびえているが、その土台に近づきすぎると定かには見えない。ニューヨークの摩天楼を真下の歩道から見上げるような形になってしまう。しかも、こっちの方が摩天楼よりも高い。もちろん、神のお顔は拝めない。千四百四十キューピット も上方にあるのだ。見えるのはまばゆい輝きだけである……それでも、神の存在を感じることはできた。

あの智天使(ケルビム)の言葉から予想したように、情報センターは混みあっていた。質問者は整然とした列を作らずセンターを十重二十重に取り囲んでいる。この群集の中をくぐり抜けてあの相談カウンターに達するには、どのくらい時間がかかるのか見当もつかぬ。バーゲンセールのときによく見られる〝なりふりかまわぬ前進術〟——他人の足のウオノメを踏みつけ、容赦なく肘鉄を食わせて、やみくもに突進し、男性をデパート嫌いにする例の手——を使わずに、あそこへたどり着けるだろうか？

騒々しい群衆を背後から呆然と見つめながら、わたしは何とか対処する方法はないかと考えた。他人の足のウオノメを踏みつけずにマルガレーテを探し出す方法は他にないのか？

そんなわたしに、職員(スタッフ)バッジの智天使(ケルビム)が寄ってきて囁きかけた。

「ご聖人、あの情報センターに行くおつもりですか？」

「そうなんです！」と、わたし。

「わたしと一緒に来てください。すぐ後についてくるのですよ」

その智天使(ケルビム)は警官が暴動を鎮圧するときに使うような長い棒を持っていた。

「さあさあ、道を開けるんだ！ 聖人のお通りだぞ！ こら、早くそこをどかんか！」

ほどなく、わたしは情報カウンターにたどり着いていた。けが人が出たとは思わないが、心を傷つけられた人は大分

いたに違いない。わたしは決して、このような行動が正しいとは思わぬ。待遇は、すべての人びとに対して公正であるべきだ。だが、〈階級優先制(RHIP)〉が建て前となっている世界では、兵卒より伍長の方が偉いのである。
智天使(ケルビム)に礼を言おうと思って振り返ったが、いつの間にか姿を消していた。
一つの声が話しかけてきた。
「ご聖人、何がお知りになりたいのですか」
カウンターの内側にいる天使だ。わたしを見おろしている。
わたしが妻の居場所を突きとめたいのだと説明したとたん、天使はカウンターをドシンと叩いた。
「ここでは、そんなサービスはしていません。そういった問題は、被創造者同士でやっている〈行方不明者捜索所〉というのが扱っています」
「どこにあるのですか」
「アセル門の近くですよ」
「何ですって？　いいですか、わたしはまさにそこから来たのですよ。あそこで住民登録を受けたんですから」
「ご到着のとき、チェック・イン担当の天使に訊ねるべきでしたな。登録を受けたのは最近ですか？」
「ついさっきです。携挙にあずかったんです。あのときも、わたしはちゃんと自分の到着を記録してくれた天使に訊きましたよ。そしたら、かれが……いや彼女が……いや、その天使が無愛想で、ここへ行けと言ったのです」
「ふうむ……ちょっと、あなたの書類を見せてください」
わたしは書類を渡した。受け取った書類を、ゆっくりと慎重に調べた相手は、もう一人の天使を呼んだ。群衆に対する業務を中止し、こちらの成り行きを見守っていた方のやつである。
「ティルル！　これを見てくれ」
二番目の天使は書類に目を通し、重々しくうなずいてから、書類を返してよこし——ちらりとわたしを見ると、いかにも悲しげな表情で首を横に振った。
「何かまずいことでも？」と、わたし。
「いや、ご聖人、こんなことを言ってはなんですが、あなたは運が悪かったのです。あなたのお世話をした天使は、最大の親友すら助けようとしないようなやつでして。いや、本人に親友がいればの話ですがね、親友なんていないんです。しかし、彼女が聖人に対してそんなつっけんどんな態度を取ったというのは少々意外です」
「そのときはこの光輪をつけていませんでしたから」
「ああ、なるほど。それでわかりました。するとあなたは、その後で光輪を受けたのですか？」

「受けたわけではないのです。アセル門からここに来る途中で、奇跡的に手に入れたのです」
「なるほど。ご聖人、あなたは、その〈聖人の光輪〉のことをこの書類に記載する特権があるのですよ。それはそうと、あなたに代わってこのわたしがお問い合わせを遠距離通信器で送ることもできますが……」
「そうしていただいた方がいいと思います」
「わたしもそう思います。長い目で見れば、結局は、あなたのためになります。わたしの言葉の意味がおわかりですか?」
「よくわかります」
「しかし、生活協同組合に連絡をとる前に、聖ペテロのオフィスに問い合わせて、奥さんがご到着なさっているかどうかを確認してみましょう。奥さんはいつ亡くなられたのですか?」
「妻は死んではおりません。彼女も、あの携挙にあずかったのです」
「そうですか。それなら確認も簡単だし、手早くすむ。古い登録簿を調べなくてすみますからね。フルネームと、年齢と、もしあれば性別と死亡の時刻と場所――いや、これは必要ないな。まず、フルネームからいきましょう」
「マルガレーテ・スヴェンスダッテル・グンデルソン」
「綴りを教えていただいた方がいいな」
わたしは、言われたとおりにした。
「今はこれだけで結構です。問題は聖ペテロのところの事務員が、このお名前の綴りをちゃんと書けるかどうかですな。ここでお待ちいただくわけにもいかんな――待合室がありませんので。真向かいに、小さなレストランがあります――あの看板が見えますか?」
わたしは振り返って、そちらを見た。「あの〈聖牛〉ってやつですか?」
「そうです。お食事をなさるのでしたら、いい料理が出ますよ。あそこでお待ちください。呼びにいかせますから」
「ありがとうございます!」
「どういたしまして――」と、天使はもう一度さっとわたしの書類に目を走らせ、それを返してよこした。「――聖アレキサンダー・ハーゲンシャイマー」
レストラン〈聖牛〉は、携挙以来目にするもっとも家庭的で、こぢんまりした居心地の良い軽食堂である。光輪から突き出すようにしてシェフ帽をかぶった長身の黒人が、こちらに背を向けて調理台に向かっている。わたしはカウンターの席につき、せき払いをした。
「まあ、のんびり行きましょうや」と黒人シェフは、やり

かけていた作業を終えてから、ゆっくりと向きなおった。
「いらっしゃ――おやこれは、これは！　ご聖人さん、いったいどんな料理をご所望で？　さ、お食べになりたい物をおっしゃってください。ひと言それを、おっしゃってくださるだけでいいんです」
「ルーク！　あなたに会えるなんて、こんな嬉しいことはない！」
　相手はまじまじとわたしを見つめた。「これまでにお会いしたことがありましたっけ？」
「覚えていないのかい？　ぼくはあなたの所で働いていたのに。ノガリスの〈ロンのグリル〉だ。アレックだよ。あなたの皿洗いをしていた」
　ルークは、再びわたしを見つめ、深々と溜息をついた。
「まんまとかつがれましたよ……聖アレック」
「ただの〝アレック〟でいいよ、友達なんだから。こんなのは、お役所の手違いにすぎんのだ、ルーク。そのうちにお役所がこの手違いに気づくさ。そうすりゃ、このよそ行きの光輪を普通のやつと取り替えてもらうよ」
「お言葉を返すようで申しわけありませんがね、聖アレック、天国で間違いは起こりませんよ。おおい、アルバート！　カウンターを頼むよ。おれは、友達の聖アレックと食堂の席に座るから。アルバートは、うちの副料理長（シェフ）でしてね」
　姿を現わした背の低い太った男とわたしは握手した。まさにフランスのシェフはかくありなんといった風貌の男である。頭上には光輪とともに〈一流の料理人（コルドン・ブルー）〉の帽子を戴（いただ）いていた。ルークとわたしは、部屋の横のドアを通って小さな食堂に行き、テーブルについた。やってきたウェイトレスを見て、わたしはまたしてもショックを受けた。
　ルークは言った。「ヘイゼル、おれの昔なじみを紹介しよう。聖アレックだ――以前、一緒に仕事をしていたんだぜ。このヘイゼルが〈聖牛〉の女主人（ホステス）なんですよ」
「ルークの皿洗いをしてたアレックだよ」と、わたしは言った。「ヘイゼル、お会いできて本当に嬉しい！」わたしは立ちあがって握手をしかけ、ふと思いなおして彼女の肩を抱いた。
　彼女はわたしを見上げて微笑みかけた。驚く様子もない。
「ようこそ、アレック！　今は〝聖アレック〟なのね、なるほど。当然よ」
「ぼくは、ちっとも当然じゃないと思う。これは何かの間違いだ」
「天国で間違いは起こらないわ。マルギーはどこ？　まだ現世で生きてるの？」
「いや、そうじゃない」と、わたしは、マルガレーテと離

れ離れになったいきさつを話した。「だから、今ここで連絡を待っている」
「きっと見つかるわよ」そう言って彼女はわたしに、すばやく、そして優しくキスしてくれた――おかげでわたしは、この四日間剃っていないあごひげを思い出させられた。とにかく彼女を座らせ、自分も友人たちと共に座ることにする。
「きっとすぐに見つかるわよ。だって、それが神の御約束ですもの――〝天国では必ず友人や愛する者たちと再会するであろう〟ってね。〝われら河のほとりにつどいて――〟ですもの。その河が間違いなくあのドアのすぐ外にあるのよ。スティーヴは――ねえ聖アレック、あのスティーヴを覚えてるでしょ？　ほら、あたしたちが出会ったときに、あなたとマルギーと一緒にいた人よ」
「忘れるわけないだろう。あの人は、ぼくたちが進退窮まってた時に夕食をごちそうしてくれ、イーグル金貨をくれた人だ。忘れやしない！」
「それを聞いて嬉しいわ……あのスティーヴはね、自分が心を入れかえて聖徒になって、天国に来られたのは――あなたのおかげだと、信じこんでいるんですもの。あの人、メギド（イスラエル北部の古代都市。ヨハネの黙示録第一六章一六節によるハルマゲドンの行なわれる場所とされている平野）で殺されたでしょ。同じ戦争であたしも死んだのよ。ええと、それは……あなたに会ってから五年くらい後だったかしら――」
「五年だって？」
「そうよ。あたしはあの戦争のわりと初期に殺されたの。でもスティーヴはハルマゲドンの最後まで生きぬいたわ――」
「ヘイゼル……リムロックでスティーヴが夕食をおごってくれてから、まだひと月も経っていやしないよ」
「もっともな話ね。あなたたちの携挙が引きがねになって〈最終戦争〉が始まったんですもの。だから、あなたはあの戦争中の数年間、天空にいたのよ。それで、先に出発したあなたよりも、あたしとスティーヴのほうが早くここへ来てしまったわけね。この話は、またあとでスティーヴとよく議論すればいいわ。あの人、もうじき、ここへくるはずだから。今のあたしはあの人の内妻――つまり、奥さんなの。ただし、ここでは男が女を娶ることも、女が男に嫁ぐこともない（マタイ伝福音書第二二章三〇節、マルコ伝福音書第一二章二三節に、〝天国にては〝娶らず、嫁がず〟とある）んですけどね。とにかく、戦争が始まると同時にスティーヴは軍隊に戻り、戦死したときは大尉になっていたわ。かれの部隊はハイファ（イスラエル西北部の港市）に上陸したんだけど、スティーヴは最終戦争の真っ最中に、主のために戦って死んだの。あたしも、あの人のことを本当に誇りに思っているわ」

「そりゃ当然だね。で、ルーク、あなたもあの戦争で？」
ルークは歯をむき出しにして、にやりと笑った。
「いいや、違うんですよ、聖アレック。おれは絞首刑になったんでさあ」
「まさか！」
「いいや本当です。連中は合法的に、おれを絞り首にしたんですよ。あんたがおれの所を辞めたときのこと、まだ覚えていますか？」
「あれは辞めたわけじゃないんだ。ある奇跡の干渉を受けて……」
「ううむ……どうやらあんたの方が奇跡にはお詳しいようだな。とにかく、おれたちはすぐに代わりの皿洗いを捜さなけりゃならなくなり、一人のチカノを雇った。いやあ、あんた、そいつが本当に間抜けな悪党でね。よりによって、このおれにナイフを突きつけやがった。どう見ても、あれはやつのミスだね——調理場で仕事中の板前にナイフを突きつけるなんて！　やつはおれにちょっぴり切り傷をつけ、おれはやつを正確に切り裂いちまった。陪審員どもは大部分が、やつのいとこだったらしい。地方検事は、見せしめのためにもこのおれを極刑に処すべし、と判決した。でもね、あれでよかったんですよ。おれはだいぶ前に洗礼を受けていたからね。刑務所の教戒師の助けを借りて聖徒になったってわけでさ。いよいよ絞首台の上にのせられて首に縄を巻かれたとき、おれはまわりのやつらに堂々と説教をしてやったぜ。そのあとで、こう言ったんだ——〝さあ、やってくれ！　このおれをイエスの御もとに送ってくれ！　ハレルヤ！〟ってね。それで、やつらはおれの言うとおりにした。ありゃ、おれの一生のうちで一番楽しい瞬間でしたぜ！」
アルバートがドアから首を突き出した。「聖アレック……あなたに天使が会いにきていますが」
「すぐ行きます！」
その天使はドアの外で待っていた。戸口よりも背が高く、また本人は身をかがめることをいさぎよしとしなかったかららしい。
「聖アレキサンダー・ハーゲンシャイマーですね？」
「そうです」
「マルガレーテ・スヴェンスダッテル・グンデルソンなる被創造者に関するお問い合わせの件ですが……報告書にはこう書いてあります——〝この者はあの携挙にあずかっておらず、その後のどの徴募案でも対象とされていない。したがってこの被創造者マルガレーテ・スヴェンスダッテル・グンデルソンは現在、天国にはおらず、また将来も天国に来る予定はない〟以上です」

23

われ汝(なんじ)にむかいて呼(よば)はるに汝答(なんじこた)えたまわず
我立(われた)ちおるに汝只(なんじただ)われをながめ居(い)たまう

ヨブ記第三〇章二〇節

それで結局、ユダ門のところの聖ペテロの事務所でかたをつけねばならなかった――天国中を走りまわらせられたあげくにだ。ヘイゼルのアドバイスに従ってわたしはアセル門に戻り、生活協同組合の看板を見あげた。〈行方不明者捜索所〉

「聖アレック、天使は間違った情報は提供しないし、かれらが調査する記録も正しいのよ。だけど、違う記録を調べたのかもしれないでしょう。それにあたしは思うんだけど、天使たちは、あなたが自分で捜すほど丁寧には調査しなかったんじゃないかしら――天使は、結局、天使ですもの。マルギーが旧姓で記録されていたのかもしれないし」

「ぼくは旧姓を言ったんだぜ！」

「あら、そう。あたしは、また〝マルギー・グレアム〟を捜してほしいって頼んだのかと思ったわ。違うのね」

「うん。もう一度行って、頼むべきだろうか」

「そんなことないわ。まだ打つ手はあるわよ。調べたいなら――どうしても、そうしなきゃならないなら――あの情報センターに戻って、もう一度同じことを訊く必要はないわ。直接、聖ペテロの事務所へ行きなさいよ。あそこなら、天使ではなく他の人間から個人的な世話をしてもらえるわ」

「それはいい！」

「そうでしょう。でも、先に〈行方不明者捜索所〉に行くといいわ。あそこはお役所じゃないの。ボランティアの人たちでやってる組織よ。みんな親切に世話してくれるわ。あとで死んだスティーヴが先に来ていたあたしを見つけたのもあそこよ。かれはあたしの姓を知らなかったの。生前も結構長いつき合いだったのに、一度も姓を名のったことがなかったのね。それに、あの人は、あたしが死んだ日も場所も知らなかったのよ。でも〈捜索所〉の小柄な老婦人が、スティーヴが〝大当り(ビンゴ)〟って言うまで、ヘイゼルって名の女性を調べつづけてくれたんですって。もしかれが住民管理事務局――聖ペテロの所よ――にチェックを頼んで

いたら、〃データ不充分……よって確認不可能〃なんて報告しか出てこなかったはずよ」

ヘイゼルは微笑をうかべ、さらに話を続けた。「でも、協同組合の人たちは、想像力を働かせてくれるわ。死ぬ前だって会えなかったあたしとルークを会わせてくれたんですもの。やがて遊び暮らすのに飽きたあたしは、小さなレストランを経営しようと決心したの——いろんな人に会って、お友達になるのには、これが一番いい方法ですものね。その時も協同組合に頼んだのよ。コンピューターを〃料理人〃にセットして、何度も試行錯誤をくり返して、さまざまな人を選り分けたあげく、あたしとルークを組み合わせたの。その結果パートナーとなったあたしたちは、この〈聖牛〉を始めたのよ。同じような照合を経て、アルバートもここに来たのよ」

ヘイゼルは、ケティ・ファーンズワースのように、そこにいるだけで心をいやしてくれるタイプの女性だ。しかも彼女は、わたしの大事なマルガと同じように、物事を実務的にてきぱきと処理するタイプでもあった。彼女は、いそいそとわたしの汚れた衣服を洗濯し、それが乾くまでの間、スティーヴの長衣を貸してくれた。つづいて、鏡と石鹸を持ってきてくれる。やれやれ、やっとこれで五日間(七年間だろうか?)分の無精ひげとおさらばできる。たった一枚きりの替刃は、もう、のこぎりに近い状態になっていた。それでも、三十分かけて辛抱強くタンブラーの内側で研ぐと(これは神学校でおぼえた技術だ)、どうやら使えるようになった。

ところが、ほんの二時間前に剃った——いや剃る試みをしたというべきか——にもかかわらず、今のわたしはもう本格的なひげ剃りを必要としている。マルガレーテを求めてこの捜索を始めて以来、いったいどれだけ時間が経過したのかは分からないが、四回ひげを剃ったことは確かだ……すべて冷水を使い、二回は石鹸なしで、一回は手さぐりで——つまり、鏡もなしで——だ。確かに、われわれ肉体を持つ住民のための水道管はきちんと配管されてはいる……しかし、その設備の質はアメリカの標準には遠く及ばぬ代物だ。それも当然だ——天使たちには水道管は必要ないし、肉体を持つ人間も、その圧倒的多数が、水道のある家に住んだ経験などほとんど、あるいはまったくない者ばかりなのだから。

協同組合の人びとは確かにヘイゼルの言うとおり親身になって助力してくれた(これは別にわたしが立派な光輪の持ち主であるからだとは思わない)。しかし、マルガレーテを捜す手がかりになるようなことは、何ひとつ発見できなかった——わたしの考えうる限りのデータの組合わせを

辛抱強く調べてくれはしたのだが。

わたしは礼を言い、その人たちを祝福してから、ユタ門に向かった。天国を横切る三百二十マイルの行程である。途中一度だけ、御座の広場のところで立ち止まった。ルークの作る天国バーガーと、新エルサレム一うまいコーヒーを味わうためだ。ヘイゼルに励まされ、気をふるいたたせたわたしは、さらに、もどかしい捜索を続けた。

〈天国住民管理事務局〉は、門を入って右手の二つの巨大な宮殿を占有している。手前の小さめの方が、紀元前の入国者用だ。そしてもう一つが、それ以後における入国者用で、二階に聖ペテロの執務所がある。わたしは、まっすぐそこへ行った。

大きな両開き扉に〈聖ペテロ——どうぞ、お入りくださ い〉と書いてある。わたしはその言葉に従った。だが、その中は執務室ではなかった。グランド・セントラル駅がすっぽり入るほど広大な待合室である。スロットからチケットを引き抜くと自動的に回転扉が開く。通りぬけるときには、機械の声が「いらっしゃいませ。お呼びするまで、お掛けになってお待ちください」と声をかけてくる。

わたしのチケットの番号は、二〇一三番だ。この待合室はそれだけの人数で混み合っているというわけである。空席を探しながら、わたしは、自分の番がくるまでにまたひげ剃りが必要になるな、と思った。

空席が見つけられずにいるうちに、一人の修道女が忙わしない足どりでわたしに近づいてきた。ちょこんと膝を折って一礼してくる。

「ご聖人様、何かご用でございましょうか？」

カトリックの衣装に詳しくないわたしには、彼女がどの修道会に属しているのかは分からないが、いかにも〝典型的な〟修道女の服装をしている——長袖で、足首まで届く長くて黒いワンピース……胸と首と耳のまわりを覆う糊のきいた白い被り布……その上からさらに全身を包む黒い薄布……そのスフィンクスのような姿の首にぶら下がる大きなロザリオ……穏やかな年齢不詳の顔に、不釣り合いな鼻めがねが目立つ。そして、もちろん、光輪。

わたしが何よりもショックを受けたのは、この女性が天国にいるという事実である。カトリック教徒でも救済されるという証拠を初めて目にしたのだ。神学校の深夜討論会で、よくこの問題を論じ合ったものだ。教会の公式見解は〝われわれと同じように神を信じて、イエスの聖徒となれば、何びとたりとも救われる〟というものであった。わたしは、ふと、彼女がいつ、どうしてイエスの聖徒となったのかを訊いてみたいと思った——きっと、わたしを勇気づ

けてくれるような話が聞けるはずだ。
わたしは言った。「おや、ありがとう、シスター！　ご親切にどうも。ええ、あなたに助けてほしいことがあるんです──つまり、助けていただければありがたいのです。わたしはアレクサンダー・ハーゲンシャイマーといい、妻の居どころを探しております。ここで調査していただけるんですよね？　実は、わたしは新参者でして」
「はい、聖アレキサンダー、ここはそのための場所です。でも、あなた様は、聖ペテロにお会いにいらしたはずです、そうではありませんか？」
「できればご挨拶したいですね。あのかたがそれほどお忙しくなければ」
「あのかたも、きっと、あなた様にお会いになりたいと思っていらっしゃるはずですわ、聖なるご教父様。お見えになったことを、上司のシスターに話してみます」と、彼女はロザリオの十字架をつまみ上げた。明らかにロザリオに向かって小声で話しかけている。やがて顔を上げた。「お名前のスペルはHERGENSHEIMERでよろしいのでしょうか、聖アレキサンダー？」
「そのとおりです、シスター」
彼女は再びロザリオに話しかけてから、わたしに対する言葉をつづけた。「聖ペテロの秘書はシスター・マリー・チャールズです。わたくしはその助手で、雑用係をつとめておりますの」と、彼女は微笑し、「シスター・メアリー・ローズと申します」
「お会いできて嬉しいですよ、シスター・メアリー・ローズ。あなたのことをうかがわせていただけませんか──あなたは、どの修道会のかたですか？」
「ドミニコ会です、聖なるご教父様。生前はドイツのフランクフルトで病院の管理事務をやっておりましたが、ここでは看病の必要がありませんので、今はこの仕事をしております。わたくし、いろいろな方と接するのが好きなのです。さ、どうぞ、わたくしと一緒においでくださいますか？」
群衆は、紅海の水のように分かれて、道を開けた──この修道女に対する敬意のゆえか、それとも、わたしの派手な光輪のゆえかは不明である。ひょっとしたら、両方の理由からかもしれない。わたしは、表示のない横のドアの前に連れていかれた。中へ入ると、そこはメアリーの上司であるシスター・マリー・チャールズのオフィスだった。こちらは長身の修道女で、背丈がわたしと同じくらいある。しかも実に堂々としていた──「美しい」といった方が正確かもしれない。外見は助手よりも若い……それにしても、修道女に対してどんな言葉づかいをすればよいのか？　相

手は、ばかでかいデスクについている。そのデスクの上に書類がうず高く積み上げられ、わき机には型の古いアンダーウッド・タイプライターが置いてあった。すばやく立ち上がったシスター・マリー・チャールズは、わたしの顔を見るなり、片足をうしろへ引いて身をかがめる例の奇妙なおじぎをした。

「ようこそいらっしゃいました、聖アレキサンダー！　お越しいただいて光栄でございます。聖ペテロはすぐ参りますので、どうぞお掛けください。お飲物はいかがですか？　ワインでも？　それともコカ・コーラ？」

「じゃあ、コカ・コーラをお願いします！　地上を離れて以来、まだ一本も口にしていないんです」

「はい、ではコカ・コーラを、すぐに」と、彼女はにっこり笑った。「秘密を一つお教えしましょうか――実は聖ペテロもコカ・コーラがないといられないかたなんですのよ。それで、わたしたちは常にコカ・コーラを氷で冷やして用意しておりますの」

彼女のデスクの上の空中から、一つの声が聞こえてきた――太く響く、力強いバリトンで、説教向きの声だ。あのブラザー・〝バイブル〟・バーナビー（かれの名も祝福されんことを！）の声に似ている。「聞こえたよ、チャーリイ。そのおかたにコーラを持ってこちらへ来ていただきなさい。今、からだが空いたところだ」

「また盗みぎきなさったのですか、ボス？」

「生意気なことを言うんじゃないよ、いたずら娘め。あ、それからわしにもコーラを持ってきてくれ」

案内されて中に入ると、聖ペテロは立ち上がり、片手を差し出して元気よく大股に入口に出てきた。わたしの教わった教会史では、亡くなったとき――聖ペテロは九十歳だったと信じられている。もしこの人が死刑になったのだとしたら、そんなことをしたのはローマ人であろう（説教は元来、常に、危険の伴う仕事なのだが、ペテロの時代の聖職者は特に、現代の海兵隊を指揮する下士官と同じくらい危険な職業であった）。

聖ペテロは、一見いかにも頑健で、元気に溢れ、六十代か、せいぜい七十代の感じである――屋外の生活に慣れた男らしく、よく日焼けした肌を持ち、強い日ざしによるしみができていた。頭髪もあごひげも伸び放題で一度も刈ったことがないらしい。ところどころに白髪とまではいかないが、灰色の毛が混じっている。頭は（驚いたことに）明らかに、かつて赤毛だった形跡を残していた。筋肉は隆々としており肩幅も広い。手には胼胝ができていた――これは、握手して気づいたのだ。サンダルをはき、粗末な羊毛

の茶色い長衣を着ており、わたしのと大差ない光輪をつけ、ふさふさの頭髪の真ん中にスカルキャップ（頭にぴったり合う縁なし帽）を、ちょこんとのせている。
わたしは、ひと目でこの聖人が好きになった。
聖ペテロは、自分用の事務椅子のかたわらに置かれた安楽椅子にわたしを掛けさせてから、自分も腰をおろして椅子の背にもたれた。シスター・マリー・チャールズが、盆に二人分のコーラをのせて、われわれのすぐ後についてきた。おなじみの、中心部のくびれたボトルと、最近では珍しい（目にするのは、まさに何年ぶりかである）登録商標が入ったチューリップ・グラスである。天国ではいったい誰が独占販売権を持ち、どんな商売をやっているのだろう？
聖ペテロは言った。「ご苦労さん、チャーリイ。電話はつなぐなよ」
「たとえ、あのお方でも？」
「ばかなこと言うんじゃないよ。さあ、向こうへ行った、行った」
やがて、聖ペテロはわたしの方へ向きなおった。
「聖アレキサンダー、わしは新しく天国に到着した聖人には直接ご挨拶するよう努めているんだがね。どうしたわけか、きみには会いそこねたようだ」
「わたしが着いたときは、大勢の人間と一緒でしたからね、聖ペテロ。例の携挙にあずかった者たちです。それに、天国に入ったのも、この門からではありませんでした。アセル門だったのです」
「なるほど、それでわかった。あの日、ひどく忙しくてな、まだ整理がついておらんのだ。しかし、聖人は中央門に案内されるはずだぞ……二十四人の天使と、二人のラッパ手が付いて、な。あとで、わしが詮議しなければならん」
「聖ペテロ、率直に申しますと」と、わたしはいきなり切り出した。「自分が聖人だとは思いません。でも、どうしてもこの派手な光輪を外すことができないのです」
聖ペテロは首を振った。「きみは聖人だよ、立派にね。自分から不信の念に悩んじゃいかん。どの聖人だって、自分が聖人だなんて少しも思ってはいない。他の人からそう言われなければならんのだ。〝自ら聖人だと思うものは聖人ならず〟、というのが神聖なパラドックスでな。なあに、わしだって、ここに着いた当座は、いくつも鍵を手渡されて、自分がここの管理者だと告げられても、とても信じる気にはなれなかったもんさ。てっきり、わしらがガリラヤ湖のあたりで伝道活動をしていた時に口にしたジョークのお返しに、わが主がこのわしをからかっておられるのかと思ったね。ところがどうだ！　主はご本気であられた。老

漁師ヨナ（ペテロの父）に反抗する使徒(ラビ)シモン（ペテロの本名）はどこかへ消えて、あれからずっとわたしは聖ペテロさ。きみが好むと好むまいと関係なく、きみが聖アレキサンダーなのと同じだよ。そのうちにきみも、それが気にいるようになるさ」

そう言って聖ペテロは、デスクの上の部厚いファイルをトントンと叩いた。「きみの記録を読んでいたところだ。きみの高潔さについては、疑いなしだ。きみの記録を調べてすぐに、きみの試練のことを思い出したよ。きみの列聖反対検事（聖者に列せられるべき候補者について、その事績・人格に落度がないかどうかを論告する）は、トマス・アクィナスだ。トマスはあとでわしの所へ来て、自分の攻撃はあくまで形だけのもので、きみがここへ来る資格があるかどうかについてはいささかも疑念を持ってはおらぬ、とぬかしおった。どうだった、例の最初の奇跡は？　あの火による試練だよ――きみの信心はぐらついたかね？」

「ぐらついたと思います。あれのおかげで、火ぶくれが一つできました」

聖ペテロは鼻を鳴らした。「火ぶくれがたった一つだって！　それなのに、きみは、自分に聖人の資格がないと思っているのかね。いいかね、聖女ジョーンがきみのように固い信仰心を持っていたら、火あぶりで殉教することもなかったんだよ。わしの知るかぎり――」

シスター・マリー・チャールズの声が、告げた。「聖アレキサンダーの奥様が見えました」

「こちらへご案内しろ！」と聖ペテロは命じ、それから、わたしにこう言いそえた。「話の続きはあとでな」

わたしは、かれの言葉をほとんど聞いていなかった。胸がいっぱいだったのだ。

ドアが開いた。入ってきたのは、アビゲイルだった。

それからの数分間のことは、とても言葉では表現できない。胸も張り裂けんばかりの失望感と、狼狽が合体した、とでも言えばいいのだろうか。

アビゲイルはわたしを見るなり、激しく食ってかかってきた。「アレキサンダー、そんな馬鹿でかい光輪をつけて、一体全体(イン・ザ・ワールド)どういうつもり？　すぐ取りなさいよ！」

聖ペテロが遠雷のような重々しい声で言った。「これ、娘、今のおまえは〝現世にいる(イン・ザ・ワールド)〟のではないんだぞ。このわしの執務室にいるのだ。聖アレクサンダーに対して、そのような口のきき方をしてはいかん」

聖ペテロを見やったアビゲイルは、フンと鼻を鳴らした。「このひとが聖人ですって？　それにね、あんた、〝レディの前では席から立つものだ〟ってことをおかあさんから教わらなかったの？　それとも、聖人はそんな細かいこと

に気を使わなくていいってわけ？」
「わしだって、ちゃんと立つさ——相手が本当のレディだったらな。さあ、娘よ、このわしに敬意をこめて挨拶をしなさい。そして、自分の夫には、妻が夫に対してはらうべき敬意をこめて話しかけるのだ」
「その人はあたしの夫じゃないわ！」
「ええ？」聖ペテロは彼女からわたしへ視線を移し、また戻した。「いったい、どういうことかね？」
「イエスもおっしゃってます——〝それ人よみがえりの時は娶らず　嫁がず　天に在る御使たちの如し〟（マタイ伝福音書第二二章三〇節）って。そうでしょう！　マルコ伝福音書の第一二章二三節にもそう書いてあるわ」
「そのとおり」と、聖ペテロは同意した。「わしも確かにイエスがそうおっしゃるのを聞いた。サドカイ人に向かっておっしゃった御言葉だ。あの原則によると、おまえはもう妻ではないな」
「そのとおりよ、ハレルヤ！　長い間、あたしはその間抜け男を家から追い出したいと思いつづけてきたのよ——何とか罪を犯さずに追い出したいと……」
「後半の部分については、わしにもよく分からん。だが、妻でなくなったからといって、元の夫たるこの聖人に対し、礼儀正しい言葉使いをしなくてもいいということにはならんぞ」そう言って聖ペテロは、わたしに向きなおった。
「きみは、この女性にとどまってもらいたいのかね？」
「わたしが？　いいえ、まさか！　これは何かの手違いなんです」
「どうやらそうらしいな。さあ娘よ、もう向こうへ行ってよろしい」
「ちょっと待ってよ！　ここに来る途中、あんたに言いたい文句を山ほど考えてきたんだから。ここのまわりでは、まったく恥さらしのことばっかり行なわれているのよ。なにさ、良識のかけらもないじゃないの——」
「娘よ、わしはおまえに退去を命じたのだぞ。自分の足で出ていくかね？　それとも、体格の良い天使を二人ほど呼んで、おまえを放り出させようかな？」
「それ、それ、それよ！　あたしが言いたいのはね、つまり——」
「つまりも、へったくれも許さん！」
「だけど、あたしにだって、みんなと同じように思ってることを言う権利はあるのよ」
「この執務室ではだめだ。おい、シスター・マリー・チャールズ！」
「はい、ご主人さま！」
「きみは、デトロイト警察で働いていたときに教わった柔

道を、まだ覚えてるかね？」
「覚えてますとも！」
「このおしゃべり女を放り出してくれ！」
長身の修道女はニヤリと笑い、ポンポンと両手のほこりを払った。次に起こった出来事はあまりにもすばやく、何がどうなったのか、定かには分からない。だが、アビゲイルの姿は、まったく突如として消えた。
聖ペテロは椅子に座って後ろへもたれ、溜息をついてコーラのグラスを手にとった。
「まったく、ヨブの忍耐を試すのにでも使えそうな女だな。結婚して何年になるかね？」
「ええと——一千年ちょっとですかな」
「その気持ちは、よく分かる。なぜ、あんな女を呼びにやらせたりしたのかね？」
「そんなことはしてません。つまり、そんなつもりじゃなかったんです」わたしは何とか事情を説明しようとした。
聖ペテロはわたしの言葉を遮った。「そりゃそうだろう！　なぜ初めから、内縁の妻を捜していると、はっきり言わなかったのかね？　メアリー・ローズが誤解したのは、きみのせいだぞ。よしよし、きみが本当は誰を捜しているのか、わしにはよく分かっとる——きみに関する書類の後半に登場しつづけるグラマーな非ユダヤ教徒の女性だろう。わしが見ても、とても可愛い女の子だよ。あの娘を捜しているんじゃろうが」
「はい、そのとおりです。〈最後の喇叭〉と〈大いなる声〉が響いた日に、われわれは一緒に救いあげられました。ところが、あの旋風が——まさに本物のカンザスの竜巻きが——あまりにも激しく、われわれは離ればなれになってしまったのです」
「きみは、前にも一度、その女性の消息を問い合わせているな。ほれ、例の河のそばの情報センターから中継されてきたやつだ」
「ええ、確かに」
「アレキサンダー、その問い合わせがきみのファイルの最後の記載事項だ。わしは、もう一度調査を繰り返させることもできる……だがあらかじめ言っておくが、その結果は同じ事実を確認させることだけにしかならん。同じ答えが返ってくるに決まっているんだ——要するに、彼女はここにはいないってことさ」
聖ペテロは立ち上がり、ぶらぶらと歩み寄ってきて、わたしの肩に手をおいた。「よくある話さ。わたしはこれと似たような悲劇を際限なく見聞きしてきた。愛し合うカップルがおり、二人は永遠に一緒にいられるものと固く信じておる。ところがある日、一人はこの天国へ来、もう一人

は来られなくなる。わしに何ができる？　わしだって何とかしてやりたいさ。でも、不可能だ」
「聖ペテロ、これは何かの手違いなんです！」
　相手は答えなかった。
「どうか聞いてください！　わたしは知っているんです！　彼女とわたしは並んで聖歌隊席の手すりのところにひざまずき、祈っていました……すると、〈喇叭〉と〈大いなる声〉の聞こえる直前に聖霊がこっちに近づいてきて、わたしとマルガを完全な聖徒として救いあげてくださったのです。うそだと思うなら、聖霊に訊いてください！　どうぞ訊いてみてください！　聖霊もあなたの言うことには耳をお貸しになるはずです」
　聖ペテロはまたしても、溜息をつき、「聖霊は誰にでも、どんな見解にも耳を貸すよ。でも、ま、とにかく問い合わせてみよう」と、アレキサンダー・グラハム・ベルが組み立てたような古めかしい電話器の受話器をとった。
「チャーリイ、例の幽霊さんを出してくれ。オーケー、待つよ。やあ！　こちらピートです。相変わらず中央門にいます。何か新しいニュースは？　ない？　こっちもありませんな。ちょっと聞いてください、問題が起きたんです。例の〈大いなる声〉と〈喇叭〉の日のことを思いだしてくださいませんか。あなたが御子として、肉体化した魂の中から当時すでに聖徒だった連中を全員、生きたまま拾い上げなさった時のことです。北米のカンザス州のローウェル街道の広場にご自身を置いてみてください――カンバスのテントの中で、リバイバル集会をやってるでしょう？　お分かりになりますか？　それじゃ、〈最後の喇叭〉の少くとも二、三フェムト秒前に行ってください。実はアレキサンダー・ハーゲンシャイマーという新しい聖人の申し立てによりますと、そのとき、あなたがこの当人とその最愛の内縁の妻マルガレーテの上にご降臨なさったそうですね。その女性は、身長約三キュービット半、ブロンドで、そばかすがあって、八〇ミナ（ミナはギリシャの重量単位）だそうです……おや、確かにご降臨なすった？　ああ、すると遅すぎたわけですな？　実はわたしも、そんなことじゃないかと思っていました。さっそく、本人にそう伝えます」
　わたしは聖ペテロの言葉をさえぎり、急いで囁きかけた。
「主に彼女の居場所を訊いてください！」
「実はね、ボス、この聖アレクサンダーが非常に苦悩いたしておりまして、しきりに彼女の居どころを知りたがっているのです。はあ、そうですか。じゃ、本人にはそう伝えます」と、電話を切った聖ペテロは、わたしに告げた。
「天国にも地上にもいないそうだ。言わなくても、答えは分かるだろう。まことにお気の毒だがね」

聖ペテロは、わたしに対して、かぎりなく我慢強かった。それだけは明言できる。かれは、わたしが三位一体のどなたとでも話ができると請けあってくれた……ただし、聖霊と相談するときは、かれらすべてと相談していることになるのだ、と言う。聖ペテロは、携挙にあずかった人びとのリストと、開いた墓から出てきた人びとのリストと、その後到着した人びと全員のリストを改めて調べなおしてくれた——その一方で、どんなコンピューターだろうと、神ご自身が聖霊として口にされた御答えの絶対的な正当性を否定することはできないはずだ……とも言う。そのことはわたしにはよく理解できたし、当然だと思った。何よりも、聖ペテロ自身がやりなおしてくれたことがありがたかった。

わたしは言った。「しかし、地上はどうなんです? 彼女が地上のどこかで……ひょっとしたらコペンハーゲンあたりで……生きている可能性はあるんじゃないですか?」

ペテロは答えた。「なあアレキサンダー、神は天国でも地上でも全能なんだよ。きみには、それがわからんのかね?」

わたしは、深々と溜息をついた。「わかりました。どうやらぼくは明白な事実を避けつづけていたらしい。ようし……ここから地獄へ行くのにはどうしたらいいのか、教えてください」

「アレック! そんなこと言うもんじゃない!」

「わたしだって、こんなことを言いたいわけじゃありませんよ! ねえペテロ、このわたしにとっては、彼女なしで過ごす永遠の時間なんて、絶対に永遠の至福じゃないんです。退屈と、孤独と、深い悲しみがあるだけの永遠です。最愛の人が地獄で火あぶりになっていると知った以上——そうだ、それをわたしに確信させたのは、あなたなんですよ! このくそいまいましい派手な光輪など、くそくらえです! わたしはそれほど多くを望んでいるわけじゃない。ただ、彼女と一緒に生活することを認めてもらいたいだけなんです。わたしは、永遠に皿洗いをしたっていいんです——彼女の笑顔を見、声を聞き、その手に触れていることができさえすれば! 彼女がここにいないのはあなたがたの杓子定規な考えかたのせいです。しかもあなたはそのことをよくご存じなんだ! あの小役人根性の性悪な天使どもは、天国で暮らすにふさわしいような立派なことは何ひとつしていない。それなのに、やつらはここでのうのうと暮らしている。もしこの世に天使が存在するとすれば、あのマルガこそ本当の天使です。ところが、そのマルガが、子供じみた規則によって天国から閉め出され、地獄へ送りこまれて永劫に続く責め苦を受けているとはね! 父なる

神と、口のうまい御子、こそこそした聖霊に言ってやってください――このけばけばしい天国なんて、どうとでも好きなようにしたらいい、とね！　マルガレーテが地獄にいなければならんとなれば、このわたしのいたい場所も地獄だ！」

　聖ペテロはお祈りをささげている。「父よ、この男をお許しください。この男は苦悩のあまり熱に浮かされているのです――自分の言っていることがわからないのです」

　わたしは少し声を落とした。「聖ペテロ、わたしは自分が何を言っているのか、ちゃんとわかっています。ここにいたいとは思いません。最愛の人が地獄にいる以上、わたしもそこへ行きたいのです。行かなければならないのです」

「アレック、時が経てば、そんなことは忘れられるよ」

「当のわたしが忘れたくないと言っているのですぞ。わからんのですか。愛する者と共に生き、運命を分かち合いたいのです。あなたが教えてくれたんですよ、彼女は地獄にいるって」

「いや、わしは、彼女が天国にも現世にもいない、と言っただけだ」

「すると第四の場所があるのですか？　リンボ（洗礼を受けなかった幼児や、キリスト降誕以前に死んだ善人の霊魂が、死後に住むところとされている、天国と地獄の中間にある場所）か、なにか？」

「リンボは神話にすぎん。わしの知るかぎり、第四の場所はない」

「それでは、やはり、わたしは今すぐにここを出て、彼女を探して地獄中を歩きまわりたい。どうすればいいんです？」

　聖ペテロは肩をすくめた。

「畜生め！　今度はごまかされないぞ！　あの火渡りの日以来、ぼくはただ――あっちへこっちへと、たらいまわしされつづけてきただけじゃないか！　ぼくは囚人ですか？」

「そんなことはない」

「じゃあ、地獄へ行く方法を教えてください」

「よくわかった。その光輪をつけていたら、地獄へは行けない。向こうの連中が入れてくれないはずだ」

「こんなもの、一度だってほしいと思ったことなんかありませんよ。ようし、行くぞ！」

　間もなく、わたしは二人の天使に付き添われて、ユダ門の門口に立った。聖ペテロはわたしに対する別れの言葉を口にしなかった。かなり気を悪くしているようだ。そのことについては、申しわけないと思った――わたしはこの男がとても好きだったからだ。だが結局、マルガレーテのい

ない天国は、わたしにとっては天国でないという事実をどうしても理解してもらえなかった。

　わたしは、あと一歩というところで立ちどまった。

「一つだけ、聖ペテロに伝えてほしいことが——」

　二人の天使はわたしの言葉を無視して、両側からわたしの身体をつかみ、そのまま投げ捨てた。

　わたしは落ちた。

　ぐんぐん落ちつづけた。

24

ねがわくは神をたずねて何処にか遇まつるを知り
其御座に参いたらんことを
我この愁訴をその御前に陳べ口を極めて弁論わん

ヨブ記第二三章三節〜四節

　そして、さらに落ちつづけた。

　現代人が〝永劫〟を相手にして最も困惑させられるのは、時間がつかみにくくなるという現実だ。時計もカレンダーも、昼夜の別も、月の満ち欠けも、劇的な季節変化もない。こうなると、時間の継続感がどうしても主観的になり、〝今は何時か？〟が事実ではなく、個人的見解の問題になってしまう。

　二十分以上落ちつづけたように思う。少くともあの時間が二十年だったとは思わない。

　でも、そのどっちにも金を賭けるほどの確信はない。

見えるのは目玉の内部だけで、他には何もない。次第に遠のいているはずの聖都さえ見えなかった。
　初めのうち、わたしは自分の人生の中で一番楽しかった時代を思い出して気晴らしをしようとした——その結果、気づいたことは、楽しいことを思い出すと悲しくなるという事実だ。それで今度は悲しかったことについて考えた。結果は、さらにひどいものだった。やがて、わたしは眠った。いや、眠ったと思ったのかもしれない。感覚をまったく失った人間に、どうしてその区別がつこう？　〝知覚喪失室〟なるものを造った、詮索好きの〝科学者〟に関する記事を読んだことがある。その男の作品なんか、こうして現実に天国から地獄まで落下するみじめな気分に比べれば、ちょっぴりスリルに溢れた(スリリング)スリー・リング・サーカス（三つのリングで同時に三種の出し物をやるサーカス）にすぎない。
　地獄に近づいている事実を認識した最初のきっかけは臭気だ。腐った卵のような悪臭である。H_2S——硫化水素——だ。硫黄の燃える悪臭だ。
　この悪臭で死ぬことはない。しかし、だからと言ってそれほど喜ぶこともない。本人はこの悪臭を嗅ぐ前すでに死んでいるのだから。つまり、普通はそうなのだ。だがわたしはまだ死んでいない。歴史や物語の中に、生きたまま地獄へ行った人びとが出てくる——ダンテ、アイネイアス、ユリシーズ、オルフェウス。でも、こういったケースはみなフィクションだと思う。この種の冒険譚は数々あるが、本当に生きたまま地獄へやってきたのは、わたしが初めてではないだろうか。
　もしそうだとすれば、どのくらいの間、健康に生きていられるのだろう？　燃えさかる火の池の表面にたたきつけられる瞬間までか？——たちまちジューッ！　と、脂のしみとなって消えてしまうのか？　この、ドン・キホーテ的行為は、ちょっぴり早まりすぎか？　たちまち消えてしまう脂のしみでは、まったくマルガレーテの助けにならぬ。ひょっとしたら、もう少し天国にとどまり、慎重に掛け引きをやったほうがよかったのかもしれない。派手な光輪をつけた聖人が、御座(みくら)の前で座りこみをやるとなれば、あるいは主も御判決を取り消してくださったかもしれぬ……そうすべき理由は充分にあるのだし、われらが水難監視員(ライフ・ガード)エホバは全能なのだから。
　ちょっと考えが浅はかだったぜ、こりゃ！　すでに、煙の間から赤熱光が見えている。あの下で溶岩が煮えたぎっているに違いない。どのくらい下で、だ？　それほど距離はない！　落ちる速度はどのくらいだ？　かなり猛烈な速度だ！
　今のわたしは、あの有名な地獄の在(あ)りのままの姿をまの

あたりに見ることができた。信じがたいほど巨大な火山のカルデラだ。いつの間にか、数千メートルの高さでそびえ立つその壁がわたしを取り囲んでいる。火炎と溶岩は、まだずっと下方にあった。しかし、ぐんぐん近づいてくる！　例の奇跡を起こす力はどうしたんだ、聖アレック？　あのときは、火ぶくれを一つ作っただけで火床を歩き抜いたじゃないか。今度の試練だって、何とか、うまく切り抜けられるはずじゃないか。違いはただ、規模の問題だけだ。ちょっとばかりスケールが大きくなったって、無理すれば何とかなるんじゃないか。でも、これほどでかいスケールの火床となると……。おや、聖アレック、そいつは聖人たるきみらしからぬ考え方だぜ。きみの強い信仰心はいったいどこへ行っちまったんだ？　うむむ……これほどすさまじい場所に来るとね……。まあ、いいよ、だれもきみを責めてなんかいないさ。それに、今さら信仰心の弱さを責めたって、もう遅いんだ。なにも、そのせいで地獄に来たんじゃない。そう、もう地獄に入りかけている——さあ、地獄の中に入ったぞ。あと三秒もたてば、いよいよ脂のしみになっちまうんだぞ。さよなら、ぼくのマルガ！　あのホット・ファッジ・サンデーを買ってあげられなくてごめんよ。さあサタンよ、おれの魂を受け取れ！　イエスなんて、くそくらえだ……。

　わたしは、蝶のように網で捕えられた。ただし、もし蝶だったら、不燃性の羽がなければ助からなかっただろう。現にわたしのズボンはくすぶっていた。わたしを網にかけた連中は、わたしを岸におろすと、ざぶりとバケツで水をかけてくれた。

「ちょっと、この伝票にサインしてくれ」

「何の伝票ですか？」と、わたしは上体を起こして座り、火炎の海を見渡した。

「この伝票だよ」と、相手は一枚の紙片をわたしの鼻先に突きつけ、ペンを差し出した。

「どうしてわたしがこんなものにサインする必要があるんですか？」

「とにかく、これにサインしてもらわねばならんのだ。これは、おれたちがあんたを〈火の湖（うみ）〉から救出したっていう証明になるんだ」

「弁護士に会わせてください。それまではどんなものにもサインしません」

　前回は、うっかりサインをしたばっかりに、四カ月もの間、皿洗いをさせられるはめになった。今回は絶対に、四カ月も無駄にする余裕はないのだ——今すぐにでもマルガレーテを捜しにいかなければならない。

「この馬鹿野郎。もう一度あの中へ放り込まれたいのか？」

すると、二番目の声が言った。「やめろよ、バート。本当のことを話してやったらどうだ」

（「バート？」そういえば、最初の声には聞き覚えがあるぞ！）

「バート！　きみはこんなところで何をしてるんだ？」少年時代の悪友で、文学の趣味を分かち合った仲だ。ヴェルヌ……ウェルズ……トム・スウィフト・シリーズ（少年向けの米国の冒険小説）――どれもこれもドレイパー修道士が〝ごみ〟と呼んでいた代物だが、それに、われわれ二人は熱中したのだ。

最初の声の主は、ぐっと近づいてきて、わたしの顔をしげしげと見つめた。「おやおや、こいつはおったまげた。鼻つまみ（スティンキー）のハーゲンシャイマーじゃないか！」

「ごらんのとおりだ」

「これで、いよいよ、おれは永久に地獄どまりになるな。それにしても、おまえ、子供のときとたいして変わってないな。おいロッド、網を開いてくれ。魚を釣りまちがえちまった。やい、スティンキー、この料金は高いぞ。おれたちが掬おうとしている獲物は聖アレキサンダーだ」

「聖だれだって？」

「聖アレキサンダーだよ。物好きにも貧民街見物をやらかそうって考えやがったアイルランド人の聖人野郎さ。やつは、どうして七時四十七分の便で来なかったんだろう？　おれたちは、いつもこの〈火の湖〉で運び屋稼業をしてるわけじゃないんだ。その聖人が来るはずの時刻におまえが来ちまったために、おれたちはせっかくの客をふいにしてしまったらしい……おまえには、その代金を払う義務があるんだ」

「ぼくはきみに五ドル貸しがあるじゃないか」

「この野郎、まだ、あれを覚えてやがったのか！　あれは出訴期限法で時効だ」

「地獄の法律のどこにそれが載ってるのか、ぼくに見せてくれ。いずれにせよ、時効は適用されないよ。ぼくが金を返してもらいにいくと、きみは、いつも逃げまわってたじゃないか。従って、あの五ドルには、三カ月に六パーセントずつの複利が付き……何年分になるかな？」

「その話はあとにしようや、スティンキー。今のおれはその聖人が来るのを見張ってなきゃならん」

「なあバート」

「あとでだ、スティンキー」

「ぼくの本当の名前を思い出さないのか？　ぼくが両親につけてもらったやつをさ」

「ええと、たしか……アレキサンダー！　おい、まさか、

スティンキー、そんなことはありえない！　たしか、おまえはローラ工業学校を退学したあと、田舎の神学校へ行って、そこも退学しかけてたはずだぜ」と、バートは顔に苦痛と不信の表情をうかべた。「人生はそんな不公平なもんじゃないはずだ」

「〝主の御業は常に神秘に充ち、奇跡を行ないたまう〟。このぼくが聖アレキサンダーなんだよ、バート。ぼくの祝福をお望みかね？　つまり、その料金とやらの代わりに」

「現金じゃなきゃだめだ。どっちにしろ、おれはそんなこと信じないよ」

「おれは信じるぜ」と、第二の男が割って入った。バートが〝ロッド〟と呼んだ男だ。「それに、おれ、あんたの祝福を受けたいです、ご教父様。おれ、今まで一度も聖人のご祝福を受けたことがないんです。なあバート、遠距離監視レーダーには何も映っていないぜ。それにあんたも知ってのとおり、この当直の間に弾道便到着の予定は一つしかない――だから、こちらのかたは、まちがいなく聖アレキサンダー様だよ」

「絶対にそんなことないって。いいかロッド、おれはこいつのことをよく知っているんだ。こいつが聖人になるんなら、おれはピンクの猿に――」

突然、雲一つない空から稲妻が落ちてきた。よろよろと立ち上がったバートのからだから服がだらりとたれ下がっている。しかしかれには、もう服は必要なかった。全身がピンクの毛皮でおおわれているからだ。

ピンクの猿は憤然としてわたしを見上げた。

「なにも昔なじみに対して、こんな仕打ちをすることたあないだろう」

「バート、ぼくがやったんじゃないよ。少くとも、ぼくにはそんなことをするつもりはなかった。ぼくの身辺では、奇跡が勝手に起こるんだ。ぼくには、そんなことをするつもりがないのに」

「言いのがれだ。おれが狂犬病を持ってたら、おまえに咬みついてやる」

二十分後、われわれは湖のほとりのバーの仕切り席にいた。ビールを飲みながら、姿かたちを変える専門家として評判の高い魔道士（ソーマタージスト）を待っているのだ。わたしは自分が地獄に来たわけを話した。

「だから、ぼくはどうしても彼女を見つけなきゃならんのだ。最初に〈火炎地獄〉を調べなければならない――もし彼女があの中にいるとしたら、まさに緊急事態だ」

「そのひと、あそこにはいませんよ」と、ロッド。

「え、どうして？　それを証明してほしいな。どうしてき

みにそれが分かるのかね?」
「あの中には、誰もいやしません。無知な大衆をお行儀よくさせるために広めた作り話の一つですよ。確かに、毎日の弾道便で次から次へと大勢の人間どもがここへ飛びこんでくるんで、ここのマネージャーがバートとおれを安全監視員としてここに配置する前は、そいつらの何パーセントかがあの湖の中へ落っこちたもんです。だけど、実際に〈火の湖〉に落ちた魂は別に何ともなかったですよ……ただ、当人が馬鹿みたいにこわい思いをするだけのことでさあ。もちろん、あの湖の中は燃えているんだから、飛び込んだやつは落ちてきたときよりもすさまじい勢いで湖から飛び出てきます。でも、だからといってけがをすることはない。あの火の風呂は、新参者が地獄に対するアレルギーの持ち主だった場合に、そのアレルギーを洗い落とすためのものです」
(〈火の湖〉には誰もいないって! 〃未来永劫、地獄の業火で焼かれつづける〃者は一人もいないのだ――ブラザー・〃バイブル〃・バーナビーが聞いたら、どんなにショックを受けることだろうか……あのバーナビーのほかにも、地獄の業火を商売にしてきた連中はたくさんいるはずだ。しかし今のわたしは何も、この二人の亡者を相手に終末論をやりにきたわけではない――マルガを捜すためだ)
「その〃マネージャー〃というのは、悪魔のことかね?」
例の猿――つまり、バートのことだ――が、かん高い声をあげた。「サタンのことだったら、そう言えよ!」
「ぼくの言わんとするのも、まさにその者のことだ」
「いいや、アシュメダイ氏は市のマネージャーです。サタンは何も仕事をしません。その必要もないでしょ? サタンはこの惑星の所有者なんだから」
「これが惑星だって?」
「彗星だとでも思ったんですか? あの窓から外を見てごらんなさい。この銀河系の中で、一番きれいな惑星だ。しかも手入れも最高です。ヘビも、ゴキブリもいないし、煙草も、ウルシもない。税務署もなく、ネズミもいず、癌もないし、牧師もいない。弁護士が二人いるだけです」
「まるで、ここここそ天国だと言わんばかりだね」
「天国へは一度も行ったことがないんです。あんた様は天国から来なさったと言う。そこんところは、あんた様が決めてください」
「そうだな……天国は確かに、いい所だ――天使にとってはね。あれは惑星ではないな。マンハッタンと同じ、人工的に作られた場所だ。でも今のぼくは、天国を糾弾するためにここへ来たんじゃない。マルガを捜しにきたんだ。そのぼくとしては、まずアシュメダイ氏に会った方がいいか

な？　それとも、初めからサタンに会いにいった方がいいだろうか？」

猿は口笛を吹こうとしてネズミのようなきいきい声をたて、ロッドは首を横に振った。

「聖アレック、あんた様にはつくづく感心しますよ。おれは一五八八年からここにいるんですけんどね、今まで一度も、ここのオーナーを見たことがねえんです。別に会おうと思ったこともありませんがね。だから、おれには、まずどこに行けばいいのかもわからねえんです。なあバート、あんたはどう思う？」

「もう一杯ビールがほしいと思う」

「飲んだビールを、どこに収めるって言うんだ？　あの稲光りに打たれてからっていうもの、あんたの身体は缶ビール一本だってもてあますくらい小さくなっちまってんだぞ。三杯は、とても入らねえ」

「うだうだぬかすな、この野郎。早くウェイターを呼べ」

どうも話が進まない。わたしから質問をすればするほど、疑問が大きくなるばかりで、答えがいっこうに出てこないのだ。やがて女の魔道士が来て、ひょいとバートを肩にのせた。バートはきいきいわめいている。女魔道士の請求する料金が高すぎるのだ——なんと、バートの所有する全財産の半分を寄こせと言うのである。しかも仕事に着手する前に、契約書に血でサインしろと要求した。バートの方は女魔道士の請求額を一割にまけさせ、そのうえその半額をこのわたしに払わせよう……と、しきりに鳴きわめいた。

どう話をつけたのか、間もなくバートと女魔道士は向こうへ行ってしまい、ロッドは、そろそろわたしの寝ぐらを見つけようと言いだした。近くの上等なホテルに連れていってくれると言う。

そんな金はない、とわたしは指摘した。

「心配することあ、ありませんよ、聖アレック。ここへ移住してきた者は、初めは誰でも文無しなんです。だけど、移住者と最初に契約した者は、六週間前の過去から未来永劫まで、その移住者と商売を続けることができるってことが分かってますからね、アメリカン・エキスプレスでも、ダイナース・クラブでも、チェイス・マンハッタンでも、競って返済期限を先延ばししてくれますよ」

「担保なしで返済期限を先延ばししたら、金融業者は大損じゃないか？」

「そんなことあ、ありません。この地獄では誰でも、いつかは借金を完全に返すことになってるんです。ここじゃ、破産したからって、死んで自分の借金を棒引きにすることはできないんですから。だから、まず、つけでホテルに泊

りこみ、三大クレジットのどこかと話がつくまで、何もかもルームサービスで食いつないでればいいんですよ」
広場の大宮殿の真向かいに、〈無憂〉シェラトン・ホテルがあった。ロッドは、わたしをフロントに連れてゆき、わたしは宿泊者カードにサインして、浴室付きのシングルを頼んだ。フロント係のクラークは、小さな可愛い角をつけた女悪魔だったが、わたしがサインしたカードを見るなり目を丸くした。
「まあ、聖アレキサンダー様でいらっしゃいますか？」
「そこに記入したとおりだ。わたしはアレキサンダー・ハーゲンシャイマー。〃聖アレキサンダー〃と呼ばれたこともあるけど、ここじゃ、そのような称号は通用しないはずだよ」
女悪魔は、まったくわたしの話に耳を貸さなかった。親指でせわしげに予約者名簿を調べている。「ここにございましたわ、聖下――スウィート・ルームが予約してございます」
「ええっ？　スウィート・ルームなんかいらないよ。それにそんな金はとうてい払えないし」
「マネージャーからのプレゼントでございます」

25

彼妃公主七百人嬪三百人あり
其妃等彼の心を転せり
列王紀略上第一一章三節

人いかで神より正義からんや
人いかでその造主より潔からんや
ヨブ記第四章一七節

〃マネージャーからのプレゼント!!〃
どうしてわかったんだ？　ユダ門から飛び出す直前まで、わたしがここに来ることなど誰も知らなかったはずなのに。聖ペテロは、地獄に通じるホットラインを持っているのか？　宿敵同士の間に、実は裏の協力関係があるのか？　元の世界の主教会議のお偉方がこれを聞いたら、さぞや憤慨することだろう！
たとえそうだとしても、なぜだ？　しかし、ゆっくり考

えている暇はない——勤務中の小悪魔（小鬼かな？）——が卓上ベルを鳴らして叫んだ。
「フロントへ来てちょうだい！」
声に応じて現われたベルボーイは人間の姿をしていた。しかもなかなか男前の若者だ。なぜ、こんなに早死し、しかも天国へ行かなかったのだろう。別にわたしの知ったことではないので、訊きもしなかった。ひとつだけ気づいたことがあった——この男の顔は正面から見ると〝フィリップ・モリス〟の広告の顔にそっくりなのだが、わたしを部屋に案内すべく背中を向けた姿は別の煙草の広告を思い出させたという事実だ。〝まん丸い切り口、固い手ざわり、しっかり中味が詰まっている〟というやつだ。このお尻をみたら、古代インドの好色な詩人たちは、一篇の詩をものせずにはいられないだろう——やはり、その種の罪で、この地獄へおとされることになったのだろうか？
スウィート・ルームに案内されたとたんに、そんな考えごとはどこかにけし飛んだ。
フットボールは無理としても、テニスなら充分にできそうな広い部屋だ。大金持ちの東洋の王様でもこの家具類なら文句を言うまい。〈食料庫〉という名の奥まった小部屋のテーブルには、ビュッフェ・スタイルの客料理が並べてある。たっぷり四十人前のヴォリュームだ。さらにその奥には暖かい珍味料理が少々——リンゴをくわえた豚の丸焼きや、羽毛を植えなおした孔雀の姿焼きなどである。向かい側にバーがあり、ありとあらゆる種類の酒が並んでいた。〈コンゲ・クヌート〉のチーフ・パーサーだって、これを見たら目をむくだろう。
わたしのベルボーイ（「〝パット〟とお呼びください」と言った）は、あちこちせわしげに動きまわり、カーテンを開けたり、窓を調節したり、空調の温度をたしかめたり、タオルを整えたりしている——要するに、ベルボーイがチップをたっぷりもらうためによくやる手だが——わたしのほうは、かれに上げるチップをどうしようかと懸命に考えていた。チップをつけにするという手はどうだろう？　仕方がない……直接、パットに訊いてみよう。わたしは寝室を横切り（それですら、ちょっとした小旅行だった）、浴室へ入ったはずのパットを探しにいった。
なんと、かれは脱衣中であった。ズボンが半旗のように脚のなかばまで下りており、まさに足を抜こうとしている。むきだしのお尻が、まともにわたしの目にとびこんできた。
「おい、きみ、やめなさい！　お気持ちには感謝するがね……わたしには、あいにく男の子の趣味はない」
「男の子はあたしの趣味よ」と、パットは答えた。「だって、あたし、男の子じゃないんですもの」——そして、パ

ットはくるりとこちらを振り向いた。
　パットの言うとおり……パットは確かに男の子ではなかった。
　呆然と口を開けたまま立ちつくすわたしの目の前で、彼女は残りの衣類を脱ぎ捨て、洗濯かごに放り込んだ。
「ほら！」と彼女。にこやかに微笑している。「あんな制服、脱いじゃうと、ほんとにせいせいするわ！　ここへ入るあなたの姿をレーダーがキャッチしたという報告を受けてからずっと、あたしはあれを着たまんまだったのよ。なにがあったの、聖アレック？　ビールでも飲もうと寄り道したわけ？」
「うむ……ま、そうだ。ビールを二、三杯のもうかなと思ってね」
「どうせ、そんなことだろうと思ったわ。バート・キンセイが見張りをしていたでしょ？　〈火の湖（うみ）〉が氾濫して溶岩が町のこのあたりまで流れこんでくると、あの人ったら現場に駆けつける前に必ずビールを一杯ひっかけるのよ。ねえ、どうして、そんなに困った顔してるの？　あたし、何か悪いこと言ったかしら？」
「ねえ、きみ。きみはすごくきれいだ――でもね、今のぼくは、女の子にも用はないんだよ」
　つと歩み寄って見上げた彼女は、わたしの頬をやさしく愛撫した。その息を頬に受け、わたしは甘美な香りを嗅いだ。
「聖アレック」と、娘は優しい声で言った。「あたし、なにもあなたを誘惑してるわけじゃないのよ。もちろん、求められれば応じてもいいわ。ここではね、このように豪華なスウィート・ルームには接待用の女の子が二、三人は必ずついてるの。でも、このあたしはね、ベッドでお相手をつとめるほかにも、もっとあなたのお役に立てるのよ」
　そう言って娘は手を伸ばしてバスタオルを摑（つか）み、それを腰に巻きつけた。
「あたし、最高（イチバン）のソープランド嬢でもあるのよ。どう、お背中を流しましょうか？」
　彼女はニッコリとえくぼを見せて笑い、腰のタオルを投げ捨てた。
「それに、バーテンダーとしての腕も一流よ。デンマーク・ゾンビはいかが？」
「このぼくがそんなものを好きだなんて、誰が言った？」
　すでに娘は向こうを向き、衣裳ダンスを開いていた。
「これまでにあたしがお相手した聖人は、みんなあれがお好きだったのよ。これはいかが？」
　そう言って娘は一着のガウンを差し出した。青みがかった淡い霞で織ったような布地だ。

「きれいなガウンだね。きみ、これまでに何人ぐらいの聖人のお相手をしたのかね？」
「一人よ。あなただけ。いや、二人目かな。でも、その人はゾンビを飲まなかったの。ちょっと大物ぶっただけ。ごめんなさい」
「いや、いいんだ……ひょっとしたら、それが手掛りになるかもしれない。その情報の出所はデンマーク人の娘じゃなかったかい？　金髪で、背格好も、体重も、きみと同じぐらいの人だ。名前はマルガレーテかマルガだ。〝マルギー〟って呼ばれることもある」
「いいえ。あなたのことはあなたの接待係を命じられたときにコンピューターのデータを渡されたのよ。そのマルギーって人――あなたのお友だち？」
「友だちどころじゃないよ。ぼくが今ここにいるのは、その女性のためなんだ――この地獄内に、いや、地獄上にかな？」
「そんなこと、どっちでもいいじゃない。でも、あたしがあなたのマルギーに会っていないことは、確かよ」
「この地獄で人を探すには、どうすればいいのかね？　電話帳？　選挙人名簿？　それとも、ほかに何かある？」
「どっちも見たことないわ。地獄にはきちんとした組織がないのよ。地獄は無政府社会なの――ただし、いくつかの点では絶対君主制的なところもあるわね」
「サタンに直接、訊くことができるかな？」
娘は自信なげな表情を見せた。
「あたしの知るかぎり、〈地獄の大王陛下〉に手紙を書いてはいけないって規則はないわ。でも、その手紙を大王が読まなければいけないって規則もないわ。たぶん、秘書みたいな人が開封して読むんでしょうね。そのあとで、その手紙をいきなり〈火の湖〉の中へ放り込んだりはしないでしょうけど。いくらなんでもそんなことはしないと思うわ」と娘は言い、さらにこう付け加えた。「お風呂に入りましょうか？　それともベッドへ直行なさる？」
「うらむ……どっちかといえばお風呂の方がいいと思うけど……うん、お風呂にしよう」
「よかった！　あたし、聖人をお風呂に入れるのは初めてなんだもの。面白そう！」
「そう？　でも、きみは入ってこなくていいよ。ひとりで入れるから」
だが結局、わたしは彼女に入浴の世話をしてもらった。
わたしにマニキュアをしてくれ、さらにペディキュアをした彼女は、わたしの足の爪を見て、「まあ、ひどい」と、舌打ちした――これでも最大限に遠慮した表現なのだ。そ

れから、髪を刈ってくれる。剃刀の替刃が欲しい……とわたしが頼むと、彼女は浴室の戸棚を開けた。中には七、八種類におよぶひげ剃り道具が入っている。
「あの三枚刃の回転式ヘッドの電気剃刀がいいと思うけど、あたしを信用してくださるなら、昔ながらのまっすぐな剃刀で上手に剃ってあげるわ」
「ぼくは、ジレットの替刃さえあればいいんだ」
「そんなブランドは聞いたことないけど、ここにあるのはみんな、どの替刃にも合う最新式のものばかりよ」
「いやだ。ぼくはどうしてもジレットがほしい。両刃のステンレス製のやつだぞ」
「ウィルキンソンの剣(つるぎ)と同じ鋼(はがね)でできた両刃の一生もののこと?」
「たぶんね。ほら、あった! 〝ジレットのステンレス替刃——二パックをまとめて買うと、一パックおまけ〟ってやつだ」
「あらよかった。さあ剃ってあげましょう」
「いや、いいよ。自分でできるから」
三十分後、わたしは、王様がハネムーンに使うにふさわしい、堂々たるベッドの枕に、背をもたせかけていた。ダグウッド・サンドイッチを胃袋に収め、寝酒用のデンマーク・ゾンビを片手に、えび茶色と金茶色の模様の入ったおろしたての絹のパジャマを着こんでいる。パットは、お風呂の世話をする時以外、つねに着つづけていた例の青い煙のようなガウンを脱ぎ、わたしの横に入ってきた。自分用にグレンリベット(スコッチウイスキーの銘柄)のオンザロックを手近においている。
(わたしは心の中でマルガに呼びかけていた。「ねえマルガ、これはぼくのお膳立てじゃないよ。あいにく、この部屋にはベッドはこれ一つしかないんだ。広いベッドだから彼女はこっちへ寄ってこないさ。きみだって、今の彼女を追い出せとは言わないだろう? とってもいい娘(こ)だから、いやな思いをさせたくないんだ。ぼくはもうくたくただし……これを飲んだら、すぐ眠るよ」)
だがわたしは、そう簡単には眠れなかった。パットは少しも押しつけがましくなかったのだが、実に協力的だった。わたしの心は二つの相反することを同時にやっていた——一方でパットが(惜しみなく)提供してくれるものに我を忘れ、もう一方でマルガに対する釈明を続けていたのだ。
「決して本気でやっているわけじゃないよ……別に、この娘(こ)を好きになったわけでもない……今、ぼくが愛しているのはきみだけだし、将来もずっときみを愛しつづけるつもりだ……でも、どうも眠れなくて、つい……」

そのあとで、しばらく眠った。目がさめると、今度は生(なま)生(なま)しい幻像(ホログラム)を見せられた。「成人用よ」と、パット。どれもこれもわたしが生まれて初めて見る体位ばかりだ。だがパットには、すでに充分の心得があるらしく、今度は、わたしに実技指導をしたいと言いだした。わたしはマルガに「これは、ぼくときみのための学習なんだからね」と、大急ぎで説明し、あとは学習に専念した。

それから、また少し眠った。

しばらくすると、パットが手を伸ばして、わたしの肩をさわった。

「こっちを向いて、お顔を見せてちょうだい。やっぱり、わたしの思ったとおりね、アレック。あなたはご自分の大切な人のことを忘れられないのよ……あたしがわざわざ、こうして、そのために——悩みを軽くしてあげるために——ここにいるのに。でも、肝腎のあなたがその気になってくださらなくちゃ無理だわ。彼女がして、あたしがしなかったことが……彼女にできて、あたしにできないことが……何かあるの？　彼女のお道具が、あの有名な〝ミミズ千匹〟ってわけ？　それじゃ、何よ？　教えて！　説明してよ！　あたし、何でもするわ、せめて真似だけでもする。必要なものがあれば取り寄せるわ。おねがい。ねえ、これでは、専門家としてのあたしのプライドが傷ついてしまうじゃないの」

「きみは素晴らしい」と、わたしは彼女の手を軽く叩いた。

「そうかしら。きっといろんな香りのする、あたしみたいな娘を大勢つれてくるといいのね？　溺れちゃうほど若い女性を集めたらどう？——チョコレートとか、ヴァニラとか、ストロベリーとか、ミックス・フルーツとか、いろんな匂いのする女の子たちを。ミックス・フルーツねえ——うーん……あなた、サンフランシスコ・サンドイッチがお好きなんじゃない？　それとも、ソドムとゴモラ風がいいのかしら？　そうだ、バークレー生まれの男の子はどう？あの人、完全な男性じゃないの……でも、発想がとてもユニークなのよ——あたし、何度もかれとチームを組んだわ。それに、あの人、声を掛ければ集まる仲間をたくさん持っているの……かれ、〈アレスター・クローリー会〉と〈ネロ男娼連合〉のメンバーなの。群衆シーンがお好みなら、あなたがこうしてほしいと思うとおりに、あたしとドニーとで演出してみせるわ。このサン・スーシ・ホテルがあなたの気に入るように、効果を担当してくれるわ。ペルシャの夜、女子学生クラブ会館、トルコのハーレム、ジャングルに響く淫(みだ)らな儀式の太鼓、女子修道院——そうだ、〝女子修道院〟といえば……生前のあたしが何をしていたか、お話ししたかしら？」

「きみが死んだのかどうかさえ聞いてはいないよ」

「あら、もちろん死んだわよ。あたしは人間のまねをする小鬼じゃない……ちゃんとした人間よ。人間をやったことがなくて、こんな仕事につけると思う？　仲間の人間をとことん楽しませられるのは、正真正銘の人間でなくては駄目なの……あのサカバス（睡眠中の男性と性交すると言われる魔女）の性的超能力の話なんて、ただの宣伝よ。あたしは修道女だったのよ、アレック。若い娘の時から死ぬまで。あたしの生涯の大半を、全然やる気のない子供たちに、文法と算数を教えて過ごしたわ。

　修道院に入ってすぐに、これは自分の天職ではないと気づいたけど後の祭り。そこから脱け出す方法がわからない、というだけの理由で、そのまま修道院に留まったの。三十歳を迎える頃には、この間違いがいかに深刻だったかを痛感していたわ……性的に大人になったってわけね。つまりね、聖アレック、あたしの性欲が目覚めたのよ。その性欲がつのりっぱなしで、年ごとに、ますます強くなってくるの。

　辛い試練だったわ。試練といっても、誘惑に耐える試練じゃなくて、誘惑してもらえない淋しさに耐える試練なのね。そのチャンスがあれば逃がしやしなかったんだけど、その望みは、まるっきりなし。あたしが聖歌隊の男の子だったら、聴罪僧が色目を使ってくれたかもしれない。その人、女には興味がなかったのね。あたしの告白を聞きながら鼾をかいているんですもの。無理もないわね——あたし自身だって退屈するような罪の告白だったんですもの」

「きみの罪は何だったのかね、パット？」

「心の内なる姦淫よ——それについては、ほとんど告白しなかったの。だから神の許しを受けられず、そのまま聖ペテロのコンピューターに打ち込まれてしまったってわけね。神を恐れぬ姦淫の罪よ」

「ほう、きみはたいした想像力の持ち主なんだね、パット」

「ううん、そんなことないわ。ただ欲望が強かっただけよ。修道女の生活がどんなに窮屈なものか、あなたは分からないでしょうね。修道女はみんな、キリストの花嫁になるのよ……それが契約。だから、心の中でセックスの悦びを想像しただけでも、救いがたき不貞の妻とみなされるわけ」

「ばかばかしい。そういえば、最近、天国で二人の修道女と知り合ったけど、結構二人とも好きそうに見えたよ——一人なんかことにね。でも、連中は天国に安住していたぜ」

「それはそうよ。自分の罪を、きちんと告白していればいいんですもの。それに修道院の仲間に

見守られて死んでゆくし、呼べばすぐ聴罪僧か教戒師が来てくれるわ。最後の儀式ですべての罪が許されて、アイボリー石鹸みたいに純粋無垢になって天国に送られるのよ。

でも、あたしは別！」と、彼女はにやりと笑った。「今ここで、これまでに犯した罪のつぐないをしているんだけど、それが楽しくてたまらないのよ。あたしは一九一八年、インフルエンザが大流行した年に死んだの。大勢の人がいちどきに死んだので、あたしを天国に送ってくれる司祭が間に合わず、それで、ここに来ちゃったの。一千年の見習期間が終わると——」

「ちょっと待って！　きみは一九一八年に死んだのだね？」

「そうよ、スペイン風邪が大流行した年。あたしは一八七八年に生まれ、一九一八年に四十歳の誕生日を迎えて死んだの。四十歳に見えたほうがいい？　よければ、そうするけど」

「いや、このままがいい。とってもきれいだ」

「どうしようか迷ったのよ。男の人って案外、熱烈なマザコンが多いのに、生前にはそれを実行するチャンスがほとんどないのよ。そのほうが、おもてなしをするあたしにとっても簡単ですしね。あなたを自己催眠に導くだけ。そうすると、あなたがおかあさんの話を始める。それを聞きながら、あたしは自分をあなたのおかあさんそっくりの姿に変えてゆく。身体の匂いまでそっくりにね。なにもかも、そっくり。それでいて、おかあさんなら許さなかっただろうことを、あなたにしてあげる。つまり、あたしは——」

「パティ、ぼくは自分の母親が嫌いなんだよ」

「あら、そう。それ、〈審判の日〉に問題にされなかったの？」

「いや。掟にはないんだ。聖書に書いてあるのは〝汝の父母を敬え〟でね。〝愛せ〟とはひと言も書いてない。ぼくは母を敬い、きちんと礼儀を守った。デスクに写真を飾り、手紙を毎週書き、誕生日には電話をかけた。仕事の都合がつくかぎり、会いにもいった。果てしない愚痴や、女友達の悪口に辛抱強く耳を傾け、何を言われても〝はい、はい〟と従った。医療費もちゃんと負担し、墓地での埋葬にも立ち合った。でも、涙は出なかったな。母はぼくを可愛がってくれなかったし、ぼくも母が好きじゃなかった。もう、母親の話はやめてくれ！　いいかねパット、ぼくがきみに質問してたんだよ。それなのにきみは勝手に話をそらせてしまったんだ」

「ごめんなさい、あなた。あら、ちょっと、これを見て！」

「また話をそらさないでくれ。いいから質問に答えるまで、

ほかのことを考えちゃいかん。きみは確か〝一千年の見習期間〟と言ったね？」
「ええ。それが何か？」
「でもきみは、自分が死んだのは一九一八年だとも言ったじゃないか。〈最後の喇叭〉が鳴ったのは一九九四年だ――これは間違いない。ぼくがこの耳で聞いたんだから。あれは、きみの死後七十六年目だ。ぼくには、〈最後の喇叭〉が鳴ったのが、つい数日前か、せいぜい一カ月ぐらい前にしか思えない。いま思うと、あるいは七年前だったのかもしれないが、たとえそうだとしても九百年以上にはならんし、絶対に一千年にはならない。ぼくは幽霊じゃない。ちゃんと生きた肉体を持っているんだ。それにメトセラでもない」
（なんてことだ！　マルガレーテと別れてから、もう一千年にもなるというのか？　ひどいじゃないか！）
「ねえアレック。永劫の中では、千年なんて時間はたいしたことないのよ。ただ〝長い間〟という程度の意味を持つだけ。この場合は、テストに必要な長さの時間が千年だったってこと。この職業に適性と能力があるかどうかをテストする時間よ。あたしにとってはずいぶんと長い時間だったわ。だって、あたし、ものすごく欲望を感じてて……どうしようもなかったんですもの。どんなお客が相手だって、あたし、すぐ絶頂に達しちゃうのよ――あなたも、よくご存じのとおり、ね。地獄に来たときのあたしったら、セックスのことはまったく何も知らなかったのよ、まったくなんにも！　でも一所懸命に勉強したおかげで、結局はマグダラのマリアが高いお点をつけてくれるまでになり、この仕事の永久ライセンスをいただいたのよ」
「マグダラのマリアが地獄にいるのかね？」
「ええ、あの人はここの客員教授よ。天国では永久教授会のメンバーだしね」
「天国では何を教えているのかね？」
「あたしにはよく分からないけど、まさか、ここで教えているようなことじゃないと思うわ――もちろん、これはあたしがそう思うだけよ。つまりね、アレック、あの人は唯一無二の大物なのよ……だから、他人の規則には縛られないの。あら、今度はあなたが脱線しちゃったじゃないの。あたしは、自分の修業期間が正確には何年間だったのか分からないって言おうとしたのよ――ここではね、時間なんて当人が長いと思えば長いし、短いと思えば短くなるんですもの。たとえば、あなたとあたしとがベッドに入ってた時間はどのくらいだったと思う？」
「ううむ、かなり長い時間だったと思うな。でも、それほど長くはなかったのかな。今は真夜中に近い時刻だろう

？」
「あなたが真夜中にしたいと思えば、真夜中になるわ。さあ、今度はあたしが上になる？」

翌朝——ほんとは〝いつ〟なのか分からないのだが——パットとわたしは、〈火の湖〉を見おろすバルコニーで朝食をとっていた。今日のパットは、マルガ好みの服装をしている——肌にくいこむようにきつめで短いショート・パンツをはき、上半身には乳房がはみ出しそうな、ホールターをつけていた。その衣類を、いつのまに手に入れたのだろう？　わたしのズボンとシャツは夜の間にクリーニングされ、綻びも繕ってあった。下着とソックスも、いつの間にか洗ってある——地獄では、いたるところで小鬼たちがこっそりと働いているらしい。昨夜の後半には、たとえガチョウの一隊が鳴きわめきながら寝室を通過したとしても、わたしは目をさまさなかったにちがいない。
わたしはテーブル越しにパットをみつめた。鼻の頭にそばかすを浮かせ、ガールスカウトのような健康美に輝いている。セックスを罪悪と考えていた自分が奇妙に思えてきた。確かに、ときと場合によっては、セックスが罪を伴うこともあろう——しかし、人間の行為には多かれ少かれ、残酷さや不正がつきまとうものだ。性の営みそのものには、罪のかけらもありはしない。ここに着いたときのわたしは疲れ果て、取り乱し、惨めだった——そんなわたしを、パットはまず幸せな気分にしてくれ、次に休息させてくれた。おかげで今のわたしは、こうして幸せな気分で、この美しい朝を迎えている。
ぼくのマルガ、きみを探し求める気持ちを決して捨てたわけじゃないよ——それどころか、今のぼくは昨日とは見違えるように元気潑剌とした姿で、その捜索を続けようとしているのだ。
マルガレーテも、そのように見てくれるだろうか？　いま、彼女は今までだって一度もやきもちを焼いたことがないのだ。
しかし、もし彼女がここで休暇を——昨夜のわたしと同じように、セックス・メイトに恵まれた休暇を——楽しんだとしたら、おまえの気持ちはどうだ？　こいつはいい質問だぞ。じっくりと考えた方がいいぞ、坊や——彼女は平気だとしても、このわたしは平気でいられるかどうか怪しいからな。
わたしはぼんやりと、〈火の湖〉を見渡した。湖面に揺らぐ炎が煙を赤く染めている……だが、右も左も緑と陽光におおわれた初夏の眺めだ。遙か遠くに、頂きに雪をのせた山々が見えた。

「パット……」
「なあに、あなた？」
「ここから〈湖〉の岸まで、ほんの二百ヤードぐらいしかないのに、硫黄の臭いがしないけど」
「あの旗を見てごらんなさい。風向きがわかるでしょう？ ここの風はすべて、〈火の湖〉に向かって吹き込むのよ。それが湖上で上昇気流になって——弾道便で到着する人たちの落下速度を減速するのよ。もう一つ、この惑星の反対側には相応する下降気流があって冷湖に流れ込み、そこで硫化水素が酸素に反応して水と硫黄を形成するの。硫黄は沈澱し、水は水蒸気となって空気中に散り、また戻ってくるのよ。二つの湖の存在とこの循環作用が、ここの天候を左右しているの。月の力が地球の天候を左右するのと似ているけど、ここの方が穏やかね」
「ぼくは元来、物理学には、あまり興味ないんだがね……でも今の説明は、ぼくが学校で習った自然界の法則とは大分違うように聞こえるけど」
「当り前でしょ。支配者(ボス)が違うんですもの。ここのボスは、自分なりの流儀でこの惑星を運営しているのよ」
　このとき、室内でどらが鳴り、その〝ボヨヨーン〟という余韻の中に、わたしの言葉はかき消されてしまった。
「あたくし、見てまいりましょうか？」
「頼むよ、だけどどうしてそんな敬語を使うの？ どうせルームサービスだろう？」
「いいえ違うわ、いとしいアレック、ルームサービスなら、あたしたちが食べおわったころを見計らってくるはずよ」
と、パットは立ち上がり、すぐに一通の封書を手にして戻ってきた。
「大王陛下からの特使よ。あなた宛(あて)だわ」
「ぼく宛？」
　わたしは恐る恐る、それを受け取り、封を切った。一番上に紋章が浮き出ている——炎の中で三つ又(みつまた)の槍を持って立っている真赤な悪魔を形どった図案だ。角(つの)と、蹄(ひづめ)と、尻尾(しっぽ)のついたおなじみの姿である。その下にこう書いてあった——

首都
サン・スーシ・シェラトン気付
聖アレクサンダー・ハーゲンシャイマー殿

拝啓
　地獄とその周辺植民地の君主にして堕落王中の堕落王かつ虚言魔王たる、地獄の大王サタン・メクラトリッグ陛下の拝謁を求める貴下の請願に対し、謹しんで、

返信申し上げる。大王陛下の命により、貴下は請願の証として、貴下の誕生より現在に到る、詳細にして腹蔵なき回顧録を、当事務局に提出されたし。当該回顧録の提出を受けたる後、請願受理の諾否を決定する。
ひと言ご忠告申し上げる。大王陛下の御意を得んとして、故意に省略、削除、粉飾を行なうことは、かえって大王陛下の御意を損ねることである。

敬具

常に大王陛下の忠僕たる、
大王陛下秘書
ベルゼブブ*（署名）

＊ベルゼブブは、ミルトンの『失楽園』に、サタンに次ぐ堕天使として登場する。

わたしは、それをパットに読んで聞かせた。彼女は目をぱちくりさせ、ヒューと口笛を吹いた。
「大変、急いだほうがいいわよ、あなた」
「ぼくは――」と言いかけたとき突然、手紙が燃え上がり、わたしはあわててそれを、汚れた食器の上にほうり出した。
「いつもこうなるのかい？」
「知らないわ。大王の親書を見るのは、これが初めてですもの。それに、条件付きとはいえ、拝謁を許された人の話も聞いたことないわ」
「でもね、パット。ぼくには請願を出した覚えがないんだよ。今日これから、どうしたらいいかを考えるつもりだった。でもこの親書が答えている請願は、まだ出していないんだ」
「それじゃ、すぐに、その請願書を提出しなくちゃいけないわ。返信とつじつまを合わせないと具合の悪いことになる。あたしが手伝うわ――タイプしてあげる」
また、小鬼たちが活躍したらしい。広い居間の片隅に、机が二つ用意されていた。片方は、原稿用紙の山と、ペン立てを置いた書き物机で、もう一方には複雑な機械類がのっている。パットはまっすぐその机に向かった。
「あたし、まだあなたの係らしいわね。今度はあなたの秘書よ。最新型、最高級のヒューレット・パッカードのタイプライターね――おもしろそう！ それとも、あなたはご自分でタイプなされる？」
「いや、残念ながら」
「いいわ、ざっと下書きしてちょうだい。あたしが清書するわ……誤字や文法の間違いは直してあげる。あなたは気にしないで、どんどん書いていってちょうだい。あたしが、なぜ、この仕事に抜擢されたのかようやくわかったわ。あ

どけない笑顔のせいじゃなかったのよ——タイプの技術が物を言ったのね。あたしの同業者たちはタイプが打てないのよ。速記やタイプができないので、この商売を選んだ人たちがほとんどですもの。あたしは違う。さあ、仕事を始めましょう。何日間も、何週間もかかる大仕事になりそうね。正確に何日かかるのかは分からないけど、その間ずっと、あたしがここに泊りこんでほしい？」
「きみはどうなの？」
「それは、お客さまが決めることよ、当然」
「ぼくは、きみにずっとここにいてもらいたい」（マルガ……頼むから理解してくれ！）
「よかったわ、そう言ってもらえて。じゃないとあたし、泣きだしちゃうところだった。それに秘書というものは、夜間の緊急事態に備えて、主人の傍を離れてはいけないのよ」
「昔、ぼくがまだ神学校にいたころ、よく、その冗談を聞いたぜ」
「あなたの生まれる前からあった古い冗談ですもの。さあ、お仕事、お仕事」

目に見えぬカレンダーが、風に吹かれて、一枚、また一枚と、めくられていく。わたしは、ひたすら回顧録の執筆を続けているのだが、いつまでたっても終わりそうにない。だがパットは、ベルゼブブ公の忠告を文字どおりに守らなければならぬと言ってきかない。わたしが書き上げたものをパットが二部ずつ清書した——その一部ずつが机上に積み重なっていき、もう一部ずつが夜の間に姿を消す。またしても、小鬼だ。姿を消した清書は間違いなく宮殿へ……少くとも秘書の机までは行くはずだ——とパットは言う——したがって、これまでのところ、わたしの作業は合格なのだ。

パットは毎日、わたしが一日がかりで書き上げた分を、二時間足らずでタイプし、コピーしてしまう。しかしある日、ばかみたいに仕事に熱中するのをやめた。こんな一枚の手書きメモが届いたからだ——

貴下は働きすぎである。くつろがれたし。その女性を劇場に連れてゆくべし。ピクニックに行くべし。根を詰めることなかれ。

ベルゼブブ（署名）

メモはひとりでに燃えてしまい、本物であることを証明した。だから言われたとおりにした。大喜びでだ！　でも、ここでは、サタンの首都の歓楽街の話は割愛しよう。

今朝、ようやく回顧録は今それを書いている（というか、〃書いていた〃というか）自分の姿を書きうつす……という時点に到達し――わたしは、パットに最後の頁を手渡した。

最後の行を完成してから一時間もしないうちに、どらが鳴った。立って入口へ行ったパットが、急いで戻ってくる。彼女はわたしの首に両腕をまわして抱きついた。

「お別れよ。もう会わないわ」

「なんだって！」

「言葉どおりの意味よ。あたしは今朝、任務の終了を申し渡されたの。あなたに白状しなければならないことがあるのよ――いずれ分かることだし、知っておいてほしいの。実は、あたし、あなたの動静を毎日、当局に報告していたのよ。怒らないでね。あたしは王国の情報局要員で、プロフェッショナルなの」

「なんだって！　それじゃ、キスも、溜息も、みんな演技だったのか」

「演技なんかじゃないわ！　ぜんぶ本気よ！　ねえ、あなたの大事なマルガにめぐり会えたら、彼女は幸運な人だって、あたしが言っていたと伝えてね」

「シスター・メアリー・パトリシア、それも嘘なんだろう？」

「聖アレクサンダー、あなたに嘘をついたことは一度もないわ。言いたくても言えなかっただけなのよ」と彼女は、わたしの首を抱いていた両腕を下ろした。

「おい！　お別れのキスもしないで行ってしまうのか？」

「アレック、あなたが本当にキスしたかったら、そんなこと訊かないはずよ」

わたしは訊くのをやめ、実行した。もしパットの反応が演技だとしたら、彼女は予想以上の名女優だ。

わたしを宮殿に連行するため、見上げるような堕天使が二人、待っていた。二人とも重装備で、全身を鎧兜で固めている。すでにわたしの原稿を包んでおいてくれたパットが、これはわたしが自分で持っていくことになっているのだ、と告げた。わたしは出発しかけ――はたと立ち止まった。

「ぼくの剃刀！」

「ポケットを探ってごらんなさい、あなた」

「あれ、どうして、ここにあるんだろう？」

「あなたがもう二度とここへお戻りにならないことを、知っていたからよ」

天使と一緒だと自分も飛べるのは、前と同じだ。わたしの部屋のバルコニーを飛び立ち、サン・スーシ・シェラトン・ホテルをぐるっと回って、広場を横切り、やがてサタンの宮殿の三階バルコニーに着陸する。それからいくつも回廊を抜け、階段を昇る――各段の段差は、人間が昇るにはいささか辛い高さである。思わずつまづいたわたしのからだを護衛の一人がつかみ、階上に着くまで支えてくれたが、何も言わない――二人とも、まったくの無言であった。

ギベルティ（フィレンツェの彫金家）細工のドアのように複雑な模様の付いた真鍮扉が開き、わたしは中へ押しこまれた。

そして、大王を見た。

広間は薄暗く、煙っていた。武装した護衛たちが、両脇を固めている。大王は高い玉座に座っていた。身の丈が人間の倍以上もある……尻尾と角と恐ろしい眼、そして笏のかわりの三つ又槍を持つ悪魔だ――〝冥王印〟のボトルや〝悪魔印〟のハム缶でおなじみの姿である。室内に置かれた燠の赤熱光に照り映える赤黒い肌……たくましい筋肉……。だがこの虚言魔王は変装の名人なのだ――この姿も、ひょっとしたらこけおどしかもしれぬ。

やがて大王の声が霧笛のごとく鳴り響いた。

「聖アレクサンダー、こちらへ参れ」

26

われは山犬の兄弟となり　駝鳥の友となれり

ヨブ記第三〇章二九節

わたしは玉座へ向かう階段を昇りはじめた。またしても各段が高すぎ、幅が広すぎた。それに今度はだれもわたしを支えてくれない。しかたなく、このいまいましい階段を這って登るわたしを、サタンが意地の悪い微笑をうかべて見おろしている。

周囲のいたるところから、音源の定かでない音楽が聞こえてきた。死の音楽だ。どことなくワグナーに似ているが、何とも正体不明の曲である。犬を吠えさせ……馬を走らせ……そして人間を逃げ出させるか自殺に追いこむ……低い周波数の音が織りなす音楽らしい。

階段が延びつづけている。

昇りはじめたときに段数を数えたわけではないが、この

階段は三十段ほどに見えた。決してそれ以上ではなかった。だが数分間這い登りつづけたあとでわたしは、この階段がまったく途方もなく長いものであることを悟った。
虚言魔王め！
そこでわたしは立ちどまり、ひと休みした。
たちまち、例の雷鳴のごとき声がひびいた。
「どうかしたのか、聖アレキサンダー」
「どうもいたしません」と、わたしは答えた。「このように仕組んだのは、ほかならぬ〈あなたさま〉なのですから。〈あなたさま〉が本気でこのわたくしを近づけたいと思召すのでしたら、どうかこの冗談回路を切ってくださいまし。このままでは、わたくしがいくら必死にこの無限階段を昇ろうとしても、きりがありません」
「おまえは余がそのようなことをするとでも思っているのか」
「思うどころか、知っているのです。ゲームなのでしょう――猫とネズミの」
「おまえは、郷紳たちの前で余をばかにしておる」
「とんでもない、陛下。このわたくしには〈あなたさま〉をばかにすることなど、とうていできません。それがおできになるのは、〈あなたさま〉の方です」
「ほう。余がおまえを、たちどころに粉砕できることを知りおるのか？」
「陛下。〈あなたさま〉の王国に参りましてからは、何ごとも、〈あなたさま〉のお心しだいでございます。次は何をお望みですか？　この階段を昇りつづけよと仰せになるのですか？」
「そうだ」
そこで、また昇りはじめると、階段は伸びるのをやめ、段の高さも昇りやすい七インチほどに縮まった。またたくまに、サタンと同じ階に昇りつき――二つに割れた蹄の真ん前に立った。これではあまりに近すぎる。サタンは、その風貌が相手を怯えさせる――わたしは震えださないように、身を引き締めていたが――ばかりでなく、その体臭がまた実にすさまじい！　汚れたゴミ箱、腐った肉、麝香猫とスカンク、硫黄、閉めきった部屋と死者の腸――それら全部が放つ悪臭の寄せ集めだ。いや、それよりもひどい。
わたしは自分に言い聞かせた。「しっかりしろ、アレックス・ハーゲンシャイマー、今この臭いに耐えかねて胃の中のものをぶちまけたりしたら、もう二度とマルガには会えないぞ――あいつの思う壺だ――それだけはするな！　がんばれ！」
「腰掛けはそこだ」と、サタンが言った。「座れ」
玉座の近くに、背もたれのない腰掛けがあった。座る者

の自尊心を傷つけるよう、わざと低くしてある。だが、わたしは座った。
　サタンは大きな手でわたしの原稿の束をつまみ上げた。まるで一組のトランプを握っているように見える。
「読んだぞ。なかなか、よくできておる。少々くどいが、余の編集者たちが、手を入れるだろう――短すぎるよりは、この方がよろしい。うまい結末をつけねばならんな……おまえか、あるいは亡者による結末を、だ。亡者の方がいいかもしれぬ――おまえの文章にはインパクトが欠けておる。言え――おまえは今までに、作家として身を立てようと思ったことがあるのか？　説教者をやめて、だ？」
「わたくしにはその才能がございません」
「才能など、どうでもよいわ。現に出版されておる書物の類を見るがいい。しかし、あのセックス・シーンはもっと濃厚に描かねばいかんぞ。なにしろ、近ごろの読者どもは、あれがないと書物を買わんのだから。ま、そんなことは、どうでもよろしい――おまえをここに呼んだのは、文体やその欠点を論ずるためではない。おまえに一つ提案があるのだ」
　わたしは相手の言葉を待った。サタンはわたしの言葉を待っている。やがてサタンは再び口を開いた。
「提案の内容を聞きたくないのか？」
「陛下、お聞きしたいのは山々です。しかしわたくしの仲間の人間たちが〈あなたさま〉について学んだ教訓がございます。つまり〈あなたさま〉と取引きをする時は、くれぐれも用心したほうがいい……という教訓です」
　大王はくすくすと笑った。建物全体が震動している。
「おかしな男だ。余がおまえのやせこけた魂をだまし取ろうとしていると、本気で信じておるのか？」
「〈あなたさま〉のお考えは存じません。ですが、わたくしにはファウスト博士の知恵もなく、ダニエル・ウェブスター（米国の政治家）の雄弁もございません。ただひたすら、用心するだけでございます」
「何を申しておるのだ！　おまえの魂などいらぬ。近年、魂の需要はめっきり減っておる……品物がだぶつき、しかも粗悪品ばかりだ。ハツカダイコンと同じで、ひと山五セントで買える。買えても、余は買わん――在庫が溢れておるからな。全然違うのだ、聖アレクサンダー！　余はおまえを雇いたいのだ。おまえの専門家としてのサービスが欲しい」
（警戒警報発令！　いったいこれは何のわなだ？　アレックス、これはきっと陰謀だぞ！　気をつけろ！　でも、こいつは、いったい何を目論んでいるのだ？）
「皿洗いをご入用で？」

サタンはまた笑いだした。今度の震度はマグニチュード約四・二だ。
「いやいや、違うぞ、聖アレック！　余が望むのは、おまえの職業上の技能だ——余儀なく一時的に従事した内職ではない。余が望むのは、大音声で福音を告げ、熱烈に聖書を説き聞かせる説教者としてのおまえだ。キリスト教の仕事をやってもらいたい——おまえはそのための専門的訓練を受けておるはずだぞ。基金を募ったり、献金用の皿を廻したりはせんでよろしい——給料はたっぷり出すし、仕事は楽だ。どうかな？」
「あえて言わせていただきますと、これはわなでございます」
「これは、ご挨拶だな。わなではないぞ、聖アレクサンダー。おまえは自分の信念に従って説教すればよいのだ。制限はつけぬ。余の専属牧師に任じ、〈地獄の大主教〉の称号を与えよう。この先——短くも、長くも、好きなだけの時間を——迷える魂の救済に捧げるがよい。説教の材料に不足することはなかろう。給料は話し合いに応じよう。あの悪名高き強欲な魂の持ち主たる法王アレクサンダー六世よりは安くせぬ。不自由はさせんぞ。余が保証する。さあ？　これでどうじゃ？」
（おかしいのは、どっちだ？　悪魔大王かわたしか？　それとも、まだ、例の悪夢が続いているのか？）
「陛下、〈あなたさま〉はまだ、わたくしの求めるものについては何ひとつ仰せになっておられません」
「ほお、そうかね？　誰でも金を欲しがる。おまえは無一文だ——職がなくては、あの贅沢なスウィート・ルームにはもう一日たりとおられぬぞ」と、サタンはわたしの原稿をぽんと叩いた。
「これで、そのうち、いくらかの金が入るかもしれん。だが急場はしのげぬ。余はこれに対する前払いをする気はない。売れぬかもしれんからな。当節は〝わたしは魔王に囚われていた〟式の荒唐無稽な読物が氾濫しすぎておる」
「大王陛下。〈あなたさま〉はすでにわたくしの回顧録をお読みになっておられます……〈あなたさま〉はわたくしが何を求めているか、すでにご存じのはずです」
「ほう？　はっきりと申してみよ」
「ご存じのとおり、わが妻、マルガレーテ・スヴェンスダッテル・グンデルソンでございます」
サタンは驚きの表情をうかべた。
「その件に関しては、メモを送らなかったか？　その女は地獄にはおらぬ」
最後まで希望を捨てずに組織検査の結果を待っていた患者も、きっと、こんな気持ちなのだろう。そして当然、悪

い知らせは受けつけないはずだ。
「確かでございますか？」
「もちろん、確かだ。ここの管理者を、いったい誰だと思っているのか？」
（嘘つき魔王め……この嘘八百大王め！）
「どうして確かだとお分かりになるのですか？　聞くところによれば、誰も記録をとってはおられぬとか。一人の人間が地獄にやってきて、何年間か滞在したとしても、どっちみち〈あなたさま〉にはお分かりにならないのではございませんか」
「そのように聞いたとすれば、それは間違いじゃ。よいか、もし余の申し出を受けいれれば、おまえはシャーロック・ホームズだろうとジョン・エドガー・フーバーだろうと、史上最高の探偵を使って、地獄の中を隈なく捜索することができるのだぞ。だが、それは金の浪費じゃ。その女は余の王国内にはおらぬのだからの。これは公式の見解であるぞ」
　わたしは迷った。地獄は広大だ……たとえ永劫の時を費やして、わたしが独力でマルガを探し求めても、結局、見つけられないかもしれない。しかし、多額の金を使えば（わたしは、その事実を身に染みて知っているのだ！）、難事は容易なものに変わり、不可能事は単なる難事に変わるのだ。
　確かに、わたしが〈良識教会連合（CUD）〉の事務局次長として、若干きわどいことをやった（予算のやりくりは容易ではないのだ）事実は認めよう――だからといって、按手を受けた牧師たるわたしは、これまで一度も仇敵の走狗になるような真似はしたことがない。サタンは遠い昔からの宿敵なのだ。キリスト教の牧師が、どうしてサタンの司祭になりえようか？　ああ、いとしいマルガ――ぼくには、そんなことはできないんだ。
「だめです」
「聞こえぬぞ。余に、おまえの喜びそうな条件をつけさせてくれ。余の申し出を受けいれれば、ほうびとして、余の女情報局員シスター・メアリー・パトリシアを永遠におまえのものとして配属させよう。あの女をおまえの奴隷にしてやる――売却は禁ずるが、賃貸しは許す。これなら、どうかな？」
「だめです」
「おい、おい！　おまえが求めているのは一人の女だ。余はもっとよい女を提供しようと言っておるのじゃぞ。パットを気に入らぬなどとは言わせぬ……おまえはこれまで何週間も、あの女とべったりくっつき合っていたのだからな。何なら、おまえたちのよがり声を少し聞かせようかの？」

「この恥知らずな悪魔め!」
「まあ、まあ、余の宮殿内では余に悪態をついてはならぬぞ。おまえも、余も、それに男なら誰でも知っておることじゃ——女はどれも似たり寄ったり——違うものがあるとすれば、料理の腕前だけだ。おまえがどこかに置き忘れてきた女の代わりに、余は少々ましな女を与えようと申しておる。一年が経てば、おまえは余に感謝するはずじゃ。二年が経てば、自分がなぜ不平を言ったのかさえも忘れようぞ。この申し出は受けたほうがいいぞ、聖アレクサンダー。これはまたとない提案なのだ——なんとならば、まじめな話、おまえの探し求めるあのデンマーク・ゾンビ(死からよみがえったデンマーク人の意)めはこの地獄にはおらぬのだからの。さあ、どうじゃ?」
「だめだ!」
サタンは玉座の腕をどしんと叩き、いらだちの表情をうかべた。
「その気持ちは絶対に変わらないのだな?」
「はい」
「牧師の仕事におまえの求める氷女をおまけにつけたらどうだ?」
「彼女は地獄にいないと言ったじゃないですか!」
「余は別に彼女の居場所を知らぬとは言っておらぬ」
「彼女を連れてくることができるんですか?」
「余の質問に答えよ。あの女をおまえに返すという条項が入れば、おまえは余の牧師となる契約を受けいれるのか?」
(マルガ……ああ、マルガ!)
「だめです」
「軍曹、衛兵を退去させろ。おまえは余についてまいれ」
と、サタンはきびきびと命令した。
「右、左……向け! 前へ……進め!」
サタンは玉座を下りた。そのまま無言で後ろを向き、玉座の奥へ行く。わたしは急ぎ足で、歩幅の大きい相手を追った。玉座の奥は長くて暗いトンネルだった——サタンの姿がどんどん遠ざかってゆくような気がして、わたしは走りだした。トンネルの先から射し込むかすかな光の中で、サタンの後ろ姿がみるみる小さくなっていく。
そして、わたしは、あやうくサタンの踵(かかと)を踏みそうになった。サタンは遠ざかっていたのではなく、背が縮んでいたのだ。あるいは、わたしの背丈が伸びたのか? やがて、わたしたちの身体はほぼ同じ大きさになった。トンネルのはずれにある入口で、サタンは急に立ち止まり、わたしも前のめりに急停止した。明りは一つの赤熱光だけで、ほの暗い。

サタンの手が扉のどこかに触れると、扉の上の明り取りから白い光が入ってきた。サタンは扉を開け、わたしの方へ向きなおった。
「入れよ、アレック」
わたしの心臓は跳び上がり、わたしは息をのんだ。
「ジェリー！　ジェリー・ファーンズワース！」

27

夫智慧多ければ憤激多し
知識を増すものは憂患を増す
　　伝道之書第一章一八節

ヨブすなわち言詞を出して云く
我が生れし日亡びうせよ
男子胎にやどれりと言し夜も亦然あれ
　　ヨブ記第三章二節〜三節

目はかすみ、頭はぐるぐると回りはじめ、膝から力が抜けていく。
「おい、しっかりしろ！」——と、ジェリーは叱咤し、わたしの腰をかかえ、中に引き込んで、扉をばたんとしめた。
ジェリーは、わたしが床にのびてしまわないように、しっかりとわたしの身体を摑まえて、ゆさぶったり、頬をぴしゃぴしゃ叩いたりしている。わたしは頭を振ってはっき

りさせ、ひと息ついた。ケティの声がする。
「なかへ運んで寝かせましょう」
ようやく視界が定まった。
「大丈夫です。少し気分が悪くなっただけですから」
見まわすと、そこはファーンズワース家の玄関ホールだった。
「気絶したんだよ。文字どおり。あれだけショックを受ければ、腰を抜かすのも無理ないよ。〈家族室〉に入りたまえ」
「そうさせてもらいます。やあ、ケティ、また会えて嬉しいですよ」
「あたしもよ」と、彼女は近くまで来て、両腕でわたしを抱きしめ、くちづけした。またしても、わたしは悟った――確かにマルガはわたしの生きがいである……だが、ケティもわたしの好みのタイプなのだ。そしてパットも、だ。ねえマルガ、できたらぼくはきみをパットに引き合わせたいんだよ（ああ、いとしいマルガ！）。
〈家族室〉はガランとしていた――未完成の家具ばかりで、窓もなく、暖炉もない。ジェリーが声をかけた。
「ケティ、レミントン二号をセットしてくれないか、頼むよ。わたしは飲物の用意をするから」
「はい、あなた」
二人の手がふさがっている間に、シビルが部屋にとびこんできた。両腕を差しのべて、わたしに跳びつき、キスしてくる（わたしは危うく倒れかけた……この娘はまったく立派な体格をしている）。ケティのやさしいキスとは正反対の、素速くて乱暴なキスだ。
「グレアムさん！　あなた立派だったわよ！　全部見てたの。パットと一緒に。彼女も感心してたわよ」
左側の壁は、いまや山々を見晴らす窓にかわり、向かい合った壁には自然石の暖炉が現われ、この前の時と同じように、いきおいよく火が燃えている。天井は低くなり、家具も、床も、設備も、すべて記憶にあるレミントン二号に変わっていた。ケティが制御装置のところから振り返って言った。
「うるさくしちゃだめよ、シビル――アレック、どうぞ座って、楽になさってね」
「ありがとう」と、わたしは腰をおろした。「ええと……ここは、テキサスですか？　それとも、地獄？」
「当人の気持ちしだいだな」と、ジェリー。
「それに何か違いがある？」と、シビル。
「微妙な問題ね」と、ケティ。「アレック、今は、そんなこと気にしないで――あたしもあなたを見ていたのよ。娘たちと同感だわ。あなたのこと、誇りに思ったもの」

「まったく手強かった」と、ジェリーも口を挟んだ。「どうしても決心を変えさせられなかったよ。この強情な堅物め。アレック——きみのおかげで三度も賭けに負けたよ」
各自に飲物が現われた。ジェリーがグラスをあげて言った。
「それじゃ、きみに乾杯しよう」
「アレックに乾杯！」
「同じく！」
「では、ぼく自身に乾杯」と、わたしも調子を合わせ、ジャック・ダニエルズがなみなみと入っているグラスを手にした。
「ジェリー、あなたは、まさか本当に——？」
わたしを見つめたジェリーは、にやりと笑った。次の瞬間、注文仕立ての牧場主の服装が消え、ウェスタン調のブーツは割れた蹄にとって変わった。頭に角が生え、皮膚は赤黒く輝き、盛り上がった筋肉がてかてかと光り——股間には、不自然なほど巨大な男根がむっくりと鎌首をもたげている。
ケティがやさしく言った。
「あなた、もう、アレックも分かったと思うわ。その姿は、あんまり魅力的じゃないわよ」
たちまち、伝統的な悪魔の姿は消え、同様に伝統的なテキサスの大金持ちの姿が戻った。
「そのほうがいいわ」と、シビルが言った。「パパはどうして、あんな古臭い悪魔の姿をするの？」
「あれが、誰にでもよく分かるように強調された象徴的な姿なのさ。だが、ここでは、このスタイルのほうがいいな。おまえも、テキサスらしい服装をしなさい」
「あたしも？　グレアムさんも今は、パティのおかげで、裸には馴れたと思うけど」
「パットはいい。おまえはだめだ。早くしないと、おまえを昼めし用のフライにしちゃうぞ」
「パパ、こんなのいんちきじゃない」と、シビルは椅子に座ったままで、ジーンズとホールターの姿に変わった。
「それにもう、十代の娘の役には飽きたわ。こんなお芝居を続けて何になるっていうの？　聖アレックだって、ご自分の目がだまされていたってことを知っているのに」
「シビル、おしゃべりがすぎるぞ」
「あなた、シビルがそういうのも当然だわ」と、ケティが静かに言葉をはさんだ。
ジェリーは首を振り、わたしは溜息をついた——そろそろ明言すべき時が来たようだ。
「そのとおりですよ、ジェリー。ぼくにはもう分かっています。今までの自分はだまされていたんですね。あなたた

ちを、すっかり友人と思いこんでいました。マルガも同じです。でも仕掛人は、あなたたちだった。ぼくの役は何だったんです？　ヨブですか？」
「〝そうだ〟とも〝違う〟とも言えるな」
「それは、どういうことですか……陛下？」
「もう陛下はやめてくれよ、アレック。せっかく、おれたちはこうして互いを知り合い、友人になれたのに。友人同士じゃいかんのかね？」
「これが友人同士と言えますか？　わたしがヨブだとしたら、陛下……わたしの妻は、いったいいどこにいいいるのですい」
「アレック、おれだって、それを知りたいんだよ。あんたの回顧録を読んで、いくつかの手掛りは掴めた。今、それを調査しているところだ。だが、まだ調査結果は出ていない。もう少し待ってくれんか」
「いえ……だめです。もう待てません！　いったい、どんな手掛りがあったのですか？　その調査は、ぼくにやらせてください。もうぼくは気が狂いそうになっているのです。わからないんですか？」
「いや、いや、あんたはまだ大丈夫だ。あれだけあんたを、しつこく責めてみたんだ……よくわかってるさ。まったく、限界ぎりぎりのところまでやったんだぜ。あんたが、あんなことではへこたれないってことは、よく承知している。だが、今のあんたは、彼女を探す役には立たんな。いいかね、あんたは自分が人間であることを忘れちゃいかん。だが、おれは違う。あんたには想像もつかないような能力を持っているんだ。同時に、あんたには理解できない限界があることも確かだがね。だから今は気を静めて、おれの言うことを聞いてくれ。
おれはあんたの友人だ。それが信じられないなら、この家を出て、あんたの好きにするがいい。〈火の湖〉へ降りていけば、仕事はいくらでも見つかるはずだ――あの硫黄の臭いを我慢できればの話だが、ね。あんたはあんたなりのやりかたでマルガを探したらいい。おれとしては別にあんた二人に対する負い目は何もないんだ。あんたらをひどい目にあわせたのは、このおれじゃない。それは信じてくれ」
「うう……もちろん、ぼくだって、できることなら、あなたを信じたい気持ちですよ」
「ケティの言葉なら信じられるかね？」
すかさず、ケティが話しかけてきた――
「アレック、魔王が言っていることは本当よ。決して、だまそうとしてなんかいないわ。あなた、けがした犬に包帯をしてやったことない？　可哀想なわんちゃんは、わけが

わからず、包帯を食いちぎって、かえって傷をひどくしてしまう」
「うう……ありますよ」（可哀想なブラウニー……ぼくは十二歳だった。結局、ブラウニーは死んでしまった）
「その可哀想な犬の真似をしてはだめ。ジェリーを信じなさい。サタンは、あなたを助けるつもりでいるのよ。そのために、あなたには理解できないようなこともしなければならないの。あなた、脳外科の医師（せんせい）に指図をなさる？　手術を急がせたりする？」
わたしは哀れっぽく微笑し、彼女の手をたたいた。
「わかりましたよ、ケティ、おっしゃるとおりにします」
「そうよ、そうなさい。マルガのためにも」
「わかりました。うう……ジェリー、ぼくがただの人間にすぎず、まったく何も理解していないことはよくわかりました。でも、少しは事情を説明していただけませんか？」
「わかっているかぎりのことは説明するさ。どこから始めるかね？」
「さっき、ぼくはヨブなのか、と訊いたとき、〝そうだ〟とも〝違う〟とも言えると、おっしゃいましたね。それはどういう意味ですか？」
「きみは、まさに新しいヨブなんだよ。ヨブ記のヨブについては、実は、わたしも下手人の一人だった。今回は違う。ヨブをいじめたやり方は、あまり自慢できるものじゃない。兄のヤハウエ（キリスト教の〝神〟の名を表わす〝神聖四文字YHWH〟）にのせられて、つい片棒をかついだんだ。卑劣な仕事に何度も手を染めてしまったのは、我ながら恥ずかしい――兄ヤハウエの恥ずべき所業は、そもそも母なるイヴに対するものが手初めだった――いや、それ以前にもあったんだろうが、おれには分からない。それに、あいつは賭けごとがめっぽう強くてね、おれは何度やってもカモにされっぱなしだった……こいつも、あまり他人（ひと）に自慢できることじゃないが」
ジェリーは、じっと火をみつめ、追想をつづけた。
「イヴは美人だった。わたしが彼女に目をつけて間もなく、ヤハウエが、まさに芸術的な創造物をつくりあげたことを知った。ところが、なんと、その創造物はほとんどまるうつしだと分かった」
「ええ？　しかし――」
「いいから、口を出さんでくれ。あんたらの誤ちの大部分は――これは、あの兄が積極的に煽（あお）っていることらしいが――自分たちの神が唯一にして全能だ、と信じていることから起きるのだ。実際には、おれの兄は――そしてもちろん、このおれも――最高司令部においては、せいぜい電信室の伍長ぐらいの存在だ。それにだ――いいか、よく聞いてくれよ――このおれが、最高司令官にして最高会議議長、

つまり、宇宙の最高権力者だと思いこんでいた〈最高神〉でさえ、さらに上級の——おれにはとても理解できないような——権力者にとっては、ただの一兵卒にすぎないんだ。一つの謎を解くと、次の謎にぶつかる。際限がない。でも、あんたが、その究極の答えを気にする必要はない——たとえ、それがあったとしてもな——それは、このおれとて同じさ。あんたは、あんた自身と……そしてマルガの身に、何が起こったのかを知りたがっている。実は今度もヤハウエがおれのところへやってきて、ヨブのときにやったのと同じ賭けを、もう一度やらないか……と、もちかけやがったんだ。やつの信者の中にヨブよりも、もっと頑固なのがいると言うのだ。おれは、いやだと答えた。ヨブのときの賭けだって、おれはちっとも面白くなかった……結論が出るずっと前から、あの哀れなお人好しをいじめるのがいやになっていたんだ。それで、今回は兄に、そのいかがわしいゲームはどこかほかの所でやってくれ、と言ってやった。

あんたとマルガが国道40号線を、二匹の仔猫みたいに丸裸の哀れっぽい姿で、とぼとぼ歩いているのを見たとき、おれは初めて、その後の事態に気づいたんだ——ヤハウエのやつがまた誰か相手をみつけて、あのいかがわしいゲームをやっているんだってことをね。それで、おれは、あんたらをここへ連れてきて、一週間ぐらい匿っておいた——」

「え？　たったひと晩でしたよ！」

「いいから、黙って聞いてくれ。びしょぬれのあんたらを絞って、乾かしてやってから、また送り出してやったのさ……うん、チップとして、ちょっぴり道中の知恵を授けてね。でも、その必要はなかったな。まったくの話、あんたは独力でちゃんと困難に対処していった。いやあ、まったく、あんたはタフだね、アレック。感心して、あんたのおかあさんを探してみた。いやはや、これがたいしたご婦人だったね。あのじゃじゃ馬のお袋さんと、あの優しくても静かな親父さんとの取り合わせが、あんたという世にもしぶとい人物を製造したってわけなんだな。だから、おれは放っておいた。

そのうちに、あんたが、地獄へ向かっているという情報が入った……おれのスパイは、いたるところにいるんだ。兄の側近の者たちも半数が二重スパイさ」

「聖ペテロも、ですか？」

「え？　ああ、いや、いや、ペテロは違う。ペテロは善人だ。天国でも地上でも、あれほど完璧なキリスト教徒はいないな。三回も〈ボス〉を否定したあげく、そのあとで一所懸命その埋め合わせをしていやがる。今のペテロは、そ

の〈ボス〉の三体それぞれとあだ名で呼び合う仲になってるよ。喜ばしいことだ。うん、おれはペテロが好きだな。もしあいつが兄のところをしくじったら、ここで働かせてやるよ。

やがて、あんたは地獄(ここ)に来た。ほら、覚えてるかい？おれが、いつか、あんたを地獄へ招待した時のことを？」
（「──地獄でおれを探してくれ……地獄流の歓待を約束するよ」）
「覚えてますとも！」
「おれは本当に約束を守ったかね？　慎重に答えてくれ……シスター・パットが耳をすまして聞いている」
「パットは盗み聞きなんかしないわよ」と、ケティが言った。「パットはレディよ。どこかの人たちとは違うわ。ねえ、あなた、要するにアレックが知りたいのは、こういうことでしょ──なぜ自分は迫害を受けたのか、どのようにして迫害されたのか、いま自分にできることは何か？　つまりマルガのことね。アレック、その〃なぜか〃は簡単──闘牛場でずたずたにされる雄牛を選ぶのと同じ理由よ。ヤハウエはあなたなら勝てると思ったのね。〃どのようにして〃も簡単──あなたが自分を偏執病ではないかと疑ったのは、まさに正解。でも、偏執病だけど決して狂人ではないわ。現実にあなたに対する陰謀がおこなわれていたんですもの、そうなるのが当然よ。あなたが解答に近づくたびに、攪乱(かくらん)戦術が始まるんですものね。たとえばあの百万ドル。あれも、ちょっとあなたを混乱させるだけのために存在した小さな攪乱戦術よ。さあ、これで、〃今のあなたに何ができるか〃を除く疑問の解明はできたわね。今のあなたにできることはただ一つ──ジェリーを信じることよ。この人だって失敗するかもしれない。その危険は多分にあるわ。でもこの人は、とにかくやってみると言ってるのよ」

わたしは敬意をつのらせて、ケティを見た。同時に、若干の驚きもあった。彼女は、わたしがジェリーに話さなかったことまで知っているのだ。
「ねえケティ、あなたは人間ですか？　それとも、そのう……堕天使かなにかですか？」
ケティはクスクスと笑った。「そんなこと訊いた人はあなたが初めて。あたしは人間よ。人間すぎるくらいの人間だわ。ねえアレックちゃん、それどころじゃないの──あたしは、あなたがよくご存じの人間なのよ。あなたはあたしのことをよくご存じのはずだわ」
「ぼくがあなたを知っている？」
「昔のことを思い出してちょうだい。ナザレにおけるイエスの誕生から千四百四十六年前の四月のことよ」

「そうすると何かが分かるんですね？　すみません――ぼくには何も分かりません」

「じゃ、こうしてみて――イスラエルの子孫のエジプト脱出からちょうど四十年後」

「カナンの征服」

「ああ、もうすこし！　ヨシュア記の二章を思い出してちょうだい――あたしの名は？　あたしの商売は？……あたしは母だった？　あるいは妻だった？　それとも、生娘だった？」

（聖書の中でも有名な物語の一つだ。すると、この人があの女なのか？　今のわたしは、あの女と話をしているのか？）

「うう……ラハブですか？」

「エリコの妓婦。それがあたしよ。あたしはヨシュア将軍の密偵たちを匿い……それによって、自分の両親と兄弟と姉妹とを皆殺しから救ったわ。さあ、あたしを見て、言ってちょうだい――あたし、少しは老けたかしら？」

シビルがくすくす笑った。「さあ、遠慮しないで、言ってごらんなさい」

「すごいな、ケティ。あなたは全然年をとっていない！　あれから、もう三千年以上も――約三千四百年も――たつというのに。しわ一つない。いや、少ししかない」

「それ、少しはあるってこと？　あなたの朝食は抜きよ、坊や」

「ケティ、あなたは美しい……あなた自身がそれをよくご存じのくせに。マルガレーテといい勝負だ」

「あたしには目を向けてくれないの？」と、シビルが詰問した。「あたしにだってファンがいるのよ。なにせ、ママは四千歳ですからね。もう化物よ」

「いや違うよ、シビル。紅海の水が分かれて、イスラエル人が逃げたのは、紀元前千四百九十一年だ。それに携挙の起こった西暦千九百九十五年を足す。さらに、その後の七年を足すと――」

「アレック」

「何ですか、ジェリー？」

「シビルの言うとおりなんだ。あんたがまだ気づいていないだけのことさ。ハルマゲドンと、天国における戦争との間に存在する千年間の平和も、すでにその半分を経過した。今は、兄がイエスの面をつけて地上を支配し、おれは鎖につながれ、地獄に投げ込まれている」

「ここで見ると、あなたは全然、鎖につながれているようには見えませんよ。すみません、ジャック・ダニエルズをもう少しいただけませんか？　なんだか頭が混乱してきた」

「つまり、今のおれは、地上をあっちこっち勝手に歩きまわったり、上へ行ったり、下へ降りて来たりできぬよう拘束されているってことさ。いうなれば、ヤハウェは、自らの手で地上界を破壊するまでの、ほんの短い間だけ、地上界を一人占めしているってことさ。おれには、兄のお遊びの邪魔をするつもりはないがね」と、ジェリーは肩をすくめた。「おれはハルマゲドンに参加するのを断わった——自分で育てた悪漢どもが大勢いるんだから、そんなものは身内同士でやれと、やつに言ってやったんだ。なあアレック、兄の書いた脚本では、おれはいつも猛然と戦う役を荷(にな)わされてな、最後には必ず負けることになるんだ。ちょうどハーヴァード大みたいにな。マンネリさ。この千年期の終わりに、兄は、てめえの預言を実行に移すために、このおれをもう一度ダウンさせるつもりなんだ。やつが、例の黙示録の中で預言した〝天国における戦い〟ってやつさ。おれは、そんな馬鹿な戦いをするつもりはないぜ。うちの天使どもには、どうしても戦争に行きたければ、自分たちだけで外人部隊を組織して参加するのはかまわんと言ってある。だが、おれ自身は、あくまでもわきで観戦させてもらうよ。ホイッスルの鳴る何千年も前から、すでに勝敗の決まっている戦(いくさ)に出かけたって、一文の得にもならんからな」

そう語りながら、じっとわたしを観察していたジェリーは、突然、言葉を切って訊ねた。

「あんた、いったい、何を考えこんでいるのかね？」

「ジェリー……ぼくがマルガレーテと別れてから五百年も経ったとなると、もう絶望的ですね。そうでしょう？」

「おい、おい！　まだ、そんなことを言っているのか。理解できぬことは、そのまま受け入れろと言ったじゃないか。望みがなければ、このおれが駆けずりまわるわけないだろう？」

「ジェリー、あたしがせっかくアレックの気持ちを落ち着かせてあげたのに……あなたときたら、また、この人の心を乱すようなことを言うもんだから」と、ケティ。

「すまん」

「あなたがそのつもりじゃなかったことは、よく分かりますけどね。ねえアレック、ジェリーはぶっきら棒だけど、この人の言ってることに間違いはないわ。マルガの捜索だって、あなた一人でやっていたんでは望みはなかったはずよ。でもジェリーが手を貸せば、うまく探し出せるかもしれないの。はっきりと言いきれないけど、かなりの望みはあるわ。でもね時間なんか関係ないのよ——五百年でも、五秒でも同じこと。お願いだから、それを理解しようとは思わずに、ただ信じてちょうだい」

「わかりました。信じます。どっちみち、こうする以外に希望はないんです——まったく全然」
「でも希望はあるわ。今のあなたに必要なのは、忍耐力を持つことよ」
「なるべく、そうします。でも、マルガとぼくには、カンザスでカウンター付きの食堂を持つ日は永久に来ないような気がしますよ」
「なぜだ？」と、ジェリー。
「五世紀もたつんでしょう？　もう言葉まで変わってしまったんじゃないですか？　ホット・ファッジ・サンデーも、山羊のカレー煮も区別がつかなくなっているでしょう。慣習は変わるものですから」
「だったら、ホット・ファッジ・サンデーを新製品として売り出せばいいじゃないか。くよくよするなよ、坊や」
「今ここで、それを食べてみる？」と、シビル。
「ジャック・ダニエルズとは合わないと思うよ」と、ジェリーが忠告した。
「ありがとう、シビル……でも、涙が出そうだ。マルガを思い出すから」
「なら、やめとくんだな、坊や。酒を飲んで泣くのも、みっともないが——ホット・ファッジ・サンデーを食べて泣くんじゃ目もあてられん」
「あたしのスキャンダラスな青春時代のお話をすましちゃってもいいかしら？　それとも、誰も聞いてくれるつもりないの？」
「ケティ、ぼくが聞いてますよ」と、わたしは言った。
「あなたがヨシュアと取引きしたところまででしたね」
「あの人の部下の密偵たちとね。実は、あたしを愛し、あたしにいくばくかの敬意を払ってくださる人——つまり、あなたってことよ、アレック——にぜひとも説明しておきたいことがあるの。あたしが何者かを知っている人たちも——それにあたしの正体を全然知らない人たちまでが——妓婦（あそびめ）ラハブを裏切者に仕立てようとするのよ。戦時下における反逆者だとか、仲間の市民たちの背信者だとかいってね。あたしは——」
「ぼくは一度もそう思ったことはありませんよ、ケティ。エリコは陥落するだろうと、エホバが神意を布告しているのです。ひとたび布告された以上、それを変えることはできない。あなたは、父上や母上や他の子供たちを救ったのです」
「そうね。でも、それればかりではないのよ、アレック。愛国心はかなり後世の概念なの。遠い昔のカナンの地では、家族に対する忠誠心のほかに、何らかのボス——普通は成功した武将で、〝王〟と自称してる——に対する個人的な

忠誠心もあったのよ。でもねアレック、娼婦には、そんな忠誠心なんてない——少くとも当時は、なかった——のよ」
「ふうん。ねえケティ、ぼくは神学校にいったんだけど、どうも、その頃の人びとの生活がはっきりと分からないんだな。いちおう、カンザスの生活になぞらえて、理解しようとしてはいますけどね」
「たいして違わないわ。その頃の娼婦は、寺院に所属する売春婦か、女奴隷か、個人契約を結ぶ自営業者かのどれかね。あたしは自由契約組。どう、おどろいた？　娼婦ってものは決して市役所とはけんかしないの。そんなことできないのよ。王の役人たちは店にやってくると、必ず無料サービスとただ酒を期待するのね。これはパトロール——お巡りのことよ——も同じ。政治家たちも同じ。実を言うとね、お金を貰って商売するのよりも無料サービスするほうが多かったのよ——その上、しょっちゅうなぐられていたわ。だから、当然、エリコに対する忠誠心なんかなかった。イスラエル人たちは、そんなにひどいことをしなかったし、ずっと清潔だったわ！」
「ケティ、プロテスタントの信者には、ラハブを悪く言うものはほとんどいませんよ。——でも、彼女の——いや、あなたの——物語で一つだけ、どうしても納得できないことがあるんだ。あなたの家は市の城壁の上にあったんでしょう？」
「そう。家事には不便だったわ——たくさんの石段を登って水を運ばなきゃならなかったから——でも商売には好都合だったし、家賃も安かったわ。事実、城壁の上に住んでいたからこそ、ヨシュア将軍の密偵を逃がすことができたのよ。洗濯物のロープを使って窓から外へ出してやったの。そういえば、あのときの洗濯物のロープ、まだ返してもらってないわ」
「城壁の高さは、どのくらいあったの？」
「ええ？　あら、あたし、知らないわ。とても高かったことは事実よ」
「二十キュービット」と、ジェリー。
「ほんと、ジェリー？」
「おれも、あそこにいたんだ。職業的な興味があったものでね。初めて、音波兵器を使う神経戦をやってみた」
「ぼくが高さを訊いた理由はね、ケティ、聖書によると、あなたは家族全員を家の中に集め、包囲の続く間そこに隠していた……と、なっているからです」
「まったく、そのとおりだったわ。恐怖の七日間よ。あれは、イスラエルの密偵との約束だったの。あたしの住んでいるところには小さな部屋が二つあるきりでしょ、大人三

人と子供七人には狭すぎてね。食料は食べつくすし、水もなくなるし、子供たちは泣くし、父親は文句ばかり言うし……。それでいて、あの親父のやつ、あたしの稼いだお金を喜んで受け取るのよ……七人も子供がいたんで、背に腹は代えられなかったんでしょうけど。あたしが男たちをもてなしている同じ屋根の下にいることをいやがってね――とりわけ、あたしのベッドに寝なくちゃならないことが我慢できなかったみたい。あたしの商売用のベッドですものね。そのくせ、父親はそのベッドに寝て、あたしは床で寝るのよ」

「すると城壁が崩れ落ちたとき、あなたの家族全員が、その家の中にいたんですね?」

「そう、確かにいたわ。例の二人の密偵が迎えにきてくれるまで、家の中でじっとしていたのよ。窓に目印の赤い紐を結んでね」

「ケティ、あなたの家は高さ三十フィートの城壁の上にあった。聖書によると、城壁はぺしゃんこに崩れ落ちたって書いてある。誰も怪我しなかったんですか?」

彼女はびっくりした表情を見せた。「あら、もちろんしなかったわよ」

「家が潰れなかった?」

「ううん、潰れなかったわ――ずいぶん昔のことだけど、アレック、あたし今でもよく憶えているの――ラッパの音も叫び声も。そのあと、市全体が地震に襲われて、城壁が崩れたのね。でも、あたしの家は何ともなかったのよ」

「聖アレック!」

「なんですか、ジェリー?」

「そんなことは、あんたもよく知ってるはずだぞ。あんたは聖人なんだから。奇跡だよ。ヤハウエが、右や左に、奇跡を振り撒かなければ、イスラエルの子孫(ひとびと)はカナン人たちを征服できなかっただろう。ぼろを着た出稼ぎ労働者の一団が、城壁をめぐらした富める国にやってきて――戦えば必ず勝つ。奇跡だよ。カナン人に訊いてみたまえ――もしカナン人に会えたらさ。兄は徹底的にかれらを皆殺しにさせたんだ。ときたま、若くて美しい娘を殺させずに奴隷にしたことはあるがね」

「でも、ジェリー、カナンは〈約束の地〉だったし、イスラエル人は〈選ばれた民〉だったんですよ」

「かれらは、確かに〈選ばれた民〉だ。選んだのがヤハウエだからといって、けちをつけられる筋合いはないさ。あんたは聖書をよく読んでいるらしいが、その〈選ばれた民〉をヤハウエが何回騙したか知っているかい? 兄は少少、お天気屋でね」

もうすでに、ジャック・ダニエルズを飲みすぎていたし、

度重なるショックにも馴れていたのだが、シェリーのこのさりげない冒瀆の言葉は聞き捨てならなかった。
「主なるエホバは正義の神です！」
「あんたはやつの冷たさを知らんのだ。なあアレック、"正義"なんてものは、神には通用しない概念なんだ。人間の幻想さ。ユダヤ系キリスト教の教義の基本は、不正義だよ。他人に罪を背負わせるシステムさ。旧約聖書には、あっちこっちに贖罪の山羊の犠牲が登場するが、新約聖書になると、"殉教者"なる言葉が登場して、これが最高潮に達する。てめえの罪を他人に肩代わりさせて、なんの正義かね？　仔羊の喉をかき切って祭壇に捧げるのも、十字架にはりつけにされた救世主が"あんたらの罪を背負って死ぬ"のも同じことさ。ヤハウエの信者どもや、ユダヤ教徒やキリスト教徒どもに、誰かが教えてやらなきゃいかん——ただで食える昼めしなんてものはないんだってことをな。
　いや、ひょっとしたら、ただで食える昼めしもあるかもしれん。"恩寵"とかいう、死ぬ瞬間に——あるいは〈最後の審判の喇叭〉の鳴る瞬間に——精神錯乱状態になれば、天国に行けるってやつだ。そうだろう？　あんたもそうやって天国へ行った一人なんだろう。ちがうかね？」
「そのとおりです。ぼくは幸運だった。それまでにずいぶんたくさんの罪を犯してきましたからね」
「長い人生を悪事を重ねて過ごしてきた人間でも、最後の五分間だけ完全な恩寵に浴せば、天国へ行ける。その一方で、毎日まじめに暮らし、こつこつ働きつづけてきた人間がうっかり神の名を使って他人を罵ったとたんに、たまたま心臓発作でも起こして死ぬと、永遠に地獄へ落ちてしまう。それがきまりなんだろう？」
　わたしはぎこちない口調で答えた。
「聖書を文字どおりに解釈すれば、確かに、そうなります。しかし主の御業は神秘的でして——」
「このおれには、ちっとも神秘的には見えんぜ、ご同輩——やつとの交際が長いもんでな。やつの世界があり、やつの規則があり、やつの行動がある。やつの規則は明快だから、誰にでも従うことができ、それなりのご褒美をもらうことができる。だがそれが"正義"かと言うと、まったくそうではない。やつがあんたとマルガにやったことをどう思うかね？　あれが正義か？」
　わたしは深呼吸した。
「〈審判の日〉以来ぼくは、それをどう解釈すべきか、ずっと考えつづけてきました……ジャック・ダニエルズを飲んでもあまり力になりませんね。確かに、ぼくはこんな目に会うために誓約をしたんじゃないと思います」

「なるほど。でも、あんたはそのような誓約をしちまったんだよ」
「どんな形で？」
「兄のヤハウエはキリストの面をつけてこう言っとる——〃この故に汝らは斯く祈れ〃——さあ、そのあとを言ってみろ」
「〃天にまします我らの父よ、願わくは御名の崇められん事を。御国の来らんことを。御心の行われん事を（主の祈り）——〃」
「そこだ！　そこで止めろ。〃御心の行われん事を——〃、自分たちは〃神の奴隷〃だと言う回教徒だって、これほど無条件に、神への服従を誓っちゃいないぜ。あの祈りによって、あんたらは、どんなひどい仕打ちにも耐えますと、自分から申し出ているのだ。完全なマゾだよ。まさにヨブの試練じゃないか、坊や。ヨブは来る日も来る日も、そして来る年も来る年も、ありとあらゆる形で不正な仕打ちを受けたんだ——おれはそれを知ってるんだ。しかと知ってるんだよ。なにしろ、おれはその場に居合わせたんだからな。あれは、このおれがやったんだ——わが親愛なる兄がおれのそばに付きっきりで、あれをおれにやらせやがったんだ。いや、ただやらせただけじゃない。もっとやれ、もっとやれと煽りやがったんだ。やつは共犯さ。事前謀議つきの共同正犯だよ。
　さて、今度はあんたの番だ。あれは、まさに、あんたの信奉する神の御業なんだよ。神をうらまんのか？　それとも鞭打たれた犬みたいに、四つん這いになって、もぞもぞと、後退りするつもりかね？」

28

求めよ　然らば与えられん
尋ねよ　さらば見出さん
門を叩け　さらば開かれん

マタイ伝福音書第七章七節

折よく邪魔が入ったので、答えられない問題に答えずにすんだ――いやあ、助かった！　誰にだって、神の正義に疑いをさしはさみたくなる時があると思う。白状すると、わたしもこのところずいぶんそれに頭を悩ませてきた。神様のなさりようは人間のやり方とは違うのだ、主の目的をいつも理解できると思っちゃいけない……と、何度も繰り返し、自分に無理やりいいきかせてきたのだ。

しかし、この不信感を大きな声で言うわけにはいかない。とりわけ、太古からの主の敵対者を前にしては。それにしても目の前のサタンは、わたしの無二の友人の姿と声をしているので、こっちは、どうも落ち着かない。悪魔が相手の討論では、しょせん、言いくるめられるのがおちだろう。

入った邪魔は、平凡なものだった。電話のベルだ。これは偶然だろうか？　サタンが〝偶然〟を許すとは思えない。なんにしても、答えられない質問に答えることはまぬがれた。

ケティが言った。

「あたしが出ましょうか」

「たのむ」

電話の受話器がケティの手の中に出現した。

「ルシファー事務所です。ラハブと申します。すみません、もう一度お願いします……はい、ちょっと訊いてみます」と言って、ケティはジェリーを見やった。

「おれが出る」と、ジェリー。「もしもし。いや、だめだ。だめだと言ったらだめだ！　それはミスター・アシュメダイに電話器は見あたらない。もう一つの電話の方を、こっちへ回してくれ」

頼りになるようなやつは一人もおらん……と、独りごとを呟いてから、口調を改めて再び喋りだした。

「もしもし。はい、そうです！」

そのまま、しばらく沈黙し、やがて答えた。
「ただちにそういたします。ありがとうございました」
そして、ジェリーは立ち上がった。「すまんが、ちょっと失礼するよ、アレック。仕事ができた。いつ帰ってこれるかわからない。この待ち時間は休暇のつもりで過ごしてくれ……この家はあんたのものだ。ケティ、アレックの世話をたのむよ。シビル、かれを楽しませてやってくれ」
そう言って消え失せた。
「腕に縒をかけて楽しませてあげる！」
シビルは立ち上がり、わたしの前に来て、両手をこすり合わせた。西部風の衣裳が薄れて消え、裸体だけが残った。にやにや笑っている。
ケティがおだやかに言った。
「シビル、おやめなさい。すぐに、もう少し裸を隠さないと、家へ送り返すわよ」
「つまんないの」
たちまち裸体の上に、きわどいビキニが出現する。
「あたし、聖アレックに、あのデンマークのイモ姐ちゃんを忘れさせてあげようと思ったのに」
「勝ち目があると思っているの、おまえ？　あたしはパットの話を聞いてきたんだから」
「あら、そう？　で、パットは何て言ってたの？」
「マルガレーテはお料理ができるって」
とたんに、シビルは機嫌を悪くした。
「ひとが今まで五十年も辛い思いをして修業してきたというのに、そこへチキン・アンド・ダンプリングの作れる小娘がわり込んでくるなんて。こんなの不公平だわ」
わたしは話題を変えることにした。
「シビル、いまの服を変えるトリックは、うっとりするほど素敵だったよ。きみは魔術師学校を卒業したの？」
シビルはすぐには答えず、ちらりとケティを見た。ケティは言った。
「もうあたしはなにも言わないから、好きなようにおしゃべり」
「わかったわ。聖アレック、あたしは魔術師じゃないの。魔術なんてたわごとよ。〝魔女を生かしておくな〟って、聖書のどこに書いてあるか知ってる？」
「出エジプト記第二二章一八節だ」
「そこよ。その節で〝魔女〟と訳された古代ヘブライ語の本当の意味は、〝毒殺者〟なの。毒殺者を生しおくべからずってのは、あたしもいい考えだと思うわ。でも、いいかげんな翻訳のせいで、いったいどれだけ多くの孤独なおばあさんが縛り首や火あぶりになったと思う？」
（こんなことが真実でありうるだろうか？　わたしが今日

までよりどころとしてきた、〝聖書は文字通り神の御言葉だ〟という考え方はどうなるんだ？　もちろん、〝魔女(ウイッチ)〟なる言葉は英語であって、原語のヘブライ語ではない……しかしジェイムズ王聖書の翻訳者たちは神に支えられていた――だから、欽定訳聖書は字義どおりに受け取っていいのだ〔そうできるのは、欽定訳版だけだ〕」。

だが――いや、いや！　絶対にシビルの間違いだ。誤訳のために、何千何百という無実の人びとが拷問にかけられて殺されるなんてことを、善良なる主がお見逃しになるはずがない。主は簡単に誤訳を訂正することがおできになったはずだ〉

「するときみは、あの晩サバトには参加しなかったんだね。何をしていたの？」

「残念ながら、あなたの想像してるようなことじゃなかったわ。イスラフィール（イスラム神話で、復活のときにラッパを吹くとされる天使）とあたしは、そこまで仲良しじゃないもの。そりゃ友達だけど、親友ってほどじゃないわ」

「〝イスラフィール〟だって？　かれは天国にいるんだと思っていたのに」

「それはかれの名付け親のほうよ。〈ラッパ吹き〉のね。こっちのイスラフィールはラッパなんてスーとも吹けないのよ。そうそう、もしあなたに会えたら伝えてほしいって、頼まれてたわ――「本当のぼくは、ぼくが演じていた〝ロデリック・ライマン・カルヴァーソン三世〟みたいないやな野郎じゃありません」ですって」

「そりゃ嬉しい伝言だ。かれは演技がうまいんだ。我慢ならぬほど無礼なヤングそのものだったよ。ケティとジェリーの――あるいはケティだけの、かな――愛娘(まなむすめ)があんな礼儀知らずと友達になるほど趣味が悪いとは、どうもおかしいと思ってたんだ。いやいや、イスラフィールのことじゃなくて、かれが演じていた役柄のほうのことだけどね」

「ああ、そのこともはっきりさせといたほうがいいわね。ねえケティ、あたしたちって、いったいどういう関係？」

「ダーウィン博士でさえ、遺伝的なつながりは何も発見できないでしょうね。でもわたしは、おまえを実の娘のように誇りに思っていますよ」

「ありがとう、かあさん」

「しかし、われわれはみんな親類だ」と、わたしは反論した。「みな母なるイヴの子孫なのだから。ケティは、しわも何もかも含めて、イスラエルの子らが荒野をさまよっていたころの生まれだから、イヴからケティまではほんの八十世代ぐらいしかないことになる。きみの誕生日が分かれば、簡単な計算で、きみたちの血縁関係がどの程度か、かなり正確にあてられるよ」

「あーあ！　また始めから説明しなくちゃ。ケイトかあさんはイヴの子孫だけど、あたしは違うの。別の種属なのよ。あたしは小鬼(イムプ)――専門用語でいえばアフリート（イスラム神話に登場する〝力の強い悪魔〟）よ」

シビルは再び着ているものを消し、変身した。「ほらね？」

「なんと！　ぼくが地獄についた日の夕方、サン・スーシ・シェラトンのデスクで事務をとっていたのは、きみだったのか？」

「そのとおりよ」と、シビルは再び、きわどいビキニをつけた人間の姿に戻った。「あそこにいたわけはね、あたしならあなたの顔を知っていたからよ。パパは手違いを起こしたくなかったのね」

ケティが立ち上がった。

「話の続きは外でしましょう。夕食の前に、ひと泳ぎしたいわ」

「あたしは聖アレックをたらし込むのに忙しいのよ」

「馬鹿なこと言ってないで。その続きは外でしなさい」

外には素晴らしいテキサスの景色があった。もう夕方で、影が長くのびている。

「ケティ、どうかはっきり答えてください。ここは地獄ですか？　それともテキサスですか？」

「両方よ」

「こんな質問は無駄だってことですか」

わたしはつい苛立った声を返してしまった。ケティは振り返り、わたしの胸に手をあてて言った。

「別に、あなたをからかっているわけじゃないのよ。何世紀もの間、ルシファーは地上のあちこちにある仮住居(かりずまい)を維持し、それぞれの場所で別の人間になりすましてきたのね。ハルマゲドンのあと、兄が一千年間地上の王となっている間、かれは地上界へ来るのをやめたわけ。でもこれらの仮住居は自分のものだから、ルシファーはその何軒かを地上からつまみ上げて自分の手もとに置いといたの。わかるでしょ？」

「まあね。牛が微積分を理解する程度には」

「あたしにも細かな仕組みはわからないわ。それは神様レベルのお話だもの。でも、あなたとマルガが辛(つら)い目にあいながら何度も体験した次元転換のことだけど、世界はそのつどのくらいまで変化した？　あなたは、そのつどこの地球全体がそっくり変わったと思っているの？」

現実感が頭の中でころがった。最後の〝転換〟以来なかったことだ。

「そんなこと、ぼくには分かりませんよ、ケティ！　生きていくだけで精一杯だったんですから。いや、ちょっと待

ってください。〝転換〟のたびに、この地球全体が——約一世紀分の歴史が変わったことは事実です。そのつど歴史を調べて、できる限り憶えておいたのだから確かです。文化も変わった。世の中全体が変わってしまった」

「実はね、アレック、どの場合も、あなたのほんの鼻先までしか変わらなかったのよ。あなた以外は——あなたたち二人以外は、誰も、なんの変化にも気づいていません。あなたは歴史そのものを調べたわけじゃないでしょ。あなたが調べたのは歴史の本よ。とにかく、それがルシファーのやり方なの。かれはそうやって相手をだますのね」

「うう——ケティ、百科辞典を丸ごと書きなおし、校正し、印刷するのに、いったいどれくらい時間がかかると思いますか？　ぼくは常に百科辞典で変化を確認してるんですよ」

「でもアレック、神のレベルでは時間が問題にならないってことを、あなたはすでに教えられているはずよ。空間も同じ。あなたをだますために必要なものは、あらゆるものが動員されたの。でもしょせんそれだけのことよ。これが神のレベルにおける芸術の伝統的原理なの。あたしは神のレベルの存在ではないから自分ではできないけど、それが実際に行なわれるところをたくさん見てきたわ。形と外観をこしらえるのがうまい芸術家は、自分の狙う効果をあげるのに必要以上のことはしないものよ」

ラハブはプールのふちに腰をおろし、足でぱちゃぱちゃと水をかいた。

「こちらへ来て、隣りにお座りなさいな。〝ビッグ・バン〟のへりについて考えてみましょう。限界の先には何があるのかしら。限界というのは、赤方偏移が最大になるところ、つまり宇宙の膨張が光の速度と同じになるところね——その先には何があるのかしら？」

わたしはかなり頑な口調で答えた。

「ケティ、その問いは仮説に基づいたものであり、意味がありません。〝ビッグ・バン〟とか〝膨張する宇宙〟とかいった馬鹿げた説については、わたしもいささか知っています。福音を説くものは、そういう学説のたぐいに遅れをとらぬようにしなければならないのです。でないと、それらの学説の誤りを論破できませんからね。

いまおっしゃったことは、おそろしく永い時間を意味します。それはありえないことです——なぜなら、この世界はおよそ六千年前に創造されたものだからです。〝およそ〟というのは、天地創造の日を正確に算出することが難しいからであり、また同時に、今日がいつなのかよく分からないからです。しかし約六千年ですよ——〝ビッグ・バン〟説の学者がいうような数十億年ではなくて」

「アレック……あなたの宇宙はおよそ二百三十億歳よ」
わたしは言い返そうとして、口を閉じた。接待主（ホステス）に正面きって反対するのはよそう。
ケティはつけ加えた。「そして創造されたのは紀元前四〇〇四年のこと」
わたしは長いあいだ水面をじっと見つめていた。そのうちにシビルが浮かび上がってきて、わたしたちにぴしゃっと水をかけた。
「どう、アレック？」
「どうにも、なんと言っていいやら」
「あたしの言ったことを、注意深く思い出してちょうだい。あたしは、世界が二百三十億年前に創られたと言ったんじゃないのよ、年齢がそうだと言ったの。つまり、創造のとき世界は、すでに年老いていたってこと。いかにも古い年輪を示すかに見える地中の化石や月面のクレーターも、そのとき同時に創られたのよ。ヤハウエにしてみれば、そうするのが面白かったから、そうしただけ。ある科学者がこんなことを言ったわね――〝神は宇宙を使ってサイコロ遊びをなさっているのではない〟――でも残念なことに、これは誤解――ヤハウエは、まさに、この宇宙をイカサマ細工のサイコロに使って、もてあそんでいるのよ……自分の創造した人間どもをあざむくためにね」
「なぜ神がそのようなことをなさるのです？」
「ルシファーに言わせると、かれの芸術家としての才能が乏しいからですって。移り気で、いつもカンバスに描いた絵を掻（か）き消してばかりいる。それに、いたずら好きなのよ。でも、このあたしには意見がましいことを言う資格は、まったくないわね。レベルが違うんですもの。それにルシファーも、自分の兄のこととなると、妙にひがみっぽくなるし。これは見ていても、はっきりと分かるの。それはそうと、あなたはまだ、最大の疑問を口にしていないわね」
「おや、何のことですか？」
「おとぼけしても、だめ。あなたは礼儀を守ろうとしてらっしゃるんでしょう。年老いた妓婦（あそびめ）が、なぜ、宇宙生成論（コスモゴニー）だの目的論（テレオロジー）だの終末論（エスカトロジー）などというギリシャ生まれの難しい言葉について一家言を持つようになったのか――これこそ、最大の疑問でしょ。そうじゃない？」
「すみません、ラハブさん、あなたのしわを数えるのに気をとられていたので、ほとんど聞いていな――」
言いかけたとたんに、プールの中に突き落とされていた。飲んだ水を吐き出しながら浮かび上がると、二人の女性はわたしを見て、声をあげて笑っている。
そこでわたしは、ケティの座っているプールのふちに手をかけ、彼女を両腕の中に閉じ込めた。ケティは捕えられ

ても気にする様子もなく、猫のようにもたれかかってくる。
「何をおっしゃりたいんですか？」と、わたしは訊ねた。
「アレック、読み書きができるってことは、セックスと同じくらい素晴らしいことよ。ま、ちょっと違うところもあるけどね。あなたはおそらく、ほんの赤ん坊のころにそれを覚えてしまって、それ以来何気なくなさってるでしょうから、読み書きがどんなにありがたいことか、充分には理解していないんでしょ。

だけど、今からおよそ四千年前、カナンで妓婦（あそびめ）をしていたころのあたしは、読み書きを知らなかった。あたしの知識は全部、耳学問――客の男たちの話、近所の人たちの話、市場での噂話――なの。でもそれでは、あまりたくさんのことは学べないわ。それに当時は律法学者や士師（しし）（古代イスラエルの行政指導者）でさえ無知だったの。

あたしは死んだあと三百年近く経ってから、やっと読み書きを学んだのよ。教えてくれたのは、偉大なクレタ文明の世界からやってきた一人の売春婦の霊だった。聖アレック、こんなことを言うとあなたはびっくりするでしょうけど、歴史を見回せば、たいていどこでも、遊女のほうが良家の子女よりもずっと先に読み書きを覚えているのよ。良家の子女がそのような勉強をするのは危険だと考えられていたのね。

学んでみると、ほんとに面白いこと！　しばらくはセックスを忘れるほどだったわ」
ケティはわたしに向かってにっこりと笑った。
「いいえ、別にセックスをまったく忘れたってわけじゃないわよ。そのうちに健全なバランスを取り戻したの――読書とセックスを半々に、ね」
「ぼくには、とてもその両者をその比率でやれるほどの体力はないな」
「女は違うのね。あたしが受けた教育の主要部分は、アレクサンドリアの図書館の炎上と共に始まったのよ。ヤハウエが欲しがらなかったので、ルシファーが何千巻もの写本の霊をすべて掴み取り、地獄へ持ってきて注意深く再生したの――そして、このラハブに楽しい体験を与えてくれたってわけ！

もうひとつ付け加えさせてね。ルシファーはヴァチカン図書館を監視しているの。あそこはもうすぐ救出されることになっているのよ。ヴァチカン図書館の場合は、霊を再生するのでなくて、〈時間停止〉の寸前にそっくりそのままつまみ取って、無傷のまま地獄へ持ってこようと、ルシファーは計画しているの。壮大な計画でしょ？」
「いかにもルシファーらしい。カトリック教徒どものことでたった一つだけうらやましいのは、連中の図書館です…

……しかし〝霊を再生した〟とは？」
「あたしの背中を叩いてみてちょうだい」
「え？」
「背中を叩くの。いえ、もっと強く。あたしは何も、傷つきやすい小さな蝶じゃないのよ。だから、もっと強く……うん、それでいいわ。あなたがいま叩いたものが、再生された霊よ」
「ずいぶん固い手ごたえがあるんだな」
「当り前よ。そのために、表示価格どおりの支払いをしたんだもの。あれは、ルシファーがこのあたしに目をとめて、金メッキしたカゴの中の鳥にする前のことだったけど――まったく、見るも憐れなものだったわ。あなたがたの魂は、救われて天国へ行くと、救済と同時に自動的に再生される……でも、地獄では、それをまずクレジットで買い、後日、身体で返すものなの。このあたしも、まさに、その方法で支払いをしたのよ。
聖アレック、あなたはまだ死んでない――そのことは、あたしも知ってるわ。再生された肉体は、死ぬ前の本人にそっくりだけど、質的には向上しているの。感染症もアレルギーも、年とってできるしわもないわ――でも、この足の〝しわ〟は別！　あたし、死んだ時には、こんなしわなんか、なかったもの……少くとも、こんなにたくさんはなかったわ。あら、どうしてしわの話なんかさせるの？　あたしたち、相対性と膨張する宇宙について、高度に知的なディスカッションをしてたのに」
その夜、シビルはなんとかしてわたしのベッドにもぐりこもうとしたが、ケティは絶対に、それを許さなかった――と思ったら、そのケティ本人がわたしのベッドまでついてきた。
「パットがね、あなたを独りで寝かせてはいけないって」
「パットは、ぼくが病気だと思ってるんです。でも、ぼくは病気なんかじゃない」
「そんなこと、どうでもいいわよ。さ、もう、そんなにガチガチ震えないで……このラハブかあさんが、あなたを眠らせてあげる」
夜中に、わたしがすすり泣きながら目をさますと、ケティがそばにいて、なぐさめてくれた。パットがわたしの悪夢のことをしゃべったに違いない。ケティがついていてくれたおかげで、わたしはすぐまた眠ることができた。
それは甘く牧歌的な間奏曲だった……ただ、マルガレーテだけが欠けていた。しかし、失ったもののことをくよくよ考えず、じっと我慢するのがジェリー（そして、ケティ）に対する今のわたしの義務なのだ……と、ケティはわ

たしを説得する。
そこでわたしはくよくよしないことにした。とにかく、昼間はそれほどくよくよしなかった。夜になるとそうもいかなかったが、淋しい夜も淋しすぎることはなかった。いつもラハブかあさんがついており、夜中に感情的には無防備な状態で目をさますわたしを、落ち着かせてくれたからだ。
ケティはいつもついていてくれた。ただ、ある晩に限って、彼女は外出しなければならなくなり……すると、ケティの念入りな指導を受けたシビルが当直を引き受け、見事にその代役をつとめてくれた。
シビルといえば、面白いことを一つ発見した。眠りこむと、無意識のうちに本来の姿——小鬼（イムプ）、つまりアフリート——に戻ってしまうのだ。背丈は六インチほど低くなり、頭にかわいい二本の角が生えてくる。サン・スーシで出会ったとき、わたしの目をひいたのもこの角だった。
昼間はみんなで泳いだり、日光浴をしたり、馬に乗って丘の上へピクニックに出かけた。どうやらジェリーは、何平方マイルもの土地をつまみ取って、この自領の飛び地を作ったらしい——どっちの方角へ向かっても、果てしがないほど広いのだ。
あるいは、ひょっとしたら、今のわたしには理解できぬような方法で、うまい仕掛けが施されているのかもしれない。
〝かもしれない〟だけ余計だ——神のレベルでの行為について わたしの知っていることといったら、カエルが金曜日の何たるかを理解している程度と大差ないからだ。
ジェリーが姿を消して一週間ほど経ったある日、ラハブがわたしの回顧録の原稿を持って朝食のテーブルにあらわれた。
「聖アレック、ルシファーから指示が来たわよ。この原稿に未記入の部分を追記し、今後も日を追って記入を続けてくれって」
「わかりました。手書きでいいですか？　もしタイプライターがあれば、ポツポツと捜し打ちするぐらいできると思いますが」
「手書きでいいわ。あたしが清書してあげる。これでもルシファー公の秘書を長い間つとめ上げてきたんだから」
「ケティ、あなたはかれのことをジェリーと呼んだり、ルシファーと呼んだりしているけど、サタンとはおっしゃいませんね」
「アレック、実は、かれ、〝ルシファー〟と呼ばれるほうが好きなの。でも、何と呼ばれても返事はするわ。〝ジェリー〟と〝ケティ〟はあなたとマルガのために作り出され

た名前で――」
「それに〝シビル〟もね」と、シビルが付け足す。
「それに〝シビル〟もよ。そのとおりだったわ、イグリット。あなた、元の名前に戻りたいの？」
「いいえ。アレックが――そして、マルガが――ほかの人が知らない名前で、あたしたちを呼んでくれるなんて、すてきだもん」
「ちょっと待ってください」と、わたしは割って入った。「ぼくがあなたがたと初めて出会ったとき、すでにあなたがたは三人とも、まるで生まれた時からその名前を使っていたかのように、自然に反応し合ってましたね」
「ママもあたしものみこみが早くて、即興劇がうまいのよ」と、シビル＝イグリット。「あたしが会話中に口をすべらすまで、誰もあたしたちが拝火教徒であることに気づかなかったわ。それにあたし自身もママにそう言われるまで、自分が魔女だとは思わなかった。イスラフィールは、ものすごく頭が切れる人でもあるの。それなのに、あの人にはあたしたち二人以上に、自分の役割をじっくり考える時間があったのよ」
「するとぼくたちは、みんなからもて遊ばれた田舎者の夫婦だったってわけか」
「アレック」と、ケティ。真顔である。「ルシファーのやることには常に、ちゃんとした理由があるの。本人はめったに説明しないけどね。あの人が有害なことをもくろむのは、相手が悪意をもっている場合だけ……そして、あなたは悪意のない人だわ」

ジェリーが突然帰ってきたのは、わたしたち三人がプールサイドで日光浴をしていたときのことだった。かれは立ち止まってケティに声をかけることさえせず、いきなりわたしに向かって言った。
「服を着たまえ。すぐ出発だ」
はじかれたように立ち上がったケティが、走ってわたしの服を持ってきてくれた。二人の女性は、出火通報を受けた消防士のように手早く、わたしに服を着せた。最後にケティが、わたしの服のポケットに安全剃刀を突っこみ、きちんとボタンをかけてくれる。
わたしは宣言した。「準備できました！」
「原稿はどこにある？」
再びケティが家の中に駆け込み、すぐまた出てきた。
「ここよ！」
たったそれだけの間に、ジェリーは身の丈十二フィートもの大きさになっていた――そして、変身していた。外見は依然としてジェリーのままだったが、今やわたしにも、

ルシファーがすべての天使の中で最も美しいと言われるわけが納得できた。
「さらばだ……ラハブ、事情が許せば、また連絡する」
かれはそういって、わたしを持ち上げようとした。
「待って！　イグリットとあたしに、お別れのキスをさせて」
「おう。手早くたのむ」
二人は同時に、形式的に唇をちょっとあてただけだった。
ジェリーは、鷲摑みにしたわたしの身体を軽々と抱いて、まっすぐ上昇した。サン・スーシがちらりと見えた。そして宮殿……広場……〈火の湖〉から立ちのぼり、湖面を覆う火炎と煙。さらにどんどん上昇は続き、やがて、この世界の外に出た。
いったいどこを、どうやって、どのくらいの間、飛びつづけたのか、わたしには分からない。何となく、天国から地獄に向かって果てしなく落ちつづけた時の感じに似ていたが、今回はジェリーの腕に抱かれているため、はるかに快適だった。わたしは自分が二、三歳だったころのことを思い出していた。時おり、父が夕食のあとでわたしを抱きあげ、眠り込むまで抱いていてくれたものだ……。
どうやら本当に眠ってしまったらしい。だいぶ長い時間がたったあと、急降下する感覚でハッと目を覚ました。ジェリーは着陸し、わたしを降ろして、自分の足で立たせた。
そこには重力があった。体重と上下感覚を再び感じている。しかし、ここがどこかの惑星の上だとは思えなかった。なにかとてつもなく巨大な建物の、張出し玄関かポーチにでもいるような感じである。建物そのものは、あまりにも近づきすぎているため、定かではない。ほかに目に入るものはなかった――もやもやとした薄暮の光だけだ。
ジェリーが言った。「大丈夫かね？」
「ええ、まあ、大丈夫です」
「よろしい。いいか、よく聞いてくれ。これからあんたを、或る〈存在〉に引き合わせる――いやその〈存在〉にあんたを見てもらう。このおれにとっても、あんたの神であるおれの兄ヤハウェにとっても、その〈存在〉は、あんたにとってのヤハウェみたいなものだ。おれの言うことが理解できるかね？」
「さあ……なんとか。あまりピンときませんが」
「AのBに対する関係が、BのCに対する関係と同じなのだ。この〈存在〉にとっては、あんたの主なる神エホバなど、海辺で砂のお城をつくったあと、子供っぽいかんしゃくを起こしてそれを壊してしまう幼児みたいなのだ。その〈存在〉から見れば、このおれとても幼児にすぎない。あんたが三位一体の神――父と子と聖霊――を仰ぎ見るよう

に、このおれも、その〈存在〉を仰ぎ見ているのだ。だがおれは、この〈存在〉を決して神として崇めてはいない。この〈存在〉はその種のへつらいを要求したり、期待したり、欲したりはしないのだ。

そのような奇妙な悪習を考案した神は、ヤハウエだけかもしれない――少くとも、おれの知る限りでは、神を崇拝する風習が実際に行なわれているのは、あんたの住む世界以外、この宇宙のどの惑星にも、どの場所にもない。でも、このおれはまだ若いし、それほど旅をしたわけでもないからな」

ジェリーはしげしげとわたしを見つめた。困惑の表情をうかべている。

「アレック、こうたとえれば、あんたにも分かるかもしれない。きみは子供のころ、ペットを獣医に連れていったことがあるかね？」

「あります。いやな気持ちでした。動物たちは病院に行くのをいつもひどくきらうので」

「今のおれもいやな気持ちなんだよ。よろしい。病気や怪我をした動物を獣医に連れていくには、どうしなければならないかは知っているね。連れていったあと、あんたは待っていなければならない。〝自分のペットが治るのかどうか……優しく親切にしててやりさえすれば、その小さな生きものを哀れな状態から救い出してやれるのかどうか〟を獣医が診断するまでね。そうだろう？」

「そうです。ジェリー、あなたはそれが一つの危険な賭けだとおっしゃりたいのでしょう。不確実だ、と」

「まったくもって不確実だ。前例がない。人間がこのレベルに連れてこられたことは、今までに一度もない。相手がどう出るのか、おれには、まったく分からん」

「なるほど。危険があると前もって言っておく、というわけですか」

「そうだ。今のあんたは非常に危険な立場にある。おれ自身も危険ではあるが、あんたの危険のほうがはるかに大きいと思う。しかしアレック、これだけは保証しておく。あれは仮りにあんたを消滅させようと決めたとしても、その決断をあんた自身には絶対に知らせないはずだ。あいつはサディスティックな神とは違う」

「〝あれ〟というと――相手は生命体じゃないのですか？」

「ううむ……ま、いちおう、生命体ということにしておこう。あれがなにかの形をとるときは、おそらく人間の男の形を使うはずだ。そうなったら、あんたはかれを〝議長〟もしくは〝ミスター・コシュチェイ〟と呼べばよろしい。心から尊敬する、はるかに年長の男性に対する態度をとるんだ。

しかし、頭を下げたり、拝んだりしてはいかん。しっかりと足に力をこめて立ち、真実を述べるんだぞ。死ぬ場合は、威厳をもって堂々と死ね」

扉のところでわれわれを止めた門衛は人間ではなかった――だが、もう一度見なおすと、いつの間にか人間になっていた。これに限らず、ジェリーが〝支所〟と呼んだその場所で目に入るものは、何ひとつ定かなものはなかった。

門衛はわたしに言った。

「衣服を全部脱いでください。脱いだ衣服はこちらであずかり、あとでお返しします。この金属製のものは何ですか?」

単なる安全剃刀だ、とわたしは答えた。

「で、それは何に使うものですか」と、門衛。

「つまり……顔の毛を剃り落とす刃物です」

「あなたは顔に毛を生やすのですか?」

わたしはひげそりのことを懸命に説明した。

「必要もないのに、どうしてそんなところに毛を生やすのです? それが経済会議の問題にでもなるのですか?」

「ジェリー、もう、ぼくにはお手上げです」

「よし、おれがなんとかしてやる」

ジェリーが門衛に説明してくれると思ったら、そうではなかった。かれはわたしに言った。

「その剃刀を衣服と一緒に、ここに置いていけ。この男はあんたの頭がおかしいと思っているんだ。でもこいつは、おれの頭だっておかしいと思っているよ。そんなことはどうでもいいんだ」

ミスター・コシュチェイは非生命体なのかもしれない。だが、わたしにはシモンズ先生の双子の兄弟のように見えた。シモンズ先生というのは、故郷のカンザスにいた獣医で、わたしはよくこの先生のところへ犬や猫を連れていったものだ。一度はカメを連れていったこともある。そういった小動物たちは、わたしの少年時代を共に過ごした仲間だった。

〈議長〉のオフィスは、シモンズ先生のオフィスとそっくりだった。シモンズ先生がおじいさんから受け継いだという蛇腹式(ロールトップ)の蓋のついた机まである。机の向こうの小さな棚の上には、忘れもしない例の〝セス・トーマス八日時計〟(八日に一回ネジを巻く、ゼンマイ時計)があった。

わたしは(まったくの正気で、落ち着いた気分で)理解した――本当は、これはシモンズ先生ではなく、わざとシモンズ先生のオフィスらしく見せかけてあるのだ……だが別にだますつもりでそうしてあるわけではないのだ……と。男性だか女性だか中性だか何者だか分からぬが、この〈議

長〉は、何か催眠術のようなものでわたしの心の中をさぐり、わたしがくつろげる環境を創り出してくれたのである。

シモンズ先生は、動物にとって不快で不慣れな、そしてしばしば苦痛に満ちたことをしなければならないとき、やる前によく動物たちを優しくあやし、語りかけていたものだ。

あれは効果満点だった。わたしにも効いた。ミスター・コシュチェイが、子供のころに会った年とった獣医でないことは分かっていたが……わたしの中から引き出されたこの幻影には、本物と同じように信頼できる感触があった。

わたしたちが入室すると、ミスター・コシュチェイは顔をあげた。ジェリーにこっくりとうなずきかけ、つづいて、ちらりとわたしを見た。

「かけなさい」

わたしたちは腰を下ろした。ミスター・コシュチェイは机に視線を戻した。わたしの原稿がおいてある。ミスター・コシュチェイはそれを取り上げ、とんとんと紙の端をそろえて、机の上に置いた。

「おまえの管轄区域の様子はどうかね、ルシファー。問題はないかね？」

「ございません、閣下。いつものように、エア・コンディションの苦情程度で、わたしの手に負えぬようなことは何もございません」

「おまえには今度の千年期の間、地上界を治める気はないか？」

「それはわたしの兄の要求ではありませんか？」

「確かにヤハウェはそう要求している——あの男は時間を停め、地上界を壊してしまうと公言した。しかしわたしには、その再建まであの男にやらせる義理はない。おまえは、その仕事をやりたいかね？　答えなさい」

「閣下、わたしはむしろ、何もかも新しい材料を使って始めから造りなおしたいと思っております」

「おまえたちの組合(ギルド)はみな、新しく始める仕事をほしがる。出費のことは、もちろん、少しも考えておらぬ。その気になれば、わしはおまえを数周期(サイクル)間グラルーンに赴任させることもできるのじゃぞ。どうじゃね？」

ジェリーはのろのろと答えた。

「その件は議長閣下のご判断におまかせするしかありません」

「そうとも、おまえはそうするしかないのじゃからな。それでは、その話はあとにまわすとして、おまえはなぜ、兄の造ったその生きものに関心があるのかね？」

わたしは眠ってしまったに違いない。というのも、中庭で仔犬や仔猫たちが遊んでいるのが見えたからだ——現実

には、そんなものは一匹もいなかったのに。
ジェリーの声がきこえる。
「議長閣下、人間のやることはほとんど馬鹿げたことばかりです。ただし人間には、愛する者のため、信じることのためなら、雄々しく耐え、勇敢に死ぬ能力があります。それも、その勇敢さと雄々しさは評価すべきです。これらは人間独自の特質であり、人類の創造主からもたらされたものではありません。創造主みずからには、そのような特質はないのですから――これはわたしがよく知ってます、自分の兄のことですからね……そして、そのような特質はこのわたしにもありません。
なぜこの生きものに……そして、なぜこのわたしが……とおたずねですね。このものはわたしが道端からひろい上げた迷子です。このものは難問を――それも、本人の手にあまるほどのものを――かかえていたにもかかわらず、自分の教えられたルールにのっとり、わたしの〝魂〟を救おうという英雄的な（そして、無益な）試みに献身しました。その試みは見当はずれで無意味なものでしたが、それは問題ではありません。このものは、わたしが非常な危険にさらされていると信じ、わたしのために懸命に努力したのです。いま、このものが難しい立場にあるからには、同じ努力をするのがわたしの義務です」
ミスター・コシュチェイは眼鏡を鼻の上におろして、眼鏡ごしに、こちらを見た。
「おまえは、わしが地方権力に介入しなければならぬ理由を述べていない」
「閣下、組合の規則によれば、芸術家は自分の作った意志生物を優しく取り扱わなければならないはずでしょう？」
「いや」
ジェリーは意気をくじかれた様子だ。
「閣下、わたしは自分の受けた教育を正しく理解していなかったようで」
「そうらしいな。意志生物は首尾一貫した取扱いを受けるべきだ――これは芸術家の信条であって、規則ではない。優しさを強要すれば自由度がなくなるおそれがある。それでは何のために生物に意志を持たせたのかわからない。悲劇の可能性がなければ、意志生物も泥人形と同じようなものだ」
「閣下、それはわたしにも分かっております。しかし議長閣下、その〝首尾一貫した取扱い〟に関する芸術家の信条とやらを、もう少し詳しく説明していただけないでしょうか」
「なにも難しいことではないぞ、ルシファー。ささやかに

自分の役を演じている生きものにとって、行動のルールは、すでに知られているものか、もしくは試行錯誤——錯誤のほうは必ずしも致命的ではないもの——によって知ることのできるものでなければならない。短く言えば、生きるものは己れの経験によって学び、かつ利益を得ることができなければならない」

「閣下、それこそ、まさに、わたしが兄に対して抱いている不満です。御前の記録をごらんください。ヤハウエは餌をつけた罠をしかけ、この生きものを勝ち目のない勝負に誘い込みました——そして試合終了を宣言し、このものから賞品を奪ったのです。

これは極端な例……破壊テスト……ではありますが、にもかかわらず、ヤハウエの意志生物の取扱い方の典型的な例です。あまりにも不正なゲームで、生きもののほうは勝つことができません。

六千年期のあいだ、わたしは兄に敗れた者を拾いつづけてきました……その多くは、恐怖のあまり全身をこわばらせて地獄へやってきました。不必要に、わたしを恐れ、永遠の責め苦を恐れていたのです。当初かれらは、自分がだまされていたのだという事実を、信じようとしませんでした。哀れな愚か者たちを新しい状況に適応させるためには、うちの心理療法師たちが大骨を折らねばならなかったほどです。これは笑い事ではありません」

ミスター・コシュチェイは話を聴いているようには見えなかった。古い木の回転椅子の背にもたれて、ぎしぎしきしませ——そうだ、わかっている、このきしませ方はわたしの記憶から取り出されたものだ——もう一度、わたしの回顧録を見た。禿げた頭頂のまわりの灰色の髪の毛をひっかき、口笛ともハミングともつかぬ、耳にする者がいらいらするような音を出す——これもまた、わたしの中に埋れたシモンズ先生の記憶からきているのだが、この上なくリアルだった。

「この、餌になった雌の生きものだが、これは意志生物かね？」

「わたしの考えでは、そうだと思います、議長閣下」

（なんてこった、ジェリー！　あなたが知らないはずはないだろうに）

「それでは、このものは見せかけの幻影では満足せぬと判定してもいいと思う」と、ミスター・コシュチェイはハミングと口笛を一緒に歯の間から出した。「より真実に近い姿を見せてやろう」

わたしとジェリーが入室したときは小さな部屋にしか見えなかったミスター・コシュチェイのオフィスが、今では、

ほかに何人も列席者のいる広い部屋に変わっていた。ジェリーにとてもよく似ているが、もっと年上で、ジェリーのあふれるような陽気さと違ってひどく切羽つまったような表情の天使が一人……長い外套を着て大きなつばの広い帽子をかぶり、片眼に眼帯をかけ、肩にカラスをとまらせた年配の人物が一人（これは北欧神話の主神オーディンの姿である）……そして、あのいまいましい横柄な野郎——ダラスの三百代言、サム・クラムパッカー……。

クラムパッカーの後ろに三人の男が並んでいた。恰幅の良い連中で、どことなく見覚えがある。どこかで会ったことがあるはずだ。

そして思い出した。あいつらから一人百ドル（それとも千ドル）ずつ勝ちとったんだ、あの無鉄砲きわまる賭けで。

クラムパッカーに視線を戻したわたしは、ますます腹を立てた——あの悪党め、なんと今はわたしの顔をしてるじゃないか！

わたしはジェリーに向かい、せきこんで囁きかけた。

「あそこにいるあの男ですが、あいつは——」

「黙れ」

「しかし——」

「静かに聴いてろ」

ジェリーの兄がしゃべっている。

「誰が苦情を言い立てているのです？　わたしにイエスの帽子をかぶって証明しろとおっしゃるのですか？　うまくやりおおせた者がいるという事実が、このゲームが難しすぎるものではないことを証明しています——今度の分は、泥人形を勘定にいれずに、七・一パーセントの成功率だ。これで充分ではありませんか？　どうなんです？」

黒い帽子の年配の男が言った。

「わたしなら、五十パーセント以下は失敗と見なすな」

「おや、その声は誰だ？　一千年期の間、毎年わたしに負けつづけたやつか？　あんたが自分の造った生きものをどう扱おうと、あんたの勝手だ。その代わり、わたしがわたしの生きものをどうするかは、わたしの勝手だ」

「だからこそ、わたしはここにきている」と、大きな帽子の男は応じた。「おぬしはわたしの生きものの一人にはなはだしく干渉した」

「わたしではない！」

ヤハウェは親指をぐいとそらして、〝このわたしとサム・クラムパッカーの両方に似た顔をしようと努めている男〟を指差した。

「あいつだ！　わたしの異教徒の代理人だ。少々荒っぽかったと？　あの男は誰の家来なのだ？　答えてみろ！」

ミスター・コシュチェイはわたしの回顧録を指先でとん

とんと叩き、〝わたしの顔をした男〟に言った。
「ロキ、おまえはこの話に何回、顔を出しておるのか？」
「それは数え方によります、議長。ほんの端役まで数えれば、八、九回でしょう。その中でも、あのずる賢い学校教師を軟化させるのが一番大変でしたよ。出会ったこのくだらん男に身をまかせ、ハアハア喘いだりする女にするのに、たっぷり四週間もかかってしまった」
ジェリーは大きな手でわたしの右の二の腕を摑んだ。
「おとなしくしていろ！」
ロキは話を続けた。「それなのに、ヤハウェは支払いをまだすませていません」
「なんで支払いをしなければならないのだ？　勝ったのはどっちだ」
「いんちきだ。おれがあんたのチャンピオン、折紙つきの偏屈者を、もうダメだと思わせるところまで追い込んだとき、あんたは〈審判の日〉を早めに始めてしまった。そこに本人が座っているから、訊いてみろ。今でもあんたを信頼しているかと尋ねてみろ。それともあんたをののしるかな？　訊いてみろよ。そして金を払え。必要経費の請求書をここに持ってきているんだ」
ミスター・コシュチェイが宣告した。
「議論が的をはずれている。このオフィスは債権取立て会社ではない。ヤハウエ、おまえに対する主な苦情は、おまえが自分の生きものを取り扱うルールが一定していない……という事実に起因しているようじゃな」
「かれらにキスでもしてやればいいのですか？　オムレツを作るには、卵を割らなければ」
「話をずらすな。おまえは破壊テストを行なった。それが芸術的必然性を持つものであったかどうかは議論の余地がある。だが、おまえはテストの終わりに、一人だけを天国へ行かせ、もう片方の一人をあとに残した――そうすることによって、双方を罰したのだ。なぜかね？」
「全員に同じルールを適用しました。彼女は成功しなかっただけです」
「粉をひく牛どもの口は縛っておくというルールを定めた神は、おまえではなかったのか」

次に覚えていることは、ミスター・コシュチェイの机の上に立ち、かれの巨大な顔をじっと見つめていたことだ。ジェリーがわたしをそこへ立たせたのだと思う。ミスター・コシュチェイはこう言った。
「これはおまえのものか？」
かれの指さすほうを見ると――気を失いそうになった。
なんと、マルガだ！

冷たく死んだマルガレーテが、棺の形をした氷の中に閉じ込められていた。それは机の上をほとんど占領し、溶けはじめていた。

わたしはその上に身を投げかけようとしたが、少しも動けなかった。

「それがわしへの答えらしいな」ミスター・コシュチェイは続けた。「オーディン、このものの運命はどうなっておる」

「彼女はラグナロクで戦死しました。その報酬としてヴァルハラで生まれ変わります」

「やつの話を聴いたか！」と、ロキがせせら笑った。「ラグナロクのゲームはまだ終わっていない。今度はおれが勝ちかけている。この娘はおれのものだ！　デンマークの女なら誰でもいいが……こいつは特にすごい！」にたりと笑って、わたしにウィンクし、「そうじゃないか？」

議長は静かに言った。「ロキ、おまえには、つくづく、うんざりしたぞ、わしは」

——とたんに、ロキはいなくなった。座っていた椅子まで消えてしまった。

「オーディン、この女を生まれ変わらせるのを少し待ってはくれまいか」

「どのくらいの期間ですか？　彼女にはヴァルハラへ行く正当な権利があるのです」

「期間は定められない。この生きものが、彼女の面倒を見るためなら喜んで〝永遠に〟皿洗いを続けると宣言している。このものが〝永遠〟の長さを本当に理解しているかどうかは疑問だが……それでも、このものの話には目的を果たしたいという熱意が見られる」

「議長閣下、名誉ある戦いで死んだわたしの戦士たちは、男性も女性も、みなわたしと同等の者であって、わたしの奴隷ではありません——わたしは同等の者の中での第一人者であることに誇りを持っております。わたしには異議はありません……本人さえ承知なら」

心臓が急にドキドキしてきた。するとジェリーが、部屋の向こう側にいるというのに、わたしの耳に囁きかけた。「空のぞみをするな。彼女にとっては、すでに一千年もたっちまってるのかもしれんぞ。なにしろ、女ってやつは忘れっぽいからな」

議長が言っている——

「全体の構成パターンはまだ傷ついていないのだろうな？」

ヤハウエが問い返した。「すると、誰がファイル・コピーを破棄することになるのですか？」

「必要に応じて再生したらいい」

「今回の支払いは誰がするのですか?」
「おまえだよ。〃一貫性の維持に留意せよ〃という教訓を思い出させるための罰金だ」
「なんと!　わたしはすべての預言を成就しましたぞ!　それなのにわたしに一貫性がないとは!　これが正義ですか?」
「いや。これは芸術だ。アレクサンダー。わしを見よ」
わたしは巨大な顔を見た。その眼がわたしを捕えた。眼が大きくなってゆく……どんどん、どんどん大きくなった。わたしは前のめりに倒れ、その眼の中へ落ち込んでいった。

29

己前のものの事はこれを記憶ることなし
以後のものの事もまた後に出る者
これをおぼゆることあらじ

伝道之書第一章一一節

今週わたしとマルガレーテは、娘のゲルダにも手伝わせて、店と自宅の徹底的な大掃除を行なった。テキサスから友人のファーンズワース一家——どこにいようと、最良の友人だ——がやってくるからだ。マルガとわたしにとって、ジェリーとケティの訪問はクリスマスと独立記念日が一緒に来たようなものである。うちの子供たちにとっても同じことだ。シビル・ファーンズワースはインガと同い年で、二人は大の仲良しである。
今回はとりわけ特別だ。ファーンズワース一家はパトリシア・メアリマウントを連れてくるのである。パットもフ

ァーンズワース一家と同じくらい昔からの友人で、世界一すばらしい人だ——オールドミスの女教師だが、小うるさいところは少しもない。
ファーンズワース一家はわたしたちの運を変えた。マルガとわたしは、メキシコへ新婚旅行に行っていたのだが、そのとき、マサトランを壊滅させたあの大地震に襲われたのである。二人とも怪我はしなかったが、帰ってくるのが大変な苦労だった——旅券も金も旅行者用小切手もなくしてしまったのだ。だが帰路の途中でファーンズワースに出会ってから、すべてが好転した——そのあとは、何の問題もなかった。わたしは安全剃刀を一本持っているだけという有様だったが、とにかくカンザスに戻りついた。
(この安全剃刀には感傷的な価値がある。新婚旅行のとき、マルガからもらったものなのだ。それ以来ずっと愛用している)
故郷の州へ帰ると、ちょうど欲しいと思っていた、夫婦でやるのに手ごろな店が見つかった——カンザス州ウィチタの南東、小さな学園都市イーデンの、一軒の食堂だ。その店の持ち主はA・S・モデウス氏とその奥さんで、二人とも隠退したがっていた。
わたしたちは手始めにまず夫妻に雇われ、一カ月たたないうちに、その店を借りてしまった。それからわたしは、はりきって銀行に融資の交渉に行き、それが成功して、わたしたちはめでたく〈マルガのホット・ファッジ・サンデー〉の正式な店主となった。この店には、ソーダ・ファウンテンがあって、他にホットドッグ、ハンバーガー、それに、マルガ特製の、とびきりおいしいデンマーク風オープン・サンドイッチも出す。
マルガは店名を〈マルガとアレックスのホット・ファッジ・サンデー〉にしたがったのだが、わたしはその案に反対した。それでは長すぎて、看板がひと目で通行人の目に入ってこない。そのうえ、店内で、お客さんの目にふれるのはマルガである。彼女自身が最高の看板なのだ。わたしは、なるべく人目につかない裏方をつとめている——皿洗い、掃除係、荷運び、なんとでも好きなように呼んでください。
マルガレーテは店に出て、アストリッドが手伝う。そしてわたしもだ。全員、メニューに出ているものなら何でも、料理あるいは調合できる。オープン・サンドイッチでさえも、だ。しかしお客に対して公正を期するため、全員がマルガの作った見本のカラー写真と材料リストのとおりに作った。自分の自由に料理を仕上げていいのはマルガだけだ。
店名にも織り込んだホット・ファッジ・サンデーは、いつでもすぐ出せるように用意してあり、値段も十セントに

おさえている。こうすると、収益はわずか一・五セントにしかならないのだが。

誕生日を迎えたお客さんには、ホット・ファッジ・サンデーを一人前ずつ無料サービス。そのうえ、ドラムを大きく叩きながら〈ハッピー・バースデイ〉を歌い、キスをしてさしあげる。男子学生たちにとっては、無料のサンデーより、マルガレーテのキスのほうがありがたいようだ。その気持ち、よくわかるねえ。しかしグレアムおじさんだって、女学生には、なかなか人気があるんだぜ（だからと言って、〝お誕生日を迎えた女の子〟に無理やりキスを迫ったりはしないけど）。

わたしたちの店は、開店初日から成功だった。第一、場所がいい――エルム街の入口とオールド・メインに面している。大入り満員は保証つきだった。値段は安いし、マルガレーテの料理の腕は魔法みたいだし……おまけに美人で、人柄が良いときてるのだから。わたしたちが売っているのはカロリーではなく、幸福なのだ。彼女はどの皿にも幸福をたっぷり盛りつけた。人に分けてやれるほど、幸福を持っている女性なのだ。

そして、このわたしが、しっかりと金に目を配っているとなると――もう、わがチームは天下無敵だ。

ホット・ファッジ・サンデーからあがる利益は薄い。もし材料費が上がり、採算がとれなくなったら、値段を上げなければならない。だからわたしは、帳簿から目が離せない。取引き先の銀行頭取のミスター・ベリアル（悪魔もしくは堕天使の名）の話では、この国は長い安定成長期に入っているということだ。頭取の言が正しいことを祈りつつ、わたしは収支を監視している。

町は本物の不動産ブームでわきかえっている。ファーンズワース一家と気候の変化のおかげだ。以前は、典型的なテキサスの富豪はコロラド・スプリングズに避暑用の別荘を立てたものだった。それが今ではカンザスに惹かれはじめている。カンザスは、もう、舗道の上で目玉焼ができるほど暑くはないからだ。なんでもジェット気流が変わったとかいうことだ。

（それともガルフ湾流だったかな？　どうも、わたしは科学に弱くてこまる）

まあなんにしても、とにかく近年、夏はさわやかに、冬はおだやかになっているので、ジェリーの友人や同業者たちがおおぜい、イーデンに土地を買って別荘を建てている。ジェリーの財産の一部を管理しているアシュメダイ氏は、一年中この町に住むようになった――イーデン大学総長アドラメレク氏が、かれを理事会の一員とし、名誉博士号を授与した――以前、資金調達係をやったことのあるわたし

としては、その理由はよく理解できる。
　わたしたちは誰であろうと歓迎する。これは単に商売を繁昌させるためばかりではない……しかし、イーデンがダラスのように人口過密になるのはごめんだ。
　そんなことにはならないはずだ。このあたりはのどかな田舎で、大学が唯一の〝産業〟なのだから。町には教会が一つあり、すべての教派に仕えている。〈神聖絶頂感(オルガスム)教会〉だ――サバト（〝安息日・日曜日〟と〝魔女集会〟の二つの意味をかけている）・スクールは九時半に始まり、教会のミサは十一時から、そのあとにはピクニックとどんちゃん騒ぎが控えている。
　子供たちに宗教を押しつけるのがいいことだとは思わない。だが実際に、若者たちはわが町の教会を好いている――牧師のＭ・Ｏ・ロッホ神学博士のおかげだ。マルコムは長老派(プレスビテリアン)らしい。いまだにスコットランド訛がぬけないが、スコットランド人らしい気むずかしさは少しもなく、子供たちから好かれている。
　牧師は祝宴をつかさどり、人びとを導き、典礼をとり行なう――うちの娘のエリーゼは、牧師の影響でストリップ教徒(ノーヴィス・エクディジアスト)（〝エクディジアスト〟〔服をぬぐ者＝ストリッパー〕と〝イクリジアスティック〟〔聖職者〕のしゃれか？）になってしまい、聖職者になるといっている（どうせ一時の気まぐれさ。わたしには、あの娘が高校を出たとたんに結婚することも、その相手が誰かも、ちゃんとわかっているのだ――もっともわたしには、あんな男のどこがいいのか、さっぱり理解できないのだがね）。
　マルガレーテが〈祭壇(アルター)ギルド〉に奉仕しているので、わたしはサバトの時に献金皿をまわして会計を助けている。〈黙示録の同胞〉のメンバーであることをやめてはいないが、〈同胞〉は黙示録の読み方を間違っていると認めざるをえない。千年期(ミレニアム)の終わりは、天から〈大いなる声〉が聞こえてくることもなく、無事に過ぎてしまった。
　しあわせな家庭生活を送っている男は、夜中に目をさまして今後のことを心配したりはせぬものだ。
　成功とはいったい何だろう？　ローラ工業学校時代の同級生たちは、わたしがあまりにもささやかなこと――名もない町の、ちっぽけなレストランの、銀行に口座をもったオーナー――で満足していると思うかもしれない。
　しかしわたしは、自分の欲しいものを所有している。わたしは、もしマルガレーテがそばにいないなら、天国で聖人になりたいとも思わないし、マルガレーテさえいるなら地獄へ行くのだって怖くない――といっても、地獄の存在を信じているわけではない。また、こんなわたしに天国の聖人になれるチャンスなんてあるわけがない。
　サミュエル・クレメンスはこう表現した。
〝彼女のいるところ、そこがエデンだ〟

オマールはこう唄った。

〝——汝、われと共にいませば、荒野も楽園におとらず〟

ブラウニングの言葉でいえば〝最高善〟。

これらの言葉はすべて、一つの偉大な真実を意味している。わたし流に言えばこうだ——

「天国とは、マルガレーテのいるところなり」

訳者あとがき

この作品の原書 *JOB: A COMEDY OF JUSTICE*（一九八四年九月、バランタイン・ブックス刊）を渡された私は、一日約六時間ずつ三日間、延べ十八時間をかけて読み、ためいきをついた。
非常におもしろい。傑作である。しかも、七十七歳の老大家が書いたものとは到底信じられないほど、筆致が若々しい。それでいて、テーマがものすごく重いのだ。
題名からお察しのつくとおり、これは旧約聖書ヨブ記のパロディである。各章の冒頭を含め、本作品のあちこちに聖書や讃美歌の引用句が出てくるし、〝若がえった〈ファウスト〉の恋人マルガレーテ〟も主人公と最後まで苦楽を共にする重要人物として活躍する。本作品の〝ヨブ〟は按手を受けた牧師であり、きまじめな好人物だ。悪妻に悩まされながらも厳しく戒律を守り、本心からイエス・キリストを信仰し、その福音の伝道に献身してきた。〝いじめられっ子〟にはなっても、絶対に〝いじめっ子〟にはならない善人である。その主人公がなぜか絶え間なく〝次元転換〟を体験し、同じ地球上ではあるが、歴史も政治も貨幣も習慣も微妙に相異なるパラレル・ワールドを転々とさせられる……という形で、〈神〉の試練を受けるのだ。
〝次元転換〟が起こるたびに、身につけているもの以外のいっさいを失ってしまうから、いくら働いて貯金しても、たちまち無一文になってしまい、一瞬にして友人も知人もいなくなってしまう。最初の〝次元転換〟を外国旅行中に受けたため、主人公には旅券も身元証明書もない。姦淫の罪の意識におののきながらも主人公は、健気で献身的で美女で若くて可憐な異教徒のマルガレーテの愛にすがり、とぼとぼと苦難の旅をつづけるしかない。圧巻は、ヒッチハ

イク中の二人が川で水浴中に突如として〝次元転換〟を受け、丸裸のまま異世界に放り出される試練であろう。脱いで土手に置いておいた着衣が全部、忽然として消えてしまい、イチジクの葉っぱすらない。白昼に、自分も二十三歳の愛妻も完全ヌードのままで高速道路に立ち、走り行く車の運転者に向かって辛抱強く右手の親指を振りつづける勇気が、あなたにはおありですか？

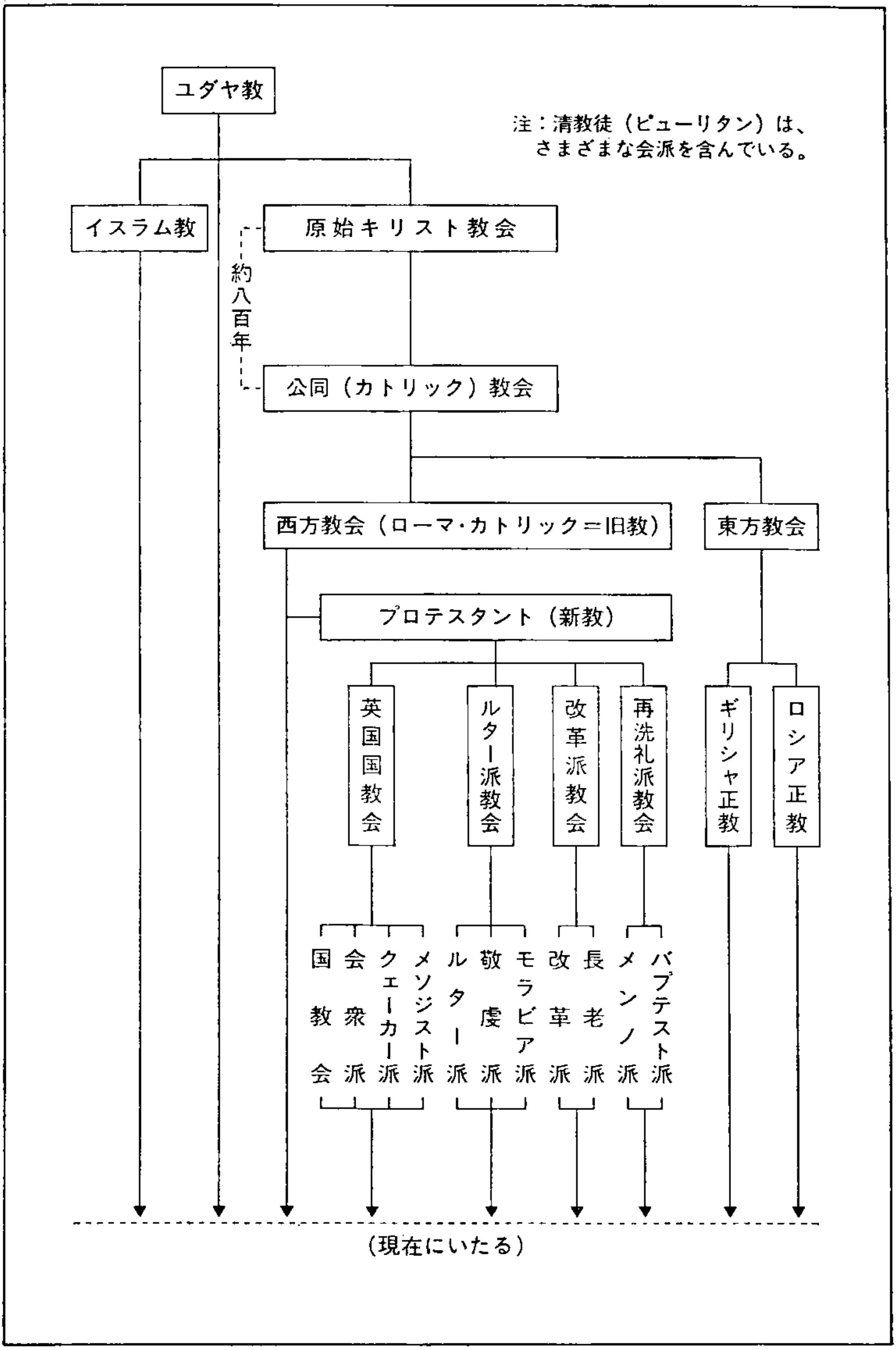
ときは一九九四年——主人公の予想どおり〈最後の審判の日〉が訪れる。舞台は天国へ、そして地獄へと移ってゆき、〝心優しいサタン〟の助けを借りて、主人公は遂に〝理不尽な神ヤハウェ〟と対決し、北欧の最高神オーディンから、携挙のさいに逸れたマルガレーテを取り戻す。

この世界にキリスト教があり、聖書がある事実は、私も知っていた。だがそれだけでは、到底この作品を訳すことはできない。それで取りあえず、四人の訳者による五種の〈ファウスト〉の訳書から〝マルガレーテ〟の出てくるシーンを抜き読みしつつ、次の四書を精読した。
『聖書の常識』山本七平著、講談社刊。
『聖書を科学する』I・アジモフ著、喜多元子訳、社会思想社刊。
『北欧神話』K・クロスリィ・ホランド著、山室静・米原まり子訳、青土社刊。
『北欧神話』菅原邦城著、東京書籍刊。

ついでに、門外漢なりに大ざっぱな〝一神教〟の系統図を頭の中で組み立ててみた。にわか勉強なので、あるいはひどい勘違いをしているかもしれないが、だいたい、こんなようなものである——（次頁参照）

『聖書の常識』の中で山本七平氏は次のように述べておられる——

正義が必ず勝ち、正しい者が必ず報われて幸福になるなら、人間は何の矛盾も感じず、すべてが幸福だと思う


ユダヤ教
注：清教徒（ピューリタン）は、さまざまな会派を含んでいる。
イスラム教
原始キリスト教会
約八百年
公同（カトリック）教会
西方教会（ローマ・カトリック＝旧教）
東方教会
プロテスタント（新教）
英国国教会
ルター派教会
改革派教会
再洗礼派教会
ギリシャ正教
ロシア正教
国教会
会衆派
クェーカー派
メソジスト派
ルター派
敬虔派
モラビア派
改革派
長老派
メンノ派
バプテスト派
（現在にいたる）

であろう。だが現実はそうではない。なぜか。神が義で全能なら、なぜそんなことが起こるのか。これが「神義論」で、この発想から探究がはじまるのだが、これはある意味では永遠につづく探究である。

ヨブ記に出てくる「神の義」と「人の義」というのがこの問題で、神の義と人の義は同じなのか、同じならなぜ神が全能なのに義人が苦しむことがあるのか。（中略）

その問題を、輪廻転生の思想はこう考える。つまり、現世だけを見ていると不公平だけれども、前世・現世・来世を通して見ると、プラス・マイナスして結局みんな平等になってしまう、と。これは真宗の『妙好人伝』の発想だが、要するにどこかで合理性を求め、すべてを内心の問題として、心理的解決したいというところから出た発想であろう。（中略）

ヨブ記は確かに宗教書だが、見方を変えれば、劇とも劇詩ともいえる。ということは、これは他の（聖書の）著作とちがって、純然たる「創作（フィクション）」だからである。*作者も年代も明らかではないが、だいたい紀元前四〜五世紀以降と見るのが普通である。

ヨブ記の主人公は、ヨブ。箴言的な意味での神の戒めを完全に守った人間、「その人となりはまったく（＝むきず）、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった」と。（中略）

「箴言」の発想からすれば、彼は生涯にわたって報われるはずなのだが、ある日、不意にまったく理由なくあらゆる苦難にあうという物語になっている。そこに箴言的世界観への痛烈な批判がこめられ、そこから神義論が展開されていく。

* 〈引用者注〉〝エゼキエル書第一四章一四節と同章二〇節により、ヨブは実在の人物だ〟とする説もある。

本作品のマルガレーテは異教徒であり、自分たちの苦難は〝ロキ〟（キリスト教の〝サタン〟に相当する）のせいだと思いこんでいる。敬虔（けいけん）なる聖職者である主人公は、聖書の預言する〈最後の審判の日〉が近いことを確信し、なんとかマルガレーテをキリスト教に改宗させたいと腐心する。

本作品を味わうためには、どうしても北欧神話とキリスト教との対比を理解しておかなければならない。そこで、

恥を忍んで、私の一夜漬けの知識の概略を次に記す——
北欧神話の中心をなすモチーフは神々と巨人の対立である。（他に小人、妖精、ワルキューレ等々が登場するが、本作品には直接関係ないので省略する）
〝神々＝秩序＝善〟、〝巨人＝混沌＝悪〟というイメージが成立するのは、かなり時代が下がってからであり、これは明らかにキリスト教の影響である。初期の神話においては、神々と巨人はお互いにだまし合い、争い合っており、悪い神もいればよい巨人もいて、どちらが善でどちらが悪とは決められない。
巨人は神々よりも古い存在で、知恵があり、非常に強力な種族であり、神々も恐れている。巨人に勝てるのは槌ミョルニルを持ったトール（雷鳴と稲妻の神）だけだ。
オーディンは神々の父であり、万物の父である。王と戦士と詩人の神であり、死者の神でもあり、呪法と予言とルーンの神でもある。ただし、オーディンを最高神とするのはキリスト教の影響と考えられている。キリスト教との接触(コンタクト)以前に最も崇められていたのはどうやら前記トールであったらしい。
ロキは巨人の息子でありながら、神々の中に加えられている。その理由に関する神話上の資料はない。ただ、オーディンと義兄弟の契りをかわしたと伝えられているだけである。〈ずる賢い者〉、〈いたずら者〉、〈変身者〉等と呼ばれる初期のロキは、トリックスターであり、利己的で裏切りやすい性格だが、場合によっては神々を助けてもいる。当初は神々と巨人のどちらの側につくかわからない二面性がロキの本性とされていたが、後になると〈いたずら〉を通り越してはっきりと〈邪悪〉になり、神々と敵対するものになる。ここにもキリスト教の影響（神とサタンの対決）がうかがえるようだ。
ロキは奸計を用いてオーディンの息子バルドルを殺し、また他の神々を悪しざまにののしったために捕えられ、岩に縛りつけられる。（しかし当時は、神々のほうにも、ののしられても仕方のない欠点があったわけだ！）かくしてロキは、ラグナロクの日までそこにつながれる破目となった。
〈ラグナロク〉は、〝神々の運命〟という意味を持つ。北欧人は運命論者であり、神々だろうと人間だろうと、定められた運命からは逃れられないものと考えていた。

この世界が破滅する前兆として、世は大いに乱れ、戦争や犯罪や近親相姦など、おぞましい現象が顕著となり、三年のあいだ厳しい冬が続く。

太陽は妖狼スコールに飲みこまれ、冥府(ヘル)から死者たちが起きあがる。地震や津波や火災による破壊(蛇や狼は、そのシンボルでもある)が相つぐ。

巨人の眷族の軍勢と、神々の眷族の軍勢がアースガルド(神々の世界)の平原ヴィグリードに集結し、最後の戦いとなる。神々と巨人は激しく戦い、共に死ぬ。全世界が燃え尽き、人間も動物もすべて死ぬ。だが、一組の男女と、ごく少数の神々だけは生きのび、やがて世界を再生させ、新たな歴史を始めることとなる。

本作品では、〈黙示録〉が大いに活用されている。

〝黙示＝アポカリュプシス〟は〝覆いを取り払う〟という意味のギリシャ語であり、ユダヤ／キリスト教では、神が人間に自らの意志を示すことをいう。〈ヨハネの黙示録〉は、イエス・キリストがヨハネに示した〝世界の終末〟の記録である。どうやら、〈黙示〉は神の意志の中でも特に終末に関するものをいうらしい。(しかし、これはあくまでも門外漢の私の素朴な感想にすぎない。あるいは誤解かもしれぬ)

黙示文学には旧約聖書の〝ダニエル書〟と新約聖書の〝ヨハネの黙示録〟があり、ほかに聖書外典として、〝バルクの黙示録〟、〝第一エノク書〟、〝ヨベルの書〟、〝エスドラ第二書〟などがある。

また、訳出用の参考書を読んでいて、こんなことも感じた――

(1) キリスト教においては時間の観念が直線的であり、北欧神話では時間が円的で循環的である。また預言の対象となる時間も前者の方が短い。

(2) キリスト教の神は、あくまでも超越的な存在であり、〝唯一・絶対〟のものとされる。一方、北欧の神々は多くの欠点を持ち、また、怪我をしたり死んだりもする存在であって、到底〈絶対的な存在〉とはいえない。

(3) キリスト教では神が絶対者であることから、神による〝裁き〟の概念があるが、北欧神話には当然ながら、そ

れがない。

(4) キリスト教の神は明らかに男性である。インド、中国、日本などを含め、世界各地の古代神話には、〝豊饒の女神〟、つまり〝性＝多産＝豊かな稔り＝大地の生命力のシンボル〟が登場するが、キリスト教には、どうもそれが見当らない。

〈ヨハネの黙示録〉の記述そのものは非常に幻想的で象徴的に表現されているが、欧米人はとかく巧みに、これを文芸作品に仕立て上げる傾向を持つ。最近の映画〈オーメン〉や〈ゴーストバスターズ〉などは、その好例であろう。この世界の終末のイメージとしては、地震・竜巻き・天の火（火山の噴火か？）・疫病・天空からの星の落下・雷鳴と雷光・天使の吹くラッパ・天から聞こえてくる大いなる声……などで構成されている。この点では、ラグナロクと同じように、自然災害を拡大した形をとったものが多い。

要するに、〝神＝正義＝秩序〟は〝サタン＝悪＝混沌〟に必ず勝つと述べ、「その日は間近かに迫っているから、人間はすべからく正しい信仰を持たねばならぬ……」と説くところに、キリスト教と北欧神話との最大の相違点が見うけられるようだ。

原文中の聖書からの引用部分の訳出には、日本聖書協会の『舊新約聖書（文語版）』を借用した。ただし、旧仮名づかいは現代仮名づかいに改めてある。

原文の各章冒頭部に出てくる聖書引用文と、その引用章節表示には、次記の二個所に食い違いがあり、その場合は原文をそのまま訳出し、章節表示を相応部分のものに改めた。

本訳書二二八ページ〝18〟の第一引用句（原文では〝ヨブ記第一章七節〟、訳文では〝同第一章九節〟）

本訳書二六九ページ〝21〟の全引用句（原文では〝ヨハネの黙示録第八章一三節〜一五節〟、訳文では〝同第七章一三節〜一五節〟）

また、聖書引用文、讃美歌引用文、キリスト教関係用語全般については、H牧師の懇切（こんせつ）なご教示を受けた。

ジェラルド・ジョナス（Gerald Jonas）氏の書評によれば、本作品は〝一九三九年（昭和十四年）からＳＦを書き始め、一九八四年七月に七十七歳（喜寿だ！）の誕生日を迎えたハインラインの四十四冊目の長篇〟だという。ジョナス氏はさらに、〝本作品の中でハインラインは、はしゃぐ子どものように伸び伸びと、自分の内宇宙（それも、複数の、だ）を喜々として跳びまわり、唯我論に基づく独特の哲学的警句や冗句を散りばめつつ、奔放な文化相対論を展開している〟と、評している。

なにしろ、これまでにヒューゴー賞を四回受賞し、一九七五年にはネビュラ賞の第一回グランド・マスターの称号を受けた老大家のことだ。どこに、問題の〝哲学的警句や冗句が散りばめ〟られているか知れたものではない。それで私は「それらしい」と思われる個所にぶつかるたびに随時、英語を母国語とするジーン・ピアス女史とチャールズ・モーガン氏からご教示を仰ぎつつ、訳出を進めた。

多忙なお時間を割いて、しつこい私の質問に快く応じてくださったこのお二人とＨ牧師、そして参考文献の著訳者のかたがたに、深く感謝する次第である。

{
"filename": "YV80MDYzMTk0NC56aXA=",
"filename_decoded": "a_40631944.zip",
"filesize": 26501997,
"md5": "8a795eff1011c084e91c5e55cd44b298",
"header_md5": "01acabf33388a8565eea68c23c6ac18e",
"sha1": "a48e431f3824b7f663c856759783d57cd71bbf1a",
"sha256": "a19ac795478c08d661ecc2c19028d8058968e5810ebe4a8a230f598adc7b0701",
"crc32": 197724650,
"zip_password": "",
"uncompressed_size": 26744331,
"pdg_dir_name": "a_40631944",
"pdg_main_pages_found": 390,
"pdg_main_pages_max": 390,
"total_pages": 394,
"total_pixels": 1146692224,
"pdf_generation_missing_pages": false
}